

筑波大学博士（学術）学位請求論文

小林一茶の生涯と俳諧論研究

中田 雅敏

2016 年度

目 次

序 章

- 第一節 目的と意義・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 第二節 論文の構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

第一章 世事の記録師か記述魔か—小林一茶とその時代—

- 第一節 日記に書かれた関東と房総・・・・・・・・・・ 17
- 第二節 芭蕉の遺品遺墨・一茶と武陽隠士・・・・・・・・ 31
- 第三節 出郷と空白の十年・・・・・・・・・・・・・・・・ 42

第二章 一茶の童児俳諧と小動物—子ども句と動植物句をめぐって—

- 第一節 夷ぶりの俳諧・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51
- 第二節 寺子屋宗匠・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61
- 第三節 子どもへの愛・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 66
- 第四節 寺子屋川柳と一茶・・・・・・・・・・・・・・・・ 72
- 第五節 動物を詠む一茶・・・・・・・・・・・・・・・・ 78

第三章 一茶の「日の本」意識

- 第一節 日本国の認識・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 87
- 第二節 一茶の日本・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 105
- 第三節 漂流民聞き書・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 113

第四章 一茶稿本『志多良』の題名

- 第一節 一茶と農事・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 119
- 第二節 故郷定住と『志多良』・・・・・・・・・・ 124
- 第三節 志多羅神と一茶の農業神信仰・・・・・・・・ 131
- 第四節 交渉巧者の俳諧師・・・・・・・・・・・・・・・・ 139

第五章 一茶俳句の方言使用

- 第一節 方言句と俗語・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 146
- 第二節 「一茶調」の特徴・・・・・・・・・・・・・・・・ 151

第三節	一茶の方言使用句の解釈について	162
第六章	一茶の家族描写と説経節	
第一節	一茶の家庭・祖母と母	172
第二節	父と子ども達	182
第三節	無常の実感と法杖	190
第七章	一茶の自己俳諧の確立と宗教性	
第一節	一茶主催の通信講座	196
第二節	葛飾蕉門の中の一茶	204
第三節	他力本願と家族	215
第八章	渭浜庵執筆から宗匠へ	
第一節	渭浜庵門弟一茶	229
第二節	一茶の住居	233
第三節	芭蕉翁の牖	238
第四節	執筆から行脚俳諧師	244
第五節	立机せずして宗匠	248
第九章	武蔵国新方連会頭と一茶	
第一節	庵号を持たぬ一茶	253
第二節	白芹風交を絶せし事	261
第三節	武州葛飾派の人物	269
第四節	葛飾派決別後の一茶の行動	283
第五節	故郷定住への決意	291
第十章	一茶の教育教材化	
第一節	教科書にみる一茶像の変遷	302
第二節	新教育運動、信濃教育会に見る一茶像	317
終章	結語と課題	326

文献一覽・ ・ ・ ・ ・ 330

初出一覽・ ・ ・ ・ ・ 339

序 章

第一節 目的と意義

江戸時代も半端、十八世紀になると多くの人々が旅をする時代になっていた。狂言『今参』には、「若い時旅をいたさねば老いて物語がないと申すによって」¹とあり、主人が旅をする供に太郎冠者も同行する。旅は江戸開幕以前から、広い世界を体験して人間として成長し、賢くなることであると考えていた。江戸時代後半には庶民の間でも生活のゆとりが生まれていた。街道からはずれた村々や山間部の集落にも、外部から様々な人が入り込んでいた。商人、旅浪人、宗教者、そうした者に一夜の宿を貸し、その代わりに人々に情報をもたらした。情報という大げさなものでなくとも、何気ない世間話や眉に唾する奇譚、学芸や芸能などの話には老いも若きも目を輝かせて聞き入った。俳諧師、高野聖、伊勢の御師などなくしては、遠い鄙の地では遠くまで旅をした人の体験を聞く機会は少なかったのである。

封建領主にとっては、庶民の旅は頭の痛いことばかりであった。正当な理由がないかぎり、出国は認めないのが普通であった。正当な理由の一つは信仰の旅で、全面的に禁止すれば反発と抵抗にあい、かえって政治的危機を招くということになりかねない。幕末の弘化年間に行われた金毘羅の金堂再建に際し寄進を行った人々の姓名を記録した『金堂寄進帳』というものがあり、この寄進帳の筆頭に「銀壺貫二百目、御本地講中」と記され、続いて虎屋茂兵衛、余島屋吉右衛門などの名があり、他に町内中、村中の組合、宿屋中、問屋中、漁師中、船頭中、魚買中、大工、左官、木挽、屋根師など、職業集団からの寄進が多く、ここに「旅僧、俳諧師、俳行脚」とあり、俳諧師の名が記されている²。こうした資料からも、行脚俳諧師がいかに多かったかを知ることができる。

芭蕉亡き後、元禄後期の都市俳諧は人事風俗への興味を推進した。それは経済を反映した江戸町人の太平謳歌の力であった。元禄三年（一六九〇）頃から「前句付月次興業」が起り、立羽不角という人物が、宝永三年（一七〇六）まで自家出版の高点集『江戸風前付け』としてその宣伝に努めた。備前岡山藩主池田綱政や西本願寺大僧正寂和上人の後見で江戸に出て法橋の勅許を許されたので、彼は、俳席で貴人とまみわることを理由に官位

¹ 新日本古典文学大系『狂言記』（岩波書店、一九九六年）、二一五頁。

² 滝沢馬琴作・溪斎英泉画『金毘羅船利生纜』（和古書、一八二五年）。

に強い執着を見せ、享保十五年（一七三〇）に法印となり、これから精力的に出版活動を始めた。関東、甲信、東北地方に江戸の武士が伝え、前句付けは初心者拡大と平明な浮世調の俳諧で庶民化に貢献した。やがて前句付の駄洒落から川柳を生むことになり、末期には都市俳諧は、宗匠の特色がなくなり、自派を鼓吹するには俳系³を誇るよりほかなく、門人獲得に走るようになっていた。その中に蕉門の俳人として江戸の榎本其角（一六六一～一七〇七）と美濃の各務支考（一六六五～一七三一）の二人がいた。両者はあらゆる面で両極にあった。都会的と田舎風、蕉門の古参と新人、反蕉風の洒落の祖と蕉風の宣伝者、無欲と野心家、奇抜な着想家と平明調、天性の詩人と俳論家、など全く相入れない二人の特異な人物であった。

彼らが生きた時代、江戸は益々人口が流入して世界第一の都市になっていた。物の交流が盛んになり、貨幣が流通し、物価の変動を来すようになっていた。都市における人手不足は深刻になり、農村においては棄農者が簇出し、需要と供給という点において、江戸に近隣の働き手が流入することはまことに願ってもないことであったが、若者が江戸に出稼に出てしまった村では、働き手が失われ生産活動が停滞した。食糧を担う農村活動が円滑に働かなければ、米や野菜などが高値となり、「先物買」という方法によってさらに物価が高騰した。また、農村を出る若者は、村主や領主に届けずに出郷したので、「人別帳」から抹消され、村では「帳抜人」となり、江戸では「無宿者」となった。出郷者が簇出した村は「村潰」となり、廃村となってしまうこともあった。

そうした事例を一つ挙げておこう。筆者は、武蔵国南埼玉郡馬込村に生まれた。『新編武蔵風土記稿』（間宮士信、文政九年）岩槻領の最初には、「馬込村は江戸よりの行程九里余。騎西庄箕輪郷に属す。当村は昔荏原郡馬込の民、太郎吉と云もの来りて開発し、己が旧里の名を取て村名とせりと云。新座郡野火留平林寺に蔵する永禄十年太田源五郎氏資、天正十四年十郎氏房が寺領寄付状に、平林寺領馬込と見えれば、古村なること知るべし。家数百二十五……」⁴とある。幼少の頃に度々子どもが居なくなってしまうことがあった。「神隠し」「天狗攫い」「人攫い」にあったと誰もが言っていた。田畑の隅にある「肥桶」や「肥溜め」に陥ったのならば数日後には発見されるのであるが、遂に姿を現さなかった。山林でよく遊んだが、ある山林には絶対行てはいけない、と厳しくいわれている場所があった。「潰れ家敷の井戸」があった所であった。このような場所がいくつかあった。災害や飢

³ 俳系とは自分と師匠との関係性を示す言葉で、師系ともいう。

⁴ 大日本地誌大系『新編武蔵風土記稿』十（雄山閣、一九七一年）、一〇八頁。

僅などで家系が途絶えたか、借財の返済ができず一家心中した家が何軒もあったのである。井戸のみ残って、あやまって落ちて落命したのであった。

そうした農村の状況のなかで、支考は芭蕉没後卑俗低調さを加え、晩年は平俗に陥った。この一派は「田舎蕉門」と呼ばれたが、大衆には大いに迎えられ全国に知れ渡り、百姓も毎夜遅くまで俳諧三昧となった。「門前の姥に聞き合せて、合点せぬは俳諧にあらず」⁵と述べたので、平俗調を鼓吹れば、いっぴしの俳人となれる、と安易に考えた農民の間に浸透した。懸賞俳諧、懸金俳諧が流行し、放蕩生活を送る百姓もあらわれ、田畑も手離し潰家となって一家離散という者もいた。私の村に残る潰井戸はそうした浮かれ者の屋敷であったのであろう。数年俳諧を学べば誰でも点者になれる、または未熟不鍛錬の下手であっても俳諧師にさえなればなんとか生きていけるという世のなかであったので、化政期には極めて多くの俳人が出現し、俳諧は益々庶民大衆と密着した文芸となっていた。

本論文で考察の対象とする小林一茶（一七六三～一八二八）も、そうしたなかの一人であった。江戸を中心に、俳諧師の一部には、そのような風潮を苦々しく思っていた人物もいた。化政期までの都市風俳諧、田舎体俳諧に限らず、芸能、文芸、果ては「町人」「出郷農民」を総称して「不耕不織の民」と称した。不耕不織の民は幕藩体制の根本である「農は国の大本」とあるのが国是であるが、働き盛りの百姓の若者が郷里を出奔してしまうと、貢税公課の基になる米が減収し、果ては不耕作地、耕作放棄地が増え、江戸に蟠集した農民が無宿者となり、「帳抜け人」つまり人別帳に記載されず、人口減が増大し、果ては一村「村潰」となると警告をしていた。

このように警鐘を発していた者には、大方は各藩に招かれている学者、儒者、藩主の侍講が最も多いが、そのなかに武陽隠士という、今もってその人物を確定できない人物がいる。『世事見聞録』⁶という本を著し、上は幕府や武士、下は百姓・穢多・非人の身分に涉って、内部の矛盾と弊害や中下層身分の状況を詳述し、痛哭の思いを述べている。武家か、

⁵ 各務支考は『本朝文鑑』『和漢文操』という二大俳文集を編纂し、『俳諧十論』などの著述を残した。このなかに「俳諧二十五条」があり、そのうちの一つにこうした誰でも俳諧が詠めるという文章が見える。堀切実氏は支考のこの句を挙げて「日常的な身のまわりの世界、平凡な庶民の生活感を平明な言葉で詠むことが第一である」と述べている（『俳聖芭蕉と俳魔支考』、角川選書、二〇〇六年、二〇〇頁）。

⁶ 文化十三年（一八一六）に発刊。この年の二月に幕府は諸国の人口調査を開始する。五月には吉原が炎上し、江戸大火事となり、初夏より八月にかけて疫病が流行した。同じく八月には近畿東海諸国に風雨・大洪水があり、十月にイギリス船が琉球に至って貿易を求めた。この書物は、武士をはじめ社会の諸階級の内部矛盾や弊害などを身分別に記すとともに、それに対する政策として富の平均化と風俗の匡正を提言したものである。中下層身分の状況を詳述した風俗随筆であるのみならず、卓抜な正論としても知られている著作である。

文人か、百姓か、為政者か、実態はよく分からないが、「一の巻・武士の事」「二の巻・百姓の事」「三の巻・寺社人の事」と、それぞれの身分ごとに矛盾を指摘している。公事訴訟や盲人、町人に売女・歌舞伎役者など細部に涉っている。ことに「米穀・雑穀そのほか諸産物の事」は、どう見ても農に従事したことのある者でなければわからないことや、村々の生活をよく心得ている者、村の統率の知見者、年貢徴収に当たる者でなければ書けないことが記してある。さらに、これまで述べてきた「俳諧師」についてはことの外、微に入り細をうがつが如き記述がなされているのである。

ここまで詳細に書き残した武陽隠士が俳諧師であるとしたならば、「武陽」であるからには武蔵に住した者であろう。武陽隠士の著述である『世事見聞録』は、文化十三年（一八一六）刊ではあるが、「一の巻・武士の事」と「二の巻・百姓の事」は、安政の頃に木版刷りにして刊行されたようである。この時期に、武蔵で俳諧師として名の知られた者に、武陽隠士中村知足（敲石、一六九六～一七八八）⁷、武陵隠士砂岡四郎左衛門（雁宕、?～一七三三）、葛飾隠士溝口十太夫勝昌（素丸、一七一三～一七九五）、葛飾隠士石井七右衛門（文龍）の四人がいる。敲石は、武州谷原村の里正で後に江戸に住した。雁宕は、武州八王子の名主、素丸は、日本橋浜町の幕府旗本、文龍は武州備後村の里正で医師であった。この四人のなかで最も家系に誇りを持っていたのは、中村知足である。竹内玄玄一の『続俳家奇人談』（天保三年、一八三二）に、「武州埼玉郡谷原村の里正中村太左衛門は、駿河の国司、式部少輔藤原一氏八世の孫なり。少かりしより風流の道に心を遊ばしむ。はじめ連歌を好みて、時亨、其阿なんどに交り、後俳諧にかへて桜川、百庵と友たり。雅名を敲石といひ、庵を匍匐といふ」⁸と記されている。

確かに、中村知足という俳諧師は二人いたのである。一人は、寛永十七年（一六四〇）

⁷ 元禄九年（一六九六）生まれ。武蔵埼玉郡谷原村の里正、眼牛の門人で越谷吾山と親交を結ぶ。天明八年（一七八八）死去。名は知足、通称は太左衛門、別号は酔月。文政九年（一八二六）に間宮士信らが編した『新編武蔵風土記稿』巻之二百六・埼玉郡之八・新方領に、「東谷原新田村、東谷原新田村は検知および江戸の行程前村と異ならず、当村名主の先祖太左衛門なる者、元は幕府工匠を務めしが、寛文九年日光山御宮御修營の事に預り、功竣て後、其賞として若干の金を賜へり、然るに其金を無益の費に失わんことを恐れ、当所新開のことを願上げれば、願のごとく御免ありしゆへ、則新墾する所なりと。元禄後までは一村なりしを、後年東西二村に分てりと云。……」とある。これに続いて「西谷原新田、西谷原村は元前村と一村にして、元禄後分れし村なれば、江戸の行程、四隣の村々……」とあり、この村の「小名、三郎谷」とある。これは太左衛門の弟の高田三郎のことで、西谷原村の里正も中村家が代々務めた。『新編武蔵風土記稿』が幕府に上呈されると、幕府は、八月に「無籍者百姓町人等長脇差を帶し鉄砲を携えることを禁ず」という布達を出し、翌年には関東全域の取り締りに乗り出している。

⁸ 雲英末雄校注『俳家奇人談・続俳家奇人談』（岩波文庫、一九八五年）、二七三頁。

生まれで、下里勘兵衛吉親（寂照）といった。尾張国鳴海宿の庄屋で酒造業、鉄の売買をした。俳諧の成果を『尾張鳴海俳諧喚続集』としてまとめた。俳諧人名録『俳諧名簿』によれば、この家の者は、歴代「知足」と名乗った。この家の文書は、現在、『綿屋文庫』に収録されている。貞享二年（一六八五）、同四年、同五年と、三度にわたり芭蕉を招喚し滞在させた。この家に芭蕉書簡六通が残っていることは、すでに世に知られている。鳴海宿の知足は、『世事見聞録』の出版とは時代が合わない。また代々知足と名乗ったが、武陽ではなく、鳴海であった。

もう一人が、武州谷原村里正武陽隠士・敲石中村知足である。尾張の鳴海宿の中村知足が世によく知られていたことから、今日までほとんど論じられたことのない人物であるが、『新編武蔵風土記稿』にその名が記されている。この書籍は、幕命によって編纂されたもので、それぞれの村名のいわれ書きと「旧家」が記されているため、武州谷原宿の知足の由緒についてはほぼ間違いないと思われる。「武陽隠士」が中村知足、すなわち武陽隠士敲石であると断じるには確証に乏しいとしなくてはならないものの、ほぼ間違いと思われる。したがって、一茶を中心とする葛飾派の武蔵国における活動について知るためには、『世事見聞録』が不可欠の史料となることから、本論文において『世事見聞録』を第一次史料とみなすとともに、仮に中村知足の著作として扱うこととする。

一般的にいうならば、俳諧は、芭蕉没後、それぞれの弟子が各々自説を述べ、それに沿って俳諧を詠んだ。またそれぞれの旧里で一派を形成していた。江戸座、美濃派、伊勢派、尾張派、葛飾派など、それぞれの地で俳諧集団を形成し、その指導料と添削料、門人としての認可料などで生活をする「業俳」すなわち職業俳人が誕生したのである。

小林一茶も俳諧師として独立するか、一派を成すか、あるいはこうした流派の総帥として一門を率いるかを目指さざるをえない状況におかれていた。一茶は、すでに芭蕉崇拜の思いとは別に、趣味化した季感中心の作句法を否定して、化政期の俳壇に異色の存在感を示していた。一茶という人物は、愛憎の念がいたって強く、ことに弱い者に対しては慈愛の念が強く、彼の目は、常に虫や小動物にまでも注がれている。一茶ほど素直に自分の生活を表現した俳人はいなかったといえるであろう。俳諧は、もともとは和歌であり、和歌から俳諧連歌となり、さらに俳諧へと発展した。詠むべき対象は、やはり花鳥風月である。

その発展過程において注目されるのが、二条良基（一三二〇～一三八八）である。彼は『連理秘抄』（正平四年、一三四九）で、「一座を張行せんと思はば、まづ時分を選び眺望を尋ぬべし。雪月の時、花木の砌、時に従ひて変る姿を見せれば、心も内に動き言葉も外

にあらはるる。おなじくは、眺望ならびに地景あらん所を撰ぶべし。山にも向かひ水にも望み、風情をこらす尤もその便りあり、稠人、広座、大飲、荒言の席ゆめゆめ張行すべからず。すべて其の興なし」⁹と述べている。俳諧という文芸の特徴は、和歌とは異なり複数によって一卷を作り上げるところにある。また、その対象は、もともと花鳥風月であったものが、江戸中期（芭蕉以降）あたりからは、人事、生活、遊興などすべてに拡大していったのである。その過程においては、一茶の存在が重要な役割を果たしたといえる。その傾向は現代の俳諧へと連綿と繋がっている。

こうして形成された俳諧師集団、すなわち下層の士族、町人、百姓なども含む、いわゆる地下人の連歌会、田舎風連歌会が、より具体的にはどうであったのかをみていこう。竹葉山草夫が書いた『連歌世々之指南』には、以下のような記述がある。

側向き、歪み傾き、扇面にあてなどして案じたる、いと見苦し。句を持たるも、見えぬように案じ習ふべきや。少俯ぶきて案じたる、ほがらかに扇を使ひ、鼻ことごとしくかみ、みだりに痰を吐き、胸広く開け、或は腕まくり、脛むくり足の指動かし面杖をつき、物に掛り添ひ髭うち捻り、扇まはし、目鼻まさぐり手遊びなどしたる、いとないがしろなり。会席は遅くとも日出る此より初て黄昏過ぎる程に果つるよう有べし。田舎ほとりには朝には何となき事さへづりをりて、日たけて始め暮のさき罷帰りてなど急ぐ程にいかなる賢き人も能事せられ侍らんや¹⁰。

一茶が好んで巡廻指導をした房総の田舎では、むしろこうした庶民性を、村人の愛好者達は好んだのかも知れない。葛飾蕉門という一派の総帥は、代々其日庵を名乗り、禄は低い、みな幕府書院番、奏者番を務めた高級官僚達であった。そうした点を勘案すると、信濃柏原の貧農の倅の一茶が、どれ程努力しても葛飾派などを継承することなどできなかったはずである。さらに、「武陽隠士」の『世間見聞録』との検証、武蔵国谷原村里正藤原氏中村知足、武陽隠士敲石とはどのような人物であったのか。

従来の研究においては、蕉門の一派は房総、常陸など限られた地域に勢力をもっていたとされていたが、本研究は、上記の地域とあわせて武蔵における同組織をも検討対象とする。化政期という時代のありようを検討しながら、一茶がその時代をどのように生き、何

⁹ 日本古典文学大系『連歌論集・俳論集』（岩波書店、一九六一年）、四十三頁。

¹⁰ 金子金治郎『連歌総論』（桜楓社、一九八七年）、十八頁から再引用。

故に俳諧師として江戸で名を成せなかったのか。信濃国柏原での一茶社中はどのように形成されたのか。また一茶は葛飾派にあつて何故に庵号、園号、舎号を継承できなかったのか。こうした事柄との関連から武蔵国における葛飾蕉門との関係を論じた研究は、管見によればほとんどない。おそらく、本研究が、こうした研究としてははじめての試みとなるであろう。

これに加えて、本論の特色は次の点にもある。知られているように、近世の文学作品のなかで、肉親の愛情や家庭と家族、愛と死を扱った作品はきわめて少ない。師や門人、親友等に関する型どおりの終焉記は数あるが、以下に論じるように、一茶のように近代的な自我意識を全面に押し出して、最も切実なテーマである肉親や家族の愛や死別をテーマにして書かれた濃密な作品は全くないといってもよい。一茶の作品には、憎悪や怨念はあまたある。それ故にこそ、一茶の人生も作品も今日なお異彩を放っているといえる。

ここで、あらかじめおおざっぱに一茶の生涯を俯瞰しておこう。一茶は十四歳から五十歳まで愚直に歩み続けた。「安永六年より旧里を出でてより漂泊三十六年也。日数一万五千九百六十日」¹¹とあるように、三十六年間の漂泊、放浪、行脚の人生であった。千辛万苦の人生でもあった。その姿は、余りにも愚直に芭蕉の後姿を追いすぎた結果であったといっても過言ではない。

ところで、一茶は、晩年（文化一一、一八一四）に葛飾派を離れて故郷柏原に帰住しても、葛飾派における最初の師匠であった溝口十太夫（素丸、一七一三～九五）に師事したことを生涯の矜持とし、事あるごとに「溝口十太夫門人、俳諧寺一茶」と記した。葛飾派の執筆まで務めたのであるから、庵号は得られずとも別号の老茄園か宜春園のいずれかは得られて当然であったはずである。あるいは不干が文龍から「杉滴舎」の号を授かったように、舎号ぐらいは授かってしかるべきであろう。ここには何か理由でもあったのであろうか。この点も考察の対象となる。

周知のように、近世江戸幕府の施政の方針は、農民について、「民は国の本なり」、「天下国家を保つ根本の土台」という¹²。『世事見聞録』には、「百姓の事」として「二の巻」にその由が語られている。まず、武陽隠士は、世の有様について、以下のように記している。

¹¹ 『一茶全集』三、二十三頁。

¹² 『世事見聞録』（岩波文庫、一九九四年）、七十九頁。

国風によりて土民を一円他所へ出さざる制度なり。薩摩、肥土、阿波、土佐など殊のほか厳制なり。紀州は望みの通り他所へ出せども、どこまでも遁さず。子孫までも繋ぎ置くなり。非道なり。加州、仙台は年季を定めて出し、年季中帰るざれば出奔の格にするなり。加州などは別して苛政なる由にて、かの領内の土民は背延びかねて大いに意卑く、ことごとく陰気にして勇氣さらになし。また仙台の人も虚偽多くことごとく短慮なり。他所へ人をださざる程の事なれば、すべて国政の苛き事、これを以て知るべし。窮民は他所へ稼ぎに出るか、または国回り、その他非人・乞食となりて他所へ出て、露命をつなぐほかなし。しかるに右等の国々はその凌ぎ出来かねる故、屈死するもの多しと聞く。一体、右体の国禁は乱世の事の風儀ならん。それ故他国へ出る事を禁じなば、その替りに困窮極まりしものの行き立つべきやうに手当を致し遣はしなば、もつともにあるべきが、さもなくば土地に堪へかね、難儀はさらに構わず、無体に動くことを禁ぜしむるは非道なり。これ窮民を縛り置きて締め殺すことなり。¹³

一茶は、まさに武陽隠士の描くように、幕藩体制下にあつて、まったくこれに反するような人生を送っていたことになる。十四歳で出郷し、五十歳で旧里に帰った。三十六年の間江戸暮らしを含め、どこに住家を得て、どんな生活をしていたのか、そのことは断片的にしか解明されていない。

繰り返すように、人生のほとんどを放浪者として、諸国漂泊に明け暮れ、陰士の言葉通り、回国し、果ては非人、乞食となった一茶は、故郷に帰ることを決めた頃には、すべての作品、俳諧、日記、紀行文、雑文、俳文に「乞食一茶」「信濃乞食一茶」「乞食首領一茶」と記した。定住地を持たない者は、当時の法令に従って「無宿人」「帳抜け人」「無請人」「人別無宿」となり、その身分は非人、乞食に加えられ、正当な国民として扱われなかったためであった。

一茶は、五十歳を限りに故郷信濃に戻ることができたのは、父や弟の配慮によって毎年人別帳に記載され、柏原住民としていわば現在の戸籍に記されていたからである。一方、江戸にあつては、俳友の松井楼其粹や夏目成美という蔵前の札差が請人になっていたからでもあった。関西、中国、九州、四国と放浪の旅を続ける間は、江戸葛飾蕉門の宗帳「溝口十太夫素丸門人」としての手形を持っていた。だが一茶は江戸において立机し、一派をなして俳諧師として身を立てることはなかった。郷里柏原に戻って、はじめて俳諧宗匠と

¹³ 同上、一二六頁。

なった。だが、当時の俳諧師の証とする「俳諧鱚」「師系」は持っていなかった。持っていないというより、蕉門で最も由緒ある「葛飾派」に属しながらも、葛飾蕉門の俳諧師としての証を得られなかったというのが正しい。帰里信濃にあっても葛飾派で認められた宗匠という身分を示すことができなかった所以である。

郷里柏原に帰ってからの一茶は、農民、百姓として生きた。父や弟の配慮によって、農民、百姓の身分を保つことはできたが故に、一茶は、その後信州柏原を中心として一茶俳諧社中を形成したのである。葛飾蕉門を名乗れず、本行寺に身を寄せていたことで、「俳諧寺一茶」と名乗ったのである。武陽隠士の『世事見聞録』を史料としながら、一茶が生きた時代状況、彼が俳諧師となってゆく過程を、本論においては、それぞれの状況下にある一茶という人物について、さまざまな方向から考察することとする。

そうしたプロセスにおいては、資料的価値の高さをもって注目される武陽隠士についても、可能な限り検討の対象とする。彼がどのような身分の者で、何を生業とし、なぜ本名、身分を明らかにせずこの書を残したのかという疑問を、一茶の生涯とその活動と比較することにより、一茶と同時代の文化・文政期に生きた人々の姿も考察したい。というのも、『世事見聞録』は、この封建制度末期の世相をかなり詳細に描かれているので、とくに関東の百姓の生活と困窮、そして零落してゆく有り様や潰家、潰村となってゆく時代相が、武蔵国にも当てはまるからである。

一つの例を挙げると、関東の荒廃する状況については、以下のようは記述がある。

関東の内にも常陸、下野は過半荒地、潰家で来る故、最もこの辺の風俗、古来、子を間引くとして生まれた子を殺す故、だんだん人少なくなりたいといふ説あれども、しかしこれは右の子を間引き取るにはあるべからず、その事は昔よりの仕曲となれば、さあらば古来も人少なにてあるべきはずなるに、前々は豊穰なる国などと見えて、名将、英雄、豪傑も発り、民家も沢山にありて、御入国の頃まではさのみ余国に劣らざる相応の国柄にてやありけん¹⁴。

こうした記述の背景には、家康が入国して以来、武功の者への恩賞や旗本、御家人に知行町割り行われ、御四代までは随分豊かな地であったのに、領地が細分された上に、人数が多くなり新田町が開墾されたという理由がある。そのことが、「その後おひおひ民に弊風

¹⁴ 同上、一〇〇頁。

起こりて人情狂い出せし」¹⁵とあるように、関東の地はあまりにも細分化されて統率が取れなくなったのである。実際、御三家、御三卿、旗本、御家人の領地が実にややこしく入り組んでおり、その上飛び領地が入り込み、僅かな領地が皆領地領主の施政の方針が違うため紛争が絶えず、疲弊して行ったということである。

関八州についても、ほぼ同様のことがいえる。

関八州の内にも、右の常陸、下総はさせる産業もなく、不融通、不便利なる土地にして、その上御当地より通用の宜しからず、殊に人情も気荒にてまづは武辺に近き風儀なる所に、御当地の結構、武門の繁昌、融通の潤沢なる事の目の当たりにある故、人々狂ひ立ち、右体不便利の地を疎みて、多くは御当地などへ、あるいは奉公に出て立身を好み、または商売に出て、あるいは放埒に余りて出で、困窮の上にて出でなどして衰微したると見ゆれど、そのほかご当地隣合ひの国々は皆運送通用宜しき故に、御当地の余沢それぞれに回り合ひ、田舎とは申しながら諸事江戸に似寄り、前にも畏怖ごとく風情にて、他国の一者まで入り込み住居するほどの事なれば、さほど人数は減らず、もっともその者ら江戸へ出る曲ありて、いずれの国々とても昔の程より極めて人少なくなり、常陸、下総は格別に衰微したり¹⁶。

ここからわかるように、最大の要因は、関東一円に江戸の文化が入り込み、何事につけても奢侈となり百姓の生活を捨てる者が続出して疲弊したからであった。一茶もまさにその一人であった。

一茶は、房総方面で俳諧や文化を楽しむ者が増えたので巡回指導もできるようになり、富裕の者の家に泊まり込み、優遇を受けたのである。が、一方でそうした富裕層の繁栄の裏では、百姓が田畑を手放し、乞食となって行く状況が続出した。であるから、一茶も乞食、非人の小屋に一緒に止まったり、乞食の子どもの誕生を祝い、乞食と何日も行動を共にしたのである。その反面、船運や事業で稼いだ者たちが次々と豪勢な家を建てるたびに、一茶は、「新家記」という祝いの文章や俳句を送っている。

また武陽隠士は、関東、特に武蔵国について、次のような記述も残している——これは先述のとおり、「武陽」が武蔵国の住人であるという推測を裏付ける。

¹⁵ 同上、一〇一頁。

¹⁶ 同上、一〇一頁。

殊に難儀なるは国役、伝馬役、人足なりといふ。国役などは人少なにててもまた荒地ありても村高ほどに納むる事なり。これも昔はなかりしが、五十年來の課役なりといふ。武蔵国においては、また伝馬役、人足役の事、かの辺は日光道中、奥羽の道中・例幣使街道など往来多の場所ゆゑ、いずれか宿駅、助郷を勤むるに、これまた村高へ割り付くる事にて、百姓十人、二十人ならではなき所へ三十人も四十人も当り、馬五疋ならではなき所へ十疋も十五疋も当る故、よんどころなく宿場駅へ賃銀を出し、雇ひ上げて役を勤るといふ。全体宿々人馬の入用も古來よりも倍増いたし、いやましに難儀の重なるゆゑ、堪えかねてだんだん離散し荒地、潰家できるといふ。もつもの事なり¹⁷。

このように、武陽隱士は、実によく農民、百姓が疲弊してゆく理由を描いている。結論的にいえば、この一段は、一茶が武蔵国へ回村指導に赴かなかった理由を示唆するであろう。

それは、どういうことであろうか。一茶の活動は、房総方面への巡回指導が中心であった。武蔵国は、知られているように、隅田川以東、現在の埼玉県の一部を流れる綾瀬川によって二分され、西部はさらに荒川によって二分されている。現在の埼玉県は、東部、南部、西部、北部とほぼ四つの区域に分けることができるが、かつての東部地域は、東武と称し、この地に葛飾郡と埼玉郡があった。両群とも南北があり、さらに四郡になっていた。一茶は、近世江戸期には武蔵葛飾郡も含めて、この地域を基盤とする葛飾蕉門の一員であったが故に、武蔵国葛飾郡も巡回指導をしてもよいはずであった。が、現在残されている史料をみる限りでは、一茶の足跡は埼玉県には皆無である¹⁸。つまり、上述の理由から下総葛飾、上総、安房の地域だけに止まったと理解される。他にも原因は考えられるが、武蔵国はひどく疲弊していたために、一茶が回村指導するにも、人々の間にはそのような余裕はなかったというのが最大の理由であろう。この問題は、後章でさらに詳しく検討する。

柏原の農民も確かに豊かではなかった。一茶自身も故郷に帰ってからは百姓であるから、村役金、伝馬役金を奉行所から命じられるが、最初の妻きくの病発症と養生に金がかかる

¹⁷ 同上、一〇二頁。

¹⁸ ただし、埼玉県の春日部市と幸手市には、何時建立されたかは定かではないが、一茶句碑が残っており、一茶が東部にも指導に訪れていた可能性も否定できない。

ため、村役金、伝馬役金を免除して欲しいという「役金免除願」を提出して認められた。あるいは、「伝馬役」についても、弟の弥兵衛に勤めさせている。一茶は、長い江戸生活でこうした知恵を身につけていたのであろう。一茶は、故郷に帰ってから家族や郷里の者から嫌われ、継母と異母弟の専六（後に弥兵衛）とも反目はあったであろう。一茶が自らの立場を強調しているためでもあろうが、『世事見聞録』の視点からみれば、一茶という存在は、確かに「農を滅す者の一人」であり「百姓を捨てた人間」の一人ということになる。「不耕不織の民」であり、幕藩体制を揺るがす最も不埒な百姓の一人なのである。武陽隱士は、百姓、農民について、「土民は天性利を惡むものにして、国家の制度も無欲なるを本として、もし民の利を懷くる事あれば殊に禁ずべき事なり。これ古来よりの律なり」¹⁹とっている。一茶のとった行動をみれば、当然、一茶自身が、みずからを「遊民」と蔑み、『文政九・十年句帖写』のなかでは、「不耕不織といわるも今日まで生き延びたりこと不思議なり。たがやさずして喰らひ、織らずして着る、この体たらく」²⁰と書いているのも、たんに自嘲的に述べたともみえるが、他方では、あるいは世を欺くための韜晦の術であったかもしれない。

さらに、『世事見聞録』の記述は続く。

関東の国々、別して江戸近辺の百姓、公事に出ることを心安く覚え、また常に江戸に馴れ居て奉行所をも恐れず、役人をも見透かし、殊になにかの序にとかく江戸へ出たがる癖ありて、ややともすれば出入りを拵え即時に江戸へ持ち出し、また道理の前後も落着の詰まりもよくよく弁へて心強く構へたるものなれども、遠国の百姓はなかなかさような事にあらず²¹。

村内にても傍輩同志の取り扱ひにても事を済ますときは、所詮道理を以て決着すること能はず。もし道理を以て事を分くる時は、依怙最眞の如くなりては治まりかねる故、双方とも道理は押し込めてしまひて損益の勘定にて果つるなり。右体いづれになしてもつまりは利勘にて終る。また浪人、虚無僧、俳諧師、勧化、奉加売り、そのほか様々の悪党入り込み、騒動を入れ、また品々ゆすりを申し懸けたるも、かねて訴訟のこと叶はざれば、みな金銭にて償ひ、盗人に追銭を出してしまふなり²²。

¹⁹ 同上、一〇四頁。

²⁰ 『一茶全集』四、五八〇頁。

²¹ 『世事見聞録』、一〇五頁。

²² 同上、一〇七頁。

武陽隠士は、遠国の者は訴訟にはなかなか費用や日数もかかり、その間に何日かかるかもわからない。江戸滞在期も費用を含めて莫大になることを知っているから訴訟を起こさなかった、というのである。

一茶が訴訟を行って家産を折半すると弟に向かっていい出したのにも、この間の江戸と信濃という生活環境の違いがあった。一茶は、江戸に出ても生活するに不安はなかった。訴訟のことも知っていた。それ以上に、江戸暮らしで得たお触書の条項も理解していた。おそらく柏原に帰住してからも、そうした江戸の状況を周囲に話して聞かせたことが、おそらくは、一茶社中を築くことに成功した一つの理由であろう。

また、あらかじめ指摘しておきたいことは、一茶が残した日記のことである。すべてがみつまっているわけではないものの、長い年月を経て研究者や俳句愛好家の手で発掘されてきたものである。これら日記類は、たとえば、「文化六年句日記」「七番日記」「八番日記」「文政句帳」などと、一茶の生きた年代順に番号が付けられている。欠落した日記を今後発見できれば、一茶の俳句数や指導地域もさらに増えることになる。

一茶の日記にはどのようなことが書かれているかといえば、たとえば、「安永六年より旧里を出でて漂泊三十六年なり。日数一万五千九百六十日」と書き記した部分がある。享和元年（一八〇一）五月二十一日、一茶三十九歳の時に父弥五兵衛が病死し、父から自筆の遺言状を受け取る。これに関連して、「一茶と継母、異母弟と骨肉の相続争いを展開」とか、「骨肉相食む兄弟争い」と記述する書が多い。これも『父の終焉日記』で一茶自らが書いた物語である。「この闘争を赤裸々に描いた」ともされるが、そうはいつでも日記は、一茶の脚色が施された読み物であることは間違いない。

本論文の記述内容は、小林一茶の俳句作品、一茶の日記、紀行文、俳文などであり、これらは、昭和五十五年より順次信濃毎日新聞社が刊行した、信濃教育会編『一茶全集』（全八巻、別巻一卷）に拠っている。さらに、一茶が文政元年（一八一八）十月九日から十数日の間宿泊して一茶俳諧社中を練った折に書き残したが、その後散逸していた資料を、矢場勝幸氏が整理し『信州向源寺一茶新資料』を著した。今日ではそれが加わって全十巻となっている。日本近世社会後期の歴史、文化の特色を知る上で、全十巻は貴重な資料となっている。この時期の文化は、戯作、歌舞伎、寄席、浮世絵などの各方面に多彩に展開した。実に稀な時代であった。しかし、その多くは江戸の町人世界であったのに対して、『一茶全集』は、江戸と農村とを自己の文芸活動の基盤とした俳人が、豊かな感性で鮮明に時

代の様相を記述したものである。津田左右吉は、「蕪村の後、彼とは正反対の地位に立って俳諧史上に一大光明を放ってゐるものが俳諧寺一茶である」と述べ、さらに「我が国民文学の歴史に於いて、これほど特異な位置に有ってゐる詩人は殆ど比類がない」²³と述べている。本論文は、近世後期の武蔵、下総の葛飾地方の時代状況を踏まえて、一茶の全体像を捉えようとするものである。

筆者は、従来一茶の文章を事実の記録とみてきた。しかし、小林一茶の文学には、誇張があったり、創作があったりと、むしろ一茶以前の伝統としての日本の文学に位置付けられている「説話」と「俳文」の色合いが強いと思われる箇所がある。現在では、むしろ筆者は、俳諧の説話として描いた俳文と受け取るようになった。筆者の理解によれば、俳文とは、俳諧的文章、俳意を含んだ散文的文章をいう。文章の題材、内容は、煙草、硯、枕、杓子、扇、月見など、これら日常身近に取材したものがかえって主流となり、さらに時代の移るにつれて花火、郵便、写真といったように、その時々新しい題材を取り上げるようになっていく。今日では、多くの俳人は、俳諧自由の精神に基づき、時にはイロニーシュな目で捉えて、創作活動を展開している。また、近世までは総じて和漢雅俗混交文によって一種のリズムを保持し、表記や表現の面では、「てには」の微妙ないいまわしなど、俳諧特有の論理の飛躍を生かした含蓄、余韻に富んだ文脈を形成する。さらに、修辭的には、縁語、掛詞、対語、対句を多用しつつ、和漢の典拠や俗諺を踏まえた表現も少なくない。

最後に、俳文の文体様式で特徴的なのは、その大半が『古文真宝』などにみられる中国の古文の体に範をとり、辞、賦、箴、銘、頌、説、解、伝、論などの諸体に準じて書かれることで、四六駢儷体調の文章のリズムをもっているのも、漢文体を継承しているからだと思われる。「俳文史」を通観すると、芭蕉以前においても、元隣の『宝蔵』などを参考にして、俳意も濃厚で短文的なものが俳文の先駆的なものとみられてきた。向井許六が『本朝文選』の序文に、「先師芭蕉翁始て一格をたてて、気韻生動をあらはせり」²⁴と記したように、意識的に俳文の格を立てて創作をしたのは芭蕉であった。芭蕉の俳風は、『挙白集』や『古文真宝』などの和漢の文章をモデルとしたうえで、伝統的な雅文や漢文を「実文」とみなし、その「実文」にも通じるものでありながら、異種の俳文を創始したのであった。『猿蓑』の「幻住庵の記」がその代表作で、芭蕉以後、門下の許六が選んだ『本朝文

²³ 津田左右吉『文学に現はれたる我が国民思想の研究』七（岩波文庫、一九七八年）、三一五頁。

²⁴ 古典俳文学大系『蕉門俳論俳文集』（集英社、一九七〇年）、三八二頁。

選』は、はじめての本格的な俳文集である。支考編『本朝文鑑』『和漢文操』とあわせて、以後の俳文の規範となっている。

元文（一七三六～四一）頃から「狂文」の発生があり、一般には狂文集として扱われるが、『風俗文集』や『風俗文選拾遺』と称され、俳文と狂文の分離が求められ、宝暦から明和（一七五一～七二）頃には、狂文と俳文は明確に分離され、それぞれ隆盛期を迎えた。その狂、俳の両面要素をあわせて、一つの頂点に立ったのが、横井也有の『鶉衣』であった。俳文集は文化期から文政期にかけて隆盛し、明治期にかけても引き続き編まれ、その日常的な叙事、叙景の筆致は新時代の写生文の誕生にも大きな影響を与えている。

第二節 論文の構成

第一章では、一茶が江戸の庶民生活から何を身につけたかについて、『世事見聞録』『御触書集成』などを通して検証し、葛飾蕉門への入門とその後の一茶について考察する。

第二章では、一茶俳諧の特徴には、児童と動物を詠んだ句が多いことから、幼児期の生活と信濃地方の文化との関わり、一茶の識字の獲得過程を論じる。

第三章では、一茶の日本国という意識について考察する。一茶は、文化・文政期までに北海道を除いて、日本全土を漂泊した。幕藩制下において、いまだ全体的に熟していなかった、日本国という意識が、一茶のなかにどのように生じたかを論究する。

第四章では、一茶稿本『志多良』と関連して、農事俳句について考察する。一茶は、百姓として生まれたが、一度も農事に関わらなかった。だが、無関心であったのではなく、積極的に農事を俳句に詠んでいた。その背景と信念を論じる。

第五章では、一茶俳句の方言使用について論じる。国学の隆盛に従い、日本語への関心が高まった。一茶は、地方語や方言を積極的に取り込んだ。その意図とこの時期の在村文化との関わりを考察する。

第六章では、一茶の家族と子どもへの愛を、一茶の信仰心を通して考察し、善光寺縁起や浄土真宗、説経節との関わりを検討し、愛情発露の感情について論じる。

第七章では、一茶の自己俳諧の確立と宗教性について論じる。俳諧は、江戸期に文学性を持つに至った文芸であるが、一茶はそれを庶民に開放するという役割を果たした。貧者や乞食の生活までも詠み、口語俳句を創出した過程を辿る。

第八章では、俳壇の宗匠としての一茶の立場と地位について検討する。江戸期の俳諧師は、師弟関係や派閥を構成し、多数の門弟を持つことで、各自の俳壇の経営を図っていた。そのため、師系を誇り、庵号・園号などを持ち、代々継承した。一茶のみがこれを用いなかった事情や真意を考察する。

第九章では、武蔵国方面における一茶の事跡と、葛飾派との決別、故郷定住への決意を論じる。一茶が所属していた葛飾派の掌握範囲と武蔵国における俳諧分布、さらに一茶の指導範囲を検討し、一茶が葛飾派を脱して信濃に自己の一派を興した経緯を、地方経済の発展との関わりにおいて考察する。

第十章では、戦前の修身教科書と信濃教育会にみる一茶像について検討する。一茶の作品は、芭蕉、蕪村と並び、江戸期を代表する三人の俳諧師のなかで、教科書に最も多く採録されている。教科書への採用と一茶像の変遷について考察する。

終章では、この研究を通して残されたいくつかの課題について言及する。

第一章 世事の記録師か記述魔か

—小林一茶とその時代—

第一節 日記に書かれた関東と房総

小林一茶に師はいない。現代の俳壇を覆っているような、師系を誇り、門弟を集め、俳誌を発行し、それが俳壇における知名度となるような業俳ではない。一茶は漂泊放浪の俳人である。日本全国の田舎渡らいの旅をし、ゆきあたりばつたり宿を乞う。世間話を聞かせては一宿一飯の恩義にあずかる。三十六年間に渡ってそうした放浪の旅をした、言わば無宿者であり、宿なしであり、語り者であり、騙り者である。場合によっては賭場にも出入りしたかも知れない。この頃江戸は百万都市に膨張し、農民はその底辺に吸い込まれてゆく状況になり、武蔵、下野、常陸の農民が農を捨て村社会から飛び出して江戸に流入し、一村が丸ごと潰れかねない状況になっていた。下野国芳賀郡西高橋村（現栃木県芳賀郡芳賀町）に、十八世紀後半の宝暦年間の村内の困窮状態が書かれた資料がある。

宝暦年中辰巳頃、到って困窮に及び、その上死に潰れ、出奔人、多分に出来し、すでに一村退転に及び候砌、田畑手余り夥しく出来、弁納相掛り、残り候小前も追々出奔仕る仕儀も御座候²⁵。

これによれば西高橋村では、十八世紀後半に入った宝暦年間から村内の困窮状態が一段と深まった。その頃村内では「死潰」と「出奔」が同時発生し、一村が丸ごと潰れかねない状態になっていた。耕作の手が届かない田畑が増え、その分の年貢の穴埋めをしようとすると、それまで必死に耐えて生き残っていた他の農家にまで負担が及ぶので、それらの農家まで耐え切れなくなって村を出ようとする事態になっているとしている。出奔は欠落、与風出などといい、村の者や奉公人が無断で村や農業を放棄し、離農・離村してしまうことをいう。農民が領主や代官所に無断で居住地を変更することは許されていない。まして奉公人として雇用されている期間中の者が、主人に無断で逃げ出すことは犯罪となる。村の者にせよ、奉公人にせよ一人二人の少数者が、飢饉時の苦しさから、衝動的に村を出て

²⁵『栃木県史史料編・近世Ⅲ』資料編、安永六年より文政二年に至る「出奉公人書上帳」（栃木県、一九七八年）。

行くのとは訳が違うのである。不作や飢饉による一時の生活難のみから村を捨てようという訳ではない。

この時代の農民は貨幣経済の浸透によって村に課せられる年貢諸役の負担の重さ、村で
する農家仕事の辛い不自由な生活と比べ、少なくとも幾分かは楽で自由な生活や仕事があ
るはずだと考える。そうした思いを抱いて村を捨て主家を抜け出して江戸に流入してくる
のであるから、江戸の町は一挙に膨張するのである。村から出て行く者は、ほとんど比較
的に若い働き盛りの者である。働き盛りの者が大勢出て行ってしまった村には、老人、女
子、病人或は身体不自由者が残る。十八世紀後半、北関東地方など人口減少の激しい地方
の農村では、こうした現象が現実にも多数起きており、出奔、欠落と並行して死潰も同時多
発していたのであるが、一方では博奕や懸賞興業俳諧が流行していた。

はつ時雨俳諧流布の世也けり（文化七年十月）

芭蕉翁の臍をかじつて夕涼み（文化十年五月）

一茶がこんなに詠むほど俳諧熱は全国的に高まっていた。俳諧の宗匠として一人前にな
ろうと思ったら俳聖芭蕉の世界を追体験しなければならず、そのためには師の足跡をた
どり俳行脚を志し、師が傾倒した思想を学ぶのが不可欠であった。一茶も寛政二年（一七
九〇）に溝口素丸に入門を果たすや、たちまち翌年の三月には前師葛飾派の俳匠二六庵竹
阿の死を見届けると西国行脚の旅に出ている。行脚の旅に出ることは「無宿者」となり、
「流浪僧」となることである。江戸に流入する離村農民の数は増すばかりであり、幕府も
その対策に手を焼いていた。そればかりではなく江戸市中は犯罪の増殖と化していた。皆
どん底の「うら店」暮らしである。一茶は江戸の生活を次のように詠んでいる。

江戸住や赤の他人の衣配り（文政七年）

雪散るやきのふは見えぬ借家札（文化十年）

秋の風乞食は我を見くらぶる（文化元年）

木がらしや地びたに暮るる辻諷ひ（同）

木がらしや ^{さんばし} 棧 を這ふ琵琶法師（文政四年）

荻生徂徠は「農民も出替りの奉公に來りて直に留りて日雇をとり、棒手を振り、直に御

城下の民となるもの、日を追ひ年を追て夥し」と、その著『太平策』で指摘している²⁶。江戸はこうした居座りや流入者、無宿者、渡世人たちの増大の結果、乞食にまで見くらべられるような貧しいなりをしているほどではないにしても、新規に商売を始めることもままならない雑業で生きる貧しい生活者ばかりであった。このような状況であるから江戸末期には無宿者が、長脇差、大小刀、長刀、鎗、鉄砲までも携帯する武装集団化していた。実際に殺人事件也多発している。一茶はこうした事件を具さに記録している。これらの集団の構成員には百姓出身の無宿者が最も多かったのであった。

幕末の日本社会が、無宿者、浮浪の輩、果は博徒らの暴力集団などの増大に役人達は手を焼いていた。無宿の問題は江戸の前期に発生し、十九世紀には無宿者が凶暴化し悪党が顕在化していた。この頃の世相が『世事見聞録』に書き記されている。

近來、無宿悪党の形勢国々へ行き渡り、勿論人情は悪しき方へは移り安き故、士農工商の忤ども多くその方より落ち込み、宿々在々までも溢れものども多く徘徊いたし、善人を騒がし世上を犯すなり。一略一殊に東海道、日光街道を始め在町津々浦々までも、隠し売女、飯盛女など出来て、いやましに不埒ものを生じ、無宿悪党を拵え、喧嘩口論、不義密通のこと多く、博奕、三笠、富、紋付等の諸勝負事流行して、夜盜、追剥、人殺し、火付けなど出来たり²⁷。

無宿の悪行がまわりに波及し、国々に飛び火している。人はとにかく悪いことに染まり易いから、士農工商いずれの身分からも若い者が悪行に足を踏み入れ、無宿悪党化してゆくものである。今や地方の宿場や農村部でも「溢れ者」が徘徊し世間を騒がせ、犯罪を重ねている。街道筋の町場などには売女がはびこり、尚更不心得者を増やし無宿悪党を発生し易くしている。無宿の犯罪としては喧嘩口論、不義密通、博奕、三笠付け、富籤、紋付等も要する博奕である。喧嘩、窃盜、強盜、不義密通、人殺し、火付け、それにしばしば見受ける「かたり」「おどし」を加えれば、当世犯罪の限りを尽すものと言わざるを得ない、と武陽隱士は述べている。

すでに序章で引用したが、『続俳家奇人談』によれば、武陽隱士は武州埼玉郡谷原村（現春日部市谷原）の里正で、中村太左衛門という駿河の国司、武部少輔藤原一氏の八世に当

²⁶ 『太平策』、日本思想大系『荻生徂徠』(岩波書店、一九七三年)、四七五頁。

²⁷ 『世事見聞録』、八十八頁。

っている。若い時より風流の道に心を遊ばせ、連歌に精通し、時亭、其阿などに交わり、後に俳諧を嗜み、楼川、百庵と親しく交わった。雅名を敲石と言ひ、庵を「匍匐」と称し、江戸深川に庵を構えていた。谷原の里正である頃から全国を旅し、様々な事を見聞して知見を広くした。中村敲石には『賦物或問』『金花石葉集』『俳諧原通』『甲午句巢略』『格字或問』『龍几帳』の六冊の著書がある²⁸。

武陽隠士かとも目される中村敲石は、安永四年（一七七五）に『賦物或問』を「匍匐庵敲石」の名で刊行した。叙を野弘と半日庵祇岱が書いている。

乙未の春、武陽敲石子賦物或問を作る。又友生の詠春の俳頭若干を輯し一編と為せば則ち之を梓し世に行ふ、以て初学の一助に備へ且つ友生の志を励すなり、其の心を用ふるや至りと謂ふべきのみ、余之に序すは、余未だ其の階梯を得る態はずと雖も、其の堂に昇れば則ち一語無く巻首に題すべしと、其の請亦翰すべからざれば故に唯其の編録の意旨を書し、胎めに以て之を序と為す。（原文は漢文）²⁹

武陽敲石は閑鷺編『果報冠者』（安永四年）、や越谷吾山編『東海藻』（安永六年）、珪山著『鬘麓夜話』（安永七年）にその句が掲載されている。珪山著の『鬘麓夜話』には、柳居、鳥酔、沾山、雁宕、蓼太らと句を並べている。その他には門瑟編『晒布集』（安永九年）には「春曉亭知足」の名で「歌仙表、三十三回忌」として初表六句を載せている。また蓼太編の『七柏集』（天明元年）に、蓼太、犬麿、可候、知足、素好、夫水、宜麦の七人で「虫二亭興行」と題して三十六句の歌仙を巻いており、これは現在、富山県立図書館志田文庫蔵本として保存されている。武陽隠士敲石については『賦物或問』の叙を書いた半日庵祇岱の文を記しておく。

酔月主人滑稽に遊ぶ事年あり、今や江都匍匐庵の後を経てここに風流におきふす、今年乙未春詞林東風に動き同好の風士、鶯の舌を翻し、つくつくしの筆を揮てつとい集るまゝ、一の小冊子となんなりぬ、おもへは多年此技に耽るの花さく春と濱の真砂子の慮せぬことはいをうたふ。

²⁸ これら敲石の一部資料は、和古本の形で『春日部市史第三巻・近世資料編Ⅱ』として春日部市郷土資料館に収められている。

²⁹ 同上所収。

ここに又鸚鵡石あり花の鳥 半日庵祇袋³⁰

中村敲石は葛飾蕉門にあつて、武州谷原村の里正という由緒ある人物である。家系は次のようになっている。

藤原秀郷……重政（谷原里正中村家祖）－重明－重氏－氏数－知足－足郷－数之－明郷－吉明－三郎－太郎³¹

敲石が雅号で本名は知足と言ひ、敲石の文章にはすべて「藤敲石」「武陽敲石」とある。こうした名門意識を持っていた敲石は、後輩にあたる葛飾蕉門派の石井文龍、小林一茶、不干らと交友を持たず、他派の中心人物と交流を持っている。一方『世事見聞録』奥書には「文化十三丙子年、武陽隱士某」³²とあるのみである。武陽は武蔵の国で陽は南方を示していると解釈して、今日まで江戸から南の方に居を構えた人物で、ここを起点として様々な論が出ている。浪人説、公事訴訟に詳しい人物、知識層農民などと推論されて来た。武陽隱士は何故にこうした記録を残したのか、それはこれらの見聞した事柄を書き留め、それを世間の人が見て面白がるか、世直し、となるかという世間の思惑を考慮したからであつた。武陽隱士が自ら記しているように、熊沢蕃山の『大学或問』、荻生徂徠の『政談』『太平策』、新井白石の『資事通鑑』『折り焚く柴の記』、太宰春台の『経済録』などはみな何れも君臣の道を正すに於て極めてすぐれた論策であつた。隱士もまた秩序を重んずる者として当時の現象を鋭く分析した。上は諸侯から下は農民、穢多、非人に至るまでその批判の眼をもって書き記している。

諫言類とするならば山内広内が上書した諸記録、伊勢国の本居宣長の『玉くしげ』、植崎九八郎の『植崎九八郎上書』³³などは、いずれも君臣の道を正すにおいて極めて勝れた論策である。天明七年（一七八七）植崎九八郎はその上書を松平越中守定信楽翁に差し出した。その筆烈、筆鋒の鋭さは、前執政田沼意次、及び幕閣を震撼させた。しかしそのこ

³⁰ 同上所収。

³¹ 中村敲石の墓碑文。

³² 『世事見聞録』、四五二頁。

³³ 宝暦六年（一七後六）生まれ。小普請組の幕臣であつたが、下級禄にあつた。天明七年老中となつた松平定信に上書を提出し、前老中の田沼意次への批判と政治、経済改革を建言した。定信の寛政の改革が失敗に終わると、再び建議書「賤策雑収」を上呈し、定信を批判した。文化四年（一八〇七）五十二歳で死去した。本姓は成田政由。

とによって九八郎は罪を得てしまった。武陽隠士はその著に大きな影響を受け、九八郎の二の舞を得ることはしなかった。神君の政治を絶対化することでそこを逃れたのであった。こうした絶妙な巧筆を弄せるのは「連歌師」や「俳諧師」である。『世事見聞録』の章は「一の巻」から始まって「七の巻」までである。その文題は次のようになっているのである。一の巻「武士の事」、二の巻「百姓の事」、三の巻「寺社人の事、医業の事」、四の巻「陰陽道の事、盲人の事、公事訴訟の事」、五の巻「諸町人の事、諸町人中辺以下の事」、六の巻「遊里売女の事、歌舞伎芝居の事」、七の巻「穢多・非人の事、米穀・雑穀そのほか諸産物の事、山林の事、日本神国といふ事、非命に死せる者の事、土民君の事」。

武陽隠士の目は無論無宿人、水呑百姓に向っているわけではない。無宿の影響でまじめな江戸近郊の農民の息子たちまで誘い出され悪の道に入ってゆく、無宿の存在自体が悪の発信源となっているとの認識があった。武陽隠士が武州南東部を開発した藤原氏の後裔中村知足であったならば、それは当然筆誅を加えねばならない。江戸市中の出来事は見過ごしにはできない姿であった。

希有に律儀なる忤どもをも、さまざま欺き誑かして誘い出し奢りの道へ引き入れ、または悪しき道へ引き込みて賭け博奕の勝負など勸めて欺き取り、ついには不埒もの不孝ものになし、互いに父母の事を疎み、己が農業を怠り、全体無理なる奢りをなす故に、自然と身の耐えがたきに至り、借錢を拵えあるいは欠落いたし、または父祖より伝わる田畑を親に隠して質入れいたし、あるいはまた心もなく売り払い、重代の家禄を減らし、両親始め家族等へ難儀を負わするなり。かくの如く行状崩れては、再び質朴なる百姓には復しかね、多くはいやましに身持ちを破り、博奕を業とし人のものを犯し奪うの悪心盛んになりいわゆる悪党となる³⁴。

『宇下人言』³⁵の中にはこうした江戸無宿人、帳抜け人、浪人、浮浪人らの対策が述べられている。定信は寛政二年（一七九〇）二月に江戸の隅田川の河口石川島と佃島のあいだにあった葭原湿原を埋め立てて「人足寄場」を建設させた。その建設と管理運営の責任

³⁴ 『世事見聞録』、八十四～五頁。

³⁵ 寛政五年（一七九三）松平定信著。この年、林子平を禁錮とし、彼の『海国兵談』を絶版としたが、九月に露使ラクスマンが漂流民大黒屋幸太夫を送って根村に来航通商を求めたので、定信は諸国を巡視した。尊号事件について勅使中山愛親ら東下、更に江戸に大火があり、このため大豊作であったが、米価が下落し、定信は退去に到る。なお堕胎禁止令が出され、和学講談所が設立された。竜川政次郎『長谷川平蔵—その生涯と一足寄場』（朝日新聞社、一九七四年）参照。

を最初に任されたのが当時、幕府の火付盗賊改役であった長谷川平蔵宣以であった。定信は人足寄場取扱に長谷川平蔵を採用したことについても、「いずれ長谷川の功なりけるが、この人功利をむさぼるが故に、山師などいふ姦なる事もあるよしにて、人々あしくぞいふ。これまたしれども左計りの人にあらざれば、この創業はなしがたしと同列とも議して、まづこゝろみしなり」³⁶と書いている。また自ら推進した政策である人足寄場の効果のほどについて自負する発言を行っている。

つくだ島にとりてしまあり。これに補理して無宿を置、或は縄ない、又は米などつきてその産をなし、尤公用とし米金一ヶ年にいかほどと定めて給せらる。これによて今は無宿てふもの至って稀也。已前は町々の橋ある処へは、その橋の左右につらなりて居りしが、今はなし。こゝこによて盗賊なども減じぬ³⁷。

この政策によって寛政以降の関東地方の人口は依然として減少したわけでもなく、農村部の風俗と治安の悪化は一層進行していた。そこで幕府は在方の秩序回復のため、この時期に種々の風俗取締令を立て続けに発した。

一、近頃、無宿、物貰いども連れ立ち町々徘徊致し、見世先に立ちならひ、物を乞い、遣し方不足を申し、押しもらい致し、又は食物を乞い候者、あたえさる内は立ち去り申さず、かれこれ不埒の趣、相聞け候ふ。(寛政元年四月『天保御解書集成』六四五七)

一、近頃百姓ども寄り集まり賭事、賭的いたし候もこれ有り、不届きの仕業におよび候者これ有る。(寛政十年四月『牧民金鑑』)

一、俳諧点者の内、前句付、冠付け、褒美と名付け、博奕ヶましき儀致し候。(文化元年十一月『天保御解書集成』六四七二)

一、近来在方浪人ものなど留め置き、百姓ども武芸を学び、又は百姓同士集まり稽古いたし候も相聞き候。中間部屋にて高点三笠付けなど行ひ、農業を妨げ候はかりにもこれなく、身分をわすれ、気かさに成り行き候基に候。(文化二年五月『牧民金鑑』)

³⁶ 松平定信著・松平定光校訂『宇下人言・修業録』(岩波文庫、一九四二年)、一一八頁。

³⁷ 同上。

こうした御触れ書きによる風俗取締令が次々と出されている。まさに武陽隠士の憂うる百姓の耕作放棄と、俳諧興業、賭け俳諧、褒美賞品俳諧、芸事など博奕がましき俳諧の流行と俳諧点者の不心得を禁じている。武陽隠士中村敲石、あるいは葛飾隠士石井文龍などは当然こうした百姓らを里正として見すごしにはできなかったに違いない。武陽敲石は天明八年七月十三日に没している。敲石はいずれの書の叙や跋、自分の著書には「武蔵国藤原知足」や「胸刺国藤原知足」と識している。一方の石井文龍は葛飾派の別号宜春園を継いでいる。宜春園は素丸の別号で文龍は武州備後村（春日部市備後）に住し、俳諧、漢詩、ともに勝れ、字名を紀林と称し、詩文もよくした。医を業とし葛飾蕉門新方連会頭³⁸として武州、葛飾の門人を掌握し、葛飾の阿武に住んだこともあり、「阿武隠士」「葛飾隠士」と称した。こうしたことから武陽隠士は藤原氏中村知足か、葛飾隠士石井文龍のどちらかであることはほぼ確からしい。石井文龍は安永四年（一七七五）に関西旅行をし『西国順礼日記』を残している。文龍二十七歳の時であった。文政二年（一八一九）に七十四歳で没しているので、一茶はこの年五十七歳ということになり、一茶とは十五歳の年齢の差があった。言わば葛飾蕉門においては年長にあたるが、入門はほとんど同時であった。

一茶は文化三年（一八〇六）一月元旦に次の句を作る。

遊民遊民とかしこき人に叱られても今更せむすべなし。

又今年娑婆塞ぎぞよ草の家³⁹

小林一茶は「かしこき人に叱られ」といっている。ここでいう賢しこき人とは政治に関わりを持つ、身分高き為政者を指すことは間違いないであろう。遊民とは「不耕の民」のことである。荻生徂来は『政談』において町人の富驕を否定した。安藤昌益は『自然真営道』で直耕を主張し万人が農に従事することを説いた。河村瑞軒の『農家訓』には「春不

³⁸ 新方領は、現在の越谷市、春日部市全域の地域をいう。大房村、小林村、増森村、中島村、増林村、大吉村、向畑村、山崎村、大松村、大杉村、弥十郎村、大林村、大里村、上間久里村、下間久里村、船渡村、大泊村（現在の草加市の一部、越谷市）、大枝村、平方村、大場村、大畑村、中野村、備後村、薄谷村、東谷原村、西谷原村、粕壁宿（現在の春日部市）、一宿場二十六村が新方領となり、石井文龍は葛飾蕉門のこの地方の会頭を務めた。後には、八潮市、草加市、吉川町、越谷市、春日部市、岩槻区、杉戸町、宮代町、久喜市、栗橋市、幸手市など、現在の埼玉県東部全域の葛飾蕉門の会頭を務め、下総、安房の葛飾蕉門の巡村指導を一茶が務めていた。なお、上総、上野、下野まで石井文龍の支配下にあり、一大勢力を築いた。後に埼玉東部、千葉、茨城の葛飾派を率いて「葛飾隠士」と称した。

³⁹ 『一茶全集』二、三三一頁。

耕して腹に飽て食ひ、冬織ずして飭て被る者は、国の賊なり」⁴⁰といている。西川如見は『百姓囊』で「況富貴の遊民、耕さずして食ひ、織らずして着るともがら、衣食の奢を尽せる事、子孫の冥罰恐ざらんや」⁴¹と述べている。青木美智男は『一茶の時代』のなかで「一茶は生涯に渡って農民へのコンプレックスを持ち続けた」⁴²と記してその根拠をあげている。『農家訓』には、「論語に云、耕や飭曾其中にありといへり。春不耕夏耘則ば、秋の収、冬の貯不足にして、凍飢是より起り。或は袖を抓て道路の岐臥し、腕を持て人の門に佇、姦邪爰に生じ、或は垣を破壁を穿、悉く皆不農より不起と云事なし。是論書の誠なり。依之百姓は以て農業を骨髓に染て是を励べし。春不耕して腹に飽きて食ひ、冬織ずして飭て被る者は、国の賊なりといふ」⁴³とある。一茶は己の身を恥じていたのか、それとも自分の頑健さを誇ったものなのであろうか。次のように記している。

耕ずして喰ひ、織ずして着る休たらく、今まで罰のあたらぬもふしぎ也。

花の影寝まじ未来が恐しき⁴⁴

青木美智雄氏は、この一文と句を根拠とし、「一茶がこのように生産者農民から離脱してしまったことに対して自虐心を持つのは比較的早く三十代半ばである」⁴⁵と言い、「罪悪感にさいなまれる心境を持っているのも不耕の民であることへのコンプレックスである」と記している。またこうした意識を一茶が持ったのは「昌益や蟠桃の著作を購入し、著作に接した」⁴⁶と記し、一茶が『論語』や『管子』の「牧民」、『莊子』盗跖篇などから得た一文である、としている⁴⁷。『莊子』の「不耕而食、不織而衣」（盗跖篇）の一文を典拠としている前書であると述べている。また、「一茶は好奇心のかたまりのような人間であるから、このような教訓書を読んで影響されたのではないか。一茶は若き日から直接老荘を学んだ形跡をいくつか残している。それらを紹介しておこう」⁴⁸として、一茶の日記類を例証している。

⁴⁰ 日本教育文庫『農家訓』（同文館、一九一〇年）、一頁。

⁴¹ 『町人囊・百姓囊・長崎夜話草』（岩波文庫、一九四二年）、一八二頁。

⁴² 青木美智男『一茶の時代』（校倉書房、一九八八年）、一二六頁。

⁴³ 日本教育文庫『農家訓』、一頁。

⁴⁴ 「文政九・十年句帳写」、『一茶全集』四、五八〇頁。

⁴⁵ 青木美智男、前掲『一茶の時代』、一二七頁。

⁴⁶ 同上、一三〇頁。

⁴⁷ 同上、一三七～一四五頁。

⁴⁸ 同上、一四二頁。

○一茶発来信控『急通記』（文化三年一月、『政談』八冊購入とある）

『莊子』十冊、『詩経』八冊、大坂屋藤兵衛殿へ出す。（文化三年、一八〇六）

○八番日記

『老子』一冊帰返す。（文政二年、一八一五）

○姉妹 文虎ヨリ茄寸来、『莊子抄』十冊やる。（文政二年七月一日）

○莊子引用文「おらが春」

立よらば大木の下とて、大家には貧しき者の腰をかがめて、おもむきいふことはりになむ。爰の諏方宮に大きき牛をかくす栗の古木ありて、うち見たる所は、果ひとつもあらざりけるに、其下をゆききする人、日々とり得ざるはなかりけり。

（『莊子』人間世篇）

○木がらしや地びたに暮るる辻諷（文化元年十月）

「杜牧の詩篇『早行』の何時世路平」

『莊子』孔子の言「凡人心陰於山川難於知天」を下敷にした句。

このように青木氏は一茶を引用しながら、結語として、「一茶が述べた、耕ずして喰ひ、織ずして着る、という文章は管子の影響か、それとも莊子の影響かという点にある。一茶の読んだ莊子の影響を受けた文人の遊民に関する文章に接して受け止めたか、さもなくば直接莊子によったか、さらには当時流行していた、いわゆる田舎莊子などの談義本などによったかのいずれかであると考えられる」⁴⁹としている。

江戸時代の国是は「農は国の大本であり、工商はその末である」と定められていた。それ故に本業たる農を捨てて末業に走るは遊民である。江戸幕府が衰退に向かうのは、遊民の増大であり、文化文政期から嘉永期にかけて、このような棄農は本格的問題になり出していた。つまり農民層は田畑を手放し、自分の労働力を販売して得た収入で「錢遣い」「買い食い」する農民が増大した。また末業である商工が栄えて富裕層が輩出されていった。

羽生えて錢がとぶなりとしの暮（文化十五年）

証文が物をいふぞよとしの暮（文政六年）

⁴⁹ 同上、一四四頁。

一茶がこのように詠んだ時代になってしまった背景には、農民が江戸に流入し農業労働力の減少が深刻化したことだけではなく、その一部は無宿となり流浪し、都市に流入して工商の末業に加わる者から日傭、棒手振など、いわゆる「その日暮らし」の貧民層が滞留し、ついには非農民であるゆえに、工商までも遊民視するようになっていった。もちろん俳諧師も「高点付け興業点者俳人」も遊民に違いなかった。幕末に書かれた「村方人別帳書き方」を定めた『続地方落穂集』に遊民として扱うよう指示された職離れ、無宿となった者の扱いかい方がある。西川如見は『百姓囊』のなかで「工商人」らも「富貴の遊民」といっている。

○游民之分

盲人誰、浪人、職人誰、山伏誰、獵伏誰、無高寺社人、商賈誰、陰陽師、釜祓、瞽女、虚無僧、鉦打、行人、関守、山守、牢守、乞食、非人、俳諧師、比丘尼、役者、堂守、無縁、寺院、庵主、隠居、……。

これによれば、村落においては百姓以外の者をだいたいにおいて遊民として取り扱っていることになる。それと同じように『御触書天保集成』には「検地仕村々名主年寄へ申し渡可大概の事」として次のように記されている。

村ノ稼ニテ金銀ヲ作り出シ候分、駄賃運貸取候次第ヲ書付ク可事一（略、ここに村々で現金収入になる仕事類や売買できる果物の種類が二十二種類書かれている）一村借金員数、本百姓、水呑百姓、遊民の数、出作、入作年季売買の田畑、此外の儀承り届、困窮、又ハ助ケヲ知ル可ナリ。（『天保御触書集成』二四八四、四六六六番）

これによればほぼ農業に従事しない村落民全部、あるいはほとんどが「遊民」とみなされている。もちろんここにも俳諧師、ことに定住することなく弟子が住んでいる国々を宿泊し、渡り歩く「漂泊の連歌師、俳諧師」も無宿者となる。それ故に同門同期の小林一茶については葛飾派の石井文龍は「行脚一茶」と記し、『葛飾派歳旦帳』では「行乞一茶」「信濃一茶」と識し人別帳どおりに記したのである。一茶自身も「乞食一茶」「乞食首領一茶」「信濃乞食首領一茶」と臆面もなく記しているのである。一茶の同門同期の文龍、藍水、不干、法雨は皆、江戸葛飾派の総帥「其日庵」の別号「宜春園」「老茄園」の嗣号を得てい

るが、一茶だけは葛飾派からは一切、何も受けていない。のみならず、これら同門の者たちは、あまたの著述をなしておりながら、その書のなかに「小林一茶」との関わりを一行たりとも記していない。

米沢上杉家の侍講となった細井平洲はその著『嚶鳴館遺草』で「衣食、二ツ農桑ノカセギヲ本トス、農ハ百姓耕作ヲハゲミテ五穀ヲ作り出シ、桑ヲ植エ蚕ヲカツテ絹紬ヲ織り出すナリ」⁵⁰と述べている。遊民となり都市に流入し農を怠る者が出れば、幕藩制そのものがあぶなくなること、大月履斎⁵¹は「遊民は四民の所作をなさで、国土の米をくらひつづす者を云也」⁵²と酷評している。一茶と同門の武陽隠士中村敲石、葛飾隠士石井文龍のいずれかが記した『世事見聞録』には、「さてこの幣俗の起る濫觴は、抑々二百有余年以来、土民を虐げ商賈に施し、国民を損じて遊民を益し、兎角国民を憎んで町人遊民を愛する振合ひ故、前にゆふ如く、国民段々衰微に及び、町人遊民の道のみ、追々繁昌に及び、世上の人数過半町人遊民となりて、織らず耕さず勤めずして、莫大な米穀諸産を費して、ほしいままに遊食する事になれり」⁵³と記している。ここには武蔵国草加より春日部まで開発し、武州谷原⁵⁴に居を構える中村知足がここの里正として幕府に対しての怒り、その政策である「農は国の大本」の綻びを農民にばかり押し付け、その結果幕府の屋台骨が腐り幕藩体制が揺らいでいることに筆誅を加えていることが知られる。徳川の治世は商人優遇策に傾き、農民に重い年貢を課した結果、町人、遊民が繁栄し、その上食糧事情を悪化させているという世情を批判するために「織らず耕さず」という言葉を逆説として使っている。農業を離脱した食糧購入者を遊民とみなし、それを幕府が優待視していると比喻し、暗に政策批判をする表現として使っているのである。俳諧師は農政学者の指摘する遊民そのものであり、一茶はそういう意味では国家の大罪人なのである。

一茶は、若いときより、世事のこと、見聞きした事、話しとして聞いたこと、自分の体験、あらゆることを、日記類や覚え書きに書き記している。勿論これは行脚俳諧師、漂泊

⁵⁰ 『嚶鳴館遺草』巻四、「管子牧民国字解」（平洲記念館公開資料）。

⁵¹ 江戸の中期頃の儒者。延宝二年（一六七七）江戸に生まれる。浅見綱斎に学び、後に伊予松山藩に仕える。経済に詳しく、農本主義を説き、著作に『燕居偶筆』などがある。享保十九年（一七三四）六十一歳で死去。

⁵² 青木美智男、前掲『一茶の時代』、一四九頁から再引用。

⁵³ 『世事見聞録』、四一九頁。

⁵⁴ 埼玉県東部を流れる元荒川、綾瀬川と古利根川にある湿地帯を中村氏が幕府に願い出て、代々に渡って開拓をしてきた。現在の春日部市から草加市に至るまでの広大な田となっている。谷原村は現在は春日部市。蓮田、岩槻台地から比企丘陵の伸びる、さいたま市との間の田は「見沼たんぼ」と称し、大宮区、浦和区、川口市まで続いていた見沼を吉宗が命じて埋め立てた耕地である。

俳諧師として生きる「ネタ本」でもある。こうしためずらしいことを記して話しの種とし、俳席を沸かし、運座はこびを円滑ならしめたことであろう。誇張や眉唾ごときものもあるが、よく読み込むと、世間の出来事を書き記した事項は、松平定信の寛政の改革、水野忠邦の享保の改革で出された「禁制」に触れた事件ばかりである。寛政御触書集成、天保御触書集成のご禁制とすべて一致する事項が記されている。ただのメモ魔であったわけではないのである。幾つかそれを示しておこう。

文化元年（一八〇四）十一月二十六日に鎌倉円覚寺の僧が女犯の罪によって日本橋に首から下を埋められ、晒し首になっているのを見た文章である。

玉の盃そこなきがごと、といへど色好むは人性にして、好まざるは獲麟よりも稀也。
あるは染どのの姫を思ひ、又は物洗ふ女に迷う。やごとなき僧上、雲に住山人すら、
此一筋は踏とめがたくやありけん。僧教導は仏道のいさほしも九五近き身の、戒を破
りし罪となん。巷に面をさらさるゝ、よ所目さへいとほしく、にがにがしくぞ侍る。
雪汁のかかる地びたに和尚顔⁵⁵

僧侶の好色は御触書のなかでも厳しくとがめられており、日本橋の橋詰めに三日間晒した上、本山に引き渡して寺法により僧籍剥脱のうえ追放と定められていた。次に武陽隠士が『世事見聞録』に記した事件と同様のことを一茶も記している。相当数ある中から二例だけを記す。文化七年（一八一〇）三月五日の記事である。

此夜東叡山広小路にて中間体の者に乞食僧二人同じ所に殺さる。切人は逃うせぬとぞ。
同日昼白刃を提て「盗人やらじ」と走る人有。中橋にて虜るといふ。同夜酉刻ごろ本
所緑町一丁目升屋といふ酒店にて徒党して主の首より血を出しぬ。又昼へ尿しかけて
さわぎぬ。同日寅刻ばかり緑町一丁目白髪蕎麦の箱かつぎの男相生町五丁目大瀬屋と
いふ八百屋の家の上に寝てありけるを人々見咎、夜盗也とたたき伏せたるに、男「ぬ
す人に非ず。此家の娘に深くちぎりとかくのごとし」といふ。娘は「さらに知らぬ事」
と云ふ。男いましめの縄にかかりて獄屋に入る。けふに限りてかかる事変の重りぬる
は世にいふ悪日てりたるならん⁵⁶。

⁵⁵ 『一茶全集』二、二六一頁。

⁵⁶ 『一茶全集』三、三十七頁。

このような世事における御触書に抵触するうな事件が次々に記されている。一茶はこのような事件を書きとめて、俳諧師としての座興話しとするだけとは思えないほどの記入事である。恐らく『世事見聞録』を読み、武陽隠士の述べる出来事は江戸のみに限られず関東全域に及んでいるということを記すことを目的としたか、あるいは同門の武陽隠士中村知足、葛飾隠士石井文龍の著述に一茶も列するべく、その材を求めたのであろう。文化七年五月二十日の記事は少々長いが記しておこう。

奕を常の産として世渡る者八人、鹿嶋屋三五右衛門にやどりを定、よりより出て、町の木陰道のかたはら、蔭一枚の陣をかまへ、ゆききの旅客を泣かせしとかや。ある日長吏北右衛門といふ者見とがめけるを、さまざま打擲して追もどしぬ。長吏などかは等閑にすべき。界限の穢多者ばかり手毎に六尺棒を提つつけふ已刻ばかり、柏原の出口出口を屏風立てたらんやうにして待かけたり。さすがの曲者ども鳥にあらざれば逃るべき術もなく、ここを最後と思ひけん。おのおの刃ぬきかざして、しばしが程たたかひけるが、たのむ刃も打落されて鷹に迫る鳥のやうに山を越えて逃るも有、藪に添て隠るもあり。こなたは得たりと目を皿にしてはせ廻り、終に三人縄をかけたり。忽野分の迹のごとくしづまりて古間里宮の下なる榎、杉に一人づつ木高く縛り上て、木石をなぶるに等しく鉄尺振て責たたく。血は流れて草を染め、声は枯て狙におなじく長吏は酒をすすりすすり笑ののしりて祝ふ。是過し日会稽の垢を洗ふと見へたる⁵⁷。

これは博奕うちの八人集団の補縛の有り様を記したものである。博奕の問題は江戸の前期から顕在していたが、これほどに無宿の者が凶暴化して行ったのは博徒の暴力集団化、悪党化の激増にあり、江戸時代も十九世紀になってからであった。博徒の暴力化、集団化によって引き起される犯罪は喧嘩口論、不義密通、博奕、三笠付、勝負事、夜盗、追剥、人殺、火付、窃盗、強盗、殺人などである。天明八年正月から幕府は博奕に対する禁令を出して⁵⁸、文化十三年までに禁令発行は二十回に及んでいる。

⁵⁷ 同上、六十二頁。

⁵⁸ 「博奕賭之諸勝負、前以御法度ニ候処、近年一統ニ相ゆるミ、博奕賭之諸勝負之儀、色々名目を付候て、武士屋敷寺社又は茶屋并辻等ニおゐて、右体不埒之儀致し候趣相聞候、以来右体之儀有之候ハバ、急度可申付候、尤吟味糺之上ハ、掛り合之先々迄も、無用捨相糺、仕置可申付候、尤右体

幕府はこれらの者を捕縛するのに、長吏、穢多の身分の者を用いた。互いに反目させ、憎しみあわせて博徒達に対する非道な扱い、惨い仕打が繰り返され、「是過し日会稽の垢を洗ふと見へたり」という記述さえある。一茶は常に乞食、賤民に対して暖かい目を寄せている。同じ文化七年五月二十八日には松井田宿での捕縛のことを記している。

鈴木新七なる者即死、右鬢先より頬へかけて一尺程切疵、右脇の下より九寸程切疵、同断横へ二寸程度切疵、右脇の下より腕へかけて一尺三寸程切疵、右の足股より膝へかけて一尺程度切疵、同方腕堅五寸程切疵同方横三寸程切疵、右の脊より腕へかけて一尺ほど切疵、しめて九ヶ所。次に即死取次羽山甚介四十二歳、右の腕より大骨かけて半切込疵一略一しめて六ヶ所、此末十人ありといへどおそろしければやみぬ⁵⁹。

俳諧行脚僧、漂泊俳諧師、無宿俳諧師一茶としては居ても立ってもいられなかったことであろう。捕縛の対象者には、三笠付興業俳諧、富籤俳諧、紋付勝負師なども入っている。まかり間違えば一茶も巻き込まれたに違いない。それほど地方宿場にも溢れ者が徘徊していたのであった。

第二節 芭蕉の遺品遺墨・一茶と武陽隠士

一茶は、この他に文化七年（一八二四）七月十三日には、木更津の川島屋という旅人宿を巢窟としていた盗賊の捕縛を目撃し、「いにしへは、梁山伯、又は鈴鹿山など人通らぬ堺に入りて荒熊と穴を同じく住ひ、仏法僧を友とするたぐひ昔咄に聞侍る。今はかかる市中に交をむすぶにや」⁶⁰と記している。十一月九日には伊勢屋久四郎という男が四百八十両を盗んで逃亡したが十一日に捕縛されたとある⁶¹。文化十年十月十三日には善光寺の代官今井磯右衛門⁶²が免職になるという事件を記し⁶³、十三日にはついに町内の細民が蜂起して

不埒之もの有之候ハバ、密ニ奉公所え可訴出候、急度御褒美可被下候、同類之内たりとも、訴出、自分旧悪をも相改におゐてハ、是又御褒美可被下候」（『御触書天保集成』六四五九）

⁵⁹ 同上、六十四頁。

⁶⁰ 同上、二十五頁。

⁶¹ 同上、九十六頁。

⁶² 今井磯右衛門は、宝暦元年（一七五一）生まれ。名を成章といい、善光寺大勧進の代官で代々善光寺の民政を担当していた。俳諧を大島蓼太に学んだ。寛政六年に俳諧『水薦苺』を刊行。俳号を

穀屋を二十三軒襲うという事件が起こった。下層民の蜂起で農民一揆とは性質が異っていた。そのため一茶は「此の夜善光寺にて夜盗起り、手に手に鎗、山刀などもちて富家を破りて物とりひしめき立ち、火など放ちければ、すはやとばかり人々町々をかためけるが」⁶⁴と記している。

文政四年（一八二一）正月に「山中の怪」という文章がある。これも窃盗団によって荷を奪われた話である。少々長いのでさわりだけを記す。

人目も草も枯れ果てたる山里ながら、流石往還のしるしに、年とり用意の肴荷、三越より送る二十駄三十駄、日々通らぬ日もなく、しばらく淋しからざるに似たり。然るに怪しかる幻術ものありて、其鰯荷の石になりてあるものまれまれあるに、是はと荷主驚くのみ。いつこの誰共知らぬ、雪の礫打つべき目当あらざれば、世渡る鳥の旅商ひ、泣寝入にして仕舞ひぬ。これ藻に住む虫の我からと名のらぬ盗にしあれば、速やかに縄目の恥はさらさずとも、天のとがめなからましかは……⁶⁵。

この後段では馬も人も即死したこと、また神の山に棲息していた博奕打ちが節分の日に雪に巻かれて死亡したこと、博徒の女が狼に喰はれて死亡した事を「身の毛豎てそぞろ寒き」と記している⁶⁶。一茶はこうした状況を詳しく記し、『論語』の一節を念頭に、「女子と小人はやしなひがたし遠ざくれば妬み、近づくれば不孫」と断じている⁶⁷。かの武陽隠士も、江戸近郊の百姓の悴の状況について酷評をしている。希有に律儀に仕事をしている悴達を博奕打は様々な手をもって欺き誑かして誘ひ出し奢りの道へ引き入れ不埒者にしてゆく。自然と身の堪へがたき状況にし、借錢をつくらせ、父祖より伝わる田畑を親に隠して質入れし、心なく売り払ひ両親始め家族等へ難儀を負わしていると評している。『世事見

柳荘と言った。江戸の夏目成美を通して知り合となる。地方有力者の門弟にすることも業俳としては手腕に入る。柳荘の子が代官職を免職になったのが文化十年であった。善光寺の門前には「乞食」が多くいた。貧者や飢饉時で乞食になった者、非人の身分の者らが救済を求めて善光寺如来にすがろうとして列をなしていた。一茶も「乞食子や膝の上まで今朝の霜」と詠んでいる。また大阪四天王寺と同じように善光寺にも身体不自由な者、病気の治療などを願って眼病などの者が集まっていた。「陽炎や手に下駄はいて善光寺」とも詠んでいる。今井がこれらを排除しようとして細民が蜂起したのであった。

⁶³ 『一茶全集』三、九十七頁。

⁶⁴ 同上、二六五頁。

⁶⁵ 『一茶全集』五、一三八頁。

⁶⁶ 同上、一三九頁。

⁶⁷ 同上。

聞録』にはそうした状況を次のように評している。

かくの如く行状崩れては、再び質朴なる百姓には復しかね、多くはいやましに身持を破り、博奕を業とし、人のものを犯し奪ふの悪心盛んになり、いはゆる悪党となり、喧嘩口論を仕懸け、弱きものをいぢめ、または人の悪事の隠れ居るを見込みてゆすりとりを覚え、律儀なる親の側を藪陶しき事に思ひ、親を養ふべき身の大切をも忘れ、果ては家出いたし、他所へ徘徊などし、あるいは人の妻を盗み人の娘に不義を仕懸け、あるいは不埒不道なるは強淫を犯し、そのみならず夫婦の約束いたしたるなどと偽りを申し懸け、娘の親元へ居り込みては無体に貰ひかけ、または荷担人を拵へて理不尽に奪ひ取り、または内済取扱金、手切金などを以て離れ遣はし、あるいは元へ返し遣はすを心外に存じて、他家へ嫁入りの障りになるべきやうに疵を付けて帰し、または誘ひ出して他所へ立ち退き、あるいは売りものに致し、そのほか種々の悪事を巧み、老いゆく親を捨て在所を離れ浪人無宿などとなり、その上は己が身の賤しき事を打ち忘れ、あるいは貴人高位も恐れず、大胆不敵のものとなり、博奕そのほか押売り、押買ひ、押借りなど致し、または無銭にて売女屋に泊まり、また飲食をほしいままにして代金を払はず、あるいは催促に逢へば喧嘩を仕懸け、またはわざと打擲に逢ひて身体叶はずなど偽りを申し懸けてこれまた取扱金を取り種々気儘なる世渡りを致すなり。すなはち当世粹法長脇差、または通りもの蕩楽もの、無宿悪党などいへる頬首なる盜賊、火付け、追剥、人殺しも多くこれらより起るなり⁶⁸。

仮に、武蔵国東武谷原村を開村した里正の藤原氏中村知足が武陽隠士だとしたら、こうした百姓が田畑を手離し、博徒になったり、盗人になったりする姿を見てはいられなかったのであろう。石井文龍も武州大畑村を切り開いた里正である。一茶とは同門同期であるが、文龍は医業を主とし、名主として大畑村政を預る身であつたので当然こうした百姓の倅が農を捨てる姿は骨身にこたえたことであろう。一茶の家が農を営み、柏原の中農から上農となり、一茶が出郷して帰村するまでの間にほぼ倍の田畑を有するようになるのも「質地流出」の田畑を父弥五兵衛が買い取っていたからであり、この田畑を折半できたのも持ち高が上昇して折半相続が可能であつたためでもある。一茶は『世事見聞録』を読んでゐた。石井文龍が葛飾隠士を名乗っているところから、当然のことながら同じ東部に住した

⁶⁸ 『世事見聞録』、八十五頁。

中村知足「藤敲石」に間違いはない。

天保三年刊の『続俳家奇人談』に越谷吾山と中村敲石の逸話がある。中村敲石は江戸の越谷吾山師竹庵にいつも招かれていた。「吾山上座に請じて父兄のごとし。門人悦ばずして曰く、世人音物をもたらし先生をうやまふ。この老夫させる事なきに、いかでさはもてなすらむ」⁶⁹と不満を漏らしたのは、後の滝沢馬琴であった。馬琴は『罔両談』のなかで、越谷吾山の『朱紫』に誤ちがあることを記し、これを刊行する際に訂さなかったのは知足の責任だと非難している。武陽隠士は天明八年（一七八八）に没しているが、その六十年後の嘉永二年（一八四九）に武蔵国粕壁で大事件が起っている。まさに武陽敲石隠士の恐れた暴行事件、博徒集団の暴挙で、「乱妨者、破家戸者集団」である。その顛末は『春日部市史・近世史料編Ⅱ』に詳しく載せられている。以下、そのあらすじを紹介する。

嘉永二年九月半端、江戸から下野国の宇都宮に向かう日光道中の各宿駅に、中山道の熊谷宿で悪事をはたらいた乱暴者十数人の手配人相書が廻達された。乱暴者達は前月二十五日に中山道熊谷宿で乱暴に及んだ後、甲州鯉沢の大野村で博徒の目徳を殺害し、同女房にも数カ所の手傷を負わせ、近くから乗船して舟で逃亡をはかった。その後、舟で駿河国の岩渕付近まで乗り下り、上陸すると同国吉原宿の宿場、一本松の質屋源内宅に押し入り、金三十両と銭六貫文を強奪して逃亡した。その後由井宿の浜で再度乗船し、駿河国の海岸沿いを移動しながら処々で乱暴行為をはたらいた。久能山付近で仲間割れができて、川越無宿の松山万吉が危うく殺されそうになったが、海に飛び込んで辛くも一命をとりとめた。手配書には乱暴者の数は十四名、そのうち九人は無宿、一人は浪人、残る四人は在所が一応記されていて「百姓、または百姓倅」となっている。その筆頭首謀者は「武州石原村無宿」の幸次郎となっている。年齢は三十歳前後、粕壁宿で捕縛された。この乱暴者と同一集団らしき一団が同じ年の十二月に捕縛され池田播磨守掛りで吟味された。首謀者のひとりが「石原村無宿幸次郎」で、無宿の身分にて長脇差を帯し、多数で徒党を結び、博奕を渡世同様に心得立ち廻り、筒取り、貸し取りも致し、あまつさえ鎗、もちり、等を携え押し歩行のし放題、と記されている。さらに、これに続くのが「喜久川の佐文之助」で、身分や住所はあいまいで歳は三十四、五歳。髪を大いちょうに極大きく、大小差し、相撲取りか、浪人の風体をしていたと記されている。次は「甲州無宿寅五郎」で二十七、八歳。大小を差し半筒を持っていた。鉄砲武器携帯のいでたちであった。もう一人、紀州浪人で年齢は十七、八歳ながら仲間から「小先生」と揶揄されていた。甲州で殺害した喧嘩の相

⁶⁹ 前掲『俳家奇人談・続俳家奇人談』、二七三頁。

手は土地の博徒であり、集団の基本的性格はまさに無宿、博徒そのものであり、これが「無宿を基本とする無頼の悪党集団」の真の姿なのであった⁷⁰。小林一茶没後二十三年後の出来事であった。

『世事見聞録』が開板されたのは文化十三年である。一茶は五十三歳の文化十二年十二月二十八日に柏原に帰住した。その後も文化十四年七月四日まで江戸と柏原を何度も往復している。後に一茶の最大の支援者・理解者となる夏目成美が文化十三年（一八一七）十一月十九日に没した時は下総布川にをり、その後に成美の追悼句会に加わっている。この年はほとんど柏原には不在であった。葛飾蕉門に隠然たる力を持っていた石井文龍が、吾山も師と仰ぐ中村敲石が書いた書を出版することを知っていたので、今日まで敲石、文龍、不干、藍水、法雨という同期の人間が其日庵の別号、宜春園、老茄園を継嗣しているのである。石井文龍は一茶が不耕の民であることを知っており、幕法に触れないよう、一茶との関係に言及した章文は見当らない。つまり一茶はすでに葛飾蕉門の人物として扱われておらず、故郷の柏原に帰らざるを得ない状況に置かれていたのである。

小林一茶の武州における足跡は何もない。葛飾蕉門は隅田川から東の深川両国近辺、武蔵埼玉郡、葛飾郡、下総、上総、安房の範囲を勢力下に置いていた。一茶はほとんどの下総を廻村している。流山、松戸まで来ているのであるから、江戸川を渡れば吉川、三郷、越谷、草加である。しかし一茶は一度も江戸川を渡っていない。吉川松伏には老茄園三世紺屋藍水がいた。越谷には師竹庵古鳩庵吾山がいた。粕壁には中村敲石が、草加粕壁には宜春園二世文龍がいる。内牧杉戸には老茄園四世不干がいた。同門の先輩や同期、後輩らが武蔵埼玉郡、葛飾郡を掌握してしまっていたのである。

一茶は寛政三年（一七九一）四月十八日、二十九歳の時、十四歳で江戸に出てから十四年ぶりに郷里柏原に帰村した。江戸を出立したのが十日の日であったが、帰途熊谷から東方村を経て利根川を越えようとした時に日が暮れてしまった。そこでとある百姓家に一泊を乞うと老婆が一人で住んでいた。老婆が一人息子を亡くしたことを嘆き訴えたので念仏を唱えながら位牌を見ると、その息子は俗名を弥太郎といい一茶と同年同月生まれで驚いた。「旅を栖となす身なれば、千家万屋、人情は様々かはれど、かくふしぎなる夜には逢はざりき。只茫然として酔へるがごとく、もし又我亡人となりしか」⁷¹と記している。俳諧遊行僧や無宿者が銭を持たずに世を渡るには、最後の手段として乞食、物貰い、寺泊、乞

⁷⁰ 春日部市教育委員会『春日部市史第三巻・近世史料編Ⅱ』（一九八〇年）、三〇四～七頁。

⁷¹ 『一茶全集』五、十八～二十頁。

宿の行為が許されていた。食べるに窮した無宿が窮余の一策として物乞い、袖乞いの行為を行うことはしばしば記録に記されている。一茶も物乞いをした。乞宿もした。そうした記述も残している。物乞い、袖乞いを生業として行うことは非人の特権であり、賤民組織の支配下にある者の行為であった。幕法でもそうした行為を認めている。

天災、飢饉に際し、野非人や無宿が大量発生し、物乞い、袖乞いを行う者が急増することは、賤民組織との摩擦を引き起こし、非人制道⁷²の対象とされた。江戸時代は窮民が取りすぎる最後の物乞い、袖乞いの手段さえも身分制度のなかに取り込み、非人の特権とすることで、野非人や無宿の身分制のなかに吸収し再編成することを指向していた。幕府にとっても浮浪や窃盗に走るよりも、物乞いの類の方が餓えを凌ぐための最後の手段と認める方がはるかにましであった。物乞いは無宿にとっていざという時に生きがのための残された正当な手段であったのだ。江戸には願人坊主が経営する木賃宿がいくつもあって、定住する場を持たぬ日傭稼ぎの下層民の宿泊施設ともなっていた。一茶も愛宕神社（現在の江東区大島）の物置き小屋に住したこともあった。願人坊主のなかはみずからも街頭に立って芸をする大道芸人として日を送りながら、自宅を木賃宿として貸し与えるなどして稼ぎをしている者もいた。その日暮らしをしながら、無宿、帳抜けをして雑業をする者の寝床に提供している者もいた。

寛政以降の関東地方では人口が減少し停滞農収となる傾向が益々強まり、農村部の風俗と治安は一層悪化するばかりであった。一茶は出郷後も宗門帳に弥五兵衛（父）の子として記載され、父の死後も弟の専六が弥兵衛となり一茶は弥太郎のまま記帳されている。文化五年に弟の専六と賤産分けをして以来、翌年から「明専寺旦那弥太郎四十七、一人男」として宗門帳に改められ「已より別家兄弥太郎」となっていることから専六が届け出たのであろう。先述のとおり、一茶が出郷以来「帳抜け」として人別帳から抹消されなか

⁷² 元和二年（一六二五）に幕府は「農村取締令」を出し、「公家諸法度」「武家諸法度」「僧籍諸出世法度」などを出して、身分制の確立を図った。寛永九年（一六三二）には、「旗本諸法度」を、十二年には「第三次鎖国令」を出し、「参勤交代制」を確立した。十四年には「五人組制度」を出し、正保三年（一六四六）には「農村訴訟規則令」を出す。寛文七年（一六六七）には金剛太夫の勧進能で金剛座方と弾左衛門が対立したことにより、幕府は弾左衛門の興業特権を認め、身分制を確立する。僧侶には「寺院法度」を制定し、翌寛文八年（一六六八）に幕府は全国で総検地を実施し、以後領主の交代時には必ず検地を行い、「人別帳」の毎年の作製を義務づけることにした。斗量制度を定め、年貢量を確定し、延宝元年（一六七三）には「田畑分割相続制限」「分地制限令」を制定した。延宝五年（一六七七）には幕府は三日目の全国総検地を実施（延宝検地）した。これによって全国の領地が確定し、身分制度も確立した。なお、宗門改役を設け、「宗門改帳」を作製するようになったのは寛永十六年（一六三九）であった。「宗門改帳」が実施的に当時の戸籍簿であった。

ったのは父弥五兵衛の愛情と分別によるものである⁷³。専六も後妻はつもそれほどの悪人ではない。一茶が「仙（＝専）六むずかる時は、わざとなんあやしめのごとく父母にうたがはれ、杖のうき目に当てらるる事、日に百度、月に八千度、一とせ三百五十九日、目のはれざる日もなかりし」⁷⁴と罵っているような悪人ではなかった。というのも、一茶出郷後に明専寺人別帳から抹消してしまえばよかったからである。父の弥五兵衛は一茶の名を抹消することを許さず、弟の弥兵衛も一茶をひそかに思い、出郷後も人別帳に一茶を「兄弥太郎二十六」「兄弥太郎四十三」と記した。一茶誕生の宝暦十三年には田畑六石であったものが一茶帰郷時には田畑九石余りに増えていた。父弥五兵衛は出郷後も一茶の身分を確保し、無宿者、帳抜人にならぬよう意を用い、当時の幕法に従って田畑を増やし、分家ができるように「田畑十石」にするよう精励し村内十四位の大高持にしておき、弟の専六もこれに反対しなかったのである。『父の終焉日記』にこう記している。

我亡後にしもならば、いかで彼等に敵しがたからん。日々夜々修羅のくるしみにたへざらめ。其時、汝又我遺言もかへり見ず。他国せんは、鏡の形をうつすよりも明か也。生きとし生けるものの病難死苦はのがれがたし。汝足なえこしがまりて、古郷に戻りたらんは、家のうからやからは、さみつる事よと、犬猫よりも浅ましく下墨ののしられん、くやしくあらん、と涙はらはらと落し給ふ⁷⁵。

父弥五兵衛は一茶に向かつていずれは名を成して帰り、柏原に定住せよ、そのために財産を増してあるから「田畑遺産分けをせよ」と遺言を残したのであった。享和元年、一茶三十九歳の夏に父の死を看取った日記であるが、緻密な構成で内容も一茶の生涯事にほぼ忠実に記され、しかも名文であるところから、父の没後相当の時日を要し執筆されたものと見られている。帰郷後に新戸籍を作り分家した者として扱かれているので、戸籍上一茶は無宿人、帳抜人ではなかった。これが三十六年間の無住漂泊の旅を安全たらしめた所以である。通行手形も出してもらえ、身分保障もしてもらえたのであった。

通行手形の発行、身分の保障は極めて大事であった。領主の領国経営には「人別帳」による人別改めは年貢の徴収に関わるものであるから、名主・組頭・百姓代らは常に厳しく

⁷³ 小林計一郎『一茶その生涯と文学』（信濃毎日新聞社、二〇〇二年）、五十七～七十六頁。

⁷⁴ 『一茶全集』五、八十六頁。

⁷⁵ 同上、八十七頁。

これを把握していたのである。無宿や悪党になり犯罪を犯し捕縛されれば、必ず生まれ在
所が問われた。そこで親族、村役人が江戸まで呼び出された。このことは「親の首に縄を
かける」といって、物心両面で庶民には大きな負担となったため、そうならないように庶
民はよくよく気を付けたのであった。

一茶は文化五年十一月二十四日に財産分けの協議が成立し、専六弥兵衛、一茶弥太郎を
立会人として、本家の弥市の連名で村役人に「取極一札之事」を提出し、親の遺言文書に
押印している。ここに一茶の用心深さと、抜かりなさが表れている。しかし文化十年に
帰郷すると、「取極一札之事」として村役所に提出した通りではなく、すべてが弟弥兵衛の
財産として登録されていた。一茶は、この文書写しを取り出したが、この一札は名主嘉左
衛門の筆で書かれており、名主に預かりとなってしまった。一茶は「柱ともたれしなぬし
嘉左衛門といふ人にあが仏の書一紙、いつはりとられしものから」⁷⁶と憤慨し、父弥五兵
衛の遺書を有力な証拠物件として、江戸評定所に提出すると脅かして強引に調停に持ち込
み、文化十年一月二十六日に明専寺住職の調停で仙六と和解し、「熟談書付之事」を取りか
わした。こうして一茶の農民としての身分と財産が確立した。しかし一茶は、耕作は小作
人にまかせ、弟仙六からこれまでの家財田畑使用料として、金三十両を要求して取り上げ
た金十一両二分を母の実家二之倉の宮沢徳左衛門に預けた。翌年は村役に「役金免除願
を「困窮と病氣中風」を理由に提出し認められている。これが、江戸に永いこと流入して
得たところの幕法用いる悪智恵であった。

武陽隠士は、そのような悪事に近き行為を次のように描いている。

国々無宿悪党の徘徊出来安きゆえ、その生所を去る事を厭わず、親の勘当も恐れず、
村払い、領分構い、追放等に逢いても、身の末を悔やまず、かえって幸いとなし、ま
た無宿悪党などいえる名を取り、人の怖じ懼れて通すこと故、世間広く縦横自在なり、
もしまた獄屋に入ればなお強気になり、入墨などからだに印が付けば悪党の位が上が
り、人を殺せばまた一段昇りて世渡りの鏡競いとなり⁷⁷。

このように無宿、帳抜け悪党も入墨の仕置きなどまったく恐れなくなっていたのであつ
た。幕府も関東取締出役を置いて博徒や乱妨者の取り締りを強化しており、そのなかには

⁷⁶ 『一茶全集』五、一二四頁。

⁷⁷ 『世事見聞録』、八十八頁。

俳諧師も含まれていた。「俳諧点者の内、前句付、冠付け、褒美付け、などと名付け、博奕かましき儀致間敷候」という触書⁷⁸を出したのはそのためである。

それでは一茶はどのように俳諧指導をしたのであろう。葛飾派の宗匠其日庵は代々江戸城書院番⁷⁹を務めた幕府の役人が継承した名跡であった。在方の連会頭も里正、庄屋、名主達で、其日庵は、いわば高級官僚が継承した。在方会頭は其日庵の別号宜春園、老茄園を嗣号した。一茶は一度は葛飾派に所属したものの、とどのつまりは江戸無宿者である。葛飾派では正統な継承者などになれるはずがなかった。

ではなぜ、一茶はそうした有力俳人たちを尻目に今日において、芭蕉、蕪村、一茶という近世を代表する三大俳人として名を残しているのであろう。そのひとつに、父の配慮があった。父弥五兵衛は持高を増やし、母の実家は二之倉村の名主を務めた。父は一茶の出自を飾ってやることに心魂を傾けたのであった。もうひとつは、一茶が早くに葛飾派を離れ多派の有力俳人と交流を持ったからである。そのなかには、有力な庇護者夏目成美や学者の亀田鷗齋、滝耕春などがいた。さらには、下総房州の田舎渡らいを保障する富津の名主織本嘉右衛門の妻花嬌、松平樂翁定信の陣医で、名主の安房千倉の名医井上良珉杉長、千葉流山の秋元双樹、馬橋の立砂、斗囷、そして布川の月船などみな一茶の有力な庇護者であった。上総竜ヶ崎の鶴老、土浦の近江屋生五右衛門らもいたが、在方のなかでの特別な庇護者らは常陸湖来の本間家の当主らであった。

けふといふけふ、久しくねがひける本間の家を訪ひて、ばせを翁の書のかずかずに目を覚しけるが、其外に又手にふれ給ひし一品有。

したはしやむかししのぶの翁枕

文化十四年五月二十二日也けり。

しなのの一茶（花押）⁸⁰

本間家の祖はもと本間資勝といい、大垣藩士であったが、二男資道は致仕して医師となり、江戸で開業した後に、延宝十年湖来に隠棲して白準と号し医を業とした。芭蕉は貞享

⁷⁸ 文化元年十一月『御触書天保集成』六四七二。

⁷⁹ 慶長十年（一六〇五）、秀忠が将軍に任じられ、家康が大御所となると、幕府はその諮問機関として「書院番」を置いた。ここから後に老中に昇格する者が多く出た重職であった。番氏と呼ばれていた。

⁸⁰ 『一茶全集』五、一三五頁。

四年（一六八七）八月、鹿島に月見に赴いた帰途、この家に宿泊をした。時の主人は本間道悦で俳号を松江と言った。白準と道悦とは同一人物との説もあるが、真偽は不明である。同家にはその折芭蕉が使用したという「翁椀」という椀が伝来している。それを「しのぶの椀」というのは、椀にしのぶ草の金蒔絵があったということで「偲ぶ」をかけて一茶は一句を詠んだのであった。夏目成美の『随斎諧話』にも「常陸国小川里正松江が家に芭蕉留錫のころ常に食をすすめたる古五器二具あり」⁸¹と書かれている。また一茶は「五月二十四日、本間松江宅に入る」「二十五日、馬にて送らるゝ」と記している⁸²。一茶は房総方面に有力庇護者を持っており、漂泊無宿の俳諧師であったが、このような有力在地の人々の信用を得ていたので廻村も容易にできたのであった。

それではなぜ、一茶は武蔵東部、武蔵葛飾を廻村しなかったのであろう。中村敲石家にも芭蕉の真蹟がある。かつて志田義秀氏は、芭蕉の「紅梅や見ぬ恋つくる玉簾」という「紅梅」の句を挙げて、「この句は確実な俳諧集には所見がなく、芭蕉の嵐雪宛書簡・季吟宛書簡・松風宛書簡の三通に見えているもので、この三通の書簡は疑問のもの（偽作）である」という⁸³。志多氏はまたその他に、越谷吾山が師として仰ぐ匍匐庵敲石の『賦物或問』のなかに前書きを持つこの紅梅の句が真蹟で白字摺で掲げられているという⁸⁴。それ以来、この書の真偽論争は決着を見ないまま、今日まで中村家に伝わっている。この真蹟を根拠として、芭蕉は元禄四年正月末頃京都にいたと推定しているのである。志田氏の見解は次のようなものである。

然るに匍匐庵敲石（号知足、中村氏、越谷吾山の親友、武州谷原の人）の「賦物或問」（安永四年成）のなかに、芭蕉の真蹟（白字摺）が掲げられていて、それは前書きを持つ「紅梅」の句の真蹟で次の如きものである。

此はむつきのすへ御所のうちを通りて、折ふし春雨のそほふりて、
御殿御展の紅梅今をさかりと見え、音楽聞え、誠に極楽は爰ならん
哉と、いとど心もほれほれと有かたき泪をこほし通りけるとて
紅梅や見ぬ恋作る玉すたれ 桃青

これは筆蹟から見て私には疑ないものと思はれるが、敲石は自跋に

⁸¹ 古俳書文庫十一『随斎諧話』（天青堂、一九二五年）、六十八頁。

⁸² 『一茶全集』三、四八〇頁。

⁸³ 志多義秀「芭蕉の問題俳句」、『芭蕉展望』（日本評論社版、一九四六年）、一九四頁。

⁸⁴ 同上、一九五頁。

客歳甲午之秋、紀陽草上人飛錫東海、途過草蘆信宿如故。語曰、我有蕉翁之真蹟。昔日於京師井筒屋、書蘆之号又桃青誼故者、所得也。藏之久矣。臨別搜笈中與于余示片心、今也模出于此、請諸君鑒覽焉⁸⁵。

その後、この『賦物或門』は発見され、現在は埼玉県春日部市の春日部郷土資料館に保管されている。

小林一茶が日記類に書き残した日常の行動や見聞は、江戸末期の政情や世情に敏感であった一茶の性格を表わすと共に、こうしてメモした事象を、別の土地に行った時の情報を伝える手段であり、これが巡回指導をする俳諧師の商法と解されて来た。金子兜太氏は、「一茶のような男にはそれは楽しいことでもあり、それを伝える際には世間的常識に随って一言ぼやきのようなものを加えておけばより効果的でもあり、安全策とも言えた。したがって句帖の記録だけでは一茶の腹の中はわからないのである」という⁸⁶。しかし一茶は巡回指導をしながら識した事件は、江戸幕府が次々に出した法令に抵触する事件である。気儘に興味だけで記しているわけではなかった。一茶は、文化十四年（一八一七）に年来の宿願であった常陸湖来の本間家の芭蕉の真蹟を見る願を果している。それならば武蔵谷原の里正中村敲石の持ちたる芭蕉の真蹟を見にゆくはずである。あるいは新方領大畑村の石井文龍か東武越谷の吾山のもとを訪ねるはずであろう。一茶はそれをしていない。大胆に推測すると、武陽隠士が書いた『世事見聞録』を見たからであり、それを書いたのが藤原中村知足敲石、国藤知足と知っていたからである。

神君様御武徳に依って海内御威光に靡き、やや久しく国中一統鎮まりて、天地の道理ひらけ、君臣の道正しく、賞罰嚴重に行はれて忠孝の信起り、国富兵泰にして卑賤の末々までも家を斉へ、安穩に住し我が業を勤め、上下とも子孫連綿と相続し、義理仁儀も厚くなり、神儒仏の教道を始め諸芸道も分明になり、行状穩和にして人情細密に届き、実に太平の徳化国家に至り極まりしなり。かくの如きはおよそ開闢以来の事にして、和漢古今にためしなき事とかや。その仁徳の広大なる事、申すもなかなか愚かなり⁸⁷。

⁸⁵ 同上。

⁸⁶ 金子兜太『一茶句集』（岩波書店、一九九六）、一六六頁。

⁸⁷ 『世事見聞録』、十八頁。

と武陽隠士は逆説的に述べている。武陽隠士の書いた『世事見聞録』では、国政を誉めちぎりながら懦弱に墮する世状を酷評し、筆誅を加えている輩に一茶も入るからである。しかし賢明で狡奸な一茶は幕府を礼讃する句を増産してこの評から逃れた。一茶は武蔵東部には一歩も足を向けなかったのであった。

第三節 出郷と空白の十年

安永五年（一七七六）八月十四日に、祖母のかな（法名釈妙信）が亡くなった。翌月の九月に一茶は疫病にかかり一時重態となった。この時一茶は十四歳、翌年安永六年春に江戸に出たことになっている。一茶が江戸に出た年齢については、十四歳説と十五歳説がある。まずそのことから論考してみる。

安永六年旧里を出シ従り漂泊三十六年也⁸⁸。

一寸の孝を尽さんとすれば、直に一尺の魔のそねみにあひ、小鹿の角のつかの間も家の治まる時しなかりき。父は我を一度古郷を遠ざくるにしくはあらじと思はれけん、十四歳の春の暁、しほしほ家を出し時⁸⁹。

住馴し伏家を掃き出されしは、十四の年にこそありしが、巢なし鳥のかなしみは、……⁹⁰。

一茶がみずから出生年を書き記した文章であるから、まりがあろうはずはないと考え、今日まで「数え年と満年齢」とを両用していたと考えられている。また十四歳の安永五年とする根拠がないという理由からもそう考えられて来たのであるが、筆者は安永五年十四歳での出郷と考えている。単純な思考ではあるが、当時の太陰暦では満年齢の数え方はし

⁸⁸ 『一茶全集』三、二十三頁。

⁸⁹ 同上、八十四頁。

⁹⁰ 同上、四一七頁。

ていない。『父の終焉日記』は享和元年（一八〇一）の夏に書かれ、一茶はこの時三十九歳である。『七番日記』は、文化七年（一八一〇）から文化十五年（一八一八）までの一茶四十八歳から五十六歳までの日記である。『父の終焉日記』から『七番日記』が書かれるまで九年を要している。

享保六年（一七二一）から幕府は全国人口調査⁹¹を開始する。幕府は膨脹する江戸の人口増に悩んでいた。すでに宝永六年（一七〇九）には「無宿者取締令」を出し、江戸に蟄集する無宿の問題は一段と深刻化して社会問題化していたのである。そうした対策としての一指標であったが、一方では法令で江戸の治安維持のために無宿の取締りを強化するとともに、江戸市場における日傭労働力の確保と奉公人の安定供給の要請にも気配りをする必要があった。しかし享保年間になると、無宿や浮浪の増加による治安は悪化をたどり一層深刻になっていた。無宿、浮浪の輩の増加による治安の悪化は江戸の労働力不足が解消される以前に治安の悪化がそれを上廻っていたのである。

この頃の江戸の刑事罰は、重罪の死罪と軽罪の入墨敲を除けば、追放刑が基本であった。「公事方御定書」では追放刑に軽い方から門前払い、所払い、江戸払い、江戸十里四方追放、軽追放、中追放、重追放となっている。この中の「江戸払い」では、居場所が江戸なら「江戸お構」となり、「所払い」は居村、あるいは居町からの追放「門前払い」は取り調べを受けた奉行所の門前から放つことで実質的には解放であった。江戸十里四方追放は、科人を日本橋から距離四方五里外に追放し、地方出身者の場合はその居村も立入り禁止であった。科人を送り込まれてしまう地方では、他所から厄介払いされた者を押し付けられるだけで迷惑な話であった。

享保七年（一七二二）、将軍吉宗は、諸大名に対してみだりに追放者を出すことを制限する布達を出し、追放した者が再び江戸に厄介払いされて戻って来るのを防ごうとした⁹²。

⁹¹ 享保元年（一七一六）に吉宗が将軍職に就任すると、「享保の改革」に取りかかった。まず風紀の取締まりとして江戸を始め全国で流行していた「三笠付」を賭博として禁止する「正徳新令」を出し、また「武家諸法度」を天和の制に戻し、大岡忠相を町奉行に任じて江戸の町人人口を調査させた。町奉行の支配下には「五十万人」と記された。その他の人口は江戸流入者であったため、吉宗は諸大名、旗本に命じて全国人口調査を行い、「仁別帳改め」を行った。江戸の防火組織として「いろは四十七組」を誕生させた。年貢収納には「定免制」を定め、「質地入田流出禁止令」を出した。
⁹² 享保十五年（一七三〇）に吉宗は諸大名の上米を禁止し、参勤期間を復帰することを命じ、流出人口を江戸で取締まるよう布達した。諸大名に買米を奨励し、農村奨励をはかり、奢侈を譴責した。また享保十九年には豊作などによる米余りと米価騰貴などを防ぐため、庄屋、名主が米を備蓄できるよう「大庄屋制度」を許可した。このように庄屋、名主への「村請制度」を緩和したために、中村敲石や石井文龍などの大庄屋や里正が出ることにもなったのである。

悪事コレ在リ候者、領内ニ差シ置キ候ヲ嫌ヒ、他所へ放遣候儀ハコレ在マジキ事ニ候。近年公義ニ於テハ追放者、先ハ之無ヤウニ仰付ラレ候間、国々ニ於テ所々其ノ旨ヲ存ジ、乱リニ追放之有間敷候。而ドモ喧嘩ナドニテ双方疵付候者カ、又ハ侍ナド品ニヨリ追放申シ付ケラレ、却テ叱ルベキ趣モ之有可候間、ソノ段ハ格別ノ事ニ候。

（『御触書寛保集成』二五〇九）

安永七年（一七七八）、幕府は、江戸無宿人の「狩り込み」の布達を出した。捕縛した無宿のうちから遠島を申し渡し、この年からの手始めとして四、五十人を佐渡金山の水汲み作業員として「遠島流民」を出した。これを皮切りに以後毎年数十人ずつが送られた。一茶が江戸に出た頃には、江戸ではこうした無宿人が起こす犯罪が横行する時期であった。松平定信の『宇下人言』には次のような記事も見える。

天明午のとし、諸国人別改められしに、まえの子のとしよりは、諸国にて百四十万人減じぬ。この減じたる人、皆死にうせしにはあらず、ただ帳外となり、又は出家、山伏となり、又は無宿となり、又は江戸へ出て人別にもいらず、さまよいありく徒とは成りにける。七年の間に百四十万人の減じたるは、紀綱くづれしがかく計り之わざわひと成り侍るてふ事は、何ともおそろしともいふもおろかなり⁹³。

天明三年（一七八三）に浅間山大噴火があり、それに続いて未曾有の大飢饉が重なり各地で一揆や打ちこわしが続発した。定信のいう天明午の年は、天明六年（一七八六）のことで「まえの子の年」とは安永九年（一七八〇）のことである。この年は大雨のために関東地方は史上稀に見る大洪水に見廻われた年であった。この間わずか六年しか隔たっていないにもかかわらず全国の人口が百四十万人も減ったとある。この急激な人口減の原因は、みな死にうせしにはあらず、ただ帳外となり」という。帳外とは人別帳から消えた者である。無宿者となり人別帳に記載する人口が減ったためであるとしているのである。天明七年は一茶は二十五歳で葛飾派の俳匠二六庵竹阿の二六庵に同居し、小林圀橋を名乗り、渭浜庵執筆一茶と記した年である。一茶が『七番日記』に「安永六年旧里を出しより」と記したのは、松平定信の「旧里帰郷」の奨励がなされた年に当たる。そうした年に「しほしほ家を出し」と書き「家の治る時しなかりき」と『父の終焉日記』に記しているように、

⁹³ 前掲『宇下人言・修業録』、一一四頁。

「自己を主人公にしたまま子」の物語を作成し、後になってさらに強調し、粉飾するために一年遅くし、安永六年、十五歳で出府したように後の『七番日記』に書いたのであった。これが真相である。芭蕉の『奥の細道』の虚構についても学んだ一茶であるから、当然このようなことは在り得る記述なのである。

小林一茶の年譜では安永六年（一七七七）春、十五歳にて江戸に出る。この後十年間は消息不明となっている。一説では下総馬橋の油問屋大川立砂の家に奉公をしたという説がある。この説に関しては、『俳誌・科野』昭和二十七年七月号に佐藤雀仙人が「一茶の馬橋居住について」という文章がある。現在まではほぼこの説に従って考えられている。

もう一説があり、井上脩之介は「一茶の離郷について」のなかで、一茶の出郷は継母との不仲だけではなく、それ以上の要因があったのではないかとしながら、次のように記している。

一茶の母方宮沢家の親戚である隣村赤渋の富右衛門方からの出で、江戸の谷中中辺で書家市河米庵家⁹⁴に奉公していた某（作治又は作治郎と伝える）の許に身を寄せたのではないかと考えてもいる。米庵は下谷に住んだ書家で幕末三筆の一人であった。米庵の父は儒者、詩人として知られた市河寛斎である。米庵は安永八年の出生であるから米庵は寛斎の誤りであろう。『随斎筆紀』に「予わかき時・句読をならひし師は西野老人也」とあり、西野は寛斎の別号であるので成美は若いころ寛斎の門人であり漢学を学んだということになる。成美は幼いころから父宗成に俳諧を学び、その作品は十五歳にしてすでに俳書に入集している。一茶が江戸に出たとき成美は二十九歳で、俳人としてすでに認められていたから、市河家かその周辺に奉公していた一茶が、やがて成美の知遇を得て俳諧の世界に近付いて行ったのであろう⁹⁵。

ここでも一茶が十年間、どこに身を寄せ何をしていたのかについて確証しているわけではない。また（作治、作治郎）という人物についての確証はない。ただし市河家かまたはその周辺に奉公していた、とする点においては納得できる。

⁹⁴ 市川米庵は、安永八年（一七七九）九月六日生まれ。父は市河寛斎や林述斎、柴野栗山に儒学を学ぶ。宋の米芾などの中国の書も研究した。父の跡を継いで富山藩、金沢藩に仕え、書塾小山林堂をひらいて門人五千人余を播していた。幕末の三筆のひとりと言われ、渡辺崋山と親交を深めた。安政五年（一八五八）に八十歳で死去した。

⁹⁵ 『好日』四八九号、一九五二年、十八～二〇頁。

筆者の調査では、『続俳家奇人談』（天保三年）にある武州埼玉郡谷原村の中村太左衛門知足藤原氏、駿河の国司式部少輔藤原一氏の十世中村敲石との関わりが深いと考えている。寛政元年（一七八九）の八月か九月に、一茶は芭蕉の足跡を追って奥州を訪ね、象潟蚶満寺を訪れ、東都菊明の名で文と句を書き残した。これが蚶満寺に伝わる『旅客集』である。一茶が何故に「東都菊明」と記したのか。それは『旅客集』に明和元年（一七六四）九月に武州豊嶋郡立圃、江戸太白堂、今日庵元夢の門弟祇空、武陵隱士雁宕の名が記されてたためである。一茶は、天明五年に今日庵元夢の門人となり、天明七年には葛飾派の二六庵竹阿の門に入った。そこでこの『旅客集』の一团に「武陵隱士雁宕」⁹⁶の名を見つけたのである。安永六年に越谷吾山が集録した歳旦集『東海藻』のなかに、武陽隱士敲石の「松たてるいはれ問はばや鶴と亀」の句があり、武陵隱士雁宕の「鶯の糞にも残る暑哉」という句がある。また、文化八年（一八一）に夏目成美が諸国俳人の句を集録した『随斎筆記』には、「むつかしや花に行さへ何のかのと」「清滝の水をやしなふわか葉哉」という雁宕の作品が見える。これについて、一茶は「此四人撰者たるや」と注を記している⁹⁷。武陵はこの時三十三歳の若さである。この四人とは、白路、梧朗、武陵、東眉の四人を指している。文化九年に武陵は『東西四歌仙集』を編している。武陽中村敲石は春暁庵知足の別号もあり、柳居の弟子の多少庵秋瓜の流れを汲む多少庵三世南枝と秋瓜の二人で『東武多少庵俳書目』を寛政元年に刊行している。柳居の弟子門瑟は敲水と号し敲石の弟子でもある。このように武陽隱士、武陵隱士、葛飾隱士はそれぞれ、江戸、八王子、粕壁備後に居住し交わりを持っている。武陽隱士は『世事見聞録』に次のように記している。

三ヶの津、そのほか繁華の地へ、年季奉公、冬奉公などに国々より出づる小者、下男なるもの、いずれも右の邪欲の道に疎くして人におくれ、困窮に余りて出たるものなり。もつとも他国の稼ぎも出来る程のものなればいまだ極窮といふにはあらず。難渋の中通りなるものなり⁹⁸。

江戸において一流の俳諧師を目指した一茶であるから、葛飾派の東部の識者武陽隱士の

⁹⁶ 武陵隱士雁宕は、明和三年（一七六八）～天保九年（一八三八）まで生きた俳諧作者。本名は西尾邦直、通称は呉四郎、別号は杜陰、白雲居、丹波国大山住の酒造業の家に生まれる。庄屋役を務め、篠山藩の御用達として苗字帯刀を許された。家業の傍ら俳諧に打ち込み行脚の俳諧師を迎え、諸国の俳諧師と交遊した。著書に『東西四歌仙』がある。後に武蔵国八王子に住し武陵と名乗る。

⁹⁷ 『一茶全集』五、一一七頁。

⁹⁸ 前掲『世事見聞録』、一〇九頁。

この言は身に浸みて応えたであろう。中村敲石『賦物或問』には、「武陽敲石子賦物或問を作る」と野弘が叙文を書いている。この連歌の式目を述べた後に発句が連なっている。ここに記された東都の俳諧師には来徳、菊字、祇明、不言、菜陽、百庵、祇徳らの句がある。菊字と祇明は、今日庵元夢⁹⁹の門人である。一茶は、今日庵元夢にも初期の頃に師事し、「菊明」の俳号を与えられ、「東都菊明」として元夢編の『俳諧五十三駅』に十二句入集されている。夏目成美の叔父祇明は、蔵前の札差を業としており、一茶はここに出郷後の十年間奉公をしたと思われる。来徳は祇明の息子で、父の追善集『五湖庵句集』を宝暦四年に出版している。祇徳は蔵前大札差の祇明の弟で、江戸座存義の判者として俳諧を業とし、大名諸侯を門人とした。また武陵隠士雁宕は、先にも触れたとおり八王子に住居し、川越、騎西、古河、東武などの各地を廻り、武家、郷土、富農、医師、僧侶などを門人としている。

百庵は、連歌俳諧作者として、茶道を伊佐幸琢に和歌を冷泉為久、為村に学び、柳営連歌師職（将軍他重役、諸侯の和歌及び連歌の師）とならんとしたが、「古今伝授」を得られなかったので罪を得た。百庵は幕府御奥坊主衆の家に生まれ百俵二人扶持を得ていた。武陽中村敲石とは深交を持った。一茶は、江戸出郷後に今日庵元夢の門で学びながら、成美の叔父祇明家の弟の祇徳家に奉公したのであろう。無論、夏目成美も祇徳の弟子で、将来は江戸蔵前札差を取り仕切ることが約束されていた。一茶もここで成美と知り合い、永いこと深交を結ぶことになったのであろう。こうした人々が、武陽隠士中村敲石の門弟のような関わりで風交を持っていた。故に、明和元年（一七六四）九月に蚌満寺の『旅客集』に、武州豊嶋郡立圃、武州八王子武陵隠士雁宕、東都蔵前札差祇空の名を見付けた喜びはひとしおであったことだろう。一茶が奉公をした祇明、祇徳は祇空の門人であった。一茶も孫弟子として感涙を流したことであろう。

日も西海にかたぶきぬころ、旅宿をもとめて、先は一見せばやと小舟にさほさして、
はるか湖中に浮みぬれば、昏れいそぐ里人、我家へ帰る有様、目のあたりなりけらし。

象潟や山鳥かくれ行刈穂船

寛政元酉八月九日 右東都菊明¹⁰⁰

⁹⁹ 享保十二年（一七二八）～寛政十二年（一八〇〇）。本名は森田秀重。一茶の師にあたる人物。十三歳で葛飾派の長谷川馬光に入門し、後に江戸に出て旗本となる。葛飾派の別号である「今日庵」を名乗った。

¹⁰⁰ 『一茶全集』五、一一七頁。

元夢門の「菊明」と元の奉公先の恩人夏目祇明、祇徳の二人の師匠である祇空の名にあやかり「東都」と記したのであった。元夢門の菊字、祇明から名をもらって「菊明」を名乗っていたことで、『寛政三年紀行』には「東武散人菊明坊一茶」と記している。

ところで、一茶の出郷説について井上脩之介のいうところの「市河米庵家に奉公していた某の作治または作治郎の許に身を寄せた」とする説には説得力がある。しかしこれも作治あるいは作治郎なる人物が判明しなければ推論の域を出ない。一茶の出郷時の回想文に注意を寄せてみる。

十四歳の春の暁、しほしほ家を出し時、父は牟礼迄おくり給ひ、「毒なる物はたうべなよ。人にあしざまにおもはれなよ…」おもはず涙うかみしが、未練の心ばしおこりなば、連なる人に笑れん、父によはき歩みを見せじと、むりにいさみて別けり¹⁰¹。

一茶の出郷時の十四歳は、安永五年（一七七七）であり、この頃の江戸は、すでに述べてきたように、成長を続ける一方で労働力市場における需要（求人）超過が続いていた。当然のことながら求人先に奉公人や日傭取りを斡旋する商売（人宿、口入屋）が大変な繁盛をしていた。仕事を求めて出てきた者を、食事の世話までし、できるだけ手元に集めておき求人があれば自ら請人となって雇主に紹介し、就職が決まれば、世話代として手数料（判賃銭）や飯代をとるのを稼業としていた。『御触書寛保集成二二八七』には、「人請に立ち候者」と記されており、一般には「人宿」「百姓宿」「人請」「口入」などと呼び名がついていた。そこには「出郷者に対し、人宿は確かな人主・下請人を取り、間違いなく正直に稼業せよ」と命じている。雇入れの契約をした途端金だけ取ってドロンをきめこむ「不埒な奉公人」や「人主・下請人」のいないような「人宿・百姓宿」が、そういう不埒な奉公人や人宿が無宿人を生み出す素因となっていたからであった。

人主とは、奉公や日傭取りに出る際に、その者の後見人として契約書に署名する者を言った。その者の身柄の引き受け人になる保証人のような存在である。親とか兄など身内の者であったが、やがて「下請人」は、親族に代わり人宿に対する形式上の身元保証人となる者で、知人、友人でもよかった。同郷の縁者などであれば、一番確かな請人であった。一茶が江戸に出るに際して『父の終焉日記』には「連なる人」と書かれているだけで、誰

¹⁰¹ 同上、八十五頁。

れと一緒に江戸に出たのか、だれが請人になっていたのかが今日に至るも判明していない。同郷の者ということであれば、長野県飯田出身で守谷町住の鶴老などが考えられる。鶴老は後に上野寛永寺直末守谷擁護山西林寺六十二世住職となっている。あるいは江戸日本橋で春秋庵を設立し、関東、中部まで一大勢力を築いていた加舎白雄などが請人となったのかもしれない。夏目成美は加舎白雄¹⁰²の門人でもあった。すでに論じたように、一茶が奉公をした先は、成美の叔父夏目祇明宅であったのではないだろうか。関根三右衛門照房は素水と号し中村敲石に師事したこともあり、後に白芹と号して葛飾蕉門派を組織化し、其日庵を継承した。升屋という百姓宿（人宿）を経営し、また別に枳屋という無宿旅籠を営んで大儲けをしていた。そのため其日庵五世となり、兄弟子の野逸から蕉門葛飾派を継承し、藍水、一茶、文龍、不干らを越えて総帥となり、無宿人同様の生活をしていた一茶と後に絶交をしたのであった。『葛飾蕉門分脈系図』に「文化年中一派の規矩を過つによって、白芹翁永く風交を絶す」¹⁰³と記されている。

この文化年中には、松平定信の「寛政の改革」から始まる無宿人を郷里に帰す「旧里帰郷令」が再三にわたって出され、無宿者を取り締る法令も強化されている。さらに新たに出郷者、無宿人、人宿、請人に対する取り締り役として有名な「関東取締出役」も新設され、悪質な無宿人を積極的に佐渡送りにする強化策が取られた。一茶のように、定宿や居住地を持たない無宿人を葛飾派の中に置いておくわけにはいかなかったのである。一茶が最も親しくしていた其翠楼松井も江戸日本橋に住み、江戸市中に何軒もの人宿や店子貸家を構えていた。一茶は文化元年に松井の営む店貸家に住んだ。また松井宅には文化八い（一八一）の一年間を見ただけでも百二十七日泊をしている。松井家とは家族同様の扱いをされていたに違いなかろう。寛文六年の触書きには、無宿人がいろいろ問題をおこし、奉行所へ届け出のあった人宿を取り調べるなかに、大半が人宿の大屋や家守の家に泊り込む「屋守屋敷」すなわち店借であり、これを大量に処罰したと記されている。一茶のような

¹⁰² 加舎白雄、元文三年（一七三八）～寛政三年（一七九一）。信濃国上田藩士加舎吉亭の次男として、江戸深川扇橋の同藩邸で出生。五歳で生母と、十三歳で継母、十六歳で父を失い、二十歳前後は仏門にあった。複雑な少・青年期を送ったらしく、十三歳の出家説もある。明和二年に下総国銚子流寓中に江戸の鳥明に入門。日本橋浮世小路の松露庵に同居して業俳を目指した。信濃国で多くの門人を得た。明和六年八月に同国の姨捨山長楽寺に芭蕉庵句碑を建立した。ようやく信濃全域を手中にしようとしている矢先に、關更が同じ目的で、北、東、信濃に現れ、二人とも戸倉の鳥奴宅で激しく論戦を交わした。関東を遊説後、関西で門人を勧誘した。安永九年（一七八〇）に日本橋鉄砲町に春秋庵を設立した。以後、「春秋庵月次」を開催し、天明八年（一七八八）に芭蕉百回忌取越法要を行い、江戸俳壇に一大勢力を築いた。関東から中部地方に三千人の門人を擁した。小林一茶は白雄の行き方を目指した。

¹⁰³ 日本俳書大系十六『葛飾蕉門分脈系図』（日本図書センター、一九九五年）。

無宿俳諧師を家に泊めさせていたことが露見したら、其日庵の総帥職も危なくなるために、白芹は「白芹翁永く風交を絶す」とした。それは一茶を郷里に帰すためでもあったのではないかと思われる。文化元年四月九日、一茶は葛飾の愛宕山大嶋寺勝智院の住職であった栄順法印が遷化したことにより、境内にあった愛宕社に住していた一茶は、勝智院の院代及び檀徒総代に退去を命じられ、松井宅に転がり込んでいたこともあり、白芹はこころよく思わず、郷里退郷を勧めた。

一茶は江戸においても、帰郷しても「信濃国乞食首領一茶」と自分の身をこころえていた。農に従事せず俳諧師として住していることは、既得権のみ主張する法令違反者であった。「古郷やよるも触るも茨の花」と詠んでいるが、「村長誰かれに逢ひて我家に入る。きのふ心の占のごとく素湯一つとも云ざればそこそこにして出る」¹⁰⁴という扱いになるのは、違反者に対する当然の村内の人々の態度であった。こうしたことから、一茶が自己の境涯をことさらに強言し、悲劇の主人公に仕立てようとしていることが分かる。芭蕉は自然を、蕪村は絵画を、一茶は自己の境涯を詠んだ。境涯句はことさらに自分を憐れみ、自分を卑下し、自分を蔑むことで、その本領を増す俳諧なのである。

¹⁰⁴ 『一茶全集』三、六十一頁。

第二章 一茶の童児俳諧と小動物

—子ども句と動植物句をめぐって—

第一節 夷ぶりの俳諧

一茶には、慈愛に満ちた「一茶のをじさん」というイメージがある¹。子どもを句の対象として詠んだ童児俳句を、その時代に残した俳諧師は、一茶を除いては他にはいない。『一茶発句集』（文政版）の中の、よく知られた「雀の子そこのけそこのけお馬が通る」、「我と来て遊べや親のない雀」という句は、慈愛に満ちた一茶像を象徴する句である。一茶が残した児童俳句は、『おらが春』（文政二年稿）のなかの「親雀子をかくせとや猫をおふ」という有名な句をはじめとして、主に子どもを対象とした『我春集』（文化八年稿）、『株番』（文化九～十一年）、『志多良』（文化十年）、『まん六の春』（文政五年）という作品群はいうまでもなく、自分自身を対象にした『たびしうゐ』（寛政七年）、『さらば笠』（寛政十年）、『三韓人』（文化十一年）という作品群にも多くみられる。さらには、一茶が弟子たちの句を代選した『堇艸』（春甫編・文政九年）、『あとまつり』（魚淵編・文化十三年）、『杖の竹』（松宇編・文政九年）、『たねおろし』（素鏡編・文政九年）などの句集にも多く残されている。

それでは、こうした慈愛に満ちた児童作品はどのようにして誕生したのであろうか。結論的に言えば、それは、一茶の生まれ故郷の風景や家族史を背景にして生まれたものだということである。

先述のとおり、一茶の故郷は、信濃国水内郡柏原村（現在の長野県上水内郡信濃町大字柏原）である。善光寺平から北へ二十九キロ程離れ、黒姫山の山麓に拓かれた標高六百七十一メートルの寒冷・豪雪の地である。雪が軒あたりまで積もるので明かり取りの窓も用を成さない。「外は雪内は煤ふる栖かな」という一茶の句があるが、日本全国の民家が昭和三十年頃までは皆そのようなものでもあった。

豪雪地帯は、その雪が半年間も残って遅い春をもたらすのであるが、そうした雪国の生活のなかには、それなりに「子宝がきやらきやら笑ふ櫓火哉」（『おらが春』、文政二年三月

¹ 子規は「彼の句に小児の可憐なる有様を述べたるもの極めて多し。小児の事と云へば、情激し心躍りで、句作にも推敲を費さざりしものと覚ゆ。其慈愛心は動物にも及べり」として、一茶の「こころ」を賞讃している（東松露香『俳諧寺一茶』、一茶同好会、一九一〇年、四五三～四五四頁）。

十四日)と詠まれたような、いわば一家団欒の生活もあったのである。江戸時代の柏原は、水内郡柏原村といい、木村、二之倉、赤渋、大久保、熊倉などの集落があった。寛文六年(一六六六)の村の総石高は、六百六十八石、延宝八年(一六八〇)には千百八十石と増えている。この時代は新田の開発が進み、江戸時代には米の収穫は飛躍的に伸びたのであった。

人口は明和五年(一七六八)には二百五十七戸で千二百十七人。文化十四年(一八一七)には二百五十三戸で千二百四十七人であったという²。ここは北国街道が通っており宿場でもあった。そのため江戸に出るには交通の便が良い地でもあった。一茶の系図には「本国越後長森村ノ人也。又青田村近所ノ人トモ云フ、元和二年辰四月十五日来ル。石塚村願称寺旦那也。願称寺滅亡ノ後明専寺旦那トナル」³とある。

一茶の先祖に関する考証は、様々な説がある。その論拠の多くは、文政十年(一八二七)に作られた『一村大系図』に依っている。これには信濃国水内郡柏原村民、三十四氏の系図が収められている。小林家の系図には次のようにある。

本国越後長森村ノ人ナリ。又青田村近所ノ人トモ云フ。元和二年辰四月十五日来ル。石塚村願称寺旦那也。願称寺滅亡ノ後明専寺旦那ト成ル⁴。

この記述は、長野県上水内郡信濃町柏原にある明専寺の寺歴にも書き留められている。この寺歴によれば、「願称寺は浄土真宗大谷派の寺院で、天正年中に上杉謙信の命により、信州から転じ、貞享二年(一六八九)に本山と対立し、寺号、宝物、除地などを没収され、その後、本願寺は輪番を派遣して新井別院とした。願称寺滅亡後、信者は明専寺門徒となる」⁵と記している。

一茶の没年月日は、文政十年(一八二七)十一月十九日であった。一茶の位牌には、表は「法名・釈一茶不退位。文政十年寅年霜月十日」とあり、裏面には「俗名・弥太郎、六十五歳」と書かれている。門人の西原文虎⁶の『一茶翁終焉記』には「霜月八日、帰庵の顔

² 小林計一郎、前掲『一茶ーその生涯と文学』、四十二～三頁。

³ 『一茶全集』別巻、七十五頁。

⁴ 同上。

⁵ 同上。

⁶ 小布施町林ノ内の出身で、浅野で油商を営んでいた西原九兵衛家の番頭となり、分家して西原姓を称した。一茶の信濃における門人のなかで最も若かったが、一茶に私淑すること厚く、文政年間に『一茶発句集』をまとめている。

うるはしけるが、十九日といふに、ふとこち悪しき体なりけるを申の下剋ばかりに、一声の念仏を期として、大乘妙典のうてなに隠る」⁷とあるように、一茶は命終に臨んで「一声の念仏」⁸を口にしたと記している。文政十年十一月八日、一茶は駕籠に乗って牟礼峠を越え、焼け跡の土蔵に帰った。同月十九日に急に気分が悪くなって床に臥し、冬の日が西に沈む頃、一声の念仏を最後として西方浄土の弥陀仏のもとへ旅立った。享年六十五、法名は釈一茶不退位とつけられ、その遺骨は小丸山墓地の一族の墓に納められた。一茶の生涯は波瀾万丈ともいうべきものであった。その晩年においては、ひたすら阿弥陀如来の願力を頼みながらも煩悩に押し流され、心静まる時も少なかったに違いない。還暦の元旦に「春立や愚の上に又愚にかへる」と詠んだ一茶の生涯は、まさに煩惱海にただよい、生死海に漂流するものであった。一茶の死後、三人目の妻であった「やを」は、翌文政十一年四月に二女「やた」を生んだ。一茶の血脈は今も続いているそうである。「やた」は後に、越後高田の丸山仏次郎の八男宇吉と結婚した。

一茶の家系についての考証では多くの研究があるが、現時点では黄色瑞華氏が発掘された「柏原根元録」説が最も有力である。

永禄二年（一五五九）二月十一日、夢之告ニヨリ此处へ来ル。住处ヲ見立テ同月二十八日、姫川村ヲ立チテ晦日来ル。小屋掛ヶ女房ト倅松蔵、勝蔵四人也。同月八日畠ヲ開ク。小豆、大豆ヲ蒔ク。永楽通宝二百文有り。飛弾森、義守ヨリ山村勝兵衛親子三人ニテ来ル。四月十一日也⁹。

明専寺の寺歴と根元録にも、越後頸城地方からの移住者が多かったことが分かるが、上の「柏原根元録」によれば、永禄二年は正親町天皇の御世であり、小林一茶の先祖が移住したのは元和二年の後水尾天皇の御世である。この間五十七年を隔てている。特にこの地に居を定めたことについては、「夢の告により」と書かれてあったり、願称寺滅亡により明専寺の旦那となる、とあったりする。出自は不明なるも、一茶が浄土真宗の門徒であったことには間違いない。

一茶が江戸に奉公に出たのは、安永五年（一七七六）の春で、彼十四歳の時であった。

⁷ 『一茶全集』別巻、五十三～五頁。

⁸ 同上。

⁹ 黄色瑞華『小林一茶』（新典社、一九八三年）、二十七頁。

『七番日記』には「安永六年、旧里ヲ出デテヨリ漂泊三十六年也。日数一万五千九百六十日、千辛万苦シテ一日モ心楽シムナシ」と書かれている。まさに一日も楽しい思いもない、「千辛万苦」の生活という。三十六年ならば「日数一万三千一百四十日」であるが、これは太陽暦と陰暦の日数の違いである。江戸に出た一茶は、「伴なはれ人」¹⁰の案内でどこかに草鞋を脱いだはずであるが、どこに、どのように落ち着いたかなどは全く不明であるとされてきた。

住馴し伏家を掃き出されしは、十四の年にこそありしが、巢なし鳥のかなしみは、ただちに罅に迷ひ、そこの軒下に露をしのぎ、かしこの家陰に霜をふせぎ……くるしき月日をおくるうちに、ふと諧々たる夷ぶりの俳諧を囀りおぼゆ¹¹。

荒奉公に耐えながら「棕鳥」と呼ばれ、「日庸取」と嘲笑されながらも辛抱し、使い走りのような雑役をしながら、一茶は「ふと諧々たる夷ぶり¹²の俳諧を囀りおぼゆ」ることになったというのであるから、それに必要な文筆の嗜みはすでにあつたのである。母の兄弟には俳諧を嗜む者もあつたようでもあり、父の弥五兵衛、それに弟の仙六（専六とも）も読み書きの教養もあつた。一茶が江戸滞在中、明専寺の「宗門改帳」には弟の専六が毎年書き記していた。この時代は農村の窮乏はことさら甚だしかった。各地に暴動が続いていたことは周知のとおりで、一茶も善光寺一揆¹³のことを記している。そのために、都市への出稼ぎも急増し、安永六年にはその禁令が出たほどであつた。都市における出稼者のほとんどは、商売の元手があるはずもなく、そうかといって、手に職もないという人々であつた。日雇い人足や荷物運びの人夫として働くのがせいぜいで、武家や町家に住み込みで雑役をするというのは、ごく少ない恵まれた人々であつた。一茶もその中の一人であつたわけだが、「ふと諧々たる夷ぶりの俳諧を囀りおぼゆ」というのであるから、それなりの余裕もあつたかと思われる。武家の中間か、大店の丁稚奉公や手代などであつたのかもしれない。

¹⁰ 『一茶全集』五、七十五頁。

¹¹ 『一茶全集』四、四一七頁。

¹² 都に対して異郷や地方のことをさす言葉であるが、この場合は、田舎俳諧とか田舎を題材にした句をいう。一茶にとっては信濃出身という田舎言葉や田舎意識を特徴としているという意味であろう。

¹³ 文化十年（一八一三）十月十三日夜、善光寺で夜盗三百人ばかりが蜂起し、富民二十三軒を襲い、それをきっかけにして、大きな米騒動となった。

十四歳で「文筆の嗜み」があったことについては、後の信濃の一茶の弟子達の残した記録からも知ることができる。柏原の間屋本陣の中村六左衛門利為（寛政二年没）¹⁴は、新甫と号した地方文人で、一茶の少年時代には家塾を開いていた。一茶は、後年親交を重ねるその子桂国（中村利和）、観国（中村利賓）らとともに、彼から学問の手ほどきを受けたと伝えられている。また一茶が江戸に発つ前年の安永五年（一茶十四歳）、諸国遍歴中の長月庵若翁¹⁵が柏原の明専寺に滞在して村人に俳諧の指導をし、そのなかに一茶も加わっていたと伝えられてもいる。

長月庵若翁は、もとは肥前大村の藩士で服部南郭について詩文を学び、その詩眼をもって俳諧の道にはいり、蕉風俳諧の真諦を極めたと自称した。ひところは大阪にあつて欄更や几董らとも親交のあった人である。大村藩主の一族ということで各地で尊敬され、伊予今治藩主松平内膳正定奉の師を務めたこともあった。寛政五年に芭蕉百回忌記念の『其蔓集』を出版したり、寛政二年には俳諧紀行『曇華囊』を刊行している。伊賀の新大仏寺境内に陽炎塚を建てたり、愛染院に古郷塚を再興したり、その他芭蕉の顕彰にも諸々と努めている。若翁と一茶の関係はあまりはっきりしないのだが、『七番日記』の文化八年（一八一）一月二十八日の記事に、「長月庵若翁ニ入ル」¹⁶とあったり、同年二月十二日の条には「随齋ニシテ若翁泰呈ニ会ス」¹⁷とある。また一茶の寛政七年の『旅拾遺』、文化十一年の『三韓人』には「梅が香や門よりおくの長い事、文化十年十二月八日於当初没、若翁」¹⁸と記されている。安永四年（一七七三）から翌年まで信州柏原に滞在し、本陣の中村六左衛門（新甫）や分家の徳左衛門（北委）や桂屋与右衛門（平湖）らが入門している。柏原赤渋の黒姫山別当・雲竜寺にある若翁の墓碑銘（明治二十九年建立）には「一茶翁ソノ門ヨリ出ヅ、コノ人ノ器推ルベキ也。文化十年十二月八日没。門人中村利賓撰并ビニ立石」

¹⁴ 現在の長野県上水内郡信濃町柏原の人。代々、六左衛門を名乗る。柏原本陣で水内郡中取締役に就任し、各種の名誉職をつとめた。俳号は新甫、一茶の初学の師といわれている。六左衛門の子、桂国と観国はのちに享和二年、江戸に赴き一茶の弟子となった。一茶は本家弥一の伝馬役金の不納を知り、文政四年（一八二一）、一茶は村役人となっていた六左衛門に「役金免除」の請願書を出している。

¹⁵ 現在の長崎県大村市の人。堀孫左衛門徳之。享保十九年、大村藩の重臣・大村太左衛門徳祇の六男として生まれる。同藩士・堀徳英の養子となる。俳諧を森川許六の弟子に学ぶ。宝暦十二年、脱藩し出奔した。以後、俳諧師として諸国を転々とし、安永四年八月、信州に来て柏原明専寺に滞在した。この時、一茶は十三歳で若翁に入門したと言われている。文化八年、一茶は江戸深川の若翁を訪ねている。（享保十九年～文化十年）別号桃国、風蝶。

¹⁶ 『一茶全集』三、一〇四頁。

¹⁷ 同上、一一一頁。

¹⁸ 『一茶全集』六、二三五頁。

とある。この碑文によれば、一茶は中村観国らとともに若翁に俳諧の初学の手ほどきを受けたことになる。いずれにしても一茶は早くから俳諧に慣れ親しんだことがわかるのである。師系については、馬場錦紅編『葛飾蕉門分脈系図』（嘉永末年成版）に次のように記されている。

三祖素丸翁門人下

一茶・二六庵・小林菊明

信州善光寺に住し、寛政二年戊四月七日入門。後、判者にすすみ竹阿の号を称し、文化年中一派の規矩を過つによつて、白芹翁永く風交を絶す。奥羽紀行あり¹⁹。

蕉門葛飾派²⁰は山口素堂を祖とし、素堂の別号其日庵を継ぐ者が代々この派の中心となった。其日庵二世は長谷川馬光、三世は溝口素丸、四世は加藤野逸、五世は関根白芹と継承され、『葛飾蕉門分脈系図』を編集した馬場錦紅は九世であった。二世其日庵馬光の弟子二人のうち、溝口素丸が三世其日庵を継承し渭浜庵素丸と号した。もう一人の小林竹阿は二六庵を号した。一茶は、この二六庵竹阿から多くの影響を受けている。素丸の門人には野逸、白芹、元夢、一茶らがいた。森田元夢は竹阿の号を継承し二世今日庵元夢と称した。今日庵は千利休の孫宗旦の号である。山口素堂は、葛飾派の始祖としては其日庵を号とし、千家の茶人でもあったので、今日庵の号も名乗った。そのようなことから、茶の心得もあった元夢は「二世今日庵」を号した。元夢は素丸門で一茶にとっては同門の兄弟子ということになり、元夢からも指導を受けている。やがて一茶は、師であった竹阿の二六庵を継承して「二世二六庵一茶」と号したのであった。竹阿は信濃国発祥の小林一族である。戦国時代に甲斐武田氏の家臣に小林尾張守がおり、一茶も竹阿も同族であった。故に一茶は江戸上京と共に二六庵竹阿の家に居住したとも考えられる。

天明七年（一七八七）に一茶は、俳諧の秘伝書とされていた『白砂人集』の写書を許さ

¹⁹ 『日本俳諧大系』十五（春秋社、一九二七年）、四十一頁。

²⁰ 芭蕉の弟子・山口素堂は、寛永十九年五月五日生まれ。享保元年八月十五日死去。葛飾隠士素堂と号し、葛飾派を名乗り一派をなした。天明四年（一七八四）には、葛飾正風を標榜し、葛飾蕉門を呼号した。しかし、じつは平談俗語を用いた通俗卑近な俳風であった。一茶がこの門派から育ったことは、特筆に値する。素堂は北村秀吟の門で、芭蕉と深い関わりを持った。和歌書、漢学に通じ文人として江戸で知られた。甲斐の酒造業の生まれであるが、江戸に出て武士となり、治水工事に功績を残した。「目には青葉山時鳥初鰹」の句で今日まで知られている。芭蕉没後、葛飾派を起こした。

れたらしく、一茶所持の『白砂人集』の奥書に「天明七申霜月吉日・二六庵机下ニ於テ之ヲ写ス。小林圀橋」²¹とある。本来は素丸の弟子であった一茶が、素丸への奉公を怠ったわけではないが、天明六年（一七八六）春以降から七年までの間に、一門の長老でもあり高齢であった竹阿の身辺雑用係として付き添うことになったと考えられる。このことから、一茶が葛飾派の本流に入ることができなかったと想像することができる。

溝口素丸²²は、出自は武士、江戸本所の旗本溝口十太夫勝政の子として生まれた。『御家人分限帳』に次のようにある。

八番大久保豊前守組。五百俵扶知石高五百石、上野国、孫左衛門ノ子溝口十太夫、
酉六十二²³。

素丸の父で越後新発田藩主溝口氏の分家にあたり、元禄元年溝口勝政が父安勝（新発田藩祖秀勝の孫）が石高五千石で上野池之端に屋敷を下渡されたので、勝政が五百石を与えられたことから始まった。その子の素丸は御小姓組から書院番にもなった。在職中から俳諧を楽しんでおり、安永元年（一七七二）に隠居した。その子直道が小姓になっている。別号を白芹、絢堂、五味堂を名乗ったが、馬光の名籍を継いで其日庵三世を名乗った。また師の別号の老茄園を名乗らず、宜春園とも言い、あるいは渭浜庵とも言った。同門の法雨が馬光の老茄園を継承したから、別号を渭浜庵としたのであろう。一茶は二十歳代前半の頃からその門下となったらしい。

現在の東京都台東区蔵前の長応院の過去帳を見ると、寛政二年（一七九〇）に「二六庵了山居士・三月十二日、本所竹や弥兵衛内ニテ死ス、行年八十一歳、小林楽斎、二六庵竹阿先生」と書かれている。竹阿は、天明六年まで大坂の地にあり、同年中には江戸へ帰っていたことになる。一茶は竹阿と同居し、その年信州佐久郡の新海米翁米寿記念集の『真左古』に、「是からも未だ幾かへりまつの花」の一句を入集し「渭浜庵執筆一南」と記している。これが、一茶の俳諧活動を知ることができる最初の資料である。

天明八年（一七八八）、一茶二十六歳の折、元夢が前号「安袋」の名で撰した今日庵安袋編『俳諧五十三駅』には、一茶の句が「東都菊明」の俳号で十二句入集している。

²¹ 小林計一郎、前掲『一茶－その生涯と文学』、三〇三頁。

²² 正徳三年（一七一四）～寛政七年（一七九五）。

²³ 鈴木寿校訂『御家人分限帳』（近藤出版社、一九八四年）。

苔の花小疵に咲や石地藏	菊明
払子ほど僧の引行根芹哉	〃
色鳥や木々にも花の放生会	〃

同年八月に安袋の序で風後²⁴が撰した『百名月』や、寛政元年（一七八九）の元夢序による元夢門人の玄阿²⁵立机記念集『俳諧柳の友』などにも今日庵執筆菊明の号で次の句が入集している。

名月をかさねつこけつ波の門	菊明
振り替る柳の色や雨あがり	〃
酔てから咄も八重の桜哉	〃

同寛政元年三月の元夢序撰の『俳諧千題集』には三句入集しているが、そこでは一茶の号を用いている。芭蕉の句や『おくのほそ道』のパロディや、擬人法を用いたり、風刺を利かしたり、独特の社会への皮肉なども交えて詠まれており、後の一茶調が早くも表白されている。

象潟もけふは恨まず花の春	一茶
木々おのおの名乗り出たる木の芽哉	〃
騒しき世をおし祓て遅桜	〃

後の一茶調を思わせると述べたが、こうした傾向は当時の葛飾派の特徴でもあったようで、一茶が「ふと諧々たる夷ぶりの俳諧を囀りおぼゆ」と記したのも、その原点はこのような所にあるようである。渭浜庵素丸の『夏孟子論』（寛政二年・一七九〇）には、次のような記述がある。

²⁴ 風後は（風五）寛保二年（一七四二）～寛政三年（一七九一）。小林氏。通称・喜左衛門、別号・不二庵。出羽国山形の豪商で、五代目出羽国宗匠となる。俳諧物語『五月物語』がある。

²⁵ 玄阿は生没年不詳だが、文安五年（一四四八）まではその存在が確認されている。連歌作者。良基の晩年の連歌会に一座している。

俳諧ハナ、理屈ヲ嫌ヒ道理ニ遊ブ物也。我ハナ、夏ノ始ノ草木トイフコト也。門前
ノ糊売婆々、石ナゴトル童部モ合点スベシ。作意ハ詩歌ヲハグラカシテ、其詞ヲ奴婢
ノゴトクニ遣ヒテ、シカモ心ハ詩歌ニ丈劣ラズ²⁶。

素丸はこのように葛飾派の特徴を述べた後に、元夢の句を例に引いている。「ふつきつて
登れば坂に散る桜」「木の間もる月をちからか啼蛙」「風呂敷に暑さ背負ふて野中哉」「蟬よ
蟬よ衣忘るな三保の松」などの句を挙げている。いずれも俗語や教訓や格言のような句調
である。そうした意味では、一茶のいう「夷ぶりの俳諧」といえよう。

初学の頃に習い覚えた句調というものは生涯その根底を成し、句柄となってその人独特
の調子となるものである。あの口語句的な一茶句は、葛飾蕉門に入門した時点で身に付い
たものであった。葛飾蕉門の俳風は、当時の江戸の一般的な洒落風²⁷とは明らかに異なっ
ていた。

享和四年（一八〇四）は、二月十一日から改元されて、文化元年（一八〇四）となり遂
に一茶は四十二歳になった。この年から文化五年まで、一茶は句日記を綴るようになった。
この句日記は『文化句帖』と呼ばれている。その巻頭には「今年革命ノ年ト称ス。倩四十
二年他国ニ星霜ヲ送ル」²⁸と記している。「革命」とは陰陽道で「辛酉」の四年後の「甲子」
の年を指し「甲子」は変乱の多い年とされている。文化元年が「甲子」であるから一茶の
錯覚であろうが、四十二年の歳月をふりかえって、この年に賭けようとする意気込みがに
じみ出ている。この年より一茶の身边は俄かににぎやかになっている。建部巢兆、松窓乙
二、鈴木道彦、加舎白雄、夏目成美などと風交をかわすようになり、その他儒者の亀田鵬
斎²⁹、会田算左衛門（数学者）³⁰などとも交流を持つようになっている。一茶はこの頃から
独特の世界を築いていくようになる。おそらくそうした独自の句調が、他の俳家達にも認
められるようになったということでもある。

²⁶ 『俳文学大系註釈編』第一（大鳳閣書房、一九三〇年）、「序文」二十五頁から再引用。

²⁷ 洒落風とは元禄末期から其角がはじめた付合の新風をいう。伝統にこだわらない新規な体で、連
中でなければ理解できない難解さを好み、座興洒落の会を楽しんだらしい。一茶の頃には末流にな
っていて、脱線の度が激しくなっていた。

²⁸ 『一茶全集』二、一八一頁。

²⁹ 宝暦二年（一七五二）～文政九年（一八二六）。江戸時代中期から後期の儒者。井上金峨に学び、
江戸で塾を開く。生涯仕官せず、寛政異学の禁では、同門の山本北山らとともに反対し、下町儒者
の巨頭と目された。

³⁰ 会田算左衛門は享保二年（一七一七）～天明八年（一七八八）。数学者で会田吾山の父。俳諧師
越谷吾山は、佐久門柳居、のちに白井鳥酔に俳諧を学び、曲亭馬琴の師でもあった。

寝そべつてふんぞりかへつて星迎	一茶
べそべそと花火過けり角田河	〃
ざぶりざぶりざぶり雨ふるかれ野哉	〃
七日目にころころもどる猫子哉	〃
とら鰻の顔をつんだす葉かげ哉	〃

自分の周辺やその目に映じた素材に対して、俗語や畳語をふんだんに使って大胆に詠んでいる。俳諧における俗語や平語の使用は、発生期からの特徴でもあり、この時代にはさらに流行してくる田舎体³¹の俳諧にも、そうした特徴が見られるようになって来るのである。この頃に流行した田舎体は、俳諧作者自らが己れの姿を田舎人と認め、田舎を見下して俳諧の対象とした点に特徴があった。一茶のそれは、むしろ都市文化になじめず、都市型の洒落た句に反発し、故郷信濃の山河や風俗に心ひかれて生まれたものである。この頃俳諧はすでに全国に普及し誰もが嗜むようにもなっていた。

一茶は俳号を始めるに当って、一南を用いたが、その後は自己の運命に従うようになってくると変えている。一南、圀橋、菊明、阿道、亜堂、雲外、俳諧寺などを名乗っている。天明七年春頃に大阪から江戸に帰住していた小林竹阿の二六庵で連俳の秘書『白砂人集』を手写して、奥書に「小林圀橋」と署名をしている。天明八年八月には、法眼苔翁から譲られた『俳諧秘伝一紙本定』の表紙には、「今日庵内菊明」と書き、奥書には「蝸牛庵菊明」と署名している。また森田夢編『俳諧五十三駅』には、「今日庵菊明」という俳号で入集し、寛政元年（一七八九）には、今日庵の俳諧の催しを取りしきる大事な役名である執筆を務めている。

森田元夢は下総布川の出で、江戸に出て御家人となり、森田秀安、あるいは秀重と名乗った。葛飾派二世の馬光が百五十石取り、三世素丸は五百石取りの旗本であった。元夢も御家人の株を買ったらしく、『御家人分限帳』には百五十石の森田氏は二家ある。いずれも下野那須郡下荘森田の出自である。鎌倉幕府以来、御家人となっている。馬光の門人となり、その没後は素丸の門人になっている。後に素丸から二世今日庵の号を許されている。一茶は天明八年の頃には元夢の今日庵に同居して執筆を務めていたので、「今日庵内菊明」

³¹ 俗に田舎蕉風といわれる。安永（一七七二）から天明期（一七八九）に勢力を強める。都市系蕉門側が、地方系蕉門俳壇や俳人を見下げて呼んだ語。

と表紙に記し、奥書は、未だ誰も名乗らない故郷を想いみずから「蝸牛庵菊明」と記したのである。

一茶は、元夢に入門してすぐに老俳人の竹阿の身の回りの世話を命じられ、竹阿と同居するようになった。竹阿³²は、常陸国の人で、馬光に入門し、同門の筆頭となった。高潔な人物で旅を好み、西国に門人が多かった。八十一歳で没し、二六庵了山居士といわれた。墓所が江戸蔵前長応院にある。別号に北窓庵がある。一茶は葛飾派の統率者素丸の指示で、竹阿の庵に同居して、その世話をしたようである。一茶が奥州行脚を志した折、下総国蕪里の松玉庵五芹を訪れている。一茶が奥州行脚を果たした翌年に竹阿は逝去した。一茶が死水を取ったことから、二六庵の印や竹阿の遺著『其日ぐさ』などを一茶が引き継いだ。こうして、一茶は「二六庵一茶」と名乗ることができるようになったのである。信濃を出郷してから十三年で、一茶は一応俳諧宗匠となった。それはこの俳諧隆盛の江戸にあって、極めて異例のことと見なければならない。

第二節 寺子屋宗匠

享和元年（一八〇一）、一茶三十九歳で、江戸に出てすでに二十四年が経過していた。この年の三月に父が病に伏していることを知った一茶は、取るものも取りあえず帰郷し父の看病に努めたが、その甲斐もなく父弥五兵衛は五月二十一日にこの世を後にした。継母と異母弟仙六との対話は進展せず激化するばかりであったことから、一茶はいったん江戸に戻ることにした。翌享和二年正月から、一茶は『享和二年句日記』を記すようになった。以後一茶は『享和句帖』『文化句帖』『文化句日記』『文政句日記』を書き残すようになってゆく。

『享和二年句日記』には序文はなく、扉に「二柳何左エ門、田ノ口之聳」とか「二柳之男、田ノ口酒や、三月二十七日、善光寺へ出テ今不帰、江戸屋ノ翁」と記されていることから³³、この年の正月も信濃柏原に帰っていたことがわかる。また蔵書印の下には墨筆で「一茶翁四十歳」と記されている。また『享和二年句日記』の五句目から「三阿房が閑室

³² 宝永七年（一七一〇）年～寛政二年（一七九〇）、

³³ 『一茶全集』二、七十一頁。

をとふ」³⁴と題されて十五句が記されている。

凍どけや敷居のうちの宵の月	一茶
つやつやと露のおりたるやけ野哉	〃
雑煮餅深山榊もおり添よ	〃
我見ても二度立寺や山ざくら	一茶
朝もやのかかれとてしもなはしろ田	〃

このような田舎の景と思われる句に一茶の自筆で「お七風田舎に残る」³⁵と散らし書きがあり、また一句目から数えて二十句目あたりにも「お七風におかされて」と記されている。その他「お七風におかされて男哉」ともある。「お七風」は、享和二年（一八〇二）春頃から初夏にかけて全国的に流行した風邪で、多くの死者を出している。こうした記事から一茶は享和元年三月、享和二年正月と帰郷し、さらに享和二年夏にも帰郷し、信濃柏原に帰ることが多くなっている。この句帖の七月二十日には、浅間山の大洪水（この年七月に浅間山が大噴火し、その火砕流でせき止められた利根川とその下流域で洪水がおこった）。一茶は素早くこうした事に反応し、「洪水の尺とる門よ秋の風」などと一緒に、故郷を詠んだ句を添えている。

有明に躍りし時の榎哉	一茶
草の蝶大雨だれのかかる也	〃
よひ闇の一本榎なくかはづ	〃
湯の里とよび初る日やむら燕	〃
段々に雁なくなるよ門の月	〃
大あれのけもなき月の御山哉	〃

こうした故郷の句と家の門口にあった大榎を詠み「野尻湖光、柏原観国来たれば、かのふや吉兵衛へ訪ふ」³⁶と記されている。観国は、柏原の本陣中村六左衛門利賓のことで一

³⁴ 同上、七十二頁。

³⁵ 同上、七十八頁。

³⁶ 同上、七十四頁。

茶の門人であり、本陣の主人ながら寺子屋塾を開き、子弟の教育にも熱心であった。一茶も観国邸に行っては子ども達にも手習いを教えた。この頃から一茶は幼児俳句³⁷、童子俳句を詠んでは、子ども達にも作句を試みさせ、さらには自句を手習いのお手本にもしている。有名な「雀の子そこのけそこのけお馬が通る」や「やせ蛙負けるな一茶これにあり」「出てゆくぞなかよく遊べきりぎりす」などがあるが、こうした句は一茶四十歳の頃から俄かに多出する。『享和二年句日記』に続く『享和句帖』³⁸は、享和三年四月から十二月までの句日記であり、この句日記には前述した童子句、子ども俳句があまたある。

鳴ながら蛙とぶ也草の雨	一茶
水鳥のあなた任せの雨夜哉	〃
大名のなでてやりけり馬の汗	〃
大根やひとつ抜てはつくば山	〃
丘の馬つ待にあき顔や大根引	〃
三人の中の一人は時雨哉	〃
また来たら我家忘れな行燕	〃
御馬の屁ながれけり萩の花	〃
雪解けて嬉しさう也星の顔	〃
秋の風親なきに我を吹きそぶり	〃
近道はきらひな人や枯野原	〃
馬上から黙礼するや薄霞	〃
大名の笠にもかかる夜露哉	〃
深さうな所もありけり天の河	〃
夕暮やひざをいだけば又一葉	〃

³⁷ 「幼児俳句」「童子俳句」は、芭蕉が「俳諧は三尺の童にさせよ」と述べたことから、作句するに当たっては、童心に帰り、素直に詠みなさいという意味に捉えていたが、今日では金子兜太らの推奨によって「子供俳句」として幼児に詠ませることが流行している。全国の小学校で盛んになった。

³⁸ 『享和句帖』には享和三年（一八〇三）四月十一日から十二月十一日までの作品があり、一茶四十歳の作である。『寛政句帖』に続いて現存する一茶の句帖としては第二に当たっている。本来題簽を持っていなかったが、大正十五年五月に信濃教育委員会一茶叢書第一篇として出版された際に、このように題された。この後の十二月十一日以降は『文化句帖』となる。これを見ると、江戸、本所、馬橋、流山、布川が一茶の巡回指導コースと見られる。

これらの句を特別に抽出したわけではない。『享和句帖』はほとんどこのような調子で詠まれているのである。一茶の独自の俳境はこの時期にすでに確立していた。またそれは寺子屋の師匠としても子ども達の手本として必要であったのである。『享和句帖』の扉には「江戸本所五ツ目大島、愛宕山別当、一茶園雲外」³⁹と記されている。

一茶が出すこうした句会報や一茶宛の手紙は、京屋庄七が取り扱っていたようである。「文音所、大門通和泉町京屋庄七方」となっている。一茶園雲外は一茶が行った通信教育による俳諧指導である。毎月の課題が出されて、それが一茶の手元に帰り一枚刷りとなって配布される仕組みで、俄かに高まった江戸時代のネットワークを利用した通信句会指導であった。

この頃には「月並発句会」が全国的に流行した。俳諧宗匠は点者となり、投句には入花料を添えて提出し、点者の俳諧宗匠から高得点を獲得すると秀句として入選し「返草」と呼ばれる刷物が返却された。こうした俳諧活動を支えたのは「連」とか「社中」と呼ばれる大小さまざまな組織で、「月並発句会」の通知や「返草」の配布などは俳諧を嗜む地方の人々によって行われた。数例をあげると、東京の多摩地域では文化文政期（一八〇四～三〇）、一茶四十歳の頃であるが、月並発句会が大いに盛行した。そのなかで玉石館梅里⁴⁰（一七七八～一八三九）の名が知られている。本名は石川亀三郎（後弥八郎）といい代々名主役を務めた。句会には府中、八王子、五日市、青梅という地域から多くの門弟が参加している。同じ頃この地には森田友昇（一八二九～八七）が活躍し、多摩や福生で俳諧活動を行った後、八王子や横浜に進出し、明治十一年に蕉風伊勢派の松原庵を名乗った。松原庵はその後埼玉の榎本星布⁴¹に引き継がれた。また埼玉では川村碩布（一七五〇～一八四三）が白雄門で学び、葛三のあとを受け春秋庵を継承した。本名は川村七郎平文久といい、馬場村の名主の家柄である。これら地方俳壇を担った人々は皆名主・庄屋で寺子屋を営み、在村俳人を育成したり地方文化に貢献したりしている。

江戸時代の子ども達は寺子屋で文字を読み、算をおぼえ、書き方を学んだ。そうして生活する上で必要な知識を得ていった。幕末維新期に日本を訪れた外国人の多くが、日本人の識字率の高さを賞讃しているように、江戸時代の日本は、世界最高の教育水準を誇る教

³⁹ 同上、九十一頁。

⁴⁰ 玉石館梅里 文化六年（一八〇九）～明治六年（一八七三）。大橋氏、通称・茗荷屋甚蔵。別号・清遠舎。尾張国名古屋下樽町の畳表・紙類商人。沙歐の高弟で、幕末尾張俳壇の重鎮となる。

⁴¹ 享保十七年（一七三二）～文化十一年（一八一四）。女流俳人。初号を芝紅、絲明窓ともいった。武蔵国八王子の名家に生まれ、幼少より俳諧に親しんだ。明和七年（一七七〇）寡婦となり、天明八年（一七八八）に鳥酔の松原庵を継承する。

育先進国でもあった。石川松太郎氏の『藩校と寺子屋』によれば、十九世紀に入った文化期(一八〇四～一八一七)頃の江戸の寺子屋の数は、「文献によってその数は違うけれども、大きなもので四五百、ささやかなものまで加えれば千五百前後も営まれていた」⁴²という

寺子屋の師匠とはどんな人物であったのであろう。明治四年(一八七一)東京府が小学校設立のために寺子屋師匠に提出させた「開学明細調」には、七百六十二名分の旧身分が記されている。最も多いのは平民で、雑業、農民、商人などが圧倒的に多い。次に多いのが士族である。なかには女性の師匠が八十六名ほど確認されている。農村部において師匠となる人物は、ほとんど名主庄屋、または江戸に出て財を成し、生業に成功した人々であった。江戸時代の庶民教育の研究は、農村部を対象にした考察に比べて都市部を対象にした考察はそれほど多くはない。江戸時代の日本を世界有数の教育国として見る説も多いが、江戸市中の数について見れば男女がほぼ等しく学ぶ社会であり、統計もないのだが、それは的是はずれとは言い難い。庶民教育で言えば、生活に必要な知識であれば多少の違いはあれ、ある程度共有する常識のようなものがあつたといえる。俗に「名頭と江戸方角と村の名と商売往来これでたくさん」というように、学ぶべき共通の内容があつたようである。現代教育の教養課程に匹敵するものである。

日本では古くから名筆と呼ばれる書家たちがいたが、なかには多くの弟子を抱える者もあり、手習い師匠へ教授した者も少なくない。一茶が江戸で俳諧師の修業をしていた時期に、巻菱湖、貫名海屋がおり、一茶が奉公したといわれる市川米庵なども知られていた。少し前には、庶民に親しまれた書家の三井親和(一七〇〇～八二)がいた。別名を深川親和ともいわれ、本所相生町に住み『東都歳事記』『江戸名所図会』などの挿絵、さらには浮世絵にも描かれている神社祭礼の幟字などをよくした。彼の篆書は手拭いや浴衣など染め物に使われて、俗に「親和染」と呼ばれて流行した。子ども達はそうした先生に師事して書を学び、その中からは子どもの能書家も輩出した。幼い頃より字が上手いことで人々の賞讃を呼び、浮世絵に描かれるようにまでなった子どももいた。浮世絵師の鳥居清長は、天明三年(一七八三)に「玉花子の席書」という錦絵を書いている。玉花子は当時九歳で、幼少期に才能が開花し、世間の耳目を集めた子どもだった。師匠に対する子どもの尊敬はほぼ百パーセント、父兄の尊敬も九割に及んだといわれている。

一茶の句帳に『文化三より八年句日記』がある。一茶四十三歳から四十八歳までの五年間の記録である。帰郷定住すること三年前までの記録である。上総・下総地方の葛飾地方

⁴² 石川松太郎『藩校と寺子屋』(教育社、一九七八年)、一四四頁。

をめぐる田舎わたらいの俳諧行脚は相変わらず続いていたのであろうが、住居は変わらず、四十一歳で一戸を店借した本所相生町五丁目に住んでいた。文化六年（一八〇九）、一茶四十七歳、三月五日に一文を記している。「耕舜先生挽歌」⁴³と題しているので惜別の文である。「耕舜」については、文化四年四月十六日の条に「耕舜没」とあり、十七日の条には「柳沢勇蔵今日葬」とある⁴⁴。耕舜は隅田川と中川をつなぐ運河の堅川のほとりに住んでいた。

第三節 子どもへの愛

寺子屋の師匠であった滝耕舜は江戸での無二の友であり、唯一人の一茶の親友であった。一茶は滝耕舜の死を悼む文を書いている。

耕舜先生挽歌

柳沢勇蔵といへる人は、吹風の跡かたもなき讒にあひて、武門を放たれ、ふたたび君に仕ふるものうしと思ひけん。かつしか堅川のほとりに、かりそめの栖をむすび、名を滝耕舜とよび、なにはづ、あさか山のかなもじを、わらはべに教るを常の産として、みづから菜つみ水汲つつ、筆の命毛の細きけぶりをぞ立ける。我また此門遠く住居して、三ツ四ツニツ橋をへだてぬれど、其したしみは隣よりも近く、花にうかる春の日も必杖をともし引、月にかなしむ秋の夜も債一枚の蕙にはらばひ、或はおなじ蚊屋にをどり入、あるは一つ衾に足をくるみ、一日逢はざれば百日の思ひをなし、星霜十とせあまりのむつみ浅からず、深からず、石川の水のさらさらと流そそぐがごとく、日々夜々の物がたり、倦時なく、たのしみも共に樂み、なげきもおなじく難きける。しかるに、二月中ごろとよ、ふと病に伏して、きのふよりはけふと顔重たげになり行ば、枕もとによりて、神にいのり、仏にちかひて、はやくもとのごとくならば、真間江の穴足、角田川の涼に誘引んなど、ちからを添へ侍りけるに、尚玄が薬も日増にたのみうすく、四月十六日といふ日、常よりも心ちよげに、後のこと迄しかじか云終りて、眠れるやうに息たへたり。あはれ此人とは、すくせいかなるちぎりや有けん、彼は我をちからに思ひ、我はかれをたよりにしたひて、田舎修行のかへるさにも、十

⁴³ 『一茶全集』二、五六三頁。

⁴⁴ 同上、四〇六頁。

度が十度立よりて、ははきぎのあるにもあらぬ咄さへ、隙ゆく駒のかげ見へぬ程に居過しつつ、旅のうさをもなぐさめしが、思ひきや、けふ此人を夢になして、残る淋しさをながらへ見んとは。まことに沖の舟のかちをうしなひ、老の波のよるべしられぬ心ちし侍る。あぢきなき世のならはしにこそあめれ。

此の次は我身の上かなく鴉 一茶⁴⁵

滝耕舜は江戸本所の豎川べりに住んでいたもので、一茶とは川をはさんで相向かいにいた。本名を柳沢勇蔵といい、かつては武士であったが浪人となって寺子屋を開いて生業としていた。享和三年（一八〇三）、一茶が四十一歳の頃から知り合いとなった。一茶が大島愛宕町で出した『一茶園月並』にも投句をしているから俳諧も嗜んでいたのであろう。当時の寺子屋師匠は、俳句も川柳も狂歌もなんでもこなせなければならなかった。一茶とよほど気が合ったらしく、記録だけでも、文化二年二月には上野、根津権現に、同年六月には浅草富士権現、同三年三月には芝増上寺に、同年七月には市村座見物に、同年九月には飯倉神明宮などに同行している。また「耕舜先生挽歌」⁴⁶では一緒に花見に行ったり、一枚の筵に腹ばいになって月見をしたり、一つ蚊帳、一つ布団に寝て、いつも助けられたり助けたりしながら話も尽きないのであった。一茶は、房総の巡廻俳諧旅行の行き帰りには必ず立ち寄っていた。寺子屋の子ども達に一茶も手習いを教えた。年齢も近かったようで、一茶は誰よりも気を許して交わることができた。それだけに、耕舜の死は大きなショックだったに違いない。

一茶四十五歳の四月十六日は爽やかな晴天だったが、親友の死を押し止めることはできなかった。一茶は急に故郷に帰り定住することに思い到った。七月は父の死後六年を経過していたので、七回忌の法事ということも心に期して中仙道から北国街道へと旅立った。まるで、耕舜が帰郷定住への行動を決断させたようなものであった。「君子の交わりは淡きこと水のごとし」のように、十年を共にすごし、これまで二人は妻帯することもなかった。そういう二人の間柄は、あたかも兄弟のようであった。一茶も子どもに俳諧を教え、手習いを教えてすごした最も充実した日々であった。「短夜やけさは枕も草の露」「風そよそよ空しき窓をとぶ螢」「時鳥さそふはずなる木間より」「夕月や門の涼みも昔沙汰」などとい

⁴⁵ 同上、五六三頁。

⁴⁶ 文化四年（一八〇七）四月十六日に没した滝耕舜は翌日芝の光雲寺に埋葬された。この晩、一茶は「滝耕舜先生挽歌」という一文を草したが、これはその後十一月十九日に俳文として「澁温泉行」という一文と一緒に完成を見ている。

う句を詠み、一茶は耕舜の死に押されるようにして文化四年（一八〇七）七月二十二日に意を決して故郷に入った。「牛盗人トイハルルトモ、モシハ後世者、モシハ善人、モシハ仏法者ト見ユルヤウニ、フルマフベカラズトコソ仰セラレタリ」⁴⁷と記している。牛盗人といわれようが、何といわれようが、ここは善人振るまいをし、後世者、仏法者をよそおい目的だけはしっかり固めておきたい。そういう有難い教えもあるのだ、と心に決めて、父の遺言の田畑家屋敷の折半を弟の専六と継母に実行させようとの意気込みが感じられる。

この交渉は難行したが、文化五年（一八〇八）十一月二十四日に成立し、「取極一札之事」⁴⁸という文書が交わされた。「双方トモ、已来カラコレムツカシキ儀申スマジク候」として署名捺印している。一茶と弟仙六とは、これより仲睦まじく日を送るようになる。この時一茶は「古郷やよるもさはるも茨の花」の句を書き込んだ扇面真蹟を残している。この父の残した遺産、田畑を折半させた行為は当然村中に広がり、またとない村中の噂話として広がった。

文化八年（一八一―）、一茶は四十九歳となった。この一年間の句文章は『我春集』と名づけ、「我春も上々吉ぞ梅の花」の句を巻頭に添えている。序文もあり「発会序」に次のようにある。

昔々清き泉のむくむくと湧き出る別荘をもちたるものありけり。たやすく人の汲みほさんことをおそれて、井筒の廻りに覆におほひを作て、倩年をへたりける程に、いつしか垣もくち、水もわろくなりて、茨・おどろおのがさまざまにしげりあひ、蛭・子子ところ得兒にをどりつつ、つひに人しらぬ野中のむもれ井とぞなれりける。

此道こころざすも又さの通り、よりより魂の醜を洗ひ、つとめて心の古みを汲みほさざれば、彼腐れ俳諧となりて、果は犬さへも喰らはずなりぬべき。されどおのれが水の嗅きはしらで、世をうらみ人をそしりて、ゆくゆく理屈地獄のくるしびまぬかれざらんとす⁴⁹。

ここには一茶が新風を起こし、俳壇をリードせんとする志が述べられている。下総を訪れては西林寺を宿所とし、同じ信州出身の住職鶴老⁵⁰と手を結んで、新しい俳諧文学の振

⁴⁷ 『一茶全集』二、四五八頁。

⁴⁸ 一茶記念館資料。

⁴⁹ 『一茶全集』六、十五頁。

⁵⁰ 茨城県北相馬郡守谷町の人。化六庵と称した。飯田市の出身であるが、出郷後は上野寛永寺にお

興をはからんとするといふのである⁵¹。一茶にはすぐれた短文はいくつもある。『一茶留書』にある二十六編の俳論は、貞門・談林から享保・天明期に至る古俳書の抄録ではあるが、一茶の俳諧観を知ることができる極めてすぐれた論である。まとまった俳文や俳論らしいものもない。一茶の俳諧観を知る上で、この「発会序」は極めて貴重なものである。これまでの一茶の文章には見られなかった意気込みが感じられる。この年の春は一茶にとってまさに気分一新、若やいだ気持ちになれたことであろう。またこの年は気分だけでなく多くの人々の出入りがあり、一茶社中を結成せんとする意気込みが感取できる。当然今までは結びの語も「巢なし鳥」「乞食一茶」などであったが、この文章の署名は「しなのの国乞食首領一茶書」としている。そうした奥書に見られるように、一茶はこの頃から江戸を去り柏原定住を考えていたようである。

文政二年（一八一九）、一茶は五十七歳になり、この年多くの悲しみに出合っている。『おらが春』の中の最大の悲劇は、二歳を迎えた愛娘「さと」の死であろう。

閨に泣声のするを目の覚る相図とさだめ、手かしこく抱き起してうらの畠に尿やりて乳房あてがへば、すはすは吸ひながら、むな板のあたりを打たたきて、にこにこ笑ひ顔を作るに、母は長々胎内のくるしびも、日々 襦袢の穢らしきも、ほとほと忘れて衣のうらの玉を得たるやうに、なでさすりて、一入よろこぶさまなりけらし。

蚤の迹かぞへながらに添乳哉 一茶⁵²

無上の喜び、満足極まる、という様子であるが実はこの後に最大の悲しみに襲われるのである。この文章の後に「よりより思ひ寄せたる小児をも遊び連にもと爰に集まりぬ」⁵³と書かれてあり、この後に十一句が収められている。その中から一茶の心中を察するにあまりある句がある。

柳からももんぐああと出る子哉 一茶
わんぱくや縛られながらよぶ蚩 //

り、この人が一茶の身元保証人となったのであろう。その後直末寺の守谷西林寺住職となった。文化十二年十月二日に上野寛永寺の開山忌があり、一茶も鶴老と一緒に出席した。化六庵は現在まで現存していた。この人が請人であった。

⁵¹ 『一茶全集』別巻、一七四頁。

⁵² 『一茶全集』六、一四八頁。

⁵³ 同上、一四九頁。

蓬萊になんむなんむといふ子哉	〃
餅花の木陰にてうちあはす哉	〃
年間へば片手出す子や更衣	一茶
たのもしやてんつるてんの初裕	〃
名月をとつてくれろとなく子哉	〃

心身ともに健やかに育っている子ども達の姿が如実に描かれている。「初裕」は更衣の意であろうが、去年の裕はすでに短くなっていて着ることもできない。かわいい手足がによっきりと出ているのはまことに愛らしく滑稽でもある。一茶がいうように愛娘の「遊びの連れにもとめた句である」が、ここに詠まれている子ども達の姿はそれぞれ異なったタイプの子である。親が子どもに対する期待はかくも大きく、我が子に対する愛情は海よりも深いものなのである。しかし一方では他の子どもと比較したり、女兒であるが故に男児であったならばと考えたりする。またそれは期待となり、ないものねだりとなって複雑なものとなっているのである。六月二十一日に突然異変が起こった。一茶も妻きくも突然のことであったので、ただ呆然とするばかりであった。

楽しみ極まりて愁ひ起るは、うき世のならひなれど、いまだたのしびも半ばならざる千代の小松の二葉ばかりの笑ひ盛りなる緑子を、寝耳に水のおし来るごとき、あらあらしき痘の神に見込れつつ、今水濃のさなかなれば、やをら咲ける初花の泥雨にしほれたるに等しく側に見る目さへくるしげにぞありける。是も二三日経たれば、痘はかせぐちにて雪解の峽土のほろほろ落るやうに、瘡蓋といふもの取れば、祝ひはやしてさん佞法師といふを作りて、笹湯浴せる真似かたして神は送り出したれど、益々よはりて、きのふよりけふは、頼みすくなく、終に六月二十一日の薨の花と共に此世をしぼみぬ。母は死兒にすがりて、「よゝよゝ」と泣もむべなるかな。この期に及んでは、行水のふたたび帰らず、散る花の梢にもどらぬくひごとなどとあきらめ兒しても、思ひ切りがたきは恩愛のきづな也けり。

露の世は露の世ながらさりながら 一茶⁵⁴

愛娘さとは痘瘡で亡くなってしまった。『八番日記』の同月同日の記事には、「サト女、

⁵⁴ 同上、一五〇頁。

此世ニ居事四百日、一茶新シク見ルコト百七十五日。命ナル哉、今巳ノ刻没。未ノ刻ニ葬。夕方斎フルマイ」⁵⁵とある。葬は葬儀のことであるが、巳の刻に没し、未の刻に葬式をするのは少々早すぎるようだが、子どものことだから簡単に済ませて火葬をしたものと思われる。『八番日記』によれば、二十七日の初七日には納骨も済ませている。「歓楽極マリテ哀情多シ」の感もある。

江戸時代の幼児死亡率は極めて高かった。子たくさんで知られる十一代将軍徳川家斉は、正室と側女が四十人あり、五十九人の子をもうけたが、四十歳以上まで生きたのは僅かに七人にすぎなかった。十五歳を超えたのは二十一人で半分にも満たなかった。実に三十八人が二歳未満で死亡しており、六十九パーセントの死亡率で、御典医・奥医師による最高の医療でも乳幼児の七割を救うことができなかったのであった。乳幼児の死亡率が異常に高かったのは、地域によっては墮胎や間引き、捨て子などの影響もあったが、ほとんどが病気で、主な原因は、痘瘡（疱瘡・天然痘）、麻疹（はしか）、痢病（赤痢・疫痢）、傷寒（腸チフス）などの伝染病やその他の小児病などであった。こうした幼児の病に対して親も無力で医師も伝染病に対しては対処法もなく、痘瘡患者が出れば、親子であってもわずかな食物のみを持たせて、人里離れた山中へ置き去りにしたり、妊婦などに次々と蔓延すると麻疹の恐怖に怯えながらも、身重の体で四、五キロも山野を逃げ廻って無事に出産を遂げたという話も伝わっている。一茶の「露の世は露の世ながらさりながら」には、一茶独特の伝統俳諧にありながらも他には見られない、心に訴えて来る強い思いがある。また『おらが春』には一茶独自の幼児俳諧というか、あるいは童心俳諧ともいえるべきかと思われる句が創出されて来る。

我と来て遊べや親のない雀	一茶
かくれ家や猫にもすゑる二日灸	〃
雀の子そこのけそこのけ御馬が通る	一茶
麦秋や子を負ながらいはし売	〃
はつ瓜を引とらまへて寝た子哉	〃
なむあみだ仏の方より鳴蚊哉	〃
ゆうぜんとして山を見る蛙哉	〃
魚どもや桶ともしらで門涼み	〃

⁵⁵ 『一茶全集』四、五十六頁。

乳飲子の風よけに立つかがし哉

〃

一茶には子どもに材を取った俳句や小動物に対する句を多く見ることができる。「あついとてつらで手習した子哉」「年問へば片手出す子や更衣」「わんぱくや縛られながらよぶ蛭」「露の玉つまんで見たる童哉」などがあり、子どもに対する愛情があふれている。

第四節 寺子屋川柳と一茶

一茶は信仰心が篤かった。「なむあみだ仏の方より鳴く蚊哉」「ともかくもあなた任せの年の暮」「やけ土のほかりほかりや蚤さはぐ」などの句に、そうした信仰心を見ることができる。一方、子どもを詠んだ句は、次々と生まれながらも死んで行った我が子達に愛情を寄せる思いから生まれたものであることは確かである。またそう解釈されても来た。

だが「御降りの祝儀に雪もちらり哉」「北国や家に雪なきお正月」「弥陀仏をたのみに明けて今朝の春」「おどる魚桶とおもふやおもはぬや」「名代のわか水浴びる雀哉」「隠家は昼時分さす初日哉」「重箱の銭四五文や夕時雨」「頬べたにあてなどしたる真瓜哉」「鳴田螺鍋の中ともしらざるや」「あついとてつらで手習した子哉」などの句については、川柳に近い句だという川柳作家などもいる。また一茶は「手習い」に通う子、「寺子屋」で学ぶ子ども達を句にも詠んでいる。これらは江戸にいる時に滝耕舜の寺子屋師匠を助けたり、故郷に定住してからは、中村観国や西原文虎らが郷土の子弟教育のために開いていた寺子屋や手習塾などでも教えたであろうし、またその手本としての俳句作品を示したことは確かで、一茶は川柳を作ろうとしてそれらを詠んだのではない。

おおい川見えてそれからひばり哉

一茶

草の葉にかくれんぼする蛙哉

〃

やせ蛙負けるな一茶これにあり

〃

やれ打つな蠅が手をすり足をする

〃

涼風の吹く木へ縛るわが子哉

〃

わんぱくや縛られながら呼ぶ蛭

〃

出てゆくぞなかよく遊べきりぎりす

〃

猫の子のちよいと押へる木の葉かな	〃
朝霜やしかも子どものお花売り	〃
門前や子共のつくる雪解川	〃
春雨や猫に踊りを教へる子	〃

人間が人間として生きてゆく営みは、善く生きようとする志であり、それ故に互いに学び、また学び合いながら生きているのである。よく生きようとする人間にとっては、生活の間にもものを感じ、考えたり表現したり創作したりする活動が生じて来る。現代の教育機関は「受ける者」と「授ける者」とで構成されているが、これは明治六年（一八七三）に定められた学校教育制度がそうした方法を取ったものであるから、明治時代以降の教育の形である。江戸時代は自由に学び、自由に教えることができた。そうした近世の寺子屋や私塾を、今までの教育史では極めて貧弱なものとし、また不十分さなどが指摘されて来た。しかし近年になってからは、そうした見方が改められ、江戸時代の「学び」⁵⁶は極めて広範で充実していたことが指摘されている。江戸の人々は学ぶことを修養や養生と考え、学ぶに値する、ありとあらゆるものがみずからを成長させるための対象と見ていた。学ぶという行為を修養や養生と捉えながらも、また一方では「遊び」としても意識し出していた。文学や芸能を「嗜み」として考え、好んで読本や洒落本、滑稽本、人情本などを読み、俳諧興行を楽しみ、川柳を作っては仲間と楽しみ、講談や寄席に興じ、歌舞伎、浄瑠璃などの観劇にも出かけた。ただし、幕府は風紀取締りから女儀太夫は禁止していた。婦女子は琴、踊り、尺八、生け花、茶道などを嗜み、日常生活を謳歌するようになった。教室で一斉に授業をする学習法は明治近代化による産物であった。

式亭三馬⁵⁷の『浮世風呂』（文化六年・一八〇九）には、当時の江戸の庶民の生活の実態が生き生きと描かれている。そのなかでお丸とお角という小娘が繰り広げる教育談義をみると、江戸の子ども達が手習いと稽古事に多忙な日々を送っていたことがよくわかる。「ま

⁵⁶ 近年、この研究は脚光を浴びている。少子化時代と江戸への回帰、環境問題、エコロジーなど、現代世相の反映から多くの書籍が出版されている。なかでも、市川寛明・石山秀和共著『図説・江戸の学び』（河出書房新社、二〇〇六年）、小泉吉永『江戸の子育て読本』（小学館、二〇〇七年）、中江克己『江戸の躰と子育て』（祥伝社、二〇〇七年）など、続々と刊行されている。

⁵⁷ 安永五年（一七七六）～文政五年（一八二二）。江戸後期の戯作者。本名・菊地泰輔、四季山人を号した。書肆（出版を兼ねた本屋）ではたらき、のちに古本屋や薬屋を営む。十九歳で黄表紙『天道浮世出星操』を発表以来、合巻本を中心に百数十点の作品を発表。代表作に『浮世風呂』『浮世床』など。

あお聴きな、朝むつくり起ると手習いのお師さんへ行てお座を出して来て、それから三味線のお師さんの所へ朝稽古にまゐつてね、内へ帰つて朝飯をたべて踊の稽古から御手習へ廻つて、お八ツに下ツてから湯へ行て参ると、直にお琴の御師匠さんへ行て、それから帰て三味線や踊のおさらひさ」⁵⁸と話している。ここに描かれている江戸の女の子達の多忙ぶりは大変な毎日であつた。琴や三味線といった遊芸の稽古のために午後から手習いを休んだり、そのために早朝に寺子屋で手習いをすませてから、家に戻つて食事をして、再び寺子屋へ行く子も多かつた。三馬の描写はそうした様子を伝えるものであろう。一茶が句に詠んだ子ども達の生活そのものでもある。江戸の娘達が遊芸の稽古に励んだのは、武家の御殿奉公にあがるためであり、町人の娘達にとって御殿奉公は数少ない立身出世の可能性を秘めた重大事でもあつたのである。そうした庶民の生活は川柳にはあまた詠まれている⁵⁹。

寺子屋に子どもを通わせる親はどのような意識を持っていたのであろう。「初午の日から夫婦はちつと息」や「七つから寺子屋にもりしてもらふ」などという川柳があり、江戸では二月の初午から寺子屋に入学するのが一般的であつた。寺子屋に通わせる目的は、もちろん手習い、読書にあつたわけであるが、これとは別に育児や保育という面もあつたようで、一歳、あるいは三歳などという乳幼児が寺子屋に入学する例もあつたようである。「初午は世帯の鍵の下げ始め」「初午はまず錠前を覚えさせ」などを見ると、子どもが寺子屋に通い始めると同時にそれが子どもの躰の最初であつた。忙しく立働かざるを得ない夫婦の姿が見えてくる。親も仕事を始め、現代と同じように鍵っ子がいたことには驚かされるのである。三歳の子どもの鍵を持たせていたのである。それだけ江戸の庶民は遅しく、子ども達も元気で幼児犯罪など皆無に近い状況で地域から大事にされていたであろう。

手習子腹が痛いと言ひ	柄井川柳
行きは牛帰りは馬の手習子	〃
手習子弁当箱をさしに持ち	〃
昼飯を外から怒鳴る手習子	〃
さはがしい八つ上りまへ九九のこゑ	〃

⁵⁸ 日本古典文学大系『浮世風呂』（岩波書店、一九六五年）、七十八頁。

⁵⁹ 『俳風柳多留全集』（三省堂、一九八〇年）。

現代の子どもと同じように登校をしぶったり、寺子屋に行きたくないという子どももあった。いやいや通う子は帰りは馬のように一目散で帰宅をする。弁当を持ったり、あるいは昼飯を喰いに帰る子もいた。現代の学校と同じように、終了時間は現在の時刻では午後三時頃であったようである。

手習子蜂の如くに路地から出	柄井川柳
手習の跡は野分の八つ下り	〃
八下り母の吹出す黒ん坊	〃
手習子母の頼みで糠袋	〃
手習子一皮剥けて飯を喰い	〃
掴まえて筆で簞を押す夜手習	〃
抜き足で飯櫃を出す夜手習	〃

授業が終わると子ども達は一斉に帰ったようで、帰った後はまことに静かで台風一過の静けさでもあった。墨を顔に塗っていたずらをしたり、あるいは勤勉な子もいて殊勝にも夜学に通った子どももいたのである。親はそういう子に夜食を用意したりして、今も昔も「学ぶ」ことに変わりはないのであった。寺子屋といえども学びの場でもあるから、羽目を外せば罰が加えられた。寺子屋特有の体罰に「棒満」というものがあった。水がいっぱいに入った茶碗と線香を持たせて立たせたり、机の上に正座をさせたりした。線香が一本燃え尽きる四、五十分は茶碗の水を一滴もこぼさずに正座をさせられたのであった。この他には「食止め」「鞭撻」「竹篋」など、鞭で叩いたり昼食抜きにさせたりした。師匠の前に正座させる「謹慎」「清掃」「留置」などもあり、あるいは大声で泣き叫ぶと老婆がやって来て詫びを入れる役割もあったらしく、「折檻をしかけ笑ひにばばあ出る」という川柳もある。寺子屋でもこれ以上改悛の見込みがないと判断されると「破門」という処置もあった。「師匠さま机は重きとがめなり」という川柳があるように、入門時に親から用意してもらった机と文庫を持たせ「二度と来るな」といって自宅に戻されたのであった。「おれとしてにらめくらする蛙哉」という一茶の句があるが、滝耕舜と親しくすごした一茶は、このような句を作りながら寺子屋通いの子ども達と接したのであろう。

曲亭馬琴⁶⁰は日本で最初の職業作家であったといわれている。馬琴が読本作家として大成するまでには板元の蔦屋重三郎⁶¹の家僕となったり、雑貨屋や下駄屋などを営んだり、様々な生業に就いたりしていたことが知られている。執筆業では生計が立たず寺子屋も経営した。その実態を知ることができる資料に『入門名簿』があり寛政九年（一七九七）から始まっている。寛政七年頃から寺子屋を始め、著述もこの頃から始めたと思われる。名簿は文化三年（一八〇六）で終わっており、末尾には「近来著述繁多につき手習童子を悉く断る」とある。『彼岸桜勝花談義』（寛政十二年・一八〇〇）という馬琴の書では、寺子屋師匠を面白おかしく描いてパロディ仕立てにしている。死後の世界の寺子屋を描いて「芸の河原の師匠菩薩」と表現し、寺子屋の師匠を「師匠菩薩」として登場させ揶揄している。遊びまわっていたずらばかりをする子を叱り袖の下を受け取っている。

子ども達が寺子屋で手習いの「お手本」として使用した教科書は『往来物』と呼ばれた。往来物とは、往復一対の書状を言った。進状（往状）と返状（来状）形式であったことから名づけられた。出版技術の発展に伴い、多種多様な往来物が発行された。師匠はそうしたお手本を著述し出版して子ども達に手渡した。師匠手書きの「お手本」が容易に出版されるようになり、幅広く使用されるようになった。往来物のうち日常的に使用する手紙文や証書類などを収録した『用文章』と呼ばれたものは、近世後期に数多く出版され広く流通した。需要が高まると更なる販売促進をはかって、書肆と戯作者との協業でますます往来物の出版が盛況になった。

戯作者のなかで最も多くの往来物を刊行したのは十返舎一九⁶²であった。板元山口屋藤兵衛との生活物・産業物・歴史物などは、数えれば三十種類以上はある。板元西宮新六との間では、道中記や往来物が中心で、『東海道中膝栗毛』もここから出されている。式亭三馬（曲亭馬琴）の『一筆啓上』（文化十一年・一八一四）は、日常で使用する消息文を収録

⁶⁰ 明和四年（一七六七）～嘉永元年（一八四八）。江戸後期の戯作者。本名・滝沢興邦。山東京伝の助けを得て黄表紙作者として出発。のち読本作者として大成した。晩年、失明しながら嫁の“路”の代筆で大作『南総里見八犬伝』を二十八年の歳月をかけて完成させた。その他『椿説弓張月』などの代表作がある。

⁶¹ 寛延三年（一七五〇）～寛政九年（一七九七）。江戸時代中・後期の代表的出版業者（板元）。江戸新吉原の細見（案内書）で利益を得て、天明三年に日本橋通油町に書店をひらいた。大田南畝、山東京伝、喜多川歌麿、葛飾北斎、東洲斎写楽等の浮世絵師と組んで、黄表紙、洒落本、浮世絵版画等を出版した。

⁶² 明和二年（一七六五）～天保二年（一八三一）。江戸時代後期の戯作者。本名・重田貞一、武士の子といわれている。大坂で浄瑠璃作者となり、寛政六年江戸に出て戯作者となる。蔦屋重三郎の書肆から黄表紙、洒落本、読本などを著し、とくに滑稽本を得意とした。代表作に『東海道中膝栗毛』などがある。

した用文章の体裁を取っていたので、寺子屋での「お手本」として最適であり、刊行後も多くの版を重ねた。また日記の書き方の要点を記した『雅俗要文』（天保十二年・一八四一）は、式亭三馬が文政十一年（一八二八）から著した日記をもとに、板元の依頼から筆耕までの経過がわかるように具体性と実用性を兼ねた希有な往来物であった。執筆から刊行までに十四年の歳月を要している。実際は文政年間に出版される予定であったが、板元の西村屋与八の経営が傾き、英文蔵の手で天保十二年に再刻された。一茶の日記類もこの影響を多分に受けている。

江戸随一の板元は『武鑑』⁶³を出版した須原屋であったが、当主の死や相次ぐ火災などで寛政年間（一七八九～一八〇一）には経営が困難になってしまった。文政年間から天保年間（一八一八～四四）に往来物を専門に手掛けた七代目須原屋茂兵衛茂広⁶⁴は、次々に往来物を刊行して経営を再建し、書籍商として重きを成した。須原屋は往来物ばかりを手掛けて経営の安定を見た。そこには寺子屋が全国的に普及発達し、教科書である往来物の需要が増加したためでもあった。子どもの早期教育や穎才教育はいつの時代も同じであったのである。『庭訓往来』は玄恵の作と伝えられ、成立は観応元年（一三五〇）、南北朝期から室町初期頃といわれているが、江戸時代に爆発的に流行した。地域別の刊行と板元は関東が最も多く、京都、大坂、秋田、山形、信濃などとなっており、寺子屋の繁栄数と比較的一致している。寺子屋の必読教科書となった往来物は、いわば必ず売れる安定した書籍であったのである。こうした傾向は、江戸のみならず地方においても同様な様相が見られ、当時の書肆の出版傾向を見ると、第一が往来物、第二が俳書と歌書、第三が戯作物で、どの地域にも少なからず往来物を出版する書肆を観取できる。江戸時代を代表する絵師の葛飾北斎⁶⁵も『女今川』の挿絵を書いている。挿絵を掲載することで、寺子屋の採用も増えたのである。

⁶³ 徳川幕府の職制や役職者の就任年月日、全旗本、全大名および家臣の氏名・系譜・知行高・邸宅・家格・家紋などを記した総合名鑑。徳川幕府の初めから終幕まで、全ての士分を記録した戸籍といえる。

⁶⁴ 生没年不詳。江戸時代前期の板元。万治年間（一六五八～六一）に、生地・紀伊国・田原郡・栖原村から江戸に出て開業。武鑑類、江戸図類の版權を取って江戸最大の書物問屋となった。茂兵衛家は須原屋一門の総本家で、明治三十七年まで九代つづいた。

⁶⁵ 宝暦十年（一七六〇）～嘉永二年（一八四九）。江戸時代後期の浮世絵師。名は時太郎、のち鉄蔵。十九歳で勝川春章の門人となり勝川春朗と号した。役者絵で人気を博し、のちに狩野派・住吉派・琳派さらに洋風銅版画の画法を取り入れ、独自の画風を確立した。七十年間にわたり旺盛な作画活動をつづけ、優れた数多くの作品を残した。奇行でも知られ、生涯九十三回もの引っ越しをした。一茶と知り合い、信州小布施に住み作品も残した。

第五節 動物を詠む一茶

一茶は様々な子どもの様子を句にしている。擬態語や擬音語などを用いて写實的に表現した。子どもの動作や表情をつぶさに観察して特徴を捉え、リアルに直観的に表現している。一茶は文政二年（一八一九）六月二十一日、最愛の娘さとを庖瘡で失う。以後一茶は「童児俳句」を多く詠むようになったとする説が多いが、今まで見て来たように、実はそれ以前にも、一茶は子ども達を詠句の対象としていた。それは江戸市中を転々とする途なかで寺子屋の師匠と出合ったり、俳諧行脚の途中で私塾、手習塾を経営する多くの弟子の家に宿泊して子ども達の生態に接して来たからである。田舎渡らいの俳諧師によっては、寺子屋で、あるいは有力庇護者である地方名主、医師、札差などで農民や奉公人に読み書きを教えることは生きる手立ての第一でもあった。

晩年は児童俳句よりもむしろ動物俳句が多くなって来る。文政五年三月十日には三男金三郎が誕生している。その年五月十六日の『まん六の春』にはこんな文章がある。

風車売り

けふは某の寺に田楽ありといへば、おのれも見に行んとて、寝馴れたる家をうしろになして、紫の里ちかきあたり、とある門にさしかかれば、紅白の風車いくつとなくさしたる盥のごとき物を頭にいただきて、太鼓うち鳴せる男の通りかかれば、泣く子も乳房をはなれ、いさかへる子もあらそひを止めて走り出し、あれよあれよと集ぬ。此男、五十を過し齡にて、女郎花のなまめく粧ひして、あやしげなる声ふり立てて、群がる子どもらを蚊雀のごとく見下し、商売ふ銭金は、ざらざらと袋を満たし、砂礫のごとし。つらつら思ふに、今天下泰平の春なれば、かかる業して、津々うらうら山道の果て迄もはやり行くになん。

のらくらや勿体なくも日の長き 一茶⁶⁶

現在の長野県上高井郡高山村字紫あたりで目撃した景であろうが、子ども達が群がって紅白の風車を買い求め、そのため大儲けをしている男を非難した文章である。俳諧行脚をし門弟を指導し、僅かな指導料で生きて来た一茶にとっては、こうした行為は赦すことのできない阿漕な行為として映ったことであろう。たとえば、一茶の句で「七夕」「梶の葉」

⁶⁶ 『一茶全集』六、一八一頁。

「星合」「願の糸」など、七夕の行事を詠んだ句は百十四句ある。最初の句は享和三年（一八〇三）一茶四十一歳の句で、「梶の音は耳を離れず星今よい」「川狩の煙もとどけ星今宵」など俳諧行脚の旅で迎えた七夕の夜を詠んだり、「隠家も星待顔の夜也けり」とか「七夕に明渡す也留主の庵」などと江戸での一人暮らしの寂しさも詠んでいる。あるいは「七夕やよい子を持てる乞食村」「かくれ家や星に願ひの糸芒」などがあり、これらは俳諧行脚の途中や江戸での一人住まいの中から生まれた句である。文政八年（一八二五）一茶六十三歳になる頃には、子どものみでなく、動物にも愛情を向けてゆくようになる。

子宝が蛆蚓のたるぞ梶の葉に	文化二年、一八〇五
梶の葉の歌をしやぶりて這ふ子哉	文政元年、一八一八
あこが手に書て貰ふや星の歌	文政六年、一八二三
老らくや星なればこそ妻迎	文政六年
星にさへ愛別離苦はありにけり	文政六年
世の中やあかぬ別れは星にさへ	文政六年
幼子の手を書かせけり星の歌	文政七年、一八二四

このように、一茶の句には、人生のその時々での自己の置かれている立場が如実に詠まれている。寺子屋の最大の年中行事は「七夕祭」である。芋の葉の露を硯に入れて墨をすり、和歌や願い事を認ためた五色の短冊を笹へ掛け、書の上達を願った。絵師の鳥居清長は、『子宝五節句遊』に七夕の錦絵を描いている。子どもの頃に手習いをしたが、今では「我星は上総の空をうろつくか」という思いは一茶の偽らざる心境であったに違いない。一方、一茶は動物⁶⁷や小動物に関する句も数多く詠んでいる。雀の子、猫の子、犬の子、鹿の子、馬の子、牛の子、雁の子、猿の子、蛙の子、乙鳥（つばめの別称。玄鳥とも）の子、など数えればこれもきりが無い。

親と子の三人連や帰る雁	文政三年、一八二〇
乙鳥も親子揃ふてちのわ哉	文政四年、一八二一

⁶⁷ 寛永元年（一七二二）に『山家鳥虫歌』が刊行されている。これは虫や動物を詠んだ句を集めたものであるが、あくまでも俳諧の季題と例句とを集めている。小林一茶はこれに多分の影響を受けていたと思われる。

御祝儀の初声上る藪蚊哉	文政二年、一八一九
とぶな蚤それぞれそこが角田川	文政二年
煤捨んそこのき給へ御雀	文化十年、一八一三
寝返りをするぞそこのけ蜚	文化十三年、一八一六
雀の子そこのけそこのけ御馬が通る	文政二年
小便をするぞ退け退け蟋蟀	文政四年
蝸牛そろそろ登れ富士の山	文政八年、一八二五

一茶が小動物を詠んだ句について、小さいものや弱いものに非常に優しく温かい目で見ていることに多くの人は感動を覚える。一茶の句は大きな動物である馬や牛や駱駝、小さな虫である蝸牛、虫、きりぎりす、蚤、などを取り込み、二つの対照の不調和から人を食った一種の諧謔味を生んでいる。また、単に諧謔味だけではなく、生あるものに対する人間味を詠んでいるともいわれている。やがて一茶は人間の子どもや動物以外にも、他の「生きとし生けるもの」すべてに対して期待と信頼を寄せて一句を成している。こうした句は俳諧史のなかでもほとんど皆無であった。

山菊の生れたままや真直に	一茶
少し見ぬ内にあつばれわか竹ぞ	〃
頬べたにあてなどするや赤い柿	〃
かはいらし蚊も初声ぞ初声ぞ	〃
白魚のどつと生まるるおぼろ哉	〃
雪解にしなの駒のきげん哉	〃

文化七年（一八一〇）から文化十五年（一八一八）にかけて、一茶は多くの句と記録を残している。『七番日記』や『八番日記』（文政二年・一八一九）は、一茶の句日記のなかでも最も完備したものといわれている。またこの期は一茶の江戸での流寓から郷里帰住へと転換した、一茶一生の転期とも捉えられている。一般には一茶調の完成期はこの『七番日記』⁶⁸時代であるというのが定説である。それにはまたそれなりの理由も必要であり、

⁶⁸ 文政十年（一八二七）に柏原の中村六左衛門が収蔵していた。そのまま放置すれば散逸されたいが、その後、明治四十三年三月、一茶同好会によって刊行された。その後小坂家に伝わった。信

これらの句を以て一茶的俳風と断じるにはそれなりの根拠も必要である。自己の老いていく姿、衰えていく体力、世の無常の自覚、煩悩具足の自覚や「弥陀仏への発願」などという心境の推移を以て決定づける論もあまたある。確かに一茶の老後の心境に関連づける論も多いが、一茶は世の流行にも非常に敏感であった。『おらが春』にある「我と来て遊べや親のない雀」は「六歳弥太郎」とあるが、実際には後年の作で、孤独であった六歳の頃を回想して詠まれた句であるとされている。しかし、筆者は六歳の作と思っている。こうした親子の在り方を詠んだ歌謡集が流行していた頃であった。『和河わらんべうた』は寛政元年（一七八九）頃に成ったと伝えられている。敬斎なる人物が幼少の頃に大和出身の大橋某という老人から贈られた大和・河内両国の民謡集で、大橋某翁没後その貴重な形見として寛政秋に開板したとある。五丁からなる仮綴の板本一冊本で、現在は國学院高等学校藤田小林文庫が蔵している。歌謡は一首一行書で、六十四首を収めている。

父よ母よと呼ぶ子の鳥は鳥と思へどしゆしようなものよ
親のある子は油のひかり親がなければひかりなし
親のある時そまつに思うてさても別れて血の泣
親のない子のあのふりみやれたもとくはへてかどに立つ
さいのかはらへわしは子をやつてやつたその夜は目もあはぬ
親といふ字が此の世にあらばかけて拌めよ日に三度⁶⁹

いずれも身につまされるような歌ばかりである。歌謡の内容は『絵本倭詩経』と同じく教訓的で『山家鳥虫歌』と重なる歌謡も散見できる。『絵本倭詩経』は明和八年（一七七―）に六甲山陰樵夫（馬山樵夫）なる人物が江戸期に多く見られる歌謡を用いた教訓を集録している。大坂の池田屋岡田三郎右衛門が刊行して流行を見ている。山東京伝や十返舎一九の作などを旅日記の文章に取り込んだ一茶であるから、こうした教訓歌謡はすべて暗唱していたことであろう。この頃、葛飾北斎の「北斎漫画」が出版され、江戸中の人気を集めていた。

寺子屋塾、手習塾を開いて自著を販売していた滝沢書堂の主は曲亭馬琴であった。馬琴

濃教育会編（昭和二年上下二冊）、荻原井泉水編（昭和六年）、荻原井泉水校注編（昭和二十五年）、『一茶全集』（信濃毎日新聞編）がある。

⁶⁹ 小野恭靖編著『近世流行歌謡』（笠間索引叢刊、二〇〇三）、七十七～八〇頁。

は日本で最初の職業作家であったといわれている。勿論寺子屋では「読み、書き」だけでなく俳諧や川柳も教え、師匠について「学び」そのものを楽しむ豊かな文化が花開いた。江戸時代は文書社会であったといわれている。兵農分離によって支配層である武士は、原則として城下町に居住するようになった。村では被支配層の村人が名主や組頭、百姓代といった村役人層を中心とした生活を営むようになる。領主層は必要に応じて、村に対して「触」や「達」といった法令を下すことによって支配関係を維持していった。諸藩の村々には、こうした法令を読める者がいたということである。江戸時代の村々からは大量に多種類の文書が発見されている。こうした文書は往来物の中の用文章で普及されていった。十返舎一九の『東海道中膝栗毛』や式亭三馬の『一筆啓上』、曲亭馬琴の『国尽女文章』『雅俗要文』などが文政年間から出版を見た。柳亭種彦⁷⁰も『修紫田舎源氏』を書いた。この他にも江戸時代を代表する絵師の葛飾北斎も『女今川』の挿絵を書いた。文字の学習だけでなく、頭書に挿絵を掲載した往来物が現れるようになるのである。北斎は川柳も好んで詠んだ画工で、俳諧も嗜み挿絵で生計を立てた。

こうした人々はやがて、自分の領域を超えて交わりを深めるようになって行った。北斎は、文政元年（一八一八）に錦絵で『東海道名所一覧』を出版し、文政二年には『木曾名所一覧』を発表している。双方とも実に細緻な表現で描写され、名所は無論のこと宿場や街並み、人物なども描き込んで評判を呼んでいる。文化元年（一八〇四）には曲亭馬琴の読本『小説比翼文』の挿絵を執筆している。馬琴の挿絵は十五編に及び、柳亭種彦は四編も挿絵を描いている。文化三年には、春から夏にかけて飯田町中坂下の曲亭馬琴宅に寄宿して仕事をし、文化五年には柳亭種彦宅に通い、文化七年にまで及んでいる。『柳亭種彦日記』（朝倉治彦校訂、秋山書店、昭和五十四年）に詳細に交友関係が記されている。だが、幕府は天保十三年六月に絵草子、人情本を禁止し、為永春水、柳亭種彦を処罰し、芝居を禁じた。

文化五年

○八月八日 日毎雨ふる 北斎老人、北雲会ふれに来たる。

○八月十七日北斎老人の許を訪ひ、あけ巻かんばん袋へうしをたのむ。

⁷⁰ 天明三年（一七八三）～天保十三年（一八四二）。江戸時代後期の戯作者。幕臣。本名は高屋彦四郎。読本から合巻（従来の美濃紙半裁二つ折五丁で一冊だった草双紙を、合冊した娯楽性の濃い読み物）に転じて、地歩をかためる。『修紫田舎源氏』が好評を得たが、天保の改革で絶版となる。自殺説もある。

文化六年

○六月四日 けふも日よし 今晩八ツ頃三筋町西町に火事あり 火事見まひに三筋町へゆく それより北斎方へゆき日めもすあそんですごす。

このような記事からも葛飾北斎、柳亭種彦、滝沢馬琴、式亭三馬、大田南畝という人々の交流が見出せる。川柳、狂歌、俳諧、戯作、画工、絵師などがそれぞれのフィールドを超えて活躍をしているのである。恐らく俳諧師一茶も何らかの形でかかわりを持ったものと思われる。この日記のなかに文化五年（一八〇八）八月、北斎が新宅を本所亀沢町に構えたことが記されている。

文化七年（一八一〇）、一茶は巢兆、成美らと閑斎宅で開かれた書画会に出席している。

こたひやつかれとし浪の五十路ちかく亀沢町にささやかなる庵をむすひ、いのちなかうせむ事をほつするの折から、ねもころにかたらひつる諸君子のさまざまに風流を尽して新宅を賀し給ること楽くて、露けき葉月末の四日柳はし河内や半二郎か楼をかりて四方八方の名家をあつめ終日祝ひの盃をめくらして恩をしやせんとす。乞ねかしくは晴雨を言すいと賑々しく枉賀あらむ事をねこふのみ、諸名家画賛かけ物六十、北斎自画之、絹地五ツ、画讃扇七十、会主葛飾北斎、補助扇面亭折主⁷¹

これは北斎が出した新築祝を兼ての書画会開催を伝えた報状にある文である。今を時めく浮世絵師北斎であったから、この書画会は大賑わいで大成功であったに違いない。しかし北斎は翌文化六年には再び本所両国辺りに借家住まいをし、これ以後引っ越しを繰り返す人生であった。

文化十一年（一八一四）、葛飾北斎は江戸中が大騒ぎとなる絵手本『北斎漫画』初編を名古屋の板元永楽堂から出版した。すこぶる好評で順次出版され、全十五編十五冊が刊行されていった。十三編には北斎の没年である嘉永二年（一八四九）の刊記があり、十五編は明治になって他の絵手本をもとにして刊行された。カット総数は約四千点に及んでいる。北斎の代表的な絵手本で、主版の他に薄墨と代赭色の版が使用され、人や動物はもとより妖怪や波の諸相まで森羅万象あらゆるものが北斎の空想力と確かなデッサン力で描き出されている。文化九年（一八一二）、葛飾北斎は五十三歳であった。この二人が深川に住した

⁷¹ 深川芭蕉記念館所蔵資料。

ことは確かであるが、面識があったかについては確証はない。一茶は五十歳で自筆句文集『株番』を執筆開始し、再び上総・下総地方を遊歴し、翌年、十年間にわたる弟仙六一家との相続争いが、明専寺住職の調停で和解が成立し、夢にまで見ていた故郷定住の機会が訪れた喜びの頂点であった。

文化九年（一八一二）は五十三歳の北斎にとっても、五十歳の一茶にとっても生涯を決定する大事な時期でもあった。北斎は後援者でもあり、絵の弟子でもあった牧墨僊⁷²の宅に半年あまり滞在して絵手本『北斎漫画』の下絵三百図あまりを執筆していた。この作品は二年にわたる準備期間を経て出版されたもので、画題の豊富さと一図一図のデッサンの確かさで、北斎のなかでも最も有名なものとなっている。この『北斎漫画』は少なからず一茶に創作意欲を喚起する上で影響を与えている。それが『株番』をはじめとして、花嬌三回忌に列し『花嬌家集並追善集』を編み、七月には『なにぶくろ』の序文を草する意欲につながる。さらに十月には遺産問題が解決し、文化十年にはこの一年間の句文をまとめて『志多良』を刊行するに至る。また門弟佐藤魚淵の撰集『木槿集』の代撰も行い、すべてが順調に運んだ年でもあった。一茶はこの一年の決意を一月二十三日にこう書いている。

されば、我らがたまたま練出せる発句といふものも、みづから新しきとほこれば、人は古しとあざける。ふたたびよくよく見れば、人の沙汰する通りいかにも古く、ほとほとおのが心にもうんじ果、三日ばかりも口を閉れば、是又木偶人のごとくへんてつもなく、よしよし汝はなんぢをせよ。我はもとの株番⁷³。

浮世絵がよく売れると、それに注を入れる俳諧も盛況となり、一茶も守愚一徹に通そうという決意を示している。それがあたったのか、この一年は一茶にとって最も充実した年になった。文化元年に北斎は曲亭馬琴の読本『小説比翼文』の挿絵をはじめて執筆するや、黄表紙、狂歌、狂句、談義本、洒落本、咄本、往来物など様々な文芸作品に挿絵を描いた。読本は挿絵を中心とした絵本に対する名称で、文字を主とした読む本の意味で用いられた。十九世紀に読本は江戸に移り、江戸読本では挿絵の量が急激に増え、名のおった浮世絵師がその執筆にたずさわり、山東京伝⁷⁴、曲亭馬琴らの名文と共鳴し合って江戸後期の文

⁷² 安永四年（一七七五）～文政七年（一八二四）。江戸時代後期の浮世絵師、銅版画家。尾張藩士で、喜多川歌麿や葛飾北斎に浮世絵を学ぶ。挿絵家となるが、挿絵を銅版で制作した。

⁷³ 『一茶全集』六、四十三頁。

⁷⁴ 宝暦十一年（一七六一）～文化十三年（一八一六）。江戸時代中期の戯作者、浮世絵師。黄表紙

芸界を代表する文学になった。曲亭馬琴は読本作家として生活できるようになるまでには、山東京伝の食客となったり板元の蔦屋重三郎家に奉公などをし、寛政五年に飯田町中坂下の会田家に婿入りした。これによって北斎とも知る仲となった。北斎の絵の構図を一茶は一句のなかに詠みこむようになっている。『北斎漫画』は一茶にも影響を与え、一茶をして動物、植物、人間様態、子どもから虫まで様々なものを対象にして一句にしたため、二万四千にのぼる句を残させたと考えられる。

文化十一年（一八一四）、小林一茶は五十五歳となり故郷柏原に定住し、近隣の赤川の常田久右衛門の娘「きく」を娶って平穏の日々を送りながらも精力的に俳諧指導に没頭していた。二月、三月と下総を遊訪し、五月には潮来・鹿島・銚子を巡遊して七月四日に柏原に帰着している。この時、北斎も信州定住を考え出していたが、五十八歳にもなり、決心ができず、再度名古屋の花屋町に滞在して『北斎漫画』の下絵の執筆に専念した。武田酔霞は、「葛飾北斎尾張名古屋の生活」という文のなかで、「日当りの悪い暗い六畳部屋で、ふとんは敷きっぱなしで、飯は土鍋のたきすて、茶碗や小鍋のたぐいは洗ったことがなく、衣類は垢じみてぼろぼろ。そんな部屋にこもりつきりで、北斎は下絵がきをしていた。本屋の使いで小僧がたずねるたびに、北斎はちらかっている紙きれに、ぶんまわしや指の先に墨や絵の具をつけて花や鳥、人物などさまざまなものを曲描きしてはきまえよく小僧にくれたという。泥沼にこそ美しい花は咲く。北斎の鬼気せまる芸術三昧の日常であった」⁷⁵と書いている。

北斎はみずから「宝暦十庚辰年九月甲子出生」と自記しているので、宝暦十年（一七六〇）九月二十三日の出生であろうと思われる。一茶とは三歳の違いであった。出生地は下総国本所割下水、現在の東京都墨田区亀沢一丁目から四丁目あたりで、ちょうど一茶が江戸での青春時代をすごした地である。おそらく二人は何らかの交流を持ったと思われる。

北斎の晩年の作品である『富嶽百景』（天保五年・一八三四）の跋文には次のようにある。

おのれ六歳より物のかたちを写すの癖ありて、五十歳の比よりしばしば画図をあらはすといへども、七十年前えがくところは実に取りにたへるものなし。七十三歳にしてようやく禽獣虫魚の骨格、草木の出生を悟り得たり。故に八十六歳にしては益々進み、九十歳にしてなほその奥儀を極め、一百歳にして正に神妙ならんか。百有十歳に

作家として知られている。洒落本が風俗を乱したとして五十日の手鎖の刑を受ける。

⁷⁵『浮世絵』十（浮世絵社、一九一六年）、二十七頁。

しては一点一画にしても生けるがごとくならん。願はくば長寿の君子予が言の妄言ならざるを見たまふべし。

画狂老人卅筆

弘化元年（一八四四）、八十五歳になった北斎は信州小布施に旅し、土地の素封家高井鴻山宅にとどまって祭りの屋台図や寺院の天井絵に筆をふるっている。小布施に残された北斎の迫力に満ちたその図柄は、彼の信仰や思想が総決算された、北斎晩年の傑作であるといえよう。一茶も信濃に定住して以来風狂にとりつかれた。四人の子どもと妻を亡くしても俳諧に専念した。一茶も北斎も信濃という地で、あたかも上杉謙信と武田信玄のごとく、描くところは異なれども、共に風魔にとりつかれた生涯であった。また浄土宗の学僧夢庵大我（一七〇九～一七八二）が編集した『春遊興』や『越風石臼歌』『和歌わらんべうた』『潮来絶句』など、近世に流行した歌謡集なども一茶が詠んだ小動物や植物、子どもから虫に寄せる句まで相当に影響をしたことであろう。

今、中人以上の行状は無礼、軽薄、懈怠、奢侈、淫酒、邪欲なること流行し、中人以下はさらに義理も恥辱もなく、ひとえに奢侈、淫欲、貧欲を心とし、行状は僭上、売買、諸勝負、請け負ひ事、拵へ公事、謀書、謀判、内奏、賄賂、博奕、富、三笠、笠付、ゆすり、たかり、勾引、かたり、万引、巾着切り、ごまの灰、強盗、追剥、毒害、人殺し、不義、密通、至らざる所なく流行するなり。当時の人の奇怪を好むこと甚だしく、少しも奇怪の浮説あれば耳をひそめて聞き出し、立派なる侍が白き蛇を拝み、尾の白き狐を見ても拝むほどの事にて、あるいは石仏がものを謂ひし、あるいは朽木が夜中光りたりなどといふて諸人群集し、あるいは遠路をくるには駕籠に乗り付くるなどの事にて、いずれか己れを利益する事もやあらんと狂ひ騒ぐなり⁷⁶。

武陽隠士が当世をこのように書き記すほど、世は奢侈となり、江戸の治安は極度に達していた。一茶も北斎も信濃に帰住したり、小布施で晩年を過ごしたのであろう。

⁷⁶ 『世事見聞録』、四一五～六頁。

第三章 一茶の「日の本」意識

第一節 日本国の認識

小林一茶が残したおよそ二万に余る俳句のなかに「日の本」「我が国」「君が代」「日本」という語を用いた句は百句を超える。

安永五年（一七七六）に十四歳で江戸に奉公に出た時から一茶の放浪の人生は始まる。その足跡は『奥羽紀行』『寛政三年紀行』『西国紀行』などに記されている。それによると一茶は、寛政五年（一七九三）の正月を熊本八代の正教寺で迎え、「君が世や旅にしあれど筍の雑煮」と詠んでいる。同月長崎では「君が世やから人も来て年籠り」という句も詠んでいる。前句は万葉集巻二・一四二（有馬皇子詠）「家にあれば筍に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る」¹を、後者は巻一・一〇「君が代もわが代も知るや磐代の岡の草根をいざ結びてな」²を意識下に置いたものであろう。

また文政三年（一八二〇）十月に二男石太郎が誕生した際、「石の如く強かれと念じ」、その一句は「岩になれとくなれさざれ石太郎」と詠んでいる。勿論、これは、『古今和歌集』に見える「わが君は千代に八千代にさざれ石の巖となりて苔のむすまで」³を踏まえている。『享和二年句日記』では、『古今和歌集』所載から抄出した歌を含んだ百人一首の作者の略伝を記し、崇徳院、藤原俊成、西行法師、実朝、順徳院、後鳥羽院のほか、著名歌人二十数名を挙げている。一茶がこの両歌集を常に座右に置いていたことは、一茶の発来信控帖『急遞紀』や『方言雑集』に両集の名が記されていることでも確かである。一茶の古典籍への関心が寛政期は万葉集から詩経や易経に、享和期はかっこ『古今和歌集』へと向けられてゆく過程のことも窺知できる。たとえば、崇徳院については、「崇徳院、鳥羽院第一皇子。元栄二年五月二十八日降誕、同六月十九日即位。大治四年正月元日元服十一才。栄治元年十二月七日去位。在位十八年也。保元元年七月二十三日讃岐国に配流す。長寛二年八月二十六日配所に於いて崩御。四十六才」として、「茄汁の川にけぶるや春の月」という一句を添えている⁴。さらに西行法師については、「西行法師。俗名右兵衛尉憲清。父ハ康清。鳥羽院ノ下北面にノ侍。法名は円位と号す。号に大宝坊、後西行ト改む」と言い、「枕から

¹ 武田祐吉『万葉集全講』上（明治書院、一九六八年）、七〇頁。

² 同上、八頁。

³ 日本古典文学大系『古今和歌集』（岩波書店、一九五八年）、八～九頁。

⁴ 『一茶全集』二、七十六頁。

外見てをるやころもがへ。風の神をつ掃出して更衣。我はあの山の木性や閑古鳥」と、西行の隠棲の様子を句に詠んでいる⁵。後鳥羽院について、「治承四年七月十四日降誕。寿永三年七月即位。在位十五年文治五年正月三日元服。十一才。建久九年正月十一日去位。十九才」と記し、「片照りのたよたよほたる哉」という一句を添えている⁶。藤原定家については、その来歴と撰集名九冊挙げながら、「其外数多也」とし、「立嶋の今にはじめぬけぶり哉」という一句を添えているように⁷、自句と和歌との結合、ないしは付け句としていたようである。一茶にとって、こうした古典籍の著名な歌人の詠んだ歌を解し、自句を付けることで歴史認識を深めていたのであった。

一茶が俳諧師を目指した十九歳の頃の作に、「日の本は這入口からさくら哉」という作があるように、上に挙げた『古今和歌集』などの歌集は俳諧師を目指す者の必読図書であった。また文化十年（一八二七）の『七番日記』には「日本と砂へ書きたる時雨哉」という句があるが、ここには「時雨」に代表される文化を俳諧と意識し、それが今の時代の文芸の主流であるという意識と自負が覗き見られる。

江戸時代には旅が普及した。御蔭参り⁸は、ほぼ六十年の周期で現れた旅の集団ブームであったそうだが、元禄十三年（一七〇三）には三百六十余万人が参拝したという。一茶が「日の本」の句を詠んだ天明の頃も御蔭参りが盛んに行われ、加えて芭蕉の足跡を辿る俳諧師の行脚や俳諧愛好者の旅が激増した。寛政五年（一七九三）に芭蕉は神祇伯白川家から「桃青霊神」⁹の神号を、朝廷からは「飛音大明神」を授かり、百回忌が未曾有の規模で執り行われた。これに先立って『おくのほそ道』の足跡を追う奥州路への旅を、俳諧師は勿論のこと多くの人々が行った。

一茶が江戸に出る前の明和八年（一七七八）には、諸九尼という女俳諧師が松島を訪れ、天明六年に『諸九尼句集』を刊行した。一茶は寛政元年の二十七歳の年の八月に象潟、松島を訪ね、蛸満寺で東都菊明の名で句と文を書き残し、後に『奥州紀行』を書いている。『七番日記』には「安永六年ヨリ旧里ヲ出デテ漂泊スルコト三十六年也。日数一万五千九

⁵ 同上、七十七頁。

⁶ 同上、八十頁。

⁷ 同上、八十四頁。

⁸ 御蔭参り 江戸時代、周期的におこった民衆の集団的伊勢神宮参詣。大規模なものは三回あり、それぞれ二〜三百万人とされる。伊勢神宮のお札が降るといった神異を契機とし、日常生活や封建支配体制への不満を宗教的に表現しているとされる。幕末の「ええじゃないか」は、「世直し」への期待に直接つながっていった。

⁹ 芭蕉は死後、神祇伯白川家から神号を授かって神になった。さらに朝廷から「飛音大明神」の明神号を賜っている。平将門が神田明神に神として祀られたのと同じである。

百六十日。千辛万苦シテ一日モ心楽シム無ク、己ヲ知ラズシテ終ニ白頭ノ翁ト成レリ」と記している。一茶は寛政三年、二十九歳の時、一時帰郷するが、江戸を出発する日を三月二十六日にわざわざ調整している。これは芭蕉の『おくのほそ道』の旅の出発日が二十七日であったからである。四月十八日に十四年ぶりに帰宅して、「門の木も先つつがなし夕涼」という芭蕉の句に似せた句を作っている。この旅は後に『寛政三年紀行』という作品になっている。

一方、国内の政情は慌しい状況下にあった。寛政六年（一七九四）、エトロフ島をめぐる日露間に紛争があり、伊能忠敬は幕命によって蝦夷地をはじめ、日本沿海各地の測量を開始し、文化十三年（一七一六）に全国の測量を終え日本沿海地図を作成した。測量は実に十六年を要し、幕府に上呈されたのは六年後の文政四年（一八二一）であった。一茶の『七番日記』は文化十五年の完成であるから、あるいは伊能忠敬の快挙を知って、一茶もこのような日数の記述をしたのであろうか。

一茶が全生涯のなかで最も苦悩に満ちた時期は、文化四、五、六年頃であろう。『文化句帖』によって、その間の事情を少し眺めると、都会文化に同化しきることができない信州人の性格をもった一茶は、齢四十を過ぎて未だに江戸俳壇に確固とした地位も得られず、妻もなく、江戸の場末に浮草のような生活を送っていた。そうした状況のなかで、一茶はついに文化五年十二月十七日にはみずぼらしくも永年住み慣れていた借家を追い出されてしまい、乞食同然となっていた。その前年に、最も親しかった滝耕菴という寺子屋の師匠が亡くなってから帰郷の思いも強くなり、一茶は折りふれては故郷への思慕を強くし、しばしば江戸と郷里との間をあわただしく往復するようになった。筆者とのわずかな関わりを述べれば、文化四年二月九日には、「我が門のしはがれ蛙鳴にけり。布川いせ屋嘉七といふ人、六七人して駕を引かせて、なぐさみに行体にくと逢ふ。しかるに武州マゴダ村トクセイ寺にて、待ちあはせべき由、今夜夢む。あまり思ひまうけざる夢ゆへ記」¹⁰とある。一茶は郷里柏原に行くには、中仙道を通る。中仙道は荒川を渡ると、左手に道を取れば中仙道、右に取れば日光御成街道となる。日光御成街道は武州岩槻宿で右を左に取れば、鴻巣街道となり、熊谷宿で中仙道と鴻巣街道は合流する。右に取れば幸手宿で、日光奥州街道で合流する。旅慣れた一茶は、御成街道から鴻巣街道を取り、熊谷宿で合流したもので

¹⁰ 『一茶全集』二、三九五頁。この箇所は頭注には、「マゴダ」と「トクセイ寺」について、「マゴ（メ）埼玉県岩槻市馬込か。マゴダは不明。『新編武蔵風土記稿』によると馬込にはトクセイ寺なる存在しなかった」とある。しかし、馬込村に現存する満蔵寺に安置されている不動明が正蔵院徳成寺であったと言い伝えられている。

あろう。馬込村は筆者の住む村で、徳成寺は今はないが、その名は伝わっている。なお伊勢（いせ）屋は醸造業で、現在も存在し、各地にその名を持った酒小売店を開いていた。

寛政の頃には、わが国の辺境も多事となり、林子平が天明五年（一七八五）に『三国通覧図説』を寛政三年（一七九一）には、『海国兵談』を著した。寛政四年（一七九二）九月にはロシア使節ラックスマンが漂流民大黒屋光太夫らを送って根室に來日した。寛政五年九月には將軍家齊が、自ら漂流民光太夫と磯吉を吹上御殿で引見した。老中松平定信（一七五八～一八二九）は、『花月草紙』にこの時の謁見の様子を書き残し、直ちに沿海諸侯に海防の急務を求めた。文化元年（一八〇四）、ロシアの遣日全權大使レザノフが長崎に來て通商を求めた。文化五年、英國船が長崎に入港し薪水を強要し乱暴狼藉に及び、長崎奉行松平康英が責を負って自殺した。文化八年五月十三日、幕府は松平定信の陸奥・越後の領地三万石余を岩槻藩大岡忠正の領地、安房国三カ村の藩領を上知させて領地替を命じ、松平定信の領地とし、三万石に相当する兵力を安房、上総に常駐させた。岩槻藩は安房朝夷・平の二郡に替わって武蔵・上総の六カ郡内に替地を賜った¹¹。ここに房州奉行として井上四郎兵衛を任じた。また彼は陳医も務めた。

房州千倉町久保の井上良眠は、杉長と号した俳人で医師であった。享保三年（一七一八）に杉長が編んだ『水の音』に一茶の句が入集すると、二人はそれ以後親交を深めていった。書簡で句の撰などを互いに行った。一茶は、文化十二年十一月と文化十四年四月の二回にわたり計三泊を杉長宅にで過ごした。また文政六年（一八二三）には、奇淵・太筈・杉長ら九名が世話人になって発行した「諸国流行俳諧行脚評定・為御覧俳諧譜大角力」といういわゆる俳人の人気番付で、一茶は別格最高位の行司役に、文政五・六年の「正風俳諧師座定配図」でも別格勸進元に単独で掲載され、当代を代表する俳人として扱われている。

一茶の俳人としての地位は、当時の相撲（角力）番付と同じように、全国の俳人の人気度を示す「俳諧人士番付」を見るとよく分かる。寛政十二年（一八〇〇）に発行された番付では、一茶は三十八歳であったが、六段で東方と西方に分けられ、真中に行司として嘯山がおり、西方行司大江丸、それに頭取十九名の名が記されている。東方の大関は勝美二柳、関脇大島完来、小結丈左、西方は大関尾張井上士朗、関脇夏目成美、小結五味可都里となり、続いて前頭が並んでいる。一茶は二段目に名があるが、東方九十人の中、下から三十六番目に居る。一応、諸国著名俳諧士に名を連ねている。大方の研究者は、一茶は年齢のわりに知名度が低く扱われていると評価するが、東方九十人、西方九十人、それに行

¹¹ 『岩槻市史』全六十巻（編纂委員会、一九七五年）。

司と世話役が二十一人であるから、総勢二百人のなかで三十六番目に扱われているので、それ相応の扱いであろうと考えられる。

文政六年（一八二三）に刊行され、同九年に再版された「諸国俳諧士番付 為御覧」も東之方江戸と西之方諸国に分類され、江戸で刊行された。これによると、一茶は西の第二位に位置している。しかしこの番付には今日に名を残している人物名は見えない。因みに、この番付は大関や関脇などの相撲番付ではなく、出身地名が記されている。西之方諸国には大阪万和、信濃一茶、仙台白人、芸州篤人、桑名杵長、伊豆一瓢、相模横伺、三河秋挙、上総輪之、陸奥嘆南などがおり、この番付は有名人気俳人士ではなく、あるいは地方出身別の人気番付であったのかも知れない。東之方には田原町何丸、行脚太筈、など一茶と深い交流を持った人物がいる。こうした人物は江戸に住しているが、皆地方出身であるところから、おそらくこの番付はそうした意味合いがあったのではという推測も成り立つ。こうした刷物はこれからも発見される可能性は大いにある。

文政六年に、「正風俳諧師座定」という番付がある。蒼虬、閑斎が出版したものであるが、一茶は西の第二位から「勸進元一茶」となっており、諸国の俳諧師を結集して主役に躍り出ている。蒼虬は一茶より二年年長であり、蘭更の門人で京で芭蕉堂二世と名乗った。一茶とは寛政十二年から交際があり、また一茶は西国行脚の途中、寛政七年に蘭更を訪問している。蘭更は大島蓼太の弟子で、明和七年蓼太なき後に二夜庵、南無庵と称し、東信濃に来住し、この年に蓼太の碑を建立し、『おもかげ』を刊行して、いうなれば信濃全土を手なかに収めたのである。このとき一茶は八歳で、継母さつを父が後妻に迎えた年であった。そのような経緯もあって、蒼虬は師の同郷者として一茶に敬意を払ったのであろう。

同時に、こうした一茶の頭角を表したいと思う気持ちや行動を見て、葛飾派の主たる人物達はいがにがしくも思っていたのであろう。後に一茶が江戸を引きあげる遠因もこのようなところにあったのではなかろうか。

一茶が房総廻りで親しくなった杉長は、俳諧師としても知られていた。文政二年四月三十日に安房・上総の俳人里丸や杉長が出した一枚刷の「文音」に、一茶は「人来たら蛙になれよひやし瓜」の句を載せている。杉長は松平定信が白子に梅が岡遠見番所の陣屋を構えると、陣医として出仕した。定信は、『理斎隨筆』のなかで次のように記している。

としどしえみしの国へ吹きながさるる船子ども、命またうしてかへりくるものもあることなり。かならず二、三十人のりて出づるが、おほく死して、かへるはふたり、

みたりに過ぎず。……常度うしなはぬものは、かならずことくにの人にあひても欺かれず。つひに命またふしてかへるとかや。されば一船のうちの英雄かならず生きのこりてかくあるなり¹²。

文化十四年（一八一七）にイギリス船が白浜村や大島沖に出現し、翌文政元年にイギリス商船ブラザース号が浦賀に寄港したが、定信は無事に退帆させている。井上杉長は文政十一年まで陣医を務め五十九歳で没した。天明五年（一七八五）以来、幕府は蝦夷地の調査を続け、一茶が四十七歳に当たる文化六年には間宮林蔵が間宮海峡を発見している。それを聞いた奥州白石の僧で俳人の松窓乙二¹³は箱館に渡って、見聞記『箱館紀行』を書いて一茶に送っている。乙二と一茶は親しく交わり、二人の間で交わされた書簡が何通も残っている。江戸時代は商品経済の進展に伴い、国内の物資の移動も活発化し、国内海運も盛んになり、航路の開発も進み就航路の増加に伴って海難事故や漂流件数も上昇した。漂流民のなかには最後まで希望を捨てず、異常な体験を見聞して帰国する者もあり、幕府は漂流の経過や外国の事情、そこでの生活の様子などの供述を取った。そうした供述を幕府や藩主が有能な学者に命じて作らせた聞き書は、漂流記の傑作となって編集刊行された。

岩槻藩領房州朝夷郡に清国船が漂着し、白子浜で座礁したのを救出し、無事帰国させた事件の顛末を、児玉南柯は『漂客紀事』としてまとめ、寛政二年（一七九〇）に開版している。寛政四年九月に帰国した大黒屋光太夫と磯吉の聞き取りは桂川甫周がまとめ『北槎聞略』として、寛政六年八月に幕府に献上された。この頃には『東遊記』や『夷諺俗話』などが刊行されていたので、一茶も書見したに違いなく、一茶の記述にも漂流見聞記などもいくつか認められる。こうした状況下で詠まれた一茶の俳句の中から「日の本」という語に寄せた一茶の意識を検討してみたいと思う。宝暦四年（一七五四）大岡忠光に召し抱えられていた勝浦陣屋の代官山県大弐が、明和四年（一七六七）に江戸八丁堀で開塾したが、幕府の忌むところとなって斬首された。岩槻藩は大騒動となった。一茶もこのロシア漂流民の磯吉についての話を文化三年（一八〇八）の十一月二十七日の夜に聞きに行ったことについて記している。文化五年七月二十五日に房州から三浦三崎の漁船がことごとく荒風に逢って溺死者が三千人にのぼったことを記している。

¹² 日本随筆大成第三期新装版『理斎随筆・花月草子』（吉川弘文館、一九七六年）、四二五頁。

¹³ 宝暦六年（一七五六）～文政六年（一八二三）。江戸時代後期の俳人。本名・岩間清雄奥州白石の人で、享和三年（一八〇三）江戸に出て、夏目成美、鈴木道彦などと交流し、『畑芹』を刊行。文化・文政期に箱館に渡り、その地の俳壇を盛んにさせた。

一茶は自ら記すように、三十六年間の放浪生活を送った。当時俳諧師として立机独立し、門弟を得るには諸国を行脚し、自派の人数を増やすしか手立てはなかった。『葛飾蕉問文脈系図』に、「小林菊明に奥州紀行あり」と記されていることから、一茶はこの時にすでに葛飾派に属していたことは明白である。それを確実なものとするために、その手筈として当時は芭蕉の足跡を辿るという旅が、俳諧師としての旅の第一歩であった。一茶の旅も当然芭蕉を崇拝する奥羽への旅路から始まった。その最初の旅行記『象潟旅泊』（蛸満寺所蔵『旅客集』収載）には次のように記されている。

日も西海にかたぶきぬころ、旅宿をもとめて、先は一見せばやと小船にさほさして
はるか湖中に浮みぬれば、昏れいぞく里人我家へ帰る有さま目のあたりなりけらし。

象潟や島がくれ行く刈穂船

寛政元年酉八月九日 右東都菊明¹⁴

同月十日、曙を見奉らんと、かの西行桜の下に望めば朝風しづかにして羽二重を晒
せるごとし。藻に住む虫の夜を惜みて水底に声立る風姿淋しみ、爰に止りたれば

象潟や朝日ながらの秋のくれ

右東都菊明¹⁵

一茶二十七歳であるから、未だ表現力も乏しく謡曲の一節を取り入れた変哲もない文章である。次に二十九歳の折、寛政三年（一七九一）三月二十六日に江戸を発って下総を巡り、四月十八日に郷里柏原に帰着するまでの二十余日間の旅の記録『寛政三年紀行』には、芭蕉に学んだ足跡が窺知できる。

西にうろたへ東にさすら沖ひ、一所不住の狂人有。旦には上総に喰ひ、夕には武蔵にやどりて、白波のよるべを知らず、たつ淡のきえやすき物から名を一茶坊といふ。……白き笠かぶるを生涯の晴とし、竹の杖つくを一期のほまれとして、ことし寛政三年三月廿六日、江戸をうしろになして、おぼつかなくも立出る。小田の蛙は春しり顔に騒ぎ、木末の月は有明をかすみて、忽旅めくありさま也。

¹⁴ 『一茶全集』五、一一七頁。

¹⁵ 同上。

雉鳴いて梅に乞食の世也けり¹⁶

廿九日、小金原にかかる。此原は公の馬をやしなふ所にして、長さ四十里なるをもて四十野といふ。草はあくまで青み、花も稀々に咲て、乳を呑駒有、水に望む有、伏有、仰ぐあり、皆々食に富て、おのがさまざまに たのしむ。是彼等が全盛といふべし¹⁷。

『寛政三年紀行』にはじめて「一茶」の俳号が見られる。これらの初期の紀行や俳句に一茶の俳諧師としての自立意識を見ることができるが、文体内容の描写は共に『おくのほそ道』の模倣である。「白き笠」や「ことし寛政三年三月廿六日」以下冒頭は「ことし元禄ふたとせにや」や「笠の緒つけかへて」の模倣で、後文は「松島」の描写の写しそのままである。小金原で放牧の馬を見た記録であるが、四月七日の田川の記録は次のような描写である。

末の世、今にいたりては、心に任せぬ事のみおほかりき。富ば世嗣なく、子あればまづしく、山あれど水なく、里ありて木なく、山水ととなふるといへるは稀なりけるに、仁左衛門の家は刀祢川の下を流れて、不二は膝の前にかすみ、筑波は首の側に聳えて、釣する翁、綱引兒、寸馬豆人、一ツとして眺望に欠けるといふことなし。あはれ、ものしりてここに住ば、松に出る月も心をやしなひて、ちとせをのべ、渚こぐ舟の直にかくるゝにも世の中の常ならぬを觀じ、山の鐘の夕暮るゝは、仏をねがふなかだちともなりて、おりおりかかる白雪も、ただにやは見すぐすべき。我たぐひは、目ありて狗にひとしく、耳ありて馬のごとく、初雪のおもしろき日も、悪いものが降と謗り、時鳥のいさぎよき夜もやかましく鳴とて憎み、月につけ花につけ、ただ徒に寝ころぶのみ、是あたら景色の罪人とも言ふべし。蓮の花風を捨るばかり也¹⁸。

この文章は『幻住庵記』¹⁹がほとんどそのままに寄せ集められた形を取っている。全編

¹⁶ 『一茶全集』五、十五頁。

¹⁷ 同上。

¹⁸ 『一茶全集』五、十六頁。

¹⁹ 「おくのほそ道」の行脚をおえた芭蕉が、元禄三年（一六九〇）四月から八月までの四ヵ月をすごした、近江石山（現在の滋賀県石山市）の庵で書かれた俳文。

に『海道記』²⁰の筋があり、所々に『おくのほそ道』と『幻住庵記』の文章がうまく鑲められている。四月八日に行徳より舟で江戸に戻り、十日に本郷を発って、中山道を上り帰途に着く途中、十三日に武蔵東方村の農家に泊まり、自分と同名同年月日生まれの子の位碑を見て驚いた件を記しているが、これも人物と場面は『海道記』を、同年同月日のことは山東京伝の『昔話 稲妻表紙』巻四の十四「仇家の恩人」の一節を巧みに応用して、この怪奇な一文に仕上げている。このような記述を見ても一茶の俳諧修業の跡が窺える。

一茶が旅に明け暮れる生活をしたのは、無論俳諧師になるための修業のひとつであった。旅僧形の姿で物欲への執着を放擲し、旅の景色と心の有様を記録し、人に語ることによって旅は完結する。芭蕉も紀行文を五編も残している。貞享四年から五年にかけての芭蕉の旅の記録『笈の小文』には、「抑、道の日記といふものは、紀氏、長明、阿仏の尼の文をふるひ、情を尽してより、余は皆倣似かよひて、其糟粕を改る事あたはず。まして、浅智短才の筆に及ぶべくもあらず。其日は雨降り、昼より晴て、そこに松有、かしこに何と云ふ川流れたり、などいふ事、たれたれもいふべく覚侍れども黄奇蘇新のたぐひにあらずば云事なかれ。されども其所々の風景、心に残り、山館野亭のくるしき愁も、且ははなしの種となり、風雲の便りともおもひなして、わすれぬ所々、跡や先やと書集侍るぞ、猶、酔る者の妄語にひとしく、いねる人の謔言するたぐひに見なして、人又妄聴せよ」²¹と説き、紀行文の歴史の上に立って新しく個性に溢れる紀行を実現することが現代人の責務である、と芭蕉は述べている。芭蕉亡き後の俳壇はすべて蕉風であるから一茶もこの教えを忠実に実行したのである。

またなぜ紀行文を残すかの問いについては、各地で見た美観景観や旅寝の辛苦の様などを書き留めるならば、「風雪のたより」「はなしの種」ともなり、「人にも語らむ」記録となり、俳諧の一座において、発句・連句を制作し、共に自然と人事との様々を自在に空想し、文芸作品を成す上での「風雲のたより」ともなり、即ち「風雅の情」に連り、また現地に赴くことにより実感ある句を成せるといっている。

一茶はすでにこの頃から芭蕉に深く傾倒していたので、そうした意味を心得て旅に出たのであろう。先人の模倣と自学の態度、これも一茶流の俳諧修業だったのであろう。当時は『海道記』や『東関紀行』も鴨長明の著と考えられていた。一茶は『寛政三年紀行』の

²⁰ 鎌倉中期の紀行文。作者は、鴨長明とも源光行ともいわれる。貞応二年（一二二三）四月四日に京を出て、十四日かけて鎌倉に着き、十日間滞在した印象を流麗な文体で綴っている。

²¹ 古典俳文学大系『芭蕉集』（集英社、一九七〇年）、四五七頁。

全編を『海道記』に倣い、随所に自学の成果を鏤めたのであった。また一茶が種々書き記した文章から文化六年（一八〇九）正月元旦の「巢なし鳥」という文章を見てみよう。

夜酉の刻の此、火もとは左内町とかや、折から風はげしく、烟四方にひろがりて、三ケ日のはれに改たる葎畳のたぐひ、千代をこめて、飴なせる松竹にいたる迄、皆一時の燼とはなれりけり。されば人に家取られしおのれも、火に栖焼れし人も、ともにこの世の有さまなるべし。

元日や我のみならぬ巢なし鳥

此日番場 随斎ありて 乞食一茶述²²

この一文は鴨長明の『方丈記』の「安元の大火」の有様の記述の模倣であるが、やはりこの頃にはさすがに一茶らしい滑稽さやシニカルな文章となっていて、見事に換骨奪胎を果たしたといえよう。『文政句帖』には「巢なし鳥のかなしきは、ただちに埒に迷ひ、その軒下に露をしのぎ、かしこの家陰に霜をふせぎ、(略) からき命を拾ひつつ、くるしき月日をおくるうちに、ふと諧々たる夷ぶりの俳諧を嘖りおぼゆ」²³とも書いている。どちらも江戸の夏目成美（随斎）²⁴の世話になっていた頃のことである。乞食一茶はなんとも微笑ましい。

寛政の頃は神社仏閣参詣に事よせての物見遊山の旅が大流行した。近世の女達が残した旅日記は、前田淑氏によれば百数十点にのぼるという。幕府は慶安二年（一六四九）に「大茶のみ、物まひり、遊山すきする女房は離別すべし」という「慶安御触書」を出したことは知悉のことであるが、「旅・道中筋の事」についての触書は度々出され、禁止条文よりも寧ろ安全に関する注意の御触が多かった。文化七年（一八一〇）には、民間でも『旅行用心集』などが書かれ、『道中用心六十一ヶ条』なる心得書きなども刊行されている。開幕当初からは考えられない旅の普及であった。

寛政元年（一七八九）には幕府は、小塚原（現在の東京都荒川区南千住、江戸時代の刑場）などは野犬が多いので旅人の安全を考慮して、野犬の取締りを勘定奉行に命じている。

²² 『一茶全集』二、五二一頁。

²³ 『一茶全集』四、四一七頁。

²⁴ 寛延二年（→七四九）～文化十三年（一八一六）。本名・夏目包嘉。通称・井筒屋八郎右衛門。江戸蔵前で札差五代目の豪商。寛政期から一茶とは俳諧をつうじた知己であり、文化期には一茶はしばしば成美亭（随斎亭）に寄食し、経済的援助を受けた。晩年には、本所多田の森近くに隠棲し、一茶の句の添削や評もし、一茶を終生にわたり庇護した。

寛政元年三月には「駄賃旅籠錢等無相違様ニ拂候様急度可被申候」²⁵という触書を出していることは、旅籠錢をふっかけたり、あるいは支払わなかったりするような不埒不心得者が随分あったのであろう。

寛政十一年末年（一七九九）七月には「近頃神社仏閣へ千社参ト唱へ講中杯ヲ極、申合致参詣、札ヲ張り歩行候者有之由、手廣ク千社ノ札ヲ張候ヲ名聞之有様ニ心得候者モ有之由」とあるところから参詣に事よせて名を広めようとする不心得者があつたりした。享和元酉年（一八〇一）十二月には、「近来面体ヲ隠シ候頭巾ヲ拵、途中ニテカブリ候モノ数多有之一略一近頃又々面体ヲ隠シ異風ノ頭巾ヲカブリ候モノ有之段相聞不埒ノ次第」ともあるように異装異風の風体が流行したことがわかる。この頃幕府は盲人の保護をしたので、頭巾を被って盲僧の面体をして木戸錢などを支払わない者が出た。そうした者への対策としての触書であろう。

享和二戌年九月には「富士講ト号シ講仲間ヲ立、俗ノ身分ニテ行衣ヲ着シ、鈴珠数等ヲ持、家々ノ門ニ立、祭文ヲ唱、又ハ病人ノ加持祈禱致シ護符等ヲ出シ、其外不埒ノ所業イタシ候者有之由」と記されているように、贗祈禱師なども現れたのであろう。このように幕府は旅の安全を促した触書を度々発令して、旅人の保護安全に努めている。一茶が「乞食一茶」や「乞食首領」と記しているのは、成美宅の金子が紛失してあらぬ嫌疑をかけられたから、とする説があるが、こうした幕府の触書に僧形漂泊者のひとりとして少々拗ねてみたかったのであろう。ここに拗者一茶がいるのである。

一茶は足かけ七年に及ぶ西国大行脚を行い寛政七年（一七九五）に『西国紀行』²⁶を書いている。この旅で一茶は俳諧の知友を得、弟子を作ることにもできた。一茶の旅日記には御触書通りの記述が見える。「土居、島屋と云はたごやに宿。八里也。人々は金比羅参とて相宿のすだくにつけても君が世のありがたさは、きのふや今日までは松かざりのありしが一出て見れば我のみならず初旅寝」²⁷と記され、金比羅参りの盛んな様と、安全を保障してくれる幕府への感謝が記されている。

一方旅僧の姿はしているが、簡単に寺に泊まることもできなかったようである。「西明寺

²⁵ 『市中取締類集・市中之部一〜三』、『大日本近世史料』（東京大学出版部、一九五九〜一九七一年）。

²⁶ 『西国紀行』は寛政七年（一茶三十三歳）一月八日から四月九日までの紀行。同年に出版された『旅捨遺』と併せ見る必要がある。『寛政三年紀行』と紛らわしいので、この名を付けている。伊予松山、観音寺、丸亀、備前、岡山、姫路、大阪、河内、堺、高師の浜までの紀行である。行程中の行脚や俳交の様子などが知られる。

²⁷ 『一茶全集』五、三十六頁。

に宿り乞ふに不許。前路三百里、只かれをちからに来つるなれば、たよるべきよすがもなく」²⁸とも記している。紀行文には屢々芭蕉に触れた言説も見える。「魚文かたに、素堂、芭蕉翁、其角の三幅対のあれば訪ふて拝す。正風の三尊見たり梅の宿」と記したり、「高みよりふみはづしてぞ落にけり。酒の半を膳持て立つ、是何理屈もなく、振舞の筵に有べきやうなる事を附る。是を蕉門気先の附と云ふ也」と記し、「蕉門気先の附句」として芭蕉の「道ばたの木槿は馬に喰はれけり」を挙げて記している。「初時雨風もぬれずに通りけり。是を無理理屈ト云へり。何として口べきはづなし、紙衣着て、川へはまると偏屈もののたとひ也。是の句、世に行れしは蕉門中絶の折からなれば也」と記し、自分の句を冒頭に据えて「無理理屈」「偏屈者の句」としている。芭蕉の「初時雨猿も小蓑を欲しげなり」の模倣句を作って、「蕉門中絶」してしまったからこんな句になってしまったと事もなげにいつている。

一方讃州高松の善通寺の開帳句会で蕉門の系統を引く人物に出逢った喜びを、「そが中に蕉派一法有り。よく我も見なるを尊ぶ」と記している。一茶の西国行脚が芭蕉の旅の真髓を求めての旅であったことが知れる。また「旅のひとり言」として次の様に記している。

たとへ日を累て逗留なりとも、別るゝ期に別れざれば、大なる非ごとを取る事うたがひなし。心がけの第一也。武士の死ぬべき時死後れして後悔すと云へども、其恥すゝぎがたしといへるに等し²⁹。

ここには金銭を持たぬ俳諧行脚の無心逗留の辛さが思わず披瀝されてもいるし、芭蕉の『野ざらし紀行』の決意に通う気持ちを覗かせているが、これは『一言芳談』に旅による執心の放下の誓いがあるが、それを模倣したものと思われる。中世の念仏行者の言葉を集めた『一言芳談』には次のように記されている。

後世者は、いつも、旅に出でたる思ひに住するなり。雲のはて、海のはてに行くとも、この身のあらむ限りは、かたの如くの衣食住所無くては、かなふべからざれども執せざるとの、殊の外にかはりたるなり。常に、一夜のやどりとして、始終のすみか

²⁸ 同上。

²⁹ 『一茶全集』五、四十六頁。

にあらずと存ずるには、障り無く念仏の申さるるなり³⁰。

無住漂泊の決意と執心放下の心の有様を説いているが、擬修業僧一茶はこうした心境を理解していたのであろう。文化・文政の時代に俳諧が全国的に普及したのは、一茶のように全国行脚を重ねて門弟を得るかたわら、自派の理念を普及させようとする意図もあった。寛政三年（一七九一）の上田秋成の随筆『癩癖談』（天明七年、一七八七）には次のような記述がある。

むかし、俳諧のすきびとありけり。芭蕉翁のおくのほそみちの跡なつかしく、はるばるのみちのくにくだりけり。ある国のかみの御城下にて日くれなんとす。一夜明すべき家求むれどあらず。おもひつかれたるに、そこに門だちしたる翁のあるに、たちよりて、ねんごろに宿をもとむれば、おきなうち見て法師は達磨宗なるかと問ふ。いな、さる修業にあらず。ばせをの翁のながれをまなぶものなるが、松がうらしま、象がたのながめせんとして、はるばると来たるなりといふ。おきな声あらゝかにて、何がしどの御下には、はいかい師と博奕うちのやどするものはなきぞといひけるとなり。いかなれば、おなじつらにうとまれけむ。いとあさましくなむ³¹。

俳諧修業の行脚僧や俳諧師を博奕打ち同類に扱われたことの悔しさを述べた文章であるが、このような話が書き留められる所に、当時の触書や一茶の記述などから見て、事実俳諧師が社会的に受け入れられない面も多くあったのであろう。だから一茶は「乞食首領一茶」などと記したのであろう。俳諧仲間の外にいる者として対話でより辛辣な扱いもされている。

寛政三亥年七月に寺社奉行から藤植検校、塙検校の二名の連署を添えて「右座中取締役可相勤旨可比申渡候」という風紀取締令が出ている。

近來座中ノモノ友一同風儀ミダリニ相成、針治音曲等の家業ヲワスレ、利欲ノミニ耽り、無法ノ訴訟ヲ企、物毎我意ノ振舞多ク、次第ニ放逸ニ成行候処、惣録ヲ始、頭立候者共、改正シ候心付モ無之、却テ我意ヲ募候族モ有之由相聞、不埒ノ至リニ候。

³⁰ 日本の思想『方丈記・徒然草・一言芳談集』（筑摩書房、一九七〇年）、三一三頁。

³¹ 日本随筆大成第三期『関の秋風・癩癖談』（吉川弘文館、一九七七年）、四三七頁。

(『御触書天保集成』五五一四)

内容は検校、座頭、盲僧らに対しての風紀取締令であるが、このなかには勿論俳諧師も含まれている。また寛政九年正月の「芸術之儀」の御触書には、「武術稽古場不取締無之儀ハ勿論ニ候得共、近来心得違之輩モ有之、実意ニ出精之者少ク、雑談ナドイタシ候趣ニモ相聞、如何ニ候、諸稽古場共弥右体之風俗無之、実意ニ出精イタシ候様、寄々可被申聞候」(『御触書天保集成』五四九九)と記され、諸芸事において金銭ヲ強要する風潮があったことがわかる。鈴木道彦³²などは豪奢な生活をしており、一茶とその親友太筈はこれを戒めている。鈴木道彦は白雄没後の春秋庵という大派閥の頂点に立ってあくどい俳諧を売り歩き大金を稼ぎ、その威勢を鼻にかけていたらしい。一茶は「口曲入道大坂大当にて山吹ぼつぽつふくらし、其当りついでに加州金沢は飛脚の口緒かねて先触いたし候処、かの口緒とりもちて爰にても黄葉さらひ込たる噂、しかとした事は知らず」と書いているうえに、自派の清廉な点も強調している。俳諧普及の時代にはこのようなことも多く見受けられたのであろう。似たような状況も多々あるのである。

ところで、化政期に俳諧が普及したのは全国的に道路が開け、交通網が整備され旅が容易になり、全国各地の人々が俳諧を以て容易に結ばれ、句のやり取りが盛んに行われ、通信も格段に速くなったからである。夏目成美と一茶が編んだ『随斎筆記』を見ればその状況は容易に理解できる。一茶は寛政初年にまとめた『知友録』には当時の俳人、二百五十名余の俗名と俳名と住所が国別に整理されている。一茶の旅行記や日記類を見るにつけ、一茶のすぐれたジャーナリストとしての一面を見ることができる。一茶は旅を通して見聞きした特異な事件を記録している。風流風雅の趣を捉え伝えた文章ではない。耳目を驚かす奇異な出来事が、実にリアルに書き記されている。

寛政七年歳次乙卯秋八月六日の暁、無宿の狂人非業の死をなせるあり。汝いかなるすくせにや。聞説、北九州の千年はその限りあることを愁み、南瞻部州の五十歳は知己といへ共、其ことぶきを楽しむ。共に此世にありてこそとおもほゆる物からなる。い

³² 宝暦七年(一七五七)～文政二年(一八一九)。江戸後期の俳人。本名・鈴木由之。仙台の人で、江戸に出て医を業とするかたわら白雄の門をたたく。白雄の没後、有力な俳人たちとむすびつき、やがて俳壇の大立者となり権勢をふるった。そのことに対する酷評も多い。没後、その妻・応々尼が編纂した『道彦七部集』がある。

そぎ彼岸に赴くとは。

さなきだに露の命を自害かな

右むさしの狂人 一茶識³³

寛政七年（一七九五）八月に見た狂人の自害を書いた見聞記であるが、狂人が自害するはずはない。自らも「むさしの狂人」と記していることから、これは勿論同業の行脚俳人の自害を記したもので「無宿の狂人非業の死をなせる」には望み拙く彼岸に赴いた、俳諧道に潰えた人物への思いが込められており、一茶にとっては、単なる路傍の一事件ではなかったのである。文化五年（一八〇八）八月には「行倒れ」を描いた一文がある。

一日の夜のことがとよ、小古間坂といふさかのかたはらにいつくの人にか有けん、漆の木のやうに幾所も伐られて、芒を終の枕として、もとの雫ときへはてぬ。あはれ此者、あたはぬ宝を掠て、神のとがめかうむりしか。又えならぬ匂に迷ひ、人のうらみ重りしか。にがにがしきありさま也。

毒虫もいつか一度は草の露

文化五年八月二日

信州かしは原 一茶誌す³⁴

この文の冒頭は長明の『方丈記』の一節から入り、『無名草子』の「小野小町」の成れの果物語や『雨月物語』の「浅茅が宿」から想を得たものであろう。「もとの雫」の一文も新古今集巻八・遍昭の「末の露もとの雫や世の中のおくれ先立つためしなるらん」を踏まえ全文模写のような文章であるが、「あたはぬ宝を掠て」から後は、一茶らしい滑稽味を出した俳文となっている。文化七年五月の「搦斗の夢」は『伊勢物語』十四段の贈答歌を踏まえ、秋成の「夢応の鯉魚」を模している。

屍らしきものに荒網つけて川ニ入る児有。「なじかいかかる拙き遊びす」と問へば、「是は一茶が亡きがらなれば、しかじかせよと、源蔵の老婆がいひし也。我々はわざくれならず」と答る時、暁の鳥らかまびすしく、門の蚊柱さえぎえに、夢は迹なくさめけるとや。げにげに我たまたま故郷に帰りて、二夜とも伏さず、又漂泊の身となり

³³ 『一茶全集』六、十五頁。

³⁴ 古典俳文学大系『一茶集』（集英社、一九八〇年）、四八一頁。

て野を枕、草を敷宿として南北呻ふ物から、友垣の真心よりかかる夢も見るなるべし。
さはいへ、夢をはかせに占せるためしもあれば、そぞろにおそろしく覚へ侍る。

暁の夢をはめなん時鳥³⁵

一茶は秋成の『雨月物語』が中国雅文小説の『剪燈新話』や『古今奇談英草紙』などを踏まえ、その他、明代白話短編小説『警世通言』『西湖佳話』や八文字屋本『都鳥妻恋笛』『老土語録』『翁草』など様々な和漢の典籍を下敷にしていることを知っていてこのような模倣を記しているのである。無論寛政三年の『癩癖談』も読んでいたに違いない。また秋成自身が「わかい時は人真似して、俳諧と云ふ事を面白くやうとがりしが、歌よみ習ひて後も、時々いうて楽しむ也」³⁶と告白するように、若い頃に俳諧に熱中していても知っていたであろう。しかしやがて、「俳かいをかへりみれば、貞徳も宗因も桃青も、皆口がしこい衆で、つづまる所は世わたりぢや」³⁷と、『胆大小心録』（文化六年）で述べているように、俳諧あるいは俳諧師を卑下していった。一茶はそれらを知った上で、秋成に倣って「俳文」をなんとか残そうと努力していたのである。だから目に見るもの、耳にする奇怪な出来事を筆にとどめているのであろう。

文化四年（一八〇四）八月十九日、隅田川にかかる永代橋が突然崩落する大惨事があった。一茶はこの時江戸を遠く離れた柏原にいたが、江戸の俳諧仲間からの便りで知ったのか、「永代橋といへる橋、中程よりめりめりとやぶれて、下りに円を転がす如く、人に人重り落て、見る内に波底の真砂とはなりけり」³⁸と恰も目撃したるが如く書き記している。惨事を記したものに文化三年九月の「按摩殺し」がある。「夜酉の下刻ばかりおのれ住める相生町五丁目にて按摩ひねりの盲人を何者とも知らず鎚もてしたたかに通して逝さる」³⁹と書いている。幕府の按摩盲人保護から金を蓄える者もあり、こうした事件は屢々起きたらしい。漱石はここから『夢十夜』の「第三話」を書いた。奇怪な出来事は多く書き残されている。文政二年の「明専寺の怪」には「明専寺の境内に、とし老いたる狐住みけるが、夜な夜な法師の姿して本堂に詣て、如来の御前にひれ伏し、鑰打ちならし、念仏申すさま

³⁵ 『一茶全集』三、六十三頁。

³⁶ 日本古典文学大系『上田秋成集』（岩波書店、一九五七年）、二五三頁。

³⁷ 同上、三七五頁。

³⁸ 『一茶全集』五、一一八頁。

³⁹ 古典俳文学大系『一茶集』、四六七頁。

の哀に殊勝なり」⁴⁰と書いて、自分もこれを見物しようとしたが夜が明けてしまった、という落ちがついている。また文政四年正月のこととして「山中の怪」という一文もある。「人目も草も枯れ果てたる山里ながら、流石往還のしるしに、年とり用意の肴荷、三越より送る二十駄三十駄、日々通らぬ日もなく、しばらく淋しからざるに似たり。然るに怪しかる幻術ものありて、其鰯荷の石になりてあるものまれまれあるに、是はと荷主驚くのみ、いつこの誰共知らぬ、雪の礫打つべき目当あらざれば、世渡る鳥の旅商ひ泣寝入にして仕舞ひぬ」⁴¹と書いて奇怪な事件として扱っている。

一茶が実際に目撃した事件も数多くある。文化十年（一八一三）には「善光寺町一揆」の顛末を書き、「難船を憐む」を、文政元年には「雁の牢屋」のことを、文化八年には「頑固な老婆」のことを書いている。いずれも一茶の諸国わたらいの途中見聞した事件である。一茶は一揆の起こる原因も、難船事件が多発することも、誰が雁の目を縫いあわせているかも知っていたが、「世のさまの悪しければ」と記し慎重に言葉を選んでいる。直接為政者への批判の言葉を用いず、「魔王のたぐひのことさら世をみだらんとて」として、その真相を語らず臆化している。恰も武陽隠士の『世間見聞録』に通じる用心深さである。

『煙霞綺談』（西村白鳥、安永二年）に次のような話がある。

関東のある寺に夜々幽霊出て、黒染をあらへば波もころも着て、といふ句を唱へて、しきりに涕泣す。此故に住職する僧なき所に、一僧あり行て見るに、果たして怪しきもの出て、彼句を吟ず。其あとへ、水は浮世をいとふものかは、と付けたれば、幽霊はつといふて消うせたり。其後ふたたび出ずとなり。ある人の元より、此一事を書してをこせたりしが、其後近年出たる百人一首の頭書を見れば、袖といふ女、俳諧の付合に云し句ななりとある⁴²。

無住の寺に出没する亡霊を、旅僧が詠歌で成仏させるという内容である。こうした俳諧に関する不思議な話は、当時巷間にあまた流布していたのであろう。口承書承とともに報告例は多い。一茶もこれらの類を用いたのである。

文化八年（一八一）の「頑固な老婆」の話は、松平定信が沿海防備のため、現在の千

⁴⁰ 『一茶全集』五、一三七頁。

⁴¹ 同上、一三八頁。

⁴² 日本随筆大成第一期新装版『煙霞綺談・柳亭筆記』（吉川弘文館、一九七五年）、二二八頁。

千葉県富津市竹岡に陣屋を置き、砲台を築いた折に、立ち退きを命ぜられた老婆が「ただ此埴生小屋こそさうなき宝なれ。よしや命断るとも外へは行かじ」と手をすり足をすり、緘口して泣かぬばかりに申せば、奉行人の慈悲も施すべき方法もなくなって「老婆のちになくひそ」と言い残して、其家をはずし除けて縄ばりをした。「あはれ月日の照らすかぎり、露霜のおつる所に生きとし活るもの、たれか国命にそむき奉らん。しぶときをこのものにぞありける」と結んでいる。土地に執する老婆の姿を描いた文章であるが、ここでも一茶の本音は「そだち盛りの田畑こき捨てられてかなしむもむべ也けり」が本音であろうが、「生きとし活るもの、たれか国命にそむき奉らん」と結んでいる⁴³。

一茶を「ひねくれ者」「拗者」と呼んだり、反権力者、反封建意識の持ち主と見る見方があるが、それは一茶の残した膨大な量の俳句にそのような姿勢で詠まれた句が含まれているからである。「掠鳥と人に呼ばるる寒さ哉」も、冬期に出稼ぎに江戸に出ざるを得ない信濃人への世間の侮辱に対する怒りであり、一茶自身が蔑んでいるのではない。一茶が十九歳で詠んだ「日の本は這入口からさくら哉」の句に含まれる体制に対する意識は晩年まで変わらないのである。そうした意識を一茶の農民出自の無学に帰する考えもあるが、一茶は決して無学ではない。実によく学んでいる。芭蕉は若い頃から学問を修した俳諧師であったが、一茶は自学の俳諧師であった。一茶の残した随想や俳文・句日記を見れば自学の足跡がそのまま残されている。一茶が無学であったとすれば、それは芭蕉と違って、ただの一度も為政者側に身を置かなかっただけであり、政治といっさい関わらなかったからともいえよう。文政二年（一八〇五）の『八番日記』には掠鳥の句と同時に「太平の日永に逢ふやかくれ蓑」の句があり、『花見の記』には「桜木や花の威をかる里の人」、『七番日記』には「桜咲く大日本ぞ日本ぞ」という幕府賞讃の句を作り、太平の世に感謝し賞讃を送っている。これらの句に揶揄や皮肉は感じられない。田畑を持ち、百姓として人別帳に記載され、伝馬役にも応じている一茶であるから、もう帳抜け無宿舎のように振る舞う必要はないのである。出稼ぎに行く必要のなくなった我が身の安住も太平の世あつてのものと認識している。『いちのもり』（来風山人、安永四年）という笑話集がある。「信濃者、俳諧師の内へ奉公する。国者来て、そちの内は何商売なるや」、「されば何だか知らぬが、旦那は至極結構な人だが、毎日余所から人が来て、訳も知らぬことを言ひては帳に付けるが、おれがことかと思ふ」⁴⁴といっている。俳諧師とは庶民にとっては得体の知れぬ連中でもある

⁴³ 『一茶全集』六、二十九～三十頁。

⁴⁴ 伊藤龍平『江戸の俳諧説話』（翰林書房、二〇〇七年）、二五七頁から再引用。

ったのである。

第二節 一茶の日本

文化九年（一八一二）二月、一茶は西林寺（現在の茨城県守谷市）の住職である鶴老と一緒に、二人で三十六句を相互に詠み合うという両吟歌仙を卷いた。鶴老は信州飯田の出身で、当時俳諧僧としての知名度も高かった。法名は擬鳳、一茶とは深く親交を結んだ。おそらく一茶出郷時の請人であったと思われる。

松蔭に寝てくふ六十余州哉	一茶
鶴と遊ん亀とあそばん	鶴老
月影のだんだん細き春なれや	〃
八重山吹のかくす行灯	一茶
—略—	
有がたや東叡山の花の雲	鶴老
かすみたがりて歩く供の衆	一茶
—略—	
格別に世の中よしと鳴蛙	一茶
藍でそめたる明ぼのの空	鶴老 ⁴⁵

本歌仙は『株番』に収められ「賀治世」の前書がある。遺草にも「泰平楽」と題されている。また文化十一年（一八一四）八月にも両吟歌仙があり、これも天下太平の治世の讃となっている。

世につれて花火の玉の大きさよ	一茶
舟にめしたる十六夜の月	鶴老
—略—	
岡崎や橋のたもとの小豆餅	鶴老

⁴⁵ 『一茶全集』六、八十二～三頁。

雨のやむとて耳がなる也	一茶
薪一把茶碗一ツも打くれて	鶴老
かまくら様の世をおがむ哉	一茶
馬かりて花盗人と追ればや	鶴老
つつじの小家麦の大寺	一茶

徳川の治世を賞讃した歌仙である。一茶を反体制者、反封建思想者と考える見方もあるが、ここでは一茶も治世に対する無条件の讃美意識を詠んでいる。こうした意識は一茶の俳句にはかなりある。代表的な句を『発句』から選んで年代順に紹介すれば、次のようである。

①君が世やから人も来て年ごもり	(寛政五年)
②君が世や旅にしあれど筍の雑煮	(寛政五年)
③君が世や茂りの下の耶蘇仏	(寛政五年)
④君が代は乞食の家ものぼり哉	(寛政七年中)
⑤君が世やかかる木陰も博突小屋	(文化元年)
⑥君が代のかほつき合す櫓家かな	(文化四年)
⑦我国やつひ戯れも雪仏	(文化八年)
⑧けふからは日本の雁ぞ楽に寝よ	(文化九年)
⑨君が代や厄をおとしにお伊勢迄	(文化十年)
⑩君が代の正月もせぬしだら哉	(文化十年)
⑪君が世のとつぱづれ也浮寝鳥	(文化十年)
⑫君が代は女もすなり冬ごもり	(文化十年)
⑬鳴な雁どつこも同じうき世ぞや	(文化十年)
⑭君が代やよやとやさはぐことし竹	(文化十年)
⑮日本と砂へ書きたる時雨哉	(文化十年)
⑯日本の冬至も梅の咲にけり	(文化十一年)
⑰桜咲く大日本ぞ日本ぞ	(文化十一年)
⑱江戸江戸とえどへ出れば秋の暮	(文化十一年)
⑲日の本は這入口からさくら哉	(文化十二年)

- | | |
|------------------|--------|
| ②⑩日本の外ヶ浜迄おち穂哉 | (文政元年) |
| ②⑪我国は子供も鬼を追にけり | (文政二年) |
| ②⑫草藪も君が代を吹く小夜砧 | (文政三年) |
| ②⑬我国は草も桜を咲きにけり | (文政三年) |
| ②⑭大江戸やおめずおくせず時鳥 | (文政三年) |
| ②⑮日の本や金も子を産む御代の春 | (文政七年) |
| ②⑯太平の日永に逢ふやかくれ蓑 | (文政八年) |
| ②⑰君が代の大飯喰ふてさくら哉 | (文政八年) |

一茶が「君が世」という語を使って詠んだ句は、『西国紀行』あたりから見ることができる。寛政四年（一七九二）三月二十五日に江戸を発って九州にまで足を延ばす大行脚で、一茶が禁宗の像を目にして詠んだのかは判然としないが、「君が世や茂りの下の耶蘇仏」と詠み、長崎で外国人を見た感を「君が世やから人も来て年ごもり」「から人と雑魚寝もすらん女哉」と詠んでいる。「今は三十年余りの昔ならん。おのれ彼地にとどまりて、一つの鍋のもの喰ひて笑ひののしりむつまじき人達なり」⁴⁶と記している。一茶のこうした意識の表れた句は類句を入れると百余句にのぼる。

蕪村は江戸に出て巴人⁴⁷に師事したと思われる頃の元文三年（一七三八）に、巴人編の『夜半亭蔵旦帖』に宰町の名で「君が代や二三度したるとし忘れ」という句が見出せるだけで、他には「君が代」の句はない。出自については誇りを持っていたらしく、『新花摘』には「更衣母なん藤原氏也けり」の句が見えるが、村長もしくは郷民の出とも伝わる。一茶はこうした句は詠んでいない。

一茶の生家は持高十石八斗の中農と伝えられ、一茶の母「くに」は柏原仁之倉の有力者の出自といわれている。文化五年（一八〇八）八月二十四日村役人に提出された弟仙六との財産分配の協議書がある「遺産分配取極一札之事」⁴⁸を見ても、弟仙六は五石六斗四升九合九勺、一茶の持高は三石三斗九升六合五勺となっている。弟の仙六（弥兵衛）家は明治三年には十三石三斗五升になったと矢羽勝幸氏は調査している。文化二年には一茶自ら

⁴⁶ 『一茶全集』一、二十八頁。

⁴⁷ 延宝五年（一六七七）～寛保二年（一七四二）。江戸中期の俳人。本名・早野甚助。下野烏山（現在の栃木県）の人。江戸に出て、榎本其角、服部嵐雪に師事。一時京にあったが、再び江戸に来て与謝蕪村に俳諧をおしえた。超俗的、孤高の風格を高く評価された。

⁴⁸ 『一茶全集』別巻、七十頁。

「耕さぬ罪もいくばく年の暮、耕さずして食ひ、織らずして着るていたらく、今まで罰のあたらぬもふしぎなり」⁴⁹と書いているように、柏原での一茶の生活は比較的楽であった。文化五年十一月二十四日に一茶は弟仙六から、父の死からこの間までの一茶名義の田畑や家の使用料として、粃代金、家賃等計三十両を請求し、文化十年の正月に賠償金十一両二分を受け取っている。また「文政八年、所々無尽掛控」⁵⁰には一茶の掛け金の合計は十一両になり、このまま掛け金を続けていけば七十二両を入手できたことになるが、一茶は無尽講に当たっていないので、まとまった金を必要とすることのない余裕のある生活であったことが窺える。こうした資料からも一茶が為政者や幕府に対して不満の念は持っていなかったと考えられる。

文化十年（一八一三）十月十三日の信濃善光寺で起きた一揆について、『俳文拾遺』には「十三日、晴。此の夜、善光寺にて、夜盗起り、手に手に鎗・山刀などもちて、富家を破りて物とりひしめき立ち、火など放ちければ」⁵¹とあるが、これは江戸時代善光寺町で起きたただ一度の暴動で、不作のため米の値段が高騰したことが原因であった。一茶はその原因を熟知していたであろうのに、「魔王のたぐひのことさら世をみだらんとて」⁵²として真相を語らない。この事件の八年後には一茶自ら当村御奉行所御役人様宛に「役金免除願」を提出している。

おのれ中風此方歩行心のままならず、出入の度に駕賃に追ひまくられて困窮の上に生れるの死ぬの又生れるの死ぬのと、大いにこまり候。なま竹の直ぐなる御捌にて、役金ちとの間休せ可被下候⁵³。

いかにも巫山戯た物言い様であるが、吟味の結果、一茶はこれによって役金を免除されている。一茶が残した資料や俳文などからも体制に対して不満や不平を漏らしてはいることがわかる。幕府を礼讃するかのような発句を多く作ってはいるが、芭蕉のように門人に幕閣の要人を持つことをせず、為政者と関わりを持った体制擁護者でもない。

一茶は西国行脚の途次長崎で異国の人々を見て以来、「外国人」に殊の外興味と関心を抱

⁴⁹ 『一茶全集』三、三三一頁。

⁵⁰ 『一茶全集』別巻、五十九頁。

⁵¹ 『一茶全集』五、一三〇頁。

⁵² 同上。

⁵³ 矢場勝幸『一茶大事典』（大修館書店、一九九三年）、四六七頁。

いている。三十一歳の時長崎で「君が世やから人も来て年ごもり」と詠み、五十七歳の時には「唐人も見よや田植の笛太鼓」と詠み、五十九歳では「蘭の香や異国のやうに三ヶ月」とも詠んでいる。「君が代」「から人」「異国」は当時の触書にも頻出する。一茶が二十一歳の天明三年（一七八三）に浅間山は大噴火を起こした。この年は大飢饉となったが、幕府は勘定吟味役、根岸九郎左衛門を総指揮とし、信州・武州の代官役人を総動員して被災各村の救援復旧に当たらせ、幕府直轄の御救い普請と決定し巨費を投じた。一茶が江戸に出て間もない頃であった。浅間山北麓の鎌原村（現在の群馬県吾妻郡嬬妻村鎌原）では四百七十七名が噴火による土石流に埋没して犠牲となり、多くの死体が回向院付近に流着した。一茶はこの当時本所に住していたともいわれている。

一茶の故郷柏原は延宝九年（一六八一）に飯山藩領から幕府の天領になっている。直轄領であることで、諸政策は直接農民層に浸透したはずである。信州では当時子間引きが相当行われていたであろうが、寛政五年に竹垣直温が下総、常陸、下野、信濃など六万石を支配する代官になり、産児奨励金制度を設け、子間引きを禁止し、入百姓の奨励をした。直温の在任中に五千七百石の荒地の開拓からの増収があった。農民出の一茶であったから、このような幕府の政策に対しては甚だ敏感であった。加えて、近世には「奇談・奇聞」の類を寄せて奇談集が相次いで刊行されている。先の根岸九郎左衛門鎮衛は文化十二年（一八一五）に『耳囊』という奇談集を発刊している。奇談、奇聞の類はたちまち流布し、これを鴨の味にたとえた諺すらある。江戸の大惨事であった文化四年（一八〇七）の永代橋の崩落は、外神田の古本屋須藤由蔵が『藤岡屋日記』に、豊島屋十右衛門こと春の屋成丈の『永代橋危難』に、大田南畝の『夢の浮橋付録』に、山東京伝の弟山東京山⁵⁴の『蜘蛛の糸巻』に、曲亭馬琴の『兎園小説余録』などに書き残されている。一茶は当時帰郷中であつたが、次の様に残している。

こと国の人うらやむ程に世の中よく、米穀花にちらばいて、竹に鳴雀も酒盛して千代を諷ひ、門に立ましらも笑ひを作りて万歳を舞ふ。太山隠の松風も治れる世の声をしらべ、岩に生たる苔すらもうきうき青みをまして、人の心のおのづから花になり行くものから、月見る月十九日といふ日は、富ヶ岡八幡宮の祭りなりとて、賤しきもの

⁵⁴ 明和六年（一七六九）～安政五年（一八五八）。江戸後期の戯作者。本名・岩瀬百樹。山東京伝の弟。平易な語り口で兄を凌ぐとまで言われた。代表作に『復讐妹背山物語』『昔模様娘評判記』など。『近世庶民生活資料』第一～三巻、『藤岡日記』や『日本の随筆』（吉川弘文館）などに収められている。

貴きものにおとらじとあくまで着粧つゝ、老たるを先立、幼を懷にして、青空めづらしく祝ひ粧ひ 出立けるに、いかなる悪日にやありけん、永代橋といへる橋、中程よりめりめりとやぶれて、下りに円を転がす如く、人に人重り落て、見る内に波底の真砂とはなりけり。思ひきや、やむごとなき人達の、心ときめくまで炷しめたる綾錦も、月を或す斗みがきなしたる玉の小櫛も、けふといふけふ、死出の旅のはれにせんとは。誠に神々の御心にも任せざらんか。おのれ六十里の露路をへだてゝ、風のたよりに聞てさへ、身の毛寒き心地しはべる。あはれ今年亡父の御薨なくんば、必ず我も彼の地にありて、諸人と共に満々たる水に入漂ひ、今頃は肴の扶食となりはてんことはかりしるべきに、かくふつゝかなる我さへ仏の守りたまふにや。

秋風や藻に鳴虫のいくそばく⁵⁵

山東京山の見聞記『蜘蛛の糸巻』や大田南畝の考証随筆『夢の浮橋付録』は、地獄絵さながらの阿鼻叫喚の様相がこれでもかとばかりに、生々しく描かれているのに対して、一茶の描写は太平楽の絵空事を描いたようでリアルさに欠ける。実際に見聞した記事と、一茶は人伝えに聞いて書いたものとの違いがありありとわかる。冒頭部は治世の讃美のような文章である。惨事の記述は他の作とは比べようもない。太平の世の記述ばかりと述べたが、この時の幕府の対応も素早かった。

幕府は御船手組の指揮下に諸船を集めて、生存者の救出や応急手当て、遺体の回収や管理、引き渡しに努め、遭難者の遺族や怪我人の生活扶助のため該当者の調査や援助金の支給を町役人に命じて行っている。それまで橋は町人維持であったものを幕府の費用で架け替えられた。一茶はこうした幕府の処置も伝え聞いて書いたものなのであろう。それ故、文章全体が惨事の記述が少なく、太平の世の讃美となってしまうのである。

一茶の『文化句帖』には、その好奇の対象が逐一書き記されている。文化元年（一八〇四）九月三日には宮新田半左衛門家の火災の様子が、文化三年十一月には琉球人の記事を書き留めている。「十三日晴、北風、品川岡本屋ニテ琉球人見ル」「廿三日晴、琉球人登城」「卅日晴、琉球人上野ニ入ル」「十二月四日晴、行徳川岸大坂屋ニ泊ル、琉球ノ医師葬」などと記している。また「十一月廿七日晴、ヲロシヤ漂流人磯吉トイフモノ咄アルニヨツテ随齋会延引」などと記されている。文化四年十月には「廿日晴、今日未刻新宿ニ蝦夷ガヘリ泊、中川屋ニ遠山左衛門殿、藤屋ニ三輪善平殿」と記している。遠山左衛門は岩槻藩主

⁵⁵ 『一茶全集』五、一一八～九頁。

で幕府閣老であった。

江戸時代にも北方領土問題や領海侵犯事件は度々起こっていた。安永七年（一七七八）に蝦夷地厚岸にロシア船が来航し、寛政四年（一七九二）にはラックスマンが根室に来て通商を求めた。享和二年（一八〇二）には幕府は蝦夷奉行を置いて歴代第一級の人材を配した。後に函館奉行といわれ重責を負うことになる。文化元年（一八〇四）には長崎にレザノフが来て通商を要求したが、幕府はこれを拒否した。激怒したレザノフは報復措置として樺太、択捉島を襲撃し、幕府の御陣屋を焼き払い、略奪の限りを尽くすという事件が起こった。幕府役人と弘前藩及び松前藩の軍兵の必死の反撃も空しく、幕府軍は敗退せざるを得なかった。そこで幕府は西蝦夷地を直轄領とすることを決定した。

文化四年（一八〇七）五月には、ロシア人が利尻島に侵入して幕府の船を焼き払う事件が発生した。幕府は六月に若年寄堀田正敦らを蝦夷地防衛総督として派遣し、奥羽諸藩の兵を守備に配置した。遠山、三輪は幕府から派遣された配下の奉行らで、遠山は寛政十一年（一七九九）に『未曾有記』を書き、文化四年の事件の派遣に際しては、『西蝦夷日記』を書き残している。異国船や漂着船に対しては、幕府は当初は寛容であった。寛政三年（一七九一）九月の諸大名への触書にその手順が詳細に記されている⁵⁶。

惣テ異国船漂着候ハバ何レニモ手當イタシ、先船具ハ取上置、長崎表へ送遣シ候義、夫々可被相伺事ニ候。依頼異国船見掛候ハバ早々手當人数等差配リ、マヅ見ヘカカリ事カマヘテ無之様ニ致シ、筆談役或ハ見分ノ者等ヲ出シ、様子相試可申候。若拒候趣ニ候ハバ、船ヲモ人ヲモ打碎、無貧着筋ニ候間、捕候儀モ尤可相成候、勿論大筒火矢ナド用候モ勝手次第之事ニ候、筆談等モ相調ヒ又ハ見分等ヲモ不拒趣ニ候ハバ、成丈穩ニ取計ヒ、右船ヲバ計策ヲ以成供繁置、船具等ヲモ取上ゲ置、人ヲバ上陸イタサセ、番人附置立帰不申様致シ、早々可被相伺候、若及ズ異儀候ハバ捕置可被申候、異国ノ者ハ宗門ノ所モ不相分儀ニ付、番人ノ外ハ見物等ヲモ可被禁候、右漂流一二艘ノ儀ニ候ハバ前文ノ通可被相心得候、若数艘ニモ及ビ候カ又ハ数少ク候トモ最初ヨリ嚴重ニモ不取計シテ難成様子ニ候ハバ其儀ハ時宜次第タルベキ事ニ候、尤右体ノ節ハ都ニ無寄領分ヘモ早々申通シ、人数船等ヲモ取揃可被差出候。但シ出張ノ陣屋又ハ小領ニテ

⁵⁶ 高柳真三・石井良助編『御触書天保集成』上・下（岩波書店、一九六五年）、石井良助・服藤弘司編『幕末御触書集成』第五卷（岩波書店、一九九四年）、平野義郎監修『近世法制史料集』第二卷（創文社、一九七三年）、石井良助校訂『徳川禁令考』前集第五卷（創文社、一九五九年）。

ハ其場ニ大筒ノ類有合不申バ、最寄ノ内所持ノ場所ヨリ申談次第、早々差越取計ヒ候様可被心得候、右ノ趣可被相心得候、尤其時宜ニヨリ候、取計ヒ一條イタシカタキ事ニ候得共、事臨伺ヲ経候テハ図ヲ失ヒ可申儀ニ附、先大概心得ノ趣相達候條、其余ノ作略ハ時宜ニヨリ可被取計事ニ候、兼テ議定シ置可然筋ハ可被相伺置候、取計行届候儀ニ至リ候ハバ御沙汰ノ程モ可有之事ニ候間、成丈可被心配候、尤家来共格別出精ノモノハ名前等ヲモ可被書出事。

まだ続く文章であるが、主な手順の部分のみを抜き書きしてみた。漂流船には手当をせよ、もし拒絶すれば打ち砕いても差し支えないとしている。こうした内容の触書は寛政年間だけでも十通以上出されている。しかし、文化元年にロシア船が長崎に来航して以来の触書は次第に陰悪になっている。文化三年（一八〇六）正月には、「弥おろしや船ニ無相違相聞候ハバ能々申諭シ、ナリタケ穩ニ帰帆イタシ候様可取計候」とあるものが、このロシア人の番屋焼払事件や利尻島侵入幕府船焼打事件以後は、四通の触書を出した上、文化四年十二月には次の様な触書になってしまった。またこの年芭蕉は、朝廷から「飛音大明神」の神号を授かった。

おろしや船取計方ノ儀ニ付、去寅年相達候旨モ有之候所、其後蝦夷ノ蝦々へ来タリ、狼藉ニ及ビ候上ハ向後いづれの浦方ニテモおろしや船ト見請候ハバ嚴重ニ打払ヒ近付候ニオヒテハ召捕又ハ打捨、時宜ニ応ジ……。『御触書天保集成』六五四〇）

この時は露国船打払令だけであったが、文政八年（一八二五）にイギリス船が長崎に立ち寄り狼藉をはたらき、薪水食糧を求めた時は、「一体いきりすニ不限、南蛮西洋ノ儀ハ御禁制邪教ノ国ニ候間、以来何レノ浦方ニオイテモ異国船乗寄候ヲ見受候ハバ其所ニ有合候人夫ヲ以、不及有無一図ニ打払」（『御触書天保集成』六五四一）と厳しさを増している。幕府はこの異国船打払令については「今般、異黒船打払ノ儀被仰出候モ事ヲ好候筋ニハ無之候共、近来ノ様子難被捨置次第ニ付、被仰出事候條精々入念可被申付候」（『御触書天保集成』六五四三）という触書を出して、幕府としてはやむを得ぬ処置であったという弁明もしている。勿論一茶は、こうした手順等に関わる触書は知る由もないが打払令の布告については国民周知があったであろう。

一茶は耳聡い人間であったから、蝦夷地におけるこうした事件を聞き知っていたと思わ

れる。奥州白石の俳人岩間清雄⁵⁷（松窓乙二）から逐一聞いていたのであろう。『文化句帖』の文化元年（一八〇四）には「二月廿五日晴 北風吹 巢兆ノ婦人例ならぬとて、乙二、道彦とおなじく千住におもぶく。かへるさ穩坊の家をよ所に見なして」⁵⁸と書いている。一茶の句は岩間乙二が編集した『はたけ芹』に、「前の人も春を待しか古畳」が入集している。二人の間には度々手紙の往来がなされている。文化四年二月二十一日には井上春蟻の便で一茶が手紙を出し、文化五年三月十二日には夏目成美経由で乙二の手紙がとどき、事件のあらましが記されている。成美は、江戸蔵前の札差で豪商井筒屋の主人であり、ここに寄宿していた一茶はおのずと諸国の状勢を知ることができたのであろう。

第三節 漂流民聞き書

松窓乙二という俳人は冒険心や好奇心の旺盛な人で、若い頃に渡島して蝦夷を見物した。蝦夷の布席、草裾、来車らは乙二の門人達で蝦夷には多くの弟子が居た。それらの門人達から日ならずしてこうした状況を手紙で報告を受けた。文化八年（一八一）六月四日にロシア人ゴロヴニンが部下六名と国後島の陣屋に入り捕縛された。松窓乙二はこの事件が発生する九カ月前の文化七年九月に、五十六歳の病身をおして箱館に渡っていた。箱館に渡った乙二は連行されて来たゴロヴニン一行を目撃した。松窓乙二はその時の様子を『箱館紀行』に書いている。

ヲロシヤ人六人、ラソワの人ひとり、くなしりといふに漂着せしを、はこだてまで陸路二百里の間をめしのぼされぬ。背の高きこと皆六尺有余にして、長途のつかれにや、汐風に吹きからさるゝ浜松のなみ立るがごとく、野口よりして、市中に入り来るを見る。

かまきりの手足よ髪は古蓮⁵⁹

⁵⁷ 宝暦五年（一七五五）～文政六年（一八二三）。陸奥国白石の亙理山千手院権大僧都岩間清馨の息の修験者として京都、江戸、蝦夷地函館、松前、東北、北陸を行脚している。俳風は「芭蕉よりもなお悄然としてわびに徹し」とされた（『白石市史』、一九八一年）。中村真一郎の『蠣崎波響の生涯』（新潮社、一九八九年）に詳述されている。

⁵⁸ 『一茶全集』二、一九六頁。

⁵⁹ 佐々醒雪・巖谷小波校、俳諧叢書『俳人逸話紀行集』（博文館、一九一七年）、五六九頁。

一茶はこうした友人の情報や世情の噂などから、外国船に対する状況を知ったと思われる。また「文化三年十一月廿七日晴 フロシヤ漂流人磯吉トイフモノ咄アルニヨツテ随齋会延引」⁶⁰と書かれている。ロシアに囚われた船主の光太夫と乗組員の磯吉のことであり、幕府は寛政六年（一七九四）六月に勘定奉行に対し二人の扱いについて指示をしている。

右ノ者共外国エ漂流致シ候処、年月ノ艱難ヲ凌ギテ、無恙帰国仕候事、寄特ナル志ニ付、金三十両ツツ被下之、一、此度ハ以別儀在所エハ不相返、当地ニ被差置候、住所ノ儀ハ、番町明地薬草植場ノ内住居為仕、月々為御手当、光太夫エ金三両ツツ、磯吉エ金貳両ツツ相渡可申候、一、兩人共勝手次第妻ヲモ呼迎、安堵致シ住居候様可被致候、尤植物手伝等申付候儀ハ先ツ見合、無役ニテ差置可被申候、一、外国ノ様子等、ミダリニ物語ナト不仕様可被致候、右ノ趣、被得其意、当人エモ可被申渡候、且又兩人領主エモ何モヨリ可被相違候、身分ノ儀ハ薬草植場ニ差置候者共一同、何モニテ差配可被致候、(『御触書天保集成』六五二九)

帰国途中蝦夷で病死した大黒屋の乗組員の小市の妻には褒美として銀十枚が与えられた。磯吉と小市の二人は調書ができるまで軟禁状態にあった⁶¹。聞き取りが終了して報告書『北槎聞略』⁶²が献上されたのが寛政六年であるから、ロシアに漂着してからすでに十一年が経過していた。二人は釈放され自由の身で招かれては異国の話をしたのであろう。一茶はこうして国の内外に関心を示しているのである。異国船関係に関心を示して作られたと考えられる一茶の句を抽出してみる。

①寛政四年（一七九一）、長門に異国船漂着

君が世や風治りて山寝る (寛政四年)

②文化元年（一八〇四）、レザノフが光太夫・磯吉を護送して長崎に来航、通商を求める

日本の年がおいしいかおろしや人 (文化元年)

日の本の山のかひある桜哉 (文化元年)

⁶⁰ 『一茶全集』二、三八四頁。

⁶¹ 『御触書天保集成』六五三〇。

⁶² 作者の桂川甫周は、江戸時代後期の医師蘭学者として、杉田玄白の『解体新書』の翻訳事業にも参加した。寛政六年、徳川家斉の命で漂流民の陳述をまとめて『北槎聞略』をまとめた。

③文化三年（一八〇六）、ロシア人が蝦夷地で狼藉、一大事件に発展し、幕府を悩ます。

幕府は即時にロシア船来航の際の処置を諸大名に布達

君が世を雀も唄へそりの唄 (文化三年)

へら鷺も万歳聞くか君が春 (文化三年)

君が世やよ所の膳にて花の春 (文化三年)

君が代を鶏も諷ふや餅の臼 (享和三年)

④幕府、盛岡藩・弘前藩に出兵を命ずる

我国は子供も鬼を追にけり (文化四年)

君が代のかほつき合す櫓家かな (文化四年)

⑤文化四年（一八〇七）十二月、「おろしや船打払令」が出される

君が代は鳥も法華経鳴にけり (文政二年)

日本の優曇華咲ぬまた咲ぬ (文政三年)

日本に来て紅つけし乙鳥哉 (文政四年)

日本の蘭となりつゝいく世ふる (文政四年)

拙者儀も異議なく候君が春 (文政五年)

日本の蚊をば苦にせぬ乙鳥哉 (文政七年)

日本にとしをとるのがらくだ哉⁶³ (文政七年)

⑥文政八年（一八一）二月「異国船打払令」布告

正直の国や来世も虎が雨 (文政八年)

日の本や天長地久虎が雨 (文政八年)

君が代の大飯喰ふてさくら哉 (文政八年)

太平の日永に逢ふやかくれ蓑 (文政八年)

日の本や金も子を産む御代の春 (文政七年)

けふからは日本の雁ぞ楽に寝よ (文化九年)

一茶の膨大な量の俳句のうち「君が代」「我が国」「日の本」「日本」という語を使用した句は七十句を超え、類句を数えれば百句を超える。こうした句は一茶独特の俳諧滑稽の意

⁶³ 『一茶発句集』の「日本にとしをとるのがらくだ哉」の句には「おらんだ渡大馬」という前書がある。紀州家から将軍に献上された駱駝を詠みながら、「楽駝」をかけている。また『俳文拾遺』には「とこ国の人うらやむ程に世の中よく米穀花にちらばいて」と書いたように、泰平金銭の時代であった。

識で作られたものか、時事の諷刺や揶揄であったのか、幕府礼讃であったのか、太平楽の狂句であったのかは判断しようがない。一茶が俳諧を始めた二十五歳から晩年に到るまで、一茶は時代の変化に常に敏感で、庶民の生活に眼を配ることを怠らなかった俳人であったことは確かである。

それでは一茶は「君が代」「我が国」「日の本」「日本」という言葉にどんな感情を込めていたのであろう。冒頭に掲げた二十七句で気が付く点は、寛政から文化三年まで、つまりロシア人の蝦夷地における狼藉事件までは「君が代」「君が世」が使われ、この事件を機に「おろしや船打払令」が出され、続いて「異国船打払令」が布告された事件と時期に符合する形で「我が国」「日の本」「日本」という語が頻出するようになる。世の中全体がこうした事件に関心を抱いていたのであるから、一茶の関心度の高さは当然であるかも知れない。

ところで、一茶が生きた明和、寛政、享和の時期にかけて『歳時記』が整理されはじめた。現代人がいま使っているような歳時記は、曲亭馬琴が享和三年（一八〇一）に編した『俳諧歳時記』、貝原益軒が貞享五年（一六八八）に編した『日本歳時記』、天保九年に斎藤月岑が『東都歳事記』を編集したのが、そのもとになっている。それまでは正保二年（一六四五）に松江重頼が発刊した『毛吹草』、正保五年に北村季吟が著した『山之井』などが使われていた。本草学の発達に伴い享保二年の『通俗志』以降現実在即した改編が試みられ、享和三年にはじめて書名に歳時記と称した『俳諧歳時記』が刊行され、幾多の改編がなされて現在の歳時記ができあがった。

それ以前は、『去来抄』や『俳諧問答』など芭蕉や向井去来の句を手本にし、『連歌至宝抄』などが歳時を知るのに用いられた。「君が代」「君が春」は俳諧連歌の季題で「天皇聖代の初春の義」を意味した。『去来抄』や『翁草』では「天皇聖代の初春の季題語、約束語の語義」であることを説いている。「我が国」「日の本」「日本」は季題ではない。無論現代の歳時記に「君が代」は季語として扱ってはいない。つまり一茶はこうした未曾有の国難が発生するまでは、季題、季語としての「君が代」を意識して作句していたのである。日本の国を揺るがす国難の発生から無事脱出（一時的なもの）でき、文化・文政という繁栄期を生きた一茶の心に、諸国放浪を体感した国家意識が生まれ出たのであろう。この時代に極く普通に生きた人の把み得なかった「日の本」「日本」という国家意識は、一茶のなんでも見てやろう、聞いてやろうという旺盛な好奇心から生まれた独自の俳諧用語として意識に根付いたのであった。

文政二年（一六一九）三月十四日の一茶から青野太筈宛てた書簡に、「素月尼、乙二の跡を慕ひて筈館にまでもわたりて、大蛇と成りても本意をとぐるといふ一念、仰の通り、天下の剛勇此人ならで外にあるまじ。折ふし日高川の開帳もをかしく候」⁶⁴と書いているように、素月が奥州路に旅立ったことを賞賛している。文政四年一月六日太筈宛てには「乙二も性がぬけたとなん。是も切幕ニ近ヨリ哀也」⁶⁵と書いて、乙二の箱館渡海を賞讃しながら、年老いたことに同情を寄せている。文政五年（一八二一）八月の句帖に、「廿九日曇、時々小雨、去七月廿五日房州又三浦三崎ノ辺ノ漁船コトゴトク荒風ニ逢溺死者三千人ト云。七里浜竜口辺ニ打寄ル舟三百八十余艘ト云」⁶⁶と書いているのも、あるいは井上良眠あたりの便りに依るものであろう。一茶は後に「難船を憐れむ」という俳文にしている。井上良眠は、房州朝夷郡の奉行であった武州岩槻藩士児玉南柯にも仕えた。岩槻藩の儒者である南柯は、若い頃にこの地の奉行を務め清国の漂流船を筆談で聞き書した『漂客紀事』を残している。井上杉長の句は『随斎筆紀』のなかに二十句に余る数の句が記され「房州杉長」と記されている。一茶は友人・子弟からの諸国の国状を具に知らされ、それらをこまめに記録したのであった。

江戸幕府の施政の方針は、「民は国の宝、農は立国の大本」であり、これがほぼ実現されたのが元禄期と化政期であった。文化・文政期の繁栄はいわば、貨幣経済が花開き、万事金が金を産む時代であった。文政元年に一茶は「日本の外ヶ浜までおち穂哉」と句に詠んだが、その前書には「米穀下値にて下々なんぎなるべしとは、こと国の人うらやましからん」とあるように、豊作による米余りで、飢饉とは程遠い、美食、飽食の時代であった。田中圭一氏は『日本の江戸時代』のなかで、村々に残っている資料に即してみると、一般に描かれている江戸時代とは「まったく別の世界がそこにある」といい、「百姓の家はそれぞれの苗字をもっていたし、百姓は自分の田畑を自由に売買していた」⁶⁷とし、「江戸時代にあって、生産の面でも文化の面でも、時代を担っていたのは百姓であり町人であったことはまぎれもない事実である」⁶⁸と言い、それまでの定説を覆して農民の豊かさを説いている。

江戸幕府の出す御触書は細事に及んでいる。「かたり事」「隠売女」「書籍」「芸事」「風俗」

⁶⁴ 『一茶全集』六、三九七頁。

⁶⁵ 同上、三九八頁。

⁶⁶ 同上、三八九頁。

⁶⁷ 田中圭一『日本の江戸時代』（刀水書房、一九九二年）、iii頁。

⁶⁸ 同上、十四頁。

「道中」、その他生活全般にわたっているが、むしろ窮屈に縛るものではなく警告に近いものであった。漂流船の取り扱いについても鎖国下でありながら、寧ろ寛大ともいえる措置である。それゆえに、幕末になると幕府は逸早く開国の方針を取ったのであろう。封建制度は出発の時点から崩壊の方向に向かってすべり出していたのである。

一茶は諸国わたりの旅三十年を通して、豊かになってゆく日本を実感したに違いない。御触書の形骸化を身を以て体験したからこそ太平の世に起こる奇異な事件を書き残したのである。一茶は体系的に学問を通して体制の何たるかを知ったわけではない。みずから諸国を行脚して、あるいは大名や大商人の幸便を利用して書簡の発来信をしている。そういう簡便さをみずから見つけ出して、奉行所に「役金免除願」の嘆願書を出して認められてもいる。芭蕉は「いねいねと人にいはれて猶喰あらず旅のやどり、どこやら寒き居心を佐て、住みつかぬ旅のこころや置炬燵」という心境で、弟子の乙州の新宅に泊まっていたが、一茶は駕籠に乗り、羽織を着て門人宅を泊まり歩いている。同時に、世に乞食行脚の俳諧精神は失われ、芭蕉から下ること百年にして鈴木道彦のような俳諧分限者を誕生させる時代になっていた。街道が整備され、旅が遥かに楽になり、貨幣経済の普及によって物も豊かになった。そういう状況を一茶は、「けふからは日本の雁ぞ楽に寝よ」と豊かになった日本を詠んでいる。

一俳諧師として国家を意識する「日本」という言葉を使って俳句を詠んだ者は、おそらく一茶の前には存在しなかったであろう。芭蕉には、「かびたんもつくばはせけり君が春」という句があるものの、たった一句だけである。一茶のように百句に余る句を作った者はほかにはいない。化政期という時代は、日本人が日本人らしく楽に生きられた時代であり、伊能忠敬や間宮林蔵の樺太探険の快挙によって、日本国、国家、国土という意識が俄かに高まった時代でもあった。光太夫と磯吉は幕府から三十両の褒賞金を与えられ、一茶は弟から十一両二分という大金を受け取ることができるほど農民の生活も向上していた。江戸の町人達が一両をたいそうな金として有り難がっているように時代劇などで、描かれているが、決してそのような時代ではなく、貨幣生活は隅々まで浸透していたのであった。一茶は「日の本や金も子を産む御代の春」と詠んでいるが、ここには農民出自の一茶の素朴な感情がにじみ出ている。一茶の百句に余る「日の本」の句は、世相に啓発された純情な一茶の心の発露なのである。

第四章 一茶稿本『志多良』の題名

第一節 一茶と農事

小林一茶が残した二万に余る句のなかには、「農事」を詠んだ句があまた見られる。農事の後の休憩には炬燵に入って休むことが最大の喜びであった。信州では長期間雪に降り込められた生活のため、炬燵は欠くべからざる必需品であり、生活風土を表現する格好の句材であった。そこで一茶は故郷に帰住すると、炬燵を題材にして多くの句を詠んだ。なかでも「つぶ濡の大名を見る炬燵哉」は、一茶が五十八歳の文政三年（一八二〇）に詠んだ句である。また「畠打や寝そべつて見る加賀の守」の句は、翌年一茶五十九歳の作である。この二句は、一茶の作品のなかでも特別反骨精神を示すものとしての評価を得てきた¹。一句に詠まれている大名や加賀の守は北国街道をゆく前田家などの大名達である。

一茶の炬燵を詠んだ句は、『発句』によると、四十九句があり矢羽勝幸氏の調査によると次のように分類ができるそうだ²。

一、故郷定住以前（寛政五～享和三）	十句
二、故郷定住以後（文化九～文政七）	三十七句
三、年次不明	二句

一茶と炬燵が密接になって来るのは、故郷柏原に帰った文化九年（一八一二）以後に最も多くなる。炬燵は全国共通の暖房具であるから、特に信州に限ったものではないが、長期間雪に降りこめられた奥信濃の生活風土を表現するのには格好な句材であったことは確かであろう。この作の原案はすでに文化十四年（一八一七）一月に作られている。「乞食を通れといふて火燵哉」「順礼に唄損さする炬燵哉」「大名は濡れて通るを炬燵哉」となっている。この作品からは、炬燵に潜って悠然と大名を揶揄する心の余裕は感じられない。むしろ見られて庭の片隅を通行させられる乞食や巡礼は、俳諧行脚中に体験した一茶自身の姿であったのであろう。

¹ 矢羽勝幸『一茶新攷』（若草書房、一九九五年）、二二六頁。ここには、金子兜太の『小林一茶一句による評伝』を引用しながら、「諷刺ものにしては、意外といつていいほど暗く重いものがある」という評価も紹介している。

² 同上。矢羽氏は、一茶は文化元年から文化九年まで、まったく炬燵を句に詠んでいないという、そこから、「つまり一茶はこの期間炬燵に無関心であった」として故郷定住への強い決意は持っておらず、文化九年が帰郷への強い決意を持った時期としている。

- | | |
|------------------|--------|
| ①炬燵より見ればぞ不二もふじの山 | (文化九年) |
| ②吹降りや親は舟こぐ子は炬燵 | (文化九年) |
| ③唐迄も鵜呑顔して炬燵哉 | (文化十年) |
| ④日本中鵜呑顔なる炬燵哉 | (文化十年) |
| ⑤渋柿のさしづし給ふ炬燵哉 | (文化十年) |
| ⑥雀来よ炬燵弁慶是に有 | (文化十年) |

ここに記した句はいずれも、一茶が呑気顔をして炬燵に入っている姿ではない。一年の約三分の一を家のなかに閉じこめられた雪国の生活ぶりを、一茶の眼を通して詠じた句である。

- | | |
|--------------|--------|
| 居仏や炬燵で叱る立仏 | (文政四年) |
| けさつから悔む許で炬燵哉 | (文政四年) |

そうした風土性の強い国柄では、信濃に定住する人達に対して、信州各地には「来り者」として、他国から移住する者を蔑視する風潮があるという。そういう風潮はどこにでもあるのだが、特に山間地で耕作地が少ない土地ではそう感じられたのだろう。移住者があらたに土地を開墾せず田畑を買い求めることを恐れたことは間違いない。これらの句に描かれている風潮は、あくまでぬくぬくと暖かい炬燵に潜って、貧寒の物乞い達を嘲笑するものである。一茶の心はそうした信濃の風土を黙視できなかった。一連の炬燵の句から窺い知られるように、その批判の矛先は、自分と同時に同郷者にも向けられていたのである。

文化九年(一八一二)は一茶が永年住みなれた江戸を去り、郷里柏原に帰った年である。一茶はその感慨を「是がまあつひの栖か雪五尺」と詠んでいる。一茶の父弥五兵衛は、享和元年(一八〇一)五月に六十九歳の生涯を閉じた。一茶はこの時懸命に父の看護をした。後に『父の終焉日記』(享和元年)にまとめられるが、ここには一茶の柏原帰郷定住の目論見が観取される。弟との遺産分割問題は、死に瀕した父の枕頭で行われ、一茶は父から遺産折半の遺言書を得たものの、分割の実行は即座に迫らなかった。この時一茶は三十九歳で、俳人としては葛飾派の宗匠になったばかりで、まだ江戸での宗匠としての活躍を心に期しており、財産分割はとりあえず恒産の確保にあった。しかしそれも思いつきではなく周倒な計画性があったことを忘れてはならない。

一茶が故郷定住を心に決めたのは文化四年（一八〇七）六月、父の七回忌に当たって帰省した折に遺産分割の話を持ち出し、実行を迫った時である。当時の遺産相続は、折半が一般的で、弥五兵衛の処置はそれなりに正しかった。遺言書といい、折半分割といい、実に近代的ではほぼ現在の民法に規定する相続に近い形である。この時の遺産分割実行の交渉は失敗に終わった。この時点では、一茶は江戸無宿となっており、農民ではなかった。

遊民遊民とかしこき人に叱られても今更せんすべなく

又ことし娑婆寒ぎそよ草の家 （文化三年）³

作らずして喰ひ、織らずして着る身の程の行先おそろしく

鋤の罰思ひつく夜や雁の鳴く （文化四年）⁴

この二句は一茶の遺産相続交渉の折の句である。この二句からは、帰農する意思は見られないのだが、俳諧遊民としての生活のなかでも、農事そのものに対してはある程度理解と親近感を示していたことが感じ取れる。だが、一茶はこの時点ではまだ遺産分割の交渉に至っておらず、文化四年（一八〇四）十一月に再び帰省して催促を繰り返したが、交渉はまとまらなかった。年が明けて文化五年六月二十五日に江戸を発ち、三回目の交渉に臨み、四ヶ月後の十一月にようやく弟が折れ、遺産折半の契約「取極一札之事」が取り交わされた。この時点も柏原に定住して農事に従事する意志は一茶には全くなかった。弟に亡父遺産の折半を約束させ、父が死亡した享和元年より文化五年までの七ヶ年間の一茶の取り分の小作料と家賃について、元利ともに金三十両の支払い要求をして江戸に帰ってしまった。これは家作料の請求という意味を持っていたのであろう。一茶の身分上の問題もあったのである。この時点での行動もまた計算づくであった。

一茶がこのまま柏原に定住していたら、信濃における一茶の俳諧知名度は今日ほど高くなっていなかったであろう。その後一茶は、文化六年（一八〇九）四月、文化七年五月、文化九年六月と度重なる帰郷を繰り返している。帰郷の目的は遺産交渉だけではなく、北信濃において一茶社中を形成しようという目論見があつてなされたことと思われる。

文化七年五月十九日の『七番日記』に「古郷やよるもさはるも茨の花」の句が記されている。同句を添えた俳文「茨の花」は同時期に書かれたものと思われる。

³ 『一茶全集』二、三三一頁。

⁴ 同上、五五三頁。

柱ともたれしなぬし嘉左衛門といふ人に、あが仏の書一紙いつはりとられしものから、魚の水に放れ、盲の杖もがれし心ちして、たのむ木陰も雨降れば、一夜やどるよすがもなく、六十里来りて、墓より直に又六十里外の東へふみ出しぬ。

古郷やよるもさはるも茨の花

まゝ子一茶⁵

この俳句は柏原の草分けで、代々名主を世襲していた中村嘉左衛門が、亡父弥五兵衛の残した自筆遺言状を預かってしまったことを物語っている。名主としては当然の行為で、帳抜人同様に扱っていた者が帰郷しては面倒だったからである。こうした事情もあって一茶は、文化五年には柏原に定住しなかったとも考えられる。江戸に戻った一茶は、夏目成美のもとでしだいに頭角を現し、個性的な作風で俳壇に名を成していることから考えると、帰郷までの四年間は故郷信濃での一茶社中形成の準備期間であったといえる。

文化十年（一八一三）一月の『七番日記』の二十六日には「遺言ノ家及倉其外糶滞金卅両為引取 仙六因不得心明廿七日出立東都御糺所ニ為上訴 然所明専寺御坊因乞和延引」⁶と記されている。仙六が拒否していた、享和元年から文化五年までの田畑の収益と家賃三十両の請求を、一茶は江戸の評定所に訴えようとした。これをみかねた菩提寺の明専寺の住職が仲に入って「取極一札之事」のとおり実行に移され、一茶は晴れて柏原に定住することができるようになった。この点は、すでに触れたとおりである。この年の一茶の句には次のような作がある。

①よそ並の正月もせぬしたら哉

②すりこ木のやうな齒莖も花の春

③ふがひない身となおぼしそ人は春

④かくれ家や齒のない口で福は内

⑤古郷やイビツナ家も一かすみ

⑥舞込だ福大黒と梅の花

⑦乞食も福大黒のつもり哉

⑧かすむ日も雪の上なる住居哉

⁵『一茶全集』五、一二四頁。

⁶『一茶全集』三、二一二頁。

- ⑨棒切でつゝいておくや俺の畠
- ⑩我が蒔種をやれやれけさの露
- ⑪我宿は何にもないぞ巢立鳥
- ⑫餅つかぬ宿としりてやおそ燕
- ⑬我宿は萩一本の野と成ぬ

これらの句には永年の願いを果たした一茶の喜びは看取できるが、百姓となる喜び、田畑を所有する喜びはどこにもない。文化十一年に次のような句があるが、いずれも傍観者としての詠である。

- ①大根引大根で道を教へけり
- ②畠打や鋤でをしへる寺の松
- ③畠打や通してくれる寺参り

これより遡って三十歳代の句を見てみよう。

- ①もったいなや昼寝して聞く田植唄
- ②道問ふも遠慮がましき田植哉

一茶のこうした句から農作業に対する尊敬や、農に対する尊敬畏怖の念と解する諸氏が多い。だが一茶は生涯農作業を行った記録を残していない。菊苗や木瓜の苗木などの挿木のことばかりである。文化十一年（一八一四）四月十一日に一茶は母方宮沢家の縁籍に当たる、信濃町赤川の常田久右衛門の娘菊と結婚する。しがし、一茶は結婚後にも農民として故郷に根を下ろしたわけではなかった。『七番日記』によれば、「四月十一日、赤川里の常田氏女を娶る。年二十八と云う。五十二にして始めて妻帯す。七月二十二日柏原を出でて、八月九日東都に入る。十二月十七日東都を出でて、同二十五日柏原に入る」⁷とあるように、江戸と柏原を往復していた。柏原を離れる七月というのは、大麦・小麦の収穫期にあたり、柏原に戻ってくる十二月は畑仕事はすべて終わる時期である。要するに、一茶自身は一切農事に関わっていないのである。田畑の耕作は妻の菊と小作人にまかせ、自らは

⁷『一茶全集』三、二十四頁。

北信濃から越後にかけて、数十人の門人間を巡回し俳諧指導に明け暮れている。地方有産階級の門人を励まし、彼らの名儀により、文化十年には『志多良』を編み、文化十三年には『あとまつり』を、翌十四年には『杖の竹』を、文政九年には『たねおろし』を次々と刊行した。

なかでも『志多良』は、故郷定住後の一年間の手記であり、正月一日から筆を起こし、その一年間の句文や、知友の文音句、古俳書の抜き書き等を書き留めている。巻頭に「人並の正月もせぬしだら哉」の句が置かれている。

これまで「しだら」を「ていたらく」の意と解し、「多く悪い意味に用いる語」と解して来たが、以上見て来たように、一茶にとってこの年は「悪い年」ではなく、念願の帰郷がかない、妻帯をし、父の遺言書どおりの財産を得、弟仙六との間に文化十年一月二十六日には和解が成立し「熟談書付之事」という和解書を交わして、金十一両二分を受け取っている。これがどうして「ていたらく」であろう。『七番日記』の巻頭にも「よ所並の正月もせぬしだら哉」を置いている。めでたい年であるはずの歳旦吟を以て句文集の書名としているのには他に理由があるはずである。

前に引用したこの年の句には、いずれも喜びの気持ちが溢れている。一茶自ら歳旦吟を詠み、その句を以て、自ら題としている以上、一茶の思い入れは強いはずである。自ら「旧里を出て漂泊三十六年也。日数一万五千九百六十日。千辛万苦して一日も心楽しむことなし」と「七番日記」に記した、乞食行脚の旅僧としての漂泊が終わった日でもある。「じだらく」は「自墮落」で、だらしない様をいう。「しだら」は「事のいきさつ」や「好ましくない状態」を意味する。また「したら」とも言い、「手拍子を取ること」や「手を打つこと」を意味する。手拍子を取って歌う子どもの正月の遊戯で、主従や親子の間の嬉遊笑覧の様子をいう。次に、『志多良』を中心に一茶の意識も検討したい。「ていたらくな生活」を指しての命名ではないはずだ。

第二節 故郷定住と『志多良』

小林一茶が三十六年間に及ぶ放浪生活に終止符を打って故郷柏原に定住したのは、文化九年（一八一二）十一月二十四日であった。「是がまあつひの栖か雪五尺」と詠じたのが、定住第一声であった。この時一茶は父の遺産分割は済んでいたが、弟仙六に田畑収益と家

賃分合計三十両を要求していたのでさすがに実家に戻れず、北信濃の村々を転々としていた。十二月二十四日からは、柏原明専寺入り口の丘右衛門の借家に移り、ここで文化九年を終え越年をしている。明けて文化十年一月一日から四日まで丘右衛門の借家で過ごし、六日からは又転々と泊まりを重ねている。一月二十六日に明専寺の住職の調停で請求金十一両二分を仙六から貰い、翌日二十七日に柏原に帰った。一月四日の節句には「かくれ家や歯のない口で福は内」と詠んでいる。一茶は文化八年六月十六日大乘寺滞在中に唯一の歯を失ったことを「老の兆し」といたく認識したらしく、この時「残る歯を失う」の一文を残している。

十六日の昼ごろ、きせるの中塞りてければ、麦藁のやうに竹をけづりてさし入置たりけるに、中につまりてふつにぬけず、竹の先ワづかに爪のかゝる程なれば、すべきやうなく、欠残りたるおく歯ニてしかと啞へて引たりけるに、竹ハぬけずして、歯ハめりめりとぬけおちぬ。あれは、あが仏とたのミたる歯なりけるに、さうなきあやまちせしもの哉。かの釘ぬくものもてせば、力も入らず、すらすらとぬけぬべきを、人の手かることのむつかしく、しかなせる也。

四十余年の草枕、狼ふす草をかたしきて、夜通したましひ消るおそれをしのび、あらし吹く舟をやどゝして、底の藻屑に身を浸すうさをしのぎ、たまたま花さく春にあへば、いさゝかうれひを忘るゝににたれど、ほとほと露ちる秋の行末をかなしむ。重荷負ひて休らふごとく、たのしみのうちにくるしみ先立つ。其折々に齢のひたものちゞまり行くことを、今片われの歯を見るにつけツゝ思ひしられぬ。いつの日、むしろ二枚も我家といひて、人に一飯ほどこさる身となりなば、是則安養世界なるべし⁸。

これに似た文章が『七番日記』にもある。「釘抜き」を借りたり、「人の手」を借りたりすることができない旅の不如意さを述べ、放浪生活の辛さをかこち、流浪生活の限界を知って、「我家」にての安養世界を夢みている。『七番日記』に「ただ一本の歯」と記されており、一茶は四十九歳ですべての歯を失ったことになる。故に一茶の足はしげく江戸と柏原を往来するようになる。故郷での一茶社中構築の準備と定住のための遺産分配を執拗に推し進めたのである。一茶の俳人としての評価は、文化九年の俳人人気番付「南瞻部州大日本国俳諧相場定所」によれば、左右あわせて上位から二十七人目にランクされ、俳人と

⁸ 矢羽勝幸、「」前掲『一茶大事典』、四〇二頁。

しては確固たる地位を築いていた。一茶の柏原定住は、江戸における俳人としての挫折などでは決してない。用意周到な老後の生活設計の見取図があつての故郷定住なのである。一月二十七日に生家に入るまで、滝沢可候、村松春甫、丸山看斎、住田素鏡、西島士英、西原文虎、など有力門人宅を泊まり歩いていることから、すでに気を許した土地の有力者門人ができていたことが知られる。

一茶の自筆句文集『志多良』は、文化十年の一年間の手記である。故郷へ定住した一年間の発句、連句、俳文、俳諧書、古俳書や文通句の抄出がまとめられている。現在自筆の稿本三冊が残されており、一茶生前に刊行されてはいない。書名はここに収められている歳旦吟「人並の正月もせぬしだら哉」により、一茶みずから題したもの、と解せられて来た。また「しだら」が「ていたらく」の意と解され、これが動かぬ定説となっている。だがここにも一茶の境涯からくる解釈が施されてしまっている。一茶は題名を「志多良」と記しており、「しだら」とはしていない。「しだら」は「事のいきさつや事情」または「好ましくない状態、ひどい状態」を述べたり「好ましくない行動や不行跡」などの状態を意味する言葉である。「したら」は「手を打つこと、手拍子をとること」を意味し、「手拍子をとって歌う子供の遊戯」を意味する。これに歌という語を伴って「したら歌」という言葉がある。これは平安時代以降、したらの神をまつる神事に歌われた歌で、子ども達が手拍子をとって歌う。「したら神」「したら大神」として民衆の信仰を集めた。疫病の流行を防ぐ神として農村を中心に信仰が広がった。神の名を「志多良」や「志多羅」「設楽」と書き表している。

一茶が書いた句文集の名は『志多良』である。これは「自墮落」や「為体」とは意味が異なる。事実、一茶はこの集のなかで、「ていたらく」を意味する句ははっきりとそう書き分けている。発句の措辞を厳選して詠んでいる。「ていたらく」や「なまけもの」「無頓着」の語は主体的な行為を表現する言葉である。「ていたらく」は多くは非難や自嘲を含んでいる。「たらく」は断定の助動詞「たり」の未然形「たら」に接尾語「く」が付いた語である。「体たり」の「ク語法」であり、当時においても「好ましくない状態」や「ほめられない状態」について使われた語である。『源平盛衰記』などにも「此の山のていたらく峰高うして」とあり、単なる様子や有様でない語気が含まれる。「いふなり」「むとんじやく」は「無批判に人の言葉に従うこと」や「言うがままに従う」ことを意味する。「むとんじやく」も無頓着に振る舞う様であり「氣にとめないこと」や「物事に拘泥しない気持ち」を意味する。一茶は主観的な句を詠む俳諧師であるから極めて強い感情を剥き出しにする。客観視

した作は少ない。どこかに自己の感情を含ませて詠む。一茶の詠句の中からそうした感情の含まれる句を抽出してみよう。

①名月や寝ながらおがむていたらく

②春永となまけしもけふ限りかな

③隙さうな里也梅のだらり咲き

④萍や浮世の風のいふなりに

⑤朝寒にとんじやくもなき稲葉哉

⑥名月やけふはあなたもいそがしき

一茶の二万句に余る作から、「自墮落」「為体」に類する語を用いて詠んでいる句は、僅かに六句ほどである。一茶の生活は極めて几帳面であった。「名月や寝ながらおがむていたらく」は『志多良』にある作品である。一茶は「人並の正月もせぬていたらく」と詠んでいない。「したら哉」と詠嘆をこめて詠んでいる。祈りとも解せるし、奉祀とも解せる。故郷定住の念願を果たし、信濃一茶社中を起こし、財産分与にあずかり、十一両の大金を手にした一茶にとって、この年どこに不足があろう。あるとすれば妻を持たぬことだけである。未だ妻を持たぬことについては『志多良』の俳文で次のように書いている。

小唄諷ひ小兵衛といふもの、おのれと同じ病、おなじ腫所なりけるが、今日死きとぞ。又此町彦左衛門といふ者も、おなじ腫所にて、いついつのころなくなりぬとかや。其外どこの誰、かしこの何がし、此病に消へぬるもの、もとの露末の雫よりもしげしとそ、人びと物がたりし侍る。さらぬだに死出山を半越へぬる心ちなりけるに、かゝる事聞につけつゝ、身の行末のおぼつかなく、此頃は我番かと思へば、しきりに心淋しく、さてもせんすべなければ、たゞたゞ桂好亭を終の敷寝とたのみて、けふか翌かと入相鐘聞くのみ。さりながら今身まかりぬとも、迹に泣迷ふ妻子もあらねばなかなかいまはの時ほうしろやすからん。

入らば今ぞ草葉の陰も花に花

……（文章略）……

妻を持たぬ気安さを述べているようにも見えるが、「無常の風のはげしきと、病の悪鬼のおそろしきは、仏もまぬかれ給ふことあたはず。まして荒凡夫の我々、いかで是を避くる事あらん。今年六月の始つかたより、臀のかたはらしくしくうづきけるが、旅中心に任せず、等閑にうち捨おきける。さるを十五日ごろより、鯁鯁の餌袋に水入れたらんやうに腫れふくれて、其痛むこと鎗もて突るゝごとく、又大熱さらに炎の中に坐するがごとく、流るゝ汗は暈を浸して、火車に乗るくるしびも是には過じと思れける。是癰といふやまひにて世俗いのちとりといふぞ」¹⁰と病状を書き記して、病気の一向に回復しない不安を訴えている。だが一方で「蚤蠅にあなどられつゝけふも暮ぬ」と詠んで暢気に構えているのも、放浪漂泊の身から解放され、家を持ち、弟子を持った安心感からなのであろう。『志多良』には先の歯の抜けた記事のような焦燥感はない。むしろ一茶という人物の飄々とした人間像が浮かんで来る。故郷定住の安心立命の境が読み取れる。決して「ていたらく」の生活などではない。多くの弟子の句を掲載し、江戸の成美と発句の交換をし、薬草の調合を楽しんでいる。

『志多良』の最後は「四縦五横、吾今出行。蚩尤避兵、盜賊不起、虎狼不行、還歸故郷。当吾者死、背吾者亡。急急太上老君律令」¹¹と書かれている。「太上老君」は、五世紀に道教教団が形成された頃、すなわち初期の道教において、老子を神格化した最高神であり¹²、「急急如律令」は道教の徒が悪魔を除く呪文に用いる語句である。ここには一茶の道教や儒教への知識も示唆されているが、直接的には一茶が故郷定住後の自分の将来に幸あらんことを願う気持ちが表白されている。さらに、「嵯峨山へ節季で候鳴り込ぬ」や「せき候に蹴とばさゝるな迹の児」「せき候を女もす也それも御代」と詠んでいる。「せき候」とは「ささら」を持って赤布で顔を包み、歌い踊って米銭を乞う歳末の物貰いを指し、「蹴とばさるゝな」は、その際の「あかがり踏むな後なる子」と続く神楽歌の一節を詠み込んだ句である。そうした句や書き留めを検証すると、『志多良』は「ていたらく」の意よりも志多良神への奉祀の意が強く働いていると見なすことができる。

⁹ 『一茶全集』六、一二一頁。

¹⁰ 同上、一一八頁

¹¹ 同上、一二九頁。

¹² 佐藤貢悦「道教」、棚次正和・山中弘編著『宗教学入門』（ミネルヴァ書房、二〇〇五年）、一〇九頁。

『志多良』句稿は三冊あり、一冊目には一茶の自叙がある。ここには一茶が「旧里郷令」に従って農民となった自負もある。

文化五年（祖母三十三回忌）墓参りの時になんありける。弟かたより古衾おこしたりけるに、しばらくして又武さし野にさすらへけり。其迹にて其衾いたく垢つきたれば、二倉なるゆかりの所にて洗ひ得させんとて、ばらばらにほどきけるに、こはいかに、中に入たるは綿にはあらで、襦袢の果、あるは古雑巾などの、荒布のやうに黒くしぼしたるものにぞありける。かくては縫ひたらんとも暖きたしにはならじと、其まゝ箱におし込置たりけるを、ことし霜月廿四日（父十三回忌）といふに、はるばる古郷に來たりけるに、二倉の人、しかぢかのもの也とてかたられきを、よくよく見れば、いかにも申さるゝ通り、都の乞食衆は爪はじきして嫌ふべき品也けり。昔ある人継子をうとみて、……¹³。

文化五年に弟仙六と父の遺産を折半する約束をとりかわし、仙六と連名で「取極一札之事」を村役人に提出する。これによって一茶は田は四石七升五合、畑は一石五斗六升五合五勺、山林三カ所、家屋敷半分、世帯道具、夜具を得た。一茶が受け取った田畑は合計して、今で言えば一町位（一ヘクタール）となり、山林その他の雑地などを加えれば、現在でも関東近辺では中農に位置する。この時得た古衾が後になってほどいてみたら綿のかわりに古雑巾の類が入っていて腹を立てているのである。

とやせんかくやせんとさまよひけるを、情ある里人、家の小隅かしてとしとらせんとあるに、地獄にて仏見たらんやうにうれしく、師走廿四日といふにそこうつりて、可候よりめぐみたる鳥の毛布団をかぶつて大寒を凌ぎ、春甫に貰たる紙張を引張て裂風を防ぎつゝ、人々のかげにて、漸西の春にはなしぬ¹⁴。

一茶は仙六の家に入れぬまま丘右衛門という人物の家に泊まり、弟子の春甫や可候から貰った「鳥の毛布団」にくるまって寝たのである。ここには仙六を恨みつつも弟子から寄せられる好意に涙する一茶の姿がある。この文の後に「人並の正月もせぬしたら哉」とい

¹³ 同上、九十七頁。

¹⁴ 同上、九十八頁。

う句が置かれている。生家に戻れぬ身ではあったが放浪漂泊の身に比すれば破格の好遇であり、「人並の正月」は家族妻子と迎える正月をいっており、一茶の心に決して「ていたらく」の自己卑下の気持ちはなかった。むしろ、漂泊の途次夢にまで見た積年の願望が叶う日は目前に迫っていたのである。「したら」にはそうした思いが実現してくれるであろう願いと予祝の意が込められているはずである。

情おのれを思ふに、ものゝ下の草性にやあらん、桔校かるかや女郎花のたぐひ、茅又は薪の下に生へつゝ、永の月日をつかの間も伸ることならで、たまたま上の物の尽る期あれば、盲亀のうき木にあへるごとく、日影めづらしくうれしげに見ゆれど、ほとほと其色としもなく、さらに灯心のそよぐやうに、やをらいさみ、やをら婆娑の風に吹れつゝ、おのがさまぎまの姿にならんとすれば、又あられなき荒簾にかけられつゝ生涯花咲く事もなく、五十年の夢けろけろさめて、たゞたゞ立枯るゝを待つのみ。皆是前生の報ひのなす所なるべし。

世の中の梅よ柳よ人は春

文化十年正月一日 信濃国柏原 一茶認

四日節分

かくれ家や齒のない口で福は内

月の梅の酔のこんにやくのとけふも過ぬ

人日

垢爪や齋の前もはづかしき

正月や梅のかはりの大吹雪

梅の木に花と詠めるしめしかな

鶯にあてがつておくかきね哉

ほくほくと霞給ふはどなた哉

まふ蝶にふりも直さぬ野猫哉

穴蔵の中で物いふ春の雨¹⁵

『志多良』は、この後に一茶の句や素鏡、松宇ほか信濃の有力者でもある一茶の門弟の句が並んで記されている。この集に掲載されている句は、『七番日記』とは異なり、境遇を

¹⁵ 同上、九十八頁。

恨んだり、世を拗ねたような句はなく、いずれも明るい響きのある句ばかりである。俳文にも「盲亀のうき木にあへるごとく、日影めづらしくうれしげに見ゆれど」¹⁶と、亀に仮託して喜びの心の内をのぞかせている。「灯心のそよぐやうに、やをらいさみ、やをら婆娑の風に吹れつゝ」¹⁷と、ことさらに不遇をかこつような口吻に変わるのは、弟仙六に請求している三十両の要求が実現しないことがあったからであろう。

文化五年に取り決めて約束させた「佐助沢」と「中島」の農地は一茶名義になり、その年の年貢額も定まり、毎年役金も納めていた。この時期一茶は、不在ながらも村民としての権利も有し、一人前の本百姓になっていた。江戸帰りの宗匠として各所で厚遇を受け、座を温める暇もないほどの忙しさと門人宅を泊まり歩き、指導料を受け取り、大満足であったはずである。

帰郷後ただちに生家に入らなかったのも一茶の計算の上での行動であった。『七番日記』の年末には「三百八十三日、在庵七十五日、桂好七十五日」と記され、病臥の日もあったが、おおむね一茶にとってこれ程恵まれた年はなかったはずである。

- ① ござるぞよ戸隠山の御夕立
- ② 我家とふん反りかへる扇哉
- ③ 雀子を遊ばせておく暈哉
- ④ おとなしく留守をしている蚕
- ⑤ 長々の留主にもあかぬ庵の蚤

こうした句を詠んでいる点でも定住後の一茶の満足感が看取できる。そうした点からも「しだら」は「ていたらく」であろうはずがない。「したら」であって、豊作を祈願する予祝の神「志多良」神への奉祀や褒詞の意が含まれた言葉なのである。

第三節 志多羅神と一茶の農業神信仰

小林一茶が自分の持ち分としての田畑を意識したのは文化十年（一八一三）五月二日の

¹⁶ 『一茶全集』四、四一七頁。

¹⁷ 『一茶全集』六、九十八頁。

日であろう。この日、一茶は田植えの時期を前にして所有地となった佐助沢の田に引水する樋を十二間にわたって修理している。無論、耕作する人は小作人であろうが、一茶の心には本百姓としての意識が芽生えたはずである。一茶自身は六月十五日から病みだしている。デキモノのため弟子の上原文路宅で九月五日まで病臥の身となり、文路の家族から七十五日間に及ぶ看護を受けている。実際に田畑を見て廻ったのは九月五日に病が癒えて文路宅を出て、長沼上町の三木亭に向かう途中であった。『志多良』には次のように書き記されている。

桂好亭にわづらふこと七十五日にして、九月五日といふに、筈にすがりて、霜がれの虫の這ふやうに、二足三脚歩きては一息つき、四足七脚運びては臍をさすりて、一里ばかりの道、吉田といふ所に到れば、白鳥山の午の鐘つくころになんありける。是より横路に入る。此界限、六月通りし時は、田植さなかなりしが、稲はことごとく穂の出揃ひて、久しくやみぬることの目に見へて、ひとりおどろく。……山国のならひ、俄に空かき曇りて、北山おろし……¹⁸。

一茶はかくして農業従事者としての目を持つようになる。一茶の「田植」を詠んだ句から本百姓になる前と田畑を持った後の句を抽出してその意識の違いを見てみよう。文化十年以前の句はいかにも傍観者的である。

- | | |
|-----------------|----------|
| ①道とふも遠慮がましき田植哉 | (「西紀」書込) |
| ②信濃路の田植過けり風 | (享和三年) |
| ③そろそろとよそは旅立つ田植笠 | (享和三年) |
| ④植出しの番して居るか都鳥 | (文化六年) |
| ⑤兀山も引立らるゝ植田かな | (文化六年) |
| ⑥茶のけぶり仏の小田も植りけり | (文化七年) |
| ⑦植る田やけふもはらはら帰る雁 | (文化八年) |
| ⑧みちのくや判官どのを田植歌 | (文化八年) |

ここに『西国紀行』中の一句、「もたいなや昼寝して聞田植唄」を加えると、僅かに九

¹⁸ 同上、一二三頁。

句であるが、文化十年以降は俄然その数を増し、文政八年（一八一三）作を加えて四十句を詠んでいる。その中から無差別に抽出してみる。

- | | |
|------------------|---------|
| ①木がくれや大念仏で田を植る | （文化十一年） |
| ②おれが田も唄の序に植りけり | （文化十二年） |
| ③田植歌どんな恨も尽ぬべし | （文化十二年） |
| ④烏番の役あたりけり田植飯 | （文化十三年） |
| ⑤ばゝ達やおどけ咄で田を植る | （文化十三年） |
| ⑥落の葉にいわしを配る田植哉 | （文化十三年） |
| ⑦藪起に膳をつん出す田植哉 | （文化十三年） |
| ⑧我庵も田植休の仲間哉 | （文化十三年） |
| ⑨庵の田も朝のまぎれに植りけり | （文政元年） |
| ⑩それがしも田植の膳に据りけり | （文政元年） |
| ⑪よその子や十そこらにて田植唄 | （文政元年） |
| ⑫たつた今旅から来しを田植馬 | （文政二年） |
| ⑬ざれはてやあの年をして田植唄 | （文政四年） |
| ⑭よりによりてこんな雨日や田植唄 | （文政四年） |
| ⑮むだな身も呼び出されけり田植酒 | （文政五年） |

文化十年以降は完全に百姓の目で詠んでいる。「早乙女」で九句「田草取り」で五句、「田打」で十八句、「畑打」で五十句、「接木」で二十八句と、農に関わる句は多くなり、その意識は画然としている。「大根引大根で道を教へけり」は文化十一年の句であるから、大根を引いているのも、それで道を指し示したのも一茶自身と解するのが正しかろう。

この年に一茶は結婚もしたが、意識はいまだ放浪漂泊師であったとみるべきである。しかし、これを自分自身の姿を句にしたと解釈れば、傍観者の句なんかではない。因みに大根を詠んだ句を五句ずつ比較してみよう。

- | | |
|---------------|--------|
| ①雨よ風よいつ迄咲ぞ野大根 | （寛政七年） |
| ②丘の馬の待あき顔や大根引 | （享和三年） |
| ③雨ふれど一本残る大根哉 | （文化元年） |

④君が代の下総大根引にけり (文化三年)

⑤かつしかや鷺が番する土大根 (文化七年)

初期の作は、いずれも俳諧指導行脚の途上即景の大根引きの様子を句に詠んでいるが、文化十年以降は俄に自意識の表出された句となり「田植」の詠と同様に百姓としての意識が露になっている。

①蚕其大根も今引くぞ (文化十年)

②庵の大根客有る度に引れけり (文化十三年)

③朝々に壺本づゝや引大根 (文政二年)

④我門や只六本の大根蔵 (文政三年)

⑤四五本の大根洗ふも人手哉 (文政七年)

こうして、一茶の農事を詠んだ句を比較すれば、そこに見られる一茶の意識は截然と区別することができるのであるが、現在までの研究では、一茶の生涯にのみ視点が置かれすぎて、その作品から丹念に比較するという作業がなされて来なかった。一茶は決して無学ではない。実に様々な学問を自学で修得しているのである。一茶が残した稿本のなかに、『俳諧寺抄録』という冊子がある。『古事記』や『万葉集』にはじまる百点近い古今の書物からの抄録本で、一茶の学識のほどがうかがえる。文政六年（一八二三）頃から同九年ごろまでに筆録したと思われる。そのなかに『大神宮儀式帳』や『八雲御抄』などの抄録があり、「神楽歌」や「催馬楽」など古代歌謡の引用もかなりの数にのぼっている。以下に一例を挙げれば、『東鑑』の引き写しもある。

十郎弟ノ僧、越後久我窮山アリテ参所、今日聞可被梟首由自殺ス。十郎兄弟京次郎、建久四年八月廿日被誅。十八日大磯ノ虎、夫三七日出家シテ赴善光寺。十九歳。建久九年十一月十九日梶原平三景時、六十六人訴状没。一略一建久四年五月廿八日癸巳日中晴、子ノ刻ニ故伊東次郎祐親ノ孫曾我祐成同五郎時宗、工藤左衛門祐経ヲ殺。十郎ハ新田四郎忠常ニ、五郎ハ五郎丸ニ捕ルゝ¹⁹。

¹⁹ 『一茶全集』七、三九五頁。

こうした記述から一茶の博覧ぶりを知ることができる。

一茶は「建久三年（一一九二）皇太神宮年中行事」について知悉していたはずである。この年中行事は建久三年に作成され、正応四年（一二九一）に書写され、さらに寛正五年（一四六四）にも書写されている。貞和五年（一三四九）三河国の猿投神社の年中祭礼記には、饗宴の予祝芸能として「田遊び」が行われたことが記録されている。また、『嬉遊笑覧』には天慶八年（九四五）の出来事として次のような文も見える。「天慶八年の頃京洛の間に訛言ありて、東西の国より諸神京に入るといひのゝしる事ありて、其月に摂津国司解官裁を申し講て言上す、神輿三前志多良と号し数百人は是を舁、幣を捧げ歌舞す、道俗男女会集して山を動す」と²⁰。つまり、この年東西より志多羅神の宗教運動が入京し、終には託宣によって岩清水八幡宮に鎮座するということになったのである。それ以来志多羅神信仰は各地に広がり、建久三年には皇太神宮年中行事となった。一茶は故郷信州に一茶社中を築くための力を志多羅神に求めたのであろう。

ところで、志多羅神を取り入れた正月の行事で、その年の豊作を予祝して行う神事芸能の一種を「田遊び」といい、地方によって現在では「皐月祝」「田植踊り」「庭田植」「弥十郎」「えんぶり」「御田」「春鋤」「太郎次」「尺太郎」「よなんそう」など、その他各種の呼称で伝わっている²¹。また、「田植祭」などと呼ばれ、小正月を中心にして行われる神遊びとしての音楽舞踊を意味する。一年の田仕事のさまを歌と身振りで模擬的に演じ、豊作になるよう田の神（志多羅）にかける一種の呪術的芸能であるが、土地によって田楽の芸能と混合したり、神楽と結びついたり一様ではない。社寺の境内に田に見立てた聖域を設け、大太鼓を立てて苗代や田の面に見立て、餅で作った鋤や鋤で耕作のまねをする。

東京都板橋区徳丸の北野神社の田遊びは、二月十一日の夜、境内に設けたモガリと呼ぶ二間四方の祭場でその中央に太鼓を据えて行う。演目は「町歩しらべ」「田うない」「代かき」「種まき」「鳥追い」「春田うない」「代かき牛」「施肥」「田ならし」「田植」「よなぼ」「やすめ太郎次」「獅子」「駒」「矢」「田草取」「稲刈り」「倉入れ」などで、稲作過程を長々とした唱え言や身振りで順序よく演じられる。

建久三年（一一九二）皇太神宮年中行事で「宮政所長官ニ可申上」をそのまま伝えているのは、岩手県から青森県下北半島までの広範囲で行われる豊年予祝の「えんぶり」であろう。二月十七日から四日間の期間中に、市内の地主や旦那衆に祝詞を述べ、当年の五穀

²⁰ 日本随筆大成別巻八『嬉遊笑覧』二（吉川弘文館、一九七九年）、一八二頁。

²¹ 『日本大歳時記』「新年…行事」項目（講談社、一九八三年）、一六〇三頁。

豊穰、家内繁栄を祝って豊作予祝のさまざまな歌舞を披露すると、これに対して地主たちは祝儀を出して酒肴を供した。この風習のなかに「長官ノ返答、御在地刀禰、維東維西ノ祝部」という行事の本来の姿が演じられ伝承されている。また東北地方の「えんぶり」は「えぶり」ともいって元来は農地を均したり穀物を掻き寄せる農具をいい、その農具で田の靈魂(志多良神)を揺り動かす靈力享受の願いをこめた田遊びの祝いともいわれている。

田遊びの行事と志多羅神の相互関連は、そこで歌われる歌謡にある。田遊びの成立の起点に志多羅神の宗教運動とそれを支える富豪層と、村落を形成する小作層との予祝を通しての共同体の形成が見られる。

- ①月は笠着る 八幡種蒔く いざ我等は荒田開かむ
- ②志多良打てと神は宣ふ 打つ我等が命千歳
- ③志多良米早買は酒盛らば其酒富める初ぞ
- ④志多良打たば沖はわききぬ 鞍打敷け佐米負はせむ
- ⑤朝よりは蔭は蔭れど雨やは降る 佐米こそ降れ
- ⑥富はゆすみきぬ 富は鑠懸け やすみきぬ宅儲けよ 煙儲けよさて我等は千年
栄えぬ

こうした作者が分からない労働歌の農民歌謡には、春の季節感を前提とした富豪層を先頭とする農村の荒田克服の姿勢と確信とが歌いあげられている。ここには志多羅神の宗教的運動の基盤として²²、その熱狂の相互媒介を通して、相互扶助的な村落共同体を形成して行った中世農村村落共同体の行事は、柳田説も、折口説もともに予祝行事と考えているところから今ではこれが定説となり、富豪農民層を先頭にして荒田開拓の小作農民層の姿を見ることができる。

志多羅神の童謡や歌謡は東海地方の田遊びや、九州地方の田舞などに今でも生き続けている。志多羅神の信仰と村落共同体維持神事としての田遊びには、荘園のイデオロギーとして機能していた予祝神事の意義があり、そこで行われた田遊びは稲作の生産過程の模倣的演技で、その形式を通して農業生産の安定と豊作への農民の切なる願いがこめられて現

²² 「しだらの神」について、小学館『国語大辞典』は「平安時代疫病流行の時、九州から上洛し民衆の信仰をうけた御霊神。八幡と同系か、あるいは八幡の眷属神」（第一版、一九八一年、一一五六頁）とある。

在に伝わっているのである。だがすでに東海地方では田遊びの行事は、僅かに伝承芸能として自治体によって保存されるようになっている。田打や荒田起こしと結びついた志多羅神は、その疫神送りの過程で、歌舞や太鼓などの楽器を伴い、恐らく田樂的なものとなって地方に伝播して行ったものであろう。富豪層を先頭にした中世の荘園や領国領地の開発に伴い志多羅神の力を借り発憤した開拓民の抛り所がやがて志多羅神を祀り、宗教的デモンストレーションとなってゆく過程で、新しい打楽器が登場し、多くの呼称となっていったものであろう。

ビンザラと手拍子、そして歌舞、そのリズム感と熱狂とが中心となって、田遊びの重要な楽器であるササラやエンブリ、ビンザサラなどが使われるようになったのが、現在東北地方で行われている「田遊び」や「えんぶり」といった行事などであろう。志多羅神の宗教運動の基底に、荒田起こし、田打、種蒔、などの田遊びに通じる予祝神事が結びついていものならば、比較的稲作の遅かった東北地方に現在尚脈々と受け継がれていることも首肯できよう。それらが地方によって式目編成が多少異なっているのは、歴史的な変形や場所的な変形を伴ってもいるが、基本的に稲作の生産過程を示している点では共通している。次は『百姓伝記』の一文である。

奥州白河米上米なり、惣て奥州は土地あしく、米あしき国なれ共、白河領斗上米也。
丹羽氏信秀殿耕作数奇にて、稲種を国々よりあつめられ、正作ありて、其種を村々里々へをろし、耕作下知の故、上米となる²³。

ここには奥州白河の領主が諸国の種を集めて、その結果優秀な品種を農民に配ったということがに記されている。ここには、中世以来の志多羅神信仰と結びついた荘園領主の開拓精神が息づいているように思われる。

また、田遊びには田植神事に集中して「早乙女」が現れる。早乙女は「雇人」といい富豪農民層に使われる身となっている。『建久三年皇太神宮年中行事』の歌詞に、①神（高次神祇・勧請神・在地土俗神）→②荘園領主→在地領主（地頭・政所・荘官・殿原）→③村落構成員（村人・大人・禰宜・百姓・若衆）→④まつり人、という順序が示されている。このことから、中世の時代は荘園支配者が、近世には領主が農民を支配する過程が象徴的

²³ 『百姓伝記』下（岩波文庫、一九七七年）、六十三頁。

な在り方となって示されており、それが実際的にも農村の核をなしていたことが分かる²⁴。

現在埼玉県上尾市には、中世の土豪道祖土氏が領したなごりとして地名に「地頭」「頭地」「中分」「平方」など領地拡大に伴う地名が残っている。東北地方に残る「田植踊」には、弥十郎や藤九郎などと呼ばれる音頭取りが先頭に立って、早乙女や囃子方などの集団を引きつれ家々を廻り、祝い言葉にあわせてさまざまな踊りを演じたことが知られている。祝い言葉のなかには妊娠を喜ぶ心境を述べたものもある。また「えんぶり」では、親方が三、四十人で一組になった集団に祝い唄をうたわせる場がある。そうした集団が旦那衆の家を廻って祝詞を述べると、これに対して地主達は祝儀を出して酒肴を供する。こうした行事は信州にもあり、一茶の家をも訪れたはずである。なお、埼玉県内には中世荘園開拓民の領主層の名がそのまま残っている「丹荘」「藤井組」「地頭方」「中分」「殿山」「駒先」などの地名もある。

しかし、多羅神にまつわる行事の意味を心得ながら、一茶はみずからこの行事に参加することはできなかった。文化十年（一八一三）の正月に、一茶は故郷に帰ったが、生家には入れなかった。弟子の家を転々と泊まり歩いた。やがて一茶は文化五年から柏原の地主になっていた。正月三日に行われる田遊びには、楽人に交じって小作の者も祝詞を述べに訪れたはずである。その時、一茶は明専寺脇の丘右衛門の借家にいた。志多羅神を祭神とする田遊びの楽人に祝儀を出せなかった。そこで、一茶は「人並の正月もせぬしだら哉」と詠んだのである。「しだら」は、定説となっている「ていたらく」の意味ではない。「しだら」は「志多良」と詠むのが自然である。一茶は農業神としての「志多良神」を心得て

²⁴『建久三年皇太神宮年中行事』の本文は、「田遊」という語の初出として引用されている。田遊は本来正月三日に行われたものであるが、現在多くは二月一日に行っている。御種と称して九個の小石を田に蒔く所作があり、二人の神職が東西それぞれを向いて「今年の御苗、前々年より勝って太う逞しう出来て御座る」と祝言を述べ、これを伝え聞いた長官が「御田蕃植」を命じる。神職達は「以藁殖田遊作法」を行う。「蕃植作法」は各地様々である。御田・田植神事・御田祭・春鋤・春田打とも称し小正月に主に行われる予祝行事で、田起こしから収穫までの農耕の様子を模擬的に演じて、実際に豊年の現出を期待した。地方により希に五・六月にこれを行う例があるが、実際の田植え時期に行った方が一層有効な結果を希求できる現実的な願いから行事日の変化をきたしたものであろう。現在最も古体を保っているのは、静岡県周智郡にある小国神社で三月三日（もと正月三日）に行われている。この神社で行われる神事の詞章には室町中期以前と思われる古色あふれる歌謡が含まれている。同時発生的に順徳上皇の『八雲御抄』も建久三年頃に成り、連歌式目の萌芽が見られる。又田遊に男女の交合を象徴的に演じる「カマケワザ」などもあるが、これは豊穰な稲の稔りを予祝しての感染呪術を演出したとも思われる。埼玉県北葛飾郡鷺宮町に鎮座する鷺宮神社は土師部の系統に八幡神が宿ったことから、源義家、頼朝父子も参詣している。中世には宇都宮氏、小山氏らから厚い崇敬を受けている。この神社では今でも夏期と年越の神事が行われ、田遊びの行事である「土師一流催馬楽」が催されている。毎年二月十四日に古式に則り大萩の神事がおごそかに取り行われている。

いたが、みずから農業に従事していなかったのも、ある種の負い目を感じて「人並の正月もせぬ」と、自分の心境を告白したのだ。ゆえに、一茶は「田遊び」については一句も詠んでいない。「田打」の句が十八句あるが、「田を打や田鶴鳴渡る辺り迄」や「雁どもゝもつと遊べよ打門田」などと詠んでいる。

文化十年（一八一三）の一年間の記録『志多良』には、一茶が「癰」という病に罹っている間、見舞いに訪れた可候、一考、万蔵、桂国、観国、大綾、掬斗、知洞、仁之倉の徳左衛門、素鏡、倉井の庄兵衛、白飛、文路などの名が記されている。また見舞金を桂国から金二両、元寿から二百文、有隣から五百文、元寿と知洞と大綾からそれぞれ金南鐐一片²⁵を受け取っている。江戸の成美と道彦も南鐐一片ずつを届けている。見舞品は上菓子、饅頭、金米糖、蕎麦粉一袋、煎餅、布子、頭巾、塗扇、風呂敷など日頃はめったに口に入らぬものが日を置かず届けられた。一茶は病臥の身ながら歌仙を巻いたり、句稿を改めたりした。文化十年の出来事を『志多良』から拾ってみると慶事のほうが多く、むしろ正月から名前ばかりとはいえ、本百姓となった一茶にとって、病気見舞いですら故郷定住に対する祝意が込められている。本来祝儀を出さねばならぬ身でありながら、弟子や柏原の有力者から祝意の品や祝詞を受け取り、新年を迎えた一茶にとって、この年は疫病神を神送りして豪遊して歩き、耕作もしないのに、田畑の豊年祈願のみを志多羅神に託して詠んでいたのである。一茶は、この年の句稿の名を『志多良』と名付けたのであった。

第四節 交渉巧者の俳諧師

繰り返して述べるが、一茶が故郷柏原に定住を考えるようになった直接の原因は、父弥五兵衛の死によって遺産分配を受けられる保証を得たからであった。一茶三十九歳の享和元年（一八〇一）五月二十一日、父弥五兵衛は享年六十九で没した。『父の終焉日記』によれば、死の三日前の五月十八日に父は「われ往生ばしとげなば、我申通妻して、汝も此国を遠ざかることなかれ。死後たりともそぶくな」と言い、一茶は「たとへ亡跡たりとも何かは変じ申べき」と答え、一茶は柏原帰郷の意志を伝え、父子とかたい約束を交わしたこ

²⁵ 南鐐二片は金一分にあたる銀貨である。金貨二朱で南鐐金八片をもって金一両に替えられる。南鐐二朱銀は二朱片といい、金二百文にあたり、金一分は一両の四分の一にあたる。

とになっている²⁶。五月二十八日には「父の遺言守るとなれば、母家の人のさしづに任せ
て」²⁷とあるように、本家のとりなしで遺産相続の件が合意するが、その後十二年間にわ
たって、一茶と弟仙六の間に遺産分割をめぐる対立が続いた。一茶は「父の遺言状」とい
う有利な条件を持っていた。小林家の田畑は一茶が出郷して定住を決意するまでの間にほ
ぼ二倍近くになっていた。いかに遺言とはいえ、弟仙六が難色を示すのは当然であった。
文化十年一月二十六日に明専寺住職の調停で兄弟の間に和解が成立し、「熟談書付之事」の
約定が成立した。

それではなぜ弟仙六は折れたのであろう。一茶の『七番日記』の一月二十六日の記事に
は「遺言ノ家及ビ倉ソノ外、糶滞金三十両引取ラントス。仙六心得ザルニヨリ、明二十七
日、出立シテ東都御糺所ニ上訴セントス。然ル所、妙専寺御坊ヲ乞フニヨツテ延引」²⁸と
ある。弟の仙六が明専寺の住職に調停を依頼して急転解決に向かったのであったが、事実
は、一茶が江戸の評定所に上訴することを言い出したからであった。それでは一茶のそう
した非常手段はどうしてなされたのであろう。封建制度では土地を基本とし、百姓から貢
献される年貢米を財政の基礎としていた。周知のように江戸幕府は寛永二十年(一六四三)
三月に「田畑永代売禁御仕置」を発令している。いわゆる田畑永代売買禁止令である。江
戸幕府はこの禁止令によって農民支配を完全化し年貢徴収を可能にした。

一、売主牢舎之上追放、本人死候時ハ子同罪。

一、買主過怠牢、本人死候時ハ子同罪、但買候田畑ハ売主之代官、又ハ地頭エ取上
之。

一、証人過怠牢、本人死候時ハ子に構なし。

一、質ニ取候者、作り取りにして、質ニ置候ものより年貢相勤候得ハ、永代売同前
之御仕置、但、頼納質といふ。

右之通、田畑永代売停止之旨、被仰出候。

(徳川禁令考二七八七号)

幕府はこうした法令布達によって農民を土地に縛り付け、さらにこの年の三月十一日に

²⁶ 『一茶全集』五、八十一頁。

²⁷ 同上、八十六頁。

²⁸ 『一茶全集』二、二一二頁。

は「土民仕置覚・十七条」を発令している。「庄屋・惣百姓といへども家作を作つてはならない」ことや「百姓之衣類は庄屋、脇百姓、置外の者」と三種類に分けて衣着制限をしたり、「衣類の染色」についても規制をした。「酒を在々で作つてはならない」ことや「昼間から酒を飲んではいけない」ことを述べた上で、七条からは百姓の仕事内容についても細部に到るまで指示している²⁹。特に「田畑の耕作に念を入れ」として生活全般について制限した上で再び十三条では「田畑永代之売置仕まじき事」として固く禁止している。こうした厳しい法令がありながらなぜ小林家の財産は二倍に増えたのであろう。

寛永二十年（一六四三）の「田畑永代売禁御仕置」に、「質に取候者は作り取ニして質に置候者より年貢役相勤候得は永代売同前之御仕置、但頼納買といふ」とある。「質に取候者は作り取ニして」とある。もし頼納が許されるなら質取主は年貢諸役を全く免がれた田畑を所有することとなる。それは「領主層の支配から全くはずれた田畑」が生ずることであり、質取田畑作りは隠田畑であって大罪となるはずである。だが享保六年十二月に幕府は「流地禁令」を布達している。

一、田地永代売御制禁ニテ候処、おのづから百姓田地に離候事ハ、永代売同然之儀ニ候条、自今ハ質田地一切流地ニ不成候様、只今迄質ニ致置候分、又は当然訴出候テ出入ニ成候分ともに、質年季明候は、手形仕直させ……幾年過候テモ地主之相返し候様ニ可致候……

一、質地之裁判之格法、前条之通此度相改候ニ付、五ヶ年以前酉年以来限之訴出候分ハ、只今迄裁許ヲ以流地ニ成来候分ニテモ、当然元金不残差出シ、田地請戻シ屹度願出候モノニハ請戻させ可申候、但流地候方ニテ、田地配分イタシ置、又は年季売質地等ニモ致置候分ハ、其儘ニいたし請戻させ申間敷候、流地取候モノノ手前ニ田地有之分計、右之通請戻させ候様ニ申付候事、……

（『御触書寛保集成』二六〇三番）

この法令を見ると、右の第一条においては将来のみならず過去の質地契約における流地、その他文言での効力まで全面的に否定し、第二条においては、幕府自身による流地の裁許

²⁹「慶安の御触書」には、「少は商心もこれありて、身分持ち上げ候ふ様に仕るべく候」とあり、農民を持ち上げながらも幕府は意外と早く商業とかかわっていったのである。

も、もし質入主がそれを希望するならば、一定限度内において取り消され得べき旨を定めている。土地の譲渡を許さぬという条理は、領主裁判の羈力にさえ優先している。こうした極端な法的効力の遡及は、流地禁令が、一方では「永代売禁止制」によって土地譲渡を禁止しながら、他方では流地というかたちによる譲渡を事実上容認してきたこれまでの妥協的な在り方を改正しようという意図があつてのことである。「頼納禁止」も、質地が流れてしまえば高名前は質取主に切り替わるべきであるが、実際は不埒証文の質地は流地となっても名義の切り替えがなされず、実際上は質地の高名前を切り替えずに事実上の所有権のみが引き渡され、領主的な名目上の土地制度に対して、私的な事実上の土地所有者が形成されていくようになった。つまり帳簿上は所有者名をそのまま残し、質入れとして質主が耕作した。このようなことが許されるのは、年貢の徴収法に問題があるからであつた。

延享元年（一七四四）六月、幕府は「田畑永代売買隠地いたし候もの御仕置之事」の布達を出したが、これは事実上の「永代売禁止」の撤廃でもあつた。幕藩制年貢収奪の方法は「高懸り制」といい総体としての完全収奪が貫徹していても個別的に量って収奪したわけではなかったので、過剰収奪のため持地を手放して小再生産に戻る農民もおれば、そのお蔭で土地を買い取る農民もいたわけである。『豊年税書』には「常に大酒いたし、作毛に精をも不入、分限に過て子供養ひ置、博奕、振廻、遊山にかかりて、……病人盲目年寄幼少成子供ありて、田畑持高之分を作取にしても食たらざるも在り、……下人を殺し、馬をおとし、盗人に作物をとられ、不仕合打続き」³⁰とあり、これら該当者は、年貢を「未進する者」として挙げているように、土地の質置が続出し、それによって持高を増やした百姓も随分といた。この発令後七十年を経過していたが働き者の一茶の父弥五兵衛、継母、弟仙六の三人は、一茶が出郷した安永六年（一七七七）の時点に比べて、享和元年（一八〇一）には小林家の田畑をほぼ二倍に増していた。一茶が出郷した安永六年は、田畑永代売買の禁が事実上失効して三十年が経過していた。

貨幣経済の浸透により農村からの人口は流出し、年貢収納による増減、耕地拡張などによって封建制度は済し崩し的に農業を困難にし³¹、一茶の農民としての柏原定住を困難にしていた。加えて、延宝元年（一六七三）六月に幕府は、「一、名主、百姓名田畑持候大積、名主貳拾石以上、夫より内持候ものは石高猥に分申間敷旨被渡奉畏候、若相背候はゞ何様

³⁰ 『豊年税書』、『日本経済叢書』一（日本経済叢書刊行会、一九一四年）、六十二頁。

³¹ 『農業全書』を百姓に読ませるようにし、「老農に習ひつくるべし」とあつたり、「価高き畠物をうへて厚利を得べし」としていることから、農村にも取引が拡大し、農民自身も金銭感覚が求められるようになっていた。

之曲事にも可被仰付事」という有名な「分地制限令」（徳川禁令考）を発令し、その後百姓の分地はこの法令が目安となっていた。一茶と仙六は文化五年（一八〇八）十一月に財産分割の取り極めをし、直ちに実行され、翌年には年貢を別々に納入している。それによれば、弥兵衛（弟）の持高には五石六斗四升九合九勺とあり、一茶の持高は三石三斗九升六合五勺となっている。二人の持高を合計すると九石となるので、ほぼ分地ができる状態であった。文化十年には一茶家は四石一斗一升になっているから、一茶は耕さずして一石増収したことになる。恐らく一茶は江戸から帰郷後に田畑を買って増やしたのであろう。文政六年に、一茶家は四石と変わらず、弥兵衛は六石三斗四升に増やしている。晩年一茶兄弟が親しくなるのもこうした財産上の推移もあったのであろう。弟弥兵衛は精勤して質入地を買い取っていたのであろう。

一方、この時一茶は第二条件として、父が死亡した享和元年より文化五年までの七カ年間の一茶の取り分の小作料と家賃とを元利とも合計三十両支払えと要求したが、弟仙六は承知しなかった。これを現在まで一茶の「あこぎ」な要求、無理難題、冷たいしうちを受けていた継母への報復、などと考えられてきたが、法制史から見れば卑劣な行為ではなかった。というのも、元禄十一年（一六九八）十二月に幕府は「小作地・奉公人・覚」という法令を出している。

一、小作田地出入大概及貳拾年ニは、可為永小作、并質地田畑預金売掛金等廿年ニ過候バ、不及裁許、併証文可依品に事。

一、奉公人之年季、前々より拾年を限候処、向後ハ年季之限り無之、譜代召仕候とも相対次第たるへく候間、其旨可存候。（徳川禁令考）

この条文によれば二十年を経過すれば裁許に及ばずとしている。一茶はこれによって請求したのであろうが、二十年を経過していなかったため、さすがに一茶はこの請求を突き付けて江戸に戻ったのである。

文化十年に帰郷した一茶は、再度この要求を突き付けたが弟仙六は応じようとはしなかった。一茶は上訴の考えを持ち出し事は解決した。父の逝去の際の遺言から十二年しか経っていなかったが、一茶はこれを訴訟に持ち込もうとしたのであった。百姓・奉公人の目安提出については、最初のものは寛永十年（一六三三）に「定」と「公事裁許定」二十一条が出され、詳細な手続きが示されている。

一、御代官所、給人方町人、百姓目安之事其所之奉行人、代官并給人等之捌を請へし、
若其捌非分有之は、於江戸可申付之奉行人、代官等へ不理して訴申族は、縦令雖
有理、裁許すへからさる事。(徳川禁令考)

一茶は、永い江戸住まいでこうした訴訟には手慣れていたであろうし、公事宿住まいなど
もしたのであろう。そんなことから一茶自身江戸にも出易かったが、仙六には江戸での
訴訟は耕作の上からも費用の上からも負担が大きすぎた。結局明専寺の住職の斡旋に従い、
請求額の半分近い十一両二分を支払って、十二年に及ぶ骨肉の争いは終わったのである。
名実共に本百姓になった一茶は、小作人に田畑の耕作をゆだね、信濃の有力地主や大商人、
温泉宿の主人など、貨幣経済の浸透による経済的に富裕な門人宅を、門人から送られた頭
巾を被り、絹の羽織をはおって駕籠に乗り巡回指導に明け暮れるのである。門人の家々に
逗留し、指導料や揮毫料を受け取り田畑を買い増やした。こうした生活を送れるのも、江
戸帰りの宗匠として全国的に名が知られ、北信濃に確固たる一茶社中を形成できたからで
あり、何よりも貨幣経済がもたらした封建制の秩序崩壊による現金収入の効力のおかげと、
父の配慮や弟の親切心から人別帳に明専寺旦那として記帳してくれていたためであった³²。

文化十年（一八一三）という年は、一茶が北信濃に「生きる地」を確保した記念すべき
特別な年なのである。故に帰郷第一句として「是がまあ死所かよ雪五尺」と詠んだ句を「是
がまあつひの栖か雪五尺」と改め定稿とし、この年の句文集の稿本題を『志多良』と命名
したのであった。一茶にとって決して「ていたらく」の年などであろうはずのない実り大
きな年なのであった。

文化十三年に刊行した『あとまつり』は、門人魚淵が芭蕉句碑を建立し、桃青霊神（芭
蕉の神霊）を祀り、社殿の勧進造営を果たした時の直会にちなんで命名した発句集である。
一茶が命名校閲し、出版から配本まで神に願懸けて尽力した発句集で、内題は「迹祭」と
なっている。柏原定住後の発句集の名は、神仏への信仰心や農事に関する命名が多くなっ
ている。一茶が生前最後に校閲命名したのも門人素鏡が「種おろし」（苗代に稲種を蒔く神
事）の祝いをしたのに因んで『たねおろし』と命名されている。一茶が農事に励んだわけ
ではなかったが、この頃の百姓に求められていたことは、農業も経営が必要となっていた

³² このことについては、矢羽勝幸が『一茶全集』別巻に「柏原村宗門帳」を発見し、掲載している
（七十五頁）。寛政五年（一七九三）より明治七年（一八七四）の戸籍まで続いている。

ことであつた。年貢の村請制と戸籍の寺請制によって百姓は村を離れなくなっていた。一茶も当然課役を果たせねばならない状況にあつたことは確かなのである。

惣ジテ近来在方ヨリ江戸出候フモノ多ク、在方人部別相減リ、農業行届キ難ク、困窮ノ国々少ナカラズ。江戸表江出候者モ、次第ニ人別相増シ、オノズカラ諸国商売薄ク相成リ、是レ又難儀ニ及ビ候故、銘々在所江罷リ候様申シ触レタルコトニテ、願出候モノハ、路銀ナド御手当テ下サレ、夫々片付ケ相成ル事ニ候間、心得タガヒナク願申ス可候。(『御触書天保集成』六五六五)

この頃の出郷者は江戸に働きに来て、奉公などの堅苦しい仕事はせず、江戸の自由な風俗に迷って故郷のことも全く忘却して、一日を遊んで過ごす者があまた出現していた。無宿無頼となって江戸の打ちこわしに加わったりしていた。幕府は強力に帰郷を促し、路銀や旅費を供し、夫食・農具代などを支給して帰そうとした。一茶はこれの支給を受け、信州に戻るや、百姓として庄屋や名主に届け出て、弟と折半をして定住したのであつた。

第五章 一茶俳句の方言使用

第一節 方言句と俗語

小林一茶は俗語や方言を俳諧に多用した。そうした俗語や方言だけを用いて「方言連句」も試みている。一茶は俗語と方言の使用を得意とし、そのために各地の方言を採取記録している。半紙を横に二つ折りにし、帳面綴りにした四十七丁の横帳を上下二段に画し、諸国の方言や古語及び俗語を記した雑記帳が残されている。一茶自筆の「いろは別」語彙集で題は付けてない。現在これを仮に『方言雑集』と名付けている。ここに記された方言は北信濃のものが多いが、他に江戸・上総・九州・四国など、一茶の足跡が及んでいる地方の方言がかなりの数で見出される。なかには越谷吾山¹の著した『物類称呼』等から孫引きした語もある。生涯を通して書き継いだものだけに、判明する出典は百点にものぼる。採集の方法は、吾山の『物類称呼』の編み方とほぼ同く、説明であり、一茶という人物の知識欲の旺盛さと博覧強記ぶりがよく窺える。

書き始めは一茶五十七歳の文政二年（一八一九）ごろからである。吾山の『諸国方言物類称呼』全五巻は、安永四年（一七七五）に刊行され、寛政十二年（一八〇〇）に改題本『和歌連俳 諸国方言』が出されている。安永七年（一七七八）に富士谷成章が『あゆひ抄』を刊行した翌年、安永八年に吾山は『雅言俗語翫檜』を刊行した。本居宣長が寛政十年（一七九八）に『古事記伝』を完成させ発刊すると、翌々年の寛政十二年には『和歌連俳 諸国方言』を吾山は出版している。杉本つとむ氏によれば、吾山が方言採集とその分類に力を注ぎ書物を編纂できた背景に、明和・安永期の学芸復興の気運と江戸初期からの

¹ 享保二年（一七一七）～天明七年（一七八七）。武州越ヶ谷（現在の埼玉県越谷市）出身の俳諧師。「安永六年丁酉六月十一日法橋位御許状頂戴同六月廿四日於両国柳橋河内屋半治郎宅賀興行」と『和漢通記』にあるので法橋の位についたことは確かである。越谷の富農会田文之助。家は代々東名主を務め信州会田の出自。農に精進せず二十代で風狂の道に志す。滝沢馬琴は吾山の門人。『耽奇漫録』（文政七・八年一八二四）に「法橋吾山は越谷氏号師竹庵、武蔵越谷の人也俳諧を柳居に学び、後に沽山に随ふて判者になれり、かくて沽山が没後に至て独立の判者たり、その著す所、物類称呼、俳諧翫檜、朱紫、俳諧本草等あり、この両贊は天明三年の春正月、冬映吾山、冬七十余歳の試筆也。こも又させるものならねど伯兄羅文の遺愛なるを、けふの佳節の景物までに出しつ、著作堂記」と記している。また馬琴は他にも『罔両談』に吾山の生まれから埋葬までのことを記している。吾山は諸国を生涯をかけて旅したが、芭蕉や一茶と異なり、富裕の者として妻を連れての遊山の旅であった。だがその旅を通して採集した方言を集めた『物類称呼』は江戸時代最大最高の方言辞典で後の柳田国男の民俗学にも多大な影響を残している。

古典復活の動向、さらには出版文化の向上という恩恵を受けられたからである²。この間の言語に関わる出版物の一部を挙げておく。

宝暦十二年（一七六二）荻生徂徠『南留別志』
宝暦十三年（一七六三）平賀源内『物類品隲』
明和二年（一七六五）揖取魚彦『古言梯』
明和三年（一七六六）荻生徂徠『訓訳示蒙』
明和四年（一七六七）富士谷成章『かざし抄』
明和七年（一七七〇）梅井道敏「てには綱引綱」
明和八年（一七七一）本居宣長『てにをは紐鏡』
安永三年（一七七四）伴蒿蹊『国文世々の跡』
杉田玄白『解体新書』
安永四年（一七七五）越谷吾山『物類称呼』
安永五年（一七七六）本居宣長『字音仮字用格』
安永六年（一七七七）谷川士清『倭訓栞』
安永七年（一七七八）富士谷成章『あゆひ抄』
安永八年（一七七九）本居宣長『詞の玉緒』
天明二年（一七八二）本居宣長『活用言の冊子』

上記のような日本語研究が盛んになった時代を背景にして、吾山も俳諧師として諸国遍歴や諸国の門弟を通して方言を採集し、研究に意を向けたのであろう。また吾山の蔵書には、『節用集』（慶長十五年・一六一〇）、『和名類聚抄』（元和三年・一六一七）、『下学集』（元和三年・一六一七）、『和字正濫鈔』（元禄八年・一六九五）、『日本釈名』（元禄十二年・一六九九）、『和漢三才図会』（正徳五年・一七一五）、『和漢音釈書言字考節用集』（享保二年・一七一七）、『東雅』（享保四年・一七一九）などの写本ではなく、いずれも板木が残っていることから、吾山の旺盛な知識欲と、これら日・中の文献約百二十冊を引用して方言の考証に努めたことを、杉本氏は報告している。吾山は俳諧師として高名であり、これを慕って平田篤胤（一七七六～一八四三）も越谷に寓居していた。

一茶も知識欲が極めて旺盛で、読んだ本の抜粋を作り「俳諧寺抄録」に書き残している。

² 杉本つとむ『方言に憑かれた男越谷吾山』（さいたま出版会、一九八九年）、二十五～二十八頁。

『八雲御抄』『万葉集』『古事記』をはじめとして百種に余る古典の抄録がある。そうした古典抄録と同時進行で、一茶は『和歌八重垣書込』や『方言雑集』の語彙採集に努めている。イロハ別に語彙を記した『方言雑集』は、信濃方言、諸国方言、古語などを広く集め、略注をつけている。一茶自身の採録が多いが、『物類称呼』と同然の方法で模倣も見られる。まず『物類称呼』の例である。次の引用は、その『物類称呼』の記録採集方法と記録された語彙の一例である。

『物類称呼』

- 沙参 じゃじん 和名 つりかねにんじん、山城山科にて、びしゃびしゃと云 越中にて、しやぐしやといふ 但馬にて、ききやうもどきとよぶ 筑紫にて、してんばと云 南部にて、やまだいこんと云 上総にて、へびぢやわんと云
- おこせ つかはせ、おこせ（大坂）、くせ（京）、よこせ（江戸）、のべろ（羽州秋田）、いせこ（尾張）
- 蝸牛 でんでんむし（五畿内）、でのむし（播州辺九州四国）、まいまい（周防）、かさばらちまいまい（駿河沼津辺）、でんぼうらく（相模）、まいまいつぶり（江戸）、やまだにし（隅田川辺）、まいぼろ（常陸）、ををぼろ（下野）、へびのてまくら（奥仙台）

このように『物類称呼』には地方別に集録する方法が多く用いられており、一茶も吾山の語彙収集法を参照したものと思われる。次は一茶が採集した方言集からの一例である。

『方言雑集』

- 沙参 山城ビシヤビシヤ、但馬キキヤウモドキ、筑紫シテンバ、南部山ダイコン
- 送越 京クセ、江戸ヨコセ、羽州ノベロ、信イコセ、返サヌヲ寝ルト云ハヲコス
ウラ也、起サヌト云也
- 蝸牛 デヘロ 此雨のフルニドッチヘデヘロ哉

一茶の『方言雑集』は生活用語が多くを占めている。筆者が調べたところ、一茶が採録した語彙数は凡そ千八百五十語にのぼり、その中の三分の一の語句に用例を付している。

用例は古典籍から引用した格言や万葉集、古今集などの歌謡、それに俳諧例句を添えている。俳諧の例句は、千八百五十語の中二百十四語に俳句が添えてあり、例句に挙げた俳諧師は百七人で、宗鑑、宗因、貞徳、重頼などである。そのなかで例句が最も多いのは芭蕉をはじめとして蕉門の俳人である。芭蕉は三十六句、其角は二十三句、去来は十句、支考は五句、洒堂が五句それぞれ例句に挙げられている。その他、蕉門で二句ずつ採録されている俳人は許六、野坡、正秀、惟然、越人、北枝、路通などがいる。一茶の属した葛飾派では、一茶の師匠の素丸が三句ばかり採取されている。特異な俳人としては生没年未詳であるが貞亨（一六八四）～宝永（一七一一）頃にかけて芭蕉庵近くに住んだといわれる岱水の句が三句、一茶の友人と思われる生没年未詳の山店という人物の句が六句ある。

また、越谷吾山が格言も記したように、一茶もあまた格言や至言の類を記している。「朱ニマグレバ赤クナル、野客叢書。朱ニ近ケレバ朱ク黒ニ近ケレバ黒ク」³などのように出典なども明記している。あるいは私信のなかにある語句にも興味を示して書き記している。

○いたむき ヒゴ イタクナキ也。

天下るひなの住居と思ふなよ

どつことも同じうき世ならずや

と千宗易よりいひこしたる返事に、

天下る夷にはなをもいたむなき

どつことも同じうき世なれども⁴

一茶はこうして採録した語句を用いて「一茶調」といわれる俗語や方言を使用した口語調の発句を量産していった。

鳴な雁どつことも同じうき世ぞや
おとなしく雁よ寝よ寝よどこも旅
下る雁どこの世並がよかんべい
どちらの田もしてん二天ぞなくな雁

七番日記（文化十年）
（文政元年）
（同）
（同）

³ 『一茶全集』七、五五一頁。

⁴ 同上、四七四頁。

夏目成美は、このように俗語を多く用いる一茶の俳句に対して、「日本紀をひねくり廻す癖ありて」（文化元年歌仙「今打し」評）と評している。成美が一茶を評したことは、一茶の蔵書に『日本書紀』に関する書物が多かったためであろう。

ところで、先に一茶のこうした方言や俗語への興味は吾山の影響があったと述べたが、もう一つ師の芭蕉の影響も見逃してならない。『方言雑集』には芭蕉の句が三十六句もあり、特定の人物としては最も多く引かれている。芭蕉が晩年に説いた「高悟帰俗」⁵の精神や「俗談平話」⁶の使用や表現法を学び、それを継承しようとしたのである。『方言雑集』に引いた芭蕉句の一例を次に示す。

○古衣 笹竹のどてらを藍に染なして	芭蕉
○松葉 松葉を焚て手拭あぶる寒哉	芭蕉
○いつつも	
薪過町ノ子共ノケイコ能	芭蕉
イツツモ春ニシタキ世ノ中	去来
○のっぺい 葛カケ アンカケ	
云た程迹に金なき月の暮	芭蕉
貰ふを待て鴨ののっぺい	岱水
○けもない	
から身で市の中をおしあふ	芭蕉
此辺り弥生は花のけもなくて	惟然
○しつはり	
漸に今はすみよるかハセ銀	
かげんの薬シツハリと呑	芭蕉

⁵ 俳諧用語。古人が到達した芸術の高みを通俗的な俳諧の表現のなかに再生するという芭蕉の俳論。『三冊子』に「高く心を悟りて俗に帰るべしとの教也。つねに風雅の誠を責め、悟りて、今なすところの俳諧にかへるべしと云る也」「俳諧の益は俗語を正す也。つねにものをおろそかにすべからず」とあり、『去来抄』には「事ハ鄙俗の上に及ぶとも懐しくいひとるべし」とある。

⁶ 俳諧用語。日常遣われる卑近な俗語や日常の話し言葉の意で、これを俳諧の表現に取り入れるべきことを説いたもの。俗語や日常語を用いることによって、俳諧らしい表現効果をあげ、さらに俳諧としての文芸性を高めようとした。『三冊子』には「俳諧の益は俗語を正す也」「俗談平話をたださむがためなり」とあり「正す」とは詩語化することであり、俗語や日常語を詩的精神で詩語に変えることを言っており、いたずらに俗談平話に傾くと平明な句となり、通俗的俳風におちいることも戒めている。

芭蕉の句については発句だけではなく「付け合い」も見られる。一茶は俗語や方言を用いての「方言連句」を巻いているところから芭蕉の「付け合い」に学ぶ目的で俗語を語彙のひとつに取り上げたものと思われる。一茶自身の例句は極めて俗語や方言が多い。

○ヲゾイ 浮舟君身を投んとする所少ヲゾカリケン事ヲ思ヒヨリケン

生レ立カラヲゾイゾヨ京雀 一茶

○そでない ソレカ、ソレデナイナド云。

象潟やそでない松も秋の暮 一茶

○目かり 目配也。クハ反カ也。

鶯の一ツ鳴にも目かり哉 一茶

○いぶる クスボルニ同。況言ニ不及。

婆婆どのや櫓のいぶるもぶつくさと 一茶

一茶が詠んだ俳句は二万句にのぼるが、俗語や方言を用いた発句は凡そその三分の一ほどもある。次に、一茶が自分の俳句に俗語や方言を用いて形成していった「一茶調」の特徴と意義について考えてみよう。

第二節 「一茶調」の特徴

一茶の編んだ『方言雑集』の例句には、芭蕉の句が最も多く、榎本其角のものは二十三句ある。其角は芭蕉の枯淡を追わず新奇壮麗な表現を好んだ。一茶が『方言雑集』に採録した語句の例句には其角の奇抜な着想の句を選んでいる。

○いつとろ 一等也。

一とろに裕と成りぬ黒木壳 其角

○御参 ベツにハオヨル

初霜に何とおよぞ舟の中 其角

○けんまく 有磯海

其角は、「洒落」や「闊達」を旨として「浮世風」の俳諧をよくし、その作風は「江戸風」と呼ばれ、其角没後も其角を祖とし、都会的で洗練された軽妙な人事句を中心にして受け継がれた。一茶は、夏目成美や建部巢兆など俳諧を趣味とする人々と交わる一方で、芭蕉や其角という風流型発句形式を学び、業俳の得意とした浮世的平句調を織り込む自己の俳風を確立していった。俳諧を生業とする一茶は、このような方法で断片的量産句や無季題句、世態人情を詠み込む雑俳的性格の強い俳句を作り続けた。

一茶は寛政二年（一七九〇）三月十三日に直接の師であった二六庵竹阿が客死した後を引き継ぎ「二六庵」を継承した。同時に葛飾地方を根拠とする「葛飾派」の素丸に入門した。葛飾派は言語遊戯的な滑稽俳諧を旨としていた。この時期の一茶の俳諧は次のような俳句で極めて卑俗な趣が多分に含まれている。

御仏や生るるまねに銭が降る 一茶

菜の花や霞の裾に少しづつ 一茶

聖なるものを冒瀆したような詠法と、「霞の裾」という『犬筑波』以来の卑俗な着想と俗語の持つ滑稽味は、素丸からの影響を受けた結果であろうと推量できる。素丸が編んだ『夏孟子論』には「俳諧ハナ、理屈を嫌ひ道理に遊ぶ物也。我ハナ、夏のはじめ草子と言事也。門前の糊売婆、石なごとの童部も合点すべし。作意は詩歌などはぐらかして、其詞を奴碑のごとくに遣ひて、しかも心は詩歌にたけおとらず」⁷と述べた上で、俳諧表現には「奴婢」の言葉を使えと教えている。こうした教えは一茶の方言採録に影響を及ぼしたであろう。

遠藤誠治氏は、一茶が旺盛な意欲で他人の句を模倣し、独自に消化しながら俗語や方言を使用して膨大な量の俳句を量産したことについて、「一茶は芭蕉や蕪村という代表的な俳人から摂取包含した伝統的な情調を持つ句と、そうした伝統俳諧からは異端扱いされた一茶調と呼ばれる卑俗滑稽な雰囲気を持つ句の二面性がある」と指摘した上で、「一茶の俳風は、この伝統的な情調を持つ句と、卑俗滑稽な情調の句とが或る時は対立し、或る時は融合し合って独特の俳風を樹立した」⁸として類似句を例に挙げている。

⁷ 『一茶全集』別巻、二八二頁。

⁸ 遠藤誠治「一茶の俳風―二筋の道について」(『連歌俳諧研究』二十四、一九六二年)、二頁。

月影や赤坂かけて夕すずみ	一茶
あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ	芭蕉
夏の月御油より出でて赤坂や	芭蕉
笠寺に予はかさとりてすゞみ哉	一茶
笠寺やもらぬ窟も春の雨	芭蕉
八九間這て一木の花ざかり	一茶
八九間空で雨降る柳かな	芭蕉
此年の寄る迄仏五左衛門	一茶
世の人の見付けぬ花や軒の栗	芭蕉
日盛りや葭雀に川の音もなき	一茶
草霞み水に声なき日ぐれ哉	蕪村
君が扇の風朝顔にとゞく哉	一茶
目に嬉し恋君の扇真白なる	蕪村
はいかいの地獄のそこか閑古鳥	一茶
あま酒の地獄もちかし箱根山	蕪村

蕪村の句に類似する句が多くあることから、一茶の句には卑俗に詠んでも甘い情調があることや、小動物への思い、弱者への思いやり、貧窮のなかでの立ち上がりなどは、一茶が蕪村句に学んだことを窺わせる。なお、「仏五左衛門」の句は、芭蕉が『奥の細道』の日光で出会った人物である。

遠藤誠治氏の指摘に従い、一茶の包摂包含と思われる句を抽出してみる。

剃捨て花見の真似やひのき笠 (寛政四年、一七九二) 一茶

剃捨て黒髪山に衣更		曾良
よし野にて桜見せふぞ檜の木笠		芭蕉
蚊を焼くや紙燭にうつる妹が顔	(寛政五年、一七九三)	一茶
燃え立て顔はづかしき蚊やり哉		蕪村
庵の米雪の雀に喰はれけり	(文化十年、一八一三)	一茶
ほちほちと雪にくるまる在所哉	(文化九年、一八一二)	一茶
ほつちりと眼に秋来ぬや鳴く雀		樗堂
落の葉に片足かけて鳴く蛙	(文化九年)	一茶
あぢさゐへ片足かけし子犬哉		一瓢
人来たら蛙になれよ冷し瓜	(文化十年)	一茶
人が見たら蛇になれなれくすね銭		北斎
菜の花のとつぱつれ也ふじの山	(文化九年)	一茶
夕不二に尻をならべてなく蛙 ⁹	(文化九年)	一茶

一茶のこうした包摂には、擬態語の多用や小動物への眼差しなど、一茶の後の句風に与えたであろう影響を見ることができる。また句文集『おらが春』や『七番日記』には、文化十一年（一八一四）、一茶五十二歳の作であるように記している。「我と来て遊べや親のない雀」の句が『成美評句稿』には、「六歳弥太郎」と記されている。これは紀貫之の娘が八歳の時に、「鶯よなどさはなくぞちやほしき小鍋やほしき母や恋しき」という歌を詠んだという逸話に基づき、「六歳弥太郎」と詞書を記し、逸話を想起させ、作者自身を伝説中の人物に仕立てあげようとする工夫を凝らしたものと考えられる。これによって句の中の親無し雀に対する同情は、即座に我が身に対する哀れみへとすり替えられる働きをしている。

また文政五年正月とある『まん六の春』には次のような一文がある。

⁹ この句には、「北斎「富嶽三十六景」「神奈川沖浪裏富士」に通じる景」という一茶の注がほどこされている。

爰の主また言ひけるハ今朝とく起出でゝ見るに水鳥の一群とほくの田面より夥しく立行けるを見しとなん（中略）さりながら歌一首よまず画一枚ものさで浅ましき業ならずやといへば「さにあらず、六十の齢を累ぬれども未だ一粒の米だに作らず、穀盗人とのゝしられて罰もあたらずふしぎに長らふるこそ恥おほきことになん」といへば主はじめてからからと笑ひけり¹⁰。

一茶のこうした自嘲的な文章や、「もたいなや昼寝して聞く田植唄」などの句にある遊民としての意識は、一茶の残した二万句にのぼる句に使用された方言や俗語と深い関わりがある。一茶は通俗性や方言を駆使して主観を露わにする俳風を確立し、上総や下総、東安房といった土地の有力者の富裕農民を社中に加えることに成功した。その目的を達成するためにあえて農事を詠み、農作物を俳材にし、方言や土地の言語を採集し、意図的に方言や俗語を使用したのである。一茶が故郷柏原に居を構え、門人を獲得し、一茶社中を構築するには、北信濃の有力地主や富豪や大商人を講中に招かざるを得ず、一茶が江戸で学んだ「江戸座」や「葛飾派」の洒落風、闊達風な俳諧は地方では通用しなかった。特に「浮世風」という浮世の世態人情を巧みに詠む方法は、江戸という都市で生活する人々の人情を江戸弁で詠んだので地方ではなじまないものであった。一茶は無論其角などの俳風は心得てはいたものの、自からの出自、北信濃の出身にひどくこだわっていた。一茶はこうした意識を表面に出すため、書簡には「信濃国一茶」「善光寺一茶」「しなのの国乞食首領一茶」などとしたためている。都会的で洗練された軽妙な人事句は田舎風な鄙ぶりにはそぐわない俳風であった。だが一茶も江戸にいる間はそうした洒落風の句を包摂包含するのに余念のない時期もあったのである。

『寛政句帖』以前の天明七年（一七八七）から寛政初年（一七八九）頃までの一茶の包摂の跡の見られる句を挙げてみる。

長き日やおなじ事して磯の浪

馬光

永き日や水に画を書く鰻搔き

一茶

むめが香やおのずと路次の開く音

祇考

¹⁰ 『一茶全集』六、一八三頁。

うら門のひとりでに明く日永哉 一茶

うぐひすや暮んとしては最一声 英知

みそさざいちつといふても日の暮るる 一茶

こうした一読は、印象の強い表現や作意を凝らした才気のある句を江戸座は特徴としていた。それ故に、一茶は盛んに蕪村・白雄・大江丸などの作品を模倣して、自らの個性を獲得するために励んでいる。生来才気溢れる一茶であったからこうした特徴を把むのにさしたる苦労もなかったであろうが、さすがに出身地以外の地方の田舎言葉には当惑したに違いない。

文化九年（一八一二）、一茶は五十歳の春を旅先の利根川北岸、布川で迎え次のように歳旦吟を詠んでいる。

春立つや先人間の五十年 （文化九年『七番日記』）

おのれやれ今や五十の花の春 （同上）

口べたの東鳥もけさの春 （同上）

こうして自己の境遇を句にしているが、「口べたの東鳥」は一茶自身のことで、一茶の自嘲句でもある。守谷の西林寺の住職鶴老と歌仙四巻を成就して『株番』と名付け、序文を次のように記している。

されば、我らがたまたま練出せる発句といふものも、みづから新しき、とほこれば、人は古しとあざける。ふたゝびよくよく見れば、人の沙汰する通りいかにも古く、ほとほとおのが心にもうんじ果、三日ばかりも口を閉れば、是又偶人のごとくへんてつもなく、よしよし汝はなんぢをせよ。我はもとの株番。

しなのゝ国乞食首領一茶¹¹

前年に発刊した『我春集』の序では次のように記している。

¹¹ 同上、四十三～四頁。

昔々清き泉のむくむくと湧き出る別荘をもちたるものありけり。たやすく人の汲みほさんことをおそれて、井筒の廻りに覆におほひを作て、倩年をへたりける程に、いっしか垣もくち、水もわろくなりて、茨・おどろおのがさまざまにしげりあひ、蛭、子子ところ得兒におどりつつ、つひに人しらぬ野中のむもれ井とぞなれりける。

此道こころざすも又さの通り、よりより魂の醜を洗ひ、つとめて心の古みを汲みほさざれば、彼腐れ俳諧となりて、果は犬さへも喰らはずなりぬべき。されどおのれが水の臭きはしらで、世をうらみ人をそしりて、ゆくゆく理屈地獄のくるしびまぬかれざらんとす。さるをなげきて、籠り山の聖人手かしこく此俳崛をいとなみ、日夜そこにこぞりて、おのおの練出せる句々の決断所とす。春の始より入来る人々、相かまへて其場のがれの正月こと葉など、必のたまふまじきもの也。

文化七年十二月 日¹²

『我春集』という題名からして自信に溢れている。新しさを求めて邁進すべく守株の愚をいましめているが、ひるがえって一年を経ずして守株の愚に徹しようとしているのである。『株番』の序で「よしよし汝はなんぢをせよ。我はもとの株番」¹³と記し、守株の愚を自認し、世に告白もした。一茶の生の底に流れる故郷の自然や風俗、父母や祖母を追慕する心に支えられての「漂泊三十六年、一万五千九百六十日」なのであった。都市になじもうとして、とうとうなじめず、田舎者を看板にした十数年であった。「我はもとの株番」、「我はもとの信濃の弥太郎」、これを基盤とした俳諧に徹しようとしたのである。『七番日記』(文化七年一月から同十五年文政元年までの句日記)文化九年五月には「いざいなん江戸は涼みもむづかしき」といういかにも一茶らしい句が書き記されている。ここに一茶の真意を見ることができる。

この年の六月一茶は江戸を発って柏原に帰った。柏原には六月十八日に到着し、その足で長沼、毛野、野尻などの門人間を巡り、八月六日まで滞在した。これは故郷柏原に一茶講中を作るための準備であり、柏原帰住の準備でもあった。文化九年十一月二十四日に一茶は雪にうもれた郷里柏原に帰着した。『七番日記』には「廿四晴。柏原ニ入ル」とあるが「是がまあつひの栖か雪五尺」と詠んだ。この必要からも『方言雑集』を作り採録に努めたのであろう。信濃の一茶中において方言句を詠んで講中の度肝を抜いたのであった。

¹² 同上、十五頁。

¹³ 同上、四十四頁。

一茶が生きた時代には旅を描いた多くの滑稽本が刊行された。宝暦十三年（一七六三）刊行の平賀源内の『風流志道軒伝』や重田貞一こと十返舎一九が享和二年（一八〇二）に著した『東海道中膝栗毛』などは駄洒落や狂歌・狂句を交えて街道の風土が明朗な滑稽感を持って描かれていた。江戸座の俳諧はこうした「文壇の田舎趣味」とも重なっていた。一茶は、俳諧師としての自負心を持ち、単なる趣味として俳諧を楽しむことはしなかった。だが事实は街道が整備され庶民の生活も向上し、旅が盛んになった。なかでも農民は幕藩領主にとって経済的基盤であったことから物見遊山の旅をすることは、耕作をおろそかにし、金品を浪費して年貢の滞納の因となるとみなされ抑制されて来たが、旅が盛んになるにつれ寺社参詣という宗教行為として建前上は扱われた。一茶も西国行脚の折には「通し給へ蚊蠅の如き僧一人」と詠んで旅僧としての身分であるとしている。

農民にとって旅は村落共同体と領主の支配下から脱却し、開放感にひたれる機会であり、異郷での見聞は社会的視野を広め、さまざまな知識や農業技術などを身につける機会ともなり、帰村して披露すれば知識や情報が共有され農民の生活文化は飛躍的に向上した。一方農村に流入する文化や情報は村々を訪れる遍歴の宗教者、寺社参詣旅行者、旅芸人、文人、画工、俳諧師、行商人などによってもたらされた。農家の子弟の教育も向上した。領主が村に課した年貢や諸役・村の費用は個々の百姓の持高に応じて割り当てられたので、読み書き計算は家業と社会生活を営む上でも必要性が高まった。商品貨幣経済の浸透による農作物の商品化がすすむと金銭の賃借、土地の質入れ、売買も盛んになり、その際の証文の取り交わし、小作契約や奉公契約も証文で交わされるようになり、文書による支配と従属の社会が形成され、読み書きは必然のものとなった。村役人層は行政能力や村の経済振興を指導する能力を要求されることは勿論のこと、村の農民達への学問・文芸の指導も行い、子ども達には読み書き算盤の手ほどきもした。現在でも各地の旧村役職宅には、寺子屋教科書の他にも、儒学書、神道書、医学書、歴史書、軍記物語、地誌、漢詩、和歌、俳諧関係書などが数多く所蔵されている。

杉仁氏は『近世の地域と在村文化』のなかで、「在村の文化」現象は無名無価値のものとして顧みられず、これまでの近世文化の捉え方である元禄文化、化政文化、武家文化、町人文化、都市文化、地方文化という枠組みに入れられず無視されたことについて、「近年、各自治体があつめだした文化史料は、全国各地の農村、山村、漁村におびただしい人数でひろがっている多彩な文化活動——俳諧・和歌・漢詩文・絵画・茶道・花道・和算・算額・剣術・日記・地誌・災害記録・一揆記録・寺子屋・私塾・筆子塚・墓誌など——を示して

いる。「在村文化」というとらえかたをもってはじめて、全体的に、体系的に、歴史の対象とすることができる」¹⁴と述べ、近年の地方自治体で編纂する「市町村史」の意義の大きさを評価しながらもそれまで無視され続けて来た「農民文化」の重要性の再認識を力説している。

杉氏はまた、宝暦から明和期の在村文化の開花は、蚕種商の蚕書の出版と俳諧普及の関係と密接に関わり合うと述べている。特に、養蚕を副業から専業にしていた信州・奥州・上州・但馬・近江などの農村では多くの養蚕に関わる書物が刊行された。『養蚕秘書』（宝暦七年・一七五七）、『養蚕茶話記』（明和三年・一七六六）、『養蚕茶話後篇』（天明三年・一七八三）などの改訂版や続編が出され、これらは農民の著となるものであることを記している。さらに養蚕技術書を発刊し、蚕種商人として敏腕を発揮しながら蚕書を出版し、執筆も俳号雅号で記した例を挙げている。たとえば信州小県郡上塩尻村の塚田与右衛門は宝暦七年に『養蚕秘書』を著し、自序に「塚田与右衛門」と記し「語竹」と俳号を記している。塚田与右衛門は「語竹」または「語竹庵」を名乗り、上塩尻村の俳諧結社である巖端社中が刊行した『巖端集』（寛政十二年・一八〇〇）には「麦々舎社雪」と記していることから上塩尻村の蚕業仲間がそのまま俳諧仲間を形成していたことを記している。そのなかには女性や子どもも含まれているから家族全員で俳諧を楽しみ、その数七十九名三十九カ村にのぼると記している。さらに上州（七十一名）二十三カ村、武州（七十一名）十三カ村、相州（三十一名）十六カ村、野州（十二名）五カ村、ほか少数ずつ十九カ国に及んでおり総勢三百名にのぼる大社中であつたとある。杉氏は上塩尻村を中心とする地域の蚕種仲間が、頻繁に他国と往来するのは、蚕種の仕入と行商販売であり特に武蔵・相模・上野・下野・甲斐・信濃六カ国が安永期で、他に美濃・尾張に及ぶといわれるが、それら行商先での定宿がわかっている¹⁵。「定宿の分布と『巖端集』参加者の分布が完全に重なっている。つまり蚕種商の行商販売先の村々の蚕種農俳人が多数参加していたのである」¹⁶と記し、その他の地でも同様に在村における蚕種と俳諧との結びつきがあつて俳書も多く刊行されたことを報告している。

こうした村落廻商と行脚俳諧師によって農村に俳諧が普及していった。上州高崎、富岡と武州八王子で養蚕が盛んで、明治になると官営工場が作られた。

¹⁴ 杉仁『近世の地域と在村文化』（吉川弘文館、二〇〇一年）、十四頁。

¹⁵ これらの事情に関しては、同上、Ⅱ章一を参照。

¹⁶ 同上、一〇二頁。

安永四年（一七七五）閏十二月十一日付、露天・乙窓宛ての蕪村書簡には次のように記されている。

今の世、行脚の俳諧者流ほど下心のいやなるものは無之候。其旨いかにと問ふに行先ざきにて金銭を貪り取りたがり候。其術には他なく候。只々おのれが長きを説他人の短をかたりて人に信伏せられんことを乞願ひ、どうぞ金がほしいほしいと柄勺をふらぬ計に候¹⁷。

蕪村がこのように記すように「在村文化」が確立しようとしていた時期に諸国を行脚して自己の社中を構築するには大変な努力が要求されたことであろう。小林一茶も馬橋の油商小川斗圀や流山の味醂・味噌の醸造元で、近郷に名の知られた豪商秋元双樹（現在その屋敷跡が一茶双樹記念館となっている）に庇護されながら、恐らく彼らの家職の商品を売り歩く行商のようなことを行いつつ、俳諧指導の行脚を続けたのであろう。「わが魂は上総の町をうろつくか」と詠んだように、俳を鬻ぐ行商人のような生活をしていたに違いない。

俳諧師の「師系」を表示する『俳諧鱧』全三十篇により、文化十三年（一八一六）の式亭三馬編『俳諧歌鱧』には、殊更江戸座宗匠が好んで詠んだと思われる素材が記されている。

- いせ、源氏、つれづれ草、古事、また俗言、やひなる事もよし。
- 京、地名、景色、山類、水辺、旅体。
- 天狗、狐、狼、よし原、人名、尺教。
- いせ物語、源氏、雪上事、軍、雪上事。

ここには俳諧師として必読の伊勢物語や源氏物語、それに類属する故事や宮廷の諸事がある。こうした詠題はこれまでも当然のことではあるが、地名や山景、水辺の景物、旅、などは新規の詠題である。江戸時代に入って俄かに発達した旅の風景、名所旧跡、さらには田舎の地名や田舎の景色、俗言や俗説、俚言や方言など野鄙な地方的趣味が明確に打ち出されている。天明期の都会的な俳材であった「買色」「世話事」「恋の句」という洗練された詠題から、浮世事を離れた地方的な俳材が主になりつつあったことがわかる。それま

¹⁷ 古典俳文学大系『蕪村集』（集英社、一九七二年）、四四三頁。

での浪漫的貴族趣味的俳材から、街道の整備に伴う旅の増大という現象に伴って、写實的、現實的、地方的な俳材の探求へと移り変わってゆく過程を見ることができる。一茶の『方言雑集』での例句の引用者は百七人になるが、多くは無名の俳人で一句だけの用例になっている。

○入り	馬除や畠の入りなる桃柳	北鯤
○はち	鉢々と留主の間巡る田植哉	示蜂
○奪	付さしを中でばはるる桃の色	黄山
○早	ハヤ也。モウに同。大和はあ。 蜚さあとらまへたはあ逃た	湯然
○籠	カタマカ タマル ナマケル。 がやつきて水田の星に蛙哉	捨石
○居	越後、庄内、北国、加賀。 這出ておち葉にねまる蛙哉	迹松
○ぐるり	只おかぬ麦のぐるりや紅の花	山店

上記に引用したように方言を用いた用例を添えているが、俳名は凡そ無名の者である。その他、裾道、吟水子、山店、半残、柴雫、などの無名俳人の句を描きながら「田舎の景物」などを詠んだ句を用例としている。なかには「山石」「紫紅」「二竹」「碧川」「岩翁」「江水」「一鷺」「其雫」「雲鴻」「井水」というような、俳号そのものが田舎人を思わせる者の句を引例にしている。恐らく農民の俳人と思われる。一茶の方言利用は世の推移やこうした俳諧機運や農村事情に乗じて一茶の俳諧講中を確立するための手段であり、社中を地方に確立し門人を得、同時に大衆や農民までも講中に組み入れようとする唯一の武器であったと推測することができる。一茶が用いた方言俳句は天保期になると、大いに大衆化し、「床屋俳諧」といわれるような誰にでも通じる、誰にでも俳諧に親しめる大衆性を備え、農民から庶民の生活のなかに深く浸透してゆくこととなるのである。尚一茶が多く用いた擬音語と擬態語については川柳からの影響として解する研究者も多いが、むしろ一茶が生計を立てるためにやむなく行っていたであろう「笠付け」や「前句付け」興業の業俳としての残滓なのであろう。そのような視点で考えると、近代俳句を作り出した功績は、明治期の正岡子規とされるが、そのような下地を開いたのは一茶であったといえるのである。

第三節 一茶の方言使用句の解釈について

小林一茶の二万句にのぼる俳句をざっと一覧しただけで、その方言使用の多さに驚かされる。ちなみに方言として顕著な語彙が使用されている句を二十句ばかり列举してみる。

- | | |
|-------------------|--------------|
| ①あたふたに蝶の出る日や金の番 | (文化元年、一八〇四) |
| ②木がらしや地びたに暮るる辻諷ひ | (文化元年) |
| ③榎木やかぢけながらの帰り花 | (文化三年、一八〇六) |
| ④わやくやと霰を侘る雀哉 | (文化七年、一八一〇) |
| ⑤留守札のへげなんとして散る木の葉 | (文化十年、一八一三) |
| ⑥田に畠にてんてん舞の小てふ哉 | (文化十一年、一八一四) |
| ⑦はつ雪をおつつくねても仏哉 | (文化十二年、一八一五) |
| ⑧二三遍人をきよくつて行蜚 | (文政二年、一八一九) |
| ⑨我々はととかずとても山家哉 | (文政二年) |
| ⑩松茸や犬のだくなくも嗅ぎ歩く | (文政四年、一八二一) |
| ⑪江戸川やおつけい晴れて浮寝鳥 | (文政五年、一八二二) |
| ⑫へまむしよ入道はした紙ぶすま | (文政五年) |
| ⑬禪やかまけ仲間に鳩も鳴く | (文政五年) |
| ⑭けちむらやをろぬいて行寒念仏 | (文政五年) |
| ⑮かたかたは氷柱をたのむ屑家哉 | (文政五年) |
| ⑯来る雪おぞけふるつ戸をベル | (文政七年、一八二四) |
| ⑰のらくらもあればあるぞよ年の暮 | (文政七年) |
| ⑱此月に何をいちむし鳴千鳥 | (希杖本) |
| ⑲月花のぬくなき門の寒さ哉 | (終焉記) |
| ⑳角大師へげきりもせぬ寒さ哉 | (自筆本) |

一茶の句に用いられている擬音語や擬態語の類を挙げれば際限がない。ここに列举した句は方言の意味として使用された句である。

○てんてん舞 テンテコマイ、テンニヤマル、手ニ余ル也、身分不相応ニヨキマネ

スルヲイフ、テンコツナイ、テコズル。

○禪 長サキに云、ヘコ。

○へまむし ヘマムショ入道、タカツクバ、入道のもつ小刀やほそからん仏師をしてやいく世へマムシ。

○佗 ワビレ、ウラビレ也、ウラ反ビ、ヒレ反ベ也。

○おそげ立 オソゲフルフ、オゾマレル、ヲゾマル人、惶レラル也。

例句に挙げた語句を『方言雑集』を参照するとこのように記されている。①は春に生まれ出た小蝶が田や畠を忙しそうに舞っている、という意であろう。④「わやくやと霰を侘る雀哉」の「わやくや」の語意は、東條操編『全国方言辞典』¹⁸によって確かめるしかない。それによって考えることとする。

○わやく ①じょうだん、いたずら「子供がワヤクをして困る」②怪しげなごまかし。

○わやくもん ①怠け者、②いたずら者。

○わやくる ①邪魔をする。まぜかえす。三重県度会郡・わやっかす。②嘲弄する、愚弄する。「あの人はワヤクルからいけない」

○わやわや ①うごめくさま「毛虫がワヤワヤ動く」②ものの混乱の様。

『全国方言辞典』には上記のような記述がある。これによって④「わやくやと霰を侘る雀哉」を解釈すれば、「雀どもがあれこれと混かえしながらうらびれた様子で霰に打たれていることよ」という意味になるであろう。あるいは「怠け者の雀達が」と考えるか、あるいは「わやわやがやがや鳴きながら」と擬態語として解すべきかのいずれかの解釈になるのであろう。一茶の俳句は一見誰にでもわかりやすい俳句というイメージがあるが、こうした方言や俗語、擬態、擬音語を用いて詠んだ句は難解な句となる場合が多い。

目出度さもちう位也おらが春

(文政二年、一八一九)

¹⁸ 東條操編『全国方言辞典』(東京堂出版、一九五一年)、八六〇頁。

上記の句は一茶五十七歳の折、数え年二歳の長女さとを失った悲しみを契機として成立した『おらが春』の冒頭の句である。『おらが春』は文政二年（一八一九）一年間の発句、連句、俳諧歌、俳文を収めた日記体の句文集である。

昔、たんこの国普甲寺といふ所に深く浄土をねがふ上人ありけり。としの始めは世間祝ひごととしてさざめけば、我もせんとして、大卅日の夜、ひとりつかふ小法師に手紙したため渡して、翌の暁にしかぢかせよと、きといひをしへて、本堂へとまりにやりぬ。小法師は元日の旦、いまだ隅ミ隅ミは小闇きに、初鳥の声とおなじく、がばと起て、教へのごとく表門を丁々と敲けば、内より「いづこより」と問ふ時、「西方弥陀仏より年始の使僧に候」、と、答ふるよりはやく、上人裸足にておどり出で、門の扉を左右へさつと開きて、小法師を上々坐に称じて、きのふの手紙をとりて、うやうやしくいただきて読ていはく、「其世界は衆苦充滿に候間、はやく吾国に来たるべし、聖衆出むかひしてまち入候」と、よみ終はりて、おゝおゝと泣れけるとかや。此上人、みづから工み椿へたる悲しみに、みづからなげきつつ、初春の浄衣を絞りて、したる涙を見て祝ふとは、物に狂ふさまながら、俗人に対して無常を演ルを礼とすると聞かずに、仏門においては、いはひの骨張なるべけれ。それとはいささか替りて、おのれらは俗塵に埋れて世渡る境界ながら、鶴亀にたぐへての祝尽しも、厄払ひの口上めきてそらぞらしく思ふからに、から風の吹けばとぶ屑家はくづ屋のあるべきやうに、門松立てず、煤はかず、雪の山路の曲り形りに、ことしの春もあなた任せになんむかへける。

目出度さもちう位もおらが春 一茶

こぞの五月生れたる娘に一人前の雑煮膳を居ゑて。

這へ笑へ二ツになるぞけさからは 一茶

文政二年正月一日¹⁹

いささか長い引用になってしまったが、「目出度さもちう位もおらが春」の解釈をめぐって諸説があり、本文に書かれた一茶の境遇境地と連動するような立場での解釈があるためである。この句の「ちう位」の語をめぐっては、昭和四十三年に論争が起こって未だに決着を見てはいない。信濃地方、現在は長野地方では「ちう位」は「チュウツクレエ」(chuk-kre)

¹⁹ 『一茶全集』六、一三五頁。

と発音する語で、語意は「いいかげん」となる。一茶の句は、「今年も昨年と同様に人並みにはゆかないいい加減な正月を迎えることとなってしまった」と解釈すべきである、という見解がひとつである。他に、江戸では「ちう位」は「中位」で上・中・下の「中の意識」を指し、この句意は「私の俳諧の春の目出度さという喜びの感情は、上の満足でもなくまた下の不満でもない、いわば中程度のものである」という見解である。

前田利治氏は、「一茶と仏教・覚え書」という論文のなかで諸説を挙げながらも、結論としてはこの句を独立した句として解するのではなく、はからいを否定し、あるがままを肯定する発想において句と文とは共通しており、よってたつ思想が真宗思想の要諦「自然法爾」に基づいているとする。「目出度さも」は、迎春に際して単なる世俗的めでたさをいつているのではなく、俳諧と仏法一如を期す在家一茶の新春のめでたさをいい、仏法の真実自然の境と俳諧の境地とを一如たらしめんと願う一茶の祈りの「めでたさ」ということであるとも、述べている²⁰。故に、「ちう位」の解釈もここから導き出されるべきであり、次のような結論になると力説している。

中七の「ちう位」は「いいかげん・あやふや」の意の方言ではなく、「上中下」の中であるとする。それはこの期に流行した一連の評判記類の評語から誘導され、自ら演出した来迎を目前にして感涙にむせぶ普甲寺の上人の言句を骨張（最上）と措定するのに対して、在家の一茶のあるがままの迎春を中とするのである。さらに言えば、衆生一切が阿弥陀仏の本願によってあるがままに摂取される大慈大悲の反語的表現が、つまり俳諧化が「ちう位」とする表現をもたらしたと考えられる。……下五「おらが春」は、前書き中の一茶自身の言句の態度を述べている一節の「から風の吹けばとぶ屑家」にふさわしい新春として方言を使用したものであろう。おらが屑家にふさわしいおらが春なのである。以上のことから一句の意味は「俳諧の仏法一如の境地を願う俳諧寺の新年のめでたさも中位のところである。私のあるがままのあばら屋の新春よ」ということになる²¹。

『おらが春』の巻首前書の普甲寺上人の話は、今昔物語第十五「丹後ノ国迎講ノ始メ、聖人往生ノ語」に見える古い説話で、一茶は、『沙石集』第九の「迎講ノ事」から取材した

²⁰ 前田利治『一茶の俳風』（富山房、一九九〇年）。

²¹ 同上、一四五～一四六頁。

ようで、この集の巻頭に置くべく用意してあったものである。一茶は、起稿前から素材を集めて周到な用意をなした上で起筆した。巻尾に置かれる俳句も虚構に添うように意図的に作られた可能性もある。それは『おらが春』に添えられている句歌が『享和句帖』『文化句帖』『七番日記』『八番日記』に同形の句が存在することからもいえることではあるが、「おらが春」の題で詠まれた句は五句ある。年代順に記す。

わが春は竹一本に柳哉	(文化元年、一八〇四、四十二歳)
わが春やたどんーッに小菜一把	(文化二年、一八〇五、四十三歳)
我春も上々吉よ梅の花	(文化八年、一八一―、四十九歳)
我が春も上々吉よけさの空	(文化十二年、一八一五、五十三歳)
目出度さもちう位もおらが春	(文政二年、一八一九、五十七歳)

一茶は多くの俳文を残しているが、その俳文にも虚構は多くある。句歌が先にできていて、後に俳文が付けられたと思われる文章もあまたある。『おらが春』には奥州行脚を憧憬した文章もある。「ことしみちのくの方修行セント、乞食袋首にかけて、小風呂敷せなかに負たれば……」と始まる文章には、文末に「思ふまじ見まじとすれば我家哉」という句が置かれている²²。この句は『八番日記』では文政二年の作にある「もふ見まじ美まじとすれど我家哉」の改作句である。文は後に添えられたものである。

第六話に「蛙の野送」と題する俳文があるのでこれも検証してみたい。

爰らの子どもの戯に、蛙を生ながら土に埋めて諷ふていはく、「ひきどののお死なつた。おんばくもつてとぶらひにとぶらひに」と口々にはやして、芥苳の葉を彼うづめたる上に打かぶせて帰りぬ。しかるに、『本草綱目』車前草の異名を蝦蟇衣といふ。此国の俗、がいうつ葉と呼ぶ。おのづからに和漢心をおなじくすといふべし。むかしは、かばかりのざれごとさへいはれあるにや。

卯の花もほろりほろりや蟄の塚 一茶²³

この文章では「爰らの子どもの戯」は、特に信州柏原と限定することはむずかしい。ま

²² 『一茶全集』六、一四〇～一四一頁。

²³ 同上、一四三頁。

た「ひきどののお死なつた」という文句も柏原あたりだけとは思えない。一茶は、蔵書『擁書漫筆』などで得た知識で、子どもの戯遊は知っていたであろう。一茶の興味は「オオバコ」の異名にあったと思われる。一茶の『方言雑集』には「莽苳・オオバコノ説」とある。『本草綱目』には「好ンデ道ノベ及ビ牛馬ノ跡中ニ生ズ。故ニ之ト名ヅク、蝦蟇喜ビテ下ニ蔵状ス、故ニ江東ノ称、蝦蟇衣トス」とある。

一茶の興味は『おらが春』の愛娘さとの死を悼んでの起筆にとどまらず様々なものに向けられている。第十六話は「おのれ住める郷は」と題して次のようにある。

おのれ住める郷は、おく信濃黒姫山のだらだら下りの小隅なれば、雪は夏きへて、霜は秋降る物から、橘のからたちとなるのみならで、万木千草上々国よりうつし植るに、ことごとく変じざるはなかりけり。

九輪草四五りん草で仕廻けり

一茶²⁴

上記の俳文も雪深い北信濃の風土を叙することよりも「九輪草」に興味があったものであろう。俗言家の一茶は、塔の九輪に似て層状に花をつけるこの花の名に魅かれたのであろう。これも『淮南子』の「橘之ヲ江北ニ樹レバ、スナハチ化シテ枳トナル」の文言によっている文である。このような一茶の思考の方向から考えると「ちう位」も「自然法爾」の宗教的境地よりも、世俗の程度の意が強かったと考えられる。冒頭に挙げた「ちう位」の解釈の違いも、視点をかえると、「方言語彙」に着目した見解と「言語語彙」に立脚した解釈の相違ということになる。別説には、一茶の日常の姿勢から、「一茶は単調しかもの確に自己を表現する俳人であるから、投げやりな意味は持たないと判断できる」²⁵という見解もある。「ちう位」を否定的に解するか、肯定的に解するかの分かれるところである。ここで、あらためてそれぞれの解釈の相違を示す。前田氏の前掲論文を引用しながら、整理してみたい²⁶。

①「ちう位」を「いいかげん・どっちつかず」の意に解する鑑賞

〔丸山一彦説〕ちう位は、いわゆる中程度の意に解されているが、実はあやふや、い

²⁴ 同上、一五二頁。

²⁵ 前田利治、前掲『一茶の俳風』、一四〇頁。

²⁶ 同上、一三二～一三三頁。

い加減、どっちの意の方言で、めでたさといってもいい加減なもの、だがそれで結構じゃないかといったような世間を尻目にかけた一茶らしい面魂が覗いている。

〔栗山理一〕 ちう位とは上位に対する中位という意ではなく、そんなことはどっちでもよいのだ、めでたいといってもまあいい加減なもので、それでもよろしいではないか、ふてくされているでもなく、ありのままをすっぱり投げ出して、このままが一番気楽なんだ、これで結構でないかと斜に構えている。

②「ちう位」を「上中下」の「中の」意とする説

〔荻原井泉水説〕 上を見れば方図がないが、下を見ればその日の糧に窮するものもある。中位のめでたさこそほんとうのめでたさではないか。上上などという概念的なめでたさよりも中位という現実的なめでたさのほうがほんとうのめでたさだということを感じたのである。

〔川島つゆ説〕 私はいつの解釈の場合でも、このちう位を上中下の中と解しているのが先輩知人から注意されるのであるが、柏原周辺の方言では、中ぐれえな野郎、すなわちつまらない奴というような意に用いられています。この句はまさに文字面以上に自足自負をあらわして、この気楽さはどうだい、とふんそっている様である。ただし方言を知らないはずはないから、それを逆手にとって、反語的に用いていると見ることが正解であろう。

東條操『全国方言辞典』では、「あいまい・あやふや・いいかげん」の意とし、「秋田県平鹿郡・山形県村山地方・福島県・長野県地方」の方言としている。埼玉・茨城・群馬では「ちゅくれい」「ちゅうぐれい」と発音すると「中程度」を意味し、「ちっくれ」「ちっとんべ」と発音すると「ほんの少し」「ちょっとばかり」の意となる。特に「ちょくれている」や「ちっくれ者」などの場合は、「ちぢこまってとても小さい」や「度量が小さく胆の小さい者」などの意としても使われている。埼玉も東京も同様な使い方をすると、発音によって使い分けているともいえる。一茶の「ちう位」を「中の程度」と解する根拠となるであろうと思われる句を引いてみる。

①下げも下げ下々の下国の涼しさよ

②我春も上々吉よ梅の花

- ③米国の上々吉の暑さかな
- ④元旦や上々吉の浅黄空
- ⑤江戸方も先上首尾か帰る雁

一茶の『句稿消息』（文化九年（一八一二）～文化十三年（一八一六））や『随斎筆紀』は、文化八年に夏目成美が全国俳人の句を集録し句評をしたものを受け取って記録したものである。その句評には「上・上上・大上々吉・至上々吉、極上々吉」などの評語があり、一茶の他の俳句にも上や下の評語を使用している。ここに記された一連の句意と評語と、一茶の「ちう位」意識とを比較して考えるべきであろう。一茶は夏目成美から送られて来る句評を大変気にしている。信州柏原に帰郷した一茶にとって、江戸の俳壇の様子は気がかりのひとつであった。柏原の片田舎で作られた句が江戸の有力俳人夏目成美にどう評価されているかは、田舎宗匠にとっては大きな意味があり、それは一茶に対する門人の眼という評価に繋がることでもあった。

夏目成美は謙虚な人格者であったらしく、一茶の長所や特色をしたため励ましている。欄外や行間に成美の朱筆になる批評や添削があり、二案の内一方を朱で消したり、丸や二重丸を付けている。その他「極上々吉」「大上々吉」「至上々吉」「功上々吉」という評もある。評語では「ひとねとはいささか聞にくき歟、且句意もあたらしからず」「花を敷寝犬あたらしといへどもなの花を身うちにつけてといふよりも第二等なるべし」「小菰もすこし古めきたらんか」「よろしと申べし」「いまだ俗をはなれず」と酷評もしている。誉めるばかりではなく、誠実な長文の批評もしている。これに対して、一茶も誠実に受け止め次のように返書をしている。一茶の成美評に対する真剣さがわかる。

かくしるし候へども、ちとも句らしきものはさらに不有候様奉存候へども、たよりに入尊覧ニ入ざるもどうやら損のやうに覚へ候間、くだくだしく、かんおう寺の富の
一ツもまぐれあたりも可有之かとしんじ候間、御加筆奉希候、草稿は一所に御返し可
被下候様奉頼上候²⁷。

あるいは自分でも納得いかぬ様子で、「どうしても役に立かね候哉、御聞せ可被下候様、奉希候」とあったり「君の寝菰を力草にしたる也、等類に可相成候哉、尊慮御聞せ可被下

²⁷ 『一茶全集』六、四四一頁。

候様奉頼上候」「一々御叱り被成可被下候様奉希上候。一茶 成美様」と返書していることから、一茶が成美を師匠のごとく見ていたことがわかる。なかには「御引墨成可被下候様奉頼上候」と容赦なく抹消してくれるように頼んでいる。このような点からも、この期に流行した一連の評判期類や俳諧角力番付、評語などを念頭に置いて詠んだとすれば「ちう位」は、上中下の中ということとなる。信濃方言の「ちっくれ」「チュウッ・クレエ」ではなく江戸関東言葉としての「ちゅうぐらい」「ちゅう程度」の意と解すべきであろう。

今日、地域社会における生活語彙は、生活そのものの大きな変動と共に急激な変容を余儀なくされている。全国にその地方独特の生活文化があり、その生活文化から派生した生活語彙は方言として地域の状況をその語のなかに内包していた。文化と生活の変容によって生活語彙はさまざまな多様性をはらむ複雑な状況を呈していることも事実である。老年層に限定すればいまだ生活語彙や方言は確かに息づいていることを否定することはできないが、急速な勢いで変容を迫られていることもまた確かである。室山敏昭氏は次のようにいう。

たとえば農業社会には農業社会独自の、漁業社会には漁業社会独自の生活語彙のシステムがあり、それに対応する形で、それぞれに独自の世界像が認められる。それを意味システムのレベルで相対化することによって、日本文化の多元性、複層性を解析しようと試みたのである。それは同時に農業社会、漁業社会のそれぞれについて、生活語彙の意味システムに獲得された、生活者の世界像の地域類型を解明する試みとも連動することがある。このような言語＝文化相対主義を実践的な位相で展開するならば日本文化の多元的、複層的な意味的環境のシステムが明らかになる。このような研究は狭義の社会言語学を包摂する「文化言語」と呼称されるのにふさわしいものとなるであろう²⁸。

小林一茶という俳人を、作品に鮮烈な個性を表現した姿勢で化政期俳壇への反逆をした者とする説が一般的であるが、室山氏の研究方法である生活文化と生活語彙という視点から一茶の俳諧活動を眺め直す必要がある。当時の社会構造、語彙や語意から放浪者一茶の行動を跡付ける探索も必要とされる。方言俳句の祖といわれながら、方言についての言及はほとんど見られない。そのようなことから本稿では、一茶の方言使用の方法について些

²⁸ 室山敏昭『生活語彙の構造と地域文化』「はしがき」（和泉書院、一九九八年）。

か考察を試みた。一茶は人生の大半を放浪生活に費やした。街道の整備や参勤交代の制度などで、江戸後期は地方語や方言は希薄になっていただろうが、一茶は方言を採集し、それを使って俳諧句に詠み込んだ。そうした一茶の大胆な試みとその意義は大きなものがあると思われる。

第六章 一茶の家族描写と説経節

第一節 一茶の家庭・祖母と母

近世文学作品のなかで、肉親の愛憎や家庭と家族、愛と死を扱った作品は極めて少ない。師や門人、親友等に関する型どおりの終焉記は数あるが、小林一茶のように近代自我意識を全面に押し出し、最も切実である肉親や家族の愛や死別をテーマにして書かれた濃密な作品は全くない。憎悪や怨念はあまたある。それ故に異彩を放っている。

一茶だけが、父母や祖母もその死と、そうした人から受けた恩愛とを書き記している。その代表作が『父の終焉日記』と『おらが春』といえよう。最愛の父と娘に対する懇ろな追悼記である。一茶は、なぜこのように家庭や家族、肉親の愛と死を作品として近代人に近い感性を以て描けたのであろうか。特に『おらが春』に描かれた長女“さと”に寄せる家族愛と親としての情愛、そして死別に際しての悲しみの表出は「近代の親子」の姿そのものとして描かれている。“さと”の誕生から死に到るまでは、今でも戦前の女学校を卒業した方は暗唱していらっしゃる方もいる。相馬御風や荻原井泉水、会津八一、勝峰晋風等によって、積極的に紹介されていった一茶が、大正デモクラシーの風潮を背景にした新しい教育運動の流れのなかで、人間の生への妄執とその悲劇を克明に描いた『父の終焉日記』や子どもへの純愛を赤裸々に示した『おらが春』に収録の「添乳」の一節など、これらが積極的に教材化されることによって一般に読まれるようになった。

昭和十年代の国定教科書には、前章で述べたように、「国土・郷土礼賛の農民詩人」としての一茶像が採録され、「雀の子そこのけそこのけお馬が通る」（八番日記）や「やれ打つな蠅が手をすり足をすり」（梅塵八番）などの童謡的な句が添えられている。戦後は「博愛主義者」として、弱者への慈愛を示す句が採録され人間愛に溢れた国民詩人としてのイメージが定着した。戦後になると『高等国語近世篇』（昭和二十四年刊）に、『父の終焉日記』から「みとり日記」が、『おらが春』から「添乳」などが載せられ再び高い評価を受けるに至っている。一茶像の時代状況に応じた作品のカノン化については、前章で述べたように、渡辺弘氏の著書と業績に顕著に述べられている。ここでは一茶が肉親、家族に対して、どんな思いを抱き、またどのような感化を受け、あるいはどのような憎悪を抱いたり、どのように悲しみ、何に喜んだのか、またそれらをどのように書き残したのかについてそれぞれの愛と死の実際についてながめてみたいと思う。

一茶の実母「くに」は、一茶が数え年三歳の時に病死したために、一茶自身も臍氣にし
か記憶していない。母は、柏原の支村仁之倉（現・信濃町仁之倉）の町役人筋に当たる宮
沢家の出身で、当時でいう村の家格からすると小林家よりは高かったようである。母の性
格等はよくわからないが、明和二年（一七六五）八月に没した。おそらく二十歳ぐらいた
ったようである。一茶が柏原に帰住した折、有力な味方となって擁護してくれた徳左衛門
は、一茶とは従兄弟の関係であつたらしい。宮沢家の過去帳には徳左衛門と称した人は、
初代、二代、五代の三人がいる。そのため一説には叔父とする説もある。宮沢家で保管さ
れていた一茶関係資料「熟談書付之事」「一茶預り金覚書」「新增日本道中行程記大全」な
どは現在は一茶記念館に預けられている。母が亡くなると、父は一茶が八歳の時に倉井村
（上水内郡三水村）から「さつ」という女性を後妻に迎えている。農村においては女性も
重要な働き手であり、家内を取りしきるにはなくてはならない存在であつた。「さつ」が
嫁いで二年後に弟仙六が誕生した。享和元年（一八〇一）五月二十一日に父が没した後に
書かれた『父の終焉日記』にはそのいきさつが詳細に書かれている。

その文章は、柏原帰住に際して弟仙六との遺産分配をめぐるいがみ合いの最中に書かれ
たものであるから、相当な誇張があると見てよい。母のかわりになって幼少の一茶を庇護
したのは祖母「かな」であつた。『父の終焉日記』に継母との因縁やいざこざを書いた一茶
の本来の感情は、漂泊生活が続けるに従って生母への思慕とイメージが次第に神聖なもの
に拡大した結果であつた。「亡き母や海見る度に見る度に」という句は、文化九年（一八一
二）三月に江戸から富津に向かう途中に詠まれた句であるが、少年時代に故郷を出て長い
長い放浪生活を送り、五十歳にしてまだ妻子や家もない一人身の寂しさが漂っている。広
大無辺な海を見ていると、ああ母が生きてくれていたなら、という思いが胸にこみ上げて
くるのだという意味で、はるかな母への慕情が伝わってくる。洋の東西を問わず文学では
しばしば母性は海にたとえられている。「見る度に見る度に」と畳語を使った後の省略に、
「思い出される」という一茶の慕情が込められている。

母のかわりになって幼少の一茶を擁護した祖母のかなは、安永五年（一七七六）八月十
四日に六十六歳で他界している。一茶は、文化五年（一八〇八）七月に祖母の三十三回忌
に帰郷し祖母の恩愛の情に対して次のように書き残した。

おのれ三才の時、母のおやは見まかりぬ。老婆不便がりて、むつきの汚らはしきも
いとはず、朝暮背に負ひ、懷に抱きて人に腰を曲げて乳を貰ひ、又首を下げて薬を乞

つつ育てけるに、竹の子のうき節茂き世の中もしらで、づかづか伸ける。しかるに八才といふ時、後の母来りぬ。其母、茨のいらいらしき行迹、山おろしのはげしき怒りをも、老婆袖となり垣となりて助けましませばこそ、首に雪をいただく迄、露の命消へ残りて、古郷の空の月をも見ぬ。誠にけふの法筵に逢ふことのうれしく、ありがたく、かくいふけふをさへ老婆の守り給ふにや。

秋風や仏に近き年の程　一茶¹

一茶は享和元年三月に帰郷を思い立って帰国をした。たまたま父が悪性の傷寒（腸チフス）にかかり、一カ月ほどの病臥の後に六十九歳で世を去った。『父の終焉日記』は其の時の看病の手記で、四月二十三日の発病から筆をおこして五月二十一日の臨終を経て、二十八日の初七日にいたる三十四日間の経緯が詳しく記述されている。日記体の構成をとっているが、緊密な構成を持ち内容もかなり整備されている点から考えると、父の没後相当の日時を経て執筆されたものと見られている。祖母の三十三回忌の翌年ということになる。自筆稿本は久保田ひろ志氏が所蔵されているが、原本は無題で、「父の終焉日記」「父の臨終記」「看病日記」「みどり日記」などの名称で呼ばれているなか、東松露香が名づけた『父の終焉日記』という書名で広く知られている²。引用が多岐にわたっている点がその特徴の一つでもあるが、特に『宝物集』からの抽出が大半を占めている。「任他五濁悪世の人界」や「五逆罪」など仏教用語を駆使している点から、すでに念仏信徒の信仰心を篤くしていたと考えられる。また『法華経』の経文からの引用も多いところから、浄土真宗の門徒としての意識を強くして書かれたものと思われる。江戸の生活を引き払って信濃柏原に定住する十三年前のことである。

『父の終焉日記』とは別に「別記」がある。この文章は「生ひ立ちの記」とされて一茶の経歴を知る上での貴重な資料でもある。この記には「日記余白」があり諸書からの抄出が丹念に記されている。これも「日記別記」を書いた後に『父の終焉日記』を補完する物として抄出して手控えとしたものらしく、引用は『新古今集』『稻妻表紙』³『法華経』『涅槃経』

¹『一茶全集』二、五〇一頁。

² 矢羽勝幸『小林一茶』（勉誠出版、二〇〇四年）によると、「もともと草稿のまま伝えられ、題名もなかった。従来「父終焉の記」「みどり日記」などとも言われていたが大正十一年に東松露香の校訂本によって『父の終焉日記』の名が定着した」という（一六一頁）

³『稻妻表紙』（文化三年、一八〇六）山東京伝の怪談集である。『昔話稻妻表紙』という書物である。例幣使街道を通り熊谷宿を後にして利根川を渡って玉村か旧芝根村辺りで一泊した一夜の不思議を語ったものであるが、この奇話はおおむねこの読本に基づいているため、一茶の実体験ではなく虚

槃経』『万葉集』『徒然草』『莊子』『列子』『雨月物語』『古今集』『今昔物語』など諸書に及んでいる。「日記別記」については相当な誇張があるが、祖母かなとの愛情の交錯が詳述されているので、その全文を示そう。

春去り来れば、はた農作の介となりて昼は日終菜つみ草かり馬の口とりて、夜は夜すがら、窓の下月の明りに杳打ち、わらち作りて、文まなぶのいとまもなかりけり。明和九年五月十日、後の母男子仙六を生めり、此時信之は九歳になんなりけり。いたましひ哉、此日より信之、弟仙六の抱守りに、春の暮れおそきも、はこによだれに衣を絞り、秋の暮れはやきもいばりに肌のかわくときなかりき。仙六むづかる時は、わざとなんあやしめるごとく父母にうたがはれ、杖のうきめ当てらるゝ事日に百度、月に八千度、一とせ三百五十九日、目のはれざる日もなかりし。憑と思ふは老婆一人介トなり給ふに、餓鬼の地藏を見つけたるがごとく、あやふき難はのがれたり。皆是宿世の業縁、昔一天万乗之君さへ井の底に埋められんとせし給ふためしあれば、たとへ此身は千々に碎かるゝとも、身体髪膚皆父母の借りもの、何をか悔ん、何をかうらまん。寒天の暁に陌上の霜雪に面をさらし、三伏の夕べ松下の虻蚊に脛をこらし、弟守事春秋五とせ也。しかるに、明和五年八月十四日、杖柱とたのみし老婆、黄泉の人と成り消えたまふ。有為転変、会者定離は生あるものゝならひにしあれど、我身にとりては、闇夜に灯失へる心地して、酒に酔へるがごとく、虚舟に浮めるがごとし。旦暮称名のみをちからに日をおくる。三七日も過る此に及、信之はゑやみの神に見入られて、惣身火の中に焦かるゝがごとし。かくて命またくあらじと枕元につき添ふ人々は念仏を進め、信之も息の通はん程は御仏号をとなへつゝ、明るもくるゝもしらざりき。なんの人より天才の生れつきなれば、父もをしまじ、母もかなしまじと思へど、親に先立身の本意なさや。それとても天のなせるわざなるべし。老少不常の此世はかりのちぎり、不生不滅の国に生れて、長く老いをつくすべしと。(以下欠文)⁴

この文章によると、庇護者祖母かなが他界した直後に「ゑやみの神に見入られて、惣身火の中に焦かるゝがごとし。かくて命またくあらじ」と、周囲の人々より見放されるほど

構の話とされている。一茶は日記にもこのような虚構を随所に織り込んで巧みに文章を構成している。

⁴『一茶全集』五、八十六～八十七頁。

の重病を患っている。このことは従来見落とされていたことであるが、実は極めて重要なことと思われる。

『父の終焉日記』に描かれている継母さつの阿修羅のごとき鬼姥のような人間像は、実は『袋草子』などの継母像を借りて多分に文学的に脚色されている、とするのが従来の解釈であった。これは一茶五十七歳の時に書かれた文政二年（一八一九）の『おらが春』の記述にも、そのいじめの様が執拗に描かれていることにも由来している。栗の木が芽を出して一尺ほど伸びると大雪で折れてしまう。翌春にまた芽をкаろうじて一尺ばかり伸ばすがまた折れてしまう。「ことし七年の星霜を累ぬれど花咲き実入る力なく、されど此世の縁尽きざれば、枯れも果ずして生涯一尺程にて生きて居るといふばかりなるべし」と、栗の一木に我が身をたとえ、継母の暴虐に堪える自分を暗示させた後に、「我又さの通り、梅の魁に生れながら茨の遅生へに地をせばめられつつ、鬼ばば山の山おろしに吹折られ吹折られて、晴れ晴れしき世界に芽を出す日は一日もなく、ことし五十七年、露の玉の緒の今迄切ざるもふしぎ也」と書いて、そのいきさつを記述して誇張している⁵。さらに幼少のころに弟仙六を背負わされている姿を、「大かたの人交りもせずしてうらの畠に木、萱など積たる片陰に踞りて、長の日をくらしぬ。我身ながらも哀也けり」⁶と記し、いかに寂しい思い、辛い思いをしたか、ということを縷々書きつらねている。生涯一尺程で生きて居るとする誇張も面白い。

このような記述から、継母への呪詛、継母の陰険さ、非行虐待の毎日がこれでもかこれでもかと描かれている。こうした点から、それは一茶の作られた自画像と解されてきた。『おらが春』では幼少のころの辛い日々を語った後に「我と来て遊べや親のない雀 六才弥太郎」の句がある⁷。この句も文化十一年（一八一四）一茶五十二歳の作とされているのであるから、多分に作為が見えている。こうした後に旅先で見聞したのか、あるいは土地に伝わる伝承を記録したものか、継母の物語を書いて幼児さとの記録に及んでいる。こうした構成力は実に見事な筆致というべきである。面白いのは「なんの人より天才の生まれつきなれば」と自負を書き記したのは、俳文という滑稽感を出すためであろう。継母のいじめ物語には、『落窪物語』や『宇津保物語』などの先蹤がある。

⁵ 『一茶全集』六、一四六頁。

⁶ 同上、一四七頁。

⁷ 『おらが春』では「六才弥太郎」となっているがこの作ははるか後年の作品で、孤独癖の少年時代を回想するのに都合のよい作品としたのである。一茶の育った家庭も一般家庭によく見られる「嫁と姑」の問題があり、祖母に溺愛されながらもその両者の間で一茶の心はもみくちゃにされたものと思われる。

継母の残忍さ、無慈悲さを語ることは恐らく「説経節」の「さんせう太夫」によったものと思われる。森鷗外は、説経節から小説『山椒太夫』を書いた。直江の浦の人買い男は、母親を佐渡へ売ってしまい、佐渡で買った人は母親の眼をつぶして盲にし、粟干し場に来る鳥を追わせている。一方子どもの姉弟は、丹後の由良の山椒大夫という長者に買われて、朝早くから姉は海辺へ潮汲みに、弟は山へ芝刈りに行かされるというくだりである。鷗外の『山椒太夫』は、説経節の冒頭部が欠落している。子どもらの父親岩城の判官正氏の人柄と家の事情を鷗外は省略し、越後の国の直江の浦に辿りついた場面から書き出している。岩城の正氏は、冤罪によって筑紫の安楽寺に流され、安寿と厨子王がこの父のいる筑紫に岩城の国から会いにゆきたいという。姉弟の父を恋う心にほだされた母親は、子どもらの乳母でもあった姥をつれて国を脱つ。途中幾夜も野宿を重ね、直江の浦にまで辿りつく、という背景から始まる物語である。次は冒頭の部分である。

ただいま語り申す御物語、国を申さば、丹後の国、金焼き地藏の御本地を、あらあら説きたてひろめ申すに、これも一度は人間にておわします。人間にての御本地をお尋ね申すに、国を申さば、奥州、日の本の将軍、岩城の判官、正氏殿にて、諸事のあはれをとどめたり。この正氏殿と申すは、情の強いによつて、筑紫安楽寺へ流され給い、憂き思ひを召されておわします⁸。

鷗外の『山椒太夫』には「門付け説経」⁹が語るこの部分がない。「説経さんせう太夫」は、人買いの悲しい物語ではあるが、丹後の金焼き地藏尊の後利益を語り申しますという前置きがある。説経節の特徴である丹後の金焼き地藏尊の霊力が語られるのである。やがて四人の主従の姉弟は、二艘の船に別々に乗せられ離れ離れに売られてゆく。姥の「うわたき」はことの仔細を見て取って、とても生きられないとばかり投身すると、母も続いて身を投げようとするが、子ども達のことを思って入水を思いとどまる。「船頭このよし聞くよりも、『なにと申すぞ。一人こそは損にすると二人まで損にはすまい』とて、持つたる擢にて打ち伏せ、船梁に結びつけて、蝦夷が島へぞ売つたりけり。蝦夷が島の商人は、能

⁸ 荒木繁・山本吉左右編注『説経節』（平凡社東洋文庫、一九七三年）、三頁。

⁹ 盲目の瞽女がひとりの目の見える瞽女に引かれて各家々を訪ねては説教を説いていた。「葛の葉」が多く、狐が人間の子を産む「信太妻」が有名である。特に冬期に越後から各国を巡回しながらこれらの説経をして喜捨を乞うている。これら説経の特徴は「丹後の金焼き地藏尊の霊力」から語り始めた。最後の瞽女は越後高田の杉本チイさんが有名で人間国宝に指定されたがもう亡くなった。

がない、職がないとて、足手の筋を断ち切つて、日に一合を服して、栗の鳥を追ふておわします。これは御台の物語り。さておき申し」¹⁰と説き語る。さすがに鴟外は医者職業柄からして、母親が蝦夷へ売られて「能がない、手職をもたぬ」とて女の手足の筋まで切り取り、栗に来る鳥を追わせて一日一合を食わせられていた、などとは語れなかったのであろう。説経節の本旨は、この世の地獄は人間が作るものだということを説いてみせることなのである。

安寿と厨子王は、由良の山椒太夫のもとに売られるが、「越後の国、直井（江）の浦から売り初められ、それがしあまりのものの憂さに、静かに教えてみてあれば、この太夫殿までは、七十五転に売られたが」¹¹と説経師が語るように、七十五人の人手に買われて売られることになっている。山椒太夫の屋敷では、姉は潮汲み、弟は三荷の芝刈りを命じられる。あまりの辛さ哀しさに一度は自害を思いとどまり、一度は脱走を計画するが、姉弟のはかりごとを山椒太夫の息子の三郎に立ち聞きされて、安寿は頬に、厨子王は頬面に炭火で焼いた焼き鰻で印を押されてしまうのである。「姉は弟にすがりつき、弟は姉に抱きつき、流涕焦がれて、御泣きある」¹²と説経師は語り続ける。ただ一人この物語で慈悲心を持っていたのが三郎の兄二郎で、この二郎が自分は喰わずに袂に隠し持っていた自分の握り飯を飢えた姉弟の小屋にもって来てくれるのである。

「さんせう太夫」の説経節にはもう一人の慈悲者がいる。姉弟が二人一緒に自害をして果てようと決意した時、それを押しとどめ助けてくれたのが、伊勢の小萩という女性である。小萩は、大和の宇陀郡に生まれ、伊勢の二見が浦から売られて山椒太夫のところへ来るまでに四十二カ所も転々としてきた女性である。山椒太夫のもとに売られることになったその由は、「継母の中の讒奏により伊勢の国二見が浦より売られてに」¹³と語り、また継母がここでも強調されている。

小萩は、安寿と厨子王とが汐汲浜で身投げをしそうになるのを助け、諭して太夫の家へ連れ帰るが、またまた太夫は二人に食事を与えない。飢えた二人に小萩は、自分の握り飯をそっと分け与えるのである。説経師が執拗に姉弟の境遇を攻め語るのは「かちえ」を客にわからせたいからである。若狭、信濃、能登などでは「飢え」を「かちえ」ともいった。親と離れて暮らす子が腹が空くことを「かちえ」あるいは「かつえ」ともいったが、「カチ

¹⁰ 同上、十頁。

¹¹ 同上、十一頁。

¹² 同上、十八頁。

¹³ 同上、十四頁。

栗」のように固まって身の内に残る。腹のなかに残った「かちえ」は、なまなかのことで
は凍りとなって体が温もらず冷え切ってしまうのである。飢えていた姉弟に自分の飯を分
けて与えてやるのが二郎と小萩なのである。二人にとって伊勢の小萩の登場はどんなにう
れしかったことであろう。「あらいたはしや姉弟は、さて去年の正月までは御浪人とは申し
たが、伊達の郡の信夫の庄で、殿原たちや上藤に」¹⁴と説経師が語ると、客は一層姉弟の
「かちえ」に同情し涙を絞ったことであつたろう。全国的な飢饉の際にはかろうじて麦飯
が喰えたり、かろうじて米麦飯を食えた人々が大方で、疲弊した村では食えぬ子どもも沢
山いた。そうした子ども達の多くは自力宗派や、天台、門徒などの寺院に貰われていった。
これを「童行喝食」といい一種の「口べらし」であつた。幼くして沙弥になった子を「駆
鳥沙弥」ともいった。一茶が十四歳で江戸に奉公に出されたのも継母との折り合いの悪さ
もあつたが、一種の「口べらし」という理由もあつたのであろう。

一茶は、『おらが春』で栗の若木を継母にいじめられる自分の姿として綴っている。「鬼
ばば山の山おろしに吹折られ吹折られて、晴れ晴れしき世界に芽を出す日は一日もなく、
ことし五十七年、露の玉の緒の今迄切ざるもふしぎ也」¹⁵と書いた後に、継母に虐げられ
ている和歌や俳句を並べ、大和の国に伝わる話としての一文を書き添えている。

なでしこやまゝはゝ木々の日陰花	一茶
子ばかりの蒲団に芦の穂綿哉	宗鑑
うつくしまゝ子の顔の蠅打たん	紅雪
なげけとて蚊さへ寝させぬまゝ子哉	未達
まゝ子をもいたはる嫁の名をとげて	芭蕉
継母のまた口走る夜の雨	未達
わづかなる世をまゝ母に偽られ	風流
竹の雪はらふは風のまゝ子哉	正勝
朝夕におひかぶさりし目の上の辛夷も花の盛りなりけり	一茶
うぐひすよなどさはなきそちやほしき小鍋やほしき母や恋しき	貫之娘

このように、継母にいじめられる様子を描いた句を集めている。こうした点から考える

¹⁴ 同上、十五頁。

¹⁵ 『一茶全集』六、一四六頁。

と、確かに継母との折り合いは良かったとはいえないものがあつたに違いない。前述した説経節の「さんせう太夫」にも安寿と厨子王の母に食事を与えなかったり、姉弟に食事を与えず「かちえ」を患わせたりする描写があまたある。

あらいたわしやな姉御様は、厨子王殿にすがりつき、「やあいかに厨子王丸、われらが国の習いには、六月晦日に、夏越の祓いの輪に入るとは聞いてあれ、これは丹後の習いかや。さらば食事をも給わず、干し殺すかや悲しや」¹⁶

一茶も『父の終焉日記』のなかで祖母かなが他界した後に、病に患ったことを記している。前述したように継母のいじめ、残忍さを描くのに「さんせう太夫」から得たと書いたが、あるいは継母のいじめは寡収による食糧不足から、一茶が「かちえ」になったことを意味しているのではないだろうか。父弥五兵衛は、北信濃の宿場町柏原の農民で早くに父を失いながらも良く努め、享保末年に分家に出ているが僅かな田畑の贈与で、一茶が生まれる前には相当に苦勞をしたようである。宝暦十三年（一七六三）当時は田持高三石四斗余り、畑二石六斗余りで村内中位の位置にあつたと思われる。そのようなことから、一茶の病は後妻さつとの感情のもつれに加えて飢えによる「かちえ」であつたと考えられる。そのため一茶は、『おらが春』で継母にいじめられる句を書きつらねた後に、これも「さんせう太夫」の説経節の「小萩の章」に類似した物語を書き込んだものと思われるのである。

「さんせう太夫」の厨子王はある日山に芝刈りに行き、姉から勧められたように逃亡して国分寺に辿りつく。寺の奥から聖が出てきて追っ手の三郎と問答になり、遂に寺中を探し回るが聖が籠に入れて屋根の垂木に吊るしてかくまったので見つからずに済むのである。この場面も説経節では最も高揚するところである。三郎と太夫と聖との問答のかけひきに迫真性がある。三郎が「童を御出しあれ。童を御出しないものならば、身にも及ばぬ、大誓文を御立てあらば由良の港へ戻ろうぞ」と聖を脅迫すると、「童とては知らねども誓文を立ていならば立て申すべし。そもそもこの法師と申すは、この国のものでなし。国を申さば大和の国、宇陀の郡の者なるが、七歳の時に播磨の書写へ上り、十歳にて髪を剃り」と語りだす¹⁷。こうしてお経の羅列が始まるのは説経節という「くどき」の文言であるが、厨子王を助けた小萩も聖も所在が大和国の宇陀の出身であつた。宇陀は『万葉集』にも詠

¹⁶ 同上、十八頁。

¹⁷ 同上、二十六頁。

まれており、そのようなことから大和国には説経節による伝承も多く伝わっていたのであろう。

大和宇陀の地藏菩薩は「語り」で知られている。一茶は継母の意地悪さを述べるのに引用している。『おらが春』の一茶の文章は短文であるが、実にうまくまとめられている。

昔、大和国立田村にむくつけき女ありて、まゝ子の咽を十日程ほしてより、飯を一
椀見せびらかしていふやう、「是をあの石地藏のたべたらんには、汝にもとらせん」と
あるに、まゝ子はひだるさたへがたく、石仏の袖にすがりて、しかじかねがひけるに、
ふしぎやな、石仏大口を明けてむしむし喰ひ給ふに、さすがのまゝ母の角もぽつきり
折れて、それより我うめる子とへだてなくはごくみけるとなん。其地藏菩薩今にあり
て、折折りの供物たへざりけり。

ぼた餅や藪の仏も春の風

一茶¹⁸

厨子王と安寿が顔に焼いた焼き饅を押し当てられて、十文字の焼き印の折檻をうけた時に身代わりになってくれたのが地藏菩薩であり、厨子王が山から脱走し寺にかくまわれ三郎に槍で突かれた時もまた地藏菩薩が身代わりになり、三郎の槍先を折ってしまうのも地藏菩薩である。説経節の本筋は、地藏菩薩の霊験を説くためのものであり、「さんせう太夫」は、丹後の由良の「金焼き地藏菩薩」の霊力を語る物語なのである。姉弟が肌身離さず持っている地藏菩薩のお守りも、二人の宿縁を語る道具である。いかなる折檻にも、いかなる責め苦にも、いつも身代わりとなって二人を助けるのが地藏菩薩である。親子の情愛を歌い上げて仏恩を感じさせるのが説経節である。佐渡に売られて鳥追いとなっている母親と、丹後守護職となった厨子王との再会を導くのも地藏菩薩である。俗信家の一茶は、説経節を子どもの時に聞いていた。越後の瞽女は越後高田から丹後に行ったし、山一つ越えて信濃までやってきたのである。一茶は「亡き母や海見る度に見る度に」と詠んだのであった。佐渡で盲目となった母親と再会できた厨子王を、一茶はどれほどうらやましく思ったことであろう。前に引用した『父の終焉日記』『日記別記』のなかで弟仙六が生まれてくだりに、「仙六むづかる時は、わざとなんあやしめるごとく父母にうたがはれ、杖のうきめ当てらるゝ事日に百度、月に八千度、一とせ三百五十九日、目のはれざる日もなかりし」と継子であることから受ける折檻の身の辛さを強調した後に、「老婆一人介けトなり給ふに、

¹⁸ 『一茶全集』六、一四七頁。

餓鬼の地蔵を見つけたるがごとく、あやふき難はのがれたり」と地蔵菩薩の靈驗のごとくに書き記したのである。また「信之はゑやみの神に見入られて、惣身火の中に焦かるゝがごとし」と書いたのは実際祖母を失った悲しみと、継母のいじめによる飢えと空腹によって「かつえ」の病を罹患したのであろうが、厨子王が三郎の責め苦の焼き鑊を顔に当てられるが如くに描いているのである。

第二節 父と子ども達

享和元年（一八〇一）の四月、父弥五兵衛が農作業中に傷寒によってたおれ、一茶は専心看病に努めたが、病気は悪化の一途をたどり、五月二十一日六十九歳で他界した。その発病から葬儀、初七日に到るまでの様子を後日に細叙した記録が『父の終焉日記』であった。前記したように本作は単なる日記にとどまらず私小説的な構成と内容を持っており、創作意識が極めて顕著である。父の喉の渇きの訴えに継母が井戸水をむやみにすすめる所行に怒って、自ら湯冷ましを飲ませ、細心の注意で看病する一茶の動静が多少の誇張を交えて活写されている。遺産の分配は死期を悟った父によって四月二十九日に宣言された。父は早くから江戸奉公に出した一茶に負い目を感じていたらしく、一日も早く帰郷させて柏原に定住させたいと願っていたらしい。一茶もその父の願いを容れて定住することを考えていた。一茶に病床の父が語りかける場面は圧巻であるので引用する。少々長い文章でもある。

六日天晴れたれば、伏してばかりも退屈にやおぼしめさんと夜着打たゝみて、よりかゝらせ申したりきに、こしかたの物語など初給ひけり。「抑、汝は三歳の時より母に後れ、やゝ長なりにつけても、後の母の中むつまじからず、日々に魂をいため、夜々に心火をもやし、心のやすき時はなかりき。ふとおもひけるやうは、一所にありなばいつ迄もかくありなん、一度古郷はなしたらば、はた、したはしき事もやあるべきと、十四歳と云春、はろばろの江戸へはおもぶかせたりき。あはれよ所の親は、今三とせ四とせ過ぎたらんは、家を任せ、汝にも安堵させ、我等も行末をたのしむべきに、としはも行かぬ瘦骨に荒奉公させ、つれなき親とも思ひつらめ。皆是すくせの因縁とあきらめよや。今年は我も二十四輩に身をなして、かの地にして一度汝にめぐりあひ、

相果つるとも汝が手を借らんと思ひしに、こたびはるばる来りて、かゝる看病こそ浅からざるえにしあれ。此度今往生をとげたりとも、何の悔かあらん」とはらはらと涙落し給ふに、一茶は只打ちふして物も得言はず。夏の消えやらぬ不二の雪より厚く、紅ひのふたしほより深き父の恩を、つき添ふ事もならで、只うかめる雲のごとく、東にあるかと思へば西にさすらひ、光陰は坂上に輪をころがすごとく、今とし廿五年になりぬ。首は白霜をいただく迄、親のそばを遠ざかりぬる事、五逆罪とも是に過ぎてんやと、心にふし拌み、我涙おとしなば、やまひいよゝ重らせ給ふべき、顔おしぬぐひ打笑ひ、「させる事心に思ひ給はで、はやく快気なし給へ」、と薬を進めける。「やがてすこやかになり給はば、われ元の弥太郎となり、草ぎり土ほりて心を安めん。今迄の為体ゆるし給へ」といへば父はかぎりなく悦び給ひき¹⁹。

このような記述が後になされたものであったとしても、父は一茶を江戸奉公に出してしまったことを常に心に悔いていたようである。こうした近代人の肉親の愛と死をテーマにした作品は他に例を見ない。安永六年（一七七七）の春、十四歳の一茶を同郷人に託して江戸に旅立たせた一茶の父親の気持ちはいかばかりであったであろう。しおしおと家を出る一茶を、父は牟礼まで送って「毒なるものはたうべなよ。人にあしぎまにおもはれるなよ。とみに帰りですこやかなる顔をふたたび我に見せよや」²⁰とねんごろに涙を浮かべて語りかける様は、これほど辛い父の真情と子を愛す姿をいいとどめて読むものをして涙を禁じさせえない。父は、浄土真宗の聖地とされている二十四聖人詣をしてでも、一度生あるうちに会いたかったと詫びるのであった。

一茶の奉公先については具体的にはいまだ判明していないが、これを考察する必要がある。すこし推論になるが、一茶の江戸における居住についていえば、一茶の最初の奉公先は不明であるが、やがて俳諧をたしなむ大きな商家に奉公をしたのであろう。一説には千葉県松戸市馬橋の大川という油問屋であるといわれている²¹。近世の家族制度と家督相続制度は、特に長男を優遇した。長男でありながら継母との不仲によって家を離れねばならなかった一茶は、結果として深く継母を恨むこととなり、その性格と文学にも微妙な影

¹⁹ 『一茶全集』五、七十四～七十五頁。

²⁰ 同上、八十四頁。

²¹ 千葉県松戸市小金の永妻可長などかという説もあるが、今では松戸市馬橋の大川という油問屋の主人で大川平右衛門という人物であると考えられている。柏日庵立砂と号した俳人である。江戸から両総地方に勢力を持っていた葛飾派の宗匠森田元夢の高弟とされている。一茶は生涯にわたって立砂と親交を持っていた。私は或いは成美の叔父夏目祇徳であろうと考えている。

を落とすことになる。帰郷してからの継母との折り合いは、それほど険悪なものではなく結構仲の良い暮らしをしている。継母さつは文政十二年、一茶の死後の二年後に八十歳にて没している。『父の終焉日記』には、一茶の父への思いやりの心が随所に見える。母の看病記や妻の看病記など近代文学作品には多くあるが、父の看病日記は意外に少ない。川端康成が身寄りのない自分を育ててくれた祖父の看病の模様を記した、短編実録小説の『十六歳の日記』くらいであろう。「父子愛の物語」を、一茶が遺産分割をもくろんで随所に父を思う自己宣伝を書き入れたこともまた事実であろうが、肉親の愛情、殊に父子愛については一茶自身が自分の子どもに満腔の愛情を寄せている点から偽りではなかったことに思い至らされるのである。

父が最後に食べたい、といった季節外れの梨を捜しに遠く善光寺町まで走り回る姿は家族の絆の深さを感じさせる良い文章である。これも部分的に引用してみたい。

十日晴れ、しきりにありの実をたうべたきとむつかり給へば、此辺のゆかりあるもなきもしたしきかぎり、富たる家、心あたりある門、聞尽し尋探し尽すといへども、ありのみ一ツたくはへたる人としもなく、夏さへ淋しき山里なりき。……辰の刻ばかりに善光寺に着く。……抑々此地は御仏の浄土にしあれば、肆は軒をあらそひ、幌は風にひるがへり、入る人、いづる人、国々よりはるばる歩みをはこびて、未来成仏をねがはぬ人もなく、おのれはけふ父の命をうけて御薬使、はた梨を捜しに来つるなれば此役済まざらんうちは御仏も遥拝して、天をかけり地を潜りてなりとも、梨一ツ得まほしく、ある程の乾物店、ある程の青物店を足を空にしてかけ巡るに、悲しさは更に片われ一ツありとさかゆる人もなかりき。昔雪中に笋を掘り、氷上に魚を求めたためしもあるに我梨一ツ得ることあたはざるは、皇天我を捨て給ふや、仏神我を見かぎり給ふや。一世ばかりの不孝にはあらじ。父はさぞ梨を待ちて居給はん。此まゝに帰りて父をなんとなぐさめんとおもへば胸せきふさがり、忍び落つる涙は大道を潤し、ゆきゝの人の狂者と笑はんもはづかしく、しばらく手を組み首をうなだれて心をしづめける。此の地になきものいづちにかあらん²²。

臨終間近い人に最後の親孝行を行うことは孝道の極みである。多くは最後と思われる望みを聞いてそれをかなえてあげてをいうが、大抵は食べ物を求めてあげることである。

²² 同上、七十六～七十七頁。

父弥五兵衛は「梨を食べたい」といったので、一茶は梨を求めて善光寺町に行ってまで求め続けた。翌日は越後高田まで行って求めている。高田は新潟県上越市高田であるから柏原からでは四十キロも離れている。一茶は、「たくはへたる梨」を探し求めているのである。あるいは「乾物店」「青物店」を求めて歩くのである。父弥五兵衛は、一茶の甲斐甲斐しい看病もむなしく病状は回復せず、悪化の一途をたどるばかりなのであるが、それだからこそ父の欲しがる梨を求め続けるのである。しかしその甲斐もなく弥五兵衛は五月二十一日に生涯を閉じることとなる。

それでは父弥五兵衛は、実際にはありもしない要求をしたのであろうか。あるいはもう意識朦朧として一茶に無理な願いを言いつけたのであろうか。一茶はまず、隣近所の人々に梨の蓄えがあるか、と尋ねている。次に富みたる家や心当たりのある家を捜している。富裕な人ならばもっているかもしれない、蓄えているかもしれないという梨なのである。そして「心あたりある門」とあるところから、この家では梨を栽培している農家ということになる。このように探し求める場所が明示されているということは、父が食べたいといっている梨は、この時期に全く存在しないということではなかったのである。「雪中に笋を求む、氷上に魚を求む」と書いた後に、「我梨一ツ得ることあたはざる」と記している。雪中の笋は掘ればすでに地中の地茎には育ち始めている。氷上の魚は氷魚といって凍った湖に穴を開けて釣ることができる。榛名湖や諏訪湖の氷魚釣りは古くから行われている。長いこと江戸や諸国を廻って生活していた一茶はその経験から、この時期に梨が存在することを知り、求め歩いているのである。

俳諧歳時記には「晩三吉」という梨が冬の季語として記載されている。この梨は原種に近い梨で、晩生の貯蔵梨をいう。そのことから歳時記では「冬の梨」ともいっている。近代の歳時記でいう「冬の梨」は十一月ごろに収穫できる「新高」や「白雪」という最晩生の梨のことで改良されて冬持の梨となった。一茶が求めた梨は一名「三吉梨」といい、大型で不整球な五百グラムぐらいの大きさの梨である。緑を帯びた褐色をしており果点是不鮮明なものである。貯蔵用の梨で、現在も冬期から初夏ごろまで冷暗所に保存しておけば食することができる。新潟が原産であることから、一茶は「翌や高田へ参りて、尋ね来たりて参らすべし」²³と記しているのである。後に一茶が柏原に帰住すると、越後高田から後藤甫外、大稜長肅、十日町の幽嘯などが門弟となっている。この梨は明治中頃より盛んに栽培されるようになっていく。現在は南信州松川産で品種改良されてさらに保存が効く

²³ 同上、七十七頁。

「南水」という梨として売られている。古い江戸時代の歳時記に出てくる「冬の梨」がこの「三吉」²⁴という季題となっている梨なのであり、一茶はこの梨を求めて善光寺までくまなく探し回っていたのである。有りそうでなかなか手に入らない、というのが一茶の作意の妙なのである。

父弥五兵衛は熱心な門徒で毎朝仏壇に向かうことを日課としていたほどであったので、一茶に遺産分割を約して念仏を唱えて没した。遺産分割については別項で述べたので省略するが、当時の法令と習慣に従って分割された。一茶は特に父に深い愛情を抱いていたので次のような句を残している。

寝すがたの蠅追ふもけふかぎり哉	一茶
生き残るわれにかゝるや草の露	〃
父ありて明ぼの見たし青田原	〃
ひとりなは我星ならん天の川	〃
手招きは人の父也秋の暮	
露しもや丘の雀もちちとよぶ	〃

『享和句帖』には完成期の作品に比べこのような父を懐かしんだり、孤独を嘆じたりする作品が多い。一茶はこの年より村に伝馬役金を納めていることから、この父の死の床で約束された遺産の分割は三者とも本心であったと思われる。『父の終焉日記』の末尾は次のように記されている。

父のいまそかりける時、我に妻むかへしてとどめよと人に云ひ、おのれにも戒められしが、ある人の中に、聞かぬふりに空耳したる人あり。ことに六欲兼備の輩、遺言にそふかは。はた顔あかめあふ、本意なければ又元の雲水と成りて、いかなる岩木の

²⁴ 晩三吉梨は昭和五十年頃、農林省で改良を加えられ、「王秋」と名づけられている。十一月末に収穫され四月の終わりまで保存できる。故に五月に食すことは十分可能となっている。早生の幸水は五月に初成りを食せるようになり、今では一年中食すことができるように改良されている。更に改良された品種に早生梨は「凜夏」があり、最も遅い晩生梨に、「王秋」と「秋月」を交配した「甘太」があり、これで一年中梨が食せるようになった。これらの改良は「農研機構・果樹研究所」で進められており、早生から晩生までは「幸水・豊水・新高・王秋・秋月」があったが、平成二十五年に改良された。超早生「凜夏」と超晩生「甘太」を加えると、一年中梨を食せることになる。暖地用、寒冷地用があり、日本全国で栽培が可能で、平成二十六年から苗木が販売される見込みである。一茶が梨を探し求めたのは事実のことである。

はざまにも身をひそめ、風をいとひ、雨をしのがんにもするすみの身ひとつ、何のは
ちかあるべき。しかあれど、云で止なんも又父の仰にそむく一略一いなや。返しなき
に、無下に里出せんも、亡父の心にそぶかかと、しめ野分るを談じあひけるに、父の
遺言守るとなれば、母屋の人のさしづに任せて、其日はやみぬ²⁵。

父の遺言を履行するという約束を取り付けた一茶は、九月になると再び江戸に戻った。
遺産折半はそのままにして、役両だけはきちんと納め権利を確保しておいたのである。こ
れから十三年後の文化十一年（一八一四）四月十一日母方の縁者常田「きく」と結婚をし
た。「きく」は信濃町赤川の常田久右衛門の娘で二十八歳、一茶五十二歳であった。一茶
が故郷柏原に実際に帰住した年齢は満五十歳で江戸奉公人の帰郷年齢でもあった。また幕
府は天明四年三月から寛政九年六月までに度々「旧里帰農令」を布達していた。特に松平
定信が老中首座となって取り組んだのがこの「人返し令」の政策であった。都市に集中し
た人口を荒廃する一方の農村に還流させようとする農村政策のひとつで、飢餓や貧困に対
する恒常的な施策として、大名には「囲籾」を命じ、江戸在住の出郷者には「七歩積金」
を命じ帰郷し易くした。各大名には「社倉」を設置させ、年貢を減免し人返しを行い農村
の復興を目論んだ。さらに特権商人の市場独占を規制し、札差に対しては棄令を実施して
都市商人資本を抑圧する政策を実施した。これによって江戸奉公に出ていた出稼奉公者は
五十歳前後で帰郷した。一茶はこうした政策もあって、切りの良い年齢で故郷に戻ったの
であり、実に逞しい計画性を持った人物であったといえよう。一茶は、きくとの間に三男
一女をもうけるが、「我菊やなりにもふりにもかまはずに」と一茶が詠んだように、よく働
いてくれた。しかし、江戸時代の幼児の死亡率は高く、一茶が待ち望んで得た三男一女の
愛児たちは相次いで他界してしまった。なかでも二男石太郎は、母の背中で窒息するとい
ういたましい亡くなり方であった。三男金三郎は、きくの産後の肥立ちが思わしくなかつ
たので、他家に託したが、その託し先で乳のかわりに白湯を飲まされていたことから栄養
失調で亡くなってしまった。一茶は石太郎のために「石太郎を悼む」を、金三郎のために
「金三郎を憐れむ」という俳文をそれぞれ執筆して自らを慰めている。

一茶は早く母を失い、継母の虐待で苦しんだ末江戸に奉公し、長い漂泊生活を送りなが
ら温かい家庭生活の実現を夢に見ていた。そうした一茶が五十四歳の時にもうけた長男千
太郎は僅か生後一カ月で早逝してしまった。この後にも得たつかの間の幸せを、文政二年

²⁵ 『一茶全集』五、八十五～八十六頁。

(一八一九)に一年間の日記体句文集『おらが春』にまとめている。長女「さと」を愛育する「きく」の姿を精細に描いた「添乳」の一文には、その妻や娘に向ける一茶の温かいまなざしが描かれ、家庭や家族のあり方の本来の姿を髣髴とさせるものがある。近世を代表する「家族愛」を描いた名文と称することができよう。しかし、その愛しい女兒も一年余りの後に痘瘡によって奪われてしまうのである。「添乳」の後に収められている「露の世」の一文は、やはり涙なくしては読めない文章である。『おらが春』はわずか二歳で世を去ったこの愛しい子に対する追悼集であるが、一茶の存命中には刊行にいたらず、没後二十五年を経た嘉永五年（一八五二）にようやく公にされている。文学作品としても高い評価を得、その板木は確認できるだけでもおよそ五度にわたって出版され続け、関東大震災によって絶版に到っている。

繰り返し述べるように、『おらが春』は、自らの境涯を自伝的に構成した一書で、当時の一般的撰集や随筆集と比べて著しく個性的で一茶の独創性が顕著である。序文で「歳旦の心境」を記した後に自己の俳諧師として体験したことや感想をまず記している。その後に、「継子としての境涯」と「吾子への愛情」を描き、結びはまた「体験と感想」を書き、跋文として「歳暮の心境」を描いて一年の記録としている。極めて意図性が高く一茶の文筆の高みを示している。特に愛娘さととの愛と死は中心的なテーマで、本書のクライマックスをなしている。継子としてのおのれの境涯と満一歳余で他界してしまった長女さとへの愛、その不幸がもたらした「あなたまかせ」のあるがままの生を受け入れようとする真宗的境涯が描かれている。特に「妙専寺のたか丸」の死を先に描いた後に「添乳」の一文が置かれているのは絶妙でもある。

こぞの夏、竹植うる日のころうき節茂きうき世に生まれたる娘、おろかにしてものにさとかれとて、名をさととよぶ。ことし誕生日祝ふころほひより、てうちてうちあはゝ、天窓てんてん、かぶりかぶりふりながら、おなじ子どもの風車といふものをもてるを、しきりに欲しがりてむづかれば、とみにとらせけるを、やがてむしやむしやしやぶつて捨て、露程の執念なく、直に外のものに心うつりて、そこらにある茶碗を打破りつゝ、それもただちに倦て、障子のうす紙をめりめりむしるに、「よくしたよくした」とほむれば誠と思ひ、きやらきやらと笑ひてひたむしりにむしりぬ。心のうち一点の塵もなく、名月のきらきらしく清く見ゆれば、迹なき俳優見るやうに、なかなか心の皺を伸ばしぬ。又人の来りて、「わんわんはどこに」といへば犬に指さし、「か

あかあは」と問へば鳥にゆびさすさま、口もとより爪先迄愛嬌こぼれてあひらしく、いはば春の初草に胡蝶の戯るるよりもやさしくなん覚え侍る。此おさな仏の守りし給ひけん、追夜の夕暮れに持仏堂に蠟燭てらして鑰打ちならせば、どこに居てもいそがはしく這よりて、さわらびのちいさき手を合はせて「なんむなんむ」と唱ふ声、しほらしく、ゆかしく、なつかしく殊勝也。それにつけてもおのれかしらにはいくらの霜をいただき額にはしはしはの波の寄せ来る齡にて、弥陀たのむすべもしらでうかうか月日を費やすこそ二ツ子の手前もはつかしけれと思ふも其坐を退けば、はや地獄の種を蒔て、膝にむらがる蠅をにくみ、膳を巡る蚊をそしりつゝ、あまつさへ仏のいましめし酒を呑む。折から門に月さしていと涼しく、外に童の踊の声のすれば、ただちに小椀投げ捨て片みざりにみざり出て、声をあげ手真似してうれしげなるをみるにつけつつ、いつしかかれをもふり分髪のとけになして、をどらせて見たらんには、廿五菩薩の管絃よりもはるかまさりて興あるわざならんと、我身につもる老を忘れてうさをなんはらしける。

かく日すがらをじかの角のつかの間も手足をうこかさずといふ事なくて、遊びつかれる物から朝は日のたける迄眠る。其うちばかり母は正月と思ひ、飯焚、そこら掃かたづけて団扇ひらひら汗をさまして、閨に泣声のするを目の覚る相図とさだめ、手かしこく抱き起こして、うらの畠に尿やりて、乳房あてがへばすはすは吸ひながら、むな板のあたりを打たたきて、にこにこ笑ひ顔を作るに、母は長々胎内のくるしびも日々の襁褓の穢らしきもほとほと忘れて、衣のうらの玉を得たるやうになでさすりて一入よろこぶありさまなりけらし。

蚤の迹かぞへながらに添乳哉

一茶²⁶

『おらが春』の成立時は、『七番日記』によれば文政元年に計画されていることが矢羽勝幸氏の研究で明らかであるが、翌二年にいたって長女の死に遭遇、やむなく変更して現行の形に収まったものと思われる。改編は、長女急逝の嘆きから立ち直った文政二年（一八一九）九月頃から着手されたもののようである。本文は、私小説風の文体で長女さとに寄せる愛は誠に無邪気なもので、目に入れても痛くない我が子の可愛く愛しい姿を描いて白眉である。近世文学の作品にはほとんど見られない、わが子への愛情の表現である。さとの死は他の三人の愛児の死に比して女兒であり、また二歳近くまで育った可愛い盛りの

²⁶ 『一茶全集』六、一四七～一四九頁。

時期の死であったので、一茶の悲しみはいかばかりであったろう。愛児の死は一茶にとって書かなくてはならないテーマでもあったのである。

第三節 無常の実感と法杖

一茶は、文化十一年（一八一四）四月に母方宮沢家の縁戚であった信濃町赤川の常田きくと結婚すると、その二年後の四月に長男千太郎が誕生したが、僅か一カ月で死亡してしまった。文政元年（一八一八）五月に長女さとが生まれたが、翌文政二年六月にさとも早逝してしまう。文政三年（一八二〇）十月十六日に一茶は、豊野町浅野の雪道で転倒しそのまま中風にかかってしまう。重病にならなかったのは幸いだったが、以後体力は落ちてしまった上に不幸も連続する。文政四年一月に石太郎が窒息死すると、四月には妻のきくが痛風になり病臥するところとなる。文政六年五月にきくは病没する。その間赤渋村の富右衛門に金三郎を預けるが、十二月に三男の金三郎も死んでしまった。一茶は文政六年には葬儀を二度も出し、次々と不幸に見舞われることになったのである。文政六年五月に一茶は、「金三郎を憐れむ」という俳文を書いて赤渋村富右衛門を骨の髄まで憎んだり、恨んだりする文章を書いた。これを読んだ荻原井泉水は「愛するものは何処までも愛するが、憎む者はどこまでも憎む」という気質を持っていると記している。「腹は背にひつついて其間うす板のごとく、骨はによきによき高く角石山に薄霜降りたるに似たり。声はかすれ蚊の鳴に等しく、手足は細り鉄釘のやうに、目は瞳なく明きたる儘にて、瞬ちから抜けて半眼にして空をにらみ、軽きこと空蠅の風に飛び、水を放たれたる魚の片息つくばかり也」²⁷と、金三郎の衰弱を書きつらねている。富右衛門家の墓がある洞仙寺の住職に富右衛門のことを聞いた千曲山人によると、富右衛門はそれほどの悪人ではなく、乳母を斡旋した赤渋の女が余り乳が出ないことを一茶も知っていたのではないかともいい、富右衛門もそれを知っていて親切心で預けを勧めたのだろうと書いている。洞仙寺の小山住職によると、富右衛門家の墓には「金三郎の墓」なる供養塔が伝承されており、富右衛門が人知れずこっそりと無名の供養塔を建立し菩提を弔っていたのでは、と話している²⁸。一茶はこのように富右衛門の風貌を記した後にさらに痛烈な筆誅を加えている。千曲山人の著書によれ

²⁷ 『一茶全集』五、一四三頁。

²⁸ 千曲山人『一茶に惹かれて』（文芸書房、二〇〇四年）、一五四頁。

ば、富右衛門は朴訥山人の荒男であったようである

いかに人面獣心富右衛門ならばとて、人の目をかすめて盗む衣食などとはことかはりて、生あるものをかくもむごく、なさけなくつれなくふるまひしもの哉と、知るも知らぬも皆々泪ほろほろなでさすりぬ。あやつ金をむさぼりてなせるや、恨みをふくみていたせるや、風上に置くもおそろしくなん。はつかあまりの乳断、いかばかりくるしからんと、小児の心を思ひはかりて、父恋し乳恋しとやみの虫の泣き明かしけんなきくらしけん²⁹。

一茶が金三郎の痩せ衰えた姿を見て筆誅を加えた文章の一部である。この文章は別稿があり、それが初案草稿とされている³⁰。この別稿と成稿との違いは、「赤洪の女は乳さらさら出ぬからに、小児日々痩せる。とくとり戻してよ」³¹という人の言葉が入っている。これがあるということは、一茶がしばしば金三郎の衰弱を人の言づてを耳にしていたということの意味する。一茶は耳にしながら、不便に思いながらこころならず打捨てておいたのである。これを成案をなす推敲の過程で全て削ってしまったのである。つまり乳母の不正を知りつつ放任しておいた一茶側の失態を成稿では全て削っていることは、乳母の悪意を際立たせることを目的とし、悪役に仕立てることを目論んだのである。この乳母は二子を産んだが生後まもなく二人を亡くしてしまった。富右衛門は三カ月も前に子無くした娘の乳が細くなっていたことを知らなかったとも考えられるのである³²。一茶がいかに家族を大事にし、子どもをもうけることに腐心したかを物語っている。

一茶の家庭や家族のことを見ていくと、これから少子化社会を迎える日本にとって、子どもはどういつくしむべきかという姿が良く見えてくるのである。引用ばかりで恐縮であるが、一茶が子ども達をどのように見ていたかを紹介しておこう。文政五年（一八二二）から同八年までの自筆句日記に『文政句帖』というものがある。文政五年から八年まではいままで述べたように、前妻きくや三男金三郎を失い、自らも中風の再発など多くの不幸が一茶を見舞った時期に当たっている。しかし作句の数は盛時と変わらず三千五百余の句

²⁹ 同上、一四四頁。

³⁰ 「金三郎を憐む別稿」と題して文政六年五月の説明が付いている（同上、一四六頁）。

³¹ 同上、一四七頁。

³² 筆者が何年まえに一茶の墓を訪れた折りに、当時の洞仙寺の住職は「純真無垢で世話好きな親切があだになったのであろう」と語った。

を収めている。一茶の強靱な精神を見ることができる。

田中河原といふところは、田のくろ、あるいは石の下よりめでたき湯のむくむくと出て、いたづらに流れちりぬ。あはれ此ものの常の所に俄に出たらんには、地獄にて仏にあふよりもうれしからましを、此里人は湯ともいはざりけり。……

貧しきもののこをやしなふは、湯の湧く所にしくはあらじ。夜のほのぼの明けて、鳥の声と等しくガバと起きて十ばかりなるを頭として、兄は弟を負ひ、姉は妹を抱きツツ、閨を出て、呼はりあひて、それに引きつづきて、其から走り走りて湯桁に飛び入りツツ今玄冬素雪のころ丸裸にて狂ひ育ちに育つものから、おのづから病なく、ふとくたくましく見ゆ。さるからその親々、衣着せる思ひも薄かるべし。

子どもらが雪喰ひながら湯治かな 一茶³³

これは「田中河原の記」という一文であるが、子どもたちが雪の中丸裸になって田の中、川のなかで遊んでいる姿を描いている。無論一茶の故郷柏原から少し離れたところには湯田中温泉という有名な温泉郷もあるので、柏原の村裾を流れる田中川にも湯が自然と湧いていたのであろう。子どもらの薄着は真実は家が貧しいからなのであるが、一茶は温泉の恩恵として描いている。雪が降る中湧いては流れている川の流れからは温泉と同じような湯けぶりが白々と盛んに流れていたことであろう。雪をほおぼりながら真冬の川のなかで遊び興じる子ども達の姿が目に見えようである。

こうした子ども達の喜び遊ぶ姿を見る度に一茶は無常を感じ、この世の不条理を嫌という程味わったに違いない。一茶晩年の忠実な弟子であった文虎の『一茶翁終焉記』には、「長明が幽居のありさまも此の地に思ひあはさる」と述べている³⁴。切実な嗟嘆と無常の自覚は、やがて「身ひとつ」の清浄な死を願う生死大事の精神と結合する。貧と不幸と信仰が相寄ってひとつになったところに無常観は生まれる。これをあるがままに客観視すると、自照性を深め中世文芸の世界となる。その自覚を得た時にこそ一連の仏教説話集に登場する極貧と行道の乞食檻樓の捨聖達と同行できることとなる。柏原帰住と俳諧寺号の使用、それに弟子から送られた一本の梅の木から得た「梅木法杖」を手に入れば、そこに長明風の発心者の隠栖の風趣を読み取ることはあながち思いすごしではないであろう。一茶

³³ 『一茶全集』五、一四一頁。

³⁴ 『一茶全集』別巻、五十四頁。

はすぐれた観察者であり批評家でもある。そこに芭蕉を超えた鎌倉期の仏教的説話の風体を見出すことも可能である。

寛政三年（一七九一）春、一茶は十四歳で家を出て十四年ぶりの帰郷に発った。しかしこの自筆稿本『寛政三年紀行』の筆蹟はこの時期のものではなく、文化三年（一八〇六）から五年にかけて改削清書したものとされている。多くの中世の先行文学の影響が顕著である。四月十二日には、一茶は武蔵国熊谷の蓮生寺に参詣し熊谷次郎直実と平敦盛の墓を拝し、「陽炎やむつまじげなるつかと塚」と詠み、一ノ谷の合戦を回想し、無常観のにじみ出た文章を綴っている。熊谷を後にした一茶は或る農家に泊まったところ、一茶の記述によれば、不思議な出来事に遭遇した。

熊谷直実は、一ノ谷の合戦で先陣の功名を立てた。討ち取った敦盛が、わが子の小次郎と同年であったから菩提心を起こし、浄土真宗に帰依し蓮生坊となった。これは『平家物語』の話である³⁵。『吾妻鏡』では所領の熊谷から西国への配置換えの不満から出家したとある。一茶はこのことを知っていて一夜の不思議を書いた。『徒然草』第二百二十六段には、僧慈円が扶持したという「信濃前司行長」に関する記事がある。「この行長入道、平家物語を作りて、生仏といひける盲目に教へて語らせけり。さて山門のことをことにゆゆしく書けり」とある。盲僧による「語り」は、『平家物語』以前よりあって寺社縁起の語りなどが存在していた。しかし、『平家物語』が、このような長編物語が「信濃人」によって成立したという点に意味がある。不思議な一夜を送った一茶は翌日妙義山麓の知人宅に二泊している。この妙義山に至る段に自己を内省した一文がある。

反故袋を首にかけ、手に珠数を提たれば、いさゝか世をいとふ容に似たれど、専名利の地獄に入り、貧欲の心はいよいよ盛に、仏を念ずる思ひや漸々に怠る³⁶。

一茶が自己の真の姿を隠さず文章にしているのは好感がもてる。熊谷桜という桜の品種がある。花は一重で紅色に咲くが、散り際には白色に変ずる。熊谷直実の母衣に似通う熊谷草という植物もある。またこの地には放浪僧も一茶も被った熊谷笠、熊谷碗などもある。一方敦盛ゆかりのものでは、一名「延名小袋」と呼ばれる敦盛草があり、敦盛扇、敦盛蓑

³⁵ 一茶はこれについて、「蓮生寺に参る。是は次郎直実発心して造りし寺とかや。蓮生敦盛並びて墓の立てるも又あわれなり。それとも安元の春は一門の盛りなること朝日ののぼるがのごとし」と味わいのある文章を残している（『一茶全集』五、十七頁）。

³⁶ 『一茶全集』五、二十頁。

麦など、いずれも一茶が採集した『方言雑集』にある。

関山和夫氏は、『平家物語』も「説教」のひとつで、「説教」は仏教の伝来とともに広範に行われ、便利な布教の手段として大いに活用され、現今の「落語」も説教という話芸から誕生したといっている³⁷。「説教」は「説経」でもあり、説法、説戒、談義、法談、唱導、讃歎、勧化、講釈、講談、化導、法座、法話、感化、御座など様々な異称をもって呼ばれた。一茶は立派な「梅本法杖」を持って「御座」に着いた。「説経師」も講師、導師、論師、講者、説教者、唱導師、布教師、などと呼称され大別して二つの系列があった。一つは經典の講釈、教義の解明、もう一つは芸能性を帯びた「説教」で、我が国の歴史を通じて一般的に知られているのが、「説教」と「説経」である。これらに携わる人は説経師と称せられ、俳諧師も「説経」と講化を行った。一茶も句座の開始や終わりに臨んで「説経」を行ったに違いない。数珠を手に掛け篠懸を着し、十徳と法衣、頭陀袋と法杖を持てば立派な説経師であった。

関山氏は『説教と話芸』のなかで、天台宗の澄憲・聖覚父子の説教を「安居院流」と言い、定円の説教を「三井寺派」として、二つは並立していたが、後に聖覚は官僧から離脱して遁世僧となり、浄土宗の教学で「説経念仏義の祖」と讃えられたとしている³⁸。安居院流説教は、近世になると三井寺派を吸収し、浄土真宗で大発展を遂げ「節談説教」というすぐれた口承芸を作りあげた。節談説教という呼称は浄土宗だけのもので、仏典の唱導は演説体による「節付け説経」と言い、節談説教は浄土宗独自のもので他宗には存在せず、真似をしてはならぬものとされていた。他用すれば真宗教義に触れ、宗門門徒だけに許され、秘伝・口伝の形で子々孫々に師資相承されたのであった。

一茶の「七番日記」のなかには文化十三年六月から閏八月一日までの一ヶ月には、ほぼ三日置きに妻との交合記録が記されている。五月十一日には生後一ヶ月を経た長男の千太郎を亡くした後でもあった。一茶は何故にこのような交合日記を残したのであろうか。これについての歴然とした解釈はない。また何故に一茶は各地で奇怪な出来事を採集し、世俗の変奇を書き記し、骨肉の争いを記し、我が子の死や、父の看病の記録、継母との確執まで記し、果ては交合日記、薬草採取まで克明に記録したのであろう。三十六年間の放浪、柏原帰住後の逸早い一茶社中の形成についてもこれまで謎とされて来たが、一茶も宗門門徒であり、熱心な信者であった。一茶の机辺には俳諧関係の文芸書の他に、中世の説話集、

³⁷ 関山和夫「舌耕芸と落語誕生」、『国文学解釈と鑑賞』八六三号（至文堂、二〇〇三年）、十三頁。

³⁸ 関山和夫『説教と話芸』（青蛙房、一九六四年）、一九七～一九九頁。

随筆、紀行、仏書など多くの香書が積まれていたことであろう。もし一茶が宗門の「節談説教」³⁹の説経話芸を心得ていたとしたら、三十六年間の放浪生活に於ても一宿一飯に困ることはなかったであろう。

運座はこびの合間や、句会終了時に、法話を講じ、続いて旅の途中で得た奇怪な出来事を、涙をさそう物語を、節付け談義で語ったならば、僧形姿の一茶の話をだれもが有難く聴聞したに違いない。筆禍などではなく、唱導も宗旨と考えたとすれば、一茶は実行したに違いない。芥川が「慊焉たり」と評した交合記録も、真偽は別として、書かねばならなかったのである。また書き記し語ることで門徒の人々に迎えられ、名説経の法者として故郷の人に迎え入れられたのであった。「梅木の法杖」を持ち、宗匠頭巾に十徳姿で熊谷笠をかぶり、巡回指導に向かえば、江戸帰りの俳諧宗匠としてもてはやされ、たちまち強力な社中が北信濃に形成されていったのであった。柏原は近世初期の開宿以来、浄土宗に帰依する人が多く仏縁に篤い土地柄であり、一茶没時は柏原は全村民の九割が門徒に属していたといわれている。習俗仏教の強烈な感化を受けて人となった一茶は、それ故に「俳諧寺」を名乗り、前の文虎の引用に見えるように、まるで僧籍にあるような生活を心掛けたのであった。

³⁹ 文化十四年十八日から二十四日までの七日間に渡って毎夜、志道軒の軍談を聞きに行っている。志道軒は江戸中期の講釈師の名手と言われ、延宝十一年（一六八三）に京都で生まれ、寺に預けられている折りに、節談説経を身につけ、早くから名を知られていたが、江戸に下って浅草寺の境内で墓蛙油売りの説経から軍談を思いつき、浅草寺境内で軍談を講釈するようになり、江戸の名物となった。軍記物の説教から軍談（現代の講談）を講ずるようになった。深井栄山はその後、明和二年（一七六五）に没している。一茶が聞きに行ったのは、この流れをくむ講釈師の軍談を聞くためであった。また二十七日から二十九日の三日間は流山で夜の念仏踊りを見て、「鶏鳴」と記しているので、夜を徹して念仏踊りに興じたのであろう。このような記録からも、一茶が人を引きつける術を身につけようと努力していた様子をうかがわせるのである。

第七章 一茶の自己俳諧の確立と宗教性

第一節 一茶主宰の通信講座

小林一茶は、文政二年（一八一九）の日記、正月七日の条に「江戸本所割下水・溝口十太夫素丸門人・一茶」と記している。この時一茶は、すでに故郷柏原に定住し、五十七歳で『おらが春』を完成させた時期である。このような記録から考えると、一茶は晩年においても素丸門を称していたということになる。一茶は寛政元年（一七八九）に奥羽行脚を終え、続いて六年間に及ぶ西国行脚の旅に出ている。この頃の一茶は一所不住の貧寒の行脚俳人というイメージが強い。三十九歳の享和元年（一八〇一）に一度故郷柏原に帰る。三月帰郷、四月に父発病、五月二十一日の父の死を看取った後に再び江戸に戻った。寛政三年（一七九一）に一度帰郷していたが、出郷して以来二十四年ぶりの帰郷であった。この三年後の文化元年（一八〇四）、一茶は四十二歳で隅田川沿いの相生町五丁目の借家に移った。恐らく一茶は、この時を以てはじめて一戸持ちの世帯主となったことであろう。

一茶が俳人として詩囊を養った江戸俳壇は、自派の葛飾蕉門、曾遊¹の上方俳壇、そして江戸俳壇の三派が鼎立していた。そうした状況のなかで、一茶が属した葛飾蕉門派も二派に分裂していた。公職や家業に従事しながら四家蕉門（其角系・雪門系・杉風系・太白堂系）と同盟関係にあったグループと、黒露²や竹阿のように諸派と交わり、長期にわたって諸国を行脚した俳僧グループに分かれていた。竹阿に師事した一茶はそのなかでも一門にあって異色の存在であった。貧寒行脚俳人としての在り方も、最早動かし難いものとなっていた。そうした一茶の広範な俳壇活動は、葛飾派の公職にあった一部の幹部俳人には無軌道と映り、埒外の人物としての烙印を押されていたようである。そうしたなかで一茶は独自の生き方を模索し活路を開くしかなかった。

一茶は食を求めて市中や房総地方を渡り歩きながらも、素丸門を主張し地方行脚を続けた。一方この頃の有様を記した『文化句帖』には、「国に行かんとして心すすまず。本郷の

¹ 元禄十六年（一七〇三）～享保十六年（一七三一）。本名は鳥井裕誓といい、越後国出雲崎の敦賀屋五代当主。出雲崎での芭蕉俳文「銀河之序」を記念して『俳諧あまの河』を編む。京都にて客死する。別号は青白楼とも楚由とも名乗った俳諧作者。

² 貞享三年（一六八六）～明和四年（一七六七）。本名は山口守常。故あって享保中期に江戸を去り、諸国を流浪した。享保十五年に駿河国宇津木谷に「雁山の墓」を建立した。黒露と改号する前は雁山を名乗り、別号に「うつ野山坊芹」、草斎、稲中庵を名乗った。生涯に二十四冊の編著書を上梓し、素堂と親交を持った。

先より王子かぎ屋に休む」³と書かれていたり、あるいは「人心は山川より陰にして天よりも知り難し。天は春夏秋冬旦暮に期する有り」⁴と、無為漂泊の嗟嘆と貧懷望郷の思いとが綴られている。一茶を持ちながらも江戸市中では生活が成り立たず、心中に長明の無常を期し、芭蕉の隠逸を求め俳諧行脚を实践した一茶であったが、遂に夏目成美の随斎会、鈴木道彦の十時庵会、巢兆会、など他門との交流に頼らざるを得なくなっていたのであった。一茶が故郷柏原に帰住を願わざるを得なかった背景には、同門のなかにこうした事情があったからであろう。九世馬場錦江⁵が嘉永年中に作成したと伝わる『葛飾蕉門分脈系図』には、「小林一茶、文化年中一派の規矩を過つによつて、白芹翁⁶永く風交を絶す」と記されている。葛飾蕉門中で武門を出自とする俳人や、保守閉鎖的な一派から見れば、身軽な漂泊者一茶は一門になじまない異端者と見られたのかも知れない。

一茶は、この頃から、享和元年（一八〇一）に弟仙六、継母との間に取り決めた遺産相続についての実行を迫るべくしばしば故郷に帰るようになっていく。江戸俳壇において生計を立てる上で、何らかの不都合が起こっていたかもしれない。文化五年（一八〇八）、一茶は遺産相続に関わる書類を村役人に提出するべく長期の帰郷をした。江戸の豪商夏目成美は、故郷に戻った一茶に一通の書状を送っている（文化五年八月二十六日）。

とかく、とかく、なつかしく在候、例の貧俳諧、貧乏人の友もなくて困り入り申候。
勿々早く立戻り給はんをまつのみ。先日谷中の一瓢上人に招かれ、一泊泊まりて俳諧
いたし候。其夜探題に、

花すゝき貧乏人をまねくなり

とくちずさみ申候は、闇に先生の事をいひ出したるなり。貴句総じて候也。むつかし
やなと一々奇絶、今さらいふに及ばず⁷。

³ 『一茶全集』二、四一〇頁。

⁴ 『一茶全集』二、二六五頁。

⁵ 享和元年（一八〇一）～万延元年（一八六〇）。本名は馬場小太郎源正統。別号は紅白庵。古賀同庵の門に入り経義書資料文章を学び、召されて小十人組の番士に列する。弘化元年（一八四四）に家督を相続し、二百二十八俵扶持の旗本となる。葛飾派八世の嫡男にして俳諧を父に学び天保十四年（一八四三）其日庵九世を継いだ。

⁶ 宝暦六年（一七五六）～文化十四年（一八一七）。別号を素水、桂洲を称し江戸日本橋馬喰町で宿屋を営む。安永六年（一七七七）に素丸に入門する。葛飾派宗家其日庵五世となったが、一時期、一門の組織固めのため一茶等と不和の関係となった。

⁷ 『一茶全集』六、三三七頁。

一茶の俳風を夏目成美が「貧乏人の貧俳諧」といっているように、貧趣は一茶の俳諧シンボルとなっていたようである。金令舎道彦は『蔦本集』（文化十年）に「一茶が清貧を尊む。塵とては梅の古葉を庵の雪」⁸と記している点から考えると、それを「清貧」と見られていたような節もある。しかし四十六歳にして妻子を持たず、一家を持たず、田舎わたり、すなわち地方廻りの俳諧指導を続けていた一茶は、真実貧しかったのであろう。この時期の一茶の句を記してみよう。

秋風や行く先々は人の家	(享和三年)
雨だれの有明月やかへる雁	(享和三年)
秋の風乞食は我を見くらぶる	(文化元年)
身一つや死なば簾の青いうち	(文化二年)
又ことし婆娑寒ぎぞよ草の家	(文化三年)
節季候のみむきもせぬや角田川	(文化三年)
夕燕我には翌日のあてはなき	(文化四年)
鋏の罰思ひつく夜や雁の鳴く	(文化四年)
名月の御覧の通り屑家哉	(文化五年)
古郷の袖引く雪が降りにけり	(文化六年)

こうした句は、風趣というよりも、生活に窮乏している貧者のつぶやきに聞こえる。「乞食に見くらべられる様」は、滑稽や世相のうがちという俳諧発句独特の世界を超えて、生活者の嘆きがあふれている。そうした感情は、一句に限らず俳文にも顕著に見出すことができる。享和三年の句日記には、「江戸本所五ツ目大島愛宕山別当一茶園雲外」⁹という署名が記されている。このころ一茶はすでに通信による句会を持っている。今でいえば「月刊一茶」とでもいえそうな刊行物であり、現在、その刷り物は八種類十一枚が残っている。その裏には、句稿など一茶の雑記が記されているところから、雑記帳として綴じられたものと思われる¹⁰。題字は「一茶園月並」と書かれているので、毎月一茶を中心にした人々が作品を提出し、集まった作品を刷り物にして各地の句友や弟子に返送していたものであ

⁸『蔦本集』、古典俳文学大系『化政天保俳諧集』（集英社、一九七一年）、二二〇頁。

⁹『一茶全集』二、九十一頁。

¹⁰『一茶全集』六、四二三頁。

る。通信句会ということになり、実に優れたアイディアである。「一茶園月並」は当時の一茶社中、下総・上総・安房地方に多く在住していた熱心な投稿者が参加している。その投稿者の宛先は、「文音所大門通和泉町京屋庄七方」となっているところから、ここに集められたのであろう。残されている資料からは、投稿者は固定的で毎月投稿していたことがわかる。こうした投稿句を添削し批評選評をする必要から、一茶は一戸を持たざるを得なくなったものと思われる。『文化句帖』には「本所五ツ目愛宕山別当」と記されている。おそらく隅田川沿いの愛宕山勝智院の什物などを仕舞い置く一室を間借りしたものであろう。

一茶の俳行脚は、下総の馬橋、流山、我孫子、布川、田川、上総、木更津、房総などがほぼ定まったコースであった。そうしたなかでも馬橋の大川斗圃、流山の秋元双樹、布川の古田月船、富津の織本花嬌¹¹などが一茶を温かく迎えてくれた。しかし、葛飾派の地盤である江戸の江東地区、武蔵東部、武蔵葛飾、上総、常陸、上野、下野の巡廻指導は行っていない。この期の一茶の句にはそうした人の情に頼る心中と、乞食放浪の自嘲的気分がただよっている作品が多い。

一草や必ず我に風の吹く (文化三(一八〇六)年七月十三日)

柳原にかかれば、豊島町とやらんに出火ありしとて、人々かへる。僅か咫尺の中にもかかる変はあるなれ。彼法師が明るを待て十寸穂のすすき問ひに行けるも、ことわりなる哉といよいよそぐ。御徒町を通る。爰は三月四日の火にかかりていまだむなしき地のみ多く、草花の所得見にひらく。

薺の下谷せましと咲きにけり

朝貌の上にもあるやはやり花

根岸

山吹のさし出がほして垣根哉

忍ずの池

畑へものさばり出たり蓮の花

からさけに喰さかれたる紙衣哉

藪竹の曲がった形に秋は来ぬ¹²

¹¹ 没年は文化七年(一八一〇)。本名は織本園。上総国富津村の名主の妻。夫の砂明とともに蓼太に師事する。一茶との交流も深く、編著もあり、紀行『すみれの袖』がある。

¹² 『一茶全集』二、三五八頁。

一茶が正式に二六庵という葛飾派公認の庵主に就任し、宗匠としての活動を始めたのは寛政十一年（一七九九）頃からで、文化元年、文化二年には画期的な通信句会「一茶園月並」を開催し、一般の俳諧師同様の宗匠活動を行っていた。今で言えば「インターネット句会」とか「eラーニング講座」ともいうべき先端を行く俳諧活動であったが、それも僅か二年程度でやめてしまった。何故やめたのかの決定的な資料は伝わらないが、投句者の減少とか、月並そのものに対する一茶自身の深い懐疑心があったのではなかろうか。あるいは講座受講者が、一茶との何らかのつながりをもとめていたのであろう。つまり、一茶社中の構築はここから始まったものと考えられる。年代でいえば、文化初年頃からになるが、一茶は葛飾派を離れて自派を作る意欲を固めたいたということになる。

宗匠になるということは一結社を統率指導することで、作句の実力だけでなく結社をまとめる力が必要であり、集団を運営する資金繰りや政治力というものも要求される。芭蕉が深川に退隠したり、蕪村が絵に興じたりしたのも、文学と相容れないこの世俗的な政治力に対する拒否感やわずらわしさが心の多くを占めていたからであろう。一茶もかつては夢にまで見た宗匠の地位であったが、月並を主宰して種々なる問題に遭遇し、業俳のむずかしさと気苦労を嫌という程味わったに違いない。そんなことから一茶は江戸本所五ツ目大島町を勿々に立ち去ってしまったのである。僅か二年の本所での生活であったが、ここではやはりいくつかの佳句を残している。

淡雪や人で埋めし江戸の町	(寛政三年、一七九一)
外は雪内は煤ふる栖かな	(寛政四年、一七九二)
それがしも雪を待つ夜や欠土鍋	(文化元年、一八〇四)
はつ雪や竹の夕べを独寝て	(文化元年)
初雪や古郷見ゆる壁の穴	(文化元年)
内は煤ぼたりぼたりや夜の雪	(文政元年、一八一八)

一茶は、文化元年十月、本所五ツ目大島から同じ本所相生町五丁目に転居をしており、これらの句はその直後の作品である。新居を得て心を弾ませているような作である。この家は一茶の江戸住居のうち最も整っていた家らしく、来客も頻繁にあって、庭には竹などが植えられていた。風趣ある句も見られ、「雪を待つ」には、一茶の心の余裕が感じられる。

「俳諧師」は俳句を教え、他人の作品に優劣の判定を下し、生計を立てる者であるから、判者とか点者という別称も持っていた。一茶も葛飾蕉門の流れを汲む蕉風俳諧師である。江戸ではその他の門流もあり、貞門以来の点取り連歌を引き継いだゲーム感覚の点取り俳諧もあった。多くの業俳はそのようなものと心得て点者としての生計を立てていた。芭蕉もはじめは談林派の点者として名声を得たが、やがてその非をさと深川に隠棲した。一茶の心にも、「一茶園月並」を通して点者としての嫌気がさしはじめたらしい。ここでの暮らしを捨てて、また流寓の生活にいつしか戻ってしまったようである。

上野の麓に蝸牛のから家かりて、露の間の夢のむすび所とす。きのふあたり住倦たる人のなせるわざにや、垣の薜のそれなりにて枯て、その実はほろほろ落たり。いく人の涙をかけし果てとも思はれて、秋にかち増りて哀れなり。又間口二尺ばかりなる土をならして菜のやうなるもの蒔けるが、雪の片隅にほやほやと青みぬ。是必ず愛度春を迎へて、餅いはふべき旦の料ならんか。壁は七福即生の守り張重て盗人の輩を防ぎ、竈は大根注連といふものを引はへて回禄を逃れんとす。荒神松はいまだ野の色ながら、横ざまにこけたり。皆ただ行末いつ迄か往果んあらましそと見ゆるも、今は雲にや迹をくらましけん、山にや影をかくしけん。すべていつこか終の栖ならん。かくいふ我もしばしが程に、又人にかくいはれんことをおもふのみ。

身に添や前の主の寒さ迄

文化六年十二月十五日 一茶¹³

これによると、上野坂本町の蝸牛の殻のような小さな家に住むことになったが前の住人のことが思われる。この住人もしばらくは住み着く予定であったのだろうが、今では行き方知らず。かくいう私もしばし居るだけで、また前の住人と同じようにいわれるのだろう、と我が身の流寓のほどを示し、この地が朝顔と酸漿や菖蒲の産地であることをいいとどめている。江戸では菊の栽培や植木の栽培、特に近世後期には朝顔の栽培がさかんであった。文化から天保に到る時期で、一茶は「朝顔」の句を百六十句も詠んでいる。文化三年七月十三日「王子田楽見の記」には、御徒町を過ぎて王子まで来る間に焼け土と化した下谷御徒町の「牛火事」後のことを、朝顔を主にして記している。岡山鳥¹⁴は『江戸名所花暦』（文

¹³ 『一茶全集』別巻、二三四～二三五頁。

¹⁴ 文政十年（一八二七）に雑学書の『江戸名所花暦』を著す。生没年は不詳、江戸時代後期の戯作

政十年)で、この「牛火事」の直後にこの上野あたりから朝顔栽培が流行し、やがて文政期に入ると、下谷、浅草、深川方面へと波及していったと記している。

日記のように或月或日の行動を記し、それに句を添える句日記の『七番日記』は、この上野の仮住居が執筆されて間もない翌文化七年正月から書き始められている。横長綴の上段には、その日の天候、行動、知友の動静、見聞、観劇、神社仏閣の参詣、出火、収支、文通、風俗など生活万般にわたる事柄が簡潔に書きとめられ、下段には、日々の即時即興の詠出が列記されている。必ずしも上段の記事と下段の句とは一致しない。まれに長文の記事が上下にわたるものの、全体は見事に統一されている。形式的にはそれ以前の『享和句帖』『文化句帖』が、記事と句の記載が交互する一段式であったことに対して、『文化六年句日記』の過渡期を経て『七番日記』において二段式の様式に定着してゆく経緯を見ることができる。これは俳文における二段構成の様式の確立時と一致している。この時期に一茶の俳風も定まり、文化六年、文化七年にかけて文事全般における一茶固有の方法が確立したという見方もできる。

一茶は寛政二年(一七九〇)四月、二十八歳で正式に誓書を素丸に呈して葛飾蕉門の喟浜庵素丸の門人となった。葛飾蕉門の祖は山口素堂で素丸は葛飾派三世であった。素丸門に入門した一茶は、その年の夏から秋にかけて「奥の細道」の行脚に赴いた。八月には秋田の名勝象潟を訪れ、同地汐越の肝煎金又左衛門の家に宿って句を練り、この時の旅を『奥羽紀行』にまとめている。この時一茶は現在の福島県郡山の塩田茂兵衛為春を訪問している。蚕種販売を全国規模で展開していた茂兵衛は、天明四・五年(一七八五)に加舎白雄に入門して塩田冥々¹⁵と名乗って俳諧史にその名を残している。塩田九淵斎冥々の句業と人物とをまとめた書は、明治三十年(一八九七)八月に三森松江編として明倫講社から刊行されている。その『冥々集』に、次のような逸話が記述されている。

信州の一茶松嶋行脚の際、九淵斎を訪ひしが、そが衣服の浅ましければ冥々は居らずと家人のいひしより、青田まで行きしを、冥々聞きてよび戻せりと伝ふれどもまことは左にあらず。一茶青田までゆきて青田なるをしり、さては本宮は後になりしとて、

者。江戸の人で下級武士であったが浪人をして滝沢馬琴に入門、後には式亭三馬にも師事する。通称を島岡権六といった。

¹⁵ 寛保元年(一七四一)～文政七年(一八二四)。本名は塩田為春といい陸奥国の蚕種業者。天明年(一七八一)の中頃から加舎白雄に師事し、全国に蚕種を売り歩きながら俳人と親交を持った。矢羽勝幸、二村弘編著『俳人塩田冥々一人と作品』(象山社、二〇〇三年)に詳しい。

引き戻り来しにて数日の交はりいとあたたかなりしとぞ¹⁶。

一茶がいつ訪問したのかは確かではない。この後、冥々刊行の『粟蔞集』(享保元年、一八〇一)には、「思ひ入る月のはたして雨夜かな」などが収録され、また一茶門の村松春甫が文化七年に編んだ『董草』には「太閤の御耳かすれ杜鵑」が入集している¹⁷。一茶と冥々の交友はこの後も続いている。一茶という号は『寛政三年紀行』(一七九一)の冒頭において一所不住の境涯を述べた後に「しら波のよるべをしらず、立つ泡の消えやすきものから名を一茶坊といふ」¹⁸とその由来に触れ、「人と栖」のテーマから芭蕉泡沫の無常観に触れている。本書は後年の文化初期の成稿で『海道記』や山東京伝の『昔話稻妻表紙』、式亭三馬の『雷太郎強悪物語』¹⁹などの強い影響を受けており、芭蕉の俳文や紀行のなぞりも著しく見えている。文化六年(一八〇九)十二月十五日の執筆による「上野の仮住居」の一文はまさに俳文における一格を確立した作品と評価してよい代表作で、「上野の麓に蝸牛のから家かりて、露の間の夢のむすび所とす」²⁰は、いかにも芭蕉の『幻住庵記』(元禄三年、一六九〇)を意識しており、貧屋のさまを描写して外から内に転じ、前住者の「今は雪にや迹をくらましけん、山にや影をかくしけん。すべていつこか終の栖ならん」として前段をくくり、無常をかこちつつ末尾に「かくいふ我もしばしが程に、又人にかくいはれんことをおもふのみ」と自嘲的な感想を添える。「身に添や前の主の寒さ迄」という句²¹を点じているのは、一茶の俳文のなかでも白眉である。身ひとつの清浄を願う生死事大の精神生活が語られて、貧と信仰とが相寄って、一茶の生きがいや旺盛な生活欲となり、一般的にいわれている無常観とは異なった精神を形づくっている。これを芭蕉と比較してみると、明らかにその違いが分かる。

芭蕉の『幻住庵記』は、国分山中腹の神さびた八幡宮に近い幻住庵と、その所有者が門人曲翠の伯父、故幻住老人²²だったと書き出している文章を一茶は最終文においている。

¹⁶ 矢羽勝幸・二村博編著『俳人塩田冥々』(象山社、二〇〇三年)、一〇五頁から再引用。

¹⁷ 『一茶全集』六に収録されている。

¹⁸ 『一茶全集』五、十五頁。

¹⁹ 文化三年(一八〇六)刊行。式亭三馬作。安永五年(一七七六)生まれ。合本や滑稽本を中心に百数十点を発表した。

²⁰ 『一茶全集』別巻、二三四頁。

²¹ 同上、二三五頁。

²² 近江国国分山中腹に曲翠の伯父の本多八郎左衛門が住んでいた。芭蕉は元禄三年(一六九〇)にその旧庵を修理して提供され、「幻住庵」と名づけて在庵した。芭蕉没後はこの庵は同国の膳所の中庄に移され、更に上別保に移して俳席とされた。

次いで江戸深川隠棲以来十年の漂泊の境涯に及び、さらに出羽国象潟の遠路の旅に疲れ果てた末にここに安住の居を得た喜びが語られている。上野の山東叡や忍ばずの池を琵琶湖に見立てて、湖上の遠景、瀬田の景勝地などを取り巻く、周辺の山野の近景へと視点を絞り、中国の隠遁詩人に見る「睡癖山民となって」²³、自由無礙の境地で暮らす庵住生活の具体的描写に移り、近くの宮守の翁や農民らとの歓談、夜中に起こる我が心裏の妄念などを描いている。最後に「ある時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは仏籠祖室の扇に入らんとせしも」²⁴、風雅の道に憑かれて愚かれてついに「この一筋」につながってしまった半生を嘆息して終わっている。このように一茶は、芭蕉の『幻住庵記』を換骨奪胎したのである。

第二節 葛飾蕉門の中の一茶

小林一茶は、山口素堂を祖とする葛飾蕉門に入門して以来、その思考や行動は明らかに芭蕉を意識して行われるのであった。葛飾蕉門三世素丸は、五百石取りの幕府書院番であった。致仕して俳諧に専念し、芭蕉の血脈を継承し、天明四年（一七八四）に葛飾蕉門を称して江戸俳壇の一派閥の領袖として重きをなしていた。葛飾派に入門するや、一茶は「おくのほそ道」の行脚に赴いて以来旅を栖としてきた。『七番日記』には、「同年十一月十七日東都を出でて、同二十四日柏原に到る。丘右衛門と言ふ者の家に寄宿して越年す。安永六年旧里を出でてより、漂泊三十六年なり。日数一万五千九百六十日、千辛万苦、一日も心の楽しむことなく、知らずして終に白頭翁となる」²⁵と記したのも、芭蕉とは無縁ではない。

芭蕉が深川芭蕉庵に入ったのは三十七歳であった。糊口の資を門友の喜捨にゆだねた反俗貧寒の生活実践の中から、「芭蕉野分けして盥に雨を聞く夜かな」など「わび」の詩情を詠出して蕉風を樹立した。一茶は文化九年（一八一二）十二月江戸を引き払い、五十歳で故郷柏原に隠棲すべく帰郷し丘右衛門の借屋を借りて越年した。「是がまあつひの栖か雪五尺」と詠み、半年後には、「雪行け行け都のたはけ待おらん」と詠んでいる。日本の伝統的

²³ 古典俳文学大系『芭蕉集』、五四一頁。

²⁴ 同上。

²⁵ 『一茶全集』三、二十三頁。

な自然美を代表する「雪月花」の雪も、農民出自の一茶にとっては悪いものにすぎなかった。

一茶二十七歳から三十六歳までの十年間の句をあげてみる。

酔てから咄も八重の桜哉	(寛政元年)
象潟もけふは恨まず花の春	(寛政元年、一七八九)
もう一里翌を歩行ん夏の月	(寛政二年、一七九〇)
年の暮人に物やる蔵もがな	(寛政三年、一七九一)
朝寒や垣の茶旅の影法師	(寛政三年)
遠里や菜の花の上の裸蔵	(寛政六年、一七九四)
義仲寺へいそぎ候はつしぐれ	(寛政七年、一七九五)
旅笠を小さく見せる霞かな	(寛政八年、一七九六)
湖に鳥鳴はじめて夜寒かな	(寛政八年)
あの鐘の上野に似たり花の雲	(寛政十年、一七九八)
夜あらしの鹿の隣に旅寝哉	(寛政十年)
夕陰や駕の小脇の夏花持ち	(寛政十一年、一七九九)

いずれの句も客観的な自然詠出の句であって、清新な感性で捉えた、身近な日常調詠をしっかりとした風趣のなかに詠んでいる。伝統の正格を踏まえて的確簡潔に描写しており、「歌仙三十六句」の発句として独立した堅句となっており、脇句や平句などのように安易に移りやすいところはない。葛飾蕉門俳句の系統を踏まえて非のうちどころがない句である。こうした俳風は一茶晩年の句まで貫かれている。文政九年（一八二六）の一茶六十五歳には、「餅買ひに箱提灯や春の雨」や「時鳥笠雲もなし山家かな」などの句を残している。蕉風の古格を守った余裕のある正統派としての力量と風格を備えている。

それでは「一茶調」といわれるような素材に対して一茶自ら批評をし、感想を加え、教訓を述べ、自戒を込めた滑稽な句の特性はどのようにしてなされたのであろう。一茶調といわれる句は、対象把握の時点に於いて一茶の自己主張が原初的に機能し、句それ自体に一種の批評を内在させている。俳諧文学特有の素材とした季題においても、その伝統的文学性を著しく希薄にするか、または形式化して消失させてしまっている。句の姿を散文化し、口語化して随想性を濃厚にしている。素材を擬人化したり、情意的に見立てたり、説

教調、卑語、俗語、擬態語、擬音語、疊語、生活語、方言、諺などの手法をふんだんに盛り込み軽妙に詠まれている。一茶の対象への批評性と表現の口語性が、対象把握の際に分かちがたく機能している。特に内容の批評性と表現の口語性が相乗して一茶調と称される個性的な句を作り上げている。

元禄十二年（一六九九）、井原西鶴は、『西鶴名残の友』で、芭蕉に対して「武州の桃青は、我が宿を出て諸国を執行（略）世の中の人沙汰はかまふにあらず、只俳諧に思ひ入りて、心ざし深し」²⁶と称して、「わび」を求めて行脚した「俳魔詩人」というイメージで芭蕉をその作に取り込んで描いている。芭蕉は、俳諧の持つ通俗性を生かしながらも、知的な俳諧伝統の滑稽は、心中に圧殺してその上で叙情性を回復させている。俳諧の本意や現世的滑稽を薄めて、世捨人的な行脚によって中世的求道の世界を求め続けた。芭蕉は『笈の小文』宝永六年（一七〇九）によって「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、貫通するものは一つなり」²⁷と述べて中世芸道に密着し、無条件にこうした概念を受容し、自らの俳諧をこの系譜につなげようとした。

一茶の初号といわれている菊明は、『方丈記』や『発心集』を書き残した著者「菊太夫長明」の中三字を略したものといわれている。また「立つ泡の消えやすきものから名を一茶坊といふ」²⁸と、その由来に触れ、この一文をみても『方丈記』の冒頭の文に等しく、長明や利休の甚深な影響を受けている。一茶の遺稿類に記された抄記や書名には、中世文芸書の名がおびただしく見出せるのである。文化六年の「上野の仮住居」の一文は、芭蕉の『幻住庵記』や長明の『方丈記』の影響を多分に受けた俳文随筆といいえる。何よりも、一茶が芭蕉の生き方をなぞっていたことは、諸国俳諧行脚の修業と、仏教色や無常観にいろどられた生涯からも推察することができる。あるいは後に一茶調といわれる特異な俳調も、実は芭蕉の句に内蔵されていた滑稽や風刺と呼ばれる俳諧性を取り出し増幅させた手法ともいえるのである。葛飾派の総帥其日庵を継承する者は、禄はすくなくも皆幕閣の役職に就いた者であり、茶の道においても宗匠として認められた者達であった。一茶という俳号もそれに倣った名であったのであろう。一方で、芭蕉派のそうした気風に農民出自の一茶はなじめなかったとも考えられる。

芭蕉の『おくのほそ道』の「笠島はいつこ五月のぬかり道」²⁹は、雨降りだから笠がほ

²⁶ 新日本古典文学大系『武道伝来記・西鶴名残の友他』（岩波書店、一九八九年）、五二二頁。

²⁷ 古典俳文学大系『芭蕉全集』、四五六頁。

²⁸ 『一茶全集』五、十五頁。

²⁹ 前掲『芭蕉全集』、四六九頁。

しいという意を込めた地名織り込みの即興句で、この句の後に添えた「岩沼に至る」のさりげない一語も、それと同音の「言はぬ間」を掛けた洒落であることは、実際は宿っていない岩沼の地名に興味をつなぐためであった。「のみ虱馬の尿する枕元」³⁰も、山形領及び出羽領の境界の関所の「尿前の関」という地名を捉えた作であるから、「ぼり」と訓ずる説は、実は「しと」と解釈せねばならないものでもある。「語られぬ湯殿に濡らす袂かな」³¹は、句面には、湯殿腹のお女中の心境を秘境湯殿山に重ねた織り込みである。「汐越や鶴はぎ濡れて海涼し」³²は、実景描写のように見えるが、袖をからげた痩せ法師の自画像とだぶらせている。芭蕉の作品は、一見重苦しい嘆きを主調としているようであるが、その意図する所は理想の句境であったとしても、その句中には即興も滑稽も内包存在しているのである。

要するに以上は、芭蕉の句境を葛飾蕉門を名乗る一派や、蕩児まがいの江戸住み生活、その中から名を成している俳家、これらの人々との交流や、自ら漂泊三十六年と記した俳諧行脚から会得したところに成立したのだが、諸国行脚の末に身についた俳調であった。芭蕉以上に誇れるものは、おそらく「日数一万五千九百六十日」の放浪の人生であったのであろう。元禄以降の俳壇は次第に宗匠の座が固定化し、点者候補はそのなかで養われていた。地方でも中央集権的な社中を形成して他流との交わりを禁じていた。そうしたなかで一茶のように他流と積極的に交流する者は、社中派内での制裁を受けるのは当然であった。新人が無一文で俳壇に登場するには、樗良³³や玄武坊³⁴のように雑俳点者から始めるか、一茶のように点者に寄生しなければならなかった。俳壇的野心を持つものが点者として立ち、そこから抜け出すためには、体制にあって次第に地歩を固め、既成俳壇を外部から批判してそれらの門下生を奪取するのが手っ取り早いのである。おとなしく順番を待つ者は愚かである。一茶が世に出る前の中興期の俳人と呼ばれる人々の閲歴を見ると、放浪性などという言葉では表現できない孤児同然としての姿を見出すことができる。陸奥国本宮の

³⁰ 同上、四七二頁。

³¹ 同上、四七三頁。

³² 同上、四七四頁。

³³ 享保十四年（一七二九）～安永九年（一七八〇）。本名は三浦元克、通称を勘兵衛と言い、別号は二股庵、無為庵などと称した。志摩国鳥羽の生まれで鳥羽藩士であった。寛保二年（一七四二）頃に致仕して伊勢の国山田岡本町に移住した。宝暦から明和三年（一七六五）ごろにある事件を起こして山田を出奔、窮乏の放浪生活を体験して帰郷し、俳諧宗匠となる。

³⁴ 正徳二（一七一二）～寛政十（一七九八）。本名水野氏、後に神谷氏を名乗る。医師。江戸白山下に住み、東武獅子門中興の人とされている。芭蕉ゆかりの深川臨川庵に、京都双林寺にあった翁の碑を移して石碑を建立した。

蚕種業・俳人塩田冥々を訪ねた一茶が、あまりの汚さに、居留守を使われて追い返された逸話も、あながち事実なしとはいえない。

ちなみに芭蕉文学を非難した上田秋成は、文政五年（一八二二）に『痴癡談』という随筆を書いている。

昔、俳諧の好き人ありける。芭蕉翁のおくのほそ道の跡なつかしく、はるばる陸奥に下りけれ。ある国の上の御城下にて日暮んとす。一夜明かすべき家求むれどもあらず。思ひ疲れたるにそこの門立ちしたる翁のあるに、立ち寄りて、ねんごろに宿を求めれば、翁うち見て法師は達磨僧なるかと問ふ。いな、さる修業にあらず、ばせをの翁のながれを学ぶ者なるが、松が浦島、象潟の眺めせむとて、はるばると来たるなりといふ。翁、声荒らかにて何がしどのの御城下には、俳諧師と博奕打の宿する者はなきぞと云ひけるとなり。いかなればおなじつらに疎まれけむ、いとあさましくなむある³⁵。

俳諧修業者が各地をまわって指導をしたり、芭蕉の旅の足跡を尋ねて旅をする姿がいかにもみすばらしかったので、禅僧（達磨宗という宗派があった）、虚無僧（普化宗という宗派に属し「ぼろんじ」などといわれた）かと尋ねられ、俳諧師であると名乗ったところ、博奕打ちと俳諧師を泊める宿はない、と笑われて博奕打ちと同類に扱われたことに腹を立った悔しさを述べた文章である。一茶と同時代、あるいは一世代上の俳人には興味深い共通点がある。

故郷を捨てた蕪村は、その青年期を江戸、東北、下総にさすらい、京へ出てからも丹後、讃岐を流浪した。暁台は江戸詰めから尾張家を致仕した下級浪人であり、涼袋は弘前藩の家老の次男に生まれながら兄嫁と通じて出奔したと伝えられている。青蘿も姫路の武士の子であったが、身持ち不慎のかどで江戸へ追放され、白雄は上田藩士の生家を捨てて江戸に出奔した。蓼太は信州出身とだけしかわからないが、若い時に放蕩を重ねて江戸に逃避行をした人物であるらしい。つまり、まともな青年期を送ったものはあまりいないのである。そうした性行は彼らの感受性の豊かさを示すものかもしれないが、一方ではそうした幕藩制下の身分の世襲制の緊縛から抜け出すための努力が一通りのものでなかった証であり、俳諧師としても時流に飽きて新風を求める俳壇の機運を察知して、宗匠として立つべ

³⁵ 日本随筆大成第三期新装版『関の秋風・癡癡談』、四三七頁。

く定めた方向が、期せずして一致したものであろう。そこに貞門、談林、蕉風と続いた俳諧革新の、その後の中興期における苦悩があったのである。芭蕉は貞門、談林という卑俗に陥ってしまった俳諧を連歌から独立させるべく腐心を重ね、「不易流行」という概念を打ち立てて「蕉風」を開拓し、これを「正風」としたのであった。俳諧師はこの間に直面していたために、革新派の俳諧師が期せずして同時に輩出した理由があったのである。裏を返せば俳諧で名を成す程度しか放浪者の生きる道はなかったといえる。

もっとも、そうした生き方は女性にもあった。享保から中興期にかけて都市点取り俳諧と田舎俳諧の対立から、蕉風復帰への関心が高まるなかで、諸九尼、千代女³⁶、歌川などの女性も活躍した。なかでも諸九は、正徳四年（一七一四）に筑後国の庄屋永松十五郎の三女として生まれ、永松万右衛門に嫁したが、寛保三年（一七四三）行脚俳人有井浮風³⁷と一緒に上方へ駆け落ちしてしまった。不義密通はご法度の禁制であった中の駆け落ちであったから、死を覚悟しての不義であった。京都に出奔した二人は、野坡門に入門した。入門してすぐ野坡を失ったので、浮風は宗匠となったが幸運は永くは続かず、宝暦十二年（一七六二）に浮風が突然病死した。諸九は剃髪して蘇天と号して女俳諧師となり、明和三年（一七六六）に岡崎に下って湖白庵を結び、俳尼として評判になった。諸九は備中、備後、筑前、筑後など精力的に俳諧行脚を続けると、明和八年（一七七二）に芭蕉の足跡を慕って「おくのほそ道」の旅に出た。そのまま中国筋から筑紫に曳杖した。やがて駆け落ちをした夫浮風の郷里であった筑前国直方に帰住し湖白庵を結んだ³⁸。「行春や海を見てゐる鴉の子」「もとの身のもとの在所や盆の月」³⁹という晩年の句には、惜春の物憂い情感があふれている。死を覚悟しての不義であったわけだから、浮風の急逝はどれほど諸九を落胆させたことであろう。封建制度下での女性としては特異な生き様であったので話題性を誘発し、俳諧史にその名を残したのであるが、俳諧にはそのような人の道を狂わせてしまうような特殊性もあったのである。

宗匠になるためには天下の俳風に敏感であり、世の動きに逸早く乗じられるような行動

³⁶ 元禄十六年（一七〇三）～安永四年（一七七五）。加賀国松任の人で表具師福増屋六兵衛の娘。十二歳の頃に大睡から俳諧を学ぶ。十七歳の時に支考の訪問を受け「あたまからふしぎの名人」と称される。その頃から諸国に知られるようになる。俳風は平俗であるが繊細な感覚で情緒的に優れた句が多い。

³⁷ 生年不明。寛保三年（一七四三）に筑後国中原村の庄屋の夫人、波（のちの諸九尼）と駆け落ちし、上方から京都に住む。野坡門に入門し、野坡の高弟梅従亡き後、後継者となる。宝暦五年（一七五五）には京都九十九庵に住したが宝暦十二年（一七六二）に病死した。

³⁸ 『秋風記』、古典俳文学大系『中興俳論俳文集』（集英社、一九七一年）、六一二～六二六頁。

³⁹ 大内初夫他編『湖白庵諸九尼全集』（湖白庵諸九尼全集刊行会、一九六〇年）、十頁。

を取らなくてはならなかった。時代や新風を予知し、新風を求めて流浪する俳諧師たちの姿がここに浮かんでくるし、また新風、すなわち芭蕉や蕪村という近世俳諧を担った人達に続く者もいなくなった天明期のなかで、俳諧の新たな方向を見出す、という固有の俳諧を樹立するための困難さも見える。

江戸幕府は、文化十三年（一八一六）二月六日に一条の触れを出した。一商人に幕府が許可裁可を下すなどは有り得ないことであつたが、夏目祇明は江戸随一の大札差で、その本家の夏目成美家であるので、当然の裁可であつた。幕府もこの頃から商家によって屋台を揺さぶられていたのである。江戸市中で忠孝を説く条件で「咄の会」を催すことを許可した。井筒屋の主人夏目成美はこの触れによって「随斎会」を催した。この会は文字通り「咄の会」であり「お斎の会」であり俳諧は二の次であつた。江戸は文化・文政期を迎えると遊蕩ムードと浮華な世相と浮薄な文化が満ちるようになっていた。

一茶は成美と親交を結び、しばしば成美に句の添削を依頼している。この会を通して一茶は自分の言葉で表現することを発見した。『我春集』のなかで「心の古みを汲みほさざれば彼の腐れ俳諧となりて、一略一行く行く理屈地獄の苦しみまぬかれざらん」⁴⁰と述べて観念的作品を否定し、新風を求めようとした。江戸座という成美の属する遊俳の軽妙さを知つたのである。葛飾蕉門に属しながら、芭蕉から蕪村へと発句の本情として生かされてきた季感と季題を切り捨てて、人情を述べるための素材の位置に退行させている句柄は、むしろ貞門、談林時代の扱い方に近い「滑稽や笑い」を含む俳諧となった。

大根引き大根で道を教へけり
故郷や夜もさはるも茨の花
蓬萊に南無南無といふ童かな
あら玉の年立返る風かな
うつくしや障子の穴の天の川
魂棚や上座して啼くきりぎりす

これらの句は、当時江戸で流行していた趣味化し、観念化する季語観への一茶の全身的な反発であつた。一茶自身の生活からは、趣味化させるほど余裕のないという条件から出た自然発生的な傾向であつたに違いない。一茶は芭蕉の句に滑稽が含まれ、風刺が織り込

⁴⁰ 『一茶全集』六、十五頁。

まれている諧謔性を見出していたのであった。観念の飛躍、雅俗の断絶に興味がつながれている。俳諧性の回復と本歌取りに近い俳風は、むしろ談林調に近いものでもある。一茶はこれらの句を自ら「新らし詞」といつている⁴¹。同時に俳号も「しなのの国乞食首領一茶」と記している。

浅ましや一寸のがれに残る雪
せい出してそよげ若竹今のうち
人来たら蛙になれよひやし瓜
よい日やら蚤がはねるぞ踊るぞよ
下々に生れて夜も桜哉
身の上の鐘と知りつつ夕涼み
うかうかと人に生れて秋の夕
五十にしてふくとの味を知る夜哉
犬が来てもどなたぞといふ襖哉

文化十三年十一月六日に、一茶が故郷長沼の門人・佐藤魚淵⁴²に宛てた書簡には、「されば、私は九月三日、一日濡れ鼠となりて歩行候かげんか、又あまり新句を吐くゆへか、和歌三神の天窓敲き給ふにや、十一月初つかたよりひぜんといふ腫物、総身にでき申候」⁴³と記されている。「新句を吐く」としている点に一種の批判が内在されている。素材となっている『季題』は、その本意本情である伝統的な文学性が著しく希薄化され、消失してしまうか、あるいは形式として置かれているにすぎなくなってしまう。一句が散文性を帯びたり、随想性を濃厚にするなどして、擬人化や説教調となっている。こうした句柄はすでに一茶が江戸俳壇において一家を確立し、それ相応に認められていたことを意味している。

文化九年から十三年にかけて一茶は夏目成美の特別添削を受けた。それによると一茶の

⁴¹ これについて「新らし詞を云出足ることを、かれがうらやましき、やすやすと悪くとりなして云つれば、もとの歌の詞も見馴れ、今の歌も無下きたなく、後代にはいづれが前か勘しらざらん」(『一茶全集』七、三九一頁)とある。

⁴² 宝暦五年(一七五五)～天保五年(一八三四)。本名は佐藤信胤。信濃国水内郡長沼の吉村家に生まれ、同郡の佐藤家を継いだ。後に法橋位に叙せられた漢方医。一茶の門人となり、二冊の句集を刊行している。一茶はこの人から民間療法の漢方を学んだ。

⁴³ 『一茶全集』六、三六三頁。

「さをしかよ手拭かさん角の迹」という句に対して成美は「是は御家のもの」と、その独創性と卑俗ながらも秋の鹿の寂しげな状況に対して、見事な角であるから、手拭をかけようか、あるいは妻を得るのに役立たなかったのであるから恥ずかしそうなので手拭で隠しなさい、といったような言葉と情況の遊びの感覚を独自性と認め評している⁴⁴。

文化九年（一八一二）における一茶の一年間の句文を記したものに、『株番』という句文集がある。巻頭に「文化九年正月十五日、下総国相馬郡布川の郷なる月船亭に日待といふことをして人々こぞりて夜の明るをなんまちける」⁴⁵という冒頭で始まる長文が置かれている。夜の明けるのを待っているうちに、人々が様々なことを述べ合う。特に今年は丙午であるから六十年に一度の大凶日となるから大火にならぬように、という論を巡って論争を開始し、長頭丸の句をたとえに引いたりしながら朝まで延々と大論争になったという記事である。この文章の末尾の方で一茶は自身の俳諧に対する姿勢を述べている。

程なく来見寺の鐘暁をつげて、布左台の鴉かはかはと鳴わたるに、おのおのばらばら帰りけり。是万人の定めたる大火によらんや、一人の極めたる天火にしたがはんや。思ふにふたつながら非なるべし。前の日しかじかの事あれば必あらんと思ひこみて、空しき株を守る輩にぞありける。されば我らがたまたま練出せる発句といふものも、みづから新らしきとほこれば、人は古しとあざける。ふたたびよくよく見れば、人の沙汰する通りいかにも古く、ほとほとおのが心にもうんじ果て、三日ばかりも口を閉づれば、是又木偶人のごとくへんてつもなく、よしよし汝はなんぢをせよ、我はもとの株番⁴⁶。

ここに見られる一茶の態度に対して、それまでの『我春集』や『茨の花』などの文章に見られていた「乞食首領」や「まま子一茶」という自称記述が、落魄不遇の自嘲やひがみなどの底の浅い境地より出たものでない、と前田利治氏は述べている。つまり、この自称は、「貧と信仰とを通して獲得したこの処世の哲学が、即、作品に反映していることはいうまでもなく、我はもとの株番に見られる透徹した他力的守愚となって定着し、俳仏一如の俳諧寺的世界へと展開してゆくのである」⁴⁷と述べて一茶の信仰心を指摘している。

⁴⁴ 『一茶全集』六、三三六～三三八頁。

⁴⁵ 『一茶全集』六、四十二頁。

⁴⁶ 同上、四十三頁。

⁴⁷ 前田利治、前掲『一茶の俳風』、四十頁。

また、前田氏は、「要するに彼の句に見られる独自性なるものは、他力思想や中世風の無常観によって、彼我の赤裸々な煩惱や観相などを当代の平易な口調で直裁軽妙に表現したところにある。批評に俳意が込められているともいえる。それは同時代の俳人に見られない顕著な作風であり、郷土の桂国や文虎のいう一茶風にほぼ相当するものであった」⁴⁸と述べ、一茶の幼少時よりの門徒宗への帰依、長じてから親鸞の『正信念仏偈』と蓮如上人の『御文章』の日々の唱文が強く働いていると指摘している。熱心な信徒であった父の膝元で見聞体験を広め、法語類の読誦などの習俗仏教の影響を強く受け、「我はもとの株番」という守愚一徹の自覚となり、やがて翌年の文化十年の故郷帰住を以て、自らを愚人とする自覚が習俗的信仰と合して他力思想の本道に結縁したと見ている。

実際この句文集あたりから、一茶の特徴的な句が目立って増えていることは確かである。次に、みずからを「愚人」と読み、卑称した句をいくつか引いてみる（『一茶全集』一、『発句』）。

陽炎や手に下駄はいて善光寺
しぐるゝや親腕たゝく啞乞食
かゝる世に何をほたへて鳴く蛙
行きがけの駄ちんに鳴やけさの雁
山鳥おれがさし木を笑ふ哉
いたぶりし今の乞食よつゝかすむ
御馳走に鷗ななきそ角田川
木のはしの親をひたすらおがむ也
あのくたら三百文の桜かな
三日して忘れられぬか野良の猫
格別に世の中よしと鳴蛙
世の中は地ごくの上の花見哉
恥入てひらたくなるやどろぼ猫
なむあみだおれがほまちの葉が咲た

嘉永五年（一八五二）に出版された『おらが春』はわずか二歳でこの世を去った愛しい

⁴⁸ 同上、四十一頁。

子に対する追悼集であるが、生前は刊行に到らず永いことその存在すらもわからなかった。一茶没後この集は五度にわたって出版されたが、板木は関東大震災によって焼失、絶版に到っている。この集の中跋は瓢界四山人⁴⁹が書いている。「しかもよく仏籬祖室をうかがひ、さる法師がつれづれもあやからず、一休、白隠は猶しかなり」⁵⁰として兼好、一休禅師、白隠禅師にたとえている。また上州草津の俳人黒岩鷺白の『芳草帖』には「行状は彼の惟然房の昔を移して、業は鬼貫・蕪村杯の上を飛越、彼の深草の元政を的にかけたる俳諧上人」として広瀬惟然⁵¹のようであると評している。口語や俗語を用いている所を惟然の風羅念仏にたとえたのであろう。また終跋を書いている惺庵西馬⁵²は、「ざれ言に淋しみをふくみ、可笑みにあはれを尽くして、人情、世態、無常、観想、残す処なし」⁵³と評しているように、一茶の独特の句風は、暁台の俳壇統合によって「花の下宗匠」の免許が出され、寛政三年に芭蕉が神祇伯白川家から「桃青霊神」の称号を授かり、文政九年には朝廷から「飛音大明神」の神号を授かったことにより、これ以後の全ての流派が蕉門に属したなかにあって極めて新しかったことは確かである。文化文政のころには俳諧は趣味化して独自性を失っていた。そうしたなかで一茶の独自の俳風は、極めて新しいものと世の俳諧人に映ったのであった。「金まうけ上手な寺のぼたん哉」の句や「でも僧や田植見に出る日傘哉」など、汗水流して働く農民と対照させることによって墮落した僧侶の姿を際立たせているばかりか、今日「でもしか先生」といわれる現代の教育界の代弁とも思える「でも僧」を描いて痛快でもある。無気力でやる気のない僧侶をさげすんでいる点が面白い。一茶の発句のなかでも、痛烈に世の矛盾や人びとの生活のなかで転倒した風景を捉えた代表的な句を、次に引用する。

春風や侍二人犬の供

⁴⁹ 寛政十二年（一八〇〇）～安政元年（一八五四）。本名は松平直興、別号閑花林・貞佐・瓢界などを名乗る。出雲国母里藩八代藩主。嘉永五年版（一八五二）の『おらが春』に跋文を書き、『自然堂千句』と『亀躍集』に序文を寄せている。いずれも小林一茶の千句と俳文を集めて出版した作品に愛着を寄せ、一休や白隠禅師にたとえている。

⁵⁰ 『一茶全集』六、一五七頁。

⁵¹ 生年不詳、正徳元年（一七一）没。本名は広瀬源之丞。別号素牛・湖南人・風羅堂。美濃国岐阜を訪れた芭蕉に会して入門。『おくのほそ道』の行脚を終えた芭蕉を大垣に出迎えた。芭蕉に信愛され病没するまで随従し葬送にも奉仕し、芭蕉没後は風羅念仏を唱えて人々を驚かせた。

⁵² 文化五年（一八〇八）～安政五年（一八五八）。上野国高崎の人。左官職であったが江戸に出て惺庵を開き幕末期に江戸における宗匠として名を高めた。一茶を評して「ざれ言に淋しみをふくみ、可笑しみにあはれを尽くして、人情、世態、無常、観想、残す処なし」と絶讃している。

⁵³ 『一茶全集』六、一六五頁。

麦秋や子を負ひながらいわし売
仰のけに落ちて鳴けり秋のせみ

第三節 他力本願と家族

一茶が浄土真宗に限らず仏教に深い知識と関心を持っていたことは、生い立ちや作品などから疑う余地はない。一茶の喜怒哀楽を捉えた作品を、単に一茶の性情や感情として「凡夫の境地」と捉える場合が多い。しかし、一茶は僧侶だけに限らず支配層や大名・武士に対しても厳しさをのぞかせている。「秋の風乞食は我を見くらぶる」など、その対極にある被差別者や弱者、それにひたむきに生きるものに惜しみない拍手を送っている。「海坊主人見に出たる月見哉」「負け菊を一人見直すゆふべかな」などは、蕪村句の「負けまじき相撲を寝もの語り哉」⁵⁴を思わせ、滑稽ななかにも人情や淋しさを詠んでいる。自らを弱小者と自覚し、幼少より辛酸をなめて育ったからである。諸国を巡ってあらゆる階層の人々と交際を持ち、見聞を広め、人々と喜びも悲しみも分かち合い、自らのものとしていたからである。

一方そうした一茶の生き方をなかには「六欲兼備の俗物」という人もいる。一茶の評価はこのように格段の違いを見せてもいる。次の文章は句文集『株番』にある作であるが、このこともまた解釈の相違を見るようである。長い文章であるが全文を引用したい。

下総国相馬郡藤代の里に百姓忠蔵といふ者有り。朝夕のけぶりも糸筋のかすかにく
らして、夫婦人に雇はれて老母の心をなぐさめける。其中に娘ひとり持ちたりけり。
貧家のならひ、子守りといふ者もなければ、土べたに這廻りて、草花をとらへてあはゝ
をならひ、鳴子のうごきにてうちうちを真似つゝ、そよ吹風の草木を友に育けるが、
ことしハッになんなりける。何にあやかりけん。其娘ただならぬ身となりて、かりそ
めのなやみもなく、九月三日といふに、彼の桃太郎のやうなるくりくりしたる男をな
んうみたりける。其日より乳の出ること尻口の柄ぬきたらんやうに、蕨の外迄ほとば
しるものから、父母のよろこびはさら也。界限の者も打群がりて、「いまだ井筒のたけ
にもたらで、かゝる愛度ためしは、今世にくらぶるものあらじ。永祿の昔を目の前に

⁵⁴ 古典俳文文学大系『蕪村集』、四九四頁。

見る心ちす」とてとりはやしつゝ、村よりむらへ咄つぎいひふらしければ、やがて領主きこしめして、其男子の名をつけ下さるゝとなん沙汰し侍る。かゝりしものから、野もせ山もせ其噂ひろごりて、誰しらぬといふ者なくて、人に人かさなりて其家尋訪ふものから、祝ひにおこせる産衣、又は百文、あるいは二百、あるは五十ばかりのおひねりといふもの、雪の降りたるやうにつみ累て、所々に山をなせり。二親久しき貧の病も忽に忘れて、今は心のままに老母をやしなひけり。げにげに此家のまづしさをすくはんとて、救世観音かれが子と現じ給ふにや。是を思へば、切る竹の節毎に黄金のこぼれ出しといふ古きものがたりも、さらさらいつはりにはあらざるべし。

是うきたる説にあらず。布川の月船といふ者、きのふわざわざ見にまかりけるに、其娘露ほどもはづかしきけしきなく、手遊びの偶人などうみたるやうに人に見せけるとぞ。

下総国相馬郡、常州土浦土屋治三郎殿領藤代駅下町

百姓	久右衛門	死去
倅	忠藏	申三十九
同妻	よの	三十
同母	かな	五十七

文化二年丑五月十一日生

同娘 とや 八才

此度従土浦侯賜シ名也 九月三日生

男子 久太郎⁵⁵

このような見聞記は事実なのであろうか。その他にも、乞食の小屋でお七夜祝いをしている場面に出くわしたりしたことを書き綴っている。一茶五十歳の年齢であるから、故郷に帰住する一年前のことである。翌年五十一歳で帰住し、文化十一年（一八一四）四月十一日に常田久右衛門の娘“きく”と結婚している。長きにわたる放浪生活のなかで夢見た夢物語であったものか、あるいは事実であったものか定かではない。文化元年（一八〇四）に山東京伝が『近世奇跡考』を著し、須藤由蔵⁵⁶が『藤岡屋日記』を著しているので、あ

⁵⁵ 『一茶全集』六、六十三頁。

⁵⁶ 寛政五年（一七九三）生まれ、没年は不詳。江戸時代後期の本屋。上野国藤岡の人。弘化二年（一八四五）から江戸で古書店を営みながら、風俗や風聞を書き記して御記録本屋と呼ばれた。慶応四年まで書き続けた『藤岡屋日記』で知られている。別名藤岡屋由蔵ともいう。

るいはそれらに似通わせて記したものととも考えられる。

一茶が書きとどめた江戸、房総、信濃での事件は、さながら当時の十大ニュースともいえる内容である、文化四年の永代橋崩落惨事、文化十年の善光寺町一揆の顛末、文化十年（一八一三）の房総沖の難破船事故などは『藤岡屋日記』といずれも照合できる。一茶の『七番日記』は文化七年（一八一〇）一月から起筆され、文政元年（一八一八）十二月まで八年間の雑記である。それより七年前の起筆の『藤岡屋日記』は、明治元年（一八六八）までの記録である。一茶の句日記は現在十二集が確認されており、それぞれの自筆稿にある書名は『七番日記』を除き仮題がつけられている。その中の一書『享和二年句日記』は、享和二年（一八〇二）一月から秋頃までの記録である。享和二年七月二十日の記事には「廿日晴、廿一日晴、野尻湖光・柏原観国来たれば、かのふや吉兵衛へ訪ふ」⁵⁷と記され、次のような句を詠んでいるのである。

洪水の尺とる門よ秋の風
大あれのけも無月の御山哉
草の蝶大雨だれのかゝる也
助舟に親子をちあふて星むかひ
きりぎりすおよぎつきけり介舟
古への水も見し人秋の風
我窓や虫もろくなはなかぬ也

この年は異常気象の続いた年で、六月二十日から諸国を大雨や洪水が襲った。一茶は『七番日記』に「洪水・箱根温泉場流失」⁵⁸と記している。この雨は七月六日まで全国的に降り続き、江戸とその周辺は甚大な被害を受けた。野尻の湖光と柏原の観国の弟子二人が来て、江戸の大洪水の被害の様子を聞き、江戸を行き来している加納屋吉兵衛にその様子を問い聞きして句にしたものであった。この被害状況に対して幕府は、何ら対策も救助の策も設けなかった諸藩の国許留守居役六十余名に対し、幕府は十月二十九日に厳重な処罰を申し渡している。この記事を読むとそうした状況が目を追って受け取ることができるように句も詠まれている。

⁵⁷ 『一茶全集』二、七十四頁。

⁵⁸ 同上。

享和二年（一八〇二）には一茶の齢は四十歳で、父親の三回忌の法要に帰国している時であった。この日記は極めてジャーナリスティックな事件ばかりを記しているが、十年後の「文化十年句文集』には次のような一文を書いている。これも少々長いものであるが引用する。

渡守伊助といふは、ことし齡六十を超えたるに、一笠一蓑のかろき粧ひにて、さゝ舟におのが命を任せ、さしこぐ竿を頼みて一鉢にさへとぼしきたつきながら、朝とくより暮るゝ迄、かひがひしうはたらきて、世渡るありさまの、さすがに尊く思はれ侍けるに、つらつら此の男の身の上を聞けば、ことさらに不便なるものから、きく人涙に袖を絞らぬはなかりけり。

此男、わかゝりしころ、牛出の鼻といふ所に住ひて、漁る業に日ごと猛々しき日暮しけるが、一年、秋の出水に上手の堤もろくも切れ、逆巻く波動々と鳴りわたりておし来たり、あはやと見る間に家もろ共波に巻き込まれて、駕のふすまの睦まじき妻も、いとしき子ども二人迄いたましいかな、底の藻くづときえ果てかげも容も見えざりけり。

しかるにこの男一人、ふしぎにも大木の枝に抱きつきて、命をながらへけるが、過世の罪業おそろしと思ひけん。其日よりふつと漁る業を捨てて、なき妻子の後生を供養とばかり、渡守と成り其身を如来の御前に投出して、何事もあなた様の御はからひとさしこぐ竿に願力こめただ称名念仏を此上もなき行とすとかや。いとあはれにも尊かりけり。さりながら天私なく覆ひ、地も私に載ることなしといへば、かゝるありさまも、さるべき罪の報ならんと思へばうれたくもおそろしき事になん⁵⁹。

この記事を書いた翌年に、一茶は妻を迎えてようやく本当の家族と一家を持つに到るのである。一茶が生をうけた北信濃の柏原から南へ一日の行程に名刹善光寺があり、北一日の所に親鸞流謫の地直江津がある。仏縁に篤い土地柄で近世初期から門徒宗に帰依する者が多かった。一茶は幼少期から仏教に対し習俗的な慣行に従って生きてきた。文化四、五年の四十五歳のころから守愚の自覚を深め、その思想や文章は、このように仏教色を濃くしてゆく。故郷に帰住した一茶はますます愚人としての自覚と他力思想を深めるようになっていった。

⁵⁹ 『一茶全集』五、一二八頁。

浄土真宗の信仰は一般に講と呼ばれ、信者の多くが一所に集まり車座になって念仏をま
ず唱える。その後信者同士、信仰をひとつにする同朋が各々の信仰体験の告白や宗祖の讃
仰を通じて仏恩報謝を賛嘆した。近世期に入ってから、仏教が幕藩体制のなかに組み込
められると、浄土真宗も檀家制度を採るようになり、寺院に帰属するようになると同時に、
報恩講や説教などを通じ「自然法爾」の处世や思想が説かれた。

浄土教に「妙好人」という教えがある。浄土教に伝わる三部の經典を浄土三部經と称し
ている。三部經は、『無量寿經』『觀無量寿經』『阿弥陀經』を指している。この中の『觀無
量寿經』のなかに、「もし念仏するものはまさに知るべし、この人はこれ人中の分陀利華な
り。觀世音菩薩、大勢至菩薩、その勝友となる。まさに道場に座し諸仏の家に生ずべし」
とあり、念仏に励む者を人中の分陀利華に譬えている文章がある。分陀利華とは蓮華を指
す。古代インドでは、泥にまみれていてもそれに染まらず、華を咲かせる白蓮華が最も尊
い華とされていた。中国浄土教の流れを大成した唐代の僧・善導が『觀無量寿經』の注釈
書『觀無量寿經疏』を著し、「人中の分陀利華」と述べてあった箇所を、「人中の好人、人
中の妙好人、人中の上上人、人中の希有人、人中の最勝人」とし、念仏に明け暮れる熱心
な信者の信仰心を五段階に解釈した。このように、広く念仏する者が褒め称えられたので
あった。

浄土真宗は、浄土宗と同じく、浄土三部經を所依の經典としている。法然が、『觀無量寿
經』を重んじたのに対して、親鸞は『無量寿經』を重視した。法然の教えをさらに徹底さ
せた親鸞は、阿弥陀仏の信心を唯一の眞の仏法であると説き、絶対他力の教えを確立した。
絶対他力は、阿弥陀如来の四十八願のうち、第十八願をもって立てられたもので、いかな
る凡夫も悪人でも、阿弥陀如来は一人ももらさず救いとするということだけを信じることで
あった。称名念仏が往生を決定する根拠になるのではなく、信心こそが往生を決定する根
拠となる。親鸞後に成立した浄土真宗においては、その信心さえも自分の力、自力による
ものではなく、阿弥陀仏から賜ったものである。その上で、自分の往生はすでに阿弥陀如
来の本願で決定しているのだから、自分が称える念仏は阿弥陀如来に願う念仏ではなく、
阿弥陀如来に感謝する念仏にならなければならないと説き、この絶対他力の信仰を根本と
するのが浄土真宗の教えであるとしている。

親鸞の語録『歎異抄』には、「善人なおもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」という有名
な言葉がある。阿弥陀仏の本願は悪人を救うことが目的で、悪人こそ往生するにふさわし
い機根であるという「悪人正機説」がある。「妙好人」は親鸞の教えに従って、自らを煩惱

にまみれた罪惡な人間であると自覺するところに信心の発心があると説いている。自らを煩惱の虜となった者、荒凡夫であると自覺するところに発心の契機がある。愚直なまでに阿弥陀仏の衆生救済の本願を信じ切って、生涯を全うしようとするところに共通点があった。日本近世仏教史学者の柏原祐泉によれば、江戸時代の妙好人はそうした信仰を持ちながらも、幕府や領主の治政には感謝し、本山や門主を崇め、よく仕事に励み、正直で親孝行でもあったから、しばしば領主から褒賞された者が多かった。一茶も加賀前田侯から褒美をもらっている。また、寛政年間の西国行脚に旅立つに当たって、父弥五兵衛から本願寺への代参を依頼されている。弥五兵衛は病中でも無理に起き上がっては、祖師親鸞上人の命日には必ず経文を読み上げた。一茶自身も自筆の経文を遺しているから、敬虔な門徒であったことは間違いない。信仰を持ちながらも盗難や怪我などの災難に遭遇した場合は、それを前世の罪の報いとして甘受して喜ぶという行き方をしていた。

法然の唱えた「南無阿弥陀仏」の専修称名念仏を正定業とする教えを徹底させたのは、弟子の親鸞である。『教行信証』を著し、浄土宗の神髓を簡潔にまとめた「正信偈」を日常に唱えることを説いた。阿弥陀仏の本願に帰依する絶対他力を説き、悪人正機説を唱え、妻帯も敢行した。在家のままで往生できる念仏の道を、同行二十四人と共に東国で布教した。この聖地を訪ねることを「二十四輩詣」といった。その一つが江戸浅草の性信房で、現在は報恩寺となっている。

文化七年（一八一〇）六月十日、この寺で東本願寺と同じ御柱を立てる普請があった。その時の様子を一茶は、次のように書きとめている。

けふ巳刻、東本願寺御柱立御規式なりとて、老弱男女群集して人に勝る棧敷とらんといどみあらそふ。漸々堂の片隅かりて踞る。柱三本に素木線巻つけて、三所におのおの青紅白の大幣神々しく、黄紅のかがみ餅をかざりて棟梁は烏帽子かり衣、其外素袍大紋きたる大工廿人ばかりも居並びつつ大祓を唱へぬ。彼宗派は雑行とて忌む事也。其源としてかかる祭するは深き謂あるなるべし⁶⁰。

一茶が「彼宗派」といっているのは浄土宗で、「雑行」というのは浄土宗では念仏を正行とし、その他を雑行として退けていた。つまり、ひたすら念仏を唱えることが教えであるはずなのに、神道の大祓を唱えたことが、一茶にとっては不審に思えたのである。

⁶⁰ 『一茶全集』、六十六頁。

釈迦は初め、浄土と阿弥陀仏の仏身を観ずる観法を勧めたが、第七華座観という観法に到ったと説き、突如として「仏さまに汝が為に除苦悩法を分別解説すべし」との声を挙げ、この釈迦の発声に呼応して阿弥陀如来が浄土より飛来し韋提希の眼前空中に住立したと伝えられている。その空中に住立する姿は火急を表し、すべての諸悪煩惱を攝取して捨てるという南無阿弥陀仏の大悲の救済の姿を表したのであった。凡夫が凡夫のままに救われていく本願他力の法を如実に示し、凡夫にとっては念仏が浄土往生の唯一の法であることを示したのである。

こうした伝承を十分に心得ていた一茶にとっては、たとえ大工の仕業といっても棟上げではなく、新築成った堂の前に仏典そのものの御柱立の行事であるから、大祓ではなく、念仏を唱えるべきであろうと思われたのであった。こうして、一茶は「あなたまかせ」の生活に入ってしまったのであった。

一茶は、文化十年十月十二日に善光寺の近村長沼の経善寺で営まれた芭蕉の追善法要に臨席し、「何がしの芭蕉会」という一文を記している。形骸化し演出された芭蕉会を批判している。僧の真似をして座禅をしたりする行為を非難し、次いで真宗の信仰の集いを具体的に説明している。同じく俳諧も形式化した隠者のような句を詠むのではなく「諸人が心のやり所」として楽しむ句会であるべきだと説いている。はからわれたものよりもあるがままに、有為に対して無為を、技巧よりも自然を是としている点にこの文章の魅力がある。一茶は、このようにして一茶調と呼ばれる俳諧を樹立した。芭蕉に学び、芭蕉から離れて新風をものした一茶の努力の跡を見ることができる。

中世より日本の芸道は「守破離」という観念をもって継承されてきた。芸も諸道も職業も、まず師に参入し、師の芸の模倣をし、師の芸を盗み、自身のものとなるまで修業に励む。修業を積んで同格になれば師匠から許しを得て独立し、さらに自身の、己自身の芸を生み出すべくまた修業に励む行道のことをいう言葉である。次の文章は『一茶全集』収録で、前田利治氏と矢羽勝幸氏がそれぞれの著書に引いている⁶¹。

何がしの寺に芭蕉会あり。門に蓑と笠とをかけたり。しかるにけふは又ことさらに晴れたれば、さるもの、蓑に打水してそのぬれたるさまを見せたるも、かの翁の昔をしのぶにはおもしろき企にこそあれ、一念の信、俳諧に遊ぶともがらにはかゝるわざ

⁶¹ 前田利治、前掲『一茶の俳風』、一四二～一四三頁。矢羽勝幸、前掲『小林一茶』、一七八～一八〇頁。

くれの事も好しからず。此の身このまゝの自然に遊ぶこそ尊かるべけれ。

仏法を行ずといへば出家の真似して座禅にこび、儒といへば唐人になりたがるも皆おのれが平生をうしなへる病人にして、修業とは思ふべからず、とかの翁もいましめられたり。今宵の集ひは、炉をかこみて打くつろぎてこそ御心にかなひ侍りなん。又我が宗門にてはあながちに弟子と云はず師といはず、如来の本願を我も信じ人にも信じさすことなれば、御同朋、御同行とて平座にありて讃談するを常とす。いはんや俳諧においてをや。ただ四時を友として造化にしたがひ、言語の雅俗より心の誠をこそおのべべけれ。いざいざとおのれ先に大あぐらして炉を囲めば、人々もさこそありなんとおのがじしくつろぎて榾火をつつき茶をすゝれば、心のかまへ更に苦しからず。吹く松風の音もあるがまゝ、灯火のかげもしづかにて心ゆくばかりに興じけり。実に仏法は出家より俗家の法、風雅も三五隠者のせまき遊興などの道にあらず。諸人が心のやり所となすべきになん。

この時から一茶は「其身其まま」や「から風の吹けばとぶ屑家」はそのまま、あるべきように「ともかくもあなた任せの年の暮」⁶²という生活に入る。「あなたは阿弥陀如来」のことで、何事も如来のおぼしめしのように、ということである。

一茶は文化十四年（一八一七）に五十五歳となり、これより信州にとどまり近隣の越後以外は一步も他国に出ることはなかった。一茶の故郷定住と一茶調の布教とは、実質的にこの年から始まったといえるのである。文政二年（一八一九）五十七歳でまとめた『おらが春』には「目出度さもちう位もおらが春」という句を置いて「門松立てず、煤はかず、一略一ことしの春もあなた任せになんむかへける。ただ阿弥陀如来を信ずるのみ」⁶³という長文の前書きをつけている。長女さとが誕生し、一家も人並みな生活を送り、温かい家庭生活を得た後の束の間の幸せを奪った無常の風、ここには崩壊してゆく家族・家庭の姿が描かれている。「露の世は露の世ながら去りながら」と詠んでも、戻ることのない、愛しい我が子の死に遭遇した一茶の心はいかばかりであつたであろう。長男千太郎、長女さと、次男石太郎、三男金三郎と次々に四人の子を失い、文政六年（一八二三）五月には愛妻きくを三十七歳で亡くし、一茶の家庭は完全に消滅してしまったのである。俳諧もまた一茶にとっては、俳聖芭蕉の模倣をする垂流蕉風俳人との決別を以て、苦しい現実のなかで悩

⁶² 『一茶全集』六、一三六頁。

⁶³ 同上。

みながら生きてゆく世俗大衆の、あるがままの「心のやり所」を表現吐露する庶民済度の文学でなければならなかったのである。「何がしの芭蕉会」は、まとまった俳論のない一茶にとっては、このような稀なる人生を送った一俳人の貴重な俳諧観、宗教観をうかがわせる貴重な資料であるといえよう。作為的な行動を「わざくれ」とみなし「此の身このままの自然」こそが尊いとする観念が生まれ、素地のあるがままの姿に到り得た心境を知ることができるのである。

一茶には、当然のことながら、善光寺を詠んだ句が数多くある。文政五年の『発句集』には「八月二十九日、善光寺詣、本堂の柱に長崎の旧友たれかれ、八月二十八日詣るとしてありけるに、今は三十年余りの昔ならん、おのれ彼の地にとどまりて、一つ鍋のものを喰ひて笑ひののしり……」と書き、「近づきの楽書き見えて秋の暮」という一文を収めている⁶⁴。『文政句帳』の文政五年九月一日の項には「善光寺の柱に長崎の旧友二日通るとありけるに、知つた名のらく書き見へて秋の暮」⁶⁵と書いている。このように一茶はしばしば善光寺を訪ねている。

浴びるともあなたの煤ぞ善光寺
名月やお煤のすぎし善光寺
法談の手つきもかすむ御堂かな
暑き夜を唄で参るや善光寺
二番草過て善光寺参りかな
朝寒のうちに参るや善光寺

俗信家であったが、信仰心の篤かった一茶は、善光寺を主にして多くの句を詠んでいる。こうした句のなかに、「文化十年二月、二十七雨、少晴、松や二入、往生寺参詣」⁶⁶とあったり、「文化十五年三月、六雪、昼より晴れ、三好二入」⁶⁷と書かれている。善光寺の西北に六、七百メートル登った山の中腹に、安楽山菩提心院刈萱堂往生寺があり、長野市西町には安養山極楽院西光寺がある。一茶は、またこの二寺もしばしば参詣している。長野市西長野には刈萱親子地藏尊像を本尊とする刈萱山寂照院西光寺があり、故郷定住後にしば

⁶⁴ 『一茶全集』別巻、二三一頁。

⁶⁵ 『一茶全集』五、三九九頁。

⁶⁶ 『一茶全集』三、二一七頁。

⁶⁷ 同上、五二二頁。

しば参詣している。

刈萱堂

子地蔵よ御手出し給へ梅の花

花の世は仏の身さへおや子哉

花ちるや日の入かたが往生寺

西光寺

迹臼は鳥のもちや西光寺

散る花や月入る方が西光寺

花の世は仏の身さへおや子哉

数えれば際限もない。一茶は善光寺、往生寺、西光寺を訪れてはこのような句を何百句も詠んでいる。刈萱は西光寺では「茹萱」の字を使い、石童丸は往生寺で「石童丸」となっている。明治の初め両寺は協議して刈萱が入寂した所は往生寺、石童丸が没したところを西光寺ということで合意をしたという話である。『説経節』は「あらおいたわしやな……」「これはまことか悲しやな……」と語りかけ人の心に訴え、聴くものは勿論のこと、語るものも泣いて、故郷の阿弥陀堂で瞽女や高野聖が語ったあの悲しい物語がある。瞽女の語る節回し、言葉の綾、説経節や浄瑠璃、琵琶歌として語られた、「かるかや」説教、「石童丸物語」のゆかりの地が善光寺町である。そうした縁起を持った寺が善光寺町には二寺あった。

「かるかや」は家庭崩壊の出家譚である。丹後若狭の和田の釈迦浜にある大穴は、信濃善光寺の本堂戒壇下に通じているといういい伝えもある。それを現代でもこの地の人々は固く信じている。高野山に出家した父親、出家とはいえ俄のことであつたので、それは父親に捨てられた母親と男の子が、父親を捜しに行く物語である。高野山に出家した父を求めて山に登る途中母親は命を落として山腹の西光寺に葬られ、今もここには墓がある。説経「かるかや」は石童丸と母親の登場で哀切を極める。出家をし、刈萱を名乗る父親が石童丸に嘘をいい、母親は疲れ果てて死ぬ段で、石童丸は大人世界のむごたらしさに気づき、世の無常を感じる物語であるが、一茶の生涯もまた、これに似たような境涯にあった。

ただいま説きたてひろめ申し候本地は、国を申さば信濃の国、善光寺如来堂の左手

の脇に、親子地藏菩薩と齋れておはします御本地を、あらあら説きたてひろめ申すに、由来をくはしく尋ね申すに、これも大筑紫筑前の国、松浦党の総領に、繁氏殿の御知行は筑後筑前、肥後肥前、大隅薩摩の六カ国、御知行御所をさへ四季を学うでお建てある。春は花見の御所、夏は涼みの御所、秋は月見の御所、冬は雪見の御所と申して、四季を学うでお建てあるが、頃はいつなることならん、三月は冬春なかばのことなるに、一家一族御一門、花見の御会とお触れある⁶⁸。

繁氏は、一家一族の花見の会で突然の風に散る花を見て、世の無常を感じとり、一族一家がとめるのも聞き入れず、「遁世してこそ後の世の、後生の種ではないかいな」といって聞き入れない。奥方が、「わたしの胎内には七月半の水子がゐます」というすのだが、「いかに御台に申すべし。変はる心がないそよと、変はる心のあるにこそ、深き恨みは召さるようずれ。この世の縁こそ薄くとも、またこそ弥陀の浄土にて巡り合おうそ、同じ蓮の縁となろ」と言い残して身勝手に出家をしてしまう⁶⁹。一族一家の家庭崩壊劇の始まりである。出家遁世という方便を借りての出奔、失踪である。

善光寺町の刈萱堂内には本尊の阿弥陀如来が祀られ、その右隣に刈萱上人像がある。その隣には上人が刻んだという地藏と、さらに隣には石童丸が刻んだという地藏が祀られている。子の石童丸が高野山まで尋ね、弟子入りを迫ったので、父の刈萱上人は一度はやむなく許したが、親子の情愛に引かれると修行がおろそかになると考え、善光寺に参籠して正治元年（一一九九）にこの地に庵を結び、この寺を創出して地藏尊を刻んだという縁起がある。一茶はこの刈萱堂で「花の世は仏のみさへおや子哉」と詠んでいる。後に父を慕ってこの地までやってきた石童丸も父にならって地藏尊を刻み、建保四年（一二一六）七月に六十三歳で没したといわれている。この二体の地藏尊が刈萱親子地藏尊であるといわれている。

一茶の家庭も崩壊してしまった。一茶の悲しみは筆舌に尽くしがたい。五十二歳でやつと得た妻、妻がもうけた四人の子ども、一茶は五人の葬儀をしたのである。つかの間の家族と、ぬくもりのある家庭、それらが一瞬にして消え果て、さらに家までも大火で失われてしまったのである。説経節の「説経かるかや」を一茶はどのような思いで聞いたことであろう。この世に一人残された一茶は、益々信仰心を深めていったことであろうことは確

⁶⁸ 前掲『説経節』、六十一頁。

⁶⁹ 同上、六十三～六十四頁。

かである。

最後に、一茶の「家庭の有様」について、門人の村松春甫が残した随筆『秋未記』から引いてみる。中村貫一稿「俳諧寺物語」所載の一文である。

師の住みの東南の一間こそ朝日ははれしうさし入れ。朽ちたる小椽あり。仏龕おかれて、たえず開かれしままに余香流るるも尊く、かたはらの壁にそひて書物など丹念につまれ、あやしげなる小机窓にそひてあれば片方にはみなれたる頭陀などうち並びて、書ものの開かれしに筆をそへてあるもゆかし。次の間こそ茶の間とも申すべけれ。炬燵きりひらき、かたへのうそぐらきにしとね敷きのべしまなるに、いつも行燈のともされてありけるこそいとをかしくなん。壁一重隣より薫うつ砧、小隈にひるなく兎も天下泰平、五穀豊満の師が慈悲の使にやあらめ。用あれば隣へ柱うちならすことも万はよけれ、悪しかれ。人の訪へば切炉の櫓折りくべて煤びし湯立釜の下に焚きそそり、焚きそそりしたまふ。深々としたる茶碗渋めけるに、師は無雑作にかたはらより徳利引きよせ、酒などふるまひたまひけるも今は忍び草。門とちて葎もしげりつらめなど思ひめぐらせば、御面かげ目のあたりに浮び出でて、

眼につくや炬燵の一間明たまで

春甫⁷⁰

別室に寝具の蒲団を敷き延べたままであったという様子は、農家にあつては当然のことで、「いつも行燈がともされていた」という描写が印象的である。夜遅くまで書きものをしていたのか、それとも部屋の中が暗かったのでそうしていたのか、いずれにしても一茶はここで一時は幸せな家庭を営んだのである。もちろんこの一茶の家も、弟弥兵衛と折半した家である。一茶は、このような生活をしながら北信濃の門人達の家々を巡回指導し、一茶社中を構築していったのであった。この頃の一茶は、浄土真宗を心より信仰し、真に自然法爾の境に達していたということもできよう。

一茶が帰郷と同時に一茶社中構成を容易にできたのか。上水内郡では寛政末の寺子屋の師匠が半分以上農民の出身で、宗教家や武士の師匠は少なく、信州の学問水準は高く、江戸の中期から後期にはだれもが皆俳諧を詠めるほどの知識をもっていた。このことについて、『近世信濃文化史』で土屋弼太郎氏は次のように述べている。

⁷⁰ 『一茶全集』六、二五九頁。

信州の寺子屋数は寛政末までに七十九塾を数えている。これを「日本教育史資料」所載の寛政末までの全国寺子屋業数五百に比べてみると十五・八パーセントになる。全国の約六分の一である。信州の寺子屋で一番めだっていることは、その数が非常に多く一般に普及していたことである。

おそらく俳諧ぐらい広く庶民に親しまれた文芸はないであろう。至る所の寺や宮にかかげられている俳句の奉納額は、今でも相当数に上っている。そしてそこに名を連ねている俳人たちの中の多くは、手に鋤をとって田の畔に句をひねっていた人々である。なおこの額に名を連ねた俳人の外に、名を連ねられなかった無数の俳人がいたわけである。だから少し読み書きのできた人は、皆俳句を作っていたといってもよいくらいであった⁷¹。

こうした記述から考えれば、一茶も故郷に定住すれば、俳諧宗匠か、寺子屋の師匠で生計は立つと思っていたかも知れない。

一茶は幼少時より門徒宗への関心を持ち、長じてからも親鸞の『正信念仏偈』や蓮如の『御文章』を日々唱文していた。父弥五兵衛の法話や読誦などの習俗仏教の影響も強く受けて守愚の自覚を持つようになっていた。文政二年十二月二十九日に、「問いていはく、いか様に心得たらんには、御流儀に叶ひ侍りなん。答へていはく、ただ自力他力何のかのいふ芥もくたを、さらりとちくらが沖へ流して、さて後生の一大事は、其身を如来の御前に投げ出して、地獄なりとも極楽なりとも、あなた様の御はからひ次第あそばされくださりませと、御頼み申ばかり也。如期決定しての上は、なむ阿みだ仏といふ口の下より、欲の網をはる野に手長蜘蛛の行なひして、人の目を霞めせ渡る雁のかりそめにも我が田へ水を引く盗み心ゆめゆめ持つべからず。しかる時はあながち作り声して念仏申に不及、ねがはずとも仏は守り給ふべし。是則当流の安心と申せ。穴かしこ、ともかくもあなた任せのとしの暮、五十七歳一茶」⁷²と、『おらが春』に記しているように、『御文章』や『領解文』などを引きながら、『教行信証』で説かれているような信者になろうとしていたのである。

文政二年六月二十一日に、またとない掌中の玉ともいうべき愛娘さとを失った悲しみから、他力にすぎることによって救われたいと努力しているのである。文化七年十月十五日の記録にはめずらしい一茶の一面が記されている。

⁷¹ 土屋弼太郎『近世信濃文化史』（信濃教育出版部、一九六二年）、一二六頁。

⁷² 『一茶全集』六、一五六～一五七頁。

田川の舟を渡りて、高岡の北通り金江津を川北になして行く。日ごろ時雨にぬかりみおほく、一足のあたる所は帯広さ程なる片道つきぬ。しかるに口とりのなき馬のしたたか稲を負て、三、四疋とろとろ来かかるに、せんすべなく猶予ひける。先に來たる馬のがぶがぶ泥の中へよけてゆく。迹の馬も引つづきてかたのごとくなして、又もとの道に出で、ゆさゆさと急ぎける。彼は重荷を負たれば身ぢろぎ自由ならず。

私は頭陀袋ひとつ、いか様にも片脇へよりてこそ本意なるべけれ。馬の心に無法者とや思ひたらむ。あまり不便さに提に休らひ、見おくりければ、しばらくして、かへりて主をよびつつ草はみて佇む。やがて刈穂をそれぞれにゆひつけて、人に物いふやうに追立れば、聞分て家の方へ歩み出しぬ。田の人に問へば「けふも今九ッ時迄に七度かくして通ひける」となむかたる。おのれ人には常の産となすべき事もしらず、人の情にてながらふるは、物いはぬちくるいにはづかしき境界也けり。

ちる木の葉渡せ念仏通りけり 一茶⁷³

運座の講話としては、いかにも人の心を揺さぶり感銘深く聞かせる事のできる話である。自分のような愚かな、どうしようもない人間を阿弥陀仏は救ってくれると考え、阿弥陀仏を渴仰し救われたいと願っている人々のことを「妙好人」という。「妙好人」は概して自分を愚かな人間であると思っている。それゆえに、一茶も「春立つや愚の上に又愚にかへる」という句を詠んだのであろう。

⁷³ 『一茶全集』三、九十一頁。

第八章 渭浜庵執筆から宗匠へ

第一節 渭浜庵門弟一茶

小林一茶の人生を簡略にまとめると、以下のようになろう。十四歳で江戸へ奉公に出て辛酸をなめ、二十五歳の頃に葛飾派に入門。三十歳から三十六歳まで関西、四国、九州方面を遊歴し、五十歳で遺産問題を解決し、五十一歳で定住のため信濃に帰郷。折々は江戸へ出て新風に接し、精進を怠らずひたすら新風作りに精力を注ぎ、文化十一年、五十二歳で菊女と結婚。その翌々年文化十三年（一八一六）五月十一日に長男千太郎が生後一カ月で死亡。文政二年（一八一九）六月二十一日に長女さと死亡。文政三年（一八二〇）十月十六日に一茶五十八歳で中風に倒れる。文政四年（一八二一）一月十一日次男石太郎死亡。文政六年五月十二日妻菊女死亡。同年十二月二十一日三男金三郎死亡。文政七年五月、六十二歳で後妻雪女を迎えるが八月、二ヵ月余りで離縁。翌年三人目の妻「やを」を迎えるも間もなく中風が再発。六十五歳の時に柏原に大火が起こり家が全焼。残った土蔵に住むうちに三度目に起こった中風のために没する。享年六十五歳。没後一年を経て四月に未亡人やをが娘「やた」を産む。

大方はこうした略歴になる。よく生き抜いたというべきであろう。これほどまで悪条件がふりかかった人もまれであろう。一茶文学の頂点とみなされる『おらが春』は五十七歳の作である。極めて多作であった。

一茶がはじめて江戸に足を踏み入れたのが、安永五年（一七七七）十四歳の時である。江戸からの最後の帰郷が、文化十四年（一八一七）の五十五歳の時であるから凡そ四十年間江戸に在住していたことになる。江戸での孤独貧寒の生活を慰めたのは、大方は江戸の町見物であった。一茶は多くの名所を歩いている。そうした逍遙に同行したのが、寺子屋師匠柳沢勇蔵（滝耕舜）、幕府御蔵米札差商人夏目成美、木更津での一茶の宿泊先の主人で門人の雨十¹、それに俳友の松井であった。一茶の句日記に「文化七年九月十四日晴松井ト

¹ 生没年不詳。現在の千葉県木更津市の人。『俳家通称録』（小林葛古編）に、「木更津中町、石川八左衛門」とある。あるいは、杉谷徳蔵『小林一茶と房総の俳人たち』にある、八郎左衛門が正しいか。一茶とはまことに親しく、木更津に赴いた折には必ず宿泊している。雨十が江戸に出ると、二人で浅草寺や根津権現の開帳を見物したりした。杉谷徳蔵氏によれば、雨十の家系は名主をつとめた名家であったが、明治になり廃家したという。

浅草参」²とある。二人の親交ぶりは『七番日記』に随所に見られる。一茶は、松井という人物を最も信頼できる友人と考え、家族のように松井家に出入りしていた。松井は、日本橋という最も便利な場所の真中に住居をかまえて商人宿を営んでいたのも、一茶も無賃で宿泊を重ねていた。俳号を其翠楼松井という。寛政十一年に加藤野逸が編集した歳旦帳『其日庵歳旦』に、「其翠楼松井・まつみ」とあるところから、一茶とは同門の葛飾系であった。『七番日記』文化十二年十二月八日の記事には、「松井煤取、大酔シテ出肆ニ帰ル……」³とある。また文化九年十月二十三日の記事には「松井夷講」⁴などとあるところから、日本橋の久松町に本宅があり、松井が経営する店は別にある商人宿であったことがわかる。松井は、延享二年（一七四五）の生まれで、文化十年六十九歳で没している。一茶より十八歳の年長ということになる。矢羽勝幸氏の調査によれば、『七番日記』の中から一茶の寄宿先を数えれば、松井、成美、一瓢（日暮里・本行寺）となり、一茶の日記に記された宿泊日数から計算すると、月毎の合計が百二十七泊、一年の三分の一は松井家におり、ほとんど準家族の扱いであったのが分かる。しかし、松井の経営する宿は無宿人、帳抜け人の滞在する、請人宿であったことがわかった。一茶はここを請人宿あるいは宿泊所とていたのである。

松井は、一茶と同じく、神仏に対する信仰心が強かった。『七番日記』には、文化五年二月二十五日の亀井戸天神参拝、同年四月八日の西本願寺灌仏、同七年八月二十五日の六番阿弥陀参り、同年九月十四日の浅草寺参詣など、松井と同行した記録がある。同年十月八日条には「松井と元善光寺開帳参、公のサワリ有て閉帳、十四日迄日延寺雑司谷参」⁵という書き込みが見える。さらに、雑司谷参については『文化三年～八年句日記写』に、「松井に立ちよりけるに、けふは雑司谷の会式参りすといふ。我三十年あまり逗留するうちに一度も足をはこびたることなければ幸に打連れてゆく」⁶という記録がある。一茶と松井の交渉が、神社や仏閣に関係する点において一致している。

一茶が葛飾派に入門するようになるのは、天明二年（一七八二）二十歳の時に、松戸の馬橋で油商を営む俳人大川立砂⁷宅に奉公したという伝承がその根拠となっている。一茶は、

² 『一茶全集』三、八十五頁。

³ 同上、三九九頁。

⁴ 同上、一九三頁。

⁵ 同上、八十九～九十頁。

⁶ 『一茶全集』二、五八一頁。

⁷ 生年不詳、没年寛政十一年（一七九九）十一月二日。本名・大川平右衛門、別号・栢日庵、糸瓜坊。現在の千葉県松戸市馬橋の富裕な油商。一茶は少年時代、この家に奉公した。俳諧は森田元夢

葛飾派に入門した時点から、素丸と竹阿の二人の師に仕えていた。その俳諧初学の頃、葛飾派の三世溝口素丸こと渭浜庵の執筆役であったことを明記している資料が三点ある。ひとつは、天明七年成立の『真左古』に「渭浜庵執筆」の肩書きで一茶の一句が入集されている⁸。ふたつ目は素丸門天地庵我泉の寛政三年歳旦帳『元除』に、「渭浜庵執筆」の肩書きで一句入集、さらにひとつは寛政三年執筆の一文「留別渭浜庵」にある。渭浜庵は、『葛飾正統系図』や『葛飾焦門分脈系図』の素丸の条にも記すように、隅田川の河口に臨む霊岸島内の浜町に寓居したおりに使用し始め、隅田川を中国の渭水に見立てて、そのほとりの浜町に掛けた雅称であった。葛飾派三世溝口素丸の隠居宅は、「本所割下水長崎町中ノ橋近所」であったこと、素丸自筆の俳人住所録にある。天明五年頃に浜町に寓居し、ほぼその時点から渭浜庵を号するようになったようで、一茶の執筆役就任は、前記『真左古』の成立時より一兩年を遡る天明五年ないし六年頃と考えられる。『真左古』にある天明七年（一七八七）説に従えば一茶二十五歳となる。寛政三年（一七九一）の「留別渭浜庵」によれば一茶二十九歳となる。いずれも一茶が江戸に出て十年か十五年となり、一茶が並々ならぬ俳諧の素質を備えていたことといわざるを得ない。

寛政三年の素丸歳旦帖『辛亥元除遍覧』に、一茶の句が三句記されている。

鶏鐘の鳴りしづまつて初日哉	一茶
富士ばかり高ミで笑ふ雪解哉	〃
年の暮人に物やる蔵もがな	〃

この年の三月二十六日に一茶は江戸を発って下総を巡り、四月八日行徳から舟で江戸に帰り、父の病気を見舞うため、四月十日の日に本郷から中山道を帰途についた。葛飾派の総帥渭浜庵素丸に別れるに当たり、「留別渭浜庵」という一文を残している。

留別渭浜庵 一茶述

かく賤しかりし身をも御取立下され、すでに執筆の役を蒙りしが、おもはずも遠国のたらちね病軀たゞならねば、三十日余りの御いとまいただくことの有難く、若し父

に学び、馬橋・小金地方のリーダーであり、天明二年に判者となった。著書に『はいかいまつのいろ』がある。一茶は、「栢日庵は此道に入始めてよりのちなみにして交り他にことなれり」と書いている。

⁸『真左古』は『関係俳書』の一部として『一茶全集』八に収録されている。

本復もあらば、とみに帰参して、亦々御召つかひえの程奉希物ならし。

華のもと是非来て除掃勤ばや

惣御連中へ留別

華の友に又逢ふ迄は幾春や 一茶⁹

師匠の素丸に別れの一文を提出し一茶が故郷に向かったのは、寛政三年（一七九一）四月十日であった。故郷柏原を出て実に十四年ぶりの帰郷であった。四月十八日、千曲川を渡って善光寺に参詣した後、同日夜刻柏原に帰着した。この旅を素材として一茶の最初の紀行文『寛政三年紀行』（文化三年から五年の間に成稿をみたとされている）が成った。柏原に到着した様子は「灯をとる此旧里に入。日比心にかけて来たる甲斐ありて、父母すくやかなる顔を見ることのうれしく、めでたく、ありがたく、浮木にあへる亀のごとく、闇夜に見たる星にひとしく、あまりのよろこびにけされて、しばらくこと葉も出ざりけり。門の木も先つゝがなし夕涼」¹⁰とある。文章の最後に置いた発句も、「まずたのむ椎の木のある門出かな」を模倣し、『寛政三年紀行』は全体に芭蕉の『野ざらし紀行』中の「ある坊に一夜をかりて」などのもじりがあるが、素丸の執筆であることが何よりの土産であった。いわば故郷に錦を飾る旅といってもよい。これは芭蕉の最後の紀行文にある、故郷にはじめて帰り、その後、二度と伊賀に戻らなかったことに思いをいたし、自分の帰郷への初旅を強調するために、全体的に芭蕉を意識した文章となっている。

この旅に出る前に一茶は馬橋の大川立砂、我孫子、布川、田川、新川を廻り葛飾派の人々を訪れた後に一度江戸に戻り、中山道を一路故郷柏原に向かった。布川の仁左衛門の新居を訪れ家を誉める「新家記」という一文を残し、そこに「蓮の花虱を捨て去るばかり也」という句を添えている。風光明媚な地に住み、心をやしない、世の中の常ならぬを觀じ、夕暮の鐘に仏を願うなかだちと思い、折々の白雲に心を安めることだろうと書き、続けて、ホトトギスと聞けば「かしましく鳴とて」憎み、「たゞ旅に寝ころぶのみ」、「是あたら景色の罪人ともいふべし」と書いている。いかにも一茶らしいが、これは芭蕉の「空山に虱を捫つて座す」¹¹、あるいは「蚤虱馬の尿する枕元」¹²といった句に影響されたものといえよう。寝ころぶのみの放浪者、罪人、蚤・虱をつぶすだけの世に役に立たない存在という認

⁹ 『一茶全集』別巻、二四七、二四六頁。

¹⁰ 『一茶全集』五、二十二～二十三頁。

¹¹ 日本俳文学大系『芭蕉全集』、五四一頁。

¹² 同上、四七二頁。

識である。

一茶は早くから芭蕉を意識した。王朝文化以来の美意識に反発し、当時すでに神となっていた芭蕉とその俳諧への批評までも心に置いていたのである。王朝文化の美意識は、雪、月、花である。この三美の意識は日本の詩歌の代表的な題材である。ちなみにこの三美の意識を、芭蕉と一茶の句で比較してみよう。芭蕉の句は『芭蕉集』より引く。

馬をさへながむる雪の朝哉	芭蕉
二人見し雪は今年も降りけるか	〃
少将のあまの咄や志賀の雪	〃
山に雪降とて耳の鳴にけり	一茶
しなのちや意地にかゝつて雪の降	〃
小便所の油火にちる粉雪哉	〃
四方より花吹入てにほの波	芭蕉
何桜かざくら銭の世なりけり	一茶
月清し遊行のもてる砂の上	芭蕉
姥捨た奴も一つの月夜哉	一茶

こうして対比してみると、二人の意識の違いも歴然としている。芭蕉は和歌の中の雪月花の詩美を基準としているが、一茶はあくまでも唯今の暮らしの中のものとして、みずからの現在の姿を詠んで日常的現実的に扱っている。美の内容が芭蕉とはっきりと異なっている。一茶の体には黒姫高原の風土が刻み込まれ、江戸での青年期の体験が刻み込まれたいわば生活者の文化感覚といえるものが混然となって、一茶という特異な人物をつくりあげているのである。そうだとすれば一茶という人物をつくりあげた場所も大いに関係するはずである。一茶の故郷柏原は幼少年期と晩年である。一茶は江戸で四十年をすごした。六十五歳の人生のうち四十年であるから人生の大半を江戸で暮らしたことになり、いわば一茶は江戸の通人といってもよいのであるが、生涯信濃の風土性を失わなかった。それが一茶のリアリズムであった。

第二節 一茶の住居

江戸に出てからしばらくの間、宿泊についての記録は見当たらない。だが、幼い時より俳諧にふれていたことは確かである。一茶は俳人としての出発の当初「圀橋」と号した。相州藤沢の堀内千珏という人が、自邸内の天神祠前に奉納された句を集めたなかに、葛飾派の総帥素丸と共に圀橋の句があったといわれている¹³。天明三年のもので、この句が一茶のものならば二十一歳の時である。また信州佐久郡上海瀬村新海米翁の米寿記念集『真左古』には天明七年「七十八翁素丸」の序があり、この集に「渭浜庵執筆一茶」とある。天明七年には『白砂人集』を書き写し、「天明七申霜月吉日、二六庵於机下写之小林圀橋」¹⁴と奥書をしている。この資料に疑念を持つ人もあるが、後の一茶の筆跡の書き込みがあり、一茶の手拓本であることは間違いなく、これが現存する一茶の最も若い筆跡であり、これによれば一茶二十五歳となる。天明八年には『俳諧秘伝一紙本定』と題する書き写しの表紙に、「今日庵内菊明」と書かれ、「今日庵内」という所を墨削し「天明八申ノ八月法眼苔翁ヨリ求之、蝸牛庵菊明」と奥書している。また一茶に伝わる前の人持ちの奥書には「この本は木者庵湖十（其角門、元文三年没、六十三歳）の門人仙人力斎藤浮山から法眼苔翁に伝はったものである」と記されている。

こうした資料から一茶は、すでに二十一歳頃から江戸の俳壇で認められつつあったことがわかる。故郷柏原を出てから僅か五年である。それではこの間、一茶は江戸のどこで生活をしていたのであろう。江戸に出た一茶は千葉県松戸市馬橋の大川平右衛門、別号栢日庵糸瓜坊という人の家に奉公したといわれている。豊かな油商で俳諧を森田元夢に学び、馬橋、小金原地方のリーダーであった。天明二年葛飾派の判者となり、記念集『はいかいまつのいろ』を刊行した。一茶はこの時二十歳で、これを機に溝口素丸門人になったと一説に伝わっている。大川立砂は寛政十一年十一月二日に没している。一茶は立砂の「挽歌」に「栢日庵は此道に入始めてよりのちなみにして交り他にことなれり」¹⁵と記している。息子の斗圀は父と一茶の交際をひきつぎ、物心両面にわたって生涯一茶を庇護した。

一茶はこの後各地を行脚して歩いたので、定住の地はなかったといえよう。やがて四十歳の頃には葛飾派の『其日庵歳旦帖』には常に入集するようになったことから、住居を現在の東京都江東区大島五丁目愛宕山勝智院に移した。豎川五ツ目の渡しに近い江東区大島

¹³ 小林計一郎、前掲『一茶その生涯と文学』、一〇五頁。

¹⁴ 同上、一八一頁。

¹⁵ 『一茶全集』五、一一七頁。

五丁目の愛宕神社であるとされている（勝智院は現在佐倉市へ移転され無住となっているが、稲荷社のみが大島稲荷神社として現存している）。勝智院の住職栄順法師は、葛飾派の俳人白布とって、同じ俳系に属することから一茶も愛宕社に世話になったのである。文化元年（享和四年二月十一日改元）、一茶は二年間住み慣れた勝智院を去って、相生町五丁目の借家に住むようになる。四月九日に葛飾愛宕山大島寺勝智院住職栄順法印が遷化したためである。四月十五日葬儀が行われ、五月一日に勝智院の院代が愛宕社の什物改めに来て、勝智院の檀徒総代から立退きを命じられた（相生町五丁目は現在、東京都墨田区緑町一丁目となっている）。豎川通り二之橋の北側にあたり、庭には竹が植えてあり富士山などもよく見えた。この時期一茶は、豎川辺り本所に住んでいた柳沢勇蔵という元武士で、寺子屋宗匠をしていた滝耕舜と親しくなり、『一茶園月並』発行の手伝いもしてもらっていた。一茶とはよほど馬の合った人物であったようである。「氣にいらぬ家も三とせの月夜哉」と詠んで、多くの友人知己を心易く実に気安く泊めていた。一茶の店借屋は、一茶が文化五年祖母の三十三回忌法要に帰郷している間に家主が他人に貸してしまった。ここを追われた一茶は、八丁堀三丁目に住んだ（東京都中央区の本八丁堀一～五丁目までは江戸の治安を担当した与力、同心が主に居住した町で、ここに一年余りの暮らしをした）。その間に、一茶の庇護者の一人であった其翠楼松井が住む日本橋久松町に移った。松井は一茶と最も親しい友人で、文化八年にはこの家に百二十七日間も逗留している。文化十年五月に松井が他界した後も、遺族は変わらず一茶を厚遇した。

また現在の東京都墨田区東駒形一丁目、隅田川大川橋近くの北本所番場町の夏目成美の別宅にもよく宿泊をした。八丁堀に一年余りをすごした一茶は、文化六年十二月から翌年一月頃まで坂本町に借家を構えた（現在の東京都台東区下谷一丁目と二丁目、または根岸一丁目から三丁目あたりが旧坂本町に相当する）。一茶俳文中屈指の名文とされる「上野の仮住居」は、この家に移ってまもなく執筆されたものである。

一茶は常に芭蕉の存在を意識し続けていた。葛飾派の三世溝口素丸は渭浜庵を名乗った。葛飾派の祖は山口素堂であり、素堂は其日庵を名乗っている。素堂は、上野不忍池畔に隠棲して素堂と改めた。貞享二、三年（一六八六）頃に葛飾に居を移し、蕉門の人々と交わり葛飾隠士と号していた。延宝七年に三十八歳で幕府奥御書院番を致仕して隠棲した。貞享三年に芭蕉が催した俳諧句合集『蛙合』¹⁶に出句して蕉風の俳人となった。素堂は芭蕉

¹⁶ 蛙合は平安時代に和歌の優劣を競うために行われた行事。左右二十人ずつ一組となって、それぞれが和歌を詠みあい、判者が優劣を判定する。寛平の頃（九世紀末）から盛んになり、やがてこの

より二歳年長で、二人とも京で北村季吟に国学と俳諧を学んだ同門であった。三世素丸（素堂）は、隅田川の河口の霊岸島内の浜町に寓居したので渭浜庵を名乗った。隅田川のほとりに隠棲することは芭蕉という宗祖以来の葛飾派の伝統でもあった。

深川に隠棲した芭蕉も、ここに住み続けたわけでもない。ひと口に芭蕉庵といっても三カ所ある。その三カ所の位置は暉峻康隆氏、松尾靖秋氏によってほぼ解明されている。芭蕉が数え年三十七歳の年にはじめて深川へ転居したときを、第一次芭蕉庵といっている。延宝八年（一六八〇）冬十月、森下町長慶寺門前（現在の江東区森下二丁目）であった。この時の庵名は泊船堂、辺りは町家もまばらで隅田川まで五百メートル、市川行徳へ通じる小名木川まで四百メートル、西の六間堀や東の五間堀が間近で、船の往来を目の当たりで見ることができたので、杜甫の詩文の一節から泊船堂と名付けた。入庵した翌年に門人の李下が芭蕉一株を植えてくれた。それが繁るにつれて訪れる人々が増え、芭蕉庵と呼ぶようになっていた。本人も芭蕉庵桃青と初めは名乗ったが、やがて単に芭蕉というようになっていった。ところが天和二年（一六八二）十二月二十八日、駒込から出火した江戸の大火が隅田川を越えて深川一帯に燃えひろがり、芭蕉庵も類焼してしまった。焼け出された芭蕉は門人の高山麋峙を頼って甲州の谷村¹⁷へ疎開した。一年後の天和三年（一六八三）十一月に芭蕉庵が弟子達の努力によって再建された。ここにもまた新しい芭蕉の株が植えられた。再建された芭蕉庵は、旗本森田惣左衛門の下屋敷（現在の江東区常盤一丁目）の一部を借用した。元は船番所であったがそれなりの風情を持っており「古池や蛙飛こむ水のおと」の句は、在庵中の貞享三年（一六八六）の春に詠まれ、ここに在庵したのは五年三カ月であった。芭蕉は在庵中に『野ざらし紀行』と『笈の小文』の二つの大きな旅をしているので、実質在庵は正味三年十カ月ということになる。元禄二年（一六八九）二月末に、『おくのほそ道』の旅立ちに際して芭蕉庵を人に譲り渡した。元禄五年（一六九二）五月中旬、前の庵のほど近い所の現在の常盤一丁目六番地の江東区芭蕉記念館界隈に三棟目の芭蕉庵が建ち、知人に預けておいた芭蕉の株が移し植えられ、推敲に推敲を重ねた『おくのほそ道』が元禄七年四月に成稿した。その翌年の五月、芭蕉は、ひとまず伊賀上野へ帰郷するため旅立ったが、深川へは不帰の人となり十月十二日に大坂で客死した。

判者が専門歌人となり、家職となっていた。俳諧連歌についてもこれが踏襲され、「合わせ」「句合わせ」が行われた。

¹⁷ 芭蕉は天和二年に江戸の大火（八百屋お七の火事）にあい、芭蕉庵も全焼した。芭蕉は大火から逃れ、甲州谷村（現在の山梨県都留市）の知人のもとに身を寄せた。この大火が芭蕉をして無常を悟らせ、やがて漢詩を生かした俳句、新しい俳諧を確立させていったきっかけとなった。

芭蕉と深川との関わりは非常に深い。深川は江戸府外の新興開発地であり、しばらく身を隠すにはもって来いの場所でもあった。市街地日本橋の小田原町の喧噪を避けて、当時流行していた談林俳諧と呼ばれる平俗で通俗的な詩的傾向から脱却し、新風創出を目指すためでもあった。この三度にわたる芭蕉庵での蕉風句を比較すると、芭蕉が常に追い求めていた新風の変化がよくわかる。その句風にふさわしい風格が芭蕉翁に備わり、俳諧宗匠という品格をも深川の地が与え続けたことがよくわかる。蕪村は古池の句に対して、「古池の蛙老ゆく落葉哉」という句を残している。

貞享三年（一六八六）閏三月、一冊の本がベストセラーとなった。『俳諧句合¹⁸・蛙合』である。内題は、「可般図」とあり編者は半一・仙化編となっている。貞享三年の春に深川芭蕉庵において、芭蕉や素堂ほか蕉門諸家が会して二十番の「蛙の句合」が举行された。その時の衆議判を務めたのが仙化であり、この本は仙化が書きとめたもので、江戸西村梅風軒から刊行されている。第一番左は、「古池や蛙飛こむ水のおと 芭蕉」とあり、右は「いたいけに蛙つくばふ浮葉哉 仙化」とある。「判は持ち」とあるから、左右引き分け互角ということである。芭蕉の古池の句が喧伝される端緒となった集である。ただ同じ貞享三年刊の『庵桜』という本には、「古池や蛙飛んだる水の音 芭蕉翁桃青」という作がある。蕪村には「飛込んで古歌洗ふ蛙かな」という句がある。この句は山崎宗鑑の「手をついて歌申しあぐる蛙かな」をもあわせて踏まえている。宗鑑の句はすまし顔で鳴いている蛙の様子が、貴人の前でかしこまって歌を詠じているような姿だという意味である。宗鑑の蛙は『古今集』の仮名序にいう「花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞けば生きとし生けるものいづれか歌を詠まざりける」にちなんでいる。古来和歌の世界では、鳴く蛙しか詠まれなかったが、芭蕉のはじめて飛び込む蛙を詠んだ。「古歌洗ふ」とは、和歌の伝統から脱却したその革新性をいっている。古池の句が当時評判になったのはまさにこの点にあった。その音で人々を驚かせた芭蕉の蛙は、まことに大変な蛙だったのである。しかしこの句に対抗した仙化の句が「持ち」となっていたことも、これが喧伝される端緒となっていたことは確かなことである。

一茶も蛙の句を沢山詠んでいる。およそ二百句がある。よく知られた句には「瘦蛙まけるな一茶是に有」という句や、「西行のやうに据つて鳴く蛙」「ゆうぜんとして山を見る蛙哉」「夕不二に尻を並べてなく蛙」など、一茶の動物を詠んだ他の句と共によく知られてい

¹⁸ 俳諧連歌が行われていた時代、和歌の歌合にならって句合が行われた。一題の季題で同じ句を詠んで優劣を競った。しかし、俳諧が発句ばやりになると必要性を失い、次第に行われなくなった。

る。一茶の「蛙の句」数句を次に記す。

親分と見えて上座に鳴く蛙	一茶
小便を致しながらも鳴く蛙	〃
散る花にのさばり廻る蛙哉	〃
浦人のお飯の上もかはづ哉	〃
我を見てにがひ顔する蛙哉	〃
小便の滝を見せうぞ鳴く蛙	〃
かゝる世に何をほたへて鳴く蛙	〃
草かげや何をぶつくさゆふ蛙	〃
散る花を口明けて待つかはづ哉	〃
ふんどしのやうなもの引く蛙哉	〃
我杖と知るやじろじろ鳴く蛙	〃
草蔭につんとしている蛙かな	〃
とは申しながらとや又とぶ蛙	〃
向き合つて何やら弁をふる蛙	〃

第三節 芭蕉翁の臍

一茶の『七番日記』から蛙の句を抽出したが、この句日記は文化七年（一八一〇）正月から文政元年（一八一八）十二月までのもので、現存する一茶の日記、句帖類のなかで量的にも最大であるばかりでなく、内容的にも四十八歳から五十六歳までの帰郷定住を軸としているので、一茶の積極的な活動期のものである。一茶調の成熟期のものであるから、いかにも人間臭い句日記なのである。この句日記に蛙の句が多いことも、その時期の一茶の状態を示しているわけで、蛙という小動物の面白さ、生々しさ、人間臭さに一茶は魅かれるとともに、その捉え方や描き方が、いかにも自由で、しかも屈折に富んでいて、まるで肉体そのものを書きつけたような韻律をつくり出している。「小便と蛙」という配合の生々しさ。「夕不二」「ゆうぜん」に見受ける視角の奇抜さ、蛙に「いとことはとこ」「親分子分」「にがひ顔する蛙」「つんとしている蛙」など自由な発想と擬人化、気軽な諧謔味「瘦

蛙」への激励、これらの句の持ち味は葛飾派の田舎風と、蕪村系中興俳諧の繊細華麗な情感の表出との双方の溶け合いが、一茶の体内で行われていたことを感じさせる。一茶は生きるための行動へのエネルギーを、このような小動物を擬人化して表現することで、おのれを奮い立たせていたのである。こうした小動物や虫にまで同情を寄せたと言え、「慈愛」というべきであろう。生あるものに共感し、虫に共鳴したのならば確かにその通りだが、逆に見れば、一茶が人間を虫にたとえているともいえるのである。そうした寓話は数多くあるが、一茶の場合は生々しさがあ、それは愛情の温かさではなく、皮肉や風刺の暗さなのかも知れない。

一茶は、生きるためのエネルギーを行動で奮い立たせ、エネルギーを燃やすなかで双方の融合を栄養としながら一茶独特の作風を獲得していったのである。新鮮な視覚で対照を凝視し、それを方言で一層親しみやすくする。皮肉と風刺的で逆説的な見方が、こんな視角を生み出したといえる。この視覚は文化文政期という庶民の自由さが招いた視覚であり、北斎の浮世絵などに共通する視角である。「菜の花のとつばづれ也ふじの山」や「ゆうぜんとして不二を見る蛙哉」は、まさに北斎の絵画の視線と視角に通じている。北斎の富士の絵に共通する視角は化政期という、庶民が生み出した滑稽ぶりと大ぶりと見るのであり、るのである。

天和二年（一六八二）十二月二十八日の大火によって芭蕉庵も類焼し、芭蕉が甲州の谷村へ疎開したことは前述した。この時芭蕉庵を去るに当たって「栖去之弁」という一文を書いた。「なし得たり、風情終に菰をかぶらんとは」¹⁹と述べている。俳諧一筋のため各地を行脚し、菰をかぶる乞食となり本望を果たしたというよりは、実際焼け出されて菰をかぶる状態になってはじめて真の風情、俳諧の誠を得るに到ったということであろう。名利一切を捨てて俳諧一筋になった時に、はじめて精神がひらけ、詩が見えて来ると述べたのであった。

芭蕉は『おくのほそ道』から帰ったその翌春、「薦を着て誰人みす花のはる」²⁰と詠んでいる。西行法師の『撰集抄』を引用している句で、乞食のなかに立派な世捨人のいることもある。そこに菰をかぶっている人ももしや高い身分のあるどなた様ではないでしょうかという意味で、芭蕉は「菰をかぶること」を俳諧の誠を求める理想の状態と見ていたのである。また芭蕉は、「高悟帰俗」とか「不易流行」とも述べている。芭蕉はこのように

¹⁹ 古典俳文学集『芭蕉集』、五五五頁。

²⁰ 同上、五九九頁。

詠んでいても、援助を惜しまない弟子達が沢山いて、実際の生活では菰をかぶる心配のない状態であった。菰をかぶり乞食生活になるということについて、芭蕉は当初そういう超俗の心意が土台にはあったのであろうが、「高悟帰俗」とは俗世間にあつて俗世間から超越するという意味であった。「薦を着て誰人ゐます花のはる」と詠んだ時点で、芭蕉は当時すでに生活の心配を要しない有名人であった。一茶が生きた時代には芭蕉はすでに「桃青靈神」「飛音大明神」の号を賜り、「花の下宗匠」²¹というすべての俳諧師の統帥であった。けなすことのできない神格的存在であったのである。

一茶は「生きるため」に行脚を続けている。「生きること」も自分自身によって行わなければならない人生であった。

月花や四十九年のむだ歩き	一茶
春立つや菰もかぶらず五十年	〃
五十年あるも不思議ぞ花の春	〃
春立つや先人間の五十年	〃
おのれやれ今や五十の花の春	〃
秋の風乞食は我を見くらぶる	〃
芭蕉翁の臍をかちつて夕涼	〃

一茶は五十歳まで「生きてこられた」ことを率直に喜んでいるのである。「不易流行」や「高悟帰俗」ということを考えれば、一茶は自分の心の持ち方次第だろうと考えた。俗世間のなかにあつて毎日を生きることにのみを費やす。生きるためには毎日の食を得る道を講じ、世間のなかで暮らしてゆく道を固めて俳諧の修業に励むしかない、一茶はそう思ったに違いない。

芭蕉の時代のような「座」と「連衆」を大事にし、歌仙を巻く文芸共同体としての俳諧

²¹ 最高権威の宗匠の称号。花の本連歌に由来し、昌叱の時に公的な称号となる。花の本連歌は鎌倉中期から南北朝期にかけ、寺社の花の下で興行された。花鎮めの一種としての宗教的行事として起こり、当初は地下僧や市井の連歌好士らが中心であったがやがて優れた専門の連歌師が輩出するようになり、地下連歌の興隆・進展の基盤となった。連歌から俳諧連歌が盛んになると俳諧宗匠の称号に変わった。昌琢以後、幕府公許のもとに里村家が世襲するようになり、俳諧では、寛政二年（一七九〇）、二条家から暁台に允許されたのが最初で、以後明治期まで継承された。尚芭蕉長逝去直後から芭蕉塚の建立が各地でなされ幕末には一〇〇〇墓を超えていた。宝暦十一年（一七六一）刊の『諸国翁墳記』などがあり、蕉風俳諧が全国津々浦々へ伝播していった過程を知ることができる。

はとうの昔に崩壊していた。一般の嗜好は、「私の句」の時代と呼ぶ様相を呈していた。連衆が厳しく情を通い合わせ、参会者が心ひとつになって一卷の歌仙を巻く「座」の文芸は敬遠され、兼題や席題を出して発句だけを作る句座が益々盛んになって月並句会が目立ち始めていた。さらに「前句付け」²²や「笠付け」興業が繁盛した。一茶は、このあたりで江戸を去る気持ちが芽生え始めていたのであろう。「芭蕉翁の臍をかちつて夕涼」と詠んだように、江戸での四十年間に及ぶ生活の場所を深川近辺に定め、芭蕉の盟友山口素堂の葛飾派に身を置き、芭蕉を慕い、蕉門俳人として生きて来たが、「すみがまや浮世の隅のとつぱづれ」の隅田川辺りの生活も、これまでと思い定めたことであろう。芭蕉と栖を同じくする場所に生きて、「菰もかぶらず」「乞食となる」こともせず、なんとか生きながらえて来た五十年であった、という思いを強くしたに違いない。

一茶は二十九歳で俳諧師としての旅に出た。しかしこの初旅を綴った『寛政三年紀行』が書かれたのは、十五年以上も経た四十五歳前後であった。それ故にこの句のなかには、「雉鳴いて梅に乞食の世也けり」という句もある。実際この頃の徳川の治世は庶民のエネルギーが横溢し、庶民の文化が生まれ、江戸期はじまって以来の経済繁栄と文芸や芸事の飛躍的な発展の姿を呈していた。商品の生産性が高まり、貨幣経済が全国的なひろがりを見せたことによって、農民の解体化が進行して農村の貧富の差も拡大していった。その結果、農村からはみ出した貧民が江戸に集まり、江戸は百万都市に膨張した。江戸町人の七十五パーセントが要救恤民だったそうである。幕府創設期に三河から移住した日本橋の札差や魚河岸の商人達は、数で圧倒されてしまっていた。農村でも江戸でも貧富の差がひろがり、これによって農村共同体の固い結束が緩み始めていた。化政期から天保期にかけて活躍した「無宿者」といわれる渡世人は、農村を捨てて、金の大いに動く江戸や大きな宿場町で荒稼ぎをした。こうした人達は、化政期にかけて青春時代をすごした者が多かったようである。富める者達は俳諧サロンのような「俳筵」に似たものを設けて、知識人や文人墨客を集めて毎日のサロンを楽しんでいた。地方でも名主や庄屋、僧侶に神官、豪農や医家などの素封家が中心になって俳諧の会などが昼夜を分かたず、各地で催され地方俳壇が形成されていった。都市の路傍にはいたる所に乞食があふれていた。当時は貧民が多かったので当然のように乞食が多く、春にでもなればよけいに目立った。壮年、いや老年期

²² 正徳四年（一七一四）、北村季吟が『歌仙拾穂集』を刊行すると、これを俳諧の興業向け手引き集として胡水がその年の内に『前句付譏草』として出版する。万治元年（一六五八）に友次が『尾張八百韻』を刊行すると、この頃から前句付けがはじまり、江戸の元禄期から掛金をかけるようになり、再び全国に広がり懸賞付として全国に普及されるようになっていった。

に入ったとでもいうべき年齢になった一茶は、乞食を当節の風景として他人目には見ておられなかった。芭蕉の臍をかじって芭蕉と栖を同じにしたが、巡回俳諧指導に明け暮れる自分の姿を小さな動物や地上に蠢いている命ある虫などにたとえてみると、自分の暮らしもそのようなものと思ったに違いない。「秋の風乞食は我を見くらぶる」とは自分も変わりはない、という思いがつのり、「さすらひの人生」をつくづく噛みしめたことであろう。

西にうろたへ東にさすらひ、一所不住の狂人有。旦には上総に喰ひ、夕には武蔵にやどりて、しら波のよるべをしらず、たつ淡の消えやすき物から、名を一茶坊といふ²³。

宗匠として立機することが一人前の俳諧師になることである。葛飾派の地盤の土地を歩きまわって俳諧指導かたがた、江戸や廻って来た土地土地で得た噂話をサービスして、いくばくかのお鳥目をいただき、一宿一飯にあずかるしかない。貧乏たらしく、乞食のように、どこで野垂れ死にするかわからない。そう考えると、人間の一生は泡のように消えやすい、はかない人間の定めでもある。江戸に座って執筆ばかりの仕事では食ってゆけない。それもすこしばかり名がでないといけない。名が売れば雑俳相手の懸賞俳諧²⁴の点者になれるから収入もある。執筆ではとても点者に迎えてくれる催主（懸賞俳諧の興行主）などもいるはずがない。「旦には上総に喰ひ、夕には武蔵にやどり」²⁵のように、漂鳥のような乞食暮らしのなかで、自分を「遊民」と自嘲する心意も強まっていったのであろう。「牛盗人トイハルトモ、モシハ後世者、モシハ善人。モシハ仏法者トミユルヤウニ、フルマフベカラズトコソ仰セラレタリ」²⁶。牛盗人といわれようと何といわれようと、後世者や仏法者振るまいなどせず、目的だけはしっかりと果たしたい。そう思うたびに、父の遺言に随って遺言の田畑家屋敷の折半を継母と義弟に実行させようと思うようになっていた。そのような自己の浮き草のような今の生活を、「かりそめにも諾したる詞のうち捨てがたく、

²³ 『一茶』五、十五頁。

²⁴ 鎌倉時代末期に書かれた『徒然草』に、「猫また」という怪獣がいて人を襲うと聞いていた連歌好きの法師が、ある夜更け連歌の会の帰途、飼い犬にじゃれ付かれたのを「猫また」だと勘違いし川に落ち、折角の連歌の賞品（扇・小箱など）を水に浸けてしまったという話が載っている（第八十九段）。下って江戸時代になると、興行主が句を募って懸賞をかける俳諧興行が盛んになった。その後は、上五だけとか、上五を題に出して中七、下五を付けさせる「三笠付け興行」や「笠付け興行」が流行し、江戸の人々は大いにこれを楽しむようになった。雑俳の繁盛と同時に、俳諧も遊戯化し、懸賞目当てなどになった。

²⁵ 『一茶全集』五、十七頁。

²⁶ 『一茶全集』三、二一二頁。

八月四日、いまだ炎天の歩みくるしきにさへ道途して」と、『文化三～八年句日記』に書き記している²⁷。

一茶はいよいよ故郷帰住の実行を決意するのである。故郷帰住をうながした理由は当時の政策の一環でもあった。老中首座松平定信は、天明四年（一七八四）三月から寛政九年（一七九七）六月まで旧里帰農令を出し続けた。都市に集中した人口を荒廃する農村に環流させようとする政策を実行した。飢餓や貧困に対する恒常的な施策として、大名には囲米を命じ、江戸在住時に七歩積金をさせ、社倉を設置させた。年貢を減免し「人返し」を行い農村の復興を目論んだ。商人には市場独占の特権を規制し、札差に対しては棄令を実施し都市商人資本を抑制する政策を実施し功を奏したので、幕府はその後、文政、天保の三時点で江戸奉公人の帰郷令を出した。そうした世情を見た一茶もきりのよい五十歳で帰郷を決意したのであった。

たまに來た古郷の月は曇りけり	一茶
たまに來し古郷の月もなかりけり	一茶
たまたまの古郷の月も涙哉	〃
古里や又あふことも片思ひ	〃
寝にくても生在所の草の花	〃
心からしなのの雪に降られけり	〃

芭蕉も故郷をこよなく慕った。母の墓参に伊賀に帰ると、兄の半左衛門が心よく迎えてくれた。芭蕉の臍の緒を出して来て、兄弟二人して思わず涙した。「旧里や臍の緒に泣く年の暮」²⁸という句を作り一家中で墓参を済ませた。一茶の帰郷は芭蕉のようにはいかなかった。予想していたとはいえ、彼の帰郷は継母義弟の反発を招き、あまつさえ故郷の人まで三十年も故郷を離れていた男を覚えている者はいなかった。悲しいかな、宗匠として天の下に名の知られた者と、田舎わたらいの行脚俳諧師の違いである。芭蕉はどこに旅しても地方の弟子、そのなかには各藩の重臣達があまねくいた。そのためどこでも心よく迎えられたのに対し、一茶は三十六年の間、故郷の人々とは交わりを絶っていたものが、突然遺産相続分割を迫りに帰郷した「名もないしがない俳諧師」を心よく迎える者はいなかつ

²⁷ 『一茶全集』二、五五一頁。

²⁸ 古典俳文学集『芭蕉集』、六十頁。

た。村の人々まで訝かしそうに見る者が多かった。

古郷への感傷的な愛着もあるが、「外へ出れば、ははきぎを分るがごとくする人の俤もうしなひ、内に入れば茨の中にやどるやうにとがとがしくも、さらに故郷のさまはなかりけり」²⁹という恨みがましい述懐も生まれて来る。ここは何としても遺産の分割の実行と北信濃に俳弟子をつくる努力を梃子にして行動しなければならなかった。一茶はこれも「天地大戯場」の一環として、なり振りかまわず実行に移し成功させることを自分に言い聞かせるのであった。同時に一茶の句も、この時期あたりからエネルギーを加えはじめる。芭蕉の「さまざまなこと思ひ出す桜かな」や「木のもとに汁も膾も桜かな」という³⁰、懐旧の思いなどを持っている暇はなかった。喜怒哀楽がさらに率直になり、皮肉も揶揄も粘っこくなっていく反面、弱いもの、小さな生きもの達への共感と庇護の姿勢も強いものになっていったのであった。

第四節 執筆から行脚俳諧師

芭蕉も蕪村も、俳諧師としてこの世に確固たる地位と名声を残した。芭蕉は神にもなった。一茶はよく生き抜いた。三度目に起こった中風の発作で六十五歳で没した。一茶が生涯で大事な人に先立たされた後も、なお生き続けたその事跡をもう一度みてみることにしよう。

一茶は三歳で母と死別した。十四歳で祖母かなと死別。十四歳の春江戸に出た。三十七歳で最初の奉公先の主人、俳諧手引き人で恩人大川立砂と死別。三十九歳で父弥五兵衛没。四十五歳で親友滝耕舜死別。五十歳でパトロンの秋元双樹を失う。五十一歳で最も親交のあった其翠楼松井を失う。五十四歳で後ろ立ての夏目成美を失う。

こうした人々は、一茶が俳諧師として一家を成すには必要欠くべからざる人々であった。一茶は芭蕉や蕪村に比較すれば、俳諧師としてはよくよく運にめぐまれていない人物であった。芭蕉や蕪村に比較し、一茶がただひとつ誇れるものがあるとすれば、それは家庭生活であった。しかしこれとても惨状目をおおう状態である。

一茶の生涯は、芭蕉や蕪村の人生に比較すればはるかにドラマチックであるが、一茶は

²⁹ 『一茶全集』七十一頁。

³⁰ 古典俳文学集『芭蕉集』、七十一頁。

日本のかたほとりでひっそりと生きたといえよう。度重なる不幸とふりかかった悪条件にもかかわらず、彼は息長く太く生き抜いた。一茶の最高傑作といわれる『おらが春』は五十七歳の作である。この作品を残すことによって痛哭の悲しみを乗り越えられたのであった。また、一茶の強靱な精神の有り様は一茶が極めて多作であったということでもあり、このような生き様を旺盛な繁殖力と称することもできよう。この旺盛な繁殖力には、一茶の愛や皮肉も揶揄や滑稽も含まれているであろう。

一茶の多作を「自己模倣」と指摘した人がいる。一茶は過去の自句を全く意識しないで作句し記録した。それが結果として自己の模倣を招き、結果ではなく承知の上で模倣している場合とがある。一茶は生きたその時々的心情を微妙なニュアンスを帯びて多作している。芭蕉は類句を避け、推敲に推敲を重ね推敲してやまなかった。歌仙³¹の発句を脇句以後の付け合いから切り離して一句とし、自立させて書き留める時にも推敲をしている。一茶は発句と歌仙とは異なる句姿であると見て推敲はしていない。歌仙の発句も付け合いも、また独立した発句（俳句）もほとんど推敲していない。しかし、二万句に余る記録された句がまた未完成のもので、この中から完成句を残そうとしたと考えるならば、それを成し得ずして他界してしまいさぞ心残りであったろうと思われる。芭蕉のように推敲に推敲を重ね、厳選された句だけを残したならばと考えもするが、一茶流の自己模倣によって一題類句が二百句もあることは、我々にとっては喜ばしいことでもある。私達がその時、その場の境遇にあった時、一茶の二万に余る句の中からそれに相応しい句を選び出し、哀しみも、楽しみも、苦しみも、心屈する時も、高揚した時にも、一茶は私達凡庸なる者達の道連れになってくれ、それが一茶調といわれる独特の俳諧なのである。こうした句は前記した一茶の生涯に深く関わっている。私達は、一茶の生涯の出来事のどれかに重なる人生上の体験を、誰しも持っているからである。一茶は人生を多面的に詠んでいる。人生の或る時点にとどまっていない。誰もが一茶と同じ経験を一度は持っている。だから一茶の句はしみじみとした懐かしさを伴って私達に訴えかけて来るのである。

やれ打な蠅が手をすり足をする

一茶

雀の子そこのけそこのけ御馬が通る

〃

³¹ 俳諧はもともと和歌から派生したものであるから、五七五七七のリズムを持っていた。やがて、上の五七五と、下の七七を分けて詠むようになり、これを何人かのグループで百首まで詠むというのが俳句連歌であった。しかし、江戸期のあわただしい生活のなかでは、百首も詠む余裕がなくなり、三十六句でやめて一巻とした。平安時代の和歌の三十六歌仙にならってこう呼んだ。

嗅で見てよしにするなり猫の恋	〃
恋猫や互に天窓はりながら	〃
赤馬の鼻で吹きたる蜚かな	〃
負角力むりにげたげた笑ひけり	〃
春雨や妹が袂に銭の音	〃
春雨に大欠する美人哉	〃
へちまづる切て支舞ば他人哉	〃

一茶の句はこのように、一般作句通念から大幅な逸脱を見せている。一茶は、故郷柏原に帰ってからも、屈折していて皮肉があふれている。

雪散るやおどけも云へぬ信濃空	一茶
のふなしはつみも又なし冬籠り	〃
古郷は蠅迄人をさしにけり	〃
人誹る会が立なり冬籠り	〃
はつ雪を煮て喰けり隠居達	〃
山畠のそばの白さもぞつとする	〃

片意地や意固地さなどがどこかにある。ひるがえって、一茶の身になってみれば、まっとうな感情表出なのかも知れない。同時にそれは、片田舎の百姓の倅が四十年間の江戸生活のなかで得た、僻みや嫉妬などから来る反感であったのかも知れない。六十一歳の正月には、「春立や愚の上に又愚にかへる」と詠み、その前書きには「折から敷島の道の盛りなる時」³²とあるように、一茶も一応は和歌の嗜みもある。和歌の秘伝書『八雲御抄』³³も読んでいる。和語や俗語、方言への関心も持った。「ふしぎにことし六十一の春を迎へ」と述べた後に、「されば無能無才も、なかなか齢を延る薬になんあり」と述べてもいる³⁴。化政期は折から国学隆盛を迎えていた。本居宣長たちの推進する国学復興の時期ともあって、

³² 『一茶全集』四、四一七頁。

³³ 承久三年（一二二一）、順徳院が『柴禁和歌草』を発刊すると、藤原定家は顕註密勘を表し、『八雲御抄』を順徳院御集として発刊し、これが秘本となって後の世まで秘伝書として伝わるようになっていた。

³⁴ 『一茶全集』四、四一八頁。

一茶も若い頃にはこうした勉強に励んだこともあった。このようなあらゆるものを自己の囊中にしまい込んだ一茶は、芭蕉が『幻住庵記』で「無能無才にして此一筋につながる」と記したのに対して、「長生の薬」と冗談めかしながら、芭蕉との違いを荒凡夫のなせる業と、自嘲的にいつている。一茶の死後、弟子の西原文虎が、去来の『芭蕉翁終焉記』の向こうを張って『一茶翁終焉記』を書いている。「さればこそ俳諧の李白、涎もすぐに句になるものから、一樽の酒に一百吟、その句のかるみ、実に絶倒せしむ。世挙げて一茶風とてはやす」³⁵と述べ、我が師一茶が成す、荒凡夫のこだわりのない句作があったればこそ、芭蕉が充分に実現できなかった「軽み」の境地を、わが師一茶はかるがるとやってのけたのだと強調しているのである。

妻のきくを三十七歳で失い、四人の子どもまで奪われ、再婚に失敗し、三度の中風を患う。言語障害や手足の障害から回復して再び妻をめとる。何という旺盛な生命力か、繁殖欲ともいえる生命力である。「けし提て喧嘩の中を通りけり」には、「罌粟、芥子」という阿片を取るあぶない花と、「喧嘩」という乾いたひびき合いに巷の人間達の顔が見えて来る。新宿の歌舞伎町や秋葉原の繁華街の中を歩いているような、得意満面の一茶の諧謔がにじみ出ている。粋だろうと、一茶がほくそ笑んでいる姿も浮かんで来る。若い頃に、江戸市井の中からこうした洗練された心理描写の手法を学び、西国の旅では蕪村系の俳諧師たちから情感の繊細巧緻な修辞を学んだ、その中興俳諧を、一茶は彼なりに独特に消化して一茶調という特異な新風を樹立したのであった。

芭蕉、蕪村、一茶の臨終の句と思われる句を見ながら三人の作風の相違を見ることにする。三人の作風はそれぞれ相違が顕著である。

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る	芭蕉
しら梅に明る夜ばかりとなりけり	蕪村
花の陰寝まじ未来が恐しき	一茶

芭蕉は『おくのほそ道』の旅半ばにして「高悟帰俗」を自得したといわれている。その「帰俗」を最後は、「かるみ」の美として実現しようとしながら、充分に成就し得ないまま五十一歳で死んだ。この句にはそうした半ばにして世を去る者の鬱屈が溢れている。俳諧師としての無念さと痛歎とが心奥に残っている。

³⁵ 『一茶全集』別巻、五十四頁。

蕪村は意識して死に磊落に臨もうとしている。鬱屈があったとしても、捨てることに努めて、平静に淡白に心意を単純化しようとした。早朝の病床に香る馥郁たる白梅、離俗の平安のなかに死のうと、もはや「離俗」を忘れたような清浄の美がこの句に漂っている。

一茶はあくまでも俗のなかにおいて、考えたもの、見たもの、耳にしたもの、触れ得たもの、なんでも句にしてゆこうとした。死んだ後も生き続けようとした。芭蕉は「苦悩」、蕪村は「磊落」、一茶が「かるみ」を成し得た、と弟子の文虎は考えたのであろう。一茶は大火で焼け出された後も、各所の門弟宅を訪ね歩いた。菊見などの風流なことは一切しなかった。生涯俗のなかで生き、荒凡夫として柏原の焼け残った土蔵のなかで生涯を終えた。一茶の子孫は今も、その土蔵の傍で暮らしている。

第五節 立机せずして宗匠³⁶

連歌会席³⁷において、宗匠と連衆が連歌会席の表向きの主役だとすれば、執筆は裏方の仕事である。しかし実際の連歌会席においては執筆が花形である。「宗匠作法」「連歌作法」などの用語に対して、「執筆作法」はよく知られた言葉でもある。執筆は記録役であるから、その作法には数多くの文具類の扱いが伴う。机である文台、硯、墨、筆などの筆記用具、記録用紙である懷紙の用意などがある。また連歌の会を取り仕切る執筆には様々な礼法の心得があった。たとえば、宗祇の『吾妻問答』には、文台のさばき、発句を書くときや発句を詠むときのやかましいぐらゐの作法が子細に示されている³⁸。

さらに、執筆は連歌会席において「会席の終了」「出句の捌き」「句の裁可」「指合の処理」「句の詠み上げ」「懷紙の用い方」「懷紙書様」「書記上の注意」「遅刻者対応」など、様々なことを取り仕切らなければならない。また執筆は会席において自然と目立つ存在となるため、なるべく目に立たないように振る舞わなければならなかった。このように、執筆たる者は気苦勞の多いものであった。

³⁶ 立机は俳壇において新しい一派を作することを師匠から認められ、各派の宗匠を招いて一派の創立を披露すること。この立机を行わずして一派の宗匠になったのは一茶が初めてであり、革新的な意味を持っていた。

³⁷ 廣木一人『連歌の心と会席』（風間書房、二〇〇六年）は、「猿の草子」や「菟玖波集」などから連歌の作法を研究し、これによって今まではっきりしなかった連歌の式目と手順などが明確になった。

³⁸ 日本古典文学大系『連歌論集・俳論集』、二三五～二三六頁。

一茶は古郷柏原を出て十年、二十五歳で葛飾派二六庵竹阿の門に入り、天明七年（一七八七）、七十八歳の素丸翁の執筆となっている。しかし、このように早くから一座の花形の執筆になりながら、その地位に付ければ、立机して宗匠になるの普通であったが、一茶は終にできなかった。そればかりではなく、一茶は五十歳まで地方廻り続け、行脚俳諧師で故郷に帰らねばならなかった。江戸という近世で最も華やかな世界は、田舎出の俳諧師を認めてくれなかった。

素丸によって復活した葛飾派は再編され、白芹が享和二年に野逸の後を受けて其日庵を継いだ。江戸日本橋馬喰町の人で、関根三右衛門照房といって、升屋という大きな宿屋を営んでいた化政期の人別請人宿、無宿者の請人を商売とする人間だった。『葛飾蕉門分脈系図』の一茶の項に、「文化年中一派の規矩を過つによつて、白芹翁永く風交を絶す」という記事がある。ひらたくいえば破門になったわけである。この不明な点については私も長いこと疑問に思っていた。ちなみに、白芹の出自は武家ではなく、百姓の出であった。この点については次章にて詳述することとする。

一茶は白芹の句会に出席しているし、白芹の『元除遍覧』にもほぼ毎年のように出句をしている。『随斎筆紀』（文化八年）にも、「我友白芹」という表現が見える。宗匠としての「其日庵白芹」に対し「我が友」と記している点が未だ不明な所である。また、一茶は文化十一年（一八一四）三月二十四日には、白芹から歳旦帳や手紙も貰っている。この時一茶はすでに信濃に帰っていた。これを見ると、事実上「永く風交を絶す」とあっても、それほど過激なものではなかったと思える。一茶は宗匠になれなかったということを考えると、寛政末年の二六庵放棄の問題や、文化九年の一峨の今日庵再興にからむトラブルや、一茶の葛飾派から成美グループへの移行等の事実などを考え合わせると、一茶と白芹が相容れない関係にあったことは事実であったであろう。文化期の人気俳人番付によれば、白芹の評判は一茶の足元にも及ばないものであったが、江戸に隠れもない隠然とした勢力を持っていた葛飾派の頭領と一行脚俳諧師では、その社会的地位は自ずと異なっていた。風来坊の一茶などおよそ眼中になかったに違いない。白芹は文化十四年十月二十一日に没したが、一茶が白芹の死を知ったのはその半年後のことであった。

一茶の俳風は成人向きの句を見れば、暗澹たる生涯と、それら現実を受け入れた上で、雑草のように生き抜こうとする農民的な生命力に支えられた自己凝視の姿勢に支えられている。いっさいの暗い不幸を現実のものとして正視し、肯定して生き抜こうとする自愛の精神の発露にある。

ひい気目に見てさへ寒きそぶり哉	一茶
椋鳥と人に呼ばるる寒さかな	〃
次の間の灯で膳につく寒さかな	〃
又人にかけてぬかれけり秋の暮	〃

一茶のこれらの句は、愚直さゆえに人に乗ぜられ軽視される自分の不憫さを正視している。それは排他的、利己的精神とも自虐の精神とも異なっている。強靱な生命力に支えられて、自虐とたたかい、虚無に抗し、現実に徹して生きようとする精神である。自他の境を乗り越え、自分と同じように不遇に耐えて黙々と生きる者たちへの哀れさと共感とを詠わざるを得なかったのである。

五十歳を迎えて一茶は不如意な江戸を離れ、故郷柏原で一座を持つことを考えた。折から地方俳壇、田舎俳壇の隆盛の時期でもあった。江戸で立机し宗匠になれぬからには、信濃の田舎で一座を開こうと決意したのである。どのような悪条件のもとでも生き抜こうとする一茶の強靱な精神を見ることができる。他人に先を越されようと遅れを取ろうと信念を曲げないのである。

夕月や鍋の中にて鳴く田にし	一茶
仰のけに落ちて鳴けり秋の蟬	〃
鳴ながら虫の流るゝ浮木哉	〃

一茶が詠む自然は悲哀にみちている。しかしそれは彼自身がそうであるように、「むなしく座して滅びるよりも滅びの中に生きる道を求める」こと、命ある限り生きようとする自然であり、如来信仰を根にもった「愚の生き様」への徹底となっていくのである。

廣木一人氏は『連歌の心と会席』のなかで、俳諧指南書『無言抄』のなかから「執筆十種徳用之事」を次のように紹介している。「高位昵近」（高位の人と昵懇になれる）、「善人値遇」（善人と知り合う）、「座上為主」（会席の中心となる）、「愛敬為媒」（人への心遣いで人々を結ぶ）、「万能第一」（あらゆることに優れる）、「不耕足禄」（田畑を耕さなくとも収入を得ることができる）、「交朋在語」（朋友と語り合うことができる）、「無友有慰」（友がいなくとも慰めになる）、「必通神慮」（必ず神慮に通じる）、「自得仏性」（仏性を自得する）

ことができる)³⁹。

一茶はまさに、この十種徳用の生き方をした。人生の終末期には煩悩即菩提の自然の状態を意識して探るようになっている。一茶をとり巻く故郷の人達の思惑も煩悩のなせるところであり、肉親の死や自分の病を歎きかなしみ、治れば大喜びをする。荒凡夫の生き方に徹する生きざまはやがて阿弥陀信仰に深まってゆくが、ただひとつだけ農民の生まれとしてできなかったことがある。「我もけさ清僧の部也梅の花」と詠んでも、自分を清僧にたとえることが気取りに思える。それはただひとつ、「春がすみ鍬とらぬ身のもつたいな」という実直な思いが心の底にあるからである。この思いは中年を迎えてさらに募る。江戸住まいと旅暮らしの双方を根なし草と痛感する度合いを深めながら、同時に土のあるふるさとへの指向を強めて行くのである。「不耕足禄」を恥じながらもやがて、「自得仏性」へと心を昇華させていったのであった。この章の冒頭に言及した松井との交渉は、一茶が苦しい江戸生活のなかだ、その「自得仏性」への心を昇華させていくうえで欠かせない大事な因縁であったに違いない。

一茶はそういう意味において実に勤勉でもあった。心経の残した『ささめごと』には、「仏道歌道一如なるべきこと」という教えがある。一茶はこれを忠実に実行していったのであった。

西行上人も、「歌道はひとへに禅定修行の道」とのみ申されしとなり。まことに道にいたり侍るは頓悟直路の法なるべし⁴⁰。

心敬はこのように仏道も歌道も同時に深めねばならないと述べている。これを度々繰り返して述べている。

仏法を修業して真の仏を尋ね知らむにも、歌道を工夫して明らかなる所を悟らむも、いかなる形をまことの仏、いづれの姿を至極の歌・連歌と定め侍らむ心は、おろかなるべくや⁴¹。

³⁹ 『連歌の心と会席』（風間書房、二〇〇六年）、二八二頁。

⁴⁰ 日本古典文学大系『連歌論集・俳論集』、一八二頁。

⁴¹ 同上、二〇二頁。

心経は仏法をもって俳諧連歌の修行を勧め、念仏三昧に入ることも俳諧の修行の道であると述べている。一茶は晩年、法衣や法杖を持って俳諧修行に臨んだのであった。

第九章 武蔵国新方連会頭と一茶

第一節 庵号を持たぬ一茶

天明七年に一茶は二十五歳となった。この春に葛飾派の俳匠二六庵竹阿が大阪から江戸に戻った。一茶はこの時期に二六庵に同居し竹阿の庇護を受けるようになった。秋の十一月に二六庵で俳諧の秘書『白砂人集』の写書を許された。この年に信濃国佐久の竹阿の弟子の新海米翁の米寿の賀を記念して『真佐古』が開板されるに及んで、一茶の句一句が「渭浜庵一南」の名で入集された。これはすでに一茶が溝口素丸に師事していたことにもなるが、実際は翌年天明八年に今日庵¹元夢の門に正式に入門している。渭浜庵の号は溝口素丸の俳庵号であった。

近世の俳諧師は庵号を用いていた。これは維新後も変わらず、明治中頃まで庵号を用いた人もいた。しかし、一茶には庵号がない。一茶という俳名だけが伝わっている状況である。そこでまず、一茶の俳名について考察してみたい。天明八年四月に森田晏袋が編した『俳諧五十三駅』に菊明の名で十二句が入集した。八月の『俳諧一紙本定』には「今日庵内菊明」と署名され²、翌寛政元年の元夢撰『俳諧千題集』には「江戸一茶」の名で二句入集している³。下総八日市場では「菊明坊一茶」と自署しているところから考えると、寛政元年の二十七歳の時に「一茶」を名乗ったことになる。同時に、其日庵三世溝口素丸、今日庵元夢、二六庵竹阿の三人の師を持ったことになる。こうした要領の良さとそつの無さ、あるいは巧みな行動力が一茶という人物の特性をよく表している。

この年の八月には奥州行脚に出て、象潟に遊ぶことになるが、俳諧に手を染めて一年余りでかの芭蕉が死を覚悟して旅立った奥羽地方への旅がどうして可能になったのであろう。十四歳で出郷して十年間、様々な荒奉公をしたとしても根気だけでは決行できない。芭蕉が周到な準備を重ね、河合曾良という幕府の役人をして弟子を従い、旅費の捻出をし、各地の有力門人に兼ねてから連絡をしながら難渋をした旅を、俳諧に入門したばかりの一

¹ 庵とは世を捨てた人が住むような草ぶきの粗末な小さいおりをいう。後に、文人、茶人などの住居をいう言葉となり、やがて文人、茶人、僧侶などの修業のための粗末な住居・茅屋などを指し、やがてそこに住する者の雅号となった。特に芭蕉が侘び住まいをしたことにより、無用の者や病者の寓居を言い、糊口の資を門人や門友の喜捨にゆだねた反俗貧寒の者が住する茅屋を言った。その後、俳諧の宗匠として認められるようになると、庵号を名乗るようになった。

² 小林計一郎、前掲『一茶その生涯と文学』、一〇八頁。

³ 同上、三八〇頁。

茶がなぜ易々と旅をしてのけることができたのであろう。

竹阿が誠実で愛情に富む人物であって、後に一茶が西国行脚（寛政四年三月二十五日）に江戸を発って東海道を上った際も各地で厚遇され、あげくの果てには四国松山の栗田樗堂⁴をたより、松山城内で催された月見の会に招かれている。藩主久松公が列席する月見で、その後は樗堂宅に泊り、『与州播州雑詠』を書きあげている。西国行脚の先々で厚遇されているのも、二六庵の後継者であったということのみにとどまらない。

安永四年（一七七五）一茶が十四歳の時、俳人長月庵若翁が柏原に滞在した。この時柏原本陣の桂国や観国、有力者の平湖などと一緒に一茶も手ほどきを受けたと記されている⁵。長月庵若翁は、肥前大村藩主の一族で、伊予今治藩主松平内膳正定奉の師であった。これは柏原の「一村大系図」が本陣名主権左衛門家の系図に書かれている。大島蓼太は松代藩主の真田幸弘（菊貫）を門人に行っていた。

寛政四年、一茶は西国行脚の用意として、知人の俳人約二百五十名の住所、名前、俳号を書きとめている。原本は上田市向源寺が所蔵しており、全集にも収録されている。その中の百名は江戸を中心とする葛飾派の人々の名で、後半には日本全国にわたる俳人の住所が記されている。葛飾派の俳人百名の内、およそ六十名が武士身分である。葛飾派の初代は、其日庵山口素堂で、二十歳で江戸に出て林家の塾に入り江戸城に仕官する。延宝七年（一六七九）に三十八歳で隠栖するが、そのまま江戸に住し葛飾隠士を名乗っていた。元禄九年（一六九六）に甲斐国甲府濁川の治水工事に功があり、後世「山口霊神」と崇められて神になっている。芭蕉と両吟二百韻を『江戸両吟集』として刊行するほど芭蕉と永い交流を持っている。二世長谷川馬光、三世溝口素丸などすべて高禄の武士であった。幕府の重責を担う書院番を務め致知する前に勘定奉行も務めている。

溝口素丸は、越後の新発田藩主、溝口家の分家で、上野国に知行五百石を持つ旗本で、『寛政重修諸家譜』に溝口家として歴代の職責も記されている⁶。一茶は晩年まで溝口素丸の門人と称しているが、何故に庵号を持てなかったのかは、今日まで明らかにされていない。

⁴ 栗田樗堂は寛延二年（一七四九）生まれ。伊予国松山の後藤昌信の三男。町方大年寄として二十数年貢献する。寛政七年（一七九五）と翌年秋に一茶が来遊し、共に句会を楽しんだ。各地の俳士との連句二百卷、和歌十余卷、俳句集五冊、俳文『庚申庵記』や序、跋などを集めた文集五十五卷、著書が余りにも多いので、正岡子規は伊予第一の俳人と評している。文化十年に安芸国御手洗島に隠栖し、二畳庵で没した。

⁵ 『一茶全集』別巻、七十五頁。

⁶ 東京大学史料編纂所編纂『大日本近世資料・柳堂補任四』（東京大学出版会、一九六四年）、六十八頁。

い。自から晩年には俳諧寺一茶と名乗っているが、これは庵号ではない。このことについては後に改めて言及することとする。

ところで、『一茶全集』の刊行は昭和五十一年より始まり、昭和五十三年までに全八巻でまとめられたが、その年の末に新たに発見・発掘された諸々の関係資料を整理して『別巻・資料補遺』として発行された。しかし、矢羽勝幸氏の研究により、さらに向源寺に残されていた資料を発見し、『信州向源寺一茶新資料』として発刊された（昭和六十一年）。一茶という名を考察する前に、この新資料について若干述べておきたい。

長野県上田市向源寺に所蔵されていた資料は折本として整えられ、表紙の片面は「留別渭浜庵」となっており見返しは「知友録」となっている。『留別渭浜庵』は寛政三年春、一茶二十八歳の時に師の竹阿が没し、この年の四月に師の没と同時に溝口素丸の弟子となり、素丸の執筆⁷となった翌三月二十六に故郷に向けて旅立った最初の帰郷で、その記録である。江戸を立って下総地方を巡歴し、四月には江戸に戻り、本郷より中山道を通り四月十日に出立して十八日には柏原に着いている。帰途は草津を経て江戸に帰る。この後にも一茶は帰郷するが、江戸と柏原を六日から八日で倒着する早足であったこともわかる。

一茶は寛政二年四月七日に素丸に入門し、寛政三年三月二十六日に葛飾派の先輩を歴訪し、その後に故郷に向かっている。このことは「寛政三年紀行」に書かれている⁸。翌年の寛政四年三月二十五に江戸を発つ、京坂で夏、秋に四国讃岐、冬九州に向かい肥後八代で新春を迎える。早々に長崎に向かい寛政六年はほぼ九州各地を順歴、四国に渡って、寛政

⁷ 会席において宗匠の下で連歌衆、連衆の出す句を懷紙に書き記す役をいう。単に句の記録だけでなく、句の指合の有無などを検討して、宗匠の裁定を助け、また一座の興を高めて滞りなく興行を終えるよう、司会する働きをすることが要求される。そのため、執筆は興業に欠くことのできない中心的な役割で、実作に巧みで式目や故実に通達し、文字仮名遣いに明るく能書で、礼儀・作法を心得た者が就任した。執筆の作法は『筑波問答』に二条良基が、円座の着き方、墨のすり方、句の披露、指合、作者名字などについて述べている。兼載は『執筆用心抄』ではるかに作法が詳細に記され、懷紙、水引の扱い方まで記し、『無言抄』には「夢想の連歌においては執筆は神慮の名代」として会席儀式化の主演とされるに到っている。俳諧ではこうした作法も改定され、執筆の作法に「惣而一座の興を催し、不催事は執筆のわざ也」と書かれ、最も重要な役となっている。一茶は若くしてこの役に就いたのであるから、仲間からの反発も相当に強いものがあつたに違いない。

⁸ 『一茶全集』五、十五頁。

⁹ 寛政三年（一七九〇）に幕府は朱子学以外の異学の講究を禁じた（寛政異学の禁）。十二月には江戸に帰村奨励の触を出した（旧里帰郷令）。こうした状況の時期であつたことから、一茶は持ち前の好奇心から、俳諧師はほとんど行脚をしなかった九州地方を巡ったことは注目に値する行動であつた。一茶が郷里にいた少年の頃、手習いと俳諧指導を受けた長月庵若翁がもと肥前大村藩士で桃国と名乗っていたが、藩主大村氏の子の堀氏の養子で堀孫左衛門徳光という武士であつた。安永四年（一七七三）に柏原に滞在、天明七年（一七八七）秋から夏にかけて筑紫行脚をし、『曇華囊』を出版した。一茶が文字と俳諧の手ほどきを初に受けた師として、師を敬慕する旅から、行脚俳諧師として始めたのであつた。一茶の律儀さがよくわかる旅である。九州は誰も訪れることのない地であ

七年は讃岐で新年を迎え、一月八日伊予へ花見に向かう。三月三日まで滞在し十七日には大阪に着く、五月まで大阪を順歴し京に上る。京阪に滞在し七ヶ月を経た後に、十月一二日に近江義仲寺の芭蕉忌に列した。また大阪に戻りこの年を越す。寛政八年四国に渡り松山の樗堂宅に一年滞在する。寛政九年春松山を発ち、夏から秋にかけ備後福山に滞在する。この年はこの地方を順歴し、寛政十年は大和長谷寺で新年を迎える。六月に江戸に帰着、すぐに江戸を発ち、七月末に郷里柏原に帰省。十月には江戸に戻り下総に遊ぶ。寛政十一年は江戸浅草八幡町で新年を迎える。この年に二六庵を襲名する。寛政四年から享和元年までのほぼ十年間を費した『寛政西国紀行』の旅で一茶は蝦夷地を残して、ほぼ日本全国を巡ったことになるのである。

この間、二六庵竹阿に師事したのは三年間、今日庵元夢に師事したのが二年間、其日庵溝口素丸に師事したのは僅か八ヶ月である。四月に入門して、年末には「素丸執筆」となっている。これは異例の出世である。本来このようなことは在り得ないことである。溝口素丸は越後新発田藩の分家で、上野国に五百石の領地を持つ書院番を務める幕閣中枢の武士であるが、一茶は入門八ヶ月で執筆となり、翌年には十年間に及ぶ四国の旅に出てしまったのである。一茶が四国の旅に出て三年後、一茶江戸不在中に素丸は八十六歳で没した。江戸に一大勢力を築いた人物に、たとえ晩年と言えども八ヶ月で執筆に取り立てられたことは異例中の異例である。

「渭浜庵執筆一茶」と記した時期、一茶は日本橋浜町にあった素丸宅に同居して雑事を手伝っていた。しかし素丸の逝去に際しては伊予、大阪、堺、京、近江を巡歴していて不在であったこと自体が不自然である。葛飾派の総帥の死に立ち会えなかったのも異例である。このことについてまず考察してみよう。

文政二年（一八一九）、一茶が故郷に戻り一茶社中を築きあげた一月七日に越後蔵々の人で家は脇往還の旅宿などを経営し事業家と知られた人物で五十五歳で入門した後藤甫外がいる。一茶より二歳年少の甫外が書いた日記に次のような記述がある。

卯正月七日、柏原一茶先生江尋参。

俳名甫外 拙者名如期改甫外 先生は月ノ如シ ワレハ兎ニ似タリ

った。俳諧師を目指す者はまず芭蕉の足跡をしのぶ『おくの細道』の東北行脚から始めるのが常であった。寛政九年（一七九七）に一茶は尾道にいた若翁を訪ね一緒に肥前に行ったことが『与州播州雑詠』に記されている。その後文化十年に一茶が信濃に呼び寄せ、十二月八日に柏原で八十歳で没している。

月見んと柏の原へ出る兎 甫外
蔵てふくらははいかいの秋 一茶

年五十七歳

いざのぼれ花の白雪ふむ迄に 一茶¹⁰

これらの短冊や日記類は今も後藤家に残っており、同家には「文政五年より同八年春迄一茶点」と表紙に書いてある甫外の句稿がある。一茶はこの句稿に朱筆で添削をしている。その句稿の返書には次のようにある。

江戸 割下水 溝口十太夫素丸門人 信州柏原宿 俳諧入道小林一茶点

幼名弥太郎ト云フ¹¹

この記述を見ると、一茶はみずからを「溝口十太夫素丸門人」と記している。僅か八ヶ月の入門であったのに、何故にこのように記すことができたのであろう。素丸は「其日庵」と「渭浜庵」の両庵号を認下されている。一茶がこれほど素丸に溺愛されたとすれば、其日庵は継承できなくとも「渭浜庵」か、竹阿の「二六庵」は認められても良いはずである。終生「溝口十太夫素丸門人」というのは、師系の継承者ではなく、個人の俳諧師に入門したということだけにとどまってしまう。

この頃一茶は、江戸の青野太筈に「江戸俳壇の腐敗」をのしる手紙を送っている。また、江戸に赴こうとして準備をしていたが、娘の「さと」の死で中止をした。一茶がこうした行動を取ること自体が妙なことで、おそらく一茶の通信添削指導に「溝口十太夫素丸門人」と書いたのが、江戸葛飾派のだれかの耳に入り、なじられた文などが届けられたのではないであろうか。一茶にしてみれば、入門してまもなく師匠が亡くなってしまったという不運もあったであろうが、ここにも、一茶が庵号を継承できなかったという運の悪さもあるが、どうもそうとばかりいってられない点多々ある。

庵号は自派を形成する上での「お墨付き」のようなもので、葛飾地方に勢力を拡大した芭蕉の友人でもあり、弟子でもあり、蕉風継承者を誇示する有力な看板となるものである。

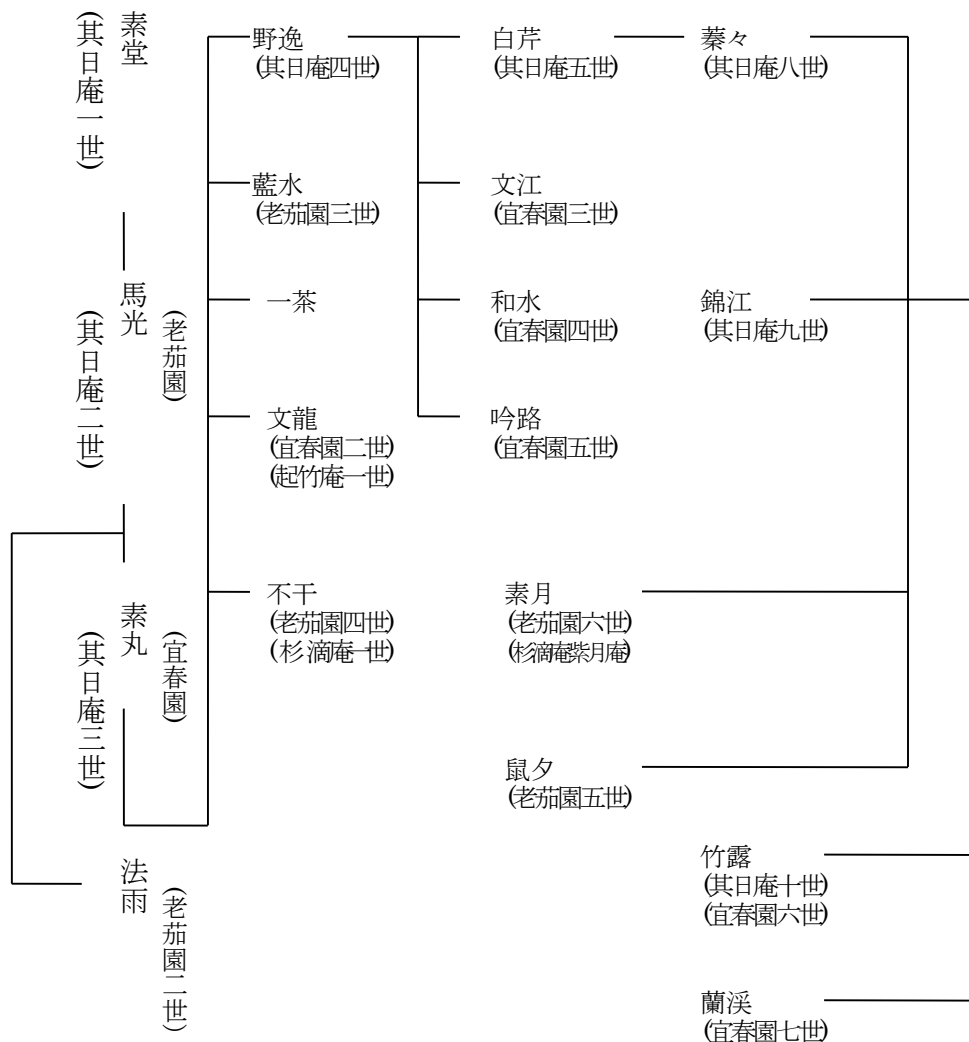
¹⁰ 小林計一郎、前掲『一茶その生涯と文学』、一五九頁。

¹¹ 「後藤甫外句稿稿添削資料」、長野県一茶資料館所蔵。

それを伝えるものに「葛飾蕉門分脈系図」¹²がある。この系譜を見ると、その祖は前記した山口素堂であり、これらは明治の御世まで厳然と伝わって来ている。子規が出てから、これらは月並俳諧として否定されたため、衰退はしたが今日でも地方においては重要視されている。

次は芭蕉記念館に複写として所蔵されている「葛飾蕉門略系図」である。

¹² 山梨県立図書館の甲州文庫に所蔵されている。



このように、「葛飾蕉門分脈系図」に一茶の名は乗っているが、其日庵はもちろんのこと、別号の宜春園も老茄園も継承していない。古郷の柏原で一茶社中を築いても庵嗣号がなく、江戸で一瓢が住職を務めていた本行寺のゆかりから「俳諧寺一茶」を名乗ったのであろう。ともかく添削や門人指導において「溝口十太夫素丸門人」として記名し、「其日庵三世素丸門人」とは記していない。

嘉永元年（一八四八）、一茶没後二十二年に長野の今井墨芳が『一茶発句集』を開板し、江戸で売り出したところ、好評でかなり普及したほどであった。この後、『おらが春』や『一

茶翁俳文集』がたちまち評判を呼ぶようになっている。この頃に馬場錦江が『葛飾蕉門分脈系図』を成版している。一茶の評判が江戸で知れ渡るようになったのを、苦苦しく思っていることであろうか。あるいはこの頃には俳諧も大衆化し、地方でも点取り俳諧が流行し、その流れを誘発したのが一茶の評判と思ったのであろうか。

いずれにしてもこの分脈系図に次のように記されている。

三祖 素丸翁門人下

一茶 二六庵 小林菊明

信州善光寺に住し、寛政二年戊四月七日入門。後、判者にすすみ竹阿の号を称し、文化年中一派の規矩を過つによつて、白芹翁永く風交を絶す、奥羽紀行あり。

一茶の文書に二六庵と記されたのは、寛政十一年（一七九九）の十一月、馬橋の大川立砂の死に臨んで「挽歌」を作った時である。翌年、享和元年（一八〇〇）の葛飾派歳旦帳に「二六庵一茶」と記すが、これ以後は二六庵の肩書は使っていない。享和元年三月に一茶は、父弥五兵衛の看病のために柏原に帰省した。「文化年中に白芹に破門された」とあるが、一茶は白芹の句会に出席したり、白芹編の『元除遍覧』には毎年出句もしている。一茶が記録した『随斎筆記』¹³にも「我友白芹」あり、一茶が信州に帰郷してからも、文化十一年三月二十四日には白芹より歳旦帳や手紙を貰っている。こうした「永く風交を絶す」ということについて一説には、「寛政末年の二六庵放棄問題」や「文化九年の今日庵継承をめぐるトラブル説」や「一茶の葛飾派から成美グループへの移行」、さらにはこの期の俳人人気においては「白芹が一茶の足元にも及ばない」、「文化期人気俳人番付」の評判などをあげて、相容れない関係にあったとする説が一般的である。

筆者は、「文化年中一派の規矩を過つ」が、「寛政年中」の誤記ではないかと思っている。「寛政二年四月七日に入門、判者にすすむ」までは事実であるが、僅か八ヶ月で素丸の執筆となり、一年にも充たないで旅に出て、そのまま四国行脚に出たことを、「規矩を過つ」¹⁴と述べたのではなかろうか。素丸は別号を「白芹」とも称していたので、其日庵五世を

¹³ 『随斎筆記』は俳諧書留ともいうべき書である。文化八年に夏目成美が当時の諸国俳人の句を集録したものを、一茶が抄写し、その上欄や余白に一茶自ら逐次句を追録して、その没する文政十年に及んだ書。集録作家は千百数十に及び、化政期の俳壇を鳥瞰するのに重要な意味を持っている。これは一茶の知友ではなく、あくまでも夏目成美の代筆のした者で、成美の交際記録である。

¹⁴ 不都合なことをしでかす、或いは掟を破るなどに使われる。入門して僅か八ヶ月で執筆に取り立

継承した関根三右衛門照房もまた本号を白芹と称したことから、素丸と間違えたのではなかろうか。溝口十太夫勝昌、別号白芹、幕府御書院番、五百石取り旗本と江戸馬喰町で「升屋」という百姓宿を営む町人の関根三右衛門照房、ようやくにして「其日庵五世」となった白芹では、一茶にとってもたいした人物ではなかったので「永く風交を絶す」人でもなかったはずである。関根白芹は文化十四年（一八一七）に六十二歳で没した。関根白芹は「白芹翁」といえるほど、一茶との年齢の隔りはない。やはり「白芹翁永く風交を絶す」という一文は、入門僅か八ヶ月で執筆となり、一年も経ずして西国行脚に十年も旅立ってしまった一茶を「破門」としたのは、一茶の師匠であった白芹素丸であると推測するのが妥当であろう。白芹素丸は一茶が西国行脚に出て三年後に八十六歳で没している。一茶が三十歳で西国行脚に旅立った時、素丸はすでに八十歳を越えていた。これならば「白芹翁永く風交を絶す」と書いても誤りではなかろう。

第二節 白芹風交を絶せし事

明治維新後に、それまで庵号を持って弟子を養成していた俳諧師匠達の主立った者は、政事教導職¹⁵となり、教部省に属し小学校の先生になったり、寺小屋から私塾となった学校で学問と一緒に俳諧や和歌を教え、民衆教化のために働くようになった。それ故、結果として「庵号、嗣号」は非常に大事な役割を持ちつつ、伝統文芸のきまりとして師匠から弟子へと継承されて行っただけなのである。そうした系譜を持てなかった者は、田舎に帰って百姓宗匠となるか、自分で弟子を持てるようになると自分で「庵号」を勝手に名乗った。

日本全国に芭蕉句碑がある。埼玉にも百二十基の芭蕉句碑があるが、これらは地方で勝手に庵号を持ち、社中を形成した者が、芭蕉句碑を建立して顕彰し、勝手に「蕉風の継承者」として自己宣伝をし、蕉門十哲がそれぞれ打ち立てた「蕉門分脈系図」に位置づけて

てられながら、そのまま行方知らずとなり、旅に出てしまわれては、俳諧運座の司会者、行事役、記録役がどこかに消え去ってしまったわけであるから、当然一派の人々からは裏切り行為に見えたことであろう。

¹⁵ 安永九年に白雄が日本橋鉄砲町に起こした春秋庵が白雄没後、道彦が多乗り、それを葛三が継承し、次に埼玉の川村碩布が継承、次に可布が継ぎ、天保末には梅笠が継ぎ、有墨、弘湖が継いで明治を迎えると、埼玉百間の有柳が継承した後に、三森幹雄が継いで教部省教導職になり、民衆教育として俳句を教えたため、全国に門弟千人を擁するようになり、学校教育の普及に貢献した。同時に俳諧師が権力と結ぶようになり、今日まで続いている。

自からの権威付けに利用したのであった。江戸や町方に、村々に師匠がおり、諸派を形成して連句を額に詠み記して神社仏閣に奉納をした。あるいは石に刻して句碑として奉納した。俳額、歌額、歌碑、句碑として日本全国の市域の門人の名を知ることにもできた。当然、奉納額の筆頭として、その社中の会頭の名が示され、以下門人とその作とが刻まれている。

其日庵素丸と同門で素丸が其日庵三世を継承すると、他の同門の者は別号、別庵を名乗ることになる。「葛飾蕉門」では、正統者は「其日庵」を継承するが、その他同門の者らのために「老茄園」と「宜春園」を用意した。其日庵を継承し、葛飾二世となった馬光は、別号としてこの二つの名を使い、時に使い分けていた。素丸と同門兄弟弟子であった法雨は、其日庵を継承できなかったので、馬光の「老茄園」を継承し、「老茄園二世」を名乗った。一茶と同門の野逸は、江戸薬研堀の旗本で材木石奉行の支配にあった者で、加藤富右衛門勝照といい、素丸の高弟として「其日庵四世」を継承した。

藍水、文龍、不干はいずれも武蔵埼玉郡松伏、武蔵大畑村、武蔵岩槻領内に住した。藍水は松伏村で紺屋を営み、老茄園三世、文龍は武州大畑村の名主、宜春園二世起竹庵を名乗った。不干は岩槻領内の下級武士で、後に修験者となり文化十二年三月に法券に進んでいる。現在の宮代町百間の南蔵院に住んでいたのをこれを別号とし、老茄園四世南蔵院を継承した。先に記した「葛飾蕉門分脈系図」には武蔵国葛飾と南埼玉郡の門人が多くいる。こうして、それぞれが「宜春園」か「老茄園」のどちらかを名乗っているが、一茶だけは庵号、園号もない。また嗣号も付けていない。竹阿、素丸、元夢という三人の師を持ちながら庵号も園号も継承できなかった。やはり「規矩を過った」からであろうか。

一茶の遺品のなかには、寛政四年の西国行脚の旅に出るに際して用意した『知友録』がある。これを携えていたお陰で、いずこの地でも厚遇されている。当然、ここに記した人物を訪問したであろうことは推測に難くない。この知友のなかに「本所猿江中の橋、松平監物候、素考」や「本所三笠町、小笠原大膳候、瓢斎」、「小川町戸田、戸田大炊頭候、蓬州子内藤信忠風虎」など大名の名が記してある。因みにこうした名を他からも拾ってみる。

- 本所割下水長崎町中ノ橋 溝口十太夫御隠居 渭浜庵 素丸
- 御蔵屋敷内 加藤富右衛門 其日庵 野逸
- 葛飾派の筆頭 其日庵宗匠二人を書いた後に各武士の名が続いておりいずれも葛

飾蕉門の門人である。さらに下谷池の端の秋元侯¹⁶御内の武士は十名になっている。九州から青森までの大名家の名がある。当時の俳諧師は大名を門下にしていたのである。

- 本所猿江中の橋 松平監物候 素考
- 本所三笠町 小笠原大膳候 瓢斎
- 下谷御成小路 酒井越前守内 田中藤太夫として、同三人の名がある。
- 牛込早稲田清水家 内藤十左衛門
- 青山権田原六道辻組屋敷 秋元金太夫
- 細川越中守御内 佐泊半次 鵜墨

同二名

- 橋また橋 宮毛備前守様御屋敷内 山本平吉

同三名

- 駿河台 松下隠岐守内 牧野次郎右衛門

同一名

- 外桜田 松平筑後守内 小沢熊次郎
- 駿河台 堀田主膳守様御内 渡辺宇右衛門
- 小石川 水戸候内 津田石中
- 小石川 小笠原播磨守内 吉田忠右衛門
- 越中侯御内 篠原長次郎

同二名

- 赤山陣屋 伊奈備前守御屋敷 新井孫兵衛

同一名

西沢善司

- 奥州津輕弘前土佐守御内 岩本長右衛門

(同は筆者名前省略)

- 浅草茅場町二丁目 松坂屋喜右衛門 素閣

¹⁶ 秋本候は秋本涼朝で、享保二年（一七一七）生まれ。秋本貞朝の三男。秋本喬求の養子となり、寛保二年に武蔵川越藩主、秋本家四代。奏者番、西丸若年寄などを経て、宝暦十年に老中となる。明和四年出羽山形に転封、山形藩主秋本家初代となる。六万石であったが、俳諧をよくし、茶道にも通じ、其日庵素堂に俳諧を学ぶ。名を貞朝と言った。永朝、久朝とみな葛飾蕉門で俳諧を学んだ。家臣の鯨巴、菊羽、鳩笑などに宛てた一茶の書簡が現存している。

江戸の大店から京阪の大店、そして四国の有名店の主人の名がある。さらに信州の知人は二十五名があげられている。全国の大名家、なかでも文芸好きの内藤家¹⁷、細川家、前田家、果ては水戸徳川家の武士の名が連らねられている。この知友録を持って全国を旅すればどこでも歓迎してくれたに違いない。この知友録の筆頭に「溝口十太夫御隠居 素丸」の名があり、次に「其日庵野逸」の名があることは、「葛飾蕉門」の有力人名者の名簿なのである。この名簿を、入門八ヶ月の一茶に渡す道理はないであろう。葛飾派の諸氏はそう思ったのに違いない。当然、この名簿は期日庵四世の野逸に渡るべきものであった。しかしながら、一茶の遺品のなかにこの名簿が残っているとということは、一茶が所持するところとなった証である。それでは、どういう経緯で一茶が所持することになったのかという疑問が生じるわけである。

葛飾派の名簿を一茶が所持していたことを推察するに、まず一茶が素丸の介護者として同居していたことが考えられる。そのとき、素丸は八十歳の老人である。三十歳の壮年の一茶を頼りにしたに違いない。それ故にかわいさ甘って、八ヶ月で執筆に取り立て、自家に居住させて、この「蕉門葛飾名簿」を一茶に写書させたかもしれない。もう一つは、野逸との交友関係が考えられる。野逸は、其日庵を継承しており、一茶とは親しく、文化三年には二人で金町の操り人形芝居の見物に行っている。そのようなことから、一茶は野逸から「知友録」を借用したのかも知れない。この名簿は、一茶の人生にずいぶんと役に立ったであろう。

一茶は、素丸の弟子となって八ヶ月で「執筆」にまで取り立てられ、一年を経るや否やで帰郷し、そのまま西国行脚の旅に出て、「知友録」まで持ち出したとあれば、八十を過ぎた超高齢の素丸とて、「其日庵」の庵名、「宜春園」「老茄園」の園名も与えるわけにはいかなかったであろう。そうした理由で、一茶は晩年に到るまで「溝口素丸門人一茶」と、素丸の直弟子であるかのように振る舞い、自己の正当性を保とうとしたのであろう。この記名には、師への思慕と一茶の内心忸怩たる思いがこめられているといつてよい。

素丸は享保十五年頃に長谷川馬光に俳諧を学び、延享三年、三十四歳で師の其日庵を継承している。その間に幕府書院番を務めている。書院番は老中、若年寄の指揮下にあり、江戸城の警備をはじめ、将軍の出向、市中巡回の随従を行なう役職である。この役を務め

¹⁷ 越後村上藩主で老中を務めた内藤信忠は、俳諧を特別に愛好し、俳号を鶴嶺と名乗った。更には宮崎県日向延岡藩主内藤正義は俳諧集『内藤侯詠草』を残したほどである。

た者は小納戸奉行になったり、目付け、大目付など栄職への道が開かれていた。直参旗本から栄職への道が開かれていた職は、書院番、小姓組、大番、新番、小十人組の五番衆があった。其日庵四世の野逸も、名を加藤富右衛門勝照といい、書院番を務めていたことがある。長谷川馬光の本名は、長谷川半左衛門直行といい、幕府御家人、西の丸小十人組番士を務めており、六十歳で致仕した後に其日庵二世となっている。一茶の属した葛飾蕉門はむしろ馬光から始まったともいえる。山口素堂は、甲斐国北巨摩郡教来石山口の生まれで、江戸に出て仕官し、致仕した後は上野不忍池畔に隠栖した。其日庵二世を継承した馬光、三世素丸、四世野逸らが本所に住していたので、代々葛飾派を名乗ったのであった。こうした四世まで旗本出身の人物であったところから、各地の大家や各藩の士分との交流で「知友録」ができあがっており、俳諧師の住所録ともいえるものであった。この「知友録」は葛飾蕉門の書物であり、世々其日庵継承者が受け継いだものであるため、一茶ごとき者が手にすることはできなかったはずである。同門の野逸、藍水、文龍、不干、一茶の五人のなかで唯一侍であり、旗本御家人の加藤野逸こそ其日庵を継承すべき人物であった。

ところで、武蔵国葛飾郡、埼玉郡には談林派の系統を引く俳壇がある。一茶も松伏、吉川、庄和、赤岩、越谷、春日部に巡回指導に来てはいるが、この地では後に文龍や不干が活躍するようになる。二人は其日庵こそ継承できなかったが、それぞれ宜春園、老茄園を継承している。何の俳号も継承できなかった者は、五人のうち一茶ひとりだけである。筆者は、この葛飾派の「知友録」の持ち出しが原因であると推察している。

素丸の葛飾蕉門のなかには、小林一茶と同時期に身を置いた人物に石井文龍がいる。寛政十年十二月十日に判者となり、宜春園二世となった。武州備後村に住し武蔵新方連会頭となり、起竹庵と号した。延享二年（一七四五）に生まれ、文政二年（一八一九）に七十五歳で没した。石井家は代々医業に就いている。文龍も医師となり多くの人に尊敬され慕われていたと思われる。医師で俳人といういわゆる当時の人のならいで、文人として我が国の古典や漢籍に親しんでいるが、儒家的思想を論じながらも心は老荘にひかれている。俳諧論集『ちりとり』がある。これは二種類が伝わっている。総句数二百六十句があり「季別自選句集」と「紀林名真名序、文龍名仮名序」の二種類である。そのほか『自家仮名文詠弁』、『文龍雑詩稿』、『西国巡礼記』、『筈の友』などの漢詩集、随想集がある。

一茶より十八歳年長であった文龍は、一茶が素丸の弟子として入門した寛政二年（一七九〇）には四十五歳であったので、すでに二世宜春園を継承していた。馬光は其日庵二世

と同時に老茄園を名乗り、その弟子の素丸が其日庵三世と宜春園を名乗ったことで、老茄園と宜春園の二派ができ、その後、葛飾派では其日庵を継承できなかった者は老茄園か宜春園を継承した。素丸の兄弟弟子の法雨は老茄園二世を継承した。武蔵国赤岩村の豪農であつたので其日庵は継承できなかった。文龍よりも先輩であつたが農に従事しながら俳諧普及に努めた。武蔵国松伏で染物を業としていた藍水は紺屋老茄園三世を法雨から継承したため、不干は藍水から老茄園四世を継承した。老茄園五世は不干の義弟で武蔵国粕壁大川戸の鼠夕が継承し、かくて葛飾蕉門は武蔵国草加、粕壁、越谷、松伏、庄和、吉川、赤岩などの東武（東部）地域、南部地域に根を張ることとなり、一茶は当然信濃に帰村せざるを得なかったということになる。

寛政二年（一七九〇）、師の竹阿が本所竹屋町で死亡したのが三月十三日で、四月七日には一茶は溝口素丸に入門をしている。以来、一茶は全国を行脚し、二十三年後に故郷にはじめて帰るが、その際に、それまで行脚のなかで詠んだ句を集めて『三韓人』という句集を刊行した。

江戸俳壇を引退する記念集として諸国の風友や知人の句を集めて刊行したものが『三韓人』であり、集中の作者は十九ヶ国に及んでおり、すべて一茶と親交のあつた人々である。特に親交の深かつた夏目成美の送別の辞を序文とし、松山の樗堂の書簡を跋文代りとしている。この書の巻頭には、破笠と其角と嵐雪¹⁸が三人で炬燵に足を入れて寝そべっている絵があるが、これは破笠が八十三歳で描いた絵であるとされる。『三韓人』と題されているのは、「韓」は「閑」に通じ、「風流人」や「閑人」などの意味を持たせるためであつた。そのなかに一茶は、「叱らるる人うらやまし年の暮」という句を入れている。兄弟弟子の不干が老茄園四世を継承したことで、一茶の江戸での宗匠としての道が完全に絶たれたことを意味する句とあってよいであろう。

こうして、一茶は葛飾派のなかで庵号、嗣号を持つすべをすべて失つたのである。そのため江戸を去るに当って発刊した記念集に蕉門の高足で、当時江戸で最も名を知られてい

¹⁸ 小川破笠は寛文三年（一六六三）に江戸に生まれた。夢中庵、卯観子、笠翁などの別号もある。津軽藩士細工役として優遇されている。絵を英一蝶に、蒔江、象眼細工にもすぐれた腕を持っていた。服部嵐雪は江戸湯島に生まれ、淡路藩に三十年ほど下級武士として仕官した。延宝四年に芭蕉に入門した時は三十三歳であつた。其角は寛文元年（一六六一）に江戸で生まれた。其角の父は竹下東順という医師で、裕富な生活をし、俳諧をよくした。其角も医師となったが、十八歳で俳人として頭角を表した。芭蕉に十四歳で入門し、二十三歳で『虚栗』を刊行している。おそらく一茶はこの『虚栗』に興味を持ったのであろう。実のないただの栗の毬として皮肉、自嘲を込めたのであろう。其角の弟子のなかに赤穂藩士が数人おり、大高源吾は子葉という俳号を与えられていた。

た榎本其角（一六六一～一七〇七）と服部嵐雪（一六五四～一七〇七）、さらには小川破笠（一六六三～一七四七）の三人がひとつ炬燵に入っている絵を表紙として『三韓人』を発行した。いずれも江戸座の俳壇に名を残した蕉門の著名人である。これに序文を寄せた夏目成美は、「はなむけにふかき心ざしを見せて様々の物をおくる中に、ある人、笠翁が画賛一紙をながきかたみにとておくりぬ。其図、其角、嵐雪と友寝せる所を書いて、其、嵐の二人すでに世をさり、われ八十余の齢を得て、世の中にとどまるよしの句あり。一茶叟大によろこびて、是第一のたまものなり。われ此江戸にあそぶ中、友だちの先だてるもの指ををるに数おほし。されば吾しばらくとどまるに似たれど、此笠翁が夢物がたりにことならず。なほ我こころの此画におもひあたれる事おほし、とてすみやかに笠、わらち、すぢりもちりにしたためて霜しぐれをおかして出たつ」¹⁹と記している。消沈している一茶への同情と愛情の贖の辞であった。

文化十一年十一月、一茶五十二歳での江戸俳壇からの完全撤退であり、これ以後死に到るまで一茶は江戸に出ていない。「閑人」と自虐し、自嘲した姿を記念集の名としたのであった。成美はそうした一茶の境地も序に書きとめている。

此ほどすみだ川に逍遙せる頃、渡し舟の遅きを待つとて、心なく我かげのうつれるを見るに、汀の浪は額によせ、雪てふ尾花は頭につもれるに、今はじめておどろくにはあらねど、かかるかたちになりていつまで名利の地にあるべきぞ、蟬の小川はわたじとちかひし人もあるをと、はじめのころざしに違ひたるをしきりに悔ひ恥ぢて、たちまち草庵を打ち破り、古さとにひきこもらむとす²⁰。

成美は、一茶が庵号、嗣号を得ることができなかったことを恥に思つて故郷に帰つたと記している。成美はこれに続け、『無名抄』の登蓮法師が「ますほの薄の故実」を聞くために、渡辺の聖のもとへ雨の中を急いで駆け付けたという故事を引きながら、「かのわたなべの聖のがり、薄ならひに行けむ心のあはただしさにも似たり。われまたその後姿の影を見送りて、二十年の旧交おもひ出る事の様々は、むさしの草葉における今朝の露もかぞふるにたらず」²¹と記し、一茶の心中無念の思いを述べている。成美の伯父祇明に奉公し商

¹⁹ 『一茶全集』六、二二八頁。

²⁰ 同上、二二七頁。

²¹ 同上、二二八頁。

と学問、さらには俳諧について共に学んだ旧友への讃辞であった。

巻頭にはすでに故人となったゆかりの俳人九人の句が据えられている。

馬かりてかはるがはるに霞みけり	蓼太
鶴に乗術もあらばや花の山	竹阿
千どり鳴やふいと悲しき羽簞	白雄
元日や此気で居たら九千歳	素丸
竹の子や二本並んで朝の月	寸来
梅さくや鼠の歩行く大坐敷	浙江
花をまつ気のみちかさよおろかさよ	素嶠
年よりの目にさへ桜さくらかな	松井
いざよひや坂東太郎またたく間	麦宇

この後に成美、一瓢、諫圃、一茶の四吟十八句が並んでいる。以下一句ずつ親しい順に、成美、其堂、巢兆、寥松、完来、白芹、と続いている。

朝夕を煙ばかりや冬の山	白芹
-------------	----

これは其日庵五世関根白芹であろう。中頃に武蔵国埼玉郡谷原村（現在春日部市谷原）の中村知足の句が記される。

埋火に千鳥ありたけ聞えけり	知足
---------------	----

『三韓人』のなかに白芹の句だけがあり、葛飾派の同門の人物の句はない。先輩の法雨は無論、其日庵二世馬光、四世野逸、六世大岳、七世列山、八世蓁々までは一茶と兄弟門である。同僚の野逸、藍水、文龍、不干、それに白芹の同僚の文江、和水、吟路の名もない。これら兄弟門の人物は、すべて其日庵、宜春園、老茄園を継承している。つまり一茶のみが何も継承できなかったのである。それ故に成美は序文で「はじめのころごしに違

ひたるをしきりに悔ひ恥ぢ」²²と記し、「二十年の旧交おもひ出す事のさまざまは、むさしのの草葉における今朝の露もかぞふるにたらず」²³と、一茶の無念さを代弁したのであり、かつて伯父の奉公人として、成人して友となった一茶に対する悔しさと残念さが如実に記されている。

また其日庵五世白芹を六番目に置いたことでも、一茶が関根白芹を疎んじていたことは有り得ないことを示唆している。「白芹翁永く風交を絶す」と記したのは、其日庵九世馬場錦江が嘉永期（一八五四）に作った「葛飾蕉門分脈系図」に記されたものであるから、風聞も多く、「風交を絶」したのは、素丸の別号白芹であり、知友録の持ち出しで破門になったか、入門早々西国行脚に旅立ってしまったことを叱責したものであろう。

第三節 武州葛飾派の人物

文化十一年十一月、一茶が江戸俳壇引退記念集として刊行した『三韓人』のなかに中村知足の名がある。天保三年（一八三二）に書かれた『続俳家奇人談』には次のように記されている。一茶没後五年目の刊行物である。

武州埼玉郡谷原村の里正、中村太左衛門は、駿河の国司式部少輔藤原一氏八世の孫なり、少かりしより風流の道に心を選ばしむ。はじめ連歌を好みて、時享、其阿などに交はり後俳諧にかへて楼川、百庵と友たり。雅名を敲石といひ、庵を匍匐といふ。

山笑ひ谷こたへたる雪解かな

右の肩をあらはに森のもみぢかな

越谷吾山書をあらはすごとに持来りて、此の人の校讐を乞ふという。ひととせ江戸に出づるのふし師竹庵を訪ふに、吾山上座に講じて父兄の如し。門人悦びて曰く「世人音物をもたらし先生をうやまふ。この老夫させる事なきに、いかでさはもてなすらむ」吾山諭して「人音物をもたらし来るは物まなばんがためなり。是は我が智の不足を捕ふ恩人也。敬はずんばあるべからず」と。門人口を閉ぢて退く。其のあらはす所『賦物或問』『金花石葉集』『俳諧原道』など、いまだ世に行はれざれば知る者な

²² 同上、二二七頁。

²³ 同上、二二八頁。

し。をしいかな。天明八年七月物故す。

契りおく松やいくとせ若緑²⁴

現在の春日部市谷原、ここ心光寺の墓石台座に「五世」とある。初代は、谷原新田開発を江戸炭町の豪商の高田三郎兵衛と共に従事した名主の中村重政である。墓石の側面に「知足」の辞世が彫ってある。「晨涼院徳誉幽讃覚道居士」元禄九年生、天明八年没²⁵。

知足の発句は、関宿住の閑鷺編安永四年『果報冠者』、越谷吾山編『東海藻』安永六年、『鬘麓夜話』安永七年珪山著、門瑟編『晒布集』安永九年、蓼太編『七柏集』天明元年、などに見えており、春暁亭や春暁庵を名乗っている。春暁庵知足を名乗ったのは、柳居の弟子多少庵秋瓜の流れを汲む、武州埼玉郡百間に住した多少庵三世南枝が春暁庵を名乗ったものを受け継ぎ中村知足も春暁亭を名乗った。中村家はその後江戸に住している。

柳居は、貞享三年（一六八六）に本所石原町の江戸城御細工頭を務めた幕臣佐久門惣左衛門の子として生まれ、長利といい、元禄十一年に父の跡を継ぎ、同じ公務に携わった後に俳諧活動に入った。享保十一年（一七二六）に沾徳²⁶没後沾洲系俳人として歩む。享保十六年に宗瑞、蓮之、咫尺、素丸（馬光）の五人で『五色墨』を刊行した。一時武州粕壁に住し春日庵を名乗ったこともあり、武州埼玉郡には多少庵春暁亭の俳人も多く、なかでも武州鴻巣の横田三九郎盛英は、柳居の弟子柳几を名乗って全国の俳人と交遊を持った。現在葛飾郡と埼玉郡にまたがっている、百間地域には多少庵三世南枝が柳居、秋瓜と受け継ぎ、三世春暁庵を名乗っている。一茶はまだ初学の頃に中村知足と交わったことから「一南」を名乗ったこともあった。埼玉県の南埼玉郡、葛飾郡の杉戸、百間、鷺宮、久喜、岩槻にはこうして多少庵系の俳人が多い。

中村知足が没したのは天明八年（一七八八）である。一茶が俳諧の道に入った二十六歳の頃となる。もし一茶が数年早く、二十歳で俳諧を始めたとなると、知足とは五、六年の交友を持てたことになる。一茶が越谷吾山の『諸国方言物類称呼』に触発されて『方言雑

²⁴ 雲英末雄校注『俳家奇人談・続俳家奇人談』、二七三頁。

²⁵ こうした事跡は春日部市郷土資料館に寄贈された文書で知ることができる。

²⁶ 沾徳は寛文二年（一六六二）生まれ。奥州磐城平藩主内藤風虎の江戸藩邸に出入りして俳諧を学ぶ。延宝五年（一六七七）同藩邸の常連であった山口素堂の手引きで林家に入門する。山本春正、清水宗川に歌学を学び、やがて内藤家に仕官する。国元の陸奥国磐城平に趣き、風虎没後は致仕して法体となる。素堂の手引きで蕉門に入り、其角と提携し、芭蕉没後は其角、沾徳の二人で江戸俳壇の主流を形成する。この派を沾徳派といった。埼玉では武州足立郡に勢力を持ち、鈴木荘丹や横田柳机、川村碩布など有力な俳人を育てている。

集』を書いたとすれば、知足を通して柳居、沾山とも交わり、吾山との交友も当然持っていたことにもなる。小林弥太郎の最初の俳号「一南」が、多少庵三世南枝に関わっていたとすれば、一茶が若きより諸国の方言を記録していたこともうなづけるものがある。

寛政二年（一七九〇）四月七日に一茶は二十八歳で溝口素丸に入門したことになる。三月十三日に直接の師竹阿が没したことによる移籍ということにもなっている。この年の十月に溝口素丸が編集した『秋顔子』という連句付合論を中心とし、葛飾蕉門一門の秋、冬の発句と素丸の歌仙一卷が納められている半紙本が発刊された。ここに一茶の句二句が入集している。其日庵四世野逸序、巨富園謙堂跋としてそれぞれ序文跋文を草している。『秋顔子』底本は一冊しか伝わっていない。埼玉県春日部市の石井楯夫氏が蔵している他に伝本はない。石井氏は素丸門下起竹庵一世、宜春園二世の石井文龍の後裔である。武蔵国東部（現埼玉県東部）は南埼玉郡（岩槻、蓮田、久喜、加須など）と北葛飾郡（草加、越谷、春日部、杉戸、吉川、松伏、庄和、三郷、八潮）などがあり、ここに基盤を置いたのが葛飾蕉門派であり、南埼玉郡には談林系の多少庵、春暁庵系と沾徳系の俳人が多かった。一茶はこの武州方面の指導ではなく、主に房総方面の指導に赴いている。武州の葛飾派は会頭を置いてそれぞれ庵を名乗らせ、宜春園文龍（春日部及び越谷）、老茄園藍水（吉川、八潮、三郷）、老茄園二世法雨（素水）は草加、越谷、老茄園四世不干は武州岩槻、春日部市内牧を掌握していた。

『秋顔子』のなかに出て来る会頭及び連中の名を捨てみよう。地名の後に会頭が付いている。無論序文は期日庵野逸が記しているので、「我が師変化の俳諧に腸を裂く事年ありて、ばせを翁の心骨朧々も得道なせしまゝに、今年『秋顔子』にその趣ををさめさしめんと也」²⁷とある。

武州赤岩兎山一逸窓、茂楓、蛙水、応隆、白其、平道、素珪

武州新方虎嵐一素水（白芹）、文龍、風佐、新町粕壁帛川、大川戸百丸、中村釈大柳、大柳大場柴山、武州藤塚露水、露翠

武州備後梅之一涼池、雪旭

武州赤岩素花一兎遊、杉司、孤友

武州葛西宝戸一徳我

武州一の割素風一芦船

²⁷ 『一茶全集』八、四十一頁。

武州下和戸素雲一野麦、壺月

これらの人物が、一茶と同じ時期に葛飾蕉門に属した俳家であった。なかでも石井文龍は『秋顔子』には四句が入集している。一茶は二句ある。この時点では一茶はよほど素丸に寵愛されていたのであろう。素丸に入門して半年で二句入集である。

全盛を又見るさくら紅葉哉	文龍
はつ空や朝彦早き大やまと	同
無二無三寄せけり年の片男池	同
安忍する枝更になき柳哉	同
今迄は踏れて居たに花野かな	一茶
汐浜を反故にして飛ぶ衛かな	同

この二句をもってしても、一茶は今までは不遇であったが、何とか陽の目を見たとしてもいいいたような気分である。汐浜は竹阿のいた竹屋町渭浜庵のことであろう。要領がよいというか、顔色を見て行動しそうな一茶の姿である。

この後一茶は執筆に取り立てられ、三月には西国行脚の旅に出してしまうのである。この後十年後の寛政十一年（一七九九）一茶三十七歳の葛飾蕉門『其日庵歳旦帳』加藤野逸編での一茶の位置を確認してみる。まず一茶と同時入門の加藤野逸は当然「其日庵四世」となっており、それに続いて上席に新方備後会頭素水の句が三句掲載されるなど武州東部が勢力を持っていた。

気に障る事更になしけさの春	素水
世の中に障らじ年の丸頭巾	同
ひねた身を上着に隠す柳哉	同

素水は、この三年後の享和二年（一八〇二）に野逸の後を受けて、白芹と称し、四十六歳で葛飾派宗家其日庵五世を継承し、十五年務めた後文化十四年（一八一七）に六十二歳で没した。この歳旦帳で次に記されているのが新方連会頭備後、文龍とあり、三句が掲載されている。

はつ空や朝彦早き大やまと	文龍
無二無三寄せけり年の片男波	同
安忍する枝更になき柳哉	同

この時素丸と同門、野逸には先輩にあたる法雨は老茄園二世を継いでいるが素花坊法雨と名乗り、末席に二句のみ入集している。

すき初や日には野の春山の春	法雨
餅搗や幾夜寢覚の耳果報	同

武州北埼玉郡（久喜、栗橋、行田、羽生、菖蒲、騎西）などは多少庵談林、沾徳系の俳人が多いのだが、意外にも末席ではあるが三句入集者がいる。武州騎西会頭の其友である。

万物の玉の司や初日の出	其友
安々と越へて嬉しや年の坂	其友
夢ならで勇む心や春の駒	同

この『歳旦帳』に載っている葛飾蕉門の人数は、五百四十二人の出句で、一茶は旅宿中と言えども末席から数えて四十二番で一句しか載せられていない。一茶より前に五百人もいることから、一茶はいかに葛飾蕉門から疎んじられていたかが分かる。その他会頭は皆三句ずつである。一茶は葛飾派からはすでに忘れられた存在となってしまう。

叱らるる人うらやまし年の暮	一茶
---------------	----

開催者は、一臥亭南窓、其日庵野逸、菜国、素絃、扇波、五元、黙窓の筆頭五人である。武州会頭は、先に記したほか、大泊会頭和光、大川戸会頭竹間、松伏会頭涼花らがいる。会頭はすべて地方の有力会員であり、地方会員の指導者であるので、「庵」を名乗っている。これらの会頭の下に十人から三十人の門弟がいるのである。其夜坊、無名庵、陽鳥楼、応日庵、葛藤庵、晴日庵、人日庵、奥足庵、養老庵、柳日庵、一嘯庵、玲龍庵、黙々庵、白

地庵、梅王園竹露庵、雪中庵、只青庵、蔵文庵、平生庵、麦中庵、蓮葉庵、花月庵などがすべて会頭である。こうした人物が葛飾蕉門の現在の埼玉県東部地区の俳家を従えていたのであるから、一茶が足を踏み入れる透き間など全くなかったのである。

石井文龍は、武蔵新方連会頭、宜春園二世、起竹庵という身分である。不干は杉滴庵、南蔵院、老茄園四世である。一茶はそうした庵号も園号、亭号も一切ない。「信濃国乞食首領一茶」なのである。

ところで、越谷吾山と中村知足との交流関係は、吾山が天明四年（一七八四）に表した俳諧注釈書『朱紫』に中村知足が序を寄せていることから深い交流を知ることができる。上巻に芭蕉発句五百句を注釈し、下巻は和歌、俳諧の逸事を載せ、巻末に四季混雑を置いて芭蕉をはじめ全国各地の俳士、吾山の知友の句三百十五句を収めている。このなかに一茶の句はない。知足は次のような序文を記している。

いまも世を金の門に避け、市中に隠れたるものあり、あが友師竹庵ぬしは鳥が啼く東の大江戸近かき越谷のうまや路にあれぬ。もとより家とめりければからのやまとの文の巻多に蔵め貯へざるはなし。……人となりて時に詩にたくみにわかぬの浦辺の遠きにわたりつくばの道の高きをよぢてやがて詞の林に斧とる事をなむ常の業とせり。わけて俳諧のつらねうたにことに妙にして世にどよめる事ひさしかりき。さればかくまくも賢き大御恵を蒙ふり奉りて法の橋てふ位に昇る。実に此道にひでたりといふべし。……

武蔵国藤原知足いふ

天明四年十月²⁸

中村知足は、このように藤原氏の系図を相当に意識している。文龍の青壮年期（判者になる前）、谷原では知足の名を知らない者はないという一大勢力を持っていたのだから、文龍もどこかで触れてもよいものであろうが、何も書き残していない。一茶は、『三韓人』に中村知足の句を入集させ、葛飾蕉門の同門、同期の人の句は一句も入集させてはいない。このようなことから、一茶と文龍との不仲を知ることができる。同時に、中村知足がいかに武蔵東部、房総の葛飾派の大先輩として重きをなしていたかも頷ける。

²⁸ 松本つとむ『越谷吾山』（さいたま出版会、一九八九年）二八一頁から再引用。

埋火に千鳥ありたけ聞えけり 知足

一茶が葛飾派房総巡回指導で世話になった人達の句は、それぞれ入集されている。

朝飯も焚ぬうちから閑古鳥	秋元双樹
鍬かけて長閑にしたる榎かな	大川立砂
大山が崩れて来ても巨燵かな	川原一瓢
甲斐がねや江戸で見て来し秋の雲	鶴老
ひよどりの見えてはや鳴はつしぐれ	石川雨十
用のなひ髪とおもへば暑さかな	織本花鏡
春風や女ぢからの鍬にまで	同
虫売の出て夜に入やうす哉	吉田月船
蝶一つふたつ朝飯過にけり	同
花守が余所の花見る月夜かな	同

一茶は、『三韓人』のなかに、特に親しかった人の句は三句または二句を入集させている。月船は茨城県北相馬郡利根町布川の人であり、伊勢屋善兵衛といい回船問屋を営んでいた。一茶の親友でもあり、最も安心して宿泊できた人物であった。そういう点から考えても、素丸葛飾蕉門の石井文龍は、一句でも採取すべきであろうが、一茶は葛飾派の同門の人物は掲載していない。むしろ奥羽の塩田冥々の句がある。蚕種問屋で地方廻りが多く、一茶とはそういう点で親くなったのであろう。『随斎筆記』でも塩田冥々の句は数句を入集させ、地方俳人の句を一茶自身が相当に意識していたということが分かる。

黄鳥のころがして行く茶の実哉 冥々

一茶は『三韓人』の編むに当たって、当代を代表する俳人の句を収録した。塩田冥々もその一人であった。冥々は、陸奥国本宮の蚕種業であるから、職業の関係上での交流ではあるまい。加舎白雄の門人で『冥々句集』も残している。奥羽から関東にかけて、蚕を商う旅すがら出合っ親しくなったものと思われるが、塩田為春と名乗る里正であったのだ

から、当然同門の石井文龍や不干の句も掲載して然るべきであろう。しかし、そのなかには文龍や不干や中村知足の句はない。

一茶はなぜ中村知足（敲石）の句を江戸俳壇徹退集のなかに掲載したのか。実は中村知足について言及した論文は今もって一編も書かれていない。中村知足という人物は他にも一人いる。尾張国鳴海宿の庄屋で鉄の売買を業とした俳人がいる。東西の有力俳家と交流を持ち、延宝二年には西鶴と、同八年には知足主催百韻には芭蕉を招き、元禄七年（一六九四）に芭蕉は最後の旅で知足亭に立ち寄っている。多くの俳諧集や俳諧紀行集を著し、『俳人名録』を編んでいる。歴代「知足」を名乗り、鳴海下里家として、歴代当主一家一門が、ことごとく俳諧を中心に広く文事に精通した。六代学海は建部綾足（涼袋）や池大雅らと交わり、『十便十宜』を所持している。貞門の俳諧書や俳家研究の基本的資料を所蔵しており、今では「綿屋文庫」となっている。この尾張の中村知足家が余りに知られているため、その研究は盛んとなっている。そのため、武蔵埼玉郡谷原村の里正中村太左衛門家、中村知足（敲石）²⁹の研究はほとんど見当たらず、本論文が本格的研究の始めてということになる。現在の春日部市谷原の人である。

以下に引用する中村知足に関する資料は春日部市郷土資料館所蔵寄託資料によるものである。

『賦物或問』安永四年、匍匐庵撰

序 雍州野弘撰文

乙未の春、武陽敲石子 賦物或問を作る又友生の詠春の俳頭若干を韓し其の後に附し、一編と為せば、則ち乏を梓し世に行ふ。以て初学の一助に備へ且つ友生の志を励

²⁹ 第一章で敲石については記述したが、講談社『日本人名大辞典』から、名古屋の『綿屋文庫』所蔵者とは別に埼玉の俳人としての知足については、「江戸時代中期の俳人。元禄九年生まれ。武蔵埼玉郡谷原村の里正。眼牛の門人で越谷吾山と親交を結ぶ。安永四年「賦物或問」をあんた。天明八年七月十三日死去。九十三歳。名は知足。通称は太左衛門。別号に匍匐庵、酔月」と記されている。何故に敲石が出版物に「武蔵国藤原知足、国藤知足」とことさらに記したのか。これは『新編武蔵風土記』の「谷原村」の公刊物として、その里正中村家の由来が記されているからである。中村家の系図には確かに、中村一氏にたどり、知足は重政から数えて五代目となる。一氏からは十代目である。「織豊時代の武将。豊臣秀吉に属し、和泉岸和田城主、近江水口城主の後、天正十八年に小田原攻めの戦功により、駿河府中城主となり、慶長五年七月十七日に死去。尾張出身。初名は孫平次」とある。一氏は、家康が晩年に隠棲した駿府城主を務めているので、それなりの武将であり、中村知足がここに繋がることは確かである。『新編武蔵風土記稿』にも、「当村里正、先祖多左衛門なる者、元は工匠、細工師なるを日光山御宮御修営の事に預り」と、由緒書きがある。幕府御細工組頭として修営に当たったことは確かであるが、藤原氏までの系図は確認できない。

すなり。其の心を用ふるや至りと謂ふべきのみ。余之に序すは 余未だ其の階梯を得る能はずと雖も 其の堂に昇れば則ち一語無く巻首を題すべしと 其の請亦翰すべからざれば 故に唯其の編録の意旨を書し 胎めに以て之を序と為す。(本文は漢文、筆者書き下す)

さらにもう一編の序文がある。

酔月主人滑稽に遊ぶ事多年あり 今や江都匍匐庵の後を継てここに風流におきふす
今年乙未春詞林東風に動き同好の風土鶯の舌を翻しつくつくしの筆を揮てつとい集まる
まま一の小冊子となんなりぬと思へば

多年此枝に酖るの花さく春と濱の真砂子の慮せぬことはりをうたふ

ここに又鸚鵡石あり花の鳥 半日庵 祇岱

この後に、中村知足が「賦物或門」について、自問自答の形式で連俳の歴史、八雲御抄解説、口伝、口決などの要領を漢文で記し、最後に「されど貞徳流には賦物をとらず立甫流には必賦物あれば其時その席のよろしきに随ひ好慮に任すべし」と記している。この後附録「試毫」には、以下のように記されている。

在五閑麗翁の詠歌にすがりて

菊のさく秋よりは又福寿草 匍匐庵敲石

「春興」

山笑ひ谷こたへたる雪解哉 敲石

この「賦物或門」には例句として知足の二句が記されており、続けて匍匐庵の高弟の発句十句が並んで記されている。佳石、紫石、麦之、桃里、山岫、抱霍、旧鴉、波凉、大鯨、祇岱、家翁柏之、男之燕石となり、知足の父親と息子の句も入集している。

この期、安永四年（一七七五）、一茶は十三歳で信州に長月庵若翁が滞在した時にあたるが、この期の武州における中村知足の掌握していた俳壇が手に取るように判明できる。一句ずつの入集句であるので、知足の門下の地名と門人の名だけを記す。（句は省略）

武州 岩槻（輕雲舎花郊、鶯園文句、鷄雲洞一風）。粕壁（千古、元洞）。久喜（霍舟、玉圃）。高岩（露水）。幸手（渭水）。蒲生（鯉仙、仙里）。備後（梅之）。松伏（雲鶯）。

大沢（蘭皐、女巴涼、蘭溪、廬山）

東都 本所（佳屋、戴二、桂十、來徳、菊字、菊水、祇明、自然舎牙栞、柏壽亭千句婦、有玉、松魚、南宋舎春江、鷺州、露白、岷江、江永、保久仙、菜陽、五室、百庵、不言、祇徳）。越谷（師竹庵吾山）

野州 水沢（文周、梅応）。真岡（市仙、蘭二、桃水）。高根沢（藤巴）。汗（逸豫、祇千）。宮（菊丈）。粕田（寛冠）。蓼沼（富山）。二三川（鮭子、止孝、升露）。

朽木 小山（知十、山夕）。間中（泉砂、百尺、來素）。稻毛（田此水）。平川（千狐）。壬生（休水）。長田（沢水）。

下総 結城（味水）。古河（吾友）。関宿（亀水）。中田（雨交）。水角（簾雨）。宇都宮（溪水）。

常陸 笠間（朴之）。竜ヶ崎（北紫）。下館（完車）。

勢州 山田（井沙鷗、浜鷗）大野（草光）。

越後 吾泉（魯石、泉草）。

肥前 長崎（一鳥）

関東一円から下総、常陸それに九州長崎にも門人があり、八十六名が掲載されている。埼玉県春日部市谷原（現地名）に住しながらこれだけの勢力を持っていた。特に江戸に門人が多くいる。東都は隅田川河口から東。すなわち本所一帯の地をいう。渭水や東都と称した。葛飾派の江戸在住人は東都と記した。ここで一茶と記すようになった経緯を整理しておこう。

一茶という人物が確認できる最初の行実については天明三年（一七八三）四月に夏目成美が関西の俳人重厚と沂風を迎えて隅田川に吟遊した際、成美、素丸と出合って親しくなったらしく、五月に相模藤沢堀内千珏が自邸内に菅神廟を再建した際に奉献された詩歌俳諧集に素丸と共に圀喬の名があるのが最初としている。（『連歌俳諧研究』第四十号、「一茶二題」石井光太郎）。翌天明五年に今日庵元夢の門人となったとしている。（俳誌『科野、昭和三十四年十月号、丸山一彦）ともかく判然とした名が記されたのは天明七年（一七八七）十一月に俳諧秘伝書『白砂人集』の写本の奥書に「小林圀橋」と記されているのを初見としている。同月に信州佐久の新海米翁の記念集『真左古』に素丸の名と共に渭浜庵執

筆一茶とある。天明八年（一七八八）に法眼苔翁から『俳諧秘伝一紙本定』を譲られ表紙に今日庵内菊明と書き、奥書に蝸牛庵菊明と記している。同年に元夢が撰をした『俳諧五十三駅』に東都菊明で十二句が入集されている。同年風後が編した『俳諧百名月』には東都連菊明の名で一句入集している。寛政元年（一七八九）一月に玄阿が立机しその記念集『はいかい柳の友』に今日庵執筆菊明として一句が入集している。同八月に秋田の象潟蛸満寺蔵『旅客集』に武州立圃、最上尾花沢艶柳、青柳、美濃魯九、江戸太白堂桃隣、粕壁祇空、梨一などの俳友と一緒に文と句を書き「象潟や山鳥かくれ行刈穂船、右東都菊明」と記している。

中村知足（敲石）の没年は天明八年（一七八八）であるから、武蔵、上野、下野、下総、常陸一円を掌握していた時期にあたる。この時期の一茶は、圀喬、小林圀橋、渭浜庵執筆一茶、今日庵菊明、蝸牛庵菊明、東都連菊明、東都菊明と、天明三年から寛政二年までの七年間のなかでどうして目まぐるしく記名を変えているのであろう。ここから中村知足が『賦物或問』を書いたのは安永四年である。一茶が出郷する二年前である。安永六年から天明元年までの一茶の行実は今も不確かである。天明二年（一七八二）に下総馬橋の大川立砂が葛飾派の判者となり、一茶はこの時に立砂の家に奉公したという説があるが、これも確証はない。中村知足は東都葛飾を掌握し、この年に没している。それ故に、知足と同郷の石井文龍が知足の一門を引き継ぎ葛飾派に所属したと考えて良いであろう。尚一茶が生まれたのは宝暦十三年（一七六三）で、この頃に武蔵東部を掌握していた人物に増田牛眠がいる。

江戸座俳人名録の『觸』には、「増田牛眠、匍匐庵、来庵蒼狐門、江戸宗因座、沾涼側、点者、明和八年三月六日没、五十三歳、諦譽華岳牛眠居士」と記されている。宝暦七年の祇貞編「歳旦帳」には「恋ならでまたるものは厄払」があり、明和二年の吾山編の「歳旦帖」には「年守る火鉢に酒の匂ひかな」の句がある。石井文龍の末裔、埼玉県春日部市武里の石井家には「はなし人もなくてふけたり今日の月」という、牛眠の短冊が伝わっている。春日部市内成就院に葬られたとされているが、市内山中観音堂に、「かかれぬぞもう命げのつくづくし」という辞世の句が刻まれた墓石がある。谷原の名主中村知足が「賦物或問」に八十六名の句を載せているが、牛眠は入っていない。牛眠は、江戸から粕壁に流れて来たが、匍匐庵を継承していた、いわば流浪の点取俳諧の点者であった。牛眠は匍匐庵を江戸東都の燕志に譲り、さらにそれを谷原の知足が継承した。知足は藤原氏末裔を自認し、連歌に通じているという俳諧師という自負が強かったのであろう。

中村知足の著した『賦物或問』のなかに記された主なる人物を記す。

吾山…沾徳座、のちに独立し古鳩庵、師竹庵。百庵とは互いの作品を出句し合っている仲である。吾山の『朱紫』に知足は序を寄せている。

祇明…蔵前札差。はじめ沾徳系のち祇空に私淑。祇徳等と『四時観』を編している。井筒屋夏目成美の伯父。

來徳…祇明の子。『五湖庵句集』を編す（父祇明の追善集、宝暦四年）。成美の甥。

祇徳…一世は宝暦四年没なのでこれは二世。夏目成美ら札差を弟子にしていた。安永八年没。一世、札差の祇徳は俳諧は祇空門「四時観」を編す。俳諧の古学を提唱。家業との両立を説く。札差を業務とし、武蔵、八王子、川越、騎西、古河等各地を廻り、富農、医師、僧侶、郷土、らを門人としていた。各地の門人は教養主義的な修身の俳諧として支持をした。洒落や譬喩に満ちた江戸座の風に染まらず、平明を志向した。

不言…沾徳座

菜陽…歌舞伎作者、堀越二三次。宝暦期には江戸第一の人気作者となった。俳諧も文人気質の作者といわれた。太田南畝の『仮名世説』に「堀越菜陽は狂言の作に老たるもの也」と書かれている。市川家の歌舞伎台本を多く手がけている。

百庵…連歌俳諧作者。幕府御坊主衆の家生まれる。正徳四年頃百俵二人扶持。茶は伊佐幸琢門、歌は冷泉為久、為村門。柳営連歌師の職を狙って罪を得る。俳諧は青蛾門。江戸座都会派の俳人。本草学や連俳の考証を好む。知足と深い親交を持った。馬場文耕の『当代江都百化物』巻二、『寺町三智百庵の弁』がある。

知足の門人には「菊」を号した人物が多い。このなかに、菊字、祇明、渭水、江永、菊丈、菊水、岷江、という「菊」や「水」をつけた人名が多い。『賦物或問』は、安永四年（一七七五）に著わされ、一茶が江戸に出たのは安永六年（一七七七）である。その後、天明七年（一七八七）までの十年間消息不明であるが、むしろ一茶は蔵前の札差、井筒屋夏目祇明に奉公をしたのではなかろうか。それ故に一茶は「菊明」「渭浜庵執筆一茶」「東都菊明」を名乗ったのであろう。

後に一茶が夏目成美宅の食客となって、成美との交友、成美の句類などを記した『隋斎筆記』を残しているが、ここに文化八年の記に次のように記した記述がある。

粕壁に檀泉が包丁しけるに

檀泉は秋田、久保田土崎湊の人である。元禄十六年八月十二日に秋田城主佐竹義処が死に、遺領二十万五千石を長子源次郎義格（十歳）が継ぐことになり、帰郷するに当って、其雫が紫紅を伴って秋田に帰国する折り、粕壁まで其角が送って来た。元禄十一年十二月に家老職を継いでいる。元禄十四年、其角撰『焦尾琴』³⁰に其角、其雫、風虎、檀泉、紫紅の「五吟歌仙」があり、『秋田俳書大系』に入っている。すでに元禄期の逸話となっているものを、一茶が『随斎筆記』に記しているのは、成美から聞いて書いたのか、あるいは成美の叔父祇明から聞かされた話だったと考えられる。一茶は、松戸の大川立砂宅に奉公したことよりも蔵前札差井筒屋夏目祇明宅に奉公したと考えるのが妥当であろう。

当時、武州岩槻には葛飾蕉門の荷葉斎素泉という俳人がいた。現さいたま市岩槻区尾ヶ崎新田の真々田家が所蔵する短冊は、葛飾蕉門の俳人たちのもので、その数は八十名を超えている。実に圧巻であり、そのなかに真々田素泉という俳人がおり、この人は葛飾蕉門の有力者であったと思われる。墓石にその人の存在を知ることができる。墓石には、「荷葉斎素泉居士、嘉永五年子正月十五日没、実相妙智清信女、嘉永三年己酉二月二十日没」とある。短冊には真々田家の血縁の人々のものもある。その短冊を地域や人的つながりに分けていくつかにまとめると、以下のようになる。

○素泉…二世荷葉斎、小崎庵真々田安五郎、武州綾瀬尾ヶ崎新田住、文政九年に判者となる。

奇山…映松亭、真々田雄助素泉の倅、天保九年九月執筆になる。

脩栄…六世両儀庵、武州新方領岱山村、素泉の弟、天保九年九月判者となる。

木淵…不極庵、会田源蔵、綾瀬釣上新田、天保九年九月判者となる。

この短冊を整理すると素泉関係の葛飾蕉門俳系武州綾瀬系図ができる。

○其日庵素堂、黒露、馬光、其日庵二世素堂、三世素丸、四世野逸となり、ここから素丸門人の名となる。藍水、序跋、我泉、元夢、野逸、白芹、買風、不干、文龍、素栄、南台となる。ここから五世其日庵白芹の門弟が次に続く。一力、素泉泰賀、呑酔、白扇、

³⁰ 文禄十四年（一七〇一）其角編。連句五巻。諸家の発句「古麻恋句合」などを収める。入集者には上級武士や富裕の町人が見え、作風は作意の強い其角晩年の異風が窺われる。『俳書集成十』『其角全集』にある。

吟和、素石となる。次に其日庵四世野逸門弟となり柳寿、是空、起笑の三人で、素泉の孫の柳雪が柳寿の弟子となっている。素泉は五世白芹（素水）の弟子となっている。短冊すべてを記す。

- 其日庵六世南台、其日庵七世列山となり、列山の弟子、野月、玄龍、寿石、奇山、五雲、其英、木淵、加鱸、素中、素東となり、素泉の弟奇山は其日庵七世列山の弟子となる。
- 其日庵八世蓁々、昇月、玄龍、錦江、蓁峨、素賀、脩榮、不測、鼠夕、素月、馬六、井泉らが八世の弟子で脩榮はこの列にいる。
- 其日庵九世錦江、原堂、素東、呑酔、一篤、白扇となり、これで真々田家の素泉、奇山、脩榮、木淵の四人がすべて葛飾蕉門の門人でまさに葛飾派文脈図形そのもので、この短冊すべてを並べると葛飾蕉門の武蔵東武岩槻領内の門人達の系統ができあがるのである。其日庵素丸の門人、藍水、元夢も、野逸、白芹、文龍、不干、蓁々らすべての短冊があるが、ここにも一茶の短冊は一枚も存在していなのである。素泉は素水（其日庵五世白芹）に師事しているので一茶の短冊もあってしかるべきである。素泉が文政九年（一八二五）に判者になった時点での一茶は、すでに柏原におり六十三歳になっておることから存在しないと考えられるが、これらの短冊に一茶と同時期の武蔵東部の俳人すべての作があるので、一茶はどこかの或る時点から葛飾蕉門から離脱したと考えられるのである。素泉が白芹に師事した時点では一茶も白芹と交友関係にあった。

なお、木淵は岩槻領尾ヶ崎新田字木淵の人であるのでこの系図に入るべきであるが、いつの時点かで、俳諧に執中をしてその果てに家を出て漂泊の生活に入ったと伝えられている。真々田家に伝わる短冊の作者らの居住地は、松伏村、大川戸村、内牧村、備後村、戸塚村、大富村、大通村、大畑村、長宮村、西新井村、岱山村、岱村、大場村、谷中村、藤八新田、尾ヶ崎新田、釣上村、大袋村となり、武州東部、葛飾の武蔵国における葛飾蕉門俳人らの所在をつぶさに知ることができる。尚武州埼玉郡谷原の里正中村太左衛門が中村知足敲石「武陽隠士」と称したことにちなみ、其日庵三世素丸も葛飾派から退いた後は「葛飾隠士」と称した。これにならい石井文龍も「葛飾隠士」と称している。文龍の弟子は草加、越谷、春日部、岩槻、川口などに分布しており、ここに一茶が田舎渡らひの俳諧指導に入れる余地はなかったのである。石井文龍が其日庵素丸から受けた宜春園の系譜を記しておく。

○一世素丸→二世文龍→三世文江→四世如水→五世吟路→六世竹露→七世蘭溪となる。

次に其日庵素堂は二世を馬光に継がせ馬光は老茄園も名乗っている。老茄園系譜を記す。

○一世馬光→二世法雨（赤岩）→三世藍水（松伏）→四世不干（内牧）→五世鼠夕（大川戸）→六世素月（内牧）となる。

以上は、東武蔵と葛飾における地方俳壇の系譜を知ることができる資料ともなっている。其日庵主と別号宜春園、老茄園もこの系譜から生まれたものといえよう。西国行脚に明け暮れた一茶には、庵主号も園号も受ける余地は完全に絶たれてしまっていたのであった。

第四節 葛飾派決別後の一茶の行動

一茶が寛政三年に父の病気見舞のため柏原へ旅立したのは四月十日であるが、その年に一度江戸に戻っている。これは『寛政三年帰郷日記』に書かれたようであるが、原本は現在も発見に到っていないので、江戸に帰着した日は判然としない。翌年の寛政四年三月二十五日に江戸を発って西国行脚の旅に出た。ここからの足跡は『寛政紀行』と『旅捨遺』に記されているので確認することができる。一茶が江戸を離れて西国各地を廻ったのは、三十歳から三十七歳までである。寛政十一年の正月を浅草八幡町の旅籠で新年を迎えている記述があるので確かなことである。一茶が西国行脚に出ている間、葛飾蕉門一派のなかにおける一茶の扱いはどのようになっていたのであろう。まず『蕉翁百回、追遠集』を寛政四年十月に今日庵一峨が編集しているので、この中から葛飾系の俳人の句を集め追善集を確認しよう。芭蕉百回忌の記念集で、序文は一志庵一峨が自序を識し、下総小金原馬橋の大川立砂が記して二人の序文となっている。巻頭句は東都放牛の「芭蕉忌や小窓を塞ぐ檜木笠」があり、続いて鶴子の「いざさらば雪を手向ん墳の前」とつづいている。ほとんど一句で総勢二百十一人である。終跋を元夢が書いている。

生に数あり、道に数なし。俳主ばせをの翁も嘆慨す短世にして五十路二とせに身終てすでに一百年。道は十方に通貫して千里に満ち、其流万家に汲む。いざや世の諸風

土法恩の法蓮を営、一志庵一峩其数にならぶ事宜哉³¹。

この記念集は、それぞれ国名と連が記されているので、この時の葛飾蕉門の連中構成がよく記されている。「東都」は百十九人である。「下総」は馬橋、古ヶ崎、小金原、和名ヶ谷、八木、竜ヶ崎、大竹、酒直、布川、田川、などの連である。「上総」は富津、大堀、福俵、百首、新川、土気、などである。その他「房州」「伊勢」「津」「京」「浪花」「甲府」「上州」があり、国は九ヶ国にまたがり、それぞれ「連」として属している人名を記しているので実にこの当時の葛飾派の地方集団、つまり構成員を如実に知ることができる。

「東都」は百十九人の人物がいるが、ここにはまだ、「武州連」の名はない。従って後の葛飾派の中心を占め、葛飾派の盟主の庵号を継承する素丸も、宜春園、老茄園を継承する法雨、さらには基日庵四世野逸、藍水、文龍、不干、其日庵五世白芹の名もない。今日庵一峨編、今日庵元夢監修だからであろうか。下編、安房の人物はかなりを占めている。この上総、下総、安房は「今日庵一峨序」と「下総馬橋立砂後序」とあり、実質的には、今日庵と、房総の門人が多勢を占め、その後にこの房総の人物も其日庵素丸か、其日庵白芹の二人のやり手の盟主に組み込まれてゆき、葛飾蕉門派に属することになるのであろう。このなかには、後に一茶と交友を持つことになる大川立砂、上総富津の織本花嬌、文東、砂明上人、曇斎一白、馬泉、その他なかでも一茶が出郷後に奉公をしたのではないかとされている馬橋の大川立砂、斗囿親子、さらには成美と共に一茶の有力な庇護者となり深い交渉を持った日本橋久松町の其翠楼松井らがいることは、その後の葛飾派が大勢力になってゆく過程をよく知ることができる。

このなかで一茶はどのような扱いかいを受けているかがよくわかる。『蕉翁百回追遠集』の末席に「信州雲水一茶」として一句のみ入集している。

狐火の行衛見送る涼かな 信州雲水一茶

この一句のみであるが、矢羽勝幸氏は「この句には蕪村一派にまま見られる小説的、幻想的な作品を模倣したものと思われ、積極的に天明調を研究していたことが推察できる」³²としている。矢羽氏の主張に従って、一茶の行動をもう一度たどってみよう。この時まで

³¹ 『一茶全集』八、六十七頁。

³² 矢羽勝幸、前掲『一茶新攷』、三一八頁。

一茶は、圀橋、渭浜庵執筆一茶などと記し、天明八年（一七八八）に今日庵元夢の門人となっており、「菊明」あるいは「今日庵内菊明」「菊明坊一茶」「東都菊明」となり、元夢編の『俳諧五十三駅』や『俳諧千題集』に入撰していた。しかし、この『追遠集』は寛政四年十月の刊行であるから、すでに一茶は、寛政二年には二六庵竹阿門に、寛政二年には其日庵溝口素丸に執筆に取り立てられている。それなのに「信州雲水一茶」で入集しているのである。この『追遠集』には、菊二、菊道、菊夢、菊丈、菊丸、菊露、菊守などの俳名が多い。一茶も菊明を名乗ったのは元夢門に入ったからであろう。また渭水、一水、如水、など水の名を持つ者も多い。このように考えると、一茶はすでに葛飾派にも属さず、今日庵、二六庵、などを点々としていたということになる。葛飾派の武蔵東部（東武）における勢力は其日庵二世の素丸と両勢力にあった法雨によって築かれ、さらに野逸と白芹によって武蔵東部、武蔵葛飾、下総葛飾、房州などの会頭を組織に組み入れることで一大勢力に成り得たのであった。武州東部は石井文龍、葛飾は藍水、下総花嬌、房州杉長、武蔵南部は不千、東都は其翠楼松井などがそれぞれ連を作っていた。

葛飾派同門の野逸、藍水、文龍、不千、白芹らが東都、武州東部南部を掌握しながら一大勢力を築いていたことに対抗し得る力を一茶は築くことができなかったのであった。それ故にかつて元夢に入門した旧交を頼り、馬橋の立砂親子、布施弁天（現我孫子市）の鶴老、富津の花嬌、砂明、布川の野叟、文東、馬泉、田川の曇花斎一白、下総竜ヶ崎の南道、房州千倉の杉長などを頼って田舎わたらいの俳諧指導をしながら生活をする術しかなかったのであった。

寛政十一年（一七九九）には一茶は西国行脚を一端終了して江戸にいた。横山徳布がこの年に編集した歳旦帳がある。『己未元除春遊』としている。また別刷りでは『葛飾派徳布歳旦帳』ともいっている。巻頭は如是庵徳布、次席が来二、三席が菊路、四席が絢堂である。一茶の句はほとんど末席に近い場所に一句だけ入集している。

菜の花に四ツの鳴る迄朝茶哉 行脚一茶

同じ寛政十一年に加藤野逸が編集した『其日庵歳旦』がある。上席には武州新方連中、養老庵風佐の三句に続いて、武州粕壁備後会頭素水（後の其日庵五世白芹）の三句があり、次に備後文龍とあり三句が並んでいる。武州新方連の人数は七十二名の大所帯である。次に房州連中とあり、四十八名である。房州連中にはそれほど名の知れた人物はなく、大乘

寺住職俳諧僧砂明と野竹ぐらいである。一茶が交友を持った人物は全く見当らない。つまり、一茶が寛政十一年に西国行脚から帰江した後に巡廻指導に訪れた人々は、今日庵元夢門の人達であった。この人達は元夢（別号安袋）の門を離れなかったのであった。元夢は寛政十二年（一七二七）に没しているの、この時点では当然葛飾派の野逸に従うことはなかったのであるから、一茶も末席で「雲水一茶」としか識るされていない。

寛政十一年、加藤野逸編『其日庵歳旦』の連の会頭が「庵号』を名乗っていることはすでに述べている。こうした記録から、東都、武州のいずれの地に葛飾蕉門が勢力を拡大していたのかについて整理してみれば、以下のようである。

- 東都一浅草、相浦賀、豎川、万年橋、桐生、舟堀町、浜町、石町、柳橋、女木塚、小岩
- 武州（埼玉郡）一草加、新方、備後、中野、大畑、谷原、一の割、大泊、大葭、大杉、川崎、向畑、武里、赤沼
- 武州（葛飾郡）一浜川戸、大川戸、松伏、金崎、今上、三郷、八条、八潮、岩ノ木、吉川、生麦、金川、赤岩、高野、騎西、西ノ谷、栗橋、加須、羽生、杉戸、百間
- 葛飾一木挽町、両国、元町、深川、小名木川、市川、舟堀、二ツ目、葭町、小川町、橋場、舟堀

埼玉県においては、埼玉の東部（南埼玉郡、北埼玉郡、南葛飾郡、北葛飾郡、を称して埼玉地方と呼んでいる）をほぼ領して勢力下に置いている。このように葛飾派の傘下の俳人は一大勢力となっており、当然其日庵の継承者は江戸在住の武士身分の者から始まり、その勢力を武蔵東部（東武ともいう）の俳人を麾下にした実力者が継承することになるのである。まず頭角を表した素水、藍水、文龍、不干らが継承者争いをしながら勢力を拡大して行ったものと思われる。この中から素水が其日庵五世を継承し、素水を改めて白芹となった時点から葛飾蕉門は武士から地方の有力者へと一派の棟梁が交替することになってゆき、東都の素堂、馬光、素丸、野逸と続いて来た幕臣、旗本の棟梁から、地方の素封家が葛飾派の頭領になっていったのである。ここに貨幣経済へと傾いて行った文化、文政期の江戸の繁栄が見て取れると同時に、当然葛飾派は、下総、上総、房州などにも同じ勢力を持つ葛飾系俳人も多かったが、江戸湾添いや、房総方面の会頭達は、油や醤油の醸造に携わっていた商人では棟梁になれなかったのであった。

文化、文政期には³³、一茶が耕やすことなく田畑を所有し、一茶自から小作の身から地主へと財を増やし、自からは耕やさずして小作に出すような田畑を持てるような時代になってしまっていたのであった。つまり、幕府の定めた「田畑永代売の禁止令」は、貨幣経済の浸透と同時にその実を失ってしまっていたのであった。素封家は、さらに困窮する下層農民に金を貸し、その保障として田畑を担保に入れ、返済ができない場合は、田畑の所有権を放棄させて広大な農地を持つようになって行った。それが藍水であり、石井文龍であり、そうした走りを手掛けたのが中村知足であり、会田吾山らであった。同勢力を持っていた房総の葛飾派の会頭は、江戸湾での海漁の舟主や医者などであったので、一派の棟梁にはとうてい成り得なかった。あるいは白芹のように江戸で旅館を経営するか、其翠樓松井や夏目成美のような札差しや日本橋の店の主人でなければ、一派を率いる金銭を持っていなかった。田舎渡らいを何年も続け、巡廻指導に明け暮れる一茶は、到底「連」など築けるはずもなく、到底会頭になぞなれるはずはないのである。一茶は、享和三年（一八〇三）頃には「一茶園雲外」とも記名をした。寛政七、八、九年と「雲水一茶」と其日庵歳旦に一句のみ記されるのは、一茶にとって堪え難い屈辱であった。それ故「雲水」の言葉を「行雲流水」などとは考えられる道理や余裕などもなかった。みずからそれ以外の何者でもない自由人であった。それ故に、「雲外」と記したのであり、文化七年（一八一〇）には「信濃国乞食首領一茶」とも記している。当然のことながら、葛飾蕉門の「はずれ者」であり「捻くれ者」を自称する俳名なのである。

文化九年（一八一二）一茶は五十歳になっていた。その年の十一月十七日に一茶は郷里帰住を思い立った。二十四日には柏原に帰着し、

これがまあつひの栖か雪五尺　一茶

³³ 幕法の根本であった「田畑永代売禁止令」は、開幕から終幕まで変わらなかった。これを「封建制度」としてきたのであるが、実質的に、元禄期を過ぎる頃より貨幣による経済が浸透し、化政期には金融のため、田畑を質に入れて金を借りた。返済できない場合は「質法流出」という形で実質的に貸し主の手に渡った。それ故に、大地主が生まれ、文龍や藍水、素水白芹など、地主、紺屋、帳拔人宿主などが大金を手にし、一派を掌握することとなった。俳諧も笠付、三笠付、懸賞付など、興業化・博打化し、日本全国に広がり、百姓がこれに興じ、土地を質入れたことによって、更に大地主は一大勢力を築くようになった。一茶は信州の片田舎の出身であるから、それほど地主にはなれなかったが、土地は小作人に耕させ、自分は商家、大商家という金になる者を門人として俳諧指導をした。こうした時代は土地の人間、土着の人間が財を成すことになり、これを商う、大商人が江戸を始めとして、全国に広がり、「金が金を生む世」となったのであった。

という句を詠んだ。葛飾派との自からの意志による訣別の一句であった。一茶が江戸を去り郷里帰住を思い立ったのは、一体なにがそうさせたのであろう。一茶が今日庵の再興のため一峨に協力、助力を始めたのは夏の頃からであった。一峨が今日庵を再興した時、一茶はその記念俳諧集『なにぶくろ』の序文をしたためている。文化九年十一月二十四日に帰郷した一茶は、そのまま定住したのではなく、文化十三年（一八一六）までの四年間に三回も江戸に出ている。江戸を去るにあたっての記念集『三韓人』を刊行するためであったのだろう。その時の宿泊が日暮里の本行寺であった。この寺は雪耕庵一瓢が住職を務めていた。別号を知足坊と称し、武州谷原の中村知足と同じ俳号を持ち、中村知足は匍匐庵を名乗った。成美とも親しく、文化八年には一瓢の処女撰集『物見塚記』の編集を一茶がほとんど手掛けた。また茨城県北相馬郡守谷の西林寺住職鶴老と両吟歌仙を巻いている。

一茶が文化十一年十一月に江戸俳壇を離れる記念集『三韓人』を刊行し柏原に帰着したのが十二月二十五日であった。一茶が江戸俳壇から完全撤退すると、間を置かず一茶と兄弟弟子であった不干が、葛飾派の老茄園四世を継承した。その年の三月には法券の地位に上がり、杉滴舎の号を武州新方連会頭、宜春園二世石井文龍の斡旋によって、其日庵四世野逸から認められて武州岩槻連会頭となっている。一茶と兄弟関係の弟子、野逸、藍水、文龍、不干、すべてが葛飾派の其日庵、宜春園、老茄園を継承し、掲句の果てに享和二年（一八〇二）一茶が四十歳の三月から父の病氣看護のため、柏原に帰郷している間に、白芹が野逸から葛飾派宗家其日庵を継承し、五世其日庵に就任していた。これで一茶の継承すべき葛飾派内の役職への道はすべて潰えたのであった。石井文龍は、不干の老茄園継承に際して、すみやかに「送舎号辞、文龍」として讃辞を送った。これに対し不干はこう詠んでいる。

会頭より舎号を給はりて
ながらへて屑の誉れや華大根 不干
巢籠りも籠の青葉や初茄子 同

石井文龍は、一体何を根拠にして一茶に冷たくあたり、このような惨い仕打ちをしたのであろう。この後、一茶が信濃柏原に退居しても、文龍は同派の実力者の座に居り、次々と「庵号」を与えて次のような讃辞を送っている。「老茄子 文龍」とある。

夫士は新しきを貴ひ人は旧を尊ぶむとは理なる哉ここに内牧の邑杉滴舎の主は壮年の頃より滑稽に執著なる事心馬に鞭打て意猿に追廻しつつ年長功成て弥流行に人を導く。嗚呼誠に老後の楽とは今更的中ならむ今年耳順の齡なるを賀して人々の送り給へる句々を梓になさんとなれば予も俱に手の舞、足の踏む所をしらず。夫是七十字のわれを追越せと鋤頭巾の眉廂をなてあげて秀筆に硯歩を汚す。(春日部市郷土資料館所蔵寄託資料)

こうした讃辞を送った文龍が、武州葛飾派の「庵号」「舎号」を文龍の推輓で許された人物を掲げておこう。それぞれの俳諧発句、連句は省略する。

敬林一累日庵、備後の人、智光院通句玄道居士、俗名関根宗七元恭、寛政三年十月十八日没。

帛川一春日庵、粕壁、法雨七十賀

樂山一無障庵、多賀出雲 神職 中野村の人

起笑一宝机庵、三風舎 上原安五郎、大場村の人

素月一累月庵、得得庵、杉滴舎、南蔵院式部、不干の子、天保十五年没

収月一守菊亭、武里の人、文化十二年に万句合興業

石井文龍は葛飾派の人物以外の俳家で、「多少庵、春暁亭」系の俳人も事実上の麾下に置いている。多少庵春暁亭吐園に次のような一句があり、それに讃を送っている。

夕顔や月のかかみを居てより (南子六十賀)

「名寛好説 文龍」

老子曰なの名とすへきは道の名にはあらずと 誠や人も此名ある時は亡後にも其傳を浮へ其名なき時は生前に此姿を失ふ しかもその名に三つの品ありて号は徳の表なれば代々も用へく字は軀の虚なれば二代も用へし諱は身の実にして魂を留れば一代に限るへし 寔に今吐園子に諱をおくる 曾て此人物に志ふかくふるきを尋て新しきに進む されは考の字を与むと反切を用わるに寛好の二字を得たり 夫此人の老先寛に司馬徽か好々の好となさは生涯此うへの幸やはあると此詞を添て送る。(春日部市郷土資料館所蔵寄託資料)

石井文龍が事実上麾下に置いた他門の人物を挙げてみよう。これらの人物に、文龍は会頭職や讃辞を送るほどの実力者となっているのである。一茶とは同期でありながら、雲泥の差というべきであろう。以下に示すのは、文龍がそれら他門の人物に送った賛辞や名前などを見ることができる歌集、神社奉納額あるいは個人所有の資料である。

泰路一南子六十賀、歳旦集

渭北一同

千狐一同

蒼吾一文政七年、多少庵粕壁会頭

里友一姫宮神社俳額

龍枝一奉納野州日光山大明神 同川久保

巴曲一止水軒、仲町旅籠住吉屋、その子雨十。

松圃一竹内、粕壁元本陣、高砂屋彦右衛門春日庵、年六十にて明治初交に歿す脇本陣
旅籠所有

以下は、武州杉戸宿、武州幸手宿、武州栗橋宿などの日光街道沿いに勢力を持っていた葛飾派以外の杉戸宿百間多少庵系の俳人と春暁亭系の俳人名である。これらの会頭名もすべて文龍が作って送ったものである。

渭南、涼波、一帙、井眠、東木、喜園、春珂、呂雪、琴里、如川、喜和女、寿多、竹雨、渭水、一篤、雨十、雨丈、収月、如柳、竹塙、翫水、春就、里屋、巴雪、曲江、江雪、江鶴、江月、呂風

以上が事実上、文龍が麾下に置いていた今日庵元夢の後を引き継いだ多少庵柳居とその弟子の多少庵秋瓜の流れを汲む人々である。このなかに、かつて一茶が元夢門に在った時に同門として励んだ、渭水、渭南、雨十などもいたが、彼らの一派にも一茶には戻れない事情があったのであろう。かくて葛飾蕉門の頭領はすべて武州東部（特に春日部、松伏、吉川）などの人物に掌握され、一茶の居場所は完全に消失し、失意のなかに葛飾派と訣別し故郷粕原で一茶社中を起さざるを得なくなったのであった。

第五節 故郷定住への決意

一茶に対しては、多くの作家が人物的な興味から一茶を主人公にした小説を書いており、その人物設定に際しては、「捻くれ者」とか「拗ね者」という呼び名を張り、否定的に評した研究者や作家もいる。あるいは一茶の詠んだ「耕ずして喰ひ、織ずして着る体たらく、今まで罰のあたらずもふしぎ也 花の影寝まじ未来が恐しき」という文政九、十年の句中に記された「耕ずして喰ひ」とある前書について自虐心を持ち、罪悪感にさいなまれる心境を詠んだものと解し、一茶が「不耕の民」であることへのコンプレックスを生涯持ちつづけた俳人であったと認識したところから導き出されていた。こうした認識を決定的にした論があった。昭和四十五年に発刊された小林一茶の研究では当時第一人者といわれた栗山理一氏の次のような一説が書かれていた。

農民の子として生まれた一茶は、すでに少年期に離村し、江戸を足溜りとする俳諧遍歴とはいえ、実情はルンペン生活に近い。それだけに衣食住の窮乏はただちに郷村の農民生活の記憶につながってゆく。耕さぬ身といい、穀潰という実感は、都市育ちの者とは異なるものがあつた。しかも当代における農村の疲弊については幾多の社会批判や政治批判もあらわれていた。すでに荻生徂徠も『政談』において町人の富驕を否定し、農を本とする治世の要を説くところであつたし、天明の頃、積極的に農本主義を主張した者に安藤昌益や山片蟠桃がある。奥州八戸の医者であつた昌益が、その著『自然真営道』や『統道真伝』に述べるところは、人間の自然的生活である「直耕」を重んじ、万人が直耕に従事し階級も搾取も闘争もない「自然世」を理想社会としている。したがって他人の直耕に寄生する「不耕貧食」の従はもつとも憎むべきであり、農民の直耕を食りとる「逆賊」である武士を支配者とする「法世」は否定されなければならぬと痛烈に批判したのであつた。大坂の富商升屋の番頭であつた蟠桃は、その著『夢の夜』において「古今人ニ上下ナシ」との「人間平等論」を述べるとともに、徂徠の「農本商末」の理想を継承して、町人無用論を説いている。このような思考や批判が一茶の目に触れ、耳に届いたとの保証はないが、農民の子である彼にとって不耕の遊民であることへの自虐からは逃れ得なかつたであろう。このことは後年柏原へ

帰住するようになって付着して離れない意識であった³⁴。

しかし、以上の栗山氏の説に対して、青木美智雄氏は異論を唱えている。青木氏の異論をまとめれば、栗山氏は一茶の『七番日記』や『急遞記』にみえる石田梅岩の『都鄙問答』、富永仲基の『出定後語』や徂徠の『政談』などを購入したという記録から、一茶がそれらを読み、さらに人間平等論などの反封建的思想をいう安藤昌益や山片蟠桃の著作にも接した可能性があると思定している。昌益の代表作の『自然真営道』のなかで社会思想にかかわる全面的なイデオロギー批判は「稿本」のまま埋もれていたし、また蟠桃の『夢の代』も明治に至るまで刊行されることがなかったのも、青木氏は結局「一茶の目に触れ、耳に届いた可能性はほとんどなかったといつてよい」というのである³⁵。

確かに、栗山氏が想定したように、一茶は何んでも学ぼうとする意欲と好奇心は旺盛であったことは間違いないだろう。しかし、「階級意識」と「搾取と闘争」、さらには「万人平等主義」や「支配層と被支配層」の体勢批判まで持っていたとする考えは極論すぎる。むしろ、「遊民遊民とかしこき人に叱られても今更せんすべなく 又ことし娑婆塞ぞよ草の家」と記している文化三年一月一日の日記の言葉と意識に注目すれば、一茶にとって、「不耕不織の民」であることよりも「遊民」と称され、現実にそういう生活を送っている自己の姿に嫌悪感を抱いていたと理解するのが妥当であると考えられる。近世社会では、幕府や諸藩はその政治機構のなかで、個々の家庭や家族を直接には支配はしなかった。村請制度によって年貢や諸役の納入は村単位で請け負われ、幕府や諸藩における貢租公課負担の支配力は、個々の家族に直接及ぶことはなかった。一茶の父親弥五兵衛もそうして田畑を年々増やしてゆき、一茶が帰郷する頃には二倍にもなっている。このように近世の農民家族は一応は自立した小農として生産に従事し、家の認識も家の生産性に果す役割もしっかり持っていた。

延宝八年（一六八〇）、信州でも各藩がしっかりと検地を行っている³⁶。この年に一茶の

³⁴ 栗山理一、日本詩人選十九『小林一茶』（筑摩書房、一九七〇年）、四十七～四十八頁。

³⁵ 青木美智雄、前掲『一茶の時代』、一三〇～一三一頁。

³⁶ 村の総石高を計算し、年貢を布達するには、まず検地を行い領地の面積を確定し、定免法、検見法によって貢租公課の負担を決定した。質地流出、開拓、穩田開墾などによっていつも面積が変わるので、定期的に検地をしてそれぞれの家の持ち高を計り、人別帳に記録した。特に転封や取りつぶし、加封、減封などがある度に、新領主は検地を実施した。貢租公課は村単位で割り当てられたので、名主、組頭などは、算術と文字は必要欠くべからざるもので、当時の識字率は非常に高いものであった。

祖小林惣兵衛から始まり三代目善右衛門までの田畑の持高が記録されている³⁷。十九石で村内七位、百姓代を務むなどと記録されている。この年に幕府は『百姓伝記』を全国の藩を通して百姓に配布し、規範意識や道徳意識の涵養を論語を通して学ばせ、そこには百姓の生産に資するための方法論が示されている。農民はそのような『百姓伝記』類の生活規範を記したものから日々の生活を始め各村々の掟やきまりを作って行った。そのひとつに河村瑞軒の著作『農家訓』もある。冒頭部だけを記す。

論語に云、耕也餒其中にありといへり。春不耕夏不耘則ば、秋の収冬の貯不足にして、凍飢是より起り、或は袖を爪で道路の岐に臥し、椀を持て人の門に佇、姦を計り邪愛に生じ、或は垣を破壁を穿、人を誂し人を掠、白地に恥を蒙り名を穢し、黄泉に骸を碎き魂を痛しむ、千非の根百苦の本、悉く皆不農より不起と云事なし、是論書の誠なり、依之百姓は以て農業を骨髓に染て是を励べし、春不耕して腹に飽て食ひ、冬織ずして饒て被る者は、国の賊なりと云ふ³⁸。

『農家訓』には『論語』の言葉を取り入れながら、農民が精を出さなければ、飢餓に瀕してしまうので、職分にはずれるような農民を「不耕不織の民」として国の賊であるとしている。このように、農民自らが耕作に励むようにしむけてゆくのが幕藩体制であった。

享保期には西川如見が『百姓伝記』に倣って『百姓囊』を著している。

農民の朝夕食する時、その椀穀を謹て拝戴して後食する者多し。士町人にはする者すくなし。聖人も食する時はかならず祀りたまひしとかや。仏法には生飯とる礼あり紅毛人は外夷なれども食する時は、座中の人食盤にむかひ、おのおの手を拭き、末座の人何か呪文を唱へて、敬白し終りて後、上座より次第に食す。これを見る時は常の食戴て食するは、世界の通例なりと見えたり、農祖神の恩を謝し万人の辛苦を敬拝する意ならむ。況富貴の遊民、耕さずして食ひ、織らずして着るともがら、衣食の奢を尽せる事、子孫の冥罰恐れざらんや³⁹。

³⁷ 『一茶全集』別巻、「御年貢皆済庭帳」、七十一頁。

³⁸ 日本教育文庫『農家訓』、一頁。

³⁹ 『町人囊・百姓囊・長崎夜話草』、一八二頁。

この文章では、武士や町人が食事に際して「万人の辛苦」に感謝の念が欠如しているものが多いと苦言を呈しながらも、遊民に対しては「富貴の遊民」の生活を端的に表す言葉として、「耕ずして食ひ、織らずして着るともがら」と断じ、「子孫の冥罰恐れざらんや」と結んでいる。『百姓伝記』にも、「子には幼少より素直なる儀を伝え聞かせ、分限相応に手習いをさせ、算盤をならはせ、耕作の儀を勤めさせて、村中の若き人家職ならぬことをして遊ぶは悪事なることにて、見捨てにするはよからぬことなり」⁴⁰と書かれているように、耕作に勤めるのが百姓の本分であることを述べている。

また『百姓伝記』は幕藩体勢の構築のための書であり、そのなかにすでに「読み書き算盤」を分限に応じて勤めさせよ、とあるので当時の農民は読み書きに通じていたことが知られる。いうまでもなく、一茶も江戸に出る前に、「読み書き算盤」の三つの教養は身に付けていた。天明期に大江匡弼は『春秋社日醺儀』を著している。一茶が俳諧の道を志した頃である。

管子曰、ひとつ農民耕ざれば民に饑る者あり、ひとつ女織らざれば民に寒者あり、倉廩実して礼節を知り、衣食足りて榮辱を知る⁴¹。

『論語』や『管子』の言葉を借りて、農民が耕作に励むことの重要性を述べている。近世後期の幕閣遠山左衛門景賢は『利権論』を書いている。遠山家は岩槻城主も務めている。

又此弊を惡み富商を滅せんとて、青楼游所を郷里に建、富商の金を散さんとするこ
とあり、其の金誰が手に落つるや、皆游民の手に入るなり。是れ游里日々に繁華して、
不耕不織飽食暖衣するもの多き故、上下皆窮するに至るなり⁴²。

町奉行、寺社奉行を務めた遠山の言であるから、文化、文政期の貨幣経済に伴って豊かになった町民や商人が遊郭という悪所通いをし、それに農民も加わってしまっていることへの戒でもあった。

屢々一茶と関わりを持った水戸藩士高橋昌碩の著に『富強六略』という本がある。

⁴⁰ 『百姓伝記』上、三十四頁。

⁴¹ 『春秋社日醺儀』、『日本経済叢書』十一（日本経済叢書刊行会、一九一四年）、四六四頁。

⁴² 『利権論』、『日本経済叢書』十一（日本経済叢書刊行会、一九一四年）、五二二頁。

遊民と申は商人などの類にて、耕さずして食ひ、織らずして着る者の儀に御座候、是即国家の為には浮蠹と申者に御座候、此浮蠹を御へらし、男子は耕に就き、女子は織をはげむ様に相成不申候ては、上下の困窮取直し兼可申候、凡一家内にても耕作織縫もしらぬ懶惰の者共大勢扶持仕置候ては、其身代年々暮しこみ、勝手向取直し候儀決て行届不申物に候⁴³。

これは近世末期の水戸藩に於ける状況を述べたものであるが、遠山のように江戸の町政にあずかる者と藩を支える役目の者との違いが明確に示され、「藩の賤政も立ち行かなくなる」という危惧の念さえあらわにして「遊民」を特色づけている。発足当初から領国の年貢として納められた米を貨幣に換金して国を治めて来た幕藩体制に取っては、不耕の民が増えれば米の収穫量が減り、一藩の財政危機に直接関わることになる。幕藩制確立期には奨励によって農民の精謹を誉めて田畑の開拓増産を図ってきたが、幕藩体勢が揺らぎ始め、さらに貨幣経済の浸透によって藩の賤政が苦しくなると、「町民を遊民」としてなじるようになった。いかなる弁駁を使っても、土農工商の理を説いて耕作させようとする政策の変化を見ることができる。

一茶と同時代を生きた武陽隠士が不耕不織の民をどのように見ていたのか『世事見聞録』から引いてみる。

さてこの幣俗の起る濫觴は、抑々二百有余年以来、土民を虐げ商売に施し、国民を損じて遊民を益し、兎角国民を憎んで町人遊民を愛する振合故、前にゆふ如く国民段々衰微に及び町人遊民の道のみ、追々繁昌に及び、世上の人数過半町人遊民となりて、織らず耕さず勤めずして、莫大な米穀諸産を費してほしひままに遊食する事なり⁴⁴。

ここでの「遊民」は、農民を指す言葉ではない。商人優遇策の結果、巷には町人や遊人が繁栄している。その遊民は富裕な大商人であり、暖衣飽食をむさぼる豪商である。さらにそういう人々が食糧事情を悪化させている。つまり、農民出身ばかりではなく、大商人が民を虐げている者を指す語に変わっている。

⁴³ 『富強六略』、『日本経済叢書』十七（日本経済叢書刊行会、一九一四年）、二五一頁。

⁴⁴ 『世事見聞録』、四一九頁。

一茶の交友関係では、江戸蔵前の大札差井筒屋夏目成美、馬橋の大油問屋大川立砂、江戸日本橋大旅籠其翠樓松井、江戸浅草の大商人伊勢屋彦兵衛一峨、大阪飛脚問屋大江丸、江戸常盤町呉服商越後屋庄之助菜国、江戸神明前書画商芝山、江戸小伝馬町薬屋幸手屋茂兵衛、江戸浅草能役者寸来、下総流山醸造元秋元三左衛門双樹、江戸絵師赤松麦宇、江戸日本橋旅籠屋関根三右衛門白芹、こうした人物はいずれも俳諧で名を成した人物であるが、すべて江戸市中で大店と呼ばれていた。一茶にとってみれば、こうした人物は皆「不耕不織の民」である。武陽隠士がいう「世上の人数過半町民遊民となる」に該当する人士である。

一茶の句に「名月や江戸の輩らが何知って」という作がある。商人に対しては幕府は關所や徳政令が出せた強みがあった。武陽隠士とは、第一章で述べたように、一茶とは同門大先達の武州粕壁谷原の中村知足（敲石）であった。幕藩体制下での国家経営は、斎藤数山著『條教談話』に、「夫農業蚕が日の枝は国家の大本也」⁴⁵と述べたように、「農桑」こそが国家安定の基礎であった。

葛飾蕉門の頭領は代々幕閣の重臣や旗本が其日庵を継承してきた。一茶や知足、文龍や不干、藍水という武蔵東部（東武）の農民出身者はどれほど才能に恵まれていても其日庵を継ぐことができなかった。それなのに弟弟子になる関根白芹が其日庵五世を継承した。深川、浅草で升屋という百姓宿を営んで成功し、江戸日本橋馬喰町に大旅籠を築き、地方より江戸に昇って来る旅人を宿泊させた。折りからのお伊勢参り、江戸見物の旅などで益々大繁昌をして、其日庵四世の加藤野逸が素丸のようにやり手肌の人物ではなかったのをよいことに、白芹は金にものをいわせて其日庵を継承した。葛飾蕉門分脈系図には、「四祖（野逸）は才学高からざれば」などと記されている人物であるから、白芹は錢に厭目を付けず葛飾派を掌握し、再編成をして組織の結束を強め、強力な葛飾派を再構築した。兄弟子を放逐し、老茄園法雨、老茄園三世藍水、宜春園二世文龍、老茄園四世不干という、其日庵の別号、老茄園と宜春園を与えて葛飾派から退去独立させた。別号を与えられた者は、東武での名主、庄屋という有力農民であったためである。一茶のみは、故郷放出された農民であり、諸国行脚と師系を渡り歩いていたので、「文化年中一派の規矩を過つによって、白芹翁永く風交を絶す」と記されているように、実質的に葛飾派から破門に追い込んだのであった。一茶からみれば、「不耕不織の遊民」は、むしろ関根白芹であった。この時一茶は、『文化九・十年句帖』に「耕ずして喰ひ、織ずして着る体たらく、今まで罰のあたらぬも

⁴⁵ 『條教談話』、『日本經濟叢書』十六（日本經濟叢書刊行会、一九一四年）、一頁。

ふしぎ也 花の影寝まじ未来が恐しき」と書き記している。

それでは不耕不織の遊民が増大するとどういう結果になるかという、食糧が自給できない階層が増大し、工商までが遊民と同列に扱われ、元凶扱いされるような深刻な状況が現出するようになる。一茶は、この頃より「信濃国乞食首領一茶」と記したり、「世路山川ヨリ險シ 木がらしや地びたに暮るる辻諷ひ」とも記すようになる。

一茶のやや先輩となる武陽隠士（中村知足）はどのように指摘していたのかを見ることとする。

当世三ヶ津は勿論、国々在々津々浦々まで、町家は段々人数増して、種々の遊民及び悪党出来、国々の辺鄙の農民は次第に減るなり、一体世上融通弁利過ぎて、軽きものの流行いたし安く、町人・遊民・無宿などの世渡り出安きゆゑ、人も動き安く、また町家の潤沢にめでて、右体国々より寄り集り、追々賑ひを添ふるといへども、国の元は右の如く薄くなり行くなり⁴⁶。

様々な奇怪な事件や一揆、打ちこわしが局地的に屢々発生するようになっていた。農村人口の減少と都市民の増大による食糧生産者と非自給者の比率が大きく変化して行ったのである。その上に、天明の飢饉のような悲惨な飢餓状況が発生した。非自給生活者は、おしなべて遊民視し敵視されるような風潮が生まれ出してもいた。江戸に居ても一派を形成しなければ俳諧師として自立自活することができないと思うようになり、信濃国一茶と記名するようになっていた。蕉門の一派の頭領になるには武士身分であったが、次第に金持ちと大商人になれなければそれは無理な事と思い到ったのであった。

そうした経済状況のなかで江戸への年季奉公が禁止され、冬季だけの江戸稼ぎ人が急速に増大し、「出替り」と冬季稼ぎの双方が江戸で流行するようになっていた。そこで、幕府は寛政三年（一七九一）に江戸滞留農民の帰農をさらに促進するような法令を次々と出すようになっていたのである。江戸に出て来た農民は、奉公稼ぎをするより裏長屋の貧し家住まいで利潤薄くも商ひをし、その日暮らしの生活を強いられても、商ひで小銭を貯めながらも生活をしている方が奉公をするよりもずっと気楽であった。現代日本と同じように、江戸にばかり人が集中すると、農村には農業人口が減少し、手余り地（現代の耕作放棄地）が増大し、年貢の減少が夥しくなり、藩の財政が立ちゆかなくなっていた。同時に江戸市

⁴⁶ 『世事見聞録』、一一九～一二〇頁。

中では貧民人口の増大による社会不安の原因が簇出し、「近年は奉公人も一体少なく、一統差し支多く相聞こそ候」と、『天保御触書集成』に書かれたような状況が生じ、幕府も年季奉公を激減させ、江戸市中のこれまでの労働市場の需給関係を回復させなければならぬと考えたのであった。

惣じて近来在方より江戸へ出候もの多く、在方人別相減り、農業行届き難く、困窮の国々もすくなからず、江戸表へ出候者も次第に人別相増し、おのつから諸商売薄く相成、是れ又難儀に及び候故、銘々在所へ罷り候様申し触れたることにて、願出候ものは、路銀など御手当下され、夫々片付け相成事に候間心得たがひなく願申すべく候。
(『御触書天保集成』 六五六五)

これが寛政三年の「江戸返し法令」である。ここに路銀や夫食、農具代など支給するから帰村しなさいとあっても、結局そのほとんどが江戸に届まってしまった。

一茶も家族を持たない滞留人口の一人であり、江戸の自由な風俗に慣れてしまった不耕の民であった。俳諧仲間を「遊民」と罵ってみても、実際貨幣経済の進展社会で地位を得てゆく者が一派の頭領となる俳諧の世界に身を置いても、全く望みなどなくなっている時代であった。白芹も大旅籠を営む大商人であり、石井文龍は大地主であり、藍水は大手の染物業者であった。江戸での一茶の俳諧師としての知名度は上っても、一派をまとめる金銭的基盤は全くなく、絶望的な状況に置かれるようになっていた。

一方、江戸に冬季江戸稼ぎに出る農民に対して信州では次のように対応している。

越後・信濃両国は雪の内百姓共は産業はこれ無き故、前々より江戸ならびに近在近郷も奉公稼ぎとして、往来切手村役人印形書き付け持参いたし相望候ものも有之候⁴⁷。

寛政四年（一七九二）の幕府直轄地、幕領中野代官所の村触である。冬季出稼ぎ者は、生活に困窮して離村した欠落農民か、無届けの出郷者であったので、村の宗門帳には、「無行衛」と記され、「帳はずれ」とされたため帰るに帰れない連中か、質地など部分的に田畑永代売禁止令が解かれていたので、自耕作地を手離してしまった者が多い。なんといつて

⁴⁷ 河野実「飯山藩領内の冬季奉公人稼ぎ」、『信州史学』創刊号（信州大学教育学部歴史研究会、一九七三年）から再引用。

も農業労働の辛さが骨身に沁みていたので、都会における少々の貧しさや生活苦など問題ではなかった。こうして幕府の帰農令はたいした効果をあげることができなかった。帰郷される地にも、受け入れがままならない状況もあった。

帰農の儀に付而は再応御触も之有候得共願出候もの至而少く候は、当地に而は難儀乍も、夫々の小商又は日雇稼等格別に骨折れ不申、可也にも取続き罷在候得共、在方に而農業致し候儀は、在方出生の者に而も一旦中絶いたし候而は骨折候義相成兼、又は其当人は帰農の志有之候而も、江戸表に而妻子持之者などは、其妻子在方を嫌ひ候類も可有之、一体柔弱より事起り、困窮いたしなから帰農之儀願出不申も可有之。(『御触書天保集成』 六五六六)

実際、帰村の意思がありながらも妻子ある者は、江戸暮らしになじんでしまい帰郷することを嫌がるようになっていた。小商や日雇派遣などをして、格別骨折りもしないでも生活できると踏んでしまっている者が多くいた。さらには江戸市中ではなくとも、近郊で産業が生まれ、養蚕、製糸、織物などの業種が増え、そこに日雇に行くことで生活ができるようになっていた。一茶はこうした時代の変化を身を持って知っていたのであった。

江戸奉公に出ることによって不耕の地が増え没落農民の小作化が進むと、質流れしてしまった田畑を請け戻すことが困難となり地主制が確立して行った。もとより豪農であった同門の文龍、不干、知足、藍水などが、東武の地で質地を取得して大地主となって庵号を名乗ったのを見た一茶は、すでに中農から上農に昇り百姓代を務めるようになっていた小林家の財産の折半を要求した。小林一茶の弟専六も、実際は父親の弥五兵衛が質地を買い占めて田畑を手にし、石高を増やしたことを目の当たりにしていた。一茶と弟専六は財産を折半する協議をし、「熟談書付之事」という文書を取り交わした。さらに一茶が郷里を離れていたことを理由にそれまでの一茶の取り分の土地使用代金として、弟専六から金十一両二分を受け取り、「取極一机之事」という誓約書を村役人に提出して帰農が成就したのであった。

寛政帰農令は江戸住いの浮浪人や出稼き居候を村に帰すことが目的でなされたが、それ程効果が上らなかったと記したが、葛飾蕉門を追い出された一茶にとっては、千載一遇の好機であった。恐らくこうした知恵は、同門同期の石井文龍、中村知足などから授かったものであろう。かくて一茶は文化九年（一八一二）十一月二十四日に柏原に帰住し、一茶

社中の形成に取りかかる。葛飾派破門の一茶に取って名乗るべき庵号も嗣号もない。やがて一茶は「俳諧寺一茶」をみずから名乗り、社中を建立したのであった。

中村知足（武州埼玉郡谷原村里正、武陽隠士）の『世事見聞録』を最後に引用する。

一体村内の人数百人あれば百人ながら甲乙なく、油断なく一人もあそぶ者はなく同じやうに農業を励むべき筈の所に、当時は大体福有の者、又は不埒者また諸商人諸職人出来て、百人の数なればその内およそ五十人程は遊人出来て耕作をせず、その上右の如く村内の者も他所へ持ち出す故、あとの五十人は骨を折って辛勞するのみならず、食糧まで不足するなり、爰に於て小前百姓は五十人にて、百人前の骨折り金銭の不足と二重の難儀を著るなり、かくてこの食糧の不足の分は、また何か産業など営みて他所より金銭を取り戻して、食物を買ひ入れざれば叶ひがたし、この産物をいとなむ事これまた煩勞にして、右の二重の上のまた一つの難儀なり。百姓の貧福偏り風俗の転変に依って爰に三重の難儀起る⁴⁸。

不耕の遊民が増大すると、生産農民が「古来になき難儀を三重も四重も著る」⁴⁹という農村構造の変化をもたらし、その結果、「倅娘なるものを奉公に出し、またはその身他所へ稼ぎに出て、又は種々利欲の道を働きなどして正路の民減損するなり」⁵⁰という事態に至った。その上、離農遊民を生み出し、遂には「ことごとく正路のもの絶え果てんか」といわれるように、亡村に到る警告をしてやまなかった。

この指摘は、まさに小林一茶の人生そのものであった。一茶を追うようにして信濃を離れた若者で成功した者はほとんどいない。文政になって柏原を出た出稼ぎ人小林山三郎が幕府表御番医師となった坂立節ぐらいであった。柏原の本陣問屋中村六左衛門の長男嘉藤太（桂国）二男千五郎（観国）は、一茶の幼なじみで桂国は一茶より十歳年長、観国は一歳年少で一茶が亡くなるまで長く親交を結んだ。その隣家に桂屋中村与右衛門（平湖）がおり、平湖の長男大三郎が二竹を名乗り寛政十一年に江戸に出奔し一茶の弟子になりたいと申し出た。二竹はお尋者となり、文化八年に「宗門人別下帖」から抹消され「帳外」になっている。つまり除籍ということであった。一茶は二度の出奔にも諭して帰郷させた。

⁴⁸ 『世事見聞録』、九十一頁。

⁴⁹ 同上。

⁵⁰ 同上、九十二頁。

なぜなら百姓出身の地方出身者が江戸で宗匠になれないことを、一茶は身をもって痛哭の思いで体験していたからであった。一茶が都市と農村において身につけた生活と俳諧文化は帰郷後に大いに役立ったのであった。その心境を次のように述べている。「御仏は暁の星の光に四十九年の非をさとり給ふとかや。荒凡夫のおのれごとき、五十九年が間、闇きよりくらきに迷ひて、はるかに照らす月影さへたのむほどの力なく、たまたま非を改めんとすれば、暗々然として盲のよみ、蹇の踊らんとするに等しく、ますます迷ひにまよひを重ねぬ。げにげに諺にいふ通り、愚につける薬もあらざれば、なほ行末も愚にして、愚のかはらぬ世をへることをねがふのみ」⁵¹と記し、安心立命の境を得たのであった。

⁵¹ 『一茶全集』四、三三三頁。

第十章 一茶の教育教材化

第一節 教科書に見る一茶像の変遷

小林一茶の俳諧を幼児教育の視点から着目したのは鈴木鎮一氏であろう。無論このことは昭和五十年代に幼児教育の重要性が囁くように論じられるようになってからのことである。一茶の作品が教育の場で教材として用いられた先蹤は、信濃教育会が明治四十三年（一九一〇）郷土に関連した内容を充実するために編纂した『補習国語読本』を以てその嚆矢とする¹。ここでは、小林一茶の人と作品を教育教材化しようとした意図が、当時の教育においていかに結びついたかについて考察をする。

明治中期頃から東京高等師範学校附属小学校では、身近な事物の観察を出発点とする「合科的教育」を行う試みがなされていた。すべての科目を統合して特設した「総合的な教科」として位置づけ、「直観教育」や「郷土科」という科目を置いた。明治の教育界のエリート養成の実験校として、一般の学校では困難な様式の試みができたのであった。同時に同校は開学時より戦前まで、日本の初等教育の拠り所として大きな影響力を持っていた。「直観教育」「観察科」「郷土科」は、当時の小学校の教育には入っていなかった地理、歴史、理科の教授を行うために、特設された教科として扱われた。

明治三十年前後には欧化政策の転換期にあり、国粹主義が唱えられ同校の授業もそちらに傾いていた。樋口勘次郎は「統合主義」を主張し、森岡常蔵は「混沌教育」を実践していた。森岡常蔵は、統合科目の中心に修身科を置くことを主張した。教材として入学直後の一年生を対象として「舌切雀」の童話を題材とした。明治二十九年（一八九六）には「遠足」という活動として飛鳥山への校外授業を行って、「修身科」「読書科」「算術科」「理科」「遊技」などを取り込んだ混沌授業を実践した。これが今日も行われている校外行事であり、総合的な学習となっているのである。

森岡はさらに、小学校三年生向けの修身科の教材として「ロビンソン・クルーソー物語」を翻案した「盧敏三」という童話を自作した。遭難した少年が南海の孤島で独立して生活してゆく様子から、家族の意義や日常的な様々な知識を学ばせるという意図があった。明治三十六年（一九〇三）、東京高等師範学校附属小学校に「国民科」が特設された。これは、

¹ 明治四十三年（一九一〇）に信濃教育会によって編纂された副読本。ここでの『補習国語読本』からの引用は長野県教育委員会教育センターが保管する資料を参照した。

教科の枠として「修身科」の一項目として位置づけられ、日常生活に必要な社会組織、制度などを教え込むために設定されたものであった。こうした教科を加えながら、入学時点で「混沌授業」、特設科目として「直観授業」を、それに「郷土科」と「国民科」、そして校外観察、学習の全体としての「遠足」などが位置づけられ、児童生徒の全体に「修身科」も含めて学校教育全体の教育課程が整えられてゆくのであった。

大正期から昭和初期にかけては、教育内容はさらに洗練されてゆき、高師付小では、教育の視点を「郷土」に求めていった。同校では教育課程改編の試みを行い、「郷土的教育」として一括し、それぞれ段階的に位置づけをした。

- (一)、入学時に於ける合科的取扱いにより、必要に応じて時に行ふ。
- (二)、第一、第二、第三学年を通じて行ふ直観科や理科や理科的教材をあわせて教授する。
- (三)、尋常四年に於て行ふ、郷土地理、地理的教材を図る。
- (四)、尋常六年の最終学級高等小学校に於て教育の帰着として行ふ郷土教授の総括的取り扱いとする。
- (五)、各年に亘って行ふ校外観察という系統に位置づけ郷土的教育の方法として総括とする。

このように、高師付小では、身近な自然や社会の事物、事象をとりたてて教えるための特設の「郷土科」を廃し、教育全体を郷土科していくという視点が打ち出されたのであった。この頃から長野県では、ここで学んだ教師を中心として「郷土科」を授業に取り入れ、教育全体が「郷土化」する教育、すなわち郷土に根を張った教育を行うため、その教材づくりに専念する熱心な教育会ができつつあった。これらの教育者が「玉声会」を作っていたが、次第に「小林一茶」を教材化する取り組みの気運が高まり、「茶馨会」と改称された。

昭和初期には戦時色が強くなると、さらに郷土の認識を深め、その学習を通して学校に郷土の改善のセンターとしての役割を持たせようとする「郷土教育」が行われるようになっていた。郷土を構成する要素は、土地、勤労、民族であり、郷土教育はそれら三者を総合した認識の形成を目指した。この三つの要素は、単独の教科ではカバーできない内容であったため、「具体的な郷土の姿」を通して、地理や自然に関する知識、生産活動への参加、そして文化、歴史の時間も組み込まれた。こうした教育の運動の広がりの中、信濃教

育会は、独自の「読本」（現在の補助教科）を作り、一茶、二宮金次郎など歴史上の人物や、農を奨励する精神涵養のための「勸農詞」などを教材として扱うようになっていった。

郷土を教材化することの意味は、自分の地域や国を同等、対等に理解できる意識を持つことによって、郷土への愛着を狭隘な愛国心と直結させながら、国の方向はファシズムへ向かう時代に入り、折しも世界的な経済恐慌によって農村は社会不安を「自力更生」させるべく、政策と連動して郷土教育が位置づけられるようになったのであった。信濃教育会が、「郷土の生産活動」や文化、風土に根差して学習を進めることは、戦後の社会科の前史としての内容と方法を備えていたことから、今日の総合学習にもつながる教育実践展開となっていたのであった。

この企画は、『補習国語読本』が全国的な広がりをもつ使用に耐え得る教材を編集しようとした点に画期的な意味があった。渡辺弘氏は『小林一茶－教育の視点から』のなかで、その『補習国語読本』の編集基準を、次の七項目にまとめている。

- (一) 修身、道徳に関するもの、特に国民精神を発揮させたもの。
- (二) 農工商等実業に関する趣味を養うに適したもの。
- (三) 他日専門書を研究する端をひらくための法制、経済上の術語と記述形式を備えたもの。
- (四) 青年の志気を鼓舞し、その志操を高雅にするための秀美崇高な国民的文学であるもの。
- (五) 郷国の美風を維持し、日進の文運に貢献するための郷土の偉人、名山、景勝地などに関する記事。
- (六) あらゆる文章の形式を網羅し諸種の文体に親しませる。
- (七) 各巻首に教育勅語及び戊申詔書を載せ誦読に熟しその意を銘記させる²。

この七項目については、郷土に関連した知識を充実させることにより子ども達に興味を持たせようという、子どもの側に立った教育的配慮もなされているが、それと同時に当時の国策であった富国強兵、殖産興業振興、忠君愛国の精神昂揚などの国家目的がそれとなく付加されている。一茶を『補習国語読本』に採録した意図も、それなりに理解することができる。この読本の内容は表紙を開くと「詔書」として教育勅語と戊申詔書

² 渡辺弘『小林一茶・教育の視点から』（東洋館出版社、一九九二年）、二七二～二七三頁。

の全文が記載されている。その目次は五十二項目から成っており、明治三十七（一九〇四）年に編集された国定教科書『修身』に倣っている。明治三十七年以降『尋常小学校修身書』は、全五期に及んでいずれも徳目に応じた項目を立てた「徳目主義」を編集の方針としている。高学年になるに従って「人物基本主義」に替わってゆき、一人の人物を通して複数の徳目について述べている。同じように、『道徳読本』もまた「修身」教科書と同様に、「尊敬すべき人格」「優れた人格」についての具体的な「かたちと内容」を示した教訓的な逸話集となっている。

次に、信濃教育会が編纂した『補習国語読本』の目次を記す。1) 詔書、2) 我が国（監井正男）、3) 国家及び国体政体、4) 蒙古来（漢詩）、5) 楠氏の忠（頼山陽）、6) 雪の信濃（田山花袋）、7) 諏訪神社、8) 田舎の風月（大橋乙羽）、9) 農業の快樂（徳富蘇峰）、10) 植物の景観と気象（三好学）、11) 植物の景観とその気象二、12) 労働の朝（韻文）、13) 一茶、14) 勸農詞（小林一茶）、15) 交際（福沢諭吉）、16) 俳句、17) 裡諺格言、18) 涼しき夕（徳富蘆花）、19) 雑木林（徳富蘆花）、20) 飛驒の山中より（遅塚麗水）、21) 佐久間象山の急務十事、22) 広瀬中佐（斉藤單念）、23) 海軍戦死ノ霊ヲ祭ル辞（東郷平八郎）、24) 旅順便り（徳富蘇峰）（以下略）³。

こうした内容を見ると、国定教科書の『尋常小学校修身書』と重複する人物が採録されている。当然のことながら、重複人物は軍人や国を興した人々である。このなかに小林一茶の名がある。楠正成、東郷平八郎、佐久間象山、広瀬中佐、乃木希典、渋沢栄一などは当然のことと思われるなかに、何故に小林一茶なのかという疑問もあるが、一茶の後にある「勸農詞」と結びついていることで理解できる。徳富蘇峰は、国家主義者として名を成していたが、その弟の徳富蘆花の作品が多いのは、蘆花がトルストイの思想に基づいて田園生活をし、東京郊外で晴耕雨読の人道主義思想を実践して自然詩人といわれたからであった。「勸農詞」は、二宮尊徳を称えた作が一般的であり、芥川龍之介の主治医下島勲の甥の高津才次郎氏によって、一茶の「勸農詞」は一茶の作ではなく、伊那飯島の宮下正零という人の作であることが解明されている。また信濃毎日新聞記者をやっていて、明治三十三年四月一日から百二十一回にわたって「俳諧寺一茶」を連載した（のちにまとめて『俳諧寺一茶』として刊行）東松露香は、「此辞の如きは、これ堂々たる大文章にして、一茶が園芸観乃至田園生活観として見るのに値あるのみならず、寧ろ俳句界の二宮尊徳翁の遺訓か、将た信州柏原の老農小林弥太郎先生が道話として、これを聴くの値あるを信ずるなり。

³ 信濃教育博物館所蔵、一～三頁。

彼の『勸農詞』の如きは、農家の子弟をして能く教訓する処あるのみならず、之に依りて其勞を慰藉し、將た之によりて適進補助の好文学たるあり」⁴、と述べたことによって世に広く知られるようになった。

教材『補習国語読本』の13)「一茶」に盛られた一茶像はどのようなものか。

一茶、姓は小林、通称を弥太郎と云ひ、俳諧寺一茶と号し、晩年蘇生坊といふ。宝暦十三年上水内郡柏原に生る。家世々農を営む。三歳にして母に別れ、それより継母の手に養われて具に辛惨を嘗む。六歳の時、

我と来て遊べや親のない雀

と、彼の境遇はこの悲哀を歌ひはじめたりとは云へ、又天才の萌芽すでに表はれたりと謂ふべし。七、八歳の頃、中村氏の村塾に入り、後、堀若翁（正風の俳句をよくし、桃園と号す）に就き専ら俳句を学ぶ。十四歳の時、過酷なる継母の為に遂に家を放逐せられ、年三十余にして江戸に遊ぶ。成美の門に入り、十余年間思を風流に馳せ、普く諸子百家の書を涉獵し、傍ら仏書を研究して其藻奥を極む。これより諸国を遍歴し、足跡到らざるところなし。晩年郷里に帰りて、草庵を結び俳諧寺と号す。益々風流を縦にして、弟子甚だ多し。文政十年十一月十九日没す。年六十五。国村明専寺に葬る。辞世の句あり。

盃からたらひにうつるちんぷんかん

一茶、性豪放、辺幅を修めず。清貧に安んじ他に顧みず。加州侯かつて翁の俳名を聞き句を召さる。

子どもまでのんのふとよぶ梅の花

侯、大に之を嘆賞し、使をして贈遣する所あらしむ。翁之を戸外に棄て、

何のその百萬石も笹の露

以て其の人となりの一端を知るべし。其の俳句は最も奇警を以て著はれ、滑稽諷刺、慈愛の意を輕妙に奔露し、優に一家をなすといふ。（上水内郡誌）

松蔭に寝て喰ふ六十余州かな

やせ蛙負けるな一茶ここにあり

けふからは日本の雁ぞ楽に寝よ

⁴ 東松露香、前掲『俳諧寺一茶』、二二六頁。

一茶像はこのようにしばしば歪曲して描かれる。六歳で句を成したということは概して虚偽でもなかろう。ただし「我と来て」の句は文政二年（一八一九）、一茶五十七歳の作で『おらが春』に初見する作である。芥川龍之介も「わが俳諧修業」のなかで龍之介十歳の作として「落葉焚いて葉守の神を見し夜かな」と詠んだとしている⁵。歴史に名を残す人には往々にして有り得る逸話でもある。天才人としての一茶が描かれ、江戸に出てからは風流人、勤勉家として描かれ「蘇生坊」という、とあるのは、晩年に一茶が中風で死にかけた時に全快を喜んで書簡に書いたものであって、他はほとんど現在でも事実とは認められていない。

次に教材となった「勸農詞」を引用する。

風流を楽しむ花圃ならで、後の畑、前の田の作物に志し、自ら鋤を把つて耕し、先祖の賜物と命の親とに懇ろを尽くし、吉野の桜、更級の月よりも己が業こそ楽しけれ。朝夕心をこめて打ち向ふ菜種の花は井出の山吹よりも好らしく、麦の穂の色は牡丹、葛葉より腹ごたへあるかと覚ゆ。朝顔より夕顔こそよけれ。萩・菊よりも芋・牛蒡に味あり。すべて花・紅葉より栗・柿は実の木なり。稲の穂なみの賑はしく、藁の前より腹満つる心地して、粟穂になるる鶉より野辺の虫音聞くが面白く、遠き名所・旧蹟より近き田圃の見廻りが飽かず。松島・塩釜の美景より飯釜の下肝要なり。上作の名刀より鋤鎌は調法なり。書画の掛け物よりかけて見る作物の肥を油断せず。投入の立花より茄子・大角豆の正風なるが見処多く、茶の湯・蹴鞠の遊より渋茶を飲んで昔話こそをかしけれ。玉の台より茅屋の家居が心やすく、高きに居らねば落つるあぶなげなく、迷はねば悟らず。念仏のかはりに業を怠らず。実義を尽くすは神詣に比し、仁者にならひて山に木を植ゑ、知者の心を汲みて田の水加減を専らにし、珍肴・鮮肉の料理より錢入らずの雑炊が後腹病める気遣なし。総じて世のなかは飛鳥川の流れ、昨日の渚は今日の瀬となるが如し、唐の成陽宮・萬里の長城も終に亡び、平相国の驕も一世のみ、鎌倉の將軍も三代を過ぎず。北条・足利の武威尽き、織田・豊臣の栄も一代なり。時過ぎ世変るはまことに夢の如し。世に稀なる珍味も舌の上にあるうち、伽羅、蘭癖の薫もかく申すのみ。楽は苦の基、財宝は後世の障り、遊興は暫時の夢、他の富めるも羨まず、身の貧しきも欺かず。唯慎むべきは貧欲、恐るべきは奢りなり。抑も田地は萬物の根本にして、国家の至宝なれば、父母の如く敬ひ、主の如くに尊み、

⁵ 「わが俳諧修業」は大正十四年六月「俳壇文芸」に掲載されたもので、単行本には未収録である。

妻子の如く育み、寸地をも捨てず、何処にても鋤先の天下泰平、五穀成就を願ふより外更になし。

俳諧 小林一茶⁶

先述したように、小林一茶を教育の視点から考察したのは渡辺弘氏が先蹤であろう。渡辺氏は『小林一茶・教育の視点から』を著して、一茶が明治以来今日まで教育教材としてどのような視点から把握されて、どのような意図の下で教材化されたかを歴史的に考察している。そのなかで掲出の「勸農詞」について、「ここでも当時すでに『おらが春』をはじめ、一茶の随筆なども発見されていたにもかかわらず、なぜこの勸農詞が載せられることになったのかという疑問が起こってくるのである。おそらくここにも、前述した三つの句などと同様に、一茶を教材化しようとした人たちの特殊な思惑があったのではないかと考えられる。もともと、俳諧寺一茶の勸農詞といわれるものが、はじめて世に登場したのは、明治三十五年頃、俳諧寺二世丸山可秋によって取り上げられ、その著書『一茶一代全集』（明治四十一年三月二十日発行）に収められてからである」としている⁷。この勸農詞が、信濃教育会編の『補習国語読本』に収められたのは、この読本が主として当時の実業補習学校の副教材として用いられた経緯からであったのであろう。殖産興業の振興という国策の推進に由来している。

一茶の残した『七番日記』は、文化七年（一八一〇）から文政元年（一八一八）までの句稿と日記である。一茶四十八歳から五十六歳までの八年間の記録である。この間諸国放浪の身から故郷柏原に定住し、五十二歳の文化十一年四月十一日には隣宿の常田久右衛門の娘きくと結婚している。こうした事情を見ても一茶は自ら積極的に農業に従事した形跡はない。この日記に、「耕さずして喰ひ、織らずして着るていたらく、今まで罰の当たらぬもふしぎなり」と書きしるし、田畑がありながら鋤をもって働きもしないでいる姿を「勿体なや昼寝して聞く田植多唄」と詠んでいる⁸。五十二歳で初婚の菊女二十八歳と結婚しているのであるから、俳諧師としてそれなりの収入もあり、名声もあったと考えられる。日記には妻の農事の従事記録が克明に記録されている。また日記中に「月をめで花にかなしむは雲の上人の事にして、おらが世やそこらの草も餅になる」⁹と記している点では土臭い、

⁶ 長野郷土史研究会機関紙『長野』七十七号（一九七八年）、十四頁。

⁷ 渡辺弘、前掲『小林一茶・教育の視点から』、二八四頁。

⁸ 『一茶全集』四、五八〇頁。

⁹ 『一茶全集』六、三五三頁。

自ら農業に励む農民詩人的要素も多分に感じられるが、日記中の信濃社中の俳諧指導記録を見るととうてい農業に従事する時間はない。このような点からも、勸農詞はおよそ一茶の作でないことは確かである。東松露香の『俳諧寺一茶』の「老農小林弥太郎先生」という記述¹⁰からも作られた一茶像を生んで行く過程がよく知られる。一茶という人間、俳諧師という個人以上に国家的利害に則って教材化しようとする姿勢が窺えるのである。

渡辺氏の『小林一茶』は、副題に「教育の視点から」とあるように、教育史家として一茶の生きた時代を分析し、一茶の俳諧から童句を抽出し、教材として扱った。ここでは渡辺『小林一茶』の「第三章・教科書に現れた一茶像」を参照しながら一茶の作品が教育の面でどういう働きをしたか考察してみたい。渡辺氏は「一茶の場合、その教材化にあたって、たとえば私達が見てきたような一茶の人間や活動を基本に、子どもたちに特定の問題意識からの光をあててみせるというのではなく、むしろもっぱらその時々々の国家の政治的・社会的状況の把握を先立て、それに応じて、その把握に相応しいように一茶像が描かれ、教材や教科書として子どもたちに提示された」¹¹と結論付けた後に、時代の思想と教材化の意図を探っている。

教育はある種の目的意識をもった行為であり、目的意識的な人格を形成させる営みであるといえる。そうした意味合いから言えば、近代公教育は国家的価値観や社会的目的意識をもって行われる個人への積極的な国家の介入であるともいえよう。公教育は、集団としての子どもを対象としており、学級担任制により個別的に責任を負いつつも学校集団としての教師が教育に当たっている。学校あるいは責任管理者である校長を中心にして教員は、国家的または地方的行政当局の指導に基づいて組織的な活動を展開している。それならば明治期における公教育が、富国強兵、殖産興業振興、忠君愛国精神昂揚といった国家目的が遂行されるような施策と教育と教材の一体化がなされるのもやむを得ない仕儀と見られる。渡辺氏の一茶教材化の視点もこのような視座から一茶を見ているといってよい。渡辺氏の指摘を整理してみる。

(一) 明治四十三年に信濃教育会編の郷土に関する副読本『補習国語読本』に「一茶の生涯」と俳句六句が掲載される。国家礼賛者として登場。一茶作「勸農詞」が掲載、

¹⁰ 東松露香、前掲『俳諧寺一茶』、四七一頁。

¹¹ 渡辺弘、前掲『小林一茶・教育の視点から』、二七〇頁。

農家の子弟の先頭に立って邁進する道話者像として記される¹²。

(二) 大正三年、信濃教育会編の文学的趣味に立脚した女子教育用教本『女子補習国語読本』に、一茶が中風の見舞いの札状として記した「俳諧寺の記」が奥信濃の厳しい冬を紹介するものとして「風土と生活」の章に掲載され、俳句八句。一茶三十九歳の折の父の看病から初七日までの三十余日の看病記録『父の終焉日記』の二日と二十八日の条が「生の悲劇をリアルに描いた自然主義的告白小説の手本」として掲載された。「添乳」と題して『おらが春』の一節掲載。長女さとの赤裸々な写実的な描写法、一茶自身の自己反省、子どもの純真な愛情表出、この三点が写実的手法、写実主義、童心主義的教材として掲載された¹³。

(三) 第三期国定教科書（大正七年～昭和七年）に「雀の子」と題して俳句五句が掲載。単語短文主義の改善、文章表現における弾力性、教材の平易化、教材の文学化、教材の生活化、国際的教材の増加、などが国定教科書の編集意図であり、特に第三期国定教科書は、自由主義的、児童中心主義的思想のもとに教科書編集が行われた。一茶の童児詠句がこの期の教育目標に適していた¹⁴。

(四) 昭和十六年に、昭和十年四月一日公布の「青年学校令」を受けた『青年学校国語副読本』¹⁵に俳句十二句が掲載された。その抽出は『俳諧寺抄録』『一茶発句集』『おらが春』『七番日記』などから歳時記風に新年・春・夏・秋・冬とそれぞれ採録された。渡辺氏は「一見何の問題もないかのように見える。だがこれらを逐次吟味していくに従ってこれを編集した人びとが、時代の風潮に合致させつつ一茶という人間を、まさに国土・郷土礼賛の農民詩人として巧妙に描き出している」と結論づけている。『青年学校国語副読本』は、大正十五年の信濃教育会編の『補習国文読本』¹⁶に取り上げられた三句を再び掲載した¹⁷。

¹² 同上、二四九～二五四頁。

¹³ 同上、二五四～二五八頁。

¹⁴ 同上、二八七～三〇六頁。

¹⁵ 昭和十年四月一日に青年学校令により青年訓練所と実業補習学校を統合した。日本の国体や国民感情の優秀性を強調する教本として作製された。

¹⁶ 大正六年、島木赤彦信濃教育会編集主任によって大幅な改訂がなされた副教材。諏訪を中心として長野県下で国語の授業に使われた。主に文学教育としての教材が集められた。また、島木赤彦が編集をしたことで、作文教育に資することができるように、郷土の風土を取り上げた文章が重んじられ、写生文が大勢の人々に普及されるに及んでいる。実に実践的な面での総合教育を目指していたと言える。赤彦が正岡子規の提唱した写生文を多く書いたことで普及し、また当時の教育の一方法として全国に普及していった。

¹⁷ 渡辺弘、前掲『小林一茶・教育の視点から』、三〇六～三一四頁。

(五) 昭和十六年、信濃教育会編『国語副読本』に、「一茶発句」として二句及び句解説が掲載された。自然愛に満ちた一茶、自然美に対する愛。渡辺氏は、「農村の秋の夜長という一風景として描写したところは、農民の貧しい暮らしのなかでのまじめな労働という視点から捉えている」として、これも社会情勢などの変化に伴う状況主義であると論じている。改訂版でも俳句三句と解説がある¹⁸。

(六) 昭和二十四年、教科用図書検定基準が定められ、教科書検定制度が実施された。検定合格済『国語六年下』に「かえる」が掲載された。四句の俳句にそれぞれ解説が付されている。これに関して渡辺氏は、「極力その人間像を固定的にしかも直接押し付けることはしないながらも、内容から子ども好きで、動物好きで、しかも思いやりのある温厚なおじいさんとしての一茶像を描き出している」とし、また好好爺像に仕立てるところに戦後の教材の一特色があるともいえると記している¹⁹。

(七) 昭和二十四年の検定合格教科書『高等国文近世篇』には『父の終焉日記』の五月七日と五月十日の条が「みとり日記」として掲載されている。渡辺氏は「こうした二つの教材をとおして描き出された動物好きで、思いやりのある、いわば博愛主義者とでも呼ぶべき一茶像はやはり戦後の状況を反映したものといえるのではないだろうか」と結んでいる。これ以後一茶は時代の状況に依って変遷しながら現在に到っている²⁰。

児童文学者で桃太郎研究家として知られる滑川道夫氏の著に、『桃太郎像の変容』という著書がある。この著書で滑川氏は、「鬼を平和愛好者に仕立て、桃太郎を侵略者として風刺したのは芥川龍之介が最初のようなものである」²¹としている。「桃太郎」は室町時代に成立した幼児向けの物語であるが、時代色を濃く反映し、忠孝勇武をたたえた作であったが、その後日本五大昔噺のひとつとして語りつがれ、延宝から享保時代にかけて出版された草双紙のなかの赤表紙で売れたため赤本としての代表作となり、子女の慰みにあてられた。その後明治になると、その期の国策によって変遷されていった。こうして桃太郎像が変遷していったように、一茶も時代の変遷に応じて俳諧史に登場したのである。一茶は明治四十年に東松露香によって全国的に知られるようになった。露香の『俳諧寺一茶』は、それまで

¹⁸ 同上、三一三～三二三頁。

¹⁹ 同上、三二四～三三二頁。

²⁰ 同上、三三三～三三八頁。

²¹ 滑川道夫『桃太郎像の変容』（東京書籍、一九八一年）、二六〇頁。

信州のみに限られていた一茶の名を、一躍全国に宣伝した画期的な伝記だといわれている。そのために一茶の名が広く一般にまで知れわたったことは事実であるが、一茶生前、一茶没後の俳人番付、世評等を検討してゆくと、幕末、明治初年の一茶の評価はほぼ今日と同等の非常に高いものであった。露香の著書によって一茶の名は、確かにより一般的に浸透はしたが、それ以前からすでに高く一定の定着をみていたともいえるのである。

ちなみに、全国的に一茶が知られる元になったと思われる一茶句碑について、平成二年に調査された句碑の数を見ると次のようになる。

- (一) 信濃町 (三十七基)、牟礼村 (二基)、戸隠村 (三基)、長野市 (六基)、上山田村 (一基)、小諸市 (三基)、豊田村 (一基)、山ノ内町 (八基)、飯山市 (一基)、小布施町 (二十基)、須坂・更埴市 (一基)、高山村・真田村・塩尻市 (各二基)、下諏訪村 (十九基) となっており長野県内の一茶句碑は百八基になる。
- (二) 流山市 (三基)、新町 (三基)、六月村 (二基)、尾久・府中・伊勢原・松戸・柏・我孫子・取手・守谷等関東・伊豆地方には二十一基がある。
- (三) 柏原市 (二基)、琴平町・善通寺市・新居浜市・西条市・北条市 (各三基)、松山市 (二基) 等関西・四国地方に十七基がある。

これらの句碑は、「俳諧寺一茶保存会」の平成二年の調査による一茶記念館の発表であるから、これらに漏れている碑もあるであろう。長野県内の百八基は当然のことであろうが、一茶がその活動の地盤としていた葛飾地方と四国地方がほぼ同数であることに驚く。一茶の『西国紀行』は、寛政四年（一七九二）三月に江戸を出立し、寛政十年八月に江戸に帰着した足掛け六年、実際は寛政十一年一月に浅草八幡町の旅館菊屋儀右衛門方で新春を迎えているから七年に及ぶ行程であった。亡師竹阿の門人を訪ねながら三十歳から三十七歳まで四国の地を放浪した。その結果が一茶の句碑の多さに繋がっているのである。四国の句碑は、昭和二十四年から建立され昭和四十八年までで十七基であるから今日はもう少し増えていることは間違いない。昭和二十四年は、教科用図書検定が開始され、検定合格済『国語六年下』が全国の小学校で使われた時期である。ちなみに長野県内では明治三十二年に一基、明治四十年二十一基が建立されたのみで、後の碑はすべて昭和四十年、五十年、六十年代に建立されている。

財団法人俳諧寺一茶保存会会長の竹内秋男信濃町長は、増補版『一茶の句碑』の発刊に

当たり、「昭和五十七年に須坂市の越統太郎さんと、一茶保存会の清水哲さんが、一茶の足跡を訪ねて『一茶の句碑』を刊行された。その時には地元柏原から近隣の一茶門弟関係の地域、それから長野県内は勿論、東京や千葉、茨城方面の一茶の足跡に立てられた一茶句碑、さらに足を四国方面までも延ばされ、訪ね当てた句碑は五十八基であった。その写真集を一茶記念館で手にされたお客さん方から、うちの町にも一茶句碑がある、ということを知ってもらったり、うちの方も一茶さんに関係があるので一茶句碑を立てようとの計画が持ち上がるなどして、信濃町をはじめ、各地に一茶の句碑が建立され、ここ七・八年の間に八十基もの新しい句碑や未知だった句碑の確認がされたと聞いている」と記している²²。『一茶の句碑』は、現在一茶記念館館長の清水哲氏と越統太郎氏の共著であるが、清水氏はある講演会の場で、「『一茶の句碑』を刊行して五年後の昭和六十二年には小布施、下諏訪の二町で三十基に及ぶ一茶句碑を建立している」と述べている。ここには一時的な一茶ブームと観光ブームの影響が見えている。その後、平成十八年三月一日の一茶記念館把握の一茶の句碑は全国に三百三十基があり、長野県信濃町では「信濃町碑の会」によって百十四基の存在が確認発表されている。長野県では他に小布施町二十九基、長野市二十八基、山の内町十四基などが多く、愛媛県二十三基、千葉県十四基、茨城県十一基、その他北は秋田県から南は福岡県までの二十都府県で一茶の句碑が建てられている。平成二年時は百四十六基であったものが、平成十八年には三百三十基となりその数は二・三倍の数となっている。長野県ではあまり見られない現象である。

四国地方の一茶句碑のほとんどが、昭和二十四年の検定教科書に一茶が採録された時点で建立されたことについては、おそらく別の理由が考えられる。東松露香の『俳諧寺一茶』の刊行によって一茶の名が一躍全国に広まったことはすでに述べたが、実際には現在の教科書検定制度が設けられた昭和二十四年の検定教科書『国語六年下』と『高等国文近世篇』に、小林一茶の「かえる」と「みとり日記」が採録されたからである。一茶が生活の根拠としていた葛飾派の地盤であった東京都足立区六月町では、昭和三十七年に「蟬なくや六月村の炎天寺」「やせ蛙負けるな一茶是にあり」の二基が建立され、炎天寺では「全国子ども俳句大会」が実施されている。一茶の「やせ蛙」の句が教科書に採録されて以来、子ども達の情操涵養の目的で毎年実施されている。

茨城県取手に住んでいた、河童の絵で有名な画家の小川芋銭は、一茶の句をこよなく愛し、取手の長禅寺に「下総の四国巡りや閑古鳥」という句を刻んだ句碑を、岩井市馬立の

²² 『増補一茶の句碑』（財団法人俳諧寺一茶保存会、一九九〇年）、「増補版の発刊によせて」。

古矢文彦氏の庭に「けふからは日本の雁ぞらくに寝よ」という句を刻んだ句碑を、昭和初年に建立している。関東・伊豆地方の一茶の句は二十一基であるが、昭和二十年代建立のものは三基だけであり、その他のものは長野県と同様に四十年代以降六十年代が圧倒的に多い。芋銭が撰書をした一句「下総の四国巡りや閑古鳥」は、何故にここに撰されて建立されたのか。芋銭は、牛久に画室を持っていた。長禅寺は、後醍醐天皇の勅により夢窓国師が来寺して禅寺としたと言い伝えられているが、将門の守り本尊十一面観音と弘法大師を奉じ、新四国相馬霊場八十八ヵ所の総本山となっていた。一茶が立ち寄ったという記録はない。幕末、明治初年には一茶の評価はすでに高く一応の定着をみていた。それならば一茶が巡回指導をした流山・松戸・千葉・房総には、もっと早くから句碑が建立されてしめるべきであろう。もっとも芭蕉は寛政二年に二条家から「花の下宗匠」の称号を与えられ、白川家から「桃青霊神」の神号を、そして朝廷からは「飛音大明神」の称号を授かって神となっていたのに対し、一茶は雪深い信濃で一俳諧師として没した。一茶の研究が芭蕉や蕪村に比して著しく遅れていたからでもあるが、「一茶調」と評される独特の作風は芭蕉以降の俳諧史の研究からは見放されていた。また、一茶像に関しても、体制や社会に対する批判の姿勢が強く意識され、傍観者の域を超えて告発者・批判者と捉えられ、その野性味ばかりが強調されたきらいがある。信仰の面においても宗派の勢力関係上、一茶の信仰する真宗は不受不施派と見られていたからでもある。

それでは、四国地方における十七基の句碑が、ほとんど昭和二十四年に建立されたのはなぜなのであろう。一茶研究家の矢羽勝幸氏は、『一茶新攷』のなかで、「寛政四年、江戸を出発した一茶は、秋には四国から九州に足を運び、五年・六年と九州で過ごした。この間『花屋日記』の著者の文暁など多少知名人とも風交はしているが、三年間まったく中央俳人とは交渉がなかった。彼が関西の著名俳人と交わるのは、寛政七年三月、大坂に黄庵庵升六を訪ねてからである。升六はさきの『俳諧百家仙』の序文を認めた人で当時の著名俳人の一人である。番付にどうして一茶の名が出たのか、の問題を探る意味から寛政七年以降、江戸へ帰るまでの四年間における一茶と関西著名人との交流を通観しておこう」²³と述べて、ここから一茶の活躍が始まったとする。

寛政七年の四国では、俳人番付中西方最上段の中央に位置する松山の二疊庵樗堂を訪れ親しく句の応酬を行った。関西俳壇のトップに知遇を得たのである。次に番付中の行事に当たる風講堂喜斎の家に草鞋を脱ぎ、夏には京都の蘭更、大坂の尺艾を訪ねた。二人は共

²³ 矢羽勝幸、前掲書『一茶新攷』、二三五頁。

に閑脇と頭取であった。一茶は京都の菊舎其成宅から処女撰集『たびしうゐ』を発行している。寛政七年に処女撰集を刊行すると寛政十年江戸において帰江記念の関西留別記念集『さらば笠』を発刊し、関西俳壇に確固たる地位を築いていったのであった。矢羽氏は文化八年（一八一）一茶四十九歳の時の「正風俳諧名家角力組番付」で東の方「道彦・乙二・葛三・巢兆・桂五・素檠・秋守・一茶・嵐外・秋挙・竹有」とあり、八番目にランクされていることなど江戸に戻ってからの一茶の躍進ぶりを紹介している²⁴。このことから矢羽氏は、「番付をまとめると帰郷直前の一茶の評価は、当時の江戸俳壇を代表する成美、完来、道彦に次ぐ非常に高いものであったが、対竹と共に党派を形成しない遊星的な存在であった。対竹は成美、完来、道彦の没後次第に勢力を蓄え、後年「天保の三大家」と称されるほどの一大派閥を形成したことは周知の事実である。一茶が故郷へ帰ったのは従来いわれているような江戸俳壇に志を得なかったという理由からではない。異端ではあったが俳人としての名声は十分獲得していたのであった」²⁵と結論付けている。こうした一茶の関西地方、特に四国における樗堂との出会いから俳人として頭角を現した点が四国にはよく伝わっていて、昭和二十四年の教科書採録時に一茶の句碑があまりに建立されたものと思われる。

また一茶を世間に広く紹介した者は東松露香であったとしたが、露香が信濃毎日新聞に「俳諧寺一茶」の連載を開始したのは明治三十三年四月一日で、正岡子規はこれより三年早い明治三十年に「一茶の俳句を評す」という論評を著し、「一茶最も奇警を以て著る。俳句の実質に於ける一茶の特色は、主として滑稽、諷刺、慈愛の三点にあり。なかにも滑稽は一茶の独壇に属し、しかも其輕妙なること、俳句界数百年間、僅かに似たる者を見ず」と評価している²⁶。その後、子規の校閲を得て、宮沢義喜・宮沢岩太郎編の『俳人一茶』（松邑三松堂、明治三十五年）が刊行されるが、この著作は一茶の人と作品をはじめて体系的にまとめた伝記と作品集で、近代一茶研究の先駆的役割を果たした。無論、子規は写生文²⁷を提唱し、芭蕉を否定していた時期であったので好材として一茶を選んだのは確かである。これによって、一茶の研究は沼波瓊音や河東碧梧桐、荻原井泉水らによって手がけられ紹介されるようになっていくのである。一茶研究が、碧派の人々に熱心に取り組ませたのは、

²⁴ 同上、二四一頁。

²⁵ 同上、二四五頁。

²⁶ 『子規全集』第四卷（アルス、一九二五年）、七〇〇頁。

²⁷ 正岡子規は、和歌と俳諧の革新を目指す中から、ものの姿を着実に記録するという「写生文」ということを試みた。これは維新以来目指してきた、話し言葉と書き言葉を一緒にする「言文一致」の文壇の必要性からとも言われていたことについて、実践に移す試みでもあった。

一茶の句に因習への反発や野性的で強烈な個性があり、生活と人生が詠み込められていたからでもあった。

修身の教科書は明治時代以降、民間が作成した読本を使用した時代から検定済み教科書を経て、明治三十七年（一九〇四）からは国定化された。最初の教科書が刊行されてからその間に大幅な改訂が四回行われ、教科書は次の五期に分けられる。

第一期明治三十七年（一九〇四）～

第二期明治四十三年（一九一〇）～

第三期大正七年（一九一八）～

第五期昭和十六年（一九四一）～

またそれぞれの時期の教科書作成に当たっては「修身教科書調査会」や「教科書用図書調査委員会」「教科書調査会」などが設置され、その委員には嘉納治五郎や森鷗外なども就任している。

大正七年の第三期の改訂に当たって、文部省は国定教科書が画一的に流れる弊害を避けるために、題材を懸賞金付きで募集した。その時は応募者が二百十九名、応募点数は八百七十八点にも上っている。そこには「家庭」「孝行」「兄弟」「勉強」「規律」「父母」「父と子」「私たちの家」という徳目も見える。

次の引用は第一期（明治三十七年～）の＜高等小学第二学年第一課＞に見える「家庭」項目の内容である。

家庭のもの、おのおの、その務をつくし、たがい、その身をつつしむときは、一家の内むつましくして、その楽大なり。家庭にては、よく父母、祖父母をうやまい、その命にさからうことなく、その仕事をてつだい、兄弟姉妹となかよくし、下女下男をいたわるべし。家内のもの、むつましくくらすときは、一家の幸福をきたすのみならず、国の幸福の基となるべし。格言 笑う門には福来る²⁸。

このような家庭のあり方から説かれて、孝行や孝養などの徳目に混ぜあわせて忠君愛国、立身出世、家名隆興、国家主義などが説かれている。無論、「私たちの家」についても家名

²⁸ 八木秀次監修『精撰「尋常小学修身書」』（小学館文庫、二〇〇二年）、二六〇頁。

と家父長、家の繁栄と国家の繁栄、君国尽忠、などの徳目が織り込まれている。「我等の父母が家庭で実際に行っている事は、すなわちこの男子の務と女子の務との主なものであります。父は一家の長として家族を率い、家計を支え、また外へ出ていろいろな仕事をして働いています。母は主婦として内にいて父を助け、家をととのえ、我等の世話をしています。男子と女子とがよく調和して各々その務めを全うしていけば家も栄え国も栄えます」²⁹と記され、ここに修身・齋家・治国・平天下の在り様が記されている。これらは第四期から第五期の『初等科修身四』に撰集されている。

「修身」は戦後の昭和二十年十二月三十一日の「修身、日本歴史、及び地理停止ニ関スル件」と題されたGHQの指令によって授業停止となり、これらの教科書はすべて回収された。爾来、今日に到るまで「修身」は教育課程のなかに入っていない。ただその歴史のなかに一度だけ民意が汲まれた事実がある。大正六年に内閣総理大臣の教育諮問機関として、政府によって「臨時教育会議」が設けられた。その背景には多くの事情があり、明治以来の学制にもとづく近代的学校制度の歩みがほぼ半世紀を経て、日本がさらに帝国主義的発展を遂げてゆくために、教育全般にわたって検討を加えようとする姿勢を見せていた。この時期の教育改革の目的は、あくまで国家主義的立場に立って日本資本主義の帝国主義的発展をより効率的に造出させることが最重要課題であった。それは、今日の課題ともまことによく類似している。たとえば財政上、義務教育費の削減などが打ち出されたり、国家主義的イデオロギーを強化するための案が出されたりした。また一方、臨時教育会議の第二回答申によると、「児童ノ理解ト応用トヲ主トシ不必要ナル記憶ノ為ニ児童ノ心力ヲ徒費スルノ弊ヲ矯正スルノ必要アリト認ム」、「諸般ノ施設主ニ教育ノ方法ハ画一ノ弊ニ陥ルコトナク地方ノ実情ニ適切ナラシムル必要アリト認ム」³⁰とあるように、教育の画一化を是正して地方色のある教育を工夫しなさいと述べているあたりは、今日の総合的学習の導入の例を感じないわけにはいかない。

第二節 新教育運動、信濃教育会に見る一茶像

こうした教育思潮のなかで見逃せない新教育運動があった。長野県では、大正六年から

²⁹ 同上、三〇二頁。

³⁰ 新海英行『現代日本社会教育史論』（日本図書センター、二〇〇二年）、四十一～四十二頁。

第三期国定教科書³¹が編纂されるに及んで、この期間の二十二年間信濃教育会が中心となって郷土に関する教材を発掘し、郷土の偉人、郷土の誇る人々などを補助教材として選集した。まさに「教育ノ方法ハ画一ノ弊ニ陥ルコトナク地方ノ実情ニ適切ナラシムル必要」に依じての行動であった。大正七年の鈴木三重吉による「赤い鳥」の創刊は、新教育運動と芸術運動を連動させるもので、やがてそれは綴り方の革新運動、童謡や童話の創作運動、児童劇、童話劇、童謡劇などの学校劇となって展開されていった。教育界のこうした動向のなかで一茶の代表作である『父の終焉日記』と『七番日記』が刊行され、社会から多くの共鳴と支持とを得たのであった。特に当時一茶評論の第一人者として知られていた荻原井泉水は、子規の提唱した写生説の写生の意味を、風物の模写から人間の生命を写すものへと内面化し、斎藤茂吉と共に「生を写す」という方法を考察し、内面凝視と共に自由律俳句の志向を強め一茶隆盛の一翼を担う存在となっていた。こうして一茶の『父の終焉日記』は「父の臨終」として、『おらが春』は「添乳」となり、「俳諧寺の記」と共に信濃教育会編の『補習国文読本』に採録された。

ちなみに、信濃教育会編の教材に伊藤左千夫の「九十九里浜」や「佐渡ヶ島」、それに河東碧梧桐の「子規の絶筆」などが採録されているが、これは正岡子規の提唱した写生文であり、実際に左千夫が佐渡島を訪れて記録した写生文であることから、信濃教育会に「ホトトギス」の俳人がいたということでもある。当時の信濃教育会の編集主任は土屋文明・

³¹ 東京高等師範学校付属小学校で特設科目として設置された「混沌授業」「直観教育」「修身科」「郷土科」「国民科」「生活化」などの授業も次第に改善され、大正期から昭和初期にかけて一層洗練され、それまでの教育実践を「郷土的教育」として一括して考えるようになっていた。昭和初期には「郷土教育」として、生活・体験に根ざした地域の総合的理解を意図するようになっていた。ファシズムへと進んでゆく時代に制約されながらも、郷土を中心に置く、勤労や体験を重視する教育方法を目指すようになっていた。鳥取県の小学校長の峰地光重は、学校経営の核に生産教育と連動させた「郷土教育」を位置づけ、実生活のなかで生きて働く力を育てる教育を実践した。諸教科の郷土化、郷土室の整備、郷土に根差した土教材の開発、生産教育と連動し、実際の生活に直結した「学校生活の郷土化」を目指した。信濃教育会もこうした「郷土教育」の実践に刺激を受け、郷土の誇る偉人を教材化する取り組みを促進した。昭和五年（一九三〇）に峰地は、『新郷土教育の原理と実践』として郷土教育の取り組み成果を出版した。峰地の教育は、科学的な農場の経営、文集制作、新聞発行、郷土読本の発行などであり、信濃教育もこれを実践に移し、「読本」を発行したのであった。単なる「お国自慢」としての知識を伝えたり、労働のまねごとをして体験とすることではない郷土教育であった。教育勅語体制の下で、「臣民」を育てるという制約を持ちながら、「修身科」「郷土科」などを「郷土化」しながら実践してきた先駆的な取り組みが、「道德教育」や「総合教育」のなかに「合科的」な教育として今日も政策と教育活動として郷土教育が生き続けているのである。昭和初期に主張された郷土教育は、生活や体験に根ざした「地域の総合的理解」を意図したもので、教育そのものを総合化しようという実践でもあったのである。島木赤彦、伊藤左千夫、長塚節らの写生文は、明治四十年（一九〇七）から大正十五年（一九二六）までの雑誌『ホトトギス』のなかにある（紅野敏郎編『ホトトギス名作文学集』、小学館、一九九五年）。

西尾実・島木赤彦であったことから、芥川とは深いかわりが生じることになる。この三人は子規の門人で「ホトトギス」派である。芥川は、大正十二年八月三日に、当時の荻原井泉水の弟子となり、信濃教育会と共に教育活動が続けた山梨の北巨摩教育会の会長、堀内常太郎（柳南）の招きで北巨摩教育会主催の「高原夏季大学」の講師として秋田村の清光寺で三日間講義をしている。土屋は一高以来の芥川の同級で帝大卒業生であった。堀内は、北巨摩教育会の会長として土屋文明とも親交を結んでいた。この夏季大学は、従来長野県上田で信濃教育会によって開催された夏季大学と直線的に結ばれていた。信濃教育を牽引していた島木と土屋らとの交友について、この論旨と直接関わりはないが、すこし触れておこう。

島木は本名を久保田俊彦と言い、長野師範学校を出て諏訪の小学校に勤務すると、師範学校の友人太田水穂らと明治三十六年に「比牟呂」を発刊し、同年に伊藤左千夫主宰の「馬酔木」に参加した。大正三年当時は諏訪郡視学官を務めていたが、これを辞職、上京して斎藤茂吉と共に編集に携わった。茂吉は左千夫の死去の報について、「悲報来七月三十日夜、信濃国上諏訪に居りて伊藤左千夫先生逝去の悲報に接す。すなはち高木村なる島木赤彦宅へ走る。時すでに夜半を過ぎぬたり」³²と記している。芥川は、大正十六年二月の「アララギ」に次のような追悼文を載せている。「島木赤彦氏」と題している。

僕は土屋文明君から島木さんの死を報じて貰った。それから又「改造」に載った斎藤さんの「赤彦終焉日記」を読んだ。斎藤さんは島木さんの末期を大往生だつたと言っている。しかし当時も病気だつた僕には少なからず蒼然の感を与へた。この感銘が残つてゐたからであらう。僕は明け方に夢のなかに島木さんの葬式に参列し、大勢の人々と歌を作つたりした。「まなこつぶらに腰太き柿の村びと今はあらずも」これだけは夢の覚めた後もはつきりと記憶に残つてゐた。上の五文字は忘れたのではない。恐らく作らずにしまつたのであらう。僕はこの夢を思ひ出す度に未だに寂しい気がしてならないのである。

魂はいつれの空に行くならむ我に用なきことを思ひ居り

これは島木さんの述懐ばかりではない³³。

³² 現代日本文学大系『斎藤茂吉』（筑摩書房、一九六九年）、三頁。

³³ 『芥川龍之介全集』第十三巻（岩波書店、二〇〇八年）、二四三頁。

土屋は、芥川・松岡譲・久米正雄らと共に、同人として大正三年の第三次「新思潮」に参加している。大正七年に諏訪高女教頭、同九年校長、十一年には松本高女校長となるが、十三年に当人に無断で木曾中学校長に転勤させられたので辞職した。このように、土屋も島木も左千夫も信濃教育会に属していたのである。信濃教育会は、大正六年に島木を編集主任とし、『信濃教育』という雑誌だけでなく、『補習国文読本』の編集に着手し自主編成の基礎を築いた。島木が諏訪郡視学官となったのは大正三年であるから、ここには赤彦の意見も相当反映されていたはずである。『補習国文読本』は、文学的趣味に富めるものを主として無味乾燥のものを避け、修身・家事・実業方面のものも趣味の養成に足る教材のみを厳選して採用した。なかでも教育改革運動から発した新教育運動の思潮に則し、信州的な教材の収集に努めた。

この時点で一茶の『父の臨終日記』『俳諧寺の記』『添乳』の三点が採録された。具体的な教材としては、「諏訪の製糸」「善光寺」「布引山」「姥捨山」「一茶」などが採られ、文体については、言文一致文・写生文・文語文・書簡文・韻文・漢文など諸種を網羅している。この編集の方法も極めて『ホトトギス』の写生文集に似ている。また島木赤彦主宰の『アラギ』と同じ編集手法である。

大正九年の「実業学校令」「実業補習学校規定」の改正により、信濃教育会は改めて補習教育調査委員会を設け『補習国文読本』の編集を進めた。

このとき土屋と島木赤彦の依頼をうけて調査に当たったのが柳田国男であった。柳田は、大正九年の『信濃教育』に「郡誌調査委員会に於て」という意見を述べている。

ホトトギスという俳句の雑誌が大いに写生文を唱導しまして、村に住む青年が是まで当たり前のつまらぬと思つたことを誠実に日記に書いて居たのが都人まで感動せしめた。今迄は田舎の生活を観るのに恰も遠くから埒の中の牛を見るやうな態度であつたものが、写生文流行の結果は、程なく鏡の中の影を顧みる心持になつて来た。之を首唱した正岡先生などの考えはどうであつたかは知りませぬが、あの雑誌が広く地方に行はれて居た為に、種々の田舎の生活が写生文として現はれ、其中の或物の如きは、永遠な価値を有するものであつたことは、単に其れ以降の文学の上に効果を止めたのみではないのであります³⁴。

³⁴ 相馬庸郎『子規虚子碧梧桐』（洋々社、一九八六年）、九頁から再引用。

信濃教育会はこうした意見を重視して、郷土色の強い作品を『補習国文読本』に採録した。柳田がいうように、写生文の果たした役割を運動と見るならば、大正初期の友納友次郎の『読み方・綴り方の新主張』（目黒書店、大正三年）などをはじめとする写生主義的綴り方の理論と実践につながり、やがて鈴木三重吉の大正七年の「赤い鳥」運動へ、さらには昭和に入ってから「生活綴り方」運動、「全国小中学生生活作文」運動などに引き継がれていったということもできる。そうした運動は直接、あるいは間接に写生文の運動の流れを汲むものであった。写生文、ことに子規の提唱した写生的な小品文が素材の多様さよりも作品としての重さ、感動の深さの点で優れている最大の理由は、「観察し描写する」文学主体の集中、凝集力の強さ、明確さにあった。こうした方向性と文学主体性が、各地の教室での文章指導と教育に大いに役立っていた。一茶の「俳諧寺の記」は、一読すれば敢えて「俳諧寺」を冠するほどの内容は何も記されていないかのように思われるが、下々の下国のあさましい実態が地方色豊かに凝集されて明確に描写されている。信濃教育会の編集主任が土屋、島木であったればこそ、子規の薫陶を受けた二人にとって、一茶の「俳諧寺の記」は格好の教材であった。

この教材は、信濃教育会編『補習国文読本』の第一部第一章「信州柏原―風土と生活」と題して掲載されている。以下に二編を記しておく。

俳諧寺の記

沓芳しき楚地の雪といひ、木ごとに花ぞ咲きにけるなどと、ほんさうめさるるは、
銭金ほどきたなきものあらじと、手にさへふれざる雲の上人のことにして、雲の下に
又其下の、下々の下国の信濃もしなの、おくしなのの片すみ、黒姫山のふもとなる、
おのれ住める里は、木の葉パラパラと峰のあらしの音ばかりしてさびしく、人めも草
も枯果てて、霜降月のはじめより白いものがちらちらすれば、悪いものが降る、寒い
ものが降ると口々にののしりて

はつ雪をいまいましといふべ哉

旅人³⁵

三四尺も積もりぬれば、牛馬の往来はたと止りて、雪車のはや緒の手ばやく年もく
れは鳥、あやしき菰にて家の四方をくるみまはせば、たちまち常闇の世界とはなれる

³⁵ 『一茶全集』六、三九〇頁。

けり。昼も灯にて糸くり縄なひ、老たるは日夜櫓火にかちりつくからに、手足はけぶり黒み、顎はとがり、目は光りて、さながら阿修羅の體相にひとしく、餓貌したる物貰ひ、蚕とりまなこの掛乞のたぐひ、草鞋ながらあうりにふみこみ、金は齒にあてて真偽をさと、葱は竈に植りて青葉をふく。都て暖国の手ぶりとは事かはりて更に化物小屋のありさまなり。

羽生で銭が飛ぶなり年の暮³⁶

柏原の厳しい冬の生活が赤裸々に描かれ、生活の一断面が見事に描き出されている。葱は冬期の間は竈の周辺に斜めに立てかけて保存する。真っ直ぐにすると成長してしまうからで、成長を抑制しながら暖かい場所、暗い場所で保存する。櫓火に当たりながら蚕の繭から糸を繰るのが、雪に埋もれた生活であった。「化物小屋のありさま」と称しながら芭蕉が求めた俳諧美学の「わび・さび」の究極はここにあるとする一茶の俳諧精神をも読み取ることができる。芭蕉の引用に倣って『唐詩選』の詩「玉屑」の「笠重呉天雪、鞋香楚地花」は、楚地の雪としているが、冒頭にこの句の一説を掲げ続いて、「雪ふれば木ごとに花ぞさきにけるいづれを梅と分きてをらまし」という和歌（『古今集』第六卷、紀友則）を引用している。この「俳諧寺の記」は、一茶の日常生活が良く出ており、一茶独特の文体修辭はあるものの生活の一端を見事に切り取っている点では写生文と見ることもできる。

黒姫山や妙高を越えれば越後の国である。鈴木牧之³⁷は、『北越雪譜』を書いた。一茶の「俳諧寺の記」に遅れること十六年の天保七年といわれている。越後の雪に蔽われた雪国で生きる生活を四十年に亘って書いたものである。

吹雪（略）北方丈雪の国我が越後の雪深きところの吹雪は雪中の暴風雪を卷騰つちかぜ也。雪中第一の難儀これがために死する人年々也。その一ツを挙げてここに記し、寸雪の吹雪のやさしきを観る人の為に丈雪の吹雪の嚆矢を示す³⁸。

一茶の俳文には多くの引用がある。『おらが春』に描かれた子どもの頃の一茶が淋しい想いをした唄がある。『親のない子はどこでも知れる爪を咥へて門に立つ』と子どもらに唄

³⁶ 同上。

³⁷ 明和七年（一七七〇）～天保十三年（一八四二）。越後国南魚沼郡塩沢生まれ。

³⁸ 鈴木牧之編撰『北越雪譜』（岩波文庫、一九三六年）、四十九頁。

はるゝも心細く大方の人交じりもせずして、うらの畠に木・萱など積みたる片陰に跼りて、長の日をくらしぬ。我身ながらも哀也けり」この「親のない子はどこでも知れる爪を咥へて門に立」という唄は、近世民謡『絵本倭詩経』（明和四年、一七六七）の、「孤は目かけて遣りやれ爪をくはえて門にたつ」「親が片親ござらぬゆゑに人も侮りや身も瘦せる」を踏まえている。また「子宝がきやらきやら笑ふ櫓火哉」「子宝の多い在所や夕ぎぬた」「子宝の寝顔見い見い砧哉」「子宝よも一ツかめ武者扇」などは、『山家鳥虫歌』（安永元、一七七二）の中の「野にも山にも子無きはおきやれ万の蔵より子は宝」からとられ、あるいは『和河わらんべうた』（寛政元年、一七八九）の「親の御座るうちは、そでにも思うた親の光は七光り」や「おやのいふこときかぬ子は知れるろくでゆこかや身の末が」などから採られていることがわかる。一茶の俳文はほとんどこうした古今の著書から選び抜き取った語で綴られている点に特色がある。

文政六年（一八二三）一月に書かれた「還暦の所感」を引用する。「春立や愚の上にまた愚にかへる」という句である。数え年六十一歳になっていた。

菌原やそのはらならぬはゝ木々に、往慣し伏家を掃き出されしは、十四の年にこそありしか。巢なし鳥のかなしきは、ただちに埒に迷ひ、そこの軒下に露をしのぎ、かしこの家陰に霜をふせぎ、あるはおぼつかなき山にまよひ、声をかぎり呼子鳥、答へる松風さへもの淋しく、木の葉を敷寝に夢をむすび、又あやしの浜辺にくれは鳥、人も渚の汐風に、からき命を拾ひつゝ、くるしき月日をおくるうちに、ふと諧々たる夷ぶりの俳諧を囀りおぼゆ。折から敷島の道の盛りなる時に、大木の陰たのもしく立よりて、十日廿日の労を休るに至れど、是もおのが家にあらねば、よきにあしきに心をつかふ物から、今迄にともかくも成るべき身を、ふしぎにことし六十一の春を迎るとは、実に実に盲亀の浮木に逢へるよろこびにまさりなん。されば無能無才もなかなか齢を延る薬になんありける。

春立つや愚の上に又愚にかへる³⁹

①「菌原やそのはらならぬははきぎに住馴し伏家を掃き出されしは十四の年にこそありしか」。この文章には、『後拾遺集』雑五、正家の和歌「信濃なる園原にこそあらねどもわが帯木と今はたのまむ」の和歌と、『新古今集』卷十一恋一、『古今六帖』坂上是則の「園

³⁹ 『一茶全集』四、四一七頁。

原や伏せ屋に生ふる帚木のありとはゆけどあはぬ君かな」を下敷きとしている。

②「あるはおぼつかなききはにまよひ声をかぎりに呼子鳥の答へる松風さへももの淋しくて」。この文章は『万葉集』第一、黒人の「大和には鳴きてか来らむ呼子鳥象の中山呼びぞ越ゆなる」や『古今集』春上、読人不知の「遠近のたづきも知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな」などのもと歌や、『風雅集』春中、尊氏の「人もなき深山の奥の呼子鳥いく声鳴かば誰かこたへむ」などのもと歌、それに『新続古今集』春下、順徳院の「鳴けや鳴けしのぶの森の呼子鳥遂にとまらむ春ならずとも」が下敷きとして使われている。

③「またあやしの浜辺にくれは鳥、人も渚の汐風にからき命を拾ひつつ」。語調を整え掛詞などを用いて擬古文的要素を成している。この文章は、『後撰集』恋二、元方の「みるめ刈る渚やいづこあふごなみ立ち寄るかたも知らぬ我が身は」や『古今集』恋三、元方の「逢ふことのなぎさにし寄る浪なればうらみてのみぞ立ちかへりける」が織り込まれている。このような修辞については、早くから研究がすすんでいる。一茶の俳文はモザイク的であるということが一見して判断できる（和歌は角川『新編国歌大観』による）。

なお、「還暦の所感」で一茶が江戸に出た年齢を「十四の年にこそありしか」と書いているが、「実際は十五歳であった」という考えが多くを占めている。安永六年（一七七七）五月幕府は、農民がみだりに江戸奉公稼に出ることを禁じたので、一茶は年齢を一歳早めて記したのであった。江戸奉公出は、小農経営から放出された百姓達が、さまざまな形態の雇傭労働を経て再び小農経営に帰結するというサイクルを取る画期的な雇傭定式化が仕組まれていた。一茶が故郷に帰郷した文化九年には幕府は膨大な江戸奉公稼人に苦慮して大々的な「帰郷令」を出したため、一茶もきりのよい五十歳という年齢で帰郷したのであって、これまでいわれてきた体力限界説ではない。

鈴木鎮一氏は、「幼児の才能教育」のひとつとして集中力と暗記力を提唱している。鈴木氏が園長を務めた幼児学園は「どの子も育つ」という教育方針で、「言葉の話せる子どもはみんな優秀な頭脳の持ち主であるから一人の落伍者もつくってはならない」と主張している⁴⁰。才能教育とは、「能力を育てる」ということで、「人は生まれつきそれぞれ特定の才能を持って生まれてくるものではなく、その元となる能力素質を持っている」ともいっている⁴¹。そうした信念から、鈴木氏は一茶の俳句に着目した。毎日園児達に一茶の俳句を暗唱させ、記憶力の養成を図った。年長組と年少組では当然そうした能力の違いはある。

⁴⁰ 鈴木鎮一『幼児の才能教育』（明治図書、一九六九年）、一三四頁。

⁴¹ 同上、十三頁。

背伸びをしすぎず、あきらめず努力することに教育はあるとしている。一学期一茶句七十一句、二学期は六十句、三学期分として五十二句、合計百八十三句を一年間で暗唱させている。すべての園児が百八十三句を暗唱できる。どの子も必ずできる。これが能力教育であると述べている。また暗唱した一茶の俳句は習字として書道教育を実施している。一茶の俳句の記憶訓練はやがて俳句の創作となり、またそれはやがて一茶の文章理解や、一茶の文章を構成している文学教育へと展開してゆくことになる」と述べている。「はじめは十回いってもなかなかいえなかったのが二学期になると三、四回で、三学期に入ると早い子はただの一回で記憶するようになります。そして一学期に五十三句、二学期に六十四句、三学期に五十二句、約百七十句の俳句を全部暗記してしまいます」⁴²と述べ、この方法が集中力の持続、反復訓練、話のセンスなどの育成に大いに役立っているというのである。このように一茶の俳句は、幼児教育の才能開花に教材として今日でも使われているのである。

⁴² 同上、一四四頁。

終章 結語と課題

本論文は、一茶の家族関係や葛飾蕉門での位置づけに焦点を当てながら、信濃文化との関わり、あるいは日本国という意識、農事俳句、一茶俳句における方言使用、一茶の信仰心、蕉門内での軋轢と苦悩、さらには家庭を築いたことによる新たな俳風の創出といった過程について考察したものである。

そのなかでとくに強調すべきは、以下の点である。すでに述べたように、武蔵国方面における一茶の事跡と、葛飾派との決別、さらに故郷定住への決意を分析したなかで、従来の一茶研究においてほとんど解明されてこなかった問題、すなわち『世事見聞録』の著者が中村知足であるとの確証をうることができた。同時に、一茶が葛飾派を脱して信濃に自己の一派を興した経緯が、地方経済の発展、地方における識字率の高まり、学問への情熱へのなみなみならぬ深まりと関連していたことを確認することができた。そうした時代的、風土的背景が、一茶の活躍する舞台を準備していたことも明らかにできたと思われる。これと関連していうと、それ以前の俳諧師は主に都市部で活躍する人々であったのに対して、一茶は俳諧を地方に、階層を超えて本格的に普及することになる、その先駆けであったということである。明治以降の俳諧の全国的な普及という大きな潮流は、まさしく一茶から始まったということもいえよう。

しかしながら、本論において残された課題は、大別すると三点ほどある。そのあらましを述べておきたい。

第一には、一茶の三十六年間ににおける諸国行脚をめぐる諸経費についてである。芭蕉も蕪村も一茶も、それぞれ漂泊の生涯を送っている。蕪村も東国地方を旅した。関東の各地には、蕪村が描いた屏風や襖絵、短冊や掛軸などが発見されていることから、宿泊させてもらった礼として残っているものと思われる。芭蕉もほぼ同じように、各地の弟子や富裕層、あるいは高禄の武士身分の者を弟子とした。芭蕉が残した紀行文も、金銭的援助を得た旅の結果から書き残すことができたと推量できる。また、芭蕉が生きた元禄期は、いうまでもなく繁栄をきわめた時代であったことから、当然貨幣経済の発展に伴い、金銭の融通が可能であった時代と思われる。芭蕉の『奥の細道』に随行した可合會良の日記からも、「送金を受けた」という記述などがあり、金銭を携えての旅であったこともうかがえる。

一方、一茶は著名な俳諧師にはなっていない年齢で、芭蕉の足跡を訪ねる奥羽、象潟の旅をし、その後には中国地方、九州地方、さらには四国地方を巡廻した。一茶が年齢二十七歳で松島を経て、日本海側に出て、象潟まで旅をした記録は、『寛政二年紀行』としてま

とめられている。一茶自身そうした日々を、すでに紹介したように（『七番日記』）、「安永六年ヨリ旧里ヲ出デテ漂泊スルコト三十六年也」と記している。これによれば、十五歳から五十一歳まで諸国を遍歴したことになる。一茶が郷里を出たのは、信州人の冬季稼ぎが発端であり、江戸住みをいつからはじめ、どこでどのような生活をしていたかという、確実な消息は伝えられていない。そのような状況下で、日本国中を行脚できた金銭的問題、このことは今もって解明されていない。芭蕉や蕪村のように、それなりの名声を得、それなりの弟子を持っていた身であったならば、旅の金銭や生活に不自由することはなかったからである。

一茶は、きわめて几帳面な人間で、毎月ごとに毎日の生活の記録を詠んだ句を記帳している。一日一日の晴雨や出来事などを簡略にはあるものの日記に残している。にもかかわらず、それほど几帳面な一茶が「金銭」については何も記していない。一茶の俳諧師との交遊を記録した発来信記録『急通記』は、一茶にとって欠くことのできない備忘録であったが、ここにも金銭の記録はない。文化八年（一八一―）、一茶は四十九歳となり、この年から夏目成美の『随斎筆記』を抄録し、全国の俳諧師の句を集めて書き加える作業に着手した。文化十三年（一八一六）に成美が死去した後も、一茶自身が集録集句をした。これを『随斎筆記』と名付けたが、そこに記録された俳諧師は、一一五〇人からなり、句数は四六七二句に及んでいる。しかし、ここにも金銭的記録はない。

『文化八年随斎筆記抜書』の一茶書き留めの部分には、発信者が何日どこから出発し、柏原に何日に着いたかを分かる記録がみえる。一例を挙げれば、「閏八月二十一出、九月一日届ク、八巢ガ池ノ端へ仮住祝シテ」¹とあり、江戸と柏原の間を十日で歩いた。矢羽勝幸氏は、職業俳諧師らは、同門の俳諧師たちの書状や作品を運ぶための飛脚を抱えており、特定便の飛脚が営業できるほど、俳諧師間の情報交換は頻繁に行われていたというが²、一茶はこのお抱えの飛脚を使えたのであろうか。俳諧集を各地の中継ぎの弟子にまとめて送り、関係者に配する際の発送所は添え状などで知り、大方きまった発信所を通していた。

一茶の金銭事情については、一茶が弟との財産分割の際に得た金を、母方の叔父宮沢徳左衛門に預けた「一茶預り金覚書」が残されているだけで、詳細は未だ解明されていないのである。

第二の課題は、一茶の研究資料についてである。現在、一茶の研究資料として刊行され

¹ 『一茶全集』七、二四九頁。

² 同上、「解説」七頁。

た一茶の出版物については、大正十五年（一九二六）から昭和三年（一九二八）にかけて、信濃教育会が刊行した『一茶叢書』（正編九編十一冊、別編三冊）がある。次に、昭和五十一年（一九七六）に第一回配本がはじまった、尾沢喜雄監修、小林計一郎・丸山一彦・宮脇正三・矢場勝幸の四編集委員によって刊行された『一茶全集』八巻（信濃教育会編、信濃毎日新聞社）がある。その後、新たに発見された資料を収録した別巻『資料・補遺』（昭和五十三年、一九七八）、及び矢羽勝幸編『信州向源寺一茶新資料集』（昭和六十一年、一九八六）が刊行されている。

しかし、「七番日記」「八番日記」というように名付けられた日記類が残っていることは、まだ「一番日記」から「六番日記」までが発見されていないという証左でもある。「七番」と「八番」があるということは、だいたいにおいてここで命終となり、次はなかったとも考えられる。そうすると、一茶の資料は、日記類のみならず、俳句についても未発掘のものがあるということになる。たとえば、埼玉県の新谷で陶器類を扱っていた戸谷双鳥のもとに、一茶が京都で刊行した『さらば笠』という句集がそのまま配布されずに残されていたことなどを勘案すると、そうしたたぐいのものが全国各地にいまだに眠っている可能性も否定できない。

第三点については、これから精査すべきことであるが、一茶が生きた時代は芭蕉が朝廷より「飛音大明神」の神位と、歌道、俳諧道において「花の下宗匠」という、すべてを統率する位についたことで、それ以後の俳諧は蕉風を継承するものという認識が広まった。明治維新後も、各地に芭蕉の俳句を刻した「芭蕉句碑」が建立され、弟子の獲得には、芭蕉の正風を引き継いでいるということを標榜していた。筆者の住んでいる埼玉県においても、百八基を超える芭蕉句碑が全域に存在する。芭蕉は奥羽を旅した際に、日光街道を通ったわけであるから、秩父地方、川越や入間方面などにはあるはずもない芭蕉の句碑があるのである。芭蕉には「蕉門の十哲」といわれる弟子がおり、それぞれが各派を作り、文化・文政期においてもそれらの派閥に入門し、執筆という役を経て、立机披露をして宗匠となった。

一茶は、すでに述べたとおり山口素堂を祖とする「蕉風葛飾派」に入門した。しかし、江戸において弟子を得ることができず、宗匠としての庵号を得ることもできなかった。このことについては、本論文の第一章と第九章で述べたが、庵号、別号の園号、舎号なども名乗ることができず、江戸を去って故郷の信州で一茶社中を興し、俳諧寺一茶を名乗って弟子を獲得した。文化・文政期という時代は、金本位の経済が普及し、俳諧も芭蕉を祖と

するそれぞれの派閥が緩みをみせはじめ、各地の在村地主たちが宗匠となる時期になっていた。一茶は非常に勤勉であり、世情をいち早く理解する能力を持っていた³。

時代は変わろうとしており、幕藩体制も終末期にさしかかっていたことを、三十六年間の全国行脚を通して肌で感じ取っていた。それゆえに、江戸の芭蕉葛飾派に身を置かなくとも、日本各地で農民や町人が俳諧を愛好し、社中を築くことができると考えたに違いなかったであろう。しかし、これはあくまでも推論であり、仮説にすぎない。小林一茶という類い稀な才能を持った俳諧師が、時代を見据えた「新たな俳諧」を創出しようと考えていたかも知れない。あるいは俳諧の「地方時代の到来」が幕を開けると考えていたのかも知れない。そのような視角からの考察は、これまでの一茶研究のなかで不十分で未熟であったように思われる。

というのも、明治初期までは、一茶は忘れられた俳諧師であった。明治の中期になって信濃毎日新聞記者の束松露香が一茶を発見し、その存在を正岡子規に伝えたところ、子規がこれにきわめて好奇心をもって、「これこそこれからの時代の俳諧だ」と出版することを勧めた。露香は、信濃毎日新聞に連載の形式で一茶を紹介していくうちに、その記事は信州のみならず、全国的な反響を呼び、にわかに一茶の名が知れ渡ったのである。明治四三（一九一〇）年、一茶に特別関心を持った人たちが「一茶同好会」を立ち上げ、出版計画を練り、資金を拠出して『俳諧寺一茶』を刊行した。その中に子規が執筆したこともあって、この出版事業は大変な好評を呼び、この時期から一茶の評価がにわかに高まったのである。ここから今日に至る本格的な一茶研究が開始されたという事情がある。そうした意味では、一茶研究はまだまだ途上にあるといつてよい。

本論文は、俳諧師としての一茶の俳諧そのものを論じる、いわゆる一茶俳諧論を論じたものではない。一茶が詠んだ俳句を素材として、それらの句に潜んでいる真意を探るべく、彼の生きた時代と生涯を再構成しようと考察したものである。今後はさらに、一茶がなにゆえに葛飾蕉門を離れ、故郷の信州において一茶社中を興し、独特の色調をもった俳句を詠み続けたのかといった問題を中心として、前に挙げた諸課題に努力を傾注していきたい。

³ 『一茶全集』別巻、「柏原村宗門帳」、七十五～八十一頁、「一茶家系図」、八十二～八十七頁。

文献一覧

<一茶引用史料>

信濃教育会編『一茶全集』全八巻・別巻、信濃毎日新聞社、一九七六～一九七九年。

矢羽勝幸編『信州向源寺一茶新資料集』信濃毎日新聞社、一九八六年。

古典俳文学大系『一茶集』集英社、一九八〇年。

『増補一茶の句碑』財団法人俳諧寺一茶保存会、一九九〇年。

『一茶発句総索引』信濃毎日新聞社、一九九四年。

<俳諧・歴史関係引用史料>

『芥川龍之介全集』第十三巻、岩波書店、二〇〇八年。

荒木繁・山本吉左右編注『説経節』平凡社東洋文庫、一九七三年。

石井良助・服藤弘司編『幕末御触書集成』第五巻、岩波書店、一九九四年。

『岩槻市史』全六十巻、編纂委員会、一九七五年。

荻生徂徠『太平策』、日本思想大系『荻生徂徠』岩波書店、一九七三年。

『春日部市史第三巻・近世史料編Ⅱ』春日部市教育委員会、一九八〇年。

『葛飾蕉門略系図』不詳、山梨県立図書館甲州文庫所蔵。

雲英末雄校注『俳家奇人談・続俳家奇人談』岩波文庫、一九八五年。

現代日本文学大系『齋藤茂吉』筑摩書房、一九六九年。

古典俳文学大系『蕉門俳論俳文集』集英社、一九七〇年。

古典俳文学大系『芭蕉集』集英社、一九七〇年。

古典俳文学大系『蕪村集』集英社、一九七二年。

古典俳文学大系『化政天保俳諧集』集英社、一九七一年。

古典俳文学大系『中興俳論俳文集』集英社、一九七一年。

『後藤甫外句稿稿添削資料』不詳、長野県一茶資料館所蔵。

佐々醒雪・巖谷小波校、俳諧叢書『俳人逸話紀行集』博文館、一九一七年。

『子規全集』第四巻、アルス、一九二五年。

『市中取締類集・市中之部一～三』、『大日本近世史料』東京大学出版部、一九五九～一九七一年。

信濃教育会『補習国語読本』信濃教育会、一九一〇年、長野県教育委員会教育センター所

蔵。

『春秋社日醺儀』、『日本経済叢書』十一、日本経済叢書刊行会、一九一四年。

『條教談話』、『日本経済叢書』十六、日本経済叢書刊行会、一九一四年。

新日本古典文学大系『狂言記』岩波書店、一九九六年。

新日本古典文学大系『武道伝来記・西鶴名残の友他』岩波書店、一九八九年。

鈴木寿校訂『御家人分限帳』近藤出版社、一九八四年。

鈴木牧之編撰『北越雪譜』岩波文庫、一九三六年。

大日本地誌大系『新編武蔵風土記稿』十、雄山閣、一九七一年。

高柳真三・石井良助編『御触書天保集成』上・下、岩波書店、一九六五年。

滝沢馬琴作・溪斎英泉画『金毘羅船利生纜』和古書、一八二五年。

東京大学史料編纂所編纂『大日本近世資料・柳宮補任四』東京大学出版会、一九六四年。

『栃木県史史料編・近世Ⅲ』資料編、栃木県、一九七八年。

夏目成美『随斎諧話』古俳書文庫十一、天青堂、一九二五年。

西川如見『町人囊・百姓囊・長崎夜話草』岩波文庫、一九四二年。

日本古典文学大系『連歌論集・俳論集』岩波書店、一九六一年。

日本古典文学大系『浮世風呂』岩波書店、一九六五年。

日本古典文学大系『古今和歌集』岩波書店、一九五八年。

日本古典文学大系『上田秋成集』岩波書店、一九五七年。

日本教育文庫『農家訓』同文館、一九一〇年。

日本俳書大系十六『葛飾蕉門分脈系図』日本図書センター、一九九五年。

日本随筆大成第三期新装版『理斎随筆・花月草子』吉川弘文館、一九七六年。

日本随筆大成第三期『関の秋風・癩癖談』吉川弘文館、一九七七年。

日本随筆大成第一期新装版『煙霞綺談・柳亭筆記』吉川弘文館、一九七五年。

日本随筆大成別巻八『嬉遊笑覧』二、吉川弘文館、一九七九年。

日本の思想『方丈記・徒然草・一言芳談集』筑摩書房、一九七〇年。

『日本俳諧大系』十五、春秋社、一九二七年。

『日本大歳時記』講談社、一九八三年。

『俳文学大系註釈編』第一、大鳳閣書房、一九三〇年。

『俳風柳多留全集』三省堂、一九八〇年。

『百姓伝記』上下、岩波文庫、一九七七年。

『富強六略』、『日本経済叢書』十七、日本経済叢書刊行会、一九一四年。

武陽隠士『世事見聞録』岩波文庫、一九九四年。

『豊年税書』、『日本経済叢書』一、日本経済叢書刊行会、一九一四年。

細井平洲「管子牧民国字解」、『嚶鳴館遺草』卷四、平洲記念館公開資料。

松平定信『宇下人言・修業録』岩波文庫、一九四二年

『利権論』、『日本経済叢書』十一、日本経済叢書刊行会、一九一四年。

<引用研究書・論文>

青木美智男『一茶の時代』校倉書房、一九八八年。

石井良助校訂『徳川禁令考』前集第五卷、創文社、一九五九年。

石川松太郎『藩校と寺子屋』教育社、一九七八年。

市川寛明・石山秀和共著『図説・江戸の学び』河出書房新社、二〇〇六年。

伊藤龍平『江戸の俳諧説話』翰林書房、二〇〇七年。

遠藤誠治「一茶の俳風一二筋の道について」、『連歌俳諧研究』二十四、一九六二年。

大内初夫他編『湖白庵諸九尼全集』湖白庵諸九尼全集刊行会、一九六〇年。

小野恭靖編著『近世流行歌謡』笠間索引叢刊、二〇〇三。

金子金治郎『連歌総論』桜楓社、一九八七年。

金子兜太『一茶句集』岩波書店、一九九六。

黄色瑞華『小林一茶』新典社、一九八三年。

栗山理一『日本詩人選十九 小林一茶』筑摩書房、一九七〇年。

小泉吉永『江戸の子育て読本』小学館、二〇〇七年。

河野実「飯山藩領内の冬季奉公人稼ぎ」、『信州史学』創刊号、信州大学教育学部歴史研究会、一九七三年。

紅野敏郎編『ホトトギス名作文学集』小学館、一九九五年。

『国語大辞典』第一版、小学館、一九八一年。

小林計一郎『一茶その生涯と文学』信濃毎日新聞社、二〇〇二年。

佐藤貢悦「道教」、棚次正和・山中弘編著『宗教学入門』ミネルヴァ書房、二〇〇五年。

佐藤雀仙人「一茶の馬橋居住について」、『俳誌・科野』、一九五二年七月号。

志多義秀「芭蕉の問題俳句」、『芭蕉展望』日本評論社版、一九四六年。

新海英行『現代日本社会教育史論』日本図書センター、二〇〇二年。

杉仁『近世の地域と在村文化』吉川弘文館、二〇〇一年。

杉本つとむ『方言に憑かれた男越谷吾山』さいたま出版会、一九八九年。

杉谷徳蔵『小林一茶と房総の俳人たち』暁印書館、一九八一年。

鈴木鎮一『幼児の才能教育』明治図書、一九六九年。

関山和夫「舌耕芸と落語誕生」、『国文学解釈と鑑賞』八六三号、至文堂、二〇〇三年。

関山和夫『説教と話芸』青蛙房、一九六四年。

千曲山人『一茶に惹かれて』文芸書房、二〇〇四年。

相馬庸郎『子規虚子碧梧桐』洋々社、一九八六年。

武田酔霞「葛飾北斎尾張名古屋の生活」、『浮世絵』十、浮世絵社、一九一六年。

武田祐吉『万葉集全講』上、明治書院、一九六八年。

田中圭一『日本の江戸時代』刀水書房、一九九二年。

竜川政次郎『長谷川平蔵－その生涯と一足寄場』朝日新聞社、一九七四年。

束松露香『俳諧寺一茶』一茶同好会、一九一〇年。

津田左右吉『文学に現はれたる我が国民思想の研究』七、岩波文庫、一九七八年。

土屋弼太郎『近世信濃文化史』信濃教育出版社、一九六二年。

東條操編『全国方言辞典』東京堂出版、一九五一年。

中江克己『江戸の躰と子育て』祥伝社、二〇〇七年。

長野郷土史研究会機関紙『長野』七十七号、一九七八年。

中村真一郎『蠣崎波響の生涯』新潮社、一九八九年。

滑川道夫『桃太郎像の変容』東京書籍、一九八一年。

平野義郎監修『近世法制史料集』第二巻、創文社、一九七三年。

廣木一人『連歌の心と会席』風間書房、二〇〇六年。

堀切実『俳聖芭蕉と俳魔支考』角川選書、二〇〇六年。

前田利治『一茶の俳風』富山房、一九九〇年。

松本つとむ『越谷吾山』さいたま出版会、一九八九年。

室山敏昭『生活語彙の構造と地域文化』和泉書院、一九九八年。

八木秀次監修『精撰「尋常小学修身書」』小学館文庫、二〇〇二年。

矢場勝幸『一茶大事典』大修館書店、一九九三年。

矢羽勝幸『一茶新攷』若草書房、一九九五年。

矢羽勝幸『小林一茶』勉誠出版、二〇〇四年。

矢羽勝幸・二村博編著『俳人塩田冥々』象山社、二〇〇三年。

渡辺弘『小林一茶・教育の視点から』東洋館出版社、一九九二年。

< 参考研究 >

秋山高志編『図録農民生活史事典』柏書房、一九七九年。

阿部昭『江戸のアウトロー』講談社、一九九九年。

阿達義雄『一茶雀吟史』草茎社、一九六三年。

新井恒易、日本民俗学大系第九卷『日本の祭と芸能』吉川弘文館、一九五六年。

石井進『中世の村を歩く』朝日新聞社、二〇〇〇年。

板坂耀子『江戸の旅と文学』ぺりかん社、一九九三年。

井上脩之介『一茶漂泊』崙書房ふるさと文庫、一九八二年。

井上脩之介「一茶の離郷について」、『好日』四八九号、一九五二年。

岩村正治『子どもの歌の文化史』第一書房、一九九八年。

臼井勝美・高村直助他編『日本近現代人名辞典』吉川弘文館、二〇〇一年。

内田恒雄『一茶句之画集』北信ローカル社、一九八一年。

瓜生卓造『小林一茶』角川書店、一九七九年。

江口孝夫『俳諧と川柳狂句』武蔵野書院、一九九九年。

大磯義雄『蕪村・一茶その周辺』八木書店、一九九八年。

大口勇次郎『徳川時代の社会史』吉川弘文館、二〇〇一年。

大場俊介『一茶の研究』津島書房、一九九三年。

大場俊助『一茶の作家肖像前編』芦書房、一九六四年。

大場俊助『一茶の作家肖像後編』芦書房、一九六五年。

大藤修『近世の村と生活文化』吉川弘文館、二〇〇一年。

岡野博『一茶と守谷』筑波書林ふるさと文庫、一九八〇年。

尾形侑・島津忠夫他編『俳文学大辞典』角川書店、一九九五年。

荻原井泉水『一茶随想』講談社文芸文庫、二〇〇〇年。

荻原井泉水『一茶名句』社会思想研究会出版部現代教養文庫、一九五九年。

荻原井泉水『一茶名句』文元社教養ワイドコレクション、二〇〇四年。

荻原井泉水『随筆一茶・第三卷』春秋社、一九五六年。

荻原井泉水『随筆一茶・第四卷』春秋社、一九五六年。

荻原井泉水『随筆一茶・第五卷』春秋社、一九五六年。

荻原井泉水『随筆一茶・第六卷』春秋社、一九五七年。

奥田勲『連歌師—その行動と文学』評論社、一九七八年。

尾沢喜雄『小林一茶とその周辺』岩手大学尾沢喜雄教授退官記念事業協賛会、一九七二年。

小沢昭一『ものがたり芸能と社会』白水社、一九九八年。

小野恭靖『近世流行歌謡』笠間書院、二〇〇三年。

折口信夫「田遊び祭りの概念」、『折口信夫全集』三卷、中央公論社、一九七七年。

金子兜太『ある庶民考』合同出版、一九七七年。

金子兜太『一茶句集』岩波書店、一九八三年。

金子兜太他『一茶』日本放送出版協会、一九八六年。

金子兜太『小林一茶』講談社現代新書、一九八〇年。

兼本雄三『近世村落祭祀の構造と変容』岩田書院、一九九八年。

金森敦子『芭蕉はどんな旅をしたのか』晶文社、二〇〇〇年。

金森敦子『閑所抜け—江戸の女たちの冒険』晶文社、二〇〇一年。

勝峯晋風『一茶七部集』古今書院、一九二五年。

勝峯晋風『評釈一茶のおらが春』十字屋書店、一九四九年。

加藤楸邨『一茶秀句』春秋社、二〇〇一年。

川島つゆ『おらが春新解』明治書院、一九五五年。

河竹繁俊『愛と死の芸術』日本教文社、一九五一年。

黄色瑞華『一茶歳時記』高文堂出版社、一九九九年。

黄色瑞華『一茶小論』高文堂出版社、一九七〇年。

黄色瑞華『一茶の世界』高文堂出版社、一九九七年。

黄色瑞華『一茶の旅』高文堂出版社、一九九九年。

黄色瑞華『一茶文選』高文堂出版社、一九九三年。

黄色瑞華『おらが春詳考』高文堂出版社、一九九三年。

黄色瑞華『写真柏原の一茶』高文堂出版社、一九八一年。

北小路健『一茶の日記』立風書房、一九八七年。

見城幸雄『江戸時代の農民支配と農民』岩田書院、二〇〇〇年。

栗生純夫『一茶随筆』桜楓社、一九七一年。

栗山理一『芭蕉・蕪村・一茶』雄山閣出版、一九七八年。

黒澤隆信『一茶の生涯及び藝術』 忠誠堂、一九二五年。

越統太郎『一茶の信濃路』 叢文社、一九七七年。

児玉幸多・大石慎三郎編『近世農政史料集』 吉川弘文館、一九六六年。

児玉幸多『近世農民生活史』 吉川弘文館、一九九八年。

小林晃『一茶謎の俳諧歌』 信毎書籍出版センター、二〇〇二年。

『小林一茶』 蝸牛俳句文庫、一九九七年。

小林計一郎『小林一茶』 吉川弘文館、一九九〇年。

小林計一郎『一茶』 信濃毎日新聞社、二〇〇二年。

小林計一郎『俳人一茶』 角川文庫、一九六四年。

小林雅文『一茶と女性たち』 三和書籍、二〇〇四年。

小町谷照彦・三角洋一編『歌ことばの歴史』 笠間書院、一九九八年。

小町谷照彦『一茶双紙』 崙書房ふるさと文庫、二〇〇一年。

佐藤雀仙人『下総と一茶』 崙書房出版、一九九六年。

志田義秀『一茶一代物語』 至文堂、一九五三年。

信濃毎日新聞社編『一茶おらが春板画卷』 信濃毎日新聞社、二〇〇八年。

嶋岡晨『小林一茶』 成美堂出版、一九八六年。

信濃教育会編『一茶全集』 全九巻、信濃毎日新聞社、一九七六年。

白川部達夫『近世の百姓世界』 吉川弘文館、一九九九年。

諏訪春雄『愛と死の伝承—近世恋愛譚』 角川書店、一九六八年。

関山和夫『説教の歴史的研究』 法蔵館、一九一二年。

千曲山人『一茶を訪ねて』 文藝書房、二〇〇一年。

宗左近『小林一茶』 集英社新書、二〇〇〇年。

相馬御風『一茶と良寛と芭蕉』 春秋社、一九四九年。

相馬御風『一茶と良寛と芭蕉』 創元文庫、一九五一年。

相馬御風『一茶と良寛と芭蕉』 角川文庫、一九五五年。

高井蒼風『俳諧寺一茶の芸術』 行政通信社、一九七八年。

滝澤貞夫・二澤久昭他篇『一茶発句総索引』 信濃毎日新聞社、一九九四年。

棚橋正博『江戸戯作草紙』 小学館、二〇〇〇年。

谷川健一編『日本庶民生活史料集成』 三一書房、一九六八年。

田村治芳『彷徨月刊』 彷徨舎、二〇〇七年。

堤邦彦『近世説話と禅僧』和泉書院、一九九九年。

鶴村松一『芭蕉と一茶』松山郷土史文学研究会、一九八〇年。

中田薫『徳川時代の文学に見えたる私法』創文社、一九五一年。

中里富美雄『蕉門俳人の評伝と鑑賞』溪声出版、二〇〇八年。

中村鉄治『小林一茶と北信濃の俳人たち』ほおずき書籍、一九九七年。

広末保『近松序説—近世悲劇の研究』未来社、一九五七年。

復本一郎『江戸俳句夜話』NHK出版、一九九八年。

堀切実『表現としての俳諧』ぺりかん社、一九八八年。

堀切実『おくのほそ道』NHK出版、一九九七年。

前田淑「旅日記編」「俳諧・和歌・漢詩編」、『江戸時代女流文芸史』笠間叢書、一九九八・一九九九年。

松村友次『一茶の手紙』大修館書店、一九九六年。

丸山一彦『小林一茶』桜楓社、一九八六年。

丸山一彦『一茶』花神社、一九八二年。

丸山一彦『小林一茶』南雲堂桜楓社俳句シリーズ、一九六四年。

宮川洋一『北信濃遊行』オフィスエム、二〇〇五年。

宮沢義喜他『俳人一茶』信濃毎日新聞社、一九九九年。

村田昇『俳諧寺一茶の芸術』原写真印刷、一九六九年。

村松友次『一茶の手紙』大修館書店、一九九六年。

村山定男『小林一茶と越後の俳人』考古堂書店、一九八五年。

室山敏昭『生活語彙の構造と地域文化』和泉書院、一九九八年。

矢羽勝幸『新出近世俳人書簡集』和泉書院、一九九一年。

矢羽勝幸『一茶の総合研究』信濃毎日新聞社、一九八七年。

矢羽勝幸『三愚集解説』郷土出版社、一九九八年。

矢羽勝幸『信濃の一茶』中公新書、一九九四年。

山尾三省『カミを詠んだ一茶の俳句』地湧社、二〇〇〇年。

山下一海『芭蕉の世界』角川書店、一九八六年。

山下一海『おくのほそ道をゆく』北溟社、二〇〇七年。

山折哲雄・宮田登編、日本歴史民俗論集八『漂泊の民俗文化』吉川弘文館、一九九四年。

湯沢幸吉郎『徳川時代言語の研究』風間書房、一九五五年。

- 横田冬彦『芸能・文化の世界』吉川弘文館、二〇〇〇年。
- 吉田美和子『一茶無頼』信濃毎日新聞社、一九九六年。
- 渡辺源一『稿本一茶研究序説』無心庵、一九八二年。
- 渡邊昭五『中近世放浪芸の系譜』岩田書院、二〇〇〇年。
- 渡邊弘『小林一茶』東洋館出版社、一九九二年。
- 渡邊弘『俳諧教師小林一茶の研究』東洋館出版社、二〇〇六年。
- 和辻哲郎『歌舞伎と操浄瑠璃』岩波書店、一九五五年。

初出一覧

第一章 世事の記録師か記述魔か：書き下ろし

第二章 一茶の童児俳諧と小動物：書き下ろし

第三章 一茶の「日の本」意識：『目白大学人文学部紀要〔言語文化篇〕』第六号（二〇〇〇年、論文題名「小林一茶の日の本意識の背景」）。

第四章 一茶稿本『志多良』の題名：『目白大学人文学部紀要〔言語文化篇〕』第七号（二〇〇一年、論文題名「小林一茶稿本『志多良』の題名についての一考察」）。

第五章 一茶俳句の方言使用：『目白大学人文学部紀要〔言語文化篇〕』第八号（二〇〇二年、論文題名「小林一茶俳句の方言使用の方法について」）。

第六章 一茶の家族描写と説経節：『八洲学園大学紀要』第三号（二〇〇七年、論文題名「小林一茶の家族の描写と説教節」）。

第七章 一茶自己俳諧の確立と宗教性：『八洲学園大学紀要』第四号（二〇〇八年、論文題名「小林一茶の自己俳諧の確立と宗教性一家族・家庭の崩壊と他力本願について一」

第八章 渭浜庵執筆から宗匠へ：書き下ろし

第九章 武蔵国新方連会頭と一茶：書き下ろし

第十章 一茶の教育教材化：『八洲学園大学紀要』第二号（二〇〇六年、論文題名「小林一茶の教育教材化について」）。